肉食同居人

T-BLUE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
肉食同居人

【Ｎコード】
Ｎ３９６１Ｅ

【作者名】
Ｔ－ＢＬＵＥ

【あらすじ】
大雨の夜、中学一年生の少年大輝（たいき）は、弱った子狐を拾い、義姉に隠れて飼い始める。それは摩訶不思議な物語の始まりか、はたまた単なる運の尽きだったのか……。狐の正体は、かつて数多の人間たちを引き裂き食らった残酷な女妖怪「任氏（じんし）」であった。大輝の介抱で元の姿を取り戻した任氏と、数百年前に彼女を封印した術師の末裔である、義姉の石楠花（しゃくなげ）。敵対する二人のほかに様々な妖怪どもも動き出し、戸惑う大輝の日常は、あらぬ方向へと動き出す――。青春ホラー物語。（最終更新６／２２）

ある女の置き手紙

礼司くんへ

こんな置き手紙ではなく、本当はもっとちゃんとした形でお別れをしたかった。

いえ、それ以前に――せめてあなただけには、はっきりと全てを打ち明けてしまうべきだった。

だって、私があなた達と違うということなんて、もちろんあなただって気付いていたはずなのだから。

それでいながらあなたは、何も聞かず、私をずっと愛してくれた。

私は、甘えていたのね。

あなたの優しさに。

穏やかで素敵な時間、その一瞬一瞬に。

私が全て打ち明けたとしても、あなたは決して変わらない。――

それは、あなたが幼いときから傍にいて、面倒を見ていた私自身が、一番分かっていたはずなのに。

おかしな話ね。

大きな歯車を外れ、本来いるべきでないこの場所に迷い込んだ私は、孤独だったわ。

全てが私を置いて去ってゆく。

誰もが私を受け入れず、壁を作る。

そうして気の遠くなるような時が過ぎていった。

でも、その長い旅の終わりに、私はとても素敵な時間を過ごすことが出来た。

全てを覚えてる。

何も言わずに私を受け入れてくれた、あなたのご両親。
生まれたばかりのあなたが、私の腕の中で見せた、天使みたいな笑顔。
心の弱い私を、幼い頃からいつも懸命に守ってくれたあなた。
年が過ぎるにつれて背が伸びて、私を追い越してしまったときの、あなたの照れた顔。
私を愛してくれた、あなたの暖かな腕。

あなたの妻となれて、私は幸せだったわ。
あなたがいて、坊やがいて。本当に――こんな、夢のような時を過ごせるなんて、願いもしなかった。

でも、もう残された時間がないみたい。

突然でごめんなさい。

私のことを忘れてほしいなんて、心にもないことは言えないけれど――あなたがこれから先、もし誰か別の女性を愛したとしたら、その時は私に気兼ねなどせず、ちゃんと愛してあげてください。
あなたと坊やの幸せが、私の願いです。

あなたが好きよ、礼司くん。

ずっと一緒に生きていたかった。

今までありがとう。

淋(そそぎ)より

第一部プロローグ【石落――しゃくらく――】

ぬめった風が森を薙ぎ、ざわざわと夜が鳴いた。
闇の中、泉の水面に落ちた三日月が散る。
風が過ぎ、その月がまた形を取り戻すまで、異形と若者は泉をはさみ、睨みあうでもなくただ見つめあい、地蟲や眠る鳥すら脅かさず、ひっそりと対峙していた。
黒い袖長の衣に身を包んだ、鋭い目の若い大男――石落は、にぃやりと唇を開いた。
「やはりここへおったか、人食い」
「森の静けさは故郷もこの国も変わらぬ。外は狩場にこそ都合がいいが、眠ると歌うには少々喧し過ぎるでな。何かと行灯をともすのも好かん」
異形はしっとりと煌く銀の髪を、たおやかな白い手で撫ぜた。
「それにしても、おぬしのような無粋の者が、時も弁えずに現れるとは思わなんだが。文でも寄越せば日のある内に出向いてやったものを」
「戯言を。狐変化が昼に歩むを嫌わぬか」
「もう長いこと生きたでな。漢の頃、ただの狐だった時分の生きかたなど、とうに忘れてしもうたわ。それに――たかが人など、こそこそと狩らずともよい。見つけようが囲もうが、どのみち、おぬしらにわらわは滅ぼせぬ」
「確かに……お前は四日ほど前にも、陽明かりのもと堂々と、街道で一人の子供を攫ったな。若い奥方の連れた童だ。覚えているか」
「覚えておるとも。強く賢しい子であった」

睫毛の長い細い目を、殊更に、それこそ糸のように細め、白衣の袖でしとやかに口を隠して、ころころと狐は笑った。

「なに――はじめはな、育った女の方が肉付きがよかったで、そちらを食おうとしたのじゃが、歩み寄りもしと声をかけるや、女に手を引かれていたあの子供、わらわが人でないことに気づきおった。砂利道を歩むになぜ足音がせぬかと怪しんだらしいが、どうして見所のある童ではないか。まあ、ここのところ、あの街道ではよく人を狩ったでな。子供なりに気を配っていたのじゃろうが」

異形は美しい面に手を添えて、愉快そうに語る。

「何にせよ感心なことよ。母をかばう姿が気に入ったので、攫ってやった。勇敢な子供は大好きじゃ」

大男の石落よりもまだ背の高い、清廉な白衣に身を包んだ、銀髪の女。

それが化生の姿であった。

目が細く吊り上がってはいるが、眼差しは優しく、薄桃の唇の先から紡ぎ出される言葉は、しとやかで歌うが如く。雅でたおやかなる仕草がひとつ、またひとつと、対する者をまどろみの心地へと誘う。纏うは甘き香のかおり。笑えば動く、左の泣きぼくろまでが美しい――そう――まことに美しい女である。

だが石落は知っていた。

この化生の、力も、所業も。

時に男を色香で惑わし、その胸に抱きながら殺し、血をすする。

時にすれ違う女の目玉だけを戯れにえぐり、ごっくりと飲み下して去る。

時に赤子を生きたまま囲炉裏にくべて、縛った親たちの見る前で、丁寧に塩までかけて箸で食う。

そして時に、ただ襲い掛かり、ばらばらに引き裂いてむさぼり食らう。

好き放題に、思いつくがまま。

「その童はどうした」

「ここへおるぞ。もうこればかりしか残っておらぬが」
女は振袖の内より白い紙包みを取り出した。
細い紐をほどき、ぱりぱりと包みを開けてゆくと、中から紫の物が現れた。
小さな、子供の手であった。
ところどころが赤黒く染まった包み紙を、女はぽとり、草履の足元に捨てる。
「こう風が冷えてくると、用ごとでもない限り、いちいち木のうろを出るも億劫でな。捕り帰り、少しずつ食むのが楽で良い。本当ならば生かしたまま木に縛っておいて要るだけ切り取るやり方が一番良いのじゃが、二晩前、かあさま痛い、かあさま痛いと夜中に五月蠅かったもので、つい首を折ってしもうた。わらわも寝ぼけていたわ」
むしゃり、と女はその手を食む。
石落は鼻を鳴らす。
「なるほど、話に聞くとおりの化け物だ」
死肉をひと噛み咀嚼し、飲み下した女は顔をしかめる。
「もうこわくなっておる。おぬしにやるから食うがよい。丁寧に火を通せば人の身でも腹は壊すまいて」
ぽいと放られた手首は、小さな泉を越え、石落の足元に落ちた。
石落はそれを瞥せずに言う。
「この子の母はさる武家の奥方だ」
「それがどうした」
「俺に金子を山と積んでな。子供が生きていれば連れ帰れ。もし殺されていれば、お前を調伏……いや」
胸元より竹の札を抜き、とん、と地を蹴る。
蟋蟀の如く、高く高く、石落の巨体は浮いた。
月を背に。
「殺せとよ」
女めがけて文字の書かれた札が投げられ、きゅんと闇が鳴る。

刹那に女は目を見開いた。
「しゃくじばくし、とやらか」
舞うように横へ退く。
地に突き刺さった札が、ひと呼吸のち、紫の光を八方に放った。
女は、おうと声を上げて飛び上がり、くるり回って、せり出した大樹の枝のひとつに降り立つ。
「この島国にもそう呼ばれる、我らを狩る者どもがいるという話は聞いていたが――」
「我ら石字縛師を大陸の術師と一緒にするなよ」
さっきまで女のいたところへ降り立った石落は、二の札を投げる。
その札は、女のいる樹の根元に刺さり、紫の稲妻を生んだ。
ばりばりと森を割らんばかりの音を立て、稲妻は生き物のように木の幹を、枝々を撫ぜ回る。あるいは事実、生き物なのやも知れぬ。
巻き込まれた女は吼えるような声を上げ、落下した。
続けざま投げられた、三枚目。
それは縛符であった。
火がつき燃え始めた樹の元で、紫の暗き光の縄が、地に転げた女怪の長い脚に、細い腕に、ふくよかな胸に巻きつき、ぎりぎりと食い込む。
「ぐ――」
背を反らしのたうつ女の姿が変わってゆく。
絹のような柔肌が銀の毛皮へと変わり、耳が横へ伸び、長く太い、毛のかたまりのような、一本の尾があらわれた。
突き出した鼻の下、牙だらけの口がばっくりと開く。
「……ぬかったか……」
それは紛う事なき狐の顔であった。
しかし全身が銀毛に覆われ、指先から鋭い爪が生えたとはいえ、体かたちは艶かしい女のままで、つややかな長い髪も元のまま変わらない。爛々と輝く朱い目も、この化け物が畜生ならぬ知恵を宿していることを物語っている。

正体をあらわした妖魔は石落を睨む。
「たかが人と油断したわ……千年に一度のしくじりじゃ……」
銀の毛皮の所々に、鮮やかな赤い血が滲む。
石落は人食いの妖魔を見下ろし、呟く。
「化けの皮がはがれてなお、こうも美しいとは――妖魔であればこそか」
重き眼差しが、地に縛られた妖魔を射抜く。
また風が吹いた。
夜が鳴いた。
水鏡の月が散り、
――は。
石落は笑った。
は、は、は、は、は――。

第一章【眠石――ねむりいし――】

一

暖かなオレンジ色の光溢れる居間のドアを開けると、キッチンの方から、何かを炒める音が聞こえてきた。
ぷんとゴマ油の香ばしさも鼻に届く。
大輝は学生服の上着を脱いで、椅子の一つにひょいと掛ける。
「しゃくネエ、今晩は何？　肉野菜炒め？」
「あのなあ大輝」
義姉がキッチンから顔を覗かせた。短い黒髪が揺れる。
「帰ったらまず、ただいまだろう？　全く――お前、中学に入ってから行儀が悪くなったぞ。第一部活もやってないのにこんな遅くまでどこに」
「ああ、ただいまただいま。それで今日は何？」
「お前の当てた通りだよ。それと炒飯と玉子スープ。もう出来るから手ぇ洗っておいで」
義姉は顔を引っ込めた。
「お得意の中華か」
大輝はカバンも椅子の脇に置き、洗面所に手を洗いに行く。
しかしものの数秒後には居間に戻ってきた。
「ねえ、しゃくネエ、そういえば今日さあ」
「早いな！　ちゃんと石鹸で洗ったのかい」
「洗ったよ」嘘である。「今日、天気予報で雨降るって言ってたけど、なかなか降らないね」

大輝は言いながら席につく。
「そうだねえ」
義姉が、こんもりと炒飯の盛られた大皿と箸を手にキッチンから出てきた。義姉も義姉で、セーラー服の上にエプロンを掛けて料理をしていたらしい。これでは弟の行儀のことをとやかく言えたものではない。
義姉は大皿をテーブルに置く。ここから蓮華で取り分けるのが殿山家流である。
「あたしが帰る頃から振りそうではあったけど」
「今晩のうちにビデオ返さなきゃいけないから、出来ればこのままずっと降らないでほし――」
ぱらぱらと窓の外で音がしはじめる。
「――かったんだけど」
「最近は天気予報もよく当たるじゃないか」
「だね」
力なく笑い、大輝はうなだれる。
てきぱきと動く義姉の手によってテーブルにはたちどころに温かな料理が並び、空腹のため鋭敏になった嗅覚と視覚が、大輝の胃袋を痛烈に刺激した。
「おお、毎度ながら見事な」
「さて――食べるか」
義姉も大輝の向かいに座り、さっさと箸を取って、いただきます、の一言と共に、自分の作品を小皿に取り分け始める。
このパキパキした義姉、名を石楠花という。字面だけ見れば日本人とは思えないし、しゃくなげ、と音にしても、人の名前には聞こえない。珍妙な名だ。この変わった名は、義姉の祖父が付けたらしい。
石楠花は、大輝の父が、死んだ母の次に結婚した女性の連れ子で、九歳の頃から一緒に住んでいる。石楠花の母――つまり大輝の義理の母でもあるのだが、彼女も三年前に急な病で倒れ、そのまま他界

してしまい、それ以来殿山家の家事はほとんど姉の手でまかなわれている。特にここ半月は、父が出張中で大輝と石楠花の二人しかいないため、まるで石楠花に育ててもらっているような錯覚すら覚える。

ただし石楠花の歳は、大輝とたったの二つ違い。同じ公立中学の三年生だ。

さっきからテレビはついているが、音量を絞ってあるため、出ているタレントが何を言っているのか、耳を澄まさない限り判然としない。この中途半端なテレビのつけ方も、家の習慣である。

ぱくぱくと野菜を口に放り込みつつ、ふと顔を上げると、石楠花はいつの間にか大輝の顔をじっと見つめていた。

大輝は食べる手を止める。

「な……何？」

「いやあ、お前ってば、だんだん大きくなるね」

「何だよいきなり」

「背も伸びてるし、いっつの間にか、ちょっとずつ筋肉もついてきたしさあ。学ランだって、今はぶかぶかだけど、きっとすぐぴったりになっちゃうよ」

石楠花は首を傾げ、ふっと笑う。

「なーんか、可愛く無くなってきちゃったねえ」

「ほっといてくれよ」

大輝はぷいと下を向き、また食に没頭する。

かちんときたわけではない。そうまんざらでもなく、照れていた。

下を向きながら、ちらり、石楠花の方を見る。

――お前の義姉ちゃん、けっこう可愛いよな。

クラスメートの羨望に満ちた言葉が蘇る。

まあ、確かに。

中学三年生にしては妙に大人びた、端正な顔立ち。

睫毛の長い大きな瞳。

分かりやすい色気こそ無いものの、十代前半のレベルとしては――

明らかに及第点以上だろう。
まあ、だからといって。
――ムラムラしないのか？　おんなじ家に住んでて。血ぃ繋がってないんだろ？
先月そう言った友人の頭は、思い切り引っ叩かせてもらった。
血が繋がっていないとはいえ、姉は姉。今さら異性として意識するようなことが出来るわけもないし、考えること自体失礼だ。第一石楠花のサバサバしすぎた性格は、あまり女性的とはいえないし……と、それは実のところ、完全な建て前である。
健康美あふれるルックスはもとより、嘘のつけない裏表の無さ、細やかな気配り、見た目などに反して家庭的なところなど、姉の魅力的な面は、一緒に暮らしている大輝が最もよく知っている。何とも思わぬわけがない。
だから友人にその手のことを言われたとき、内心ではこう思う。
「……洒落にならないんだよな」
「うん？」
「あ、いや」大輝は首を振る。「こっちの話」
がつがつと炒飯をかっ込む。
そのとき、かっ――と窓の外が光った。
ほとんど続けざまに轟音が居間を揺さぶる。
大輝は思わず視線を窓に釘付けた。
「うっわ……」
「雷か。こりゃ大雨になりそうだね」
玉子スープをすすりながら石楠花が予言した数秒後、つまらぬ言い方をすればバケツをひっくり返したような大雨の音が、さっそく始まった。

二

近くには電波塔があった。高い建物も無いではなかった。

だから閃光のほとばしりがそれに直撃したのは、奇跡と呼ぶべきか不運と呼ぶべきか、少なくとも当たり前の出来事ではなかった。

だが雷はそれに落ちた。

住宅街を斜めに見下ろす小山の中腹、今となっては町の誰もが忘れ去り生きている、苔むした巨石。木々に隠れ、べっとりとした山肌に半ばまで身を埋めた、縄で括られた黒い岩。

それが今、真っ二つに割れていた。

注連縄も千切れ、岩のもとに落ちている。

何かが言った。

――出られるのか。

起き出した物どもは、この世ならざる言葉で、口々に囁きあった。

この中で生き延びた甲斐があった。

まさかこのような日が来ようとは。

待て、「じんし」も起きるぞ。

「じんし」！　あれは恐ろしい。

あのみじめな女怪のことか。それほど恐ろしいとも思えぬが。

お前は何も知らんのだ。

あれは狂っておる。

「じんし」は殺すぞ。人や馬だけではない。我らのことも遊び半分に殺すぞ。

あれが目を覚ます前に。

待て、起きたぞ。「じんし」が起きたぞ。

弱っておるぞ。

長い間あれだけの仕打ちを受けて、その上我らより長く封じられていたのだ。

当然の道理。

よく生きているものだ。

殺しておくか。

関わるな。関わるな。

逃げるのがいい。

放っておけばどうせ死ぬよ。
そう、逃げろ、逃げろ。
――それらは、黒雲と雨に紛れ、方々へ散り散りに逃げ去った。
後に残ったのは、鳥居と、割れた巨石と、千切れた注連縄と――
いや、もうひとつ。
黒煙より出ずるが如く、白銀色の影が、闇からぬらりと姿を現した。
それは矮小であった。
ひどく弱っていた。
雨に打たれ、それは啼いた。
「おおお」
恨むように、悲しむように。
そして、ふ、とかき消えた。
後には本当に、何も――

三

雨はどうやら止みそうに無かったが、見終えた映画のために延滞料金を払うのは馬鹿馬鹿しいし、どうせレンタル店まではさほどの道のりでもない。
大輝は濡らしてしまってもいいように、敢えて履き潰しかけたスニーカーに両の足を突っ込むと、傘を片手に玄関のドアを開けた。
「じゃあしゃくネエ、行ってくんね」
「本当に行くのかい？　さっきの雷、ずいぶん近かったじゃないか」
「あれ一発しか落ちてないし、平気だよ。ぱっと行って帰ってくるからさ」
「気をつけなよ……？」
「分かってる」
雷が相手では気をつけようもないが、大輝は一応適当に頷いて、家を出た。

実際、雨は強かった。

こんな豪雨はいつ以来だろうか。風も無く、重い雨粒がデタラメな勢いで、垂直に、この町に叩きつけられる。狂ったような雨音で自分の足音もよく聞こえない。

人通りはほとんど無く――それはこの辺りではいつものことか――アスファルトの地面が、満遍なく、黒く飛沫いている。

住宅地を抜け、大通りに出ても、車すらさほど走っていなかった。

大輝はレンタルビデオ店に駆け込み、胸に抱えてきたものの、やはり少し濡れてしまったレンタルバッグを返却してから、一応ぐるりと店内をながめて回った。

特に借りようと決めていたものも無ければ、これといって目をひく新作も無い。

ちょっと棚から目を離して見回してみると、客は自分と一組のカップルしかいなかった。

――出るか。

無理に選んだ映画が面白かったためしはない。今日は見切りをつけることにした。

閑散とした店をあとにし、再び黒い土砂降りの中に身を投じる。

行きは小走りだったが、今度は完全に駆け足である。

「雨さえ降らなきゃ世のなか平和なのに……」

理屈の通らぬことを呟きつつ、傘を前へ突き出して大通りの歩道を走る。

と、不意に、足元に白く小さな影が差した。

「うおっ――と、とおっ？」

けんけんと片足で跳ね、そのまま体制を立て直せず、派手に転倒する。

傘が飛んだ。

ガードレールに思い切り肩がぶち当たる。

「痛っで……っ！　こ、このガードレールっ！」

レールが無ければ、たった今通り過ぎていったトラックに轢かれて

痛いでは済まなくなるところだったのだが、そんなことは関係なく大輝は悪態をつく。
何にせよ一瞬でずぶ濡れである。
こうなった原因はどこかと見回せば、電柱の影で震えている、白い生き物が目に入った。
白というより銀だろうか。
雨に濡れ、痩せ細った、小さな動物がうずくまってこちらを見ている。
「何だこいつ……仔犬？」
犬にしては目つきが鋭すぎるような気がしないでもなかったが、ともかく大輝は体を起こし、歩み寄って手を伸ばす。
「捨てられたのか？　おいで――、てっ！」
反射的に手を引っ込める。
手の甲を引っかかれた。
「何だお前……いってぇ……普通犬って噛むもんだろ……？」
傷口からはすぐに血が滲んできたが、降りしきる雨に流されてゆく。
犬は電柱の陰に隠れたまま、警戒心をむき出しにして、こちらを睨んでいた。
取りあえず転がった傘を拾った大輝は、骨が折れていないことだけ確認して、差しなおした。もう全身濡れているので無意味といえば無意味だが、傍から見れば、持っているのに差さないのは不自然というものだろう。
「……ま、いいか。どうせうちは、しゃくネエが動物苦手で飼えないしな。誰かいい人にでも拾ってもらえ」
睨む仔犬に言い残して、大輝はまた走り出した。

四

温かなシャワーを、まだ若いともいえぬその身に受けながら、石楠花は静かに歌っていた。

湯気とシャンプーの香りが充満した、狭い安堵の空間。
心地よさに身を委ね、石楠花は目を閉じていた。
だがある刹那、不意に何かを感じ、すっと瞼を上げる。
「何だ？」
シャワーを止める。
水音。
窓の外――雨音。
漂う湯気。
視線をはしらせる。
何も――いや、何だ。
何かを感じるのに、何だか分からない。
初めての感覚だった。
石楠花は知らないが、それは恐らく、対象が存在しなかった……いや、し得なかったからである。
ランプが町に灯り、電気が行き届き、やがてコンビニエンスストアが建つようになったこの国で、強くも曖昧なそれらはより所をなくし、いつしか姿を消していた。
だが、石楠花の中に流れる血は憶えていた。
感じる。
だが、それだけだ。
「何だよ……」
ただ自分の感覚に困惑する。
不意に玄関の方で物音がした。
「っ、た、大輝？」
思わず声が裏返る。
ちょっと間があって、義弟の声が返ってきた。
「ああ、ただいま」
「お――かえり」
安心しつつ思う。
理由も無く、何をこんなに焦ったものか。

急に恥ずかしくなり、石楠花は一人勝手に苦く笑い、扉越しに問うた。
「雨、平気だったかい」
「うん、まあね」
「ちょっと待ってて、今出るから。外、寒かったろ？」
「あ、いや、いいよ」
弟の声はなぜか狼狽した様子だった。
「そんなに濡れなかったから別に平気。俺、見たいテレビがあるからもう部屋に行くよ。お休み」
早口な言葉の後に階段を上る音が続いて、やがてそれも二階へと消えていった。
石楠花は首をかしげ、ぽつり呟く。
「変なヤツ」
それから、再びシャワーを出し、頭から浴びる。
さっきとは比べ物にならないほど強大な何かが去来したのは、その数秒後だった。
今度は耐え切れずにうずくまる。
石楠花は、少なくとも理解した。
「何……これ。……普通じゃない」
この感覚は、恐怖であり、警告であり、殺気であり、そして闇だということを。

五

さて。大輝は考える。
一体どうしてこうなってしまったのか。
俺はそんなに動物好きだったっけ。そういえば昔アニメ映画で見たな。警戒してる動物に指を噛まれても、動じずに「怖くない」って言い聞かせて、なつかせる……って、こりゃそれどころじゃないぞ。引っかきすぎだろ。両腕ともこんな傷だらけになって、しゃく

ネエにどうやって言い訳するんだよ。つーかしゃくネエ、見つけたら怒るだろうな。猫が足もと通り過ぎただけでも悲鳴あげる人だもんな。まあ、あと半月もすりゃ親父が帰ってくるし、そしたら親父にも一緒に説得してもらおう。親父は物凄い動物好き――でもないけど、嫌いって話も聞いたことないし。……心もとないな。

でも仕方ないよな。

だって、だってさ。

大輝は肩を落とし、それを見る。

「こいつ、可哀想だったんだもんなぁ」

仔犬は、部屋の隅で伏せるようにうずくまり、大輝のほうを睨んでいた。

あのまま走り過ぎれば良かったものを、つい気になって振り返ってしまったのが運の尽きだった。雨に打たれて震える弱った仔犬は、大輝にとってあまりにも哀れすぎたのだ。

大輝はため息をつく。

「現代的じゃないな、俺って……こういうの弱いよ」

とにかく、ぐしょ濡れの服を脱いでパンツ一枚になる。床が濡れてしまうが、フローリングだからさして問題はあるまい。

パイプベッドの枕元にあったスポーツタオルを手にとって、まずは自分の髪と体を拭く。

そしてTシャツを着て――

ここからが一仕事だ。

大輝は静かに腰を落とし、部屋の隅にうずくまったまま動かない仔犬に呼びかける。

「お前も拭くぞ。そのままだと体冷えるからな」

犬は警戒して自分からは動こうとしない。

とはいえ、これ以上引っかかれてはかなわない。

大輝はそのまま、じっと仔犬の方から近づいて来るのを待った。

見つめあい、見つめあい続け、五分後。

「……。来ないな」

状況変わらず。
　作戦変更である。少しずつ近づくしかない。
「よーしよし、そのままじっとしてろよ……」
今まで出したこともないような猫なで声をかけつつ、腰を落としたまま、じり、と前進する。
　それだけで仔犬はびくりと身を縮めた。
　大輝は動くのをやめた。
「……お前」
　この怯え方は、いくら何でも尋常ではない。
大輝と会う前、よほど怖い目に遭ったのだろうか。
そうかも知れない。
何か――ひょっとしたら誰かに、苛められでもしたのかも知れない。
　ふう、と息をつき、大輝は猫なで声をやめて、仔犬に語りかけた。
「あのさぁ……よく聞けよ。俺、怖い人じゃないから。お前が誰に何されたか知らないけど、俺は絶対お前のことをいじめないから。優しくするって約束するよ。分かるか？　約束」
　銀色の犬はうずくまったまま、じっと大輝のほうを見ている。
　赤い眼だ。犬のことはよく知らないが、こういう眼の色もあるのだろうか。
「だからさあ、ちょっと体だけでも拭かせてくれないか？　お前ただでさえ弱ってるっぽいのに、そのままだと体が冷えて死んじゃうだろ。分かってくれよ。なあ……頼む、この通り」
大輝は頭を下げる。
　沈黙があった。
　ゆっくり顔を上げて見ると、犬は立ち上がり、一歩、一歩と、おぼつかぬ足取りでこちらへ歩いてきていた。
「お……？」
大輝は目を丸くする。
　仔犬は大輝の足元まで来ると、ちょっとこちらの顔を見上げてから、ぐてっと寝そべった。

好きにしろとでも言わんばかりに。
「――は、はは」
大輝は思わず笑った。
「何だよ……話せば分かるじゃん」
なぜだか無性に嬉しかった。
それから、タオルで全身を拭いてやりながらも、大輝は仔犬に声をかけ続けた。
「お前ってあれだな、なんか人の言葉が分かるみたいだな。しかしぐしょ濡れ――あれ、お前女の子か。そっか。いや、なんか確かに女の子っぽいな。どこがって言われても分かんないけど」
そうされている間、仔犬は目を閉じて、じっとしていた。
「へえ……拭いてみると、けっこう真っ白でフワフワしてるんだ。尻尾とか、ふわっふわ。変わった犬だなぁ。たぶん外国の犬だろうな。……しかしメシはどうするかな。ドッグフードって、色々種類があるらしいし……とにかく明日買いに行ってみるか。今日はこっそりミルクを温めて――あれ？　ミルクって猫だっけ。――まあいいか」
段々ただの独り言になってきた。
「お前、こうやって大人しくしてれば可愛いじゃん」
柔らかい。
「……飼ってやりたいな」
そっと頭を撫でてやる。
仔犬は一瞬目を開け、顔を上げて大輝と目を合わせたが、大輝が微笑んでみせると、安心した様子でまた目を細め、少しだけ体を弛緩させた。

第二章【食虫――はみむし――】

一

あの雷雨より七日が過ぎていた。

まるで埋め合わせでもするように気持ちの良い快晴が続き、ここのところは、そろそろ秋も終わりだというのに、学生服の厚みが少々疎ましく思えるほどの暖かさである。地がぽかぽかと温まっているのが、ちょっと外を歩くだけで感じて取れる。

放課後、とうに乾ききった日之台中学校のグラウンド隅、校門近くのひっそりとした植え込みにしゃがみ込んでいる白衣の背後に小走りで歩み寄り、大輝は声をかけた。

「白鳥先生」

「ん――」

白衣の生物教師、白鳥泰三はしゃがんだまま振り返る。声をかけるまで、近づく足音にも全く気付かなかったらしい。わずかながら驚いたような様子だった。

「殿山君か」

「また昆虫採集ですか」

「うん、まあね」

白鳥は、どっこらせ、と小柄な体を立ち上がらせる。

まだ二十台の半ばということらしいが、妙に疲れた印象の教師である。ピンセットとフィルムケースを片手にしょっちゅう外をウロウロしている割には青白い顔、冗談のような丸眼鏡に、その奥の眠た

そうな目。よれよれの白衣も手伝って、お世辞にも快活とはいえない風貌のため、生徒たちから特に好かれるということもないが、人格に棘や毒気が無いので嫌われるということもない。ただ、悪い言い方をすれば、少々ナメられがちな人間である。

しかし大輝はこの教師が嫌いではなかった。教師としてそれが良いことなのかは分からないが、人のすることにさして構わず、自分の世界を大事に生きている者とはなぜか話し易い。もしかすると大輝の内面にも案外そうしたところがあって、知らず知らず共感しているのかも知れない。

白鳥は腰を叩き、ちょっと首を左右に動かしながら、大輝の学生鞄を見る。

「もう帰りかい」

「放課後ですからね。今日は何捕ってたんですか」

「いや、蟻を補充しようと思って来たんだけどさ」

多分、理科室の隅に置かれている、土が詰まった水槽の中にいる蟻のことだろう。無論、巣を観察するためのものだが、生物部ですら大して熱心に観察していないと聞いたことがある。

「たまたま少し面白いのを見つけたんだ。ほら、これ」

白鳥は、蓋にいくつか針穴の開いた、透明なフィルムケースを大輝に見せた。

覗きこみ、大輝は首をかしげる。

「ハエですか」

それにしては、ほんのわずか、大きいように思うが。

白鳥は、それっぽいんだけどね、とケースを日の光に透かす。

「僕はこれ、見たことないんだなぁ。いや、他のところは君の言う通り、ただのハエと変わらないんだけど、足の先がね、少し違うんだよ。普通はハエの足って、物に張り付くために……って、これは前にも君には言ったよね」

「はあ」

言われたような言われなかったような。少なくとも細かい内容は記

憶に無い。
　白鳥は勝手に続ける。
「ただの奇形とも思えないし、もしかしたらちょっとした拾い物かも知れないよ」
「新発見ですか」
「さあねえ」
白鳥は他人事のような、そっけない面持ちで首をかしげる。
「ま、家に持って帰って調べてみるけどね。君も早く帰ったほうがいいよ」
「はい？」
「聞いていないかい。一昨日くらいかな。隣街で中学生が一人、変死体で発見された話」
「ああ」
聞いている。
というより、今日もその話題で、昼休み中クラスメイトと喋りあっていた。
額に穴を開けられ、中身――つまり脳を、滅茶苦茶にかき回されて死んでいたという男子中学生の話である。
猟奇的かつ無残で、悲しむべき事件であるが、ここのところ全国で立て続けに不気味な殺人事件が起きているため、テレビなどではある種の流行のひとつであるように、少々下世話に報じられていた。つまり、他とひとまとめのワイドショー扱いである。
　白鳥はフィルムケースを白衣のポケットに入れる。
「犯罪も変なのばかりになってきたねぇ……気をつけて帰るんだよ」
独り言のように言いながら、校舎のほうへ、ひょこひょこと歩いていってしまった。
　大輝はその背中に、さようなら、と声をかけ、しばらくぼんやりと見送ってから、校門を出た。
　帰り道、少し遠回りをして駅前の百円均一の店に寄った。
　それなりに大きな店で、ペットフードなども、種類は少ないなが

ら置かれている。
大輝は幼犬用の缶詰を四つほどカゴに放り込み、自分のためのスポーツドリンクも二缶選んで入れて、レジへと向かう途中、壁際にある棚のところで立ち止まった。気になるものを見つけたのだ。
「――これ……」
ふと、ある光景を想像し、大輝はそれの内から赤色を選んでカゴに入れた。
自覚はしていなかったが、大輝はこの一週間、ずいぶん急ぎ足で帰宅するようになっていた。寄り道をした今日とて義姉より早く家に着いたほどである。
玄関でいそいそと靴を脱ぎ、二階への階段を上りながら、大輝は毎回不安に思う。
……いなくなっているのではないか。
窓は閉めているし、ドアだってノブを回さねば開かない。だからそんなわけもないのだが、なぜだかいつも、こうして扉を開くたび、忽然といなくなってしまっているのではないかと、――いや。
今日もそれはちゃんと、ベッドの上にくるりと丸まり、眠っていた。
大輝は自然、顔をほころばせて呼ぶ。
「シロ」
呼ばれた途端、仔犬――シロは目を覚まして跳ねるように起き上がり、ベッドを跳び下りて、大輝の足元に駆け寄った。
大輝は部屋の入り口でしゃがんで、後ろ手にドアを閉め、その背中や頭を撫でてやる。
「いい子にしてたか、シロ？　まあお前、寝てばっかだけどな」
白いからシロ。
安易だが、わざわざ凝った名前など考える大輝ではない。
大輝は百円ショップのビニール袋からドッグフードを一缶出して、ベッドの横の大皿に開けてやる。ちなみに石楠花が「皿が一枚ない」とぼやいていたのは六日ほど前のことだ。

シロは長い尻尾を振り振り、それにかぶりついた。
大輝はベッドに腰を下ろし、シロの姿を眺めながら呟く。
「……元気になってよかったな」
今さらだが、一晩めは危ない状態だったと思う。
体を拭いたあと少しずつ動きが鈍くなってきて、温かなミルクを与えても、体はどんどん冷えてゆく一方だった。
なりふり構わず義姉に助けを求めようかとも思ったが、動物嫌いの石楠花が大輝より犬に詳しいわけも無いし、もっと状況が悪くなる可能性のほうが大きかったので、その案は自主的に却下。かといってあの時間では、もう獣医も開いていなかった。
仕方がないから大輝は自分の胸にシロを抱き、共に布団に入って、一晩中その小さな体を温め続けた。
そうした努力の甲斐あってかシロは元気を取り戻し、それどころかここ数日は、餌をやったあと、大輝の膝に乗って甘えるまでに懐いている。
今もその通りだ。
大輝は微笑んでその背をくすぐる。
「……なんか最近俺、家に帰るのが楽しみになってきたよ。こんなの初めてなんだけど、これってお前がいるからだよな」
大輝は、皿の中身を平らげたシロの体をひょいと持ち上げ、胸に抱く。
シロは心地良さそうに目を閉じた。
「お前かわいいもんなあ。人間だったら美人だよ、絶対」
たった七日で、大輝はもう親バカになりかけている。
しかし、事実、シロは美しかった。
柔らかで長い、銀沢を帯びた白い毛。しなやかな体。目は切れ長で鋭いが、細めの顔立ちによく似合っている。
「俺と結婚するか？　ん？」
にこにこ顔で頬ずりする。
こんな大輝の姿をクラスメイトが見たら、何と言うだろうか。

シロは大事にされているのが分かるのか、満足そうに、くう、と鳴いた。

そうだ、と大輝は思い出し、シロを膝の上に戻し、傍らに置いていたビニール袋から、さっき餌と共に買ったものを取り出した。

真っ赤なリボンである。大輝は枕もとのペン立てにあったハサミで、ちょうどいい長さにそれを切る。

「お前が嫌がったら外すけど。……これ付けてりゃ、もし一人で外に出ちゃっても、保健所に連れて行かれたりしないだろ」

言いながらシロの首にリボンを巻き、ちょうちょ結びできゅっと留める。

「よし――おっ、似合う似合う。やっぱり赤にしてよかったな」

シロはきょとんとした面持ちで大輝の顔を見つめる。

大輝はその頭を撫でながら言う。

「お前が俺んちの……」

いや、それは追々の話で、今はまだ違うか。

「……まあ、俺と一緒にいる子だって証拠だよ」

シロはまだちょっと首をかしげていたが、やがて大輝に抱きつくように寄りかかり、かりかりと腹を引っかいた。

「分かった分かった」

またシロを膝から持ち上げて抱っこしてやる。

シロは大輝の胸に横顔を寄せ、再び静かに目を閉じた。

二

学校からの帰り道、石楠花は同級生の歩美と共に、コンビニで買ったアイスをかじりながら歩いていた。まあ、模範的な女子中学生の行動とは言えないが、こうも暖かいとアイスの一つでも食べたくなるのが乙女たちの人情である。

歩美と帰る時の話題というか議題は、専ら「我々も何とかして彼氏を作れぬものか」であるが、二人が友人と呼べる関係になってか

ら一年と半年、これといった進展がないのが悲しいところだ。
まあ厳密には、本気で彼氏を欲しがっているのは歩美だけで、石楠花の方はそんなに切実な感情を抱いているわけではない。
歩美はぬるい風に幼き髪をなびかせ、今日も空を仰いでため息をつく。
「出会い、無いわね……学校なんて半分は男だっていうのに、どうしてこうも素敵な出会いが無いのかしら」
素敵な出会いなどというものを求めることが間違いなのだ――と少女が気付くのは、少女でなくなる頃なので、歩美の夢見がちな呟きも、今は無碍に笑い飛ばせるものではない。
石楠花は歩美のとろとろした足取りに合わせながら、そうだねえ、と苦笑う。
「ま、高校入ったら何とかなるんじゃないかな？　お互い」
「あたし中学に入る前もそれと同じこと思ってたわ……」
「ふぇーっ？」
石楠花はアイスをひと齧りしつつ、歩美の顔を覗き込む。
「あんらひょうかっこふのとひから」
「何言ってるのか分かんないわよ」
「ん――ぐ」
石楠花はアイスを咀嚼し、飲み込んでから言い直す。
「――あんた、小学校のときから男が欲しいと思ってたのかい？」
「そんな言い方しないでよ！　彼氏が欲しい、って言いなさい……っていうか、この時代に何言ってんの。しゃくの小学校って遅れてたのねえ。うちじゃ六年生くらいからもう、付き合ってる子たちっていたわよ」
「世も末だなあ」
「同い年の発言とは思えないわね」
呆れ顔の石楠花に対し、歩美の方も呆れ顔である。
石楠花は、今度は少しだけアイスを齧り、うーんと考え込む。
「だって六年生っていったら、うちの大輝よりひとつ下だぞ」

「あら、大輝くんだってそろそろ彼女くらいいてもおかしくないんじゃない？」
「それはダメだよ！」
石楠花はけたたましく否定する。口からアイスの欠片が飛んだ。
歩美は過剰な反応に目を丸くしつつ、語る。
「な……何よ大声で。だってそうでしょ？　C組の大下君とBの熊本さんだって、秘密にしてただけで、中一の頃から付き合ってたっていうし……ほら、夕子の彼も寺山中の一年生なんでしょ？　大輝くんが誰かと付き合い始めてもおかしくないわよ」
「それは――まあ、そういう時代なのかもしれないけどさ、でも」
石楠花は断固たる口調で宣言する。
「大輝をそこらへんの女に、簡単に預けるわけにはいかないな」
「はあ？」
「だ、だから！　その……」
石楠花は最後のアイスを棒から舐めとる。
「少なくとも、あたしの眼鏡にかなうような女以外は、認めない」
「何よそれ。しゃくったら、大輝くんの彼女の面接官でもやるつもり？」
「当然。あいつが誰のお陰で赤点とらないと思ってるんだい。それだけじゃないよ。あいつの朝ごはんも弁当も夕飯もあたしが作ってるし、あいつのパンツだってあたしが洗ってるんだ。それにねえ」
「はいはい、可愛がってる大事な義弟なのね」
「そ、そうだよ」
石楠花はアイスの棒を口にくわえる。
「だから……」
「じゃあ、しゃくを納得させられるような子って、どんな子なの？」
「……うーん……」
石楠花は考え考えに答える。
「まず……料理は出来ないとダメだね。それと勉強も。体の頑丈さなんかは……生まれつきのものだから仕方ないとして、でも健康な

ら健康なほどいいね。マメできれい好きで、早寝早起きで、髪は染めてなくて、そう、スカートの丈を詰めたりもダメだ。あとは、そうだね――委員会は図書委員で、髪は短めで、やたらと動物を飼ったりしないで――それと」

「ねえ、しゃく？」

今度は歩美が石楠花の顔を覗き込む。

「……それ、あんたじゃない？」

「え」

「はあ――」歩美のため息。「なるほどね。そういうわけじゃ仕方ないわ」

「な、何だよ」

石楠花はアイスの棒をくわえたまま、微かに頬を紅に染める。

歩美はにんまり笑う。

「何だよじゃないでしょ、赤くなっちゃって。どっかで自覚はあるんじゃない」

「そ――そんなんじゃないっ！」

「私は何も言ってないわよ。そんなんって、どんなん？」

「歩美っ！」

石楠花はカバンで歩美の背を叩く。

歩美は飛び上がり、くるっと振り返って手を振った。

「あいたた。――それじゃね、しゃく。また明日」

「へ？」

横を見ると、「殿山」と書かれた自宅の表札があった。

歩美は、「まあ頑張りなさいな」と楽しそうに言い残し、たったと小走りで去っていってしまった。

残された石楠花は門の前で、もはや真っ赤になって唸る。

「うう」

本当に、そんなのじゃないのに。――心中で呟く。

そんなんじゃないさ。

そうだよ、そんなわけないだろうに。笑っちゃうよ。

だって今さら、ねえ。
あたしはただ、他の女の子に取られちゃうのが嫌なだけで――って。
「……あれ……？」
ってことは、そういうことに――
「――なっちゃうじゃないかあ！」
がしがしと頭をかきむしる。
「もおお、変なこと言うなよなあっ！」
近所の男の子が一人、立ち止まって見ている。
石楠花は怪訝な視線に気付いてぴたりと止まり、「……ははっ」
と無意味な愛想笑いをして、門の中に引っ込んだ。
玄関を開けると、そこにはもう大輝の靴があった。
「おや」
ずいぶん早い。
そういえば最近、やけに帰りが早い気がする。どうした心境の変化だろうか。
――大輝くんだってそろそろ彼女くらいいても――
つい今しがた歩美が発した言葉が蘇り、靴を脱ぎかけのまま、ぴたりと静止する。
「……。いや、そりゃ違うだろ。落ち着けあたし」
再び動き出す。
彼女が出来て帰りが遅くなるならまだしも、早く帰るようになるなんて聞いたこともない。
無意味に敏感になりすぎているようだ。石楠花は深呼吸する。
玄関を上がり、階段を上りつつ、声をかける。
「たいきー？　もう帰ってるんだろー？」
ちょっと遅れて返事があった。
「帰ってるよ。お帰り」
「ただいま」大輝の部屋のドアの前に立つ。「ちょっといいかな」
「あ、えーと……待って」
ごそごそと何かが聞こえて。

「――い、いいよ、入って」
「？　うん」
かちゃりとノブを回し、ドアを開けて入室する。
大輝は学生服のまま、テレビを見るでもなく、漫画を読むでもなく、デスクで勉強するでもなく、ただベッドに腰掛けていた。
違和感。
部屋の中ごろまで進み、石楠花は大輝を見下ろして眉をひそめる。
「……何してたんだい」
「いや、ちょっと考え事。しゃくネエこそ何？」
「え――」
何だっけ。
なんでもなかったような気が。
ええとねと視線を泳がせ、半笑いで考えながら、石楠花は――
どくん。
「……あ？」
心臓が跳ねた。
息が止まる。
視界が揺れる。
何か――歪んでいる？
歪んで石楠花を包んでゆく。
「な……、何……」
あのときシャワーで感じた何か。あれから何度か、いや……わずかながら慢性的に続いていた何か。
いや、比較にならないほど強烈な重圧が。
眩暈。
視界がマーブルに溶ける。
大輝の声。
「どうしたの、しゃくネエ？　しゃくネエ……おい、どうしたんだよ！」
石楠花は膝をつく寸前で、意識を持ち直した。

「あ――」
立ち上がった大輝の顔があった。
「何でも、な……あっ」
ぐらりと体が傾ぐ。
とっさに抱きとめようとした大輝の体ごと、ベッドに倒れこむ。
幾ばくか、ひょっとしたら三秒にも満たない短い沈黙があり、石楠花は、ううんと唸りながら体を起こす。
「――あ、ごめ……」
「いや、いいけど」
大輝は気まずそうに目をそらした。
石楠花は大輝の上に、覆いかぶさるようにして倒れていた。
慌てて横へ退き、ふらつく頭をぎりぎりで制御しつつ、石楠花はベッドの隅に座る。
「ふう――」
「……大丈夫？　しゃくネエ」
「ああ、もう平気」
正直まだ少しくらくらするが。
「貧血――かな。ちょっとすれば治るよ」
「珍しいね」
自分も体を起こし、石楠花の隣に座りなおしながら、大輝は言う。
石楠花は頷いた。
「まあね」
それから、ぽつりと。
「……まだ胸板は薄いんだ」
「え？」
「な――何でもない何でもない」
ははは、と自覚できるほどぎこちなく石楠花は笑顔を作る。
大輝はちょっと黙って首をかしげ、そういえば、と口を開く。
「何の用？」
「え」

「だから、しゃくネエ、何か用があって入ってきたんだろ」
「あー……」
石楠花はもじもじと膝をこすり合わせて考えたが、特に何も浮かばなかった。また半笑いで誤魔化す。
「……忘れちゃった」
「はあ？」
「いや、でもさ」
石楠花は誤魔化しの延長で、きょろきょろと部屋の中を見回す。
「あたし、大輝の部屋に入るのって久しぶりだよ」
「そうかな」
「そうさ。だって小学校の高学年になる頃から、何となく入れてくれなくなったじゃないか。勉強教えるのも居間だし……、っ」
「どしたの」
「あ、な――なんでもない」
ふと横を見たら意外と顔が近かったから動揺した、などと言えるわけもない。
落ち着け。相手は義理とはいえ弟。しかもまだ中一ときたものだ。歩美に変なこと言われたばかりだからって、意識しすぎだ。
意識しすぎ、意識しすぎ。何考えてるんだ。
石楠花は自分に言い聞かせる。
ふと、妙な匂いに気が付いた。
「あれ……何これ、お香？」
「何が」
「匂いだよ。大輝、あんたお香焚いたかい」
「いや。するかな、そんな匂い」
「あたしの気のせいかな。なんか中国のお香みたいな」
その瞬間。
石楠花の頭上で、かちゃりと何かが外れる音がした。
「？　――わ！」
見上げれば、壁にかかっていた丸い時計が、前に大きく傾き、今に

も落下を始めるところだった。
とっさに頭をかばう。
重ねた腕に、ばしん、と衝撃。
横の大輝も声を上げた。
「うおっ？　って……へ……平気？」
「う――ん――」
石楠花はそろそろと下げた右腕をさする。
痛みはさほどでもないが、突然だったので驚いた。もっとも「落ちますよ」と時計に宣告されてもそれはそれで驚愕するけれど。
大輝は落ちてきた時計を手に取り、立ち上がって壁の金具と見比べる。
「突然どうして落ちたんだ？　いや――違うよな。ごめん、しゃくネエ、俺がもっとちゃんと付けてりゃ」
「いいよいいよ、平気だから。でも危ないし、確かに念入りに固定しといた方がいいかもね」
石楠花もベッドから立ち上がった。
「それじゃあたし、宿題しなきゃいけないから」
「あ？　……ああ」
「じゃあ後でね」
ドアノブに手をかけながら、石楠花は床の隅に落ちたものに気付いた。
赤いリボン？　使いかけのようだが。
硬直している石楠花を、大輝が怪訝な面持ちで見ている。
石楠花は我に返り、「じゃ」とまた片手を上げ、部屋を出た。

三

大輝は深くため息をついた。
「ふう……」
色々と疲れる数分間だった。

義姉の調子はおかしいわ、時計は落ちてくるわ。
それに――微かに感じた、ひかえめな胸の感触。
「……しゃくネエ」
わざとではないが、正面から手でつかんでしまったのに義姉は気付いただろうか。
と、それどころではない。
心が疲れた一番の原因を開放してやるため、大輝はクローゼットを開けた。
待っていたとばかりにシロが飛び出してくる。
それから、文句でも言うように、かりかりと片手で大輝の足をひっかいた。
大輝はしゃがみ込み、謝罪する。
「ごめんごめん、邪険にしたわけじゃないんだ。見つかったら捨てて来いってうるさいに決まってるからさ――ああ、分かった分かった」
シロを抱き上げ、よしよしと背をさする。
「悪かったよ、ほんとに」

四

リボンか。
ラッピング用――かな、あれは。
誰かに何か送るのかな。最近早く帰ってくるのは、何かそれと関係していたりして。
いや、考えすぎだよな。
分かってるさ。うん。そうだよ。大輝に限ってそんなことはないさ。
あたしは大輝を信じて……って何考えてんだあたしゃ。それじゃまるで――
「ああ」
あごをデスクに乗せる。

自室の勉強机につき、意味もなく広げたノートに意味もない落書きをしながら、石楠花は取り止めも無く考えていた。

まあ――忘れよう。取りあえず。今の自分はどうかしているのだ。多分、ここのところ続いている陽気で。

脈絡もなくそう決める。

にゃあ、と声がする。

窓を見やると、隣家の屋根の雨どいに黒猫がいて、こちらをじっと見ていた。

背筋に電流が走り、石楠花は跳ね起きる。

「うわわ、猫っ！」

猫は、にゃああ、とまた鳴く。挨拶でもするように。

大急ぎで窓を閉め、ガラス越しに、手で追っ払うような仕草をしてみせる。

「あっち、あっち！　お願い、早くあっち行って！」

なぜか手で片耳を塞ぎ、内緒話のように落とした声で言う。

猫はしばらくそんな石楠花を眺めていたが、やがて飽きたようにぷいと顔を背け、悠々とした足取りで歩いていってしまった。

石楠花は肩を落とす。特大の安堵と疲れが全身に広がる。背中からは冷汗がふき出していた。

「ダメなんだよなぁ……」

動物が苦手なのだ。

嫌いなのではない。苦手なのである。いや、やっぱり両方か。

そうなるきっかけは忘れてしまったが、今となってはもう理由など関係がなくて、石楠花という個人限定の本能みたいなものである。犬や猫、最近ではハムスターなどもその対象になっているが、見るだけで、えもいわれぬ不快感というか悪寒というか、とにかくそういう嫌なものが全身を駆け抜け、反射的に悲鳴を上げさせる。たぶん一生治るまい。

悪寒といえば。

「なんだったんだろ、さっきの……」

あの豪雨の夜から続く、警告のような、妙な感覚。

「ん」

考えながら自分の手元を見る。ノートには無意識に「へのへのもへじ」や元素記号などが、いかにも落書き然とした配置で書きなぐられていたが、その中の一つ。

紫雷呼縛石々妖生石々名血式名――。

漢文でもなければ日本語でもない、意味はあるようなのだが読み取れない、不可思議な漢字の羅列。

母が再婚する少し以前に、母方の祖父から習った呪いのひとつだ。その頃石楠花は祖父の家に住んでいた。

「これを書いたものはみんなお守りになる」と祖父は言っていたが、当時の石楠花は、何のかんのと理由をつけた、単なる字の勉強だと思っていた。

今思えば、小学校中学年の子によくこんな難しい字ばかり教えようという気になったものだ。石楠花が勉強好きで、極端に覚えの良い子だったので何とか書けるようになったものの、普通ならば見ただけで諦めてもおかしくない。

「おまじない、か」

――しばらく忘れていた、遠い日の、祖父との会話が蘇る。

じいちゃんはどうしてこんなのをたくさんしってるの？

うちは石字縛師の家系だからな。俺も親父から餓鬼の頃に教え込まれたんだよ。

しゃく、じ、ばくし……？　……なにそれ。

簡単に言やぁ、裏側のもの――お化けの相手をする仕事の人だ。

おばけなんていないよ。ママもいってたよ。

あいつは頑としてそういう考えの人間だからなぁ。

ほんとはいるの、おばけ？

まあ、今のご時世にゃほとんど居ねぇがな。居ても弱いのばっかりだ。

みえる？

感じるんだよ。俺やお前はな。お前の母ちゃんだって、時々は感じてるはずだぜ。認めたくねえから気付かないようにしてるんだろ。じいちゃんにもみえないの？

ああ。でもそりゃ、連中のほとんどが姿をうまく消してるからだ。あいつらが姿を現せば誰にでも見えるよ。人間に化けて暮らしてる奴だっているから、そういう奴はずっとみんなの目に見えてることになるな。だから俺らの家系が特別なのは、そうとう上手く隠れてる奴でもない限り、何となくその存在を感じられる、ってことだけだ。あとはまあ、どういうわけか術を使える体質なんだな。個人差はあるが。

むずかしいね。

細かいことは分からなくてもいいさ。これからもっと連中の数は減ってくるだろうから、会うことも、まず無ぇだろう。でも、ま、一応、石字文句だけは覚えとけ。

しゃくじもんくって、このおまじない？

ああそうだ。お前がもし、裏側の気配を感じたり、襲われたりしたときのためにな。

――石楠花はデスクに肘をつき、ふうむ、と一人唸った。

「御守り、か」

祖父なりの冗談だったのだろうか。少なくともサンタクロースよりは夢の無い話だ。

まあ、何にしても、信じられるような内容ではない。信じられるような内容では――ない――けど。

石楠花はふと思い立ち、馬鹿馬鹿しいと思いながらも、中一の頃に使っていた参考書を本棚から抜いて、カバーの裏にペンをはしらせた。

五

真夜中。

あるアパートの一室。
明かりの消えた、真っ暗で狭い部屋の中、テーブルの上に置かれた水槽の中で、それは思い出したように動き出した。
かりかりかりかりかりかりかりかりかりかり――ガラスの壁を掻く。音は、点けっぱなしになっていたテレビの砂嵐でかき消された。
すぐに、通れるだけの穴が開いた。
眠れる男はそれに気づかない。
それは抜け出した。
だが男は眠ったまま気付かない。
気付けなかった。
男は、それに気づけなかったのだ。
だからそれは、入り込んでしまった。
男の体はびくりと跳ねた。
そして寝たままぐねぐねと、壊れた傀儡のように布団の上で踊った。
止まった。
それだけだった。

六

真夜中、同じ頃。
大輝はベッドの中で目を開けた。
「ん――」
かすんだ視界。
闇と常夜灯の橙が混ざり合った曖昧な世界。
穏やかな微笑がそこにはあった。
面長であごの尖った、白すぎる顔。
細い目。長い睫毛。
左目の下に、ぽっつりと泣きぼくろがひとつ。

そんな女性の顔が、互いの息がかかるほど間近で微笑んでいる。
髪は――混じりけの無い白銀。それが常夜灯でオレンジに染まっている。
きれいだな。
大輝は思う。
いい夢だ。
柔らかく、暖かい。
女性は大輝の腕の中にいた。
大輝よりも、ずっと背が高いことが分かる。
甘い、中国香の匂い。
細い腕が大輝の背にまわる。
……たいき……。
女は笑い囁く。
唇の端から、八重歯と呼ぶには鋭すぎるような――、
大輝は再び目を閉じた。
今度こそ深い眠りに落ちたか、そこから夢は見なかった。
――やがて月が落ち、日が昇り、窓からの光が曖昧な時を消し去る頃に、目覚ましの音が鳴り響く。
ごろりと寝返って、半開きの目で、布団ごと体を起こす。
大輝にとっては時間がすっ飛んでいた。
「っ、ああ……っ」
まぶたを開いた途端、さんさんと痛い光が両目を圧迫したので、大輝は顔をしかめた。
手探りで目覚ましを叩き、黙らせる。
「んむ……」
目をこする。
夢。何か夢を見たような。
「なんか……いい夢だったな……」
一人で呟く。
何の夢だったか。

幼い頃に死んだ母の夢だっただろうか。どうにもそんな気がするが、全然違うような気もする。

「ま、いいか。――ありゃ」

傍らで、大輝の顔を見上げている存在に気付く。

「お前、またベッドに入ってきちゃったんだ」

シロがそこにはいた。

大輝と同じく眠たそうな目をショボショボとさせながら、大輝の体に擦り寄ってくる。

大輝は微笑んだ。

「タオルケットあげたのになぁ。夜、そんなに寒いか？」

シロは大輝の目を見返すばかりで答えなかった。まあ当然だが。

大輝は小さな頭をひと撫でしてからベッドを出て、部屋の隅の水皿にまだ水がたっぷり残っているのを確認して、「朝飯食って着替えたら、またちょっとお別れだ」とシロに言い残し、部屋を出た。

朝食はいつもの通りであった。

朝、殿山家の食卓にトーストやコーヒーが並ぶことはない。おかずが何であれ、白米と緑茶が基本である。

玉子焼きを口に運びながら、大輝は石楠花の顔をじっと見る。

義姉はその視線に気付き、顔を上げた。

「何だい、じろじろ見て」

「いや、もう平気なのかと思って。きのう倒れたから」

「ああ……」

石楠花は、ずず、と茶をすする。

「もう何てことないよ。それより大輝」

「何」

「納豆、ちゃんと食べな」

「……」

目ざとい義姉だ。

それから、それぞれに支度を済ませ、いつものごとく二人は揃って家を出た。

仲良く歩いてゆく二人の姿を、大輝の部屋の窓際から、シロが赤い眼で見送っていた。

七

一時限目、生物教師の白鳥がいくら待っても来ないもので、三年A組の教室内は、早すぎる休み時間の様相を呈していた。

まともに自席についている者はほとんどいない。女子生徒は五、六人ずつに固まって談笑し、男子はといえば――もはや頭数が半分くらいになっている。どこかへキャッチボールでもしに行ってしまったのだろうか。恐ろしいことに、一限目だというのに早弁をしている者までいる。

石楠花は窓際の席で持参の推理小説に目を落としていたが、机をくっつけてきた右隣の歩美に「ねえねえ」と声をかけられて顔を向ける。

「――何だい」

「しゃく、今日も大輝くんとご登校だったねえ」

「歩美……」

石楠花は目じりをひくつかせる。

見ていたのに声をかけなかったな、こいつは。

心中で呟きつつ、ふんと鼻を鳴らしてみせる。

「そりゃ姉弟だからね」

「フツーは毎日姉弟で登校しないと思うけど？」

「うちはするんだよ」

「ふうん？」

「……もう」耐え切れなくなって本を閉じた。「勘弁してよ。あんまり変なこと言われると、あたし大輝と無意味にギクシャクしちゃうじゃないか」

「ごめんごめん」

悪びれる様子もなく歩美は笑う。

それにしても、と石楠花はすかさず話題を変える。
「ずいぶん遅いね、白鳥先生」
「あの人のことだから、珍しいチョウチョでも見つけて虫取り網振り回してるんじゃない？　仕事忘れてさ」
「そんな――」想像する。「……有りえるかもね」
「でしょ？」
歩美は、きしし、とまた笑う。
石楠花も笑いながら、ふと窓の外を見る。
遠く、向かいの校舎の屋上に、小さな白い人影があった。
フェンス越しに見える、長身の――女？
白い着物、白い髪。
手に赤い紐のようなものを持って、それを長い髪と共に、風になびかせている。
石楠花は瞬時に目を奪われ、そして息を呑む。
何だろう、あれ――怖い。普通じゃない。
次の瞬間、また、きた。
例の感覚だ。ぞくぞくと背が波打ち、重い何かが肩にのし掛かる。
石楠花は丸くなって机に額をつけた。
「う……」
「どうしたの、しゃく？」
歩美が覗き込んでくる。
石楠花は重圧の中で声を絞り出す。
「変なのがいる……。窓――向かいの屋上……」
「何？　屋上って……誰もいないよ？」
「え……？」
石楠花は横目で窓を見る。
女はいなくなっていた。
重圧が解けた。
「あ――」
恐る恐る身を起こす。

歩美は心配そうに、石楠花の肩に手を置く。
「平気？　顔色悪いよ」
「うん――大丈夫――」
前髪をかき上げる。
「なんか……最近、なんかちょっと変なんだ……」
そう。あの雷雨の夜から。
石楠花は、遅れて滲んだ全身の冷汗に身震いした。
誰かが、あっ雨だ、と声を上げる。
再び窓を見ると、確かに、ぽつりぽつりと雨が降り始めていた。
歩美が呟く。
「雨？　おかしいわね、空は晴れてるのに」
「うん――」
こういうの、何て言うんだっけ。
石楠花は頭の中の辞書をぱらぱらとめくった。……思い出せなかった。
雨はチャイムが鳴る頃には上がったが、白鳥は結局、教室に現れなかった。

八

大輝の学校生活は平凡である。
不良ではないから余計な悪さはしないし、優等生ではないから余分な勉強もしない。
授業中は、寝られるときに寝て、私語のできる時にはして、そうでない時には、そこそこにノートを取って誤魔化す。
昼休みになれば外へ出てキャッチボールに興じるか、廊下で同級生たちと談笑。あまり元気が無ければ、自分の席に座つき、ジャージの上着を肩にかけて、ウォークマンから流れるパンクロックを子守唄に、机に突っ伏し眠る。
午後の授業はあくびをしながら。

今日もそうした一日であった。

ただひとつ異常を挙げれば、昨日言葉を交わしたばかりの白鳥が無断欠勤したらしいということを、クラスメートの一人から聞いて気になったくらいである。

帰りのホームルームが終わった後、大輝はミニバスケと中古ＣＤ店回りを断り、さっさと上履きを下駄箱に突っ込んで昇降口を出た。無論、部屋で自分の帰りを待つシロが気になっているからである。

大輝の担任は少々年配の体育教師なのだが、何事も億劫がる性格で、おかげで一年Ｃ組のホームルームは、全校でも群を抜いて短いことで有名だった。そのクラスでも一番に校舎から飛び出した大輝はほとんどフライング状態である。

その上、今日、大輝はあまり多くの生徒が使わない裏門を使おうとしていた。それは単なる気まぐれだったのだが、ともかく足早に裏庭を歩く大輝の周囲には、他に誰の姿も見当たらなかった。

化学実験室や家庭科室など、特殊教室がまとめて入れられた三階建ての校舎、通称「実験棟」の裏手に存在する、校長が趣味で育てている観葉植物と若手教員のバイクが並ぶだけの薄暗い裏庭を抜け、裏門近くに出たところで、大輝は右手に意外な人影を見つけて立ち止まった。

小柄な体に、よれよれの白衣。白鳥である。

今日は欠勤したはずではなかったか。大輝は片手を口に添え、名を呼ぶ。

「白鳥先生」

しかし白鳥は振り向きもしなかった。

ふらふらと、実験棟の中へ消えてゆく。

そう近くもないが、声が聞こえないほど遠くもなかったはずだ。

怪訝に思い、大輝はつい、その後をつける。

しかし実験棟の入り口で、足元に赤黒い斑点を見つけて立ち止まった。

「……何だ――？」

コンクリートの上に落ちてはじけた――血。そう、血液に見える。怪我でもしているのか。

昇降口の中に目を向けると、白鳥の姿はもう無かった。

六限までの授業が全て終わったので、もう明かりは消され、少ない窓から明かりが弱く差し込むばかりの、古びた校舎。ひんやりとしたコンクリートの巨大な箱。

大輝は、背に何か寒いものを感じながらも、その暗がりの中へ踏み込んだ。

靴を脱ぎ、スリッパに履き替えて、ぺたりぺたりと一階の廊下を歩く。

実験棟の中は、妙に静かである。この時間には基本的に誰もいないはずなので、当然といえば当然だが――少々不気味だ。

それにしても、いるはずの白鳥の気配も無い。

突き当たりの階段の前で歩みを止めてみると、そこの床にも血痕らしきものがあった。

大輝は階段を見上げる。

「上……？」

暫し立ち尽くす。

これは――追いかけてよいものか。

誰かに知らせた方が良いのではないか。

そんなことも思ったが、大輝の足は、考えている間に、もう階段にかかっていた。

無論、心配より興味がそうさせていた。

若さゆえ普段なら触りもしない手すりを、今はしっかりと握り、二階へと、一段一段ゆっくりと上る。

物理実験室や視聴覚室など、主に理科の授業で使う教室の並ぶ二階。

その廊下を大輝は歩く。

いつの間にか、その気もなく足音を消していた。

歩きながら耳を澄ます。

物音が聞こえる。
水音だ。
ごぽごぽと……。
――この中、か？
大輝は生物室の入り口で立ち止まる。
「白鳥――先生？」
返事は無い。
ドアは中途半端に開いていた。
「失礼します……」
大輝は中へ一歩踏み込み、そして後ずさった。
「え――」
まばらにカーテンの閉まった、明るいのか暗いのか分からない、それでいて確かに薄暗い、危うい光陰に満ちた広い教室。
白鳥は奥の壁際にいた。
後ろ向きに背を丸め、長テーブルに置かれた熱帯魚の水槽に両手をかけ、その中に顔を突っ込んでいた。
ごぽごぽ――。
水音だけが静かに、木霊するでもなく聞こえている。
動かない後ろ姿。
大輝は静かに、躊躇いながら、一歩一歩、近づいていく。
「……白鳥先生……です、よね？」
水を飲んでいるのか。
こんな水槽から？
なぜ振り向かない。聞こえないのか。
よれよれの白衣が妙に青白く見える。
大輝は応えぬ白鳥の背後で立ちすくむ。
かすかに身が震える。
足が……尿意もする。怖い。
そう、怖い。何だこれは。
白鳥先生。

白鳥の両耳から血が流れている。
あの床の跡は、ここから落ちた血か。
よく見れば、白衣の所々に赤黒い斑点がある。
大輝は意を決して、白鳥の肩に手をかける。
「先生」
白鳥はがばりと振り向いた。
ずれた眼鏡の奥、真っ白にふやけた両眼。
大輝は悲鳴を――上げられなかった。
白鳥の手が大輝の髪を掴んだ。
大輝は驚きに呼吸すら奪われ、とっさにその場にうずくまろうとするが、それすらかなわなかった。
抗えぬ力で振り回され、大輝は頭を水槽に叩きつけられた。ごしゃりと水槽が割れ、水と熱帯魚が床にばら撒かれる。熱い激痛が走った。
白鳥は、痛みに顔をゆがめる大輝の髪を掴んだまま、片手で高々と持ち上げる。
大輝の足の裏が当たり前のように地面の感触を失った。
そして投げ放たれる。
数メートル宙を飛び、大輝は黒板に背中から叩きつけられて、チョークの粉で汚れた教壇にどさりと落ちる。
「……あ……っ」
痛い。全身が痛い。
教壇から転がり、床に。
上を見ると、消えた蛍光灯を背に、白鳥が見下ろしていた。
その手は椅子を一つ掴んでいる。
白濁した眼球はどこを見ているのか分からない。ただ、顔は真っ直ぐに大輝を見下ろしている。
大輝は目を見開く。
「う、わ――」
椅子が振り下ろされた。

避ける間もない。とっさに顔をかばった大輝の腕に椅子がぶつかって、ごつんと恐ろしげな音を立てる。

「い、ぎっ――」

続けざまに椅子が振り下ろされる。

大輝はその度に悲鳴を上げる。

腕が。腹が。

一瞬でも間違えれば殺されてしまう。

白鳥は椅子を捨て、今度は大輝の腹を、どかり、どかりと規則正しく蹴りはじめた。

やはり小柄な男の力ではない。凄まじい衝撃が大輝を壊してゆく。

何も考えず、何も感じず、そして恐ろしく明確な攻撃の意思。

大輝の意識が遠のいてゆく。

痛みで抵抗が出来なくなってゆく。

「あ……」

助けて。

殺される。

死んじゃうよ。

涙が溢れる。

まるで突然の悪夢だった。

この薄暗く静かな生物室だけが、外の世界と切り離されてしまったようだった。

誰も助けてくれない。ここはどこか、別の場所だ。

みんな遠くにいる。

誰も助けてくれない。

大輝は腹をおさえたまま動けなくなった。

白鳥はぴたりと動きを止め、しばらく白い眼で大輝の姿を見つめていたが、やがて、その血に塗れた耳から、もぞもぞと黒い何かが這い出してきた。

虫。

親指ほどもある、大きな蝿――のようだった。

いや違う。
ずるり、ずるりと。
蝿のような上半身に続き、異常に長くぷっくりと膨れた、メスのカマキリの腹のような部分が、中ごろまで抜け出してくる。
ぬめった血液で暗く光るその虫は、白鳥の耳から頬にかけて生々しく張り付き、六本の足を蠢かせる。
白鳥は膝をつき、両手を床に貼り付けて四つんばいになり、大輝の顔に顔を近づける。
大輝は抗えなかった。
虫が――蠢いている。
蠢きながら、大輝の頬に。
誰かの穏やかな声がした。
「嫌じゃのう、食み虫かや」
妙に甲高く、色気のある、それでいて玲瓏な女の声。
「よりによって餌を間違えおって」
声色が冷たくなる。
白鳥はぐんと立ち上がった。
虫が、ビデオの巻き戻し映像のように、再び耳の中へ戻ってゆく。
大輝は曖昧な意識の中で、白鳥と対峙するその姿を見た。
いつの間にかそこにいたのは、背の高い――異様な女だった。
年の頃は、見た目にして二十四、五だろうか。
銀沢を帯びた白い髪。長く、おびただしいボリュームのあるその髪が、頭頂より少し後ろで一つに束ねられ、わっさりと巨大なポニーテールを作っている。
背丈は百八十センチを超えるか超えないか。
細い体に纏っているのは、浴衣のような着物のような、白い衣。腰より高いところに巻かれた紫色の帯。
ぞっとするような白面。
切れ長の、笑っているように細い目。長い睫毛。
その目が、わずか大きく開かれる。

「知恵の無い虫変化は哀れじゃの。わらわのことも分かるまいて」
血のように赤い瞳と――その下の泣きぼくろ。
白鳥の体が回る。
回りながら、女に襲い掛かる。
女は避けもしなかった。
「ほんに哀れよ」
たおやかな細腕がうなる。
肉を叩く音が響き渡り、白鳥は冗談のように弾き飛ばされた。
そして窓枠に叩きつけられ、弾み、そのままの勢いで再び襲い掛かる。
荒々しく繰り出された手をばしりと掴み、白い女は微笑んだ。
「この者の脆い手で、如何にするつもりじゃ？　わらわを殺すか？」
女は微動だにしない。
白鳥も、手首をつかまれたまま、動けずにいる。さっきまで――いや、きっと今も人外の怪力を持っているはずの白鳥が、当たり前のように力で押さえ込まれている。
女は空いた右腕で、白鳥の横顔を撫ぜるように打った。
ぼきん。
呆気なく首が折れたことは、寒気のする音で大輝にも分かった。
白鳥は、糸の切れた操り人形のように、床に崩れ落ちた。
女はその傍らに片膝をつき、白鳥の耳から這い出してきた虫の頭をつまんで、ずるずると引き出す。
「全く、つまらぬ虫よ。わらわはこれが大嫌いじゃ」
立ち上がりつつ床に落とし、憎々しげに草履で踏みつける。
そして白魚のような指を水槽の一つでゆすぎ、ゆっくりとこちらを向いた。
「災難じゃったの。この虫は食み虫といってな、人間の頭の中へ入り込んでは、中身を食らって育つものじゃ。まあ栗や芋の中にいる虫と同じじゃな。抜け殻になった体を操り、次の人間を襲って乗り移り、また脳味噌を食らい……それを続けるうちどんどんと大きく

なり、やがて子を産み増える。つまらぬものなれど、一応変化じゃ。大方あの者が――」

女は、あの者、と言う間だけ、少し眉をひそめた。

「――わらわと同じく眠り石に封じておったのであろう。滅ぼしてしまえばよかったものを……また何か妙なことでも図っておったか」

言いながら、大輝のほうへ歩み寄る。体重があるのか無いのか、どこか不思議な足取りである。

「可哀想に。怖かったか、大輝」

腰を落とし、顔を近づけてくる。

ふわり香る中国香。

大輝は気付く。

夢で見た、あの人だ。

夢――？　そう、確か夢だったはずだ、あれは。

ではこれは？

女は大輝を、優しく抱き起こす。

大輝は女の柔らかな胸に抱かれて、踏みつけられた腹の痛みに耐えつつ、絞り出す声で問うた。

「……あなたは……誰ですか」

「何を言う。もう幾日も共に暮らす仲ではないか。――おお、このように怪我をして……」

「え……？」

俺、こんなきれいな女の人と暮らしてたっけ。

大輝はまだ落ち着かない意識の中で考える。

いや――やっぱり違う。うちは親父としゃくネエと俺の三人暮らしだ。

でもこの人、どうして俺の名前を。

「あの……」

大輝が口を開いたと同時に、

「――何奴じゃ」

女は突然顔を横へ向け、低く刺すように言った。

女の視線は、教室の隅の暗がりに向けられていた。
暗がりは妙に濃厚で、そして揺らめいていた。
口々に囁きあう声が聞こえる。
任氏が出たぞ。
力が戻っているぞ。
任氏。大陸の女狐よ。
哀れな慰み女が。
しっ。よせ、よせ。
かなわぬぞ。任氏は強いぞ。
引き裂かれるぞ。
――女は、ぎり、と歯噛みした。
「消し飛ばされたいか、雑魚どもめが。ひとつ瞬く間に、わらわの前から早々と消え去るがよいわ」
黒い気配の群れは、返事も無く、ばらばらと散り、消えた。
そして沈黙。
大輝は口を開いた。
「……じんし……？」
「その名は嫌いじゃ。色々と思い出すでな」
「え――」
女は大輝を抱きなおし、また優しげな笑みに戻った。
「いつもに同じく、大輝の付けた名で呼ぶがよい。わらわはあの名が気に入っておる。おぬしの手も、匂いも」
吸い込まれるような赤い瞳。
「……わらわは、人の腕に抱かれるがあれほどに心地よいとは初めて知った。幾千年の年月を生きたが、あれほど優しく抱かれたのは初めてじゃ。食らう前に男を惑わせ、戯れに体を重ねた夜は数あれど、心安らいだことは一度も無かった。それに……」
美しい白銀の髪。束ねているのは――赤いリボン？
「……あの忌まわしき者がわらわの血肉に刻んだ痛みも、おぬしの胸の中でだけは、忘れられる」

女の声が、刹那、悲しみに歪んだ。
大輝は目を見開いた。
「あ――」
分かる。
そうか、この人は。
「……シロ？」
「そう、その名じゃ」
女は表情をゆるめた。
「その名がよい。わらわはしろじゃ」
シロは大輝の手を握る。
やわらかで、温かだった。
「おぬしに助けられた濡れ狐じゃ」
なぜか安心した。
大輝はそのまま、視界の暗転を受け入れた。

第三章【任氏――じんし】

一

子守唄が聞こえる。
静かで、きれいな声が。
大輝には分からない、昔の言葉で綴られる、優しい唄が。
どこかで聞いたことがあるような気がする。
どこで聞いたのだろう。
分からない。
歌声の中で、大輝は幼い頃の思い出に巡り合っていた。
あれは冬だった。
大輝は風邪をひいていた。
小さな体を横たえるベッドの傍らには、母が椅子を置いて座っていた。
咳をして目を覚ますたび、母の優しい顔がそこにはあって、大輝はとても安心した。
母はずっと、大輝の小さな手を握っていてくれた。
温かな手から暖かな何かが伝わって、大輝の体を優しく包んでいるようだった。
そう――包まれていた。
「お母さん」
大輝はまどろみの中、手を握り返して呟く。
闇の中で聞こえてきたのは、やはり優しい声だった。

「目を覚ましたかえ」
「？　――っ！」
大輝はぱっちりと目を開け、跳ね起きる。
夢が霧散し、光が広がる。
目が合った。きょとんとした、赤い眼と。
「何じゃ……いきなり飛び起きて」
「あ――いや、あの」
大輝は狼狽する。狼狽しかできなかった。
体の痛みを感じながら、とにかく問う。
「こ、ここは」
「見て分からんか、おぬしの部屋じゃ」
「え……ああ」
そう。
確かにここは、大輝の部屋である。
だが、長身の白い女――この当たり前の光景には不似合いな存在が、大輝のベッドに腰を掛けて、大輝の手を――
「わ」
思わず、握られていた手を引っ込めた。
女は首をかしげる。
「何を恥ずかしがっておる。おぬしを抱え、ここまで運んだはしろぞ。それに」
細い目を殊更に細め、くすりと女は笑う。
「しろとおぬしは毎夜、この床で共に眠る仲ではないか」
「え――あ、いや」
大輝は、女の体温が残る手をなぜか布団の中に隠し、目を泳がせる。
「っていうか、その……」
恐る恐る、女の顔に視線を合わせる。
首をかしげたまま、うっすらと微笑みながら大輝の言葉を待つ、その顔。
睫毛の長い、穏やかな目。すっと通った鼻すじ。薄桃色の唇。

大輝は呆けた。
「……はあ」
「どうした？」
「いや、その……き」
きれいですね。
そう言いかけて我に返り、ぶんぶんと首を振る。
「いや、な、何でも――」
ずきん、と痛んだ。
「つ――っ！」
「これ、頭を振るでない！」
女の手が大輝の頭に伸び、ふわりと置かれる。
「あまり血は出ておらなんだが、打ったあとがある。しばらくはあまり動かしてはならん。腹のわきも、左の腕もそうじゃ。腫れておるでな、気を付けよ」
女は大輝の頭を愛でるように撫で、すっと腕を引っ込める。
大輝は頷く。
「あ……はい、すみません……」
――じゃなくて。
大輝は思考する。
そう、まず俺はどこで寝たんだっけ。ここじゃないはずだ。
学校にいた。
授業も受けた。
それで帰ろうとして、白鳥先生……先生が……。
大輝は目を見開いた。
「あ――」
思い出した。
あの理科室での悪夢が、全身の痛みと繋がる。
「俺……白鳥先生に……」
「しらとりせんせい？　あの、食み虫に憑かれた人間のことか？」
「……せ……先生は」

「見ておったろう。しろが殺してやった。あれに憑いた虫もな。だから案ずるな、もう怖くはない」
「……殺し……た？」
「どのみち頭の中を食われておったで、あれ自身はもうとっくに駄目じゃったがな。ちゃんと息の根を止めねば食み虫が外へ逃げ出して来ぬから殺したまでよ。全く、悪い虫じゃ。あの者の体を操り、大輝をこんなに痛めつけおって」
「……。そっか……」
死んだんだ、白鳥先生。
大輝は――特に何の感慨も抱けなかった。
何だか現実のような気がしない。まだ悪夢が続いている気がする。
その反面、あれは夢などではなく、紛れも無い現実であったということも、体の痛みが教えていてくれるが、だからといって「なるほどね」と実感できるような出来事でもない。
まどろみのような夢うつつ。ここはその続きだ。
しかし、だからこそ、今なら受け止められることがある。
大輝は女の顔を見つめ、静かに確かめてみた。
「お姉さんは……シロなんですね」
「しろじゃ。しろはしろじゃ」
「……どうして、その……シロ……さんは」
自分でつけた名前にさんを付けるのも妙な話だが、目の前にいるのは、どう見ても大人の女性である。シロ、と呼び捨てにするには抵抗がありすぎる。
「……シロさんは、犬だったのに、どうして人間になっちゃったんですか」
「人でも犬でもない。しろは狐じゃ。犬など大嫌いじゃ。――しろはな、ずっと昔に大陸で生まれた狐よ。あまり長く、どれだけ生きたかは忘れてしもうたが。今から何百年か前にこの国へ来て……色々と……」
色々とあって――とシロは眉をひそめる。

「……そこな山の眠り石に封じられての。運良く強い雷が落ち、その石が真っ二つになったお陰で、こうして外に出ることが出来た。余計なものも色々と逃げたようじゃが」

「狐……って、そんなに長生きなんですか。人に化けたり……」

「狐の中でもしろは別じゃ。人の姿になったり、知恵があるのは、しろだけじゃ。他にもおるかも知れぬが会うたことはない」

女――シロは、ゆっくりと語りながら、母が子供にするように、大輝の膝の布団を丁寧に整える。

「しろは人の肉の味をおぼえ、それを食ろうて生きるうち、だんだんと知恵が身についてきての。いつの間にやら長く生き、いつの間にやら力を持っておった。まあ、ひらたく言えば狐の化生よ」

「……化生」大輝は布団をなおすシロの手をぼんやりと見つめる。

「……人間を食べるんですか」

「うむ」

当然のようにシロは頷き、座りなおす。

「人の肉は美味い。煮ても美味い。焼いても美味い。生でも美味いし、殺すときの悲鳴も怖れる顔も、みじめな命乞いを断ち切る刹那の心地もまた格別よ」

楽しい何かを思い出すようにシロは笑い、そしてゆっくりと真顔に戻る。

「じゃが大輝のことは食わぬと決めておる。初めは得体の知れぬ生意気な小僧と思い、力が戻れば五体を引き裂き、生のまま食らってやろうかなどとも考えておったが、今ではもう、そのようなことは考えておらぬ。しろは大輝が好きじゃ。大好きじゃ」

大輝の膝に、布団の上からしなだれかかる。

「人など皆、食い物と思っておった。よく動く玩具と思っておった。そして……そうでなければ、醜い下衆であるとも知った。――じゃが大輝は違う。大輝はしろの恩人じゃ。親のようなものじゃ。それに――」

シロは、大輝の膝の上で顔を上げる。

白面の頬を紅に染め、澄んだ赤い瞳で大輝を見つめる。
大輝は困惑した。
「え……と」
ぐるぐると思考が回る。
化け狐――で、人食い？
すごく悪くて怖いバケモノじゃないか。
でもきれいな人だ。目は妙に細いけど、そこがまた何とも特徴的で。
こんな美人が、俺のことを大好きって、そんなダイレクトに夢みたいなこと。それもこんなに寄りかかって。ああ、でも人食いなんだ。
しかも殺すときの悲鳴がいいとか何とか、冗談みたいに残酷なことを――マジかよ。人殺しって初めて会ったかも。何人殺したんだろう。きっと大勢殺したんだろうな。しかも食べたんだ。美味しいって言ってるし。白鳥先生のことも殺したって言ってたけど、やっぱりあの後……うわ、考えたくないそれは。
っていうか妖怪？
けっこう年上だよな。女の年ってよく分かんないけど、二十五歳くらいかな。いや、何千年も生きてるんだっけ――ホントに？　大陸って中国？　外国人？　確かにちょっと中国ぽいかも。中国の妖怪ってことか。
妖怪。
めちゃくちゃ背ぇ高いな。バレーの選手みたい。でもやたら手足が細いし、スポーツとか似合わない感じだな。
あ、俺があげたリボン。髪しばってるんだ。気に入ってくれたのかな。
どんどん滅裂になってゆく思考を断ち切ったのは、階下より届いた義姉の声だった。
「たいきーっ、いるんだろー？」
大輝は思わず、げっ、と飛び上がる。
「しゃくネエが帰ってきてる！」
「そういえばさっき下から物音が聞こえておったわ。まあ、大輝が

気を失ってから一刻ほども過ぎておるからの」
「ど、どうしよ……」
何だ、どうして俺は焦ってるんだ。悪い人食いの妖怪と――いや、それは物凄いことだけど関係ない。じゃあ何だ？
ええと――
そうだ！　女の人なんだよ！
こんな、色っぽいオトナの女性と二人っきりで部屋にいるって……こんなことバレたらどうしよう！
大輝はベッドを下り、立って頭を抱える。どうでもいいし当たり前だが、学生服のままだった。
「うわ……やばい……やばすぎる」
「大輝はあの小娘が怖いのか？」
シロはベッドに座ったまま、ふんと鼻を鳴らす。
「成る程な、やはり思うた通りじゃ。あの女は日ごろ大輝を脅しつけておるのじゃな。話し振りから最初は大輝の姉かとも思ったが、どうにも顔かたちが似ておらんし、何より昨日の振る舞いは妙じゃった。大方器量に自信が無く、力ずくで縛っておこうという魂胆じゃろうが……そうはこのしろが許さぬわ」
ざわざわと、頭の上で巨大なポニーテールがざわめく。
「叫ぶ間も無く切り刻み、どこぞの臭い肥溜めにでも放り込んでくれる」
赤い目を鋭く輝かせ、歯をきしませる。唇の端から牙がのぞく。
大輝はぎょっとした。
「――ちょ、ちょっと！　何わけ分んないこと言って……って言うか殺しちゃダメ！　ダメですから！　しゃくネエは俺の義理の姉貴で……じゃなくて、誰だろうと人は殺しちゃダメですよ！」
「大輝は難しいことを言う。誰も殺さねば誰を食うことも出来んではないか。生きたまま丁寧に食ってもゆくゆくは死ぬぞ」
「だからそうじゃなくて、ああもう――とにかく物騒なことはやめてください！」

「あのように粗暴そうな小娘にも情けをかけるか。そうした心の優しさがお前の良いところじゃがな、大輝。これより先、その優しさはしろにだけ向けてくれればよい。大輝が誰か他の者……いや他の女に優しくするのを思うと、しろはなぜだか辛くなるでな。――中でもあの小娘は格別気に食わん。大輝を見る目が気に食わん」

「だめだ、話になってない」

大輝は肩を落とす。

とんとんと階段を上る音がする。続いて石楠花の声。

「おい大輝、いるんだろ？　返事くらいしろよ」

大輝はまた飛び上がる。

「あ……上がってきた！」

「扉を開けたときが小娘の最期じゃ」

「だからダメですって！」

「そんなにだめか」

「ど、どうしたら……、あっ」

大輝はひらめく。

「そうだ！　シロさん、俺のことどうやって運んできてくれました？」

「抱えて飛んできたぞ」

「やっぱり！　何となくそんな気がしたんだ――妖怪って空飛べるんですね？」

「皆ではないがしろは飛べる。この通りじゃ」

シロはベッドから座ったままの姿勢で、ふわっと浮いてみせる。

「造作もないことよ」

「よし、じゃあ窓から！　ちょっと窓から外へってああダメだっ！」

大輝はまた頭を抱えた。

そんなことをしたら、見つけた近所の方々がどう思うか。きっと女が空を飛んでいると思うだろう。その通りだし。いや待て、そもそもここまで運んできたということは、下手したらもう誰かに見られて――

「ああ……っ」
大輝の頭はパンク寸前だった。
こんこん、とドアがノックされる。
「大輝、入るよ？」
「あ――ちょ、ちょっと、あ……」
宙に浮いているシロ。状況の悪さは倍加している。
ドアに向かい、大輝は手をバタバタさせる。
「あ、その、しゃくネエ、あのね！」
「――何だか分からぬが、まだ駄目らしい。仕方ないのう」
背後でシロの不満そうな声。
ドアが開き、石楠花が顔を突っ込んでくる。
「大輝……って、な――何やってるんだい！　誰だよその女の人は！　まだ中学一年生のくせに、そんな大人の女を部屋に連れ込んで、二人っきりで何してるんだ！　口では言えないような、ものっすごくヤラシイことしてたな！　そうなんだろ！　ひどいよ大輝、あたしだって大輝のこと、ちょっといいなって思ってたのに！　義理の弟じゃなかったら告白できるのになあって、ずっと思ってたんだぞ！」
と――それは一瞬で大輝の脳内を駆け巡った、多分に妄想を含んだ予想であり、実際の石楠花の反応は、実に冷静でつまらぬものだった。
「何だい、また一人でぼんやり突っ立って」
「え――」
振り返る。
シロはいなかった。
大輝は間抜けに口を開ける。
「あれ……」
「どうしたんだい」
「あ、いや、何でも……」
「これ」石楠花は数学の参考書を手渡してくる。「今日の朝渡そう

かと思ってたんだけど、忘れてた。あたしが一年の頃使ってたやつ」
「え――あ、ああ」
「それけっこう役に立つから。公式憶えるときに使いな」
「あ……ありがと」
「お前、なんかほっぺたにアザが出来てないかい？」
「あ――その、ちょっと体育で打っただけだよ」
「ふうん。そんじゃ夕食出来たら呼ぶから」
石楠花はそう言って、そっけなく扉を閉めた。
大輝はドアの前に、今度は本当にぼんやりと立ち尽くした。

二

石楠花は義弟の部屋のドアを後ろ手に閉めると、ふうと息をついた。
「ま、意味はないと思うんだけど、一応ね、一応」
自分に言い聞かせるように呟く。
非科学的にも程があるが、何だかこうせずにはいられなかったのだ。
ポケットの中にある、単語帳にしてもそうである。
それにしても、今の大輝は何だかおかしかった。ドアを開けたら妙に焦って――
「あ」
考えて、ふと思い当たる。
弟も年頃だ。部屋で一人のときにする、家族に見られたくないことといえば。
「……そっか」
一人で勝手に赤面する。
食事までに、手、ちゃんと洗えよ。
心中で義弟に語りかけ、石楠花は部屋の前から去った。

三

義姉の心知らず、大輝はきょろきょろと間抜けに部屋を見回していた。

「シロさん……？」

いない。本当についさっきまでいたはずのシロが、忽然と消えてしまった。

「……シロさん……」

いなくなってしまった？

大輝は急に、手に掴みかけた大切なものを、呆気なく失ったような焦りに――包まれる間もなく、ベッドの下から、その白い小さな影は飛び出した。

もとの、昨日までの姿のシロ。

それが、瞬間、激しい銀色の光を発する。

大輝は眩しさにぎゅっと目を閉じる。

「う――？」

数秒たって、そろそろと目を開けると、そこには、ベッドに腰掛けてそっぽを向くシロがいた。

さっきと同様、白い女の姿をしたシロだった。

「……ふん」

シロは大輝と目を合わせず、ふてくされた面持ちで口を尖らせる。

「大輝はしろを隠そうとばかりする。昨日までは獣の姿だからならぬと言い、力が戻って人の姿を作れるようになっても、それはそれでいかぬ様子じゃ。大輝はしろといるのを見られるが、そんなに恥ずかしいか」

「あ――」

大輝はシロの姿を前に暫し硬直したが、我に返って否定する。

「ち……違うよ、そうじゃない……です」

「ではなぜ隠す」

シロは振り返り、ぶすっとした顔で言う。

「しろは今、惨めな気持ちじゃった。大輝がしろのことを、人の目に見せられぬ、みっともない女と思っておるのではないかと、そんな気になった。ならばしろはずっと隠れておる。大輝がそう望むなら、住まうが寝床の下でも文句は言わぬわ。ただ――」

少しずつ、シロの高い声が揺れる。

「……ただ、しろは悲しい。何だか分からぬが心が痛い。しろはかようにも大輝を慕っておるに、大輝はしろを恥ずべきものと考えておる。きっと、いつも優しく撫でてくれたのも、膝に乗せて言葉をかけてくれたのも、しろを可愛いと思ってしていたのではなく、ただ哀れと思っていただけなのじゃ。さっきまでの安らぎも幸せも、何もかもしろの一人よがりだったのじゃ。あの言葉すら……」

声がかすれてゆく。

「そう思うと――そう思うとしろは、何故だか分からぬが、腹が立つより――」

唇を結び、壁を見つめたまま黙ってしまう。

すん、と形のいい鼻が鳴る。

その細い目から一粒の涙がこぼれ落ちる。

シロの言葉は続かなかった。

――大輝は大いに動揺した。

「あ、いや、その」

口ごもる。まさか泣くなんて。

「聞いてください。それは――違いますよ、シロさんはその……何ていうか、俺の目から見ても、ちゃんと素敵な人ですよ。仔犬――じゃなくて仔狐か――とにかくちっちゃい姿の時だって……そりゃ確かに最初は可哀想と思って拾っただけだったけど、すぐ可愛いなって……ホントに。だからそんな、変な風に思い込まないで下さい。――でも、でもですね、その」

「……大輝はしろが好きか」

「え？　あの――」

「答えよ大輝」

シロは大輝の目をまっすぐに見る。
「はっきりと答えておくれ。大輝はしろが好きか」
真剣な、心ごと投げ出してぶつかってくるような、思いつめた眼差し。
揺れる白銀の前髪の奥、涙に濡れた赤い瞳。
気おされるがままに大輝は頷いた。
「は……はい。好きで――、わっ！」
「大輝！」
言い終らぬうち、シロは腰掛けていたベッドから跳ね上がり、大輝に抱きついてきた。
驚いて参考書を落とし、長い腕の中で大輝はもがく。
「ちょ、ちょっとシロさ……、っ？」
身長差のせいで、顔面がもろに、深い胸の谷間に埋もれる。
柔らかすぎる。腕もだ。女の人の体ってこんなに――ああ、なんていい匂いなんだろう。
シロは大輝の頭に頬擦りしながら、甘えるような声で言う。
「しろもじゃ。しろも大輝が大好きじゃ。こんな心持ちは本当に初めてじゃ。もう、どうすればいいか分からぬ……」
「ちょ、ちょっとシロさん、そんな……そんなに密着して体こすりつけたら……っ」
「大輝――ん？」
シロの動きが、大輝を抱きしめたままぴたりと止まる。
「しろの太ももに何か当たっておる」
「あ……こ、これは」
「――。大輝」
シロは腕をほどき、一歩、離れる。
「……大輝はしろの体に情をおぼえたか」
「あ、いや、その」
大輝は両手で股間を隠す。
言い分けも出来ないし、こんなみじめな姿はない。赤面すらできな

い。
「これは……ですね」
「大輝は――」
シロは大輝を見下ろし、無表情で静かに、しかしとんでもないことを問うてきた。
「大輝は、しろの身を遊び物にしたいと思うたか？」
「んなっ？」
大輝は目を丸くして、ぶざまな前屈みで否定する。
「な――ちょ、唐突に何言い出すんですか！　ち、違います、断じて！」
思わずつばが飛んだ。
大輝は無意味に手をわなわなとさせ、思いつく限りの言葉を並べ立てた。
「そりゃ何というか邪なことを感じないでもなかったですけど、それは俺にも俺なりに本能というものがあるからで、つまりいわゆる自然な反応というやつで――女性を遊び物にするとかそんな、最低なことにまで考えを及ぼすようなことは断じてですね！」
「……。そうか」
狼狽をきわめる大輝の顔を見つめ、安心したようにシロは微笑む。
「大輝はそうじゃな。そうした子じゃな。やはり……しろの思うた通りじゃ」
するりと、着物の肩をはだける。
「なあ大輝、おぬしならば良い。おぬしにならば、しろは身を委ねようぞ。いや――」
「え……？」
「委ねたい。抱いておくれ、大輝。この身を――そなたの優しき腕のうちで清めておくれ」
再び腕が伸びてくる。
大輝は腰を抜かした。
情けなくも、文字通りに。

「……はい？」
すこんと下半身の力が抜け、その場に尻餅をつく。
「シロさん――？」
話が飛びすぎだ。
抱くって、いつもみたく抱っこするって意味じゃないよな。服脱ぎかけてるし。
冗談か？　いや、マジなのか。マジだよな。こういうのって、こんなに急なものなのか？　いや、そういう問題じゃなくて。
シロは追いすがるように、座り込んだ大輝の上に覆いかぶさってくる。
二人は再び密着した。さっきと同じように。今度は、互いに床に寝ているというだけだ。
「……大輝は……まだ女を抱いたことはないか」
「え――？　は、はい」
何普通に答えてるんだ。うわ――あったかい。重みが気持ちいい。
「ちゅ、中一……ですし」
「そうか――」シロは笑む。「ならば全てしろに任せよ。……しろもこのような高ぶりは初めてのことゆえ、いざ始まれば、どうなってしまうかは分からぬが――」
耳元で囁く切なげな声。
胸の鼓動が伝わってくる。
どきどきと激しい鼓動。
言葉どおり、シロの胸も激しく脈打っている。
首筋に何かがあたり、動転した大輝は女々しい声を上げる。
「う……っ……」
舌――？　熱い舌先が――
その時、重なった二人の傍らで、ぱちんと何かが弾けた。
突如として紫の閃光が生まれ、シロは悲鳴を上げて吹っ飛ぶ。
「んっ――ああっ！」
「え……？」

大輝は我に返って目を見開く。
　シロは勉強机の本棚にもたれ、長い両脚を投げ出して、腕をおさえていた。
しゅうしゅうと、その腕から煙が上がっている。
「馬鹿な……これは……石字文句の符呪？　なぜこのような！」
「し、シロさ――」
大輝は立ち上がり、駆け寄ろうとした。
　シロはそれを制する。
「寄るな！　危ない！」
「え――」
「これは、この術はしろの妖気に、――うああっ！」
ばりばりと、紫色をした、雷のような閃光がシロを襲う。
その閃光は、床の上に落ちた参考書から発せられていた。
「何だ……？」
大輝は何することも出来ず、苦しむシロを前におたつく。
「し、シロさん、シロさん！」
「うあ、あ、ああ――っ！」
叫びと共に衣が裂けてゆく。生白い体があらわになり、そして。
　白銀の毛が、その肌を覆い始める。
めきめきと音を立て、シロの顔が変わってゆく。
鼻が伸び、口が裂け、目が切れ上がり――狐。狐の顔に。
「うあ――はあッ！」
のたうつ長い尾。獣の尾だ。
　大輝は息を呑んだ。
「し……シロさ……」
化け狐。
やはり本当だったのだ。
　大輝は口を開けてそれを見下ろしていたが――きゅっと下唇を噛み、苦しむシロに駆け寄った。
「シロさん、しっかりして！」

「あ――ば――馬鹿者、触れるでない！　巻き込まれる！」
「でも！」
ばん、と扉が開いた。
「何だい今の声は！」
石楠花が飛び込んできた。
そして後ずさる。
「……え……？」
参考書から発せられる紫の稲妻。
それを受けてもがく銀の獣。
突然目の当たりにしたこの世の外の光景に、石楠花は絶句していた。
「――何だ――これ――」
「う……ぐ……」
シロは身をよじりながら、憎々しげに唸る。
「白々しい……この……文句を仕掛けたは、うぬであろうが……っ！」赤い瞳が爛々と輝く。「しゃ……石字縛師の末裔とは……とんだ小娘じゃ……」
「あ、あんた、バケモノ？　本物の？　石字縛師って、まさか――ま、まさか、お爺ちゃんが言ってたのって、全部、本当のことだったのか？」
石楠花は膝を震わせながら言う。
ばちばちと紫の光。壁が、天井が、紫に染まる。
シロは牙を鳴らす。
「我ながら、よもや二度の油断を許すとは……あの石落の血族よ……この……この手で、その首を……うあ、ああっ！」
シロの体が跳ね上がる。
毛皮の端々が破れ、血が散った。
大輝は動転し、視線を部屋中にはしらせる。
「く、くそっ。どうすりゃ」
床。そうだ。

「参考書！」
大輝は参考書に駆け寄り、稲妻が途切れた一瞬を狙って、部屋の外に思い切り蹴り飛ばす。
――沈黙。
稲妻は止んだ。
「止まった――」
大輝は廊下に出て、恐る恐る、参考書を拾い上げる。
ばさりと本の部分が落ち、手にはカバーが残った。
「……何だこれ……？」
カバーの裏には、意味不明な漢字の羅列があった。
とにかく、これがいけないのだろう。
大輝はカバーを破いて床に捨てる。
そして再び、部屋の中へ。
立ち尽くす義姉と、床に横たわる、人のような体かたちをした白い獣の姿があった。
大輝はシロに歩み寄り、傍らに膝をついてその肩を揺する。
「シロさん……シロさん？」
「……大輝」
「大丈夫ですか？　あ――」
赤。白銀の毛皮に、鮮やかな赤が滲んでいる。
「シロさん……血……こんなに……」
「……いやな姿を見せてしもうたのう……」
シロは大輝の顔から目をそらす。
ドア際の石楠花が口を開く。
「あんた――何？　化け物――だよね。ここで――大輝の部屋で何して――」
「わらわは、し……いや」
むっくりと体を起こし、鋭い爪のある手で胸を押さえつつ、シロは答える。
狐の顔に、大輝には決して向けなかった、邪悪な笑みを浮かべなが

ら。

「わらわは任氏。遥か昔、大陸にて変化した狐の化生よ。数多の男を、女を、赤子を殺し、そして食らい、引き千切り……憎らしい貴様の先祖に忘れえぬ仕打ちを受けた妖怪じゃ」

「な――」

「石字を継ぐ忌まわしき者よ。来やれ。わらわが相手に……、っ」

どさ、と倒れる。

「ぐっ……う」

「シロさん！」

大輝はシロの傷ついた体を起こし、その肩を抱く。

――石楠花は、制服のポケットから単語帳を取り出した。

「ひ……人食いの妖怪……？　冗談みたいだけど、冗談じゃないよ。えっと……あれ、どこだっけ……」

ぱらぱらとそれをめくり、うち一枚を切り離し、シロに向ける。

「あ、あった――これ！　これもお爺ちゃんが教えてくれた呪文のおふだ！　一番強いやつって――た、確かこれだよな」

「……石裂符か。そんなものまで持っておるとはな。確かにそれならば、わらわの体も滅びよう」

シロは捨て鉢に笑う。

「投げろ。……そして殺せ。ただし大輝がこの部屋から出てからじゃ。巻き込むわけにはいかぬし、それに――大輝に、我が身が醜く裂けゆくさまを見られるのはとても耐えられぬ。このまま腕の中で死ぬことが出来ぬのは……本懐ではないが……」

静かに言う。

「最期に大輝が案じてくれた。衣にわらわの血が染みるも厭わず、この体を抱き上げてくれた。それだけでわらわは満足じゃ」

「何言ってるんだい、ば、化け物のくせして！」

石楠花はけたたましく言い放つ。

「大輝のことだって、殺して食べるつもりだったんだろ！」

「会った初めはその心積もりも無いではなかったな」

「くっ――」
石楠花は、札を振りかぶる。
「大輝っ！　離れてなっ！」
「ど、どうするんだよ」
「やっつけるんだよ！　決まってるじゃないか！」
「だ――」
大輝は怒鳴るように言う。
「駄目だ、そんなのっ！　なんかよく分かんないけどそれはダメだ！」
「バカ、大輝、何言ってるんだい！」
「かわいそうじゃないか！」
「人間を殺して食べるようなやつが可哀想なもんか！」
「心があるんだぞ！」
「だからって――このまま生かしておいたら、どうせまた人を食べるつもりなんだ！　そうだろ！」
石楠花はシロを突き刺すように問う。
シロは低く答える。
「……そうじゃ」
「っ――」
石楠花は嫌悪に満ちた目でシロを睨む。
「――ほら見ろ！　やっつけないと……こいつが食べるのは、お義父さんかもしれない！　歩美かもしれない！　大輝の友達かもしれない！　それに――大輝かもしれないんだ！」
「……馬鹿め。今や大輝を食うものか……わらわは大輝を好いておる」
「まだそんなことっ！」
「しゃくネエ！　シロさんもっ！」
大輝は叫ぶ。
「やめてくれよ！　しゃくネエがなんでこんなこと出来るのか分かんないけど、こうやって、喋って意思を伝え合える相手を殺して、

しゃくネエは平気なのかよ！　それじゃ人殺しと変わらないじゃないか！」

「大輝、でも」

「シロさんも――昔何があったのか知らないけど！　そんな簡単に殺せとか、殺すとかいう話、おかしいだろ！　そうだよ……そんなの、おかしいじゃないか……っ」

大輝はシロの肩を強く抱く。

語る声が震えた。

「だろ？　……変だよ……そんなのさ……。だってシロさん、俺と話してるとき、今みたいに怖くなかったよ。姿かたちのことじゃなくて……優しかったじゃないかよ。怪我した俺のこと心配してくれて……痛いとか辛いとか、分かるんだろ……？　人間食べてたのだって、俺と会うずっと前の、ずっと昔のことなんだろ？」

「――大輝」

「多分さ……分かるよ。シロさんにも……なんで人を殺して命奪ったりするのが、ダメなことなのか……シロさんなら分かるよ。だからそれまで約束してくれよ。人間を食べない――もう、殺したりしないって」

「約束――？」

「ああ。そうだよ。そしたらしゃくネエも」

顔を上げ、呆然とする義姉を見る。

「シロさんをそんな簡単に殺すとか言うなよ。シロさんがもう人を殺さなければ、シロさんを殺す理由だってなくなるんだから。第一……しゃくネエだって、嫌だろ。俺、しゃくネエのこと分かってるつもりだよ。こんな、わけも分からないままシロさんのこと殺したら、しゃくネエは絶対後悔する。……そうならないためにも、しゃくネエも約束してくれよ。いいだろ」

「大輝……」

「いいだろっ？」

「そ――れは」

石楠花は目を泳がせ、くしゃりと札を握る。
「まあ――うん……」
「シロさんは？」
大輝は続けてシロを見る。
シロは狐の顔をきょとんとさせたが、一呼吸してから、ため息のように答えた。
「……よう分からぬが、大輝がそのように言うのならばそのようにする。人の食い物や、どっぐふぅどで我慢するわ。あれもなかなか美味いでな」
そこでふと考えるように天井を見て、付け加える。
「特に赤い紙の貼られたものが良い。しろはあれが好きじゃ」
「ビーフ缶ね――分かった。買いだめしとく」
「……ドッグフード？」
札を握った手を下ろし、怪訝な顔の石楠花に、大輝は疲れ顔で笑う。
「ま、色々あってさ」
石楠花は、暫し呆然としていたが、やがて思い出したように悲鳴を上げた。
「あ――うわわわっ！」
「どうしたんだよしゃくネエ？」
「き、狐！　こいつ狐じゃないか！」
「え？　……あ」
大輝も悲鳴の意味に気付いた。
石楠花は、その場でくらりと揺れ、卒倒した。
大輝はため息を一つ。
「石字縛師か……しゃくネエにも色々と聞くことが出来ちゃったな」
義姉の手から単語帳の一ページを引き抜き、ぴっと破る。
窓の外では、とっくに月が輝いていた。

四

同じ頃。

浅黒い肌の、禿頭の男であった。特に僧侶というわけでもなければ、七十という歳のせいで禿げているわけでもない。これが楽だからしているだけである。

寝間着の上に半纏を羽織り、一人、広い夜の庭を歩く。

風が抜けた。

ざわりと鳴った柿の木の下で歩みを止め、男は唸る。

「――む」

太い片眉が上がる。

「何かありやがったな」

男は懐より一枚の竹札を取り出し、握って目を閉じる。

握った手を伝い、札は老人に、禍々しい何かを知らせる。

眠り石に異変があった――か？

あれは、県を二つほど跨いだ遠く、今は孫娘の住む町にある。

石楠花。

しかし、気配がここまで届くとは。

「……とんでもねぇのが目を覚ましたらしいなぁ」

石楠花たちが関わっていなければ良いが。

それに――眠り石がもし壊れたとなると、心配なのは妖怪のことだけではない。

老人は唸り、月を見上げた。

五

居間。

「と、まあ、そういうわけだよ」

一通り語り終えた石楠花の目じりは、ひくひくと痙攣している。

大輝は特に驚きもしなかった。

「なるほどね……」

今さら義姉の家系が呪い師でした、と聞いたところで、飼い犬が

女の人に変わってしまったインパクトに比べれば、どうということはない。もう、何でもどんと来いである。
それに、現実、義姉の書いた符が力を発したのも目の当たりにした後だ。語った内容は疑うべくもあるまい。
石楠花は付け加える。
「まあ、あたしだって、さっきまで信じてもいなかったけどね。今まで化け物になんか会ったことないから、使う機会もなかったし」
「あの――亡くなった石乃さんも、そうだったの？」
「お母さんもそうだったらしいけど、お爺ちゃんから色々習ったのはあたしだけだよ」
「大輝、ほれ、髪に糸くずがついておるぞ」
「あ……ど、どうも」
「お爺ちゃんは、あまり昔のことを話さない人だけど――話し振りからして、使ったことがあったみたいだね。でも今はそういう……妖怪とか、滅ってるらしいから」
「のう大輝、この小娘の衣は、しろには窮屈じゃ。特に胸の辺りが苦しいわい。しろは大輝の衣がよい」
「いや、俺の服のほうがもっときついですから」
「仕方ないのう」
そこで石楠花はテーブルを叩いた。
「さっきから、そこ！　そこの白女！」
「何じゃ」
シロは指さされ、ぎろりと睨みを返す。
石楠花は半ば立ち上がってまくし立てる。
「何じゃ、じゃないよ！　さっきから話の邪魔ばっかり！　それと大輝から離れろ！」
「余計なお世話じゃ」
シロは大輝の腕に腕をからめ、余計にしなだれかかって口を尖らせる。
「邪魔は貴様の方じゃ。貴様らの腐れた血族の話など、みみずの糞

よりどうでもよい。しろは大輝と二人きりがよいわ」
テーブルを挟んだ二つのソファー。
片方には、肩を怒らせた石楠花。
向かい側には、大輝と、それにべたべたと寄りかかるシロが座っていた。
シロはもとの――というか何というか、背の高い女の姿に戻っていた。この姿になったとき石楠花が改めて仰天したのは言うまでもない。
石楠花は再度テーブルを叩く。
「ミミズの糞って、あんたなあ！」
「きゃんきゃんと騒ぐでない。心無き誰ぞにやられた傷に響くわ」
「もうほとんど治ってるじゃないか！　このバケモン！」
「聞いたか大輝。大輝の義姉は、しろを化け物としか呼ばぬ。しろをしろとして愛してくれるのは、やはり大輝だけじゃ。のう大輝？」
シロは甘えた声で言いながら、見せつけるように大輝にじゃれる。
今、シロは破れた着物のかわりに、石楠花のパジャマを無理やり身に付けていた。
脚が長いために、おさまりきらない向うずねが見え、ふくよかな胸のあたりは、ボタンが弾け飛びそうなばかりに張りつめている。
大輝は生々しいその姿から必死に目をそらす。
「いや、まあ……その」
それでも体温は理性を超えて伝わってくるし、甘ったるい香りはいやでも鼻腔をくすぐる。
石楠花が吼えた。
「だからくっ付くな！　あたしの大輝――じゃなかった、義弟を惑わすなっていうんだよ、この妖怪！」
「惑わしておるなどと人聞きの悪い。妖怪でもしろはちゃんと大輝が好きじゃ。心底好いておる」
「あんたが勝手に好きなだけだろ、何千歳も離れてるくせに！　見た目だって倍くらい離れてるぞ！　犯罪だ犯罪！」

「ふん、愚か者め」
シロはにやりと笑う。
「大輝はそのようなことを気にするほど小さな男ではない。さっき、しろを好きと言うてくれたわ。しろは身が溶ける思いじゃった」
「な……大輝っ？」
「あ、いやその」
大輝は目を泳がせる。
「それは――何というか」
「それにしろは大輝の嫁ぞ。嫁が夫を慕い、身に触れたとて、一体何の悪いことがある」
「ええ？」
「ええ？」
大輝と石楠花は同時に目を丸くした。
シロは自慢げに言う。
「ほかならぬ大輝がしろに言うたのじゃ。嫁に来ぬかとの。しろは大輝が好きじゃから断らぬ。しろは大輝の嫁になり、添い遂げる所存じゃ」
「え――え？」
大輝は記憶をたどり、あらゆる自分の発言を検索する。
さっき。言ってない。
学校。言ってない。言ってない。
「え――と？」
出合った頃。出合った頃は……シロは仔狐だった。
仔狐の頃――
「……あ」
思い当たる。
――俺と結婚するか？　ん？
大輝はうつむく。
「もしかして……言ったかも……」
「た、大輝、あんたっ？」

「あ！　いや、それはでもシロさんがこんなアレだって知るわけもなかったから！」
「ほうれ見よ」
シロは勝ち誇った目で石楠花を見る。
「しろと大輝の仲が分かったか、小便くさい小娘め。分かれば横恋慕で二人の仲にちゃちゃを入れるでない。しっ、しっ」
「な――あ、あ」
石楠花はみるみる顔を真っ赤にする。
「だ、だ、誰が、よ……横恋慕……」
「顔に書いてあるわ。しろを化け物のくせにと罵るはよいが、自分は姉のくせに大輝の身を狙うておるではないか。ようまあ人のことをとやかく」
「うるさい！　別に血が繋がってるわけじゃないんだ！」
「ほう、開き直ったか」
「え……あ、れ？」
石楠花は不自然な半笑いで硬直する。
「あれ……あ、あたし今……え？」
大輝も呆然とする。
「――しゃくネエ？」
横でころころとシロは笑う。
「どうあれ大輝はしろの夫じゃ。よろしく頼むぞ義姉上よ」
「ふ……ふざけんなあっ！」
もはや石楠花は半泣きであった。
結局その晩、疲れきった姉弟の夕餉は、レトルトカレーとレンジ調理の白米。それと同じ席でシロがお気に入りのドッグフードをスプーンですくって食べるという、さもしくも異様な晩餐となった。
食事の後、シロは大輝と一緒に風呂へ入ろうとしたり、いつもの如く大輝と同じベッドで寝ようとしたのだが、石楠花の金切り声と羽交い絞めで阻止された。
シロ曰く、「器量無しの嫉妬深さは昔も今も変わらぬものじゃ」。

ともかくシロの寝床は居間のソファーという形で落ち着いた。

かくして――まだ心の熟さぬ中学一年生と、道ならぬ恋に気づき始めた中学三年生と、遅すぎる初恋に目覚めた化け物との、いつまで続くかも知れぬ同居生活は幕を開けたのである。

第四章【下腕――さがりかいな――】

一

午前二時。

営業が終わり、遠慮無く明かりの点き続ける無人の館内は、上映中よりもなお広く感じられ、それでいて、密室としての圧迫感をじんわりと充満させている。

こうして見るとさほど大きくもないスクリーンに向かい、緩やかに下ってゆく傾斜。通路だけを避け、そこに満遍なく並ぶ、座り心地の良い椅子の海。

ポップコーンの残り香。

高い天井。

今、そこに上原孝太は一人だった。

大学生の彼が木、土とアルバイトをしている、ここ「シネボックス」は、四階建てで計６ボックスからなる、比較的大きな映画上映施設だった。

一階は受付とグッズ販売エリア。二階から四階までは、２ボックスずつがそれぞれ同じ間取りですっぽりと収まっている。ボックス、というのはシネボックス特有の言い方だが、要するに上映スペースのことである。

掃除はもう、他のスタッフたちの手によって済んでいる。

あとは孝太がＤボックスとＥボックスを見回って、今日の仕事は終了だった。

孝太は、Ｄボックスに並ぶ席の間を縫うように歩き回り、入り口に戻る。

「――異常なし」

この確認文句も含め、全てマニュアル通りの行動である。

もっとも、こんなに真面目に点検などせずとも、問題となる異常など、ほとんどあったためしが無い。時々酔った客が寝ていることもあるらしいが、それも大抵は掃除をする係の者が見つけてしまう。だから最後の確認作業は儀礼的なものであった。時間がないときは省略してしまうこともある。

孝太はDブロックの扉に施錠し、Eブロックへ向かう。

質のいいカーペットの上を歩きながら、部屋で待っているであろう、同い年の恋人のことを考える。

よく夜更かしをする彼女のことだ。今頃も、孝太のゲーム機を勝手に起動させ、最近熱を上げている格闘ゲームに興じていることだろう。

きっと孝太も帰るなり相手をさせられるに違いない。

「あたし昨日より強くなったから。ほんとほんと」――などと言われ、強引に。

それがここ数日のパターンだ。

そういえば、同棲を始めたこの頃では、二人でいることが当たり前になってしまい、あまり出かけることが無くなった。せいぜい、国道沿いのアミューズメント・パークまでバイクを飛ばし、千円札を何枚か崩して遊ぶ程度だ。

あと幾日かすれば、ここの給料が振り込まれる。そうしたら……いや、今日帰ったら、久しぶりに、遠くへ遊びに行く計画でも持ちかけてみよう。適当に携帯で検索でもかけながら。

孝太は静かにそう決めて、Eボックスの扉を押し開けた。

明かりが点いているはずのその空間には、染み出しそうに濃厚な闇が充満していた。

「あれ……？」

無音。

電気系統の異常だろうか。

一歩、生ぬるい闇の中へ踏み込む。
眼前にだらりと一本の腕が下がった。
白く生々しい、誰かの腕。
孝太は声を上げられなかった。もう一つの手が彼の口を塞いでいた。
身動きも取れない。いくつかの手が彼の制服のあちこちを掴んでいた。
手。手。手。
扉が閉まった。
――結論を言えば、彼は、恋人のいる部屋に帰ることは出来なかった。
彼女や、新潟に住む孝太の家族の元に届いたのは、孝太が持ち物を全て残したまま、姿を消したという報せだけだった。

二

日曜の朝。
遅く起きた大輝は、寝すぎたせいか中々おぼつかない足で部屋を出て、廊下の突き当たりにあるトイレのドアを開けた。
シロと目が合う。
「――あれ？」
「ん……おお、起きたか大輝」
「あ――お早うござい、――じゃなくてっ！」
大輝は自主的に吹っ飛んで尻餅をつく。
「な、ななな、な」
「待っておれ、今小用が終わったところじゃ」
シロはからからと、使い方を覚えたばかりのトイレットペーパーを巻き取り、千切ったそれを白い腿の谷間に――
大輝は床に這いつくばったまま、百八十度目をそらす。
「ちょ、ちょっ、ちょおおっ！」意味不明な叫び。「な、なんで鍵

かけないんですかっ！」
「忘れておった」
ざあああ、と水の流れる音が聞こえる。
続いて大輝の顔の横から、綺麗な白面が、後ろからにゅっと突き出した。探るような危ない笑みで。
「大輝。今、しろの用足ししているところを見たか？」
「み、見てません！」色々と見えそうだったが。「――っていうか、ごめんなさい！　俺がノック……ノックしなかったのも、いけなかったですよね！　すみません！」
シロは座り込んだ大輝の横に両膝をつき、肩にしなだれる。シロは今、大輝が小遣いで買ってきた黒いTシャツと、安いジーンズパンツを身に付けていた。
「しろは気にしておらぬゆえ、そのように謝ることはない。しろは大輝に嫁いだ身ぞ。それはまあ、恥ずかしくないと言えば嘘になるがの、例えばの話、大輝が望むならば、しろはどのような姿も見せる所存でおる。今のような姿でも、ちゃんと様子の見えるよう……」
「んな――何言って」
朝から耳元で、十八歳未満お断りレベルにマニアックでディープなことを。
大輝は思わず余計な想像をして、未熟な頭を一秒でパンクさせた。
「……あ、立ちくらみ」
石楠花が階段を上がってきた。
「大輝、朝ごはん出来――って、こらあ！　朝っぱらから何ベタベタしてるんだよ！」
だだだ、とフライパン返し片手に突っ込んできて、直前で急ブレーキをかけ、シロに詰め寄る。
「大輝を誘惑するなって言ってるだろ、この淫乱妖怪！」
「ふん」
シロは目を吊り上げて立ち上がる。
「いちいち馬鹿丸出しで騒ぐでない。騒々しうて耳が痛いわ」

「誰がバカだ！」
「お前じゃ」
「うるさいっ！　毎日朝晩と大輝に付きまとって――昨日なんて、夜のうちにベッドに潜り込んだだろ！」
「しろに先を越されたからといって怒るでないわ」
「だ……誰が、このっ！」
石楠花はフライパン返しを振りかぶる。
大輝は慌てて立ち上がる。
「や、やめてくれしゃくネエ！」
「止めるな大輝！」
「――ん？　何か鳴っておる」
シロがぴくりと耳を動かす。
大輝と石楠花は、ぴたりと止まった。
確かに、ピンポン、ピンポン、と、階下で何かが鳴っている。
大輝は硬直して考える。
「……インターホン？　あ――そうか」
大輝と石楠花は顔を見合わせる。
「親父の出張って昨日で終わりだよね」
「お義父さん、帰ってきたんだ」
そして二人は、同時にシロを見る。
シロはぱちくりと赤い眼を瞬かせる。
「……何じゃ」
「ど――」
「どうしよう」
大輝と石楠花はまた顔を見合わせた。
何にせよ、このまま無視するわけにもいくまい。三人は何の策も無いまま、揃って階段を下りてゆく。
ただ、せめて出来るだけゆっくりと下りながらの緊急会議である。
「どう説明するんだよ、このバカ女のこと」
「どうってそりゃ事実を話すしか」

「その事実が問題なんだろ！」
「何の問題があるか。しろがちゃと嫁として挨拶をすれば済むことであろうに」
「あんたは黙って……迂闊にフワフワ浮かぶんじゃない！」
「五月蝿いのう」
「おい、誰だ？　その女性は」
「え」
大輝は階段を下りきったところで立ち止まる。
スーツケースと紙袋を持った背広姿の父が、玄関に立っていた。
石楠花も立ち止まって仰け反る。
「お、お義父さん？」
「鍵を忘れたと思ったが、ポケットに入ってたもんでな。自分で開けて入ったよ」
いつもの眠たそうな口調で言いながら、重たそうな荷物を足元に置き、少し白髪の混じり始めた髪をかき上げる。顔も慢性的に眠気を帯びた人である。
「で、そのノッポの女の人はどちらさんだ？　何だか床と足の裏が離れているような気がするが」
「いや、あの、これは――この人はね、親父」
「わらわはしろじゃ」
シロは大輝のしどろもどろを置いてけぼりに、すとんと床に降り立ち言った。
「こ度、そなたのご子息と夫婦の契りを結んだ狐の化生じゃ。義父上よ、以後宜しくお願い申す」
「……ふむ？」
父は、ちょっとシロの顔を眺めてから、頷いた。
「シロさんか。ま、居間で話でもしようか」
「それがよいかの」
父とシロは、すたすたと居間のほうへ行ってしまった。
大輝は呆然と二人の後ろ姿を見送る。

「ああ……そっか」肩を落とす。「親父ってああいう人だった」
「取り合えず何でも受け止めてから考えるんだよね、お義父さん」
石楠花も父の人格を思い出したらしく、ぎこちなく笑う。無論楽しがっているわけではない。
「しかし四十にして、ここまでのレベルにまで達してたなんて……今、あの女、宙に浮いてたのに」
「そういうこともあるんだろ、って思ったんだよ、きっと」
そういうこともあるんだろ。
父の必殺技である。何でもそれで片付けるのだ。
道を究めた武術家か、そうでなければ禅僧のような達観。一介の会社員である父が、なぜそれを持って生きているのか、息子の大輝にすら分からない。
呆れているところで、居間から父の声がした。
「二人とも、いつまで玄関にいるんだ。お前たちもこっちへ来なさい」
間が抜けているようにすら聞こえる、落ち着き払った声。
二人は大人しくそれに従った。
そして数分後。
焼き鮭と目玉焼き、それと味付け海苔をおかずに、大輝と石楠花は茶碗の白米を黙々と口に運んでいた。
テレビに近い方のテーブルでは、父とシロが面接のように向かい合って、互いに落ち着いた様子で話している。
「シロさんはおいくつかね。見たところ大輝とは年が離れているようだが」
「何千年生きたかは忘れてしもうたが、この島国へ来たのは唐の頃じゃ」
「またえらく長生きだね」
「妖怪じゃからの」
「そういえばさっき浮いていたね。――で、お仕事は何を？」
「大輝の嫁じゃ」

「ふむ。その前は？」
「適当に人を攫い、殺しては食っておった」
「よくないねえ」
「らしいのう。大輝もよくないと言っておった。だからもうやめにした」
「そうかい、それはいいことだ」
「しろには何がいかんのか、まだ分からぬがの」
「追々分かるさ。それにしても背が高いが、何センチあるのかね」
「石楠花が計ったところ百八十二せんちだそうじゃ」
「大きいな。私も別段背の低い方ではないが、それでも十センチの差があるよ」
「うむ、そのことなのじゃが、大輝は背丈のある女は嫌いじゃろうか。大輝は小柄じゃから、もしかしてしろの大きいのが嫌かも知れぬ。しろはちょっと気にしておる」
「本人に訊いてみればいいんじゃないかね」
「何となく聞きづらくてのう」
「そうか。――大輝」
不意に父は大輝のほうを向く。
「お前、背の高い女性はいやか？」
「え」
突然話を振られ、大輝は茶碗を片手に止まる。
「いや……別に」
「ふむ」父は顔を戻す。「だ、そうだよ」
「よかった。心中ずっと気にしておったのじゃ」
シロは文字通りに胸をなでおろす。
父は腕を組む。
「シロさんは、大輝のような子供の、どこがそんなに気に入ったのかね。見たところあなたは男性に不自由するような顔立ちじゃないが」
「大輝は心根の優しい子じゃ。そこがしろは大好きじゃ」

「まあ、それくらいがあの子の取り柄だからなあ。結婚の話は本気かい」
「本気じゃ。しろは、大輝の前では嘘というものを言わぬ」
「嘘が嫌いかね」
「嫌いではない。元来しろは嘘つきじゃ。しろの顔かたちに一目で惚れた男や、しろが攫った赤子可愛さに我を失った親どもなどは、尽くしろの嘘に引っかかり、面白く踊った挙句にこの腹を満たしてくれた。嘘は便利で良いものじゃ。しかし大輝の前に限っては、しろは一つも嘘をつくわけにはいかぬ」
「なぜかね」
「常日頃より嘘をついていては、信じてもらわねばならぬ言葉も疑われてしまう。しろは、大輝が好きじゃ。その言葉を大輝に疑われてはかなわぬ。だからもう嘘をつかぬ」
「なるほど」
父は大きく頷いた。
「なかなか健気でいい娘さんじゃないか。父親の私より年上だというのも妙な話だが、大輝のことを任せてもいいかも知れんな」
「ちょっ――ちょっとお義父さんっ？」
石楠花が目をむいた。
「ちゃんと話聞いてたのかい？　明らかに変だろ、そいつの常識と価値観は！　妖怪丸出しじゃないか！」
「妖怪と人間だってうまくいくこともあるさ。最近は国際結婚も盛んだしな」
「とんちんかんなこと言わないでくれよ！」
石楠花は口から米粒を飛ばす。
シロが言いつけるように口を挟む。
「義父上よ、石楠花のやつも大輝に惚れておるのじゃ。ああして横恋慕でしろの邪魔ばかりしおる」
「何だ、そうなのか石楠花」
「な！　そ――それは、その」

石楠花は赤面して言いよどむ。
横で大輝も顔を赤くした。
さすがに大輝も、もう義姉の気持ちには気付いている。なにせ石楠花ときたらここ数日、義理の姉という立場をギリギリで守っているようでありながら、実際にはほとんど開き直って、シロと真っ向から大輝を取り合っているのだ。
しかし、だからといってどうすればいいかも分からない。石楠花は確かに、大輝にとっては慕ってやまない素敵な義姉だが、いざその想いが自分に向けられているとなると、どうしていいのか見当もつかない。ひょっとしたらこれは、シロのこと以上に、扱いに困る事柄かもしれない。そのことについてはあまり考えないようにしているくらいだ。
「ふうむ」父は眉間にしわを寄せる。「そうか……困ったな。まあ、そういえば大輝と石楠花には血縁がないし、仕方のないことか。人の気持ちというのは、立場などで抑えられるものじゃない。さて、どうする大輝」
「え、ええっ？」
大輝は思わず声を裏返す。
「どうするったって、そんな……俺、まだ中一だし、そんなの……」
「ん。それもそうか」
父は胸の前の腕を組みなおす。
「ふうむ――ちょっと参ったが、まあ、なるようになるだろう。取り合えず、お土産の饅頭があるから、みんなで分けようか」
父はそう言うと立ち上がり、すたすたと居間を出て行った。
脱力した大輝と石楠花。
それを気にもせず、シロは微笑んだ。
「饅頭か。義父上も気が利くのう。さすがは大輝の父じゃ」
そんな調子で、出張先のご当地饅頭と暖かな茶が人数分並んだテーブルを囲み、こういう状況になるまでの経緯などを色々と話しているうちに、午前中は過ぎていった。

石楠花の家系については父も初耳だったようで、少し意外そうに聞いていたが、それでも常人の反応よりは遥かに落ち着いたものだった。

「なるほどねえ」

父は三杯目の茶をすすり、ゆっくりと頷く。

「まあ、何にせよ、シロさんは他に行くところもないだろう。うちにいるといいさ」

「話の分かる義父上じゃ」

微笑んだシロは饅頭をひと齧りする。そうした細かな仕草には、やはり何千年も生きてきただけあって、大人を超えた雰囲気がある。

もはや突っ込み疲れた石楠花は、ソファーの隅でいじけるように背を丸めていた。

「……もう好きにすれば？」

「こら石楠花、大輝を取られたくない気持ちは分かるが、それはまた別の問題であってだな」

「だからそんなんじゃないってば！」

「ああ、すまん。――とにかく、必要以上にシロさんを邪険にするのはやめなさい。まだこの時代にも慣れていないようだし、他に頼れる知り合いもいないというじゃないか。私たちが受け入れてあげなくてどうするんだい」

「そうじゃそうじゃ。意地悪ばかりするでない」

「だからあたしはあんたのそういうところが！」

「しゃ、しゃくネエ落ち着いて……」

大輝はいきり立つ石楠花をなだめつつ、父に確認する。

「親父、本当にいいの？」

「ああ。そうすることが、そ――」

父はそこで何か言いかけて、やめた。

「……とにかく、私はこのままで問題ないと思う。シロさんは年の功で色々と料理なんかも出来るということだし、家事を分担すれば、石楠花の負担も減ることだろう。なあ石楠花」

「ん、まあ、ね」
石楠花は渋々と頷く。
家事を負担だとは思っていないが、受験生であり、普通ならば遊びたい盛りの自分がそうしたことに時間を取られているのを、義父が以前から気にしていることには、石楠花も理解している。だからここは敢えて受け入れておこう――というのが本音であろう。
湯飲みを置き、父は、ふうむと唸った。
「あとは、そう……問題は服や生活用品か」

三

そのとき「シネボックス」のEボックスは、新作上映の最中であった。
シネボックス全体の客数は多いものの、このEボックスだけは、上映タイトルが今時流行りもしない米国産のB級SFであるせいか、日曜の昼間とは思えぬほど閑散としている。
効果音と台詞に混じってちらほらと鼾すら聞こえてくる、広く暗い空間。
最後列近くのカップルは、スクリーンにはさほど目もくれず、かといって体を触れ合わせるでもなく、互いに無為なことを囁き交わしていた。
男は開始五分で空になったソフトドリンクのカップを弄び、静かに欠伸する。
「帰りどこで食ってく?」
「マックで良くない? 地下街にあるじゃん」
女は高校生だった。新しく開けたピアスの具合が気になるらしく、しきりに右耳をいじっている。
「あたしお金ないしさ」
「だからメシくらいは俺が出すって。何でもワリカンじゃ格好つかねーだろ」

「あんただって大学生なんだからお金ないくせに」
「バカ、お前よりゃ持ってるよ」
男は言いながら足元にカップを置いた。
その瞬間、すう、と照明が落ちた。
上映中であるため、当然今までも暗いことは暗かったのだが、この暗闇は、それとは一線を画していた。
足元の誘導灯すら消えた。
段差や壁の、青いＬＥＤも消えた。
闇。
スクリーンも濁って明かりを失い、ざらつき始める。
男は天井を見る。
「何だよ……停電？」
ふっ、と、スクリーンも黒に。
それはものの数秒だった。
Ｅボックス内を漆黒が支配した。
ヒロインの叫びだけが四方のスピーカーから鳴り響く。
ほんの少しざわめくボックス内。
そして一瞬で、嘘のように空間は元に戻った。
今までこんなに明るかったのか。
戻った瞬間、男が思わずそう感じるほど、数秒の闇は深く完全だった。
男は隣を見る。女と顔を見合わせるつもりだった。
だが、誰も座っていなかった。
「え――？」
幼馴染の恋人は彼の隣から消えていた。
ほんの数秒で終わった、今生の別れだった。

四

その姿に誰もが振り返った。

落ち着いたベージュのコート。その下から伸びる、クリーム色のパンツに包まれた、細く長い脚――そう、大輝たちが選んだ服装に、これといって目立つ要素は無い。むしろ地味なものから順にセレクトしたくらいである。

だが、彼女は道行く者たちの目を尽く引いていた。

長くボリュームのある、ふさふさの白いポニーテール。それもあるだろう。

背の高さ。それもある。

だが、それすらさしたる特徴とは数えられぬほどに、シロは美しかった。

まず顔立ちが。足の運びが。仕草が。視線が。何だか、この駅前通りを歩いているのが奇跡と感じられるような、違和感にも似た存在感がある。

シロは自覚があるのか無いのか、隣を歩く大輝に対し、無造作に笑いかけ、語りかける。

「のう、大輝や。ここは家の近くより大きな建物が多く、人通りが多いのう。道も広いからいいが、そのぶん自動車とやらもずいぶん沢山動いておって、危なくて仕方がない。ここがこの時代の都かえ」

「あ……いえ、そういうわけじゃ……」

さっきまで身に付けていたものを含む、シロの衣服や靴が入った大きな袋を片手に、大輝はどぎまぎと俯く。

そうだった。シロは綺麗なのだ。

すれ違う男たちが皆、シロを見ている。その視線で大輝は、いつの間にか慣れてしまっていたことを再認識していた。

微妙な気分に陥った大輝の袖を、不意に立ち止まったシロが、くいと引く。

「見よ大輝、あの者どもは何か妙なことをしておる」

「はい？　……あ」

シロの指さした先は、ファーストフード店の店先だった。

そこにあるベンチに腰掛けた男女が、互いに寄りかかり、うっと

りと唇を重ねあっている。
　シロは首をかしげる。
「そういえば、昨晩のてれびどらまや、大輝の借りてきた映画でも同じようなことをしておった。ああして口をくっ付けて何が楽しいのじゃ？」
「あの……キス、知らないんですか？」
「きす？」
シロは、どちらかといえば魚の名前を呼ぶに近い発音でリピートする。
「知らん。したこともない。昔の人間どももしておったじゃろうか……いや、よう思い出せん」
「はあ――」
「のう、あれはどうした意味があるのじゃ」
　二人の後ろで、同じく立ち止まっていた父が、余計な解説を入れる。
「あれは夫婦や恋人がするものだよ」
「何じゃと？」
「ああしてお互いに好きだという気持ちを証明しているのさ。シロさんが注意していなかっただけで、多分、昔の人たちも似たようなことをしていたんじゃないかな。接吻なんていう古い言い回しがあるくらいだし」
「お、親父」
大輝の焦り空しく、シロは予想通りの反応をみせた。
「何と――大輝よ、なぜしろにきすのことを教えなかった」
「あ……いや、だって」
「しろと大輝は夫婦ぞ。それに、しろは大輝が好きでたまらぬ」シロは大輝の両肩を掴む。
「この言葉に尽くせぬ想いの証しとなるのならば、せねばならぬであろうが。これ、下を向くでない」
「ちょ――ちょ、シロさん」

「いいかげんにしろ、このバカ狐」
見かねた石楠花が、シロの耳を横から引っ張った。ちなみにこの行動、出かける前に父と交わした、「人前でケンカもしくはそのきっかけとなるような行動をとることはいたしません」という誓いを破棄したものである。
シロの条約破棄も早かった。
「何をするか、この小娘！」
大輝の肩をぱっと放し、石楠花の額に額を叩きつける。
ごづっ、と恐ろしい音が響き渡った。
大輝は後ずさる。
「い、いきなり頭突き……っ！」
最近ケンカがエスカレートしているとは思っていたが、まさかここまでやるとは。しかも比較的穏やかであるはずのシロの方が。
石楠花は大きく仰け反り、涙目でシロを睨む。
「この化け物――上等だ、やってやる！」
「ちょ、ちょっと待て」
シロは額を押さえて待ったをかける。
「おでこが……おでこが痛い」
あんたも痛いのか。
大輝は心の中で突っ込んでから、我に返る。
「じゃなくて――ちょっと二人とも、こんな所でケンカしないで！」
「うん、みんな見ているよ」
父も頷く。
シロと石楠花は、はたと睨み合いを中断し、周囲を見回した。
当然といえば当然。あっという間に遠巻きな人だかりが出来ていた。
ひそひそと囁きあう者たち、指をくわえて見ている子供、動画におさめようと携帯を構えている女子高生。
さすがに続行の空気ではない。
二人は、ふん、と顔をそむけ合い、何とか掴み合いだけは回避さ

れた。
　そうしてまた歩き始めた一行。
服屋に続き、次に目指すは駅に近い大型ドラッグストアである。
　シロは歩きながら父に問う。
「どらっぐすとあとは何じゃ。それもてれびで宣伝されておったが」
「平たく言えば薬屋かな」
「薬ならば家にあろうが」
「他にも色々と揃うんだよ。例えばシャンプーとかね。あなたの気に入ったものを選ぶといい」
「しゃんぷうなど、大輝か石楠花と同じもので十分じゃがのう」
シロは口をへの字に曲げる。
　父は苦笑した。
「あなたは雰囲気の割に質素な人だね」
「そうかのう」
「まあ、シャンプーに関わらず、女性なら必要になってくるものも揃うから、行ってみて損はないよ」
「何のことじゃ」
「例えば――失礼ならば許して欲しいが、シロさんは、人間との間に子供が出来る体なのかな。つまり、その――人間の女性と、同じように」
「む。……まあ、な。そうした意味か」
シロは何とも言い難い微妙な面持ちで頷く。
「今の者どもがどうしておるかは知らぬが、道具があれば助かるわい」
「だろう？」
父は微笑んで頷いた。
　そこで、シロは急に立ち止まった。
「むう」
「どうしたのかね」
「これは何じゃ。異人の顔の看板がやたらと飾られておるが、何か

催しておるのか。人も随分と並んでおる」
そこは大型映画館、シネボックスの前だった。
金属素材を前面に押し出した、未来的なデザインの建造物である。今はマジック・マンソン監督の人気ＳＦシリーズ「メカニカルアニマルズ」の最新作、「ディス・イズ・ザ・ニュージェネレイション」が封切られたばかりのため、いつもよりも多くの人が並んでいる。
父はぽりぽりとあごを掻いた。
「これは映画館だよ。何というか――大きなテレビのようなものがあってだね、それに映される映画をみんなで観るのさ」
「映画はしろも好きじゃ。大輝の借りてきたびでおを、二人が学校へ行っておる間、しろもいくつか見た。なかなか面白いものじゃ」
言いながらシロはシネボックスを見上げる。
「しかし、このようなところがあるとは知らなんだ。大きいてれびというと、畳くらいか？」
「いや、その何倍も大きいね」
「想像もつかん。しろたちも見られるか？」
「ふむ」父は腕時計を確認してから言う。「ちょっと観てみるかね。そういえばここの割引券が何枚かある。――大輝と石楠花はどうだ」
石楠花は、入り口の列を見て、うーんと唸る。
「別にいいけど……ずいぶん並んでるじゃないか。次の上映で見られるかな」
「でも、これってメカアニの列じゃない？」
大輝も列を眺めて言う。
「他の映画ならそんなに混んでないんじゃ……」
「おお、あれが面白そうじゃ！」
シロは言い終えぬ大輝の肩に手を乗せ、きれいな指で、一番端に飾られた大型ポスターを指した。
どれかと見やった三人の目に飛び込んできたタイトルは――「地獄マシーン」。
言い得ぬ沈黙。

その後に、石楠花はがっくりと肩を落とした。
「よ……よりにもよって、なんてつまんなそうな……」
美女、真っ二つ。それがタイトルの下に書かれたコピーである。悪いロボットらしきキャラクターが、巨大な枝切りバサミのような凶器を持ってブロンド美女を襲っている写真がバックだ。
「なんで今時こんな映画が全国公開なのさ」
石楠花が頭を抱える横で、シロはぴょんぴょんと飛び跳ねる。
「何とも強そうなろぼっとじゃ。しろはあの映画がよいと思う。大輝はどうじゃ？」
「うーん……」
大輝は少し困ったが、まあいいかと頷いた。
「いいんじゃない？　その――何ていうか、空いてそうだし」
「私は何でもいいよ。その映画なら、ちょうどそろそろ次の回が始まるようだしね」
父はそう言いながらも、ポスターを見ながら苦笑いを浮かべている。
シロは石楠花を見た。
「その――石楠花は……どうかの」
珍しく小さな声で、しかも口ごもる。
シロの心情は、石楠花だけではなく全員の目に、ありありと見て取れた。
この映画が見たい。
しかし、自分のことを嫌っている上に、さっきケンカしたばかりの石楠花が賛同してくれるとは思えない。
でも、出来ることならば――この映画が、見たい。
石楠花は、はあと溜息をついて呟いた。
「……あんたって、なんで時々憎めないんだろうね」
石楠花の賛同も得たところで、四人は地獄マシーンのチケットを、並ぶこともなく割引価格で購入。ポップコーンと飲み物と、ついでにパンフレットも一部買って、階段で四階へと上った。
通路の分かれ道で大輝は半券を確認する。

「ええと――Eボックスだから、こっちか」
「なんだか隣のボックスに向かう人の方が多いって感じるのは、あたしの気のせいかな」
恐らく気のせいではないであろう、石楠花の独り言。
Eボックスの扉を開けると、その中は予想通りの惨状であった。
閑散。その二文字に尽きる。
入り口のところで、石楠花が立ち止まる。
「う――」
「どしたの、しゃくネエ」
石楠花は自分の肩を抱く。
「いや……なんか、例の変な悪寒が――って、そこの狐女！」
「何じゃ」
「耳！　耳が狐になってる！」
「おお」
シロは、白銀の毛が生えそむった大きな両耳を、ぱたぱたと動かす。
髪の毛の色と同じであるせいか、さしたる違和感が無いのが奇妙である。
「すまぬ、地獄ましぃんが楽しみでつい気が緩んだわ」
「油断して妖気ばらまくのはいいけど、見た目には気をつけなよ」
「分かっておるわい」
シロの耳が、見る見る人間のものに戻る。
「しかしおぬし、何か思い違いをしておるようじゃが」
「何さ」
「揃って入り口で立ち止まっているのも何だ。早く入るとしないかい」
父にやんわりと急かされたことで、会話は中断された。
出入り口は最前列の左脇である。ボックス内に入ると同時に、シロは、わああ、と子供のように口を開けてスクリーンを見上げた。
「大きいのう。これがてれびだとは信じられぬわ」
「シロさん、見たところ席が十席ほどしか埋まっていないから選び

放題だが、どこに座りたいかね」
「もちろん一番前の、真正面がよい。せっかく大きいものじゃから、一番大きく見えるところに座るのがよいじゃろう」
狐変化の簡単な思考回路が席を決定した。
細かくは、左から石楠花、大輝、シロ、父の順である。自然とそうなった理由は言うまでもない。
何にしても、ほどよく歩き疲れ、荷物に加えて飲み物やポップコーンなどを抱えた一行にとっては、座り心地の良い座席はありがたい代物だった。
着席と同時に大輝はパンフレットを開く。
「ええと――監督と脚本はエド・ウッズ？　全然知らないな。演出も、エンディングテーマの作詞作曲も、クリーチャーデザインも――あっ、殺人ロボットの中身も同じ人だ」
「すごいワンマンだな……」
石楠花の表情は暗い。
父が席を立つ。
「私はちょっと喫煙所で一服してくるよ」
早口にそう言い、煙草を吸いに行くだけのはずなのに飲み物まで持って、父はさっさとボックスを出て行った。
石楠花が舌打つ。
「このタイミング……お義父さん、土壇場で逃げたな」
「親父が好きなのって、ジュゼッペ・トルナトーレとかだからね」
そんな人にこれはきついだろう。大輝はパンフレットの三ページ目、殺人ロボットが、バイクのサイドカーに一回り小さいロボットを乗せて荒野を疾走している写真に目を落としながら、そう思う。
さっそく上映開始のアナウンスが流れ始めた。
大輝はパンフレットを閉じる。
「もう始まるんだ」
「こんなに済し崩しで映画館にいるのって、初めてだな、あたし」
「何やら暗くなってきおった。大輝、なぜ暗くなるのじゃ」

「昔はああいう画面じゃなくて、映写機っていう――」
説明しかけて大輝はやめる。正確な説明には時間が必要だ。。
「とにかく昔の名残ですよ。シロさんに昔なんて言い方するのも変ですけど。それに、暗くて周りが見えないほうが、映画に集中できますからね」
「なるほどの」
「それにしても、ずいぶん暗くなったね。シネボックスってこんなに暗かったっけ？」
石楠花が首をかしげる間にも、照明はどんどん落ちてゆく。入り口の誘導灯も、足元のランプさえも。
一瞬、視界がゼロになる。
しかしすぐさまスクリーンに映像が映し出された。
まるで、長方形に切り取られたそこだけが、闇の中に浮かんでいるようだった。
近隣施設や化粧品のコマーシャルを見ながら、シロは静かに感嘆の声を上げる。
「ほう。てれびではさほど面白くない宣伝も、このようにして見れば中々に趣きがあるではないか。音も大きくて、何だか贅沢じゃ」
「そう……ですね」
大輝は返事しながらも、深すぎる闇への違和感に少々惑っていた。
確かにこれは、暗すぎる。手元のポップコーンを見るのがやっとで、隣にいるシロや石楠花の顔すら、薄ぼんやりとしか形が見えない。まるで布団をかぶったようだ。
だが考える間も無く、映画は始まった。
同時にシロが肩にしなだれかかってくる。
もちろん、映画館でカップルがするオーソドックスな姿勢というものを、シロが知っているわけではない。これは単純に、何かと抱きついたり、体をくっ付けたがる癖の延長である。いつも家でやっては石楠花に怒鳴られている行動と同じだ。
しかし今は暗闇の中。止める役である石楠花の目に、シロと大輝

の姿は見えない。
それを知っているシロは、ここぞとばかりに甘えようとしているのだ。
大輝は――黙ってそれを受け入れた。
半分は、絵的にいささか僭越ではあるが、親心に似た感情である。仔狐の姿でいた頃は大輝の腕の中がお気に入りだったのに、最近では倫理の壁が立ちはだかっているせいであまり触れることも出来なくなり、少し拗ね始めているシロの心情を慮ってのこと。
もう半分は、言うまでもなく、健全な少年の根源にある回路が働いたのである。
いつもの抱きつきなどにも言えることだが、細かいことは抜きにして、綺麗なお姉さんに好きと言われ、くっ付かれることは、大輝といえど嬉しくないはずがない。ただ、常識のメタファーともいえる石楠花の目が気になって、何となく拒む姿勢を取らざるを得ないだけだ。もちろん大輝自身の、「まだ自分は十三歳になったばかりだ」「シロの気持ちを抱きとめるだけの準備はこちらにはない」などという現実的な自覚も、アタックを受け入れてしまうことにストップをかけている。
だが――今は。
どうしてだろう、今だけは。
オープニングテロップが流れ、大音量でメインテーマが鳴り響く中、シロがこっそりと耳打つ。
「……いやではないか？」
「え――」
「ここのところ、大輝はその……しろがこのようにするとじゃな……」
「――嫌じゃないですよ。そのまま寄りかかっててていいです」
「……。……ふふ」
心底幸せそうに笑む吐息。
遠慮がちに擦り付けられる頬と肩。

大輝は得も言われぬ心地になって、指先をじんわりと痺れさせた。
心中で謝罪する。
ごめん、しゃくネエ。正直いって俺、今、この人が可愛くてたまりません。
だって仕方ないんだよ。こんなに綺麗なお姉さんが、子供みたいに甘えてくるんだから。そりゃ俺だって降参だよ。
でも――ごめんなさいシロさん。それでも俺はまだ、あなたと恋人になったりとか、そういうことは到底考えられないでいます。
だって俺はまだガキだし、何ていうか……しゃくネエのことも、その……俺にとって、憧れの人なんですよ。
俺ってダメですね。
本当に、どうしようもなくダメですね。
背徳から陶酔へ、そして自己嫌悪へと巡った思考は、テロップが終わるとともに断ち切られた。
突然、スクリーンに江戸城が大写しになったのである。
「あれっ」
その地下で、着物を着た武士たちが、めいめいに鉢巻を締め、木槌やノコギリを片手に、メタリックな光沢を放つ奇怪なデザインのロボットを作っている。
隣から石楠花の声がする。
「あたし……何だかもう、楽しみになってきたよ」
「――うん」
大輝も引きつった笑みで同意した。
その後、地獄マシーンのストーリーは五分おきに急展開し、殺戮はもちろん、タイムスリップしたり宇宙に行ったり恋愛があったりと忙しい内容だったが、そんな内容であるだけに開始四十分あたりから大輝と石楠花は疲れはじめ、楽しそうにしているのはシロのみという、予想通りの状況に落ち着いていた。
シロは何かあるたびに、いちいち大輝の腕を引いて揺する。
「見よ大輝、あの南蛮人ども、海の中できすをしておる」

「は、はあ」
「よう分からんが心地よさそうじゃ――ええい、さっきから鬱陶しいのう」
「え？」
「何、こっちの話じゃ。おお大輝、ろぼっとが現れおったぞ。あやつが腰につけている物は何じゃ」
「あれは浮き輪ですね……」
ずっとそんな調子であった。
映画はそれからも物凄い勢いで続いたが、殺人ロボットがプロレスラーたちに破壊され、大型タンカーと共に爆発したところでようやく決着し、テーマ曲と共にテロップが流れ始めて、百十二分に及ぶ長い道のりは終わった。
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄの文字が気になるところではあったが、取り合えず、大輝は大きく息をついた。
「……終わった。……色々な意味ですごい映画だったなあ」
「あたしも同感……」
「ふむ――」
シロは満足げに言う。
「映画というのはよいものじゃのう。昔からこのようなものがあれば、しろも退屈せなんだが――しかし我が侭に付き合わせて悪かったのう」
「そんなことないですよ」
「あたしも別に構わないよ。いい経験になって良かったんじゃないの。それにしても――」石楠花は足下に顔を向ける。「いつまでも真っ暗なままだね。そろそろ足元の灯りくらい点いてもいい頃なんだけど……これじゃ歩くことも出来ないよ」
「灯りは点かんぞ」
シロは当然の如くにそう言って、立ち上がる。
「さて、そろそろ片付けねばのう」
「片付けるって何をです？」

「先刻、石楠花は妖気をしろのものと思うたようじゃが、それは間違いじゃ。しろはちゃあんと妖気を消しておった。――見よ」

ぼわん。

炎が生まれた。

シロが開いた掌の上で、炎の玉がゆらめいている。

石楠花は焦って立ち上がる。

「な、な、何やってんだい！」

「しろの狐火じゃ」

「じゃなくて！　こんなところでそんなことして、人に見られ……」

「人などもうおらん」

「え――？」

石楠花は、炎によって少しは明るくなったボックス内を、きょろきょろと見回す。

大輝も立ち上がって見回した。

どの席にも人がいない。映画が始まる前は、ちらほらとだが、確かにいたのに。

帰ったのだろうか。いや、そんな気配はなかったし、第一、さっきまでの暗闇では通路を歩くことも難しかったはずだ。

シロは涼やかに語る。

「しろたちのことも狙うておったが、映画を見る邪魔なので、今までしろが払っていたのじゃ。――それにしても、大したものではないと思うていたら、何とまあ、ここまで力を蓄えておったとはな。これでは恐らく、片付けねば出ることもかなわぬ」

「何の話……ですか？」

「上を見よ」

言われて、大輝と石楠花は天井を見る。

「――うあ……」

大輝は腰を抜かしかけた。

それは異様な光景であった。

無数の長い腕が、暗い天井を埋め尽くさんばかりにぶら下がり、

蠢いている。
まるでイソギンチャクの触手のように。
天井そのものも、何か人肌のような材質――いや、違う。
あれはもう天井ではない。何かの体なのだ。
その中心に、人の背丈ほどもある、肉の割れ目のような穴があり、口のようにぱくぱくと開閉している。
石楠花は身構えた。
「な、何だよこれ……妖怪……？」
「下がり腕じゃ」
「……さがり、かいな……？」
「石字縛師の末裔がそんなことも知らぬのか。人家の天井に成り代わり、家の者が寝ている間に腕を垂らして引き上げ、一飲みに食ってしまう化け物じゃ。ここまで大きいのは初めて見たが――一体どれほどの者を食えばこんなになるのかのう」
「あいつに食われたのかい、さっきまでここにいた人たち……」
「じゃろうな。映画を見ている間、次々と気配が消えておった」
「あんた……」
石楠花はシロを睨む。
「あんた、それ、黙って見過ごしてたのかよ」
「何を怒っておる。別にしろが殺したわけではないわ」
「そういうもんじゃないんだよ、人ってのは！」
「ふん」
シロは鼻を鳴らす。
「おぬしはそうしていつも、しろのすることに文句をつける。いつもいつも……それだからこそ、さっきだけは……何者にも邪魔をされたくなかったのじゃ」
「何のことだよ！」
「しゃ、しゃくネエ」
大輝は板ばさみのポジションで慌てる。
「言いたいことは分かるし、確かにちょっと話し合いが必要だとは

思うけど、今はそれどころじゃないんじゃ……って、危ない！」
恐ろしく伸びた腕の一本が、天井から一直線に石楠花を襲う。
悲鳴を上げる石楠花を、シロの狐火がかばった。
燃え上がった腕はぐねぐねと暴れたが、はね上げるように振るわれたシロの逆手刀がそれを断つ。
斬られた腕の先は飛んで座席のひとつに落ち、その座席はパチパチと燃え始める。
シロは舌打つ。
「奴め、本腰を入れてきおるぞ」
「じょ、冗談じゃない！　さっさと逃げなきゃ！」
石楠花は立ち上がり、出入り口目掛けて駆け出した。
シロが制止する。
「待て、それはもう扉ではない！」
「えっ？」
振り返る石楠花。
その背後で、両開きの扉が変形した。
それは――箱根細工のように組み合わさった腕の塊であった。
ばらりと分解した無数の手が石楠花を捉える。
「や、やだっ……」
「小娘、石字縛符を使え！」
「そんなの持ってない！」
「なっ――何故持っておらぬ、無用心な！」
「だってあの嫌な感じの正体があんただって分かったし！」
「阿呆！　しろの他にも化け者どもが解き放たれたと言ったであろう！」
「そういう連中はあんたにビビって逃げたんじゃないのかよ！」
「身の程知らずや、こういう知恵無しは別なんじゃ！」
「そんなこと聞いてな……うわああ！」
言い争う間にも、石楠花は無数の腕の中に飲み込まれてゆく。
シロが跳んだ。

「ちいっ！」
ぶわりと中空で舞うように回り、続けざまに火の玉を生んで飛ばす。
石楠花のすぐ近くにそれは尽くぶつかり、腕たちは驚いたような動きを見せて石楠花を放した。
床に転がって石楠花は怒鳴る。
「あ、熱い――っ！　何すんだよバカ狐！」
「助けてやったのにその言い草は何じゃ！」
「うるさいっ！　さっさとその炎で、この化け物やっつけろよ！」
「たわけ！」
シロは空中で、襲ってきた三本の腕を叩き斬る。
「こやつはもう四方を取り込んでおる！　全て焼き尽くすことなど造作も無いが、それをすれば、しろはともかく大輝まで黒こげじゃ！　逃げ場がなくては仕様がない！」
「強いくせに役立たずだな！」
「やかまし――大輝、後ろを見よ！」
シロは鋭く大輝に叫ぶ。
大輝はいきなり言われて戸惑い、背後に下がっていた一本の腕に、後ろ襟を掴まれた。
「うわ、あ、あっ！」
物凄い力で、魚が吊り上げられるが如く、大輝の小さな体は浮上した。
あっという間に、座席の並ぶ床は遥か下方。
大輝は悲鳴を上げる。
「や、やめ――やめてくれっ！」
「大輝、暴れてはいかん、落ちてしまう！　今助けに……」
「畜生――っ！」
必死にもがく大輝の耳にシロの叫びは届かなかった。
無我夢中で両手を後ろに回し、自分を掴んでいる手を払おうとする。
しかし、人一人を簡単に持ち上げる怪力はどうしようもない。

「は……な、せ……っ！」
大輝の中で何かが燃えた。
それは一瞬であった。
その刹那だけ、金色の光が大輝の左目に宿ったことに、シロや石楠花はおろか、大輝自身も気づくことはなかった。
手は、怖れるように大輝を放した。
落下が始まる。
「わああっ！」
「大輝！」
スクリーン前の床に叩きつけられる、そのすんでの手前で、シロの腕が大輝を抱きとめた。
「大輝よ、体は平気か？　よう人の力であれを払ったな」
「あ――は、はい……？」
「よし、立て。しろから離れてはならぬぞ。ついでに小娘もこっちへ来い」
シロはそう言って二人を寄せると、足を大きく広げて腰を落とし、背を丸める。
獣が警戒するような構えであった。
その周りを、七つの火の玉がぐるぐると飛び回る。
すぐさま立て続けに襲い来る腕たちを、シロは目に見えぬほどの速さで叩き斬ってゆく。
血しぶきが散り、ぼとぼとと床に落ちる手首。
石楠花は大輝をかばうように、その肩を抱きしめた。
「大輝……」
「しゃ、しゃくネエ」
「あっ、これ貴様！　大輝にべたべたと触るでない！」
迫る腕を斬り払いながら、シロが怒鳴る。どうでもいいことだがいつもと逆である。
ぐにゃりと床が揺らいだ。
いや――それは床ではなかった。

「くっ……足下までもが……」
シロは歯をきしませる。
黒かった床が人肌の色へと変わり、ぞわぞわと、あちこちより腕が生えてくる。
大輝は足を掴まれた。
「げっ……」
「大輝――うぐっ？」
石楠花の首を、いつの間にか背後から生えた腕が締め付ける。
シロはそれらを払おうとしたが、床から生まれた腕の壁に阻まれた。
「くっ――」
長い爪を伸ばして無造作に斬るも、後から後から腕は生えてくる。
「ええいくそ、邪魔じゃ！」
無数の腕たちは、だんだんとシロの体にも絡みつく。
さすがに力で負け、シロは動きを奪われる。
「く……数多の者を食らい、大きく育った下がり腕が、よもやこれ程厄介とは……っ！」
そこはもはや、わらわらと蠢いてはなびく腕の森であった。
天井の巨大な口が、いざ三人を吊り上げて飲み込まんと、不気味に開閉している。
口の中は、どこへ通じているとも知れぬ闇。

五

その闇の中から、一つの影が落ちた。落ちたというよりは飛び出したといった方が正しいか。
その者は落ちながら、迫り来る腕を足場にして何度か軌道を変え、腕の生えていない隙間を狙い、すたりと降り立った。そこは大輝たちのいるスクリーン際から離れた、最上段である。
「――ふう」

背筋の真っ直ぐな、痩せた禿頭の老人。
黒いジャンパーにジーンズという、若者のような出で立ちのその老人は、異界と化したボックス内を見回して、ぽりぽりと毛のない頭をかく。
「やれやれ。寝ている間に化け物に食われ、慌てて腹の中から抜け出してみりゃ……こりゃ、もしかして下がり腕か？　妖気が大したことねえから油断したな」
胸ポケットに手を突っ込み、ごそごそと中をあさる。
「映画なんぞやめとくんだったかな。どうせ座った途端に寝ちまったしよ」苦く笑う。「ま、見つけたからにゃ退治しなきゃいけねえだろうな。――ごみごみした感じに混ざって、一つ、バカでかい妖気もあるのが気になるが」
取り出したのは、一枚の竹札だった。
「――取り合えず、こいつでも食らいな」
投げられた札を中心に、紫の閃光が生まれた。
爆音と共に、腕で埋め尽くされた空間を切り裂くが如く、雷が走った。
雷は座席の上を、壁を、床を、通路を、生き物のように駆け回る。
スピーカーからうめき声のような暗音が轟いた。

六

――突然に体を締め付けていた手たちが離れ、大輝はバランスを崩して膝をつく。
顔を上げると、同じように膝をついて首をおさえている石楠花と、駆け寄ってくるシロがいた。
シロはしゃがんで大輝に抱きつく。
「すまぬ大輝、しろの技量が及ばぬばかりに、このような！」
「あ、いや、それはいいんですけど――」
顔に当たるふくよかな感触にどぎまぎしつつ、大輝は横目で辺りを

確認する。
「何があったんでしょう、今……」
「ふむ――？」
シロは立ち上がって見回す。
「確かに何か強い力が走ったようじゃったが」
足下と壁にざわめいていた腕どもが、ずるずると肉の中に引っ込んでゆく。
天井から生えた腕はそのままだが、どれも文字通り手をこまねいて、さっきのように下へ伸びてくるでもなく、上の方で揺らめいている。
苦し紛れにシロが放った狐火が、ところどころで燃えるボックス内。
床に落ちいてる手首たちが、ぴくぴくと不気味に痙攣しているのみ。
石楠花が遅れて立ち上がる。
「く、苦しかった……でも、どうしたんだろ、いきなり……」
「分からぬ。おぬし、何かしたか？」
「してないよ。何も持ってきてないって言っただろ」
「では――、む？」
シロが遠くの隅に一つの人影を見つけた。
「あれは誰じゃ」
「えっ？」
石楠花はシロの視線の先、その者を見た。
それは、遠くからでも分かる、見慣れた男だった。
「お……お爺ちゃんっ？」
「ええ？」
大輝も目を凝らす。
狐火揺らめく闇の中、腕組みをして立つその姿は、確かに大輝も何度か会ったことのある人物――石楠花の祖父、石之助であった。
このボックス内にいたのか。入ったときは全く気付かなかった。
石之助も、こちらに気付いた様子で、おお、と手を挙げる。

「石楠花に大輝じゃねえか。お前ら、こんな馬鹿でっけえ下がり腕相手によく無事だったなあ」
とおん、とおん、と、老人とは思えぬ跳躍力で座席から座席を跳び、三人の前に降り立つ。
「おや……何だ。メチャクチャな妖気の正体はあんたかよ、姉ちゃん」
シロの顔を見上げる。
「もしかして、あんたがうちの孫娘たちを守ってくれたのかい」
「ん――」
シロは少々戸惑いつつも答える。
「まあ、の。石楠花めはついでじゃが」
「誰がついでだい！」石楠花が吼える。「だいたい、あんたが気付いてるくせに黙ってたからこんなことに！」
シロは石楠花に取り合わず、石之助を睨む。
「じじい。貴様も石字縛師か」
「一応な」
「今のは貴様か」
「まあ、そうだ。しかし、でかくて禍々しい妖気だな、姉ちゃんよ。血の臭いもぷんぷんしやがる――そうか、あの夜、庭で感じたのはあんたの妖気か」
にやりと笑う。
「……あんた人食いだな。今までにどれだけ殺して食った？」
「もう人は食わぬ。大輝に嫌われるでな」
「そうかい」
石之助は胸ポケットに手を入れる。
「何だか事情があるようだが……なんにせよ、話はこいつを片付けてからだ」
竹札を一枚取り出す。
「姉ちゃん、あちこちで燃えてる妖炎はあんたのだな。この符に、そいつをありったけ叩き込んでくれ」

「何じゃと？」
「それだけでかい妖気だ。辺り気にせず全力でやりゃ、ここを丸ごとブッ飛ばすくらいのエネルギーがあるだろう。それを込めて、妖力の時限爆弾を作るのさ。で、そいつを仕掛けてから逃げ出すって算段よ」
「ふむ――じじいめ、随分位の高い術を使いおる」
シロは片手を突き出して構える。
「まあよい。気には食わぬが、下がり腕もまた気に食わぬ。それに今は大輝の身がかかっておるゆえ、言われたとおりにしてやるわ」
石之助の持った符に向けられた白い掌が、ごうごうと燃え始める。
石之助は身構えて笑う。その頬には脂汗が滲んでいる。
「こりゃ凄え……体の芯までビリビリきやがる。目下の相手があんたじゃなくて命拾いしたぜ」
「しろの力が分かるのなら全霊で構えよ。しくじって弾け飛んでも知らぬぞ？」
炎が、大きさはそのままに光を増す。
激しい熱が空気を揺らめかせる。
まるで一握りの太陽のように。
そして、どん――と放たれた。
符を持った両手に強大なエネルギーの直撃を受け、その圧力で石之助は大きく後退した。
スニーカーの靴底がざりざりと音を立てる。
「ぐ……ぬああっっ！」
こらえながら石之助は叫びを上げる。
次の瞬間、狐火は符の中へと吸い込まれた。
ばしゅんと激しい音が鳴り響き、石之助の手の中で、符は白煙を上げて光り輝く。
石之助はそのままの姿勢で硬直する。
「ふうっ……な……何とか取り込めたが……」
ちっ、と舌打ちする。

「こりゃやべえな。わしの意思に関わらず、こいつは暴走しちまうぞ」

「お、お爺ちゃん？」

「わしのせいじゃねえ、姉ちゃんの力が思ってたより強すぎたもんで、扱いきれねぇんだ。全く食えねえ姉ちゃんだぜ。妖気丸出しかと思ったら、まだまだ底力を隠してやがる――とんだ大妖怪だ」

「のんびり感心してる場合じゃないですよ！」

大輝は足踏みする。

「どうするんですか石之助さん、このままじゃ俺たちまで巻き添えですよ！」

「おお、いけねえ。急がねえとな」

石之助は札をいったんポケットに仕舞い、もう一枚の札を取り出して壁まで走る。

三人もそれに続いた。

不気味に脈動する肉壁の前、本来なら出入り口があるはずのところで立ち止まり、石之助は札を構える。

「さて、ここだけでも封じちまわないと、扉が出てこねえ」

「このバカ狐の力で穴開けちゃえばいいんじゃないの？」

「穴を開けても、外とここは繋がらねえんだよ。だから姉ちゃんもやらなかったんだろ？」

「うむ」横でシロは頷く。「下がり腕に取り込まれたところは、目には見え触れることも出来る。それに確かにこの世の一部ではあるのじゃが、そこを切り開いた先――体内ともなると話は別でな。焼き尽くし完全に殺さねば、いかな大穴を開けたところで、その先は、天井にある口の中と同じく、どこへ通ずるとも知れぬ闇が広がるばかりよ」

「ってわけだ。厄介な類の化け物は、包み込んだところを結界化しちまうんだよ。下がり腕にここまで出来るとは思わなかったけどな。だからこれから、局所的に妖力をぶつけて、そこだけ下がり腕の具現を無効にする。まあ中和させるってこった」

「なんでお爺ちゃんから妖力が出てくるわけ？」
「石字縛師が文字を通して発揮する力は、妖怪の力と同質でな。理由は追々説明してやるよ」
「？　……よく分からないけど、助かるなら何でもいいや」
石楠花は理解を放棄したのか、投げやりに言う。
瞬間、天井から数本の腕が伸びてきた。
シロの腕が宙を薙ぎ、生まれた狐火がそれを吹き飛ばす。
「急げじじい。下がり腕め、しろたちを逃がさんつもりでおるぞ」
「おう、ちょっと待ってろや」
石之助は何やら早口に唱え、構えたほうの札が紫に輝くと共に、それを壁へと投げ放つ。
札は肉壁に張り付き、周囲にばりばりと雷をはしらせ始める。
「ぬ――う」
手を構えたまま、石之助は唸る。
どうやら壁の札に力を送り込んでいるようだが、それが足りないのか、肉壁に異変は起きない。
「ダメだな……おい石楠花、お前もちょっと力を貸せ」
「ええっ？」
「お前にはまだ技を使いこなすだけの技量はねえが、血の力だけならわしよりずっと強いはずだ。そいつをわしに貸せって言ってるんだよ」
「そんなの、どうやって」
「わしの背中に手をあてて、俺に力を送り込むようにイメージするだけでいい。ほら早くしろっ」
「わ、分かったよ」
石楠花は言われたとおりに石之助の背に手をあてる。
そうしている間にも、天井からは次々に手が迫る。
「いかん。力が戻ってきておるぞ」
大輝をかばいながらシロは呟く。
床が再び動いた。

四人の足下に、腕が、再びめきめきと生え始める。
大輝は思わず飛び上がる。
「うわわっ」
「ちっ――早うせい、縛師ども！」
「やべえな……」石之助は壁の札を睨む。「石楠花、力が来ねえぞ！　もっと意識を集中しろ！」
「やろうとしてるけどよく分かんないんだよ！」
大輝を抱き寄せてシロが怒鳴る。
「この役立たずの小娘めが！　おぬしのような能無しが義理の姉かと思うと、しろは恥ずかしうて身が縮む思いじゃ！」
祖父の背に手をあてたまま、かっと振り返って石楠花も怒鳴り返す。
「誰があんたの義理の姉だ！　それに――」
鬼の形相でシロを睨んで叫ぶ。
「何度言ったら分かるんだよ！　大輝にベタベタ触るんじゃないっ！」
まさかその気合いが引き金となろうとは。
石之助が目を見開く。
「……来たっ！」
張られた雷の陣が、一気に力の勢いを増した。
肉壁がずるずると四方へ退き、黒い両開きの出入り口が現れる。
札が粉々に弾け飛んで雷が消えた。
「中和できたか――よし、今だ、わしに続け！　一息に通り抜けるぞ！」
扉を蹴り開けて飛び出す石之助。
続いて石楠花が外の通路に転がり出る。
シロが大輝の手を引く。
「出るぞ大輝！」
「ちょ、ちょっと待っ――」
「どうしたのじゃ！」

「せ――背中と足、掴まれて……うあっ！」
床から生えたいくつもの手に捉えられ、大輝は恐ろしい力で引き戻されてゆく。
肉壁が、また少しずつ侵食し、出入り口を塞いでゆく。
シロは大輝の手を握ったまま、ぎりぎりと歯を軋ませた。
「――下賤な下がり腕めが、少しばかり肥え太ったからと、いつまでも図に乗りおって……っ！」
ざわざわと白銀の髪が蠢く。
「いい加減にせよ！　うぬの穢れた手が掴んでおるのは、この大妖の夫ぞ！」
飛び込んで大輝を正面から抱きしめ、ぐわ、と口を開く。
牙だらけの口。
その奥から、極大の炎が吐き出される。
おびただしい炎は、壁を、座席を、天井を、舐めるように焼き尽くす。
オレンジに染まり、みるみる燃えゆく腕の異界。
天井の口からおぞましい断末魔が発せられ、轟き響く。
大輝を縛る手が離れた。
その身を抱いたまま、シロは後方へ跳躍して外へ飛び出る。
「止めじゃ、じじい！」
「おうよっ！」
石之助は、先ほどシロの力を封じ込めた符を胸より抜き、閉ざされかけている隙間から、中へと投げ放った。

七

大輝の父――殿山礼司は、シネボックスの向かいにあるオープンカフェで、のんびりとコーヒーを飲んでいた。
腕時計をちらりと見て、ふむと唸る。
「三人とも遅いな……そんなに長いのか、地獄マシーンは」

と、不意に騒がしくなった。
顔を上げて見てみれば、シネボックスの正面出入り口から、中にいた人々が物凄い勢いで飛び出してくる。
観客もスタッフも清掃員も、誰も彼もが、互いに他を押し退けながら、さしずめ割れ桶の水が流れ出すように。
殿山礼司はその光景に首をかしげる。
「ふむ？　――ああ、ちょっと、お兄さん」
「な、何スか？」
礼司に呼び止められ、飛び出してきた若いスタッフの一人は、青い顔を振り向かせる。
礼司は持っていたコーヒーカップをのんびりと置いて問う。
「中で何かあったのかね」
「それが、爆弾があるらしいんですよ」
「爆弾？」
「さっきスタッフルームに変わった連中が飛び込んできて、でっかい爆弾があるから中の人を避難させろって、大騒ぎして」
「何と――」
「おじさんも早く遠くに逃げた方がいいですよ」
スタッフはそう言って、たったと向こうへ走っていってしまった。
そこで石楠花の声がした。
「お義父さん！」
流れ出す人の波からぴょいと飛び出し、義理の娘はこちらへ駆けてくる。
礼司は煙草の火を灰皿でにじり消す。
「石楠花……無事でよかった。大輝とシロさんは？」
「あれ、あれ」
石楠花が指す先には、同じくこちらへ駆けてくる、大輝とシロの姿、そして――
礼司は、おや、と椅子から立ち上がる。
「お義父さんじゃないですか。お久しぶりです」

「おう、礼司か」
石之助は礼司の前で立ち止まり、ふうと息をつく。
「この年で走り回るのは疲れるぜ」
「大輝たちとは中で会ったんですか？」
「まあな」
「……もしかして、お義父さんも観たんですか、地獄マシーン」
「いやあ、観ようと思ったんだが始まる前に寝ちまって、起きたら何と、化け物の腹の中でよ」
「化け物？」
「しろのことではないぞ」
シロが横から言う。
その瞬間。
まさに空気が震えるような大爆発であった。
轟音と共に激しい閃光と爆炎が生まれ、皆が見上げるシネボックスの上部が、冗談のように吹っ飛んだ。
爆風を全身に受け、礼司は、呆然と口を開ける。
「――え」
転がり落ちる金属の壁。
離れたここまで飛んできて、足下にばらばらと降り注ぐ破片。
もくもくと湧き出る黒煙。
無数の悲鳴が周囲を包む。
パニックの中、大輝が力なく呟いた。
「ああ……映画みたいになっちゃったな……」
石楠花は呆然と見上げるのみ。
石之助はぽりぽりと頭をかき、シロは――
「のう義父上や、地獄ましぃんは思うた通りに良い映画じゃったぞ」
その場の状況を全く無視し、嬉しそうに笑っていた。
礼司は、ゆっくりと頷いた。
「……そうかい、それは良かったね」

第五章【淋――そそぎ――】

一

殿山家の居間。

時々細かいところで質問を入れながらも、基本的には黙って話を聞いていた父は、四人からの説明が終わると、ぬるくなった茶を飲み干した。

「なるほど」

茶碗を置いて静かに言う。

「……そして、お札に封印されたシロさんの力が放たれて爆発。その下がり腕という妖怪が死んだ瞬間に結界は崩壊。余剰エネルギーが外に向けて放たれ――シネボックスも大爆発、というわけですか」

「相変わらず飄々と物事を飲み込む野郎だな。ちったあ動じやがれ」

石之助は三本目の煙草に火をつける。

父は唸る。

「まあ――色々と言いたいことはあるけれど……まずシロさん」

「何じゃ」

「石楠花の言う通り、他人とはいえ、人を見殺しにするのは良いことではない。あなたの話し振りからして、何かあなたなりの微妙な事情があったようにも思えるが、それだけは覚えておいて欲しい。いいかな」

「……む……」

シロはちらりと大輝を見る。

大輝はシロの心情を知っていて、しかもそれが自分への想いからくるものだということも理解しているため、どんな表情をしたら良いか分からなかった。

シロはうつむき、ふうと溜め息をついた。

「しろも何となくは分かっておったのじゃ……これからはなるべく人間を見殺しにはせぬ」

「素直だね。あなたなら、いつか本当に人の心を理解できるよ」

「そうかのう」

「多分ね。服は残念ながら今着ているだけになってしまったが、また買いに行けばいいだろう。――それから、お義父さん」

父は石之助に顔を向ける。

石之助はソファに深くもたれ、濃厚な紫煙を口から吐き出す。

「あん？」

「こっちへ来るなら来ると、どうして連絡くらい入れてくれなかったんですか？」

「面倒くせぇからな。日帰りのつもりだから宿を借りる必要もねえしよ」

「わざわざお出向きになるほどの御用はなんですか？」

「てめぇらの顔を見に来ただけだ」

「石楠花に術を教え込んだ呪い師であるあなたが、偶然シロさんが現れたのと同じタイミングで、私たちの顔を見に来たわけですか」

「……しっかりした野郎だよ、お前は。まあそういう奴だから娘を任せたんだがな。説明は面倒で好きじゃねえけど、まあいいか」

石之助は苦笑いする。

「そうさな――眠り石の話は、そこの白い姉ちゃんから聞いたか」

「ええ。何でも、石落とかいう昔の人が沢山の妖怪を封じ込めた大岩で、西の山の中腹にあるとか」

「そうだ」

「しかし細かくは聞いていません。その、石落という術師のことも。出来ればお話願えますか」

「うん」石之助は座りなおす。「石落ってのは、わしらの一族でもずば抜けた力を持った人間だったらしくてな。まあ……まさかこの姉ちゃんみたいな大妖怪を封じるほどだとは、わしも思わなかったが」

「油断したのじゃ」

シロは暗い声で言う。

「見くびらず相手にしておれば――あのような者に……」

石之助は頷く。

「実際そうなんだろうよ。姉ちゃんの妖力は莫大だ。何かの間違いでもない限り、人間にどうこうできるようなもんじゃねえ。……しかし石落が縛師として優れていたのは事実だ。なにせ常世への干渉が可能だったくらいだからな」

「とこよ？」

石楠花が首をかしげる。

説明したのはシロだった。

「この世の隣にあるのが常世じゃ。しろたちのような妖怪の力も及ばぬ世界のことよ。そこでは、こちらの道理は何一つ通用せぬ」

「全然……理屈の違う世界ってことかい？」

「その説明をすると、ちいとばかり話が反れるが――常世ってのは物質じゃなく、エネルギーみたいなもんだけで構成された世界らしい」

石之助はガラスの灰皿に、長くなった灰を落とす。

「何、わしらのように脈々と伝わってる術師の家系ってのは、案外色々とあってな。そのうち一つに、神の力を感じられる見神の家系……神を見ると書いてみかみと読むんだが、そいつらに聞いた話さ。ちなみにだが連中は常世を神の国と呼ぶぜ」

「どうしてですか？」

大輝は茶をすする。

石之助は煙を吐き出しながら頭をかく。

「いや、わし自身は、目に見えない神を感じることが出来るわけじ

ゃねえから何とも言えねえが、神ってのはエネルギーの塊みたいなもんで、常世と繋がってるつぅか……端末みたいなもんなんだそうだ。そういう端末がこっちの世界を動かす。例えば……そうだな、麒麟っているだろ」

「麒麟――武帝の時代などに現れたという、最高位の神獣ですか。角のある雄が麒、角のない雌が麟。強い力を持っていながらも気性は穏やかだとか」

「礼司は妙なことまでよく知ってやがるな。そうだ。そして麒麟の発現と共に即位した王は、必ず仁のある政治を行い歴史を動かす。そういう上位の神獣なんかなら人の目にも見えるし、常世が神っていう端末を使ってこの世界に干渉し、因果を動かすいい例ってわけよ。麒麟だけじゃなく、黄帝の前に現れて森羅万象の知識を与えた白澤や、他にその手で有名なところでは、歴史の要所要所で現れる龍なんかがいるな」

「……神の世界か……」

大輝は口の中で呟く。

石之助は座りなおした。

「えらく話が反れちまった。まあ、要するに、それくらいこの世界と理屈の違う、位の高い世界ってことだ。ところがそこに石落は、こちら側から干渉する術――渡りの術を作り上げた。それは石落一代の秘伝で伝承はされてねえが」

「神様の世界に行っちゃう術？」

石楠花の言葉に石之助は軽く首を振る。

「そういう感じじゃねえよ。そこの姉ちゃんも言ったろ、常世にこっちの理屈は通用しねえって。こっちからすりゃ、常世は単なる、隔絶された異世界だ。だがその、隔絶されてるってとこに意味がある」

「出られぬのじゃ」

シロがぽつりと言う。

「もがけど、叫べど、いかに強き力を振るえど……そこは、この世

ではない」
「そういうことだ。妖怪を閉じ込める牢獄には丁度良いってわけだな。石落は常世のどこかに三次元の空間を作り上げ、数多の妖怪を閉じ込めた。眠り石ってのは、その空間への扉みてえなもんだった。だが最近になって、それに何かがあったってわけだ。そうだな姉ちゃん」
「うーーむ」
嫌な何かを思い出すような面持ちで下を向いていたシロだったが、話を振られて顔を上げる。
「眠り石は、壊れたのじゃ。雷を受けての。あの中より這い出したしろは、弱っていたところを大輝に助けられ、ここにおる」
石之助は目を丸くする。
「よりにもよって眠り石に雷かよ。恐ろしい偶然もあるもんだぜ。いや、本当に偶然かどうかは分からねえがよ」
父はゆっくりと瞬く。
「なるほど。大体の事情はわかりました。ともかくお義父さんは、その眠り石の異変に気付いて、何が起きたか確かめに来たというわけですか」
「まあ……そうだったんだが、どうやら予想通りにぶっ壊れちまったらしいし、そっちの方は確認するまでもねぇや」眉間にしわを寄せる。「しかし眠り石に関して心配なのは、妖怪のことだけじゃねえ。もうひとつある。だから一応行って、それも確認しなけりゃいけねえ」
「と言いますと」
「ん。そりゃあまあ、こっちの話だ」
石之助は、よっこいせとソファーから腰を上げる。
「じゃあちょっくら見てくらあ」
「今から眠り石を？」
石楠花も立ち上がる。
「もう日が暮れそうだよ」

「どうせすぐそこじゃねえか。何時間もかからねえよ」
「そっか……。――ねえ、あたしも行っていいかな？」
「どうしてだ？」
「見てみたいんだ、その眠り石っていうの。あたしの先祖が作った、そんなすごいもの……壊れてても、ちょっと見てみたいじゃないか」
「ふむ。ま、いいか。ついて来な」
石之助は荷物も持たず、煙草とライターだけをひょいとポケットに入れて、居間の出口に向かって歩き出す。
しかし、ドアの前で、思いついたように振り返った。
「なあ――白い姉ちゃんよ」
「なんじゃ？」
「映画館であんたが使ったのは、狐火かい」
「そうじゃが」
「銀の髪を生やした、狐の大妖怪ねえ」
石之助は目を細める。
「――あんた、ひょっとして、死んでるはずの化け物じゃねえか？」
「……何のことじゃ」
「いや、あんたが俺の思ってる化け物と同じもんだとしたら、石落は、なんでか嘘を書き記してることになるんだな」
「何の話か……分からぬ」シロはぷいと顔をそむける。「日が暮れるぞ。小娘を連れ、さっさと割れた石ころでも見に行くがよい」
「ありゃ、怒らせちまったか？　すまねえな、余計なこと訊いちまったみたいだ」
石之助は頭をかいて、居間を後にし、玄関の方へ歩いていった。
石楠花はちょっと首を傾げていたが、すぐ我に返り、祖父の後を追って行った。
「待ってよ、お爺ちゃんっ！」
静かになった居間に残されたのは、大輝と、シロと、父だけであった。
大輝は、玄関から二人から出てゆく音を聞きながら、ふうと息を

つく。
「なんだかややこしい話だったなぁ」
「……しろは――あのような話は、どうでもよい」
茶碗の中を見つめ、シロは言う。
「石落はもうおらん。何もかも終わったことじゃ」
静かで、妙に辛そうな声だった。
心なしか顔の色が、いつも以上に白く見える。
大輝はテーブル越しにその顔を覗き込む。
「シロさん……？」
「石落の名など、耳にするのもいやじゃ」
ふわりとシロは宙に浮き、一人で居間を出て行った。
大輝と父は顔を見合わせるばかりであった。
「なんか……元気なくなっちゃったな、シロさん。あんまり機嫌も良くないっていうか」
「そうされただけの理由があるにせよ、長きに渡り封印されていたというのは、彼女にとっても良い思い出ではないだろうからね。気分が悪くなるのも仕方ないさ」
「うん――」
大輝はしかし、何か引っかかるものを感じていた。
父は、シロの出て行ったドアの方を見やる。
「まあ――それにしても、確かに少し顔色も悪かったようだな」
「さっき手の化け物と戦ったせいかな……俺、見てこようかな」
「いや」父はソファーを立つ。「ちょっと私が行ってくるよ。彼女とは少し話もしてみたい」
「話……？」
「安心しなさい。息子の奥さんに手を出すような真似はしないよ」
「親父っ！」
「冗談だ」

二

住宅地を離れ、駅から反対方向、つまり西の方角に少し歩けば、その山はある。

周囲をぐるりと切り開かれてなお、未だ誰の手も入らぬ、そこに在りながら忘れられた山。

今となっては誰も呼ばないが、夜鳴山という名を持っている。

遠目に見ているぶんには、一跨ぎにできてしまいそうな小山であるが、実際に麓から登り始めてみると、傾斜が急である上に道らしい道もなく、山に慣れた者でもなければ、相当な苦労を要する。それは石楠花も例外ではなかった。

進むたびにいちいち肌を引っかく雑木どもをかき分けながら、石楠花はぶうたれていた。

「け……獣道ですらないじゃないか……さっきから崖みたいなところ登ったり、草を割って歩いたり……まるで遭難してるみたいだよ」

「お前が来たいと言ったんだろうが」

祖父は、もうすぐ七十に近い老体だというのに、体重を感じさせない足取りで、ひょいひょいと上へ進んでゆく。

「なあに、そんなにでかい山ってわけじゃねえんだ。すぐ着くさ」

「ホントに……？　あたし、いつも学校から見えてるこの山が、まさかこんなに険しいなんて――って、ぎゃわっ！」

「どうした？」

「蛇、蛇みたいなのが今、足下を！」

「そんなもんで騒ぐんじゃねえよ。さっさと歩かねえと、いくら何だって日が暮れるぜ」

「だってあたし動物が苦手なんだよ！」

「無理も無えな」

石之助はさらりと言う。

石楠花は、細い木の一本に掴まって止まる。

「……え？」

「昔、お前があんまり泣き虫だったもんだからよ。わしは心配して、

気性の荒い土佐犬のゴンゾウと庭で戦わせて鍛えたんだ。お前が勝つまでな。それから気は強くなったが、どうにも動物が苦手になった。覚えてねえか」

「……それ……あたしがいくつの時だい」

「あの時お前は五歳くらいだっけかな」

「五歳で土佐犬と……死んだらどうすんのさ」

石楠花は怒ることすら出来ずにうなだれた。

言われてみればそんなこともあったような気がする。その日の夜に襖の陰から見た、母が祖父に茶碗を叩きつけている光景が、ふっと脳裏に蘇る。

それからも二人は、枝をかき分け、土に爪先を食い込ませ、草木の生え茂った山肌を黙々と登った。

疲れながらも慣れてきた頃、石楠花がまた口を開く。

「ねえ――お爺ちゃん」

「あん」

「さっき、妖怪以外にも心配事があるって言ってたね。って言うか、今からそのことについて調べに行くんだろ？」

「そうだ」

「それって、何のことだい？　妖怪以外に、一体何が……」

「んむ、実はな、石落自身に関することだ」

石之助は邪魔な枝を横へ払う。

「何から話したもんかな……石落ってのは、確かに優秀な縛師だったが、胡散臭え話も多いんだ。妖怪をこっそり使役していたとか、武家や力のある商人相手に、妙な商売をしていたとかな」

「へえ……？」

「そういう細かい記録も随分あるし、ちょっと考えただけでも、妙なことが出てきたりする。今から見に行く眠り石についてもそうだ」

「考えれば分かる妙なことって、何さ」

「普通、縛師ってのは妖怪を滅ぼすもんだ。字では縛すると書くが、そりゃあ術の性質からであって、結局は、狙った化け物を消滅させ

る。なのに石落は、わざわざ眠り石に数多の化け物を封じた。生かしたままでな」

「あ――そっか」

「もちろん文字通りに縛するだけの場合もあるが……そりゃあ特別な事情があるときのことだし、そういう場合には大抵、封じた土地に、ひとつひとつ塚でも作って奉ってやるもんよ。何も一っ所に集めておく必要はねぇ」

「何か理由があった――ってことかな」

「さあ、分からねえがな」石之助は倒れた木を飛び越える。「それとよ、さっきの姉ちゃんにしてもおかしいんだぜ」

「バカシロのこと？　あいつはいつもおかしいよ」

「そうじゃなくてだ。ありゃあ、ひょっとして、任氏ってやつだろ」

「じんし？」石楠花は記憶をたどる。「ああ……そういえば、会ったとき、そんなふうに名乗ってた気もするけど」

「やっぱりな。髪が白く、別嬪の姿をした強力な狐の化生っていやあ、この国じゃ任氏以外にゃ考えられねえ。もっとも元は中国にいたらしいが」

「ああ、そんなことも言ってたよ」

石之助は、ふんと笑う。

「任氏か――一応今は大人しくしてるようだが、あちこちに残ってる伝承によりゃあ、男も女も片っ端から食いまくり……そればかりか、老人は肉が固いからと鍋で煮込み、妊婦を見つければその腹を裂いて中の赤子まで食らうような、おっそろしく残酷な化け物らしいな。しかも実際会ってみりゃ、あの絶望的な妖力だ。いつ機嫌を損ねてぶち殺されるもんかと、内心さっきまで冷や冷やもんだったぜ」

「……あたしはあいつ関係じゃ、別の意味でいつも冷や冷やしてるけど。で、それがどうしたわけさ」

「うむ、任氏ってのは、石落が残した記録によれば、さる武家の息子を攫ったことにより、石落のもとに殺せという依頼があって、直

後、滅ぼされたことになっている」
「でもあいつったらピンピンしてるじゃないか」
「そこが妙なんだ。石落はなぜ、任氏――あの姉ちゃんを秘密で封じ、生かしておいたのか。それがはっきりしねえ」
「うーん……」
「石落の妙な話は、まだあるぜ」
「ええ？　まだあるのかい？」石楠花は思わず笑う。「あたしのご先祖は随分胡散臭い人だったんだなあ」
「そう言うなと言いたいところだが、そうだったらしいから仕方が無ぇ」
「で、どんな話？」
「他ならぬ石落自身が、眠り石に封じられたって話さ」
「はあ？」石楠花は間抜けな声を出す。「何それ、妖怪でもないのに――しかも、自分で作った異次元の牢獄に、閉じ込められちゃったっての？」
「正確には少し違う。石落が封じられたのは、死んだ後だ。それに渡りの術は石落にしか使えねえから、常世に封印は出来なかった」
「どういうことだい」
「石落は、死んだ後に亡霊として世に害を及ぼしたので、息子たちによって倒され、封じられたと記録にある。ただし、常世の牢獄ではなく、眠り石そのものにな」
「ええっ？」
「霊的な力ってものは確かにあるらしいが、怪談みてえに、幽霊として姿を現したり、現世に干渉できるもんじゃあない。だから亡霊ってのは物の言い様で、恐らく石落は、やはり独自の術と力によって、自分の思念を具現化して残したんだろう。とんだ芸当だが、常世とこちらを行き来するような術を編み出したような男だ。無理のある話じゃねえ」
「でも、害を及ぼしたって、具体的に何をしたのさ」
「そのあたりは記録に無いな」

「分からないんだ……」
「ああ」石之助は頷く。「考えが及ぶのは、多分息子たちの術で思念体は滅ぼせなかったんだろうということと、封印の依代に眠り石を選んだのは、眠り石がそれ自体で強い霊的な力を持っていたからなんじゃねえか――とか、まあ、その程度までだな」
「ふうん」
「ほれ、着いたぞ」
辿り着いたのは山のちょうど中腹、テントを三つつか四つ張れるほどの広さを持つ、平らな足場であった。
ジーンズの膝についた葉っぱを払いつつ石楠花は言う。
「……で、石落の亡霊がどうなってるか、ここまで調べに来たんだね」
「妖怪どもは逃げたと分かって、それはそれで片付いちまったが、石落の封印の方は、どういう仕組みなのかも見当がつかねえ。解けちまってるかどうかくらい、確かめておかにゃあ気持ちが悪いだろうが」
言いながら石之助は、それを見上げる。
石楠花も見上げた。
長く伸びて絡み合う枝々の下、上から下まで真っ直ぐに亀裂が入り、山肌に食い込んでいながら、お互い嫌い合うように左右へ傾いだ、苔むした巨石。
確かに大きいが、ただ、それだけである。
石楠花は少々落胆した。
「……これが眠り石……？　普通の、でっかいだけの石に見えるけど」
「ああ、こいつがそうだ。しかし見事に真っ二つだな。どれだけでかい雷が落ちたんだか……」
「常世の入り口ってどこさ」
「そこにあるぜ」
「え？　見えないけど」

「見えるもんじゃない。まあ、世界の裂け目ってのは血に頼って認識できるもんでもねえから、わしや見神の連中がやってるような、特別の訓練が必要だ。お前にゃ分からんよ。もっとも、わしら石字縛師がいくら訓練をしたところで、見神みたいに存在化した神までは感じられねえがな」

「ふうん……？」

確かに何も分からないし感じない。

それ以前に、色々な情報が入ってきすぎて、そろそろ頭がパンクしそうである。

石之助は笑いながら、眠り石に歩み寄る。

「ったく、おめぇは潜在してる力はでかいくせして、術師としては真っ白けだな。今から勉強しなおすか？」

「もう十分勉強になってるって……」

祖父の背に続きつつ、石楠花は力なく答えた。

石之助は、巨石の足下で、不意にしゃがみ込む。

「この注連縄は――」

千切れた縄を拾い上げる。

「こいつもぶっ千切れたのか。ん――？」

何やら調べている祖父を尻目に、石楠花は間近で巨石を見上げていた。

「……ホント、ただの汚い岩って感じだけど」

す、と手を伸ばす。

石之助の叫びが響いた。

「いけねえ！　これは石字文句の布で締められた縄だ！　眠り石に触るな！」

「へ？」

ぺたり。

時既に遅く、石楠花の手のひらは、眠り石に触れられたところであった。

紫の風が巻き起こった。

三

二階へ上がると、息子の部屋の扉が、少し開いていた。
殿山礼司は、そのドア越しに声をかける。
「シロさん」
「……義父上か。……入られよ」
「失礼するよ」
礼司はゆっくりと入室する。
大輝のベッドの上で枕を抱き、シロはその長身を丸めて寝転がっていた。
礼司はデスクの下から椅子を引っ張り出し、そこに腰を下ろす。
シロは丸まったまま問う。
「何か用ごとかえ」
「いや、あなたの顔色が悪かったものでね。気分がすぐれないのかな」
「そういうわけではない……」
むっくりと体を起こす。胸に抱いた大輝の枕はそのままに。
「ただ、少しばかり嫌なことを思い出しただけじゃ」
「封印されていたことかね」
「それもそうじゃが」遠い目をする。「――あまり話しとうない。なぜかはしろにも分からぬ。ただ、他の者に――中でも大輝に知られるのが……どういうわけか……怖い」
「ふむ？」
「すまぬな義父上。住まわせてもらう身で隠し事など」
「いや、いいんだ」
礼司は首を振る。
肩を弛緩させ、抱いた枕に高い鼻を埋めて、シロは呟く。
「……心安らぐ良き匂いじゃ」
ふふっ、と笑う。

「しろはよく人の肉を食ったから分かる。大輝の身は、まだまだ幼き童の匂いじゃな」
「まあ、あれは実際、子供だからね」
「そうじゃのう。あのように体も小そうて、大輝はまっこと可愛らしき子よ」
大輝の匂いを満喫するように、シロは枕を抱きしめて頬ずりする。
礼司はその姿を眺めながら、静かに問うた。
「少々変わった形ではあるが……あなたは本当に、うちの息子が好きなんだね」
「うむ」
シロは枕にあごを乗せ、柔らかな声で語った。
「こうして大輝の匂いに包まれるだけで、ぽかぽかと暖かい。しろは大輝のことが好きじゃ。それより他に言いようのないことが、もどかしうてたまらぬ。それゆえ、大輝のため、この身に出来ることならば、しろは何なりとしてやりたく思うておるのじゃが……」
礼司がもたれた椅子の背が、きしりと鳴く。
「それは、息子があなたを助けたからかい」
「ん……そうじゃが、しろが大輝に尽くしたく思うは、恩義からではない」
シロは枕に顔を埋める。
「本当に……何と言えば良いものか……だんだんと……だんだんと、好きになったのじゃ。きっかけなど、今となっては分からぬようになってしもうた。……人間の娘のように、この想いを上手に伝える術を、しろは知らぬ……じゃから、しろなりに尽くすつもりでおる。……しかしのう……」
顔を上げ、ため息をつく。
「実のところ、大輝に何をしてやれば良いのかも、しろには皆目分からぬ。いつまで経ってもしろが甘えておるばかりじゃ」
困ったように微笑む。
「何やら愚痴になってしまったのう。許してたもれや」

礼司は腕を組み、軽くうつむいた。
「――そう、か……」
「どうした、義父上。しろの言うことが気に障ったか？　またしろは間違えておるか？」
「いや」礼司は首を振る。「ただ……あなたは何千年も――我々人間には想像もつかないような、長い時間を生きてきたという。……確かに、話していると、まるで何も知らない子供と対しているように錯覚してしまうこともあるが、それはただあなたが、今まで人間という生物を食べ物としてしか見ていなかったために、我々の感情や理屈をよく理解していないからで……あなたは確かに、永い時を生き、色々なことを見て、知ってきた存在だ。それはあなたの眼差しで分かる。なのに、そんなあなたが、生まれてたった十三年しか生きていないうちの大輝を、心の底から好いてくれているのだなあと思うと――何というか」
「妙に思うかえ」
シロはまた微笑む。
「何――生きた年などつまらぬこと。無為な百年もあれば、ぐるりと考えの変わる一夜もある。それが証拠に、しろは大輝に拾われてより今までの短い日々の中で、色々なことを学んだ。年月など朝霧の如く曖昧なものじゃ。しろは大輝を好いておる……この想いこそ確かなことじゃ」
「なるほど――」
「どうした義父上、先程より何やら考えておるようじゃが」
「え？　ああ、いや、あなたを見ていると、ある人のことを思い出すんだ」
不意に瞳の奥を赤い眼で見透かされ、礼司は戸惑って視線をそらす。
「その人も、ひょっとして同じ気持ちで――いてくれたのかな、と」
「誰のことじゃ？」
「ええ……と……だね。いや、あなたが聞いてくれるのなら、聞いてもらいたい話があって、それがつまり、それなんだが……しかし」

礼司は脚を組み、ぶつぶつと言いながら少し迷ったものの、少々の決心と共に、深く息をついた。
「この話は……大輝にもしたことがないんだがね」
「それはしろに聞かせてよい話か」
「うん。まあ、内緒というわけじゃないんだ。ただ、あれに話しても、どうせ信じなかっただろうから、今まで言わなかっただけで。何せ私にも夢のように感じられる出来事で、何というか……その、大輝の母親のことなんだが」
「ほう？」
「変わった名前の人だった。こういう字で……」
デスクの上にあったメモ帳に、礼司はさらさらとその一文字を書く。
――淋。
ぴりりとそのページを切り離し、シロに渡す。
「これで、そそぎと読むんだ」
「ふむ。確かに変わっておるの」
「私は淋さんと呼んでいた。姉さん女房だったんでね」
「いくつ離れておったのじゃ」
「それが――見当がつかないんだよ」礼司は頭をかく。「なにせ、淋さんは私が生まれたときから……いや、どうやらそれより随分と前から私の家にいたようなんだが、その頃には既に、大輝を産んだときと寸分変わらない、二十歳くらいの女性の姿だったんだ。あの人はずっとそのままの年齢だったんだよ。少なくとも、肉体的には」
「ふむ……？」
シロは座りなおす。
「確かに、妙な話のようじゃ」
くん、と鼻をひくつかせる。
そして礼司の昔語りは始まった。
「――私の実家は、青森の、山に囲まれた村の外れに立つ、小さな農家だった。中学校が遠くてね。自転車がすぐに壊れるから、よく家の裏で修理したものさ。辺りは畑だらけで……両親の仕事は、そ

の畑の世話だった。家族は私と、父と母と――それから淋さんの四人だった。あなたも昔の人だから、やっているところをよく目にしたことがあるだろうが、畑仕事というのはなかなか大変なもので、朝から晩まで畑にいなければならない。両親はとても忙しかった。だから私は幼い頃、親にかまってもらった記憶があまり無い。その代わり、家事をやりながらいつも相手をしてくれたのが、淋さんだったのさ」

礼司は懐かしげに微笑む。

「淋さんは――綺麗な人だったよ。あなたのように美人としての迫力みたいなものがあったわけじゃないが、笑顔のとても美しい人で……その笑顔を見ると、心が安らいだ。そんなによく喋る人ではなかったけれど、賢くて優しい人だということは、彼女の表情から分かるんだ。穏やかで、いつも静かに笑っていて――でも、悪戯が過ぎたときは、しっかり怒られたな」

「良い者だったのじゃな」

「ああ。寝る前に本を読んでくれたのも、小学校の授業参観に来てくれたのも淋さんだったし、汚れた服を洗ってくれたのも淋さんだった。淋さんはまるで、もう一人の母親みたいだったよ。ただ――そう、ちょうど十歳くらいになり、分別が付き始めた頃から、私もさすがに疑問に思い始めてね。つまり」

礼司は自分の頬をなでる。

「十年の間に私は大きくなったし、両親もそれなりに老けたのに、淋さんだけは二十歳くらいの姿のまま、少しも歳をとらないんだ。それに気付くと同時に、私はようやく考えるようになった。当たり前のように一緒に暮らしているこの人は、いったい誰なんだろうって――」

窓を見る。

「でも、私はそれを両親にも、淋さんにも聞かなかった。だから今でも、淋さんが何者だったのか、私は知らない」

「なぜじゃ？」

「子供の私でも気付くようなことに、近くに住む大人たちが気づいていないはずはなかった。それに淋さんは私が生まれる何年も前からあの家にいたようだから、その頃からずっと見てきた大人たちが感じる違和感は、私のそれより遥かに強かったのだろう。一部の人たちが気味悪がって心ない噂をしていることも、淋さんがそうした言葉に傷ついていることも、同じ頃分かり始めたのさ。淋さんはあまり強くない人だったから、私は……私が、彼女を守らなくてはいけないと、そう思った」

「うむ」シロは枕を抱きながら言う。「義父上殿は偉い子だったのじゃな」

「そんなに偉くなんかないさ」

礼司は照れ笑う。

「とにかく皮肉にも、そうした心無い人たちの言葉が、淋さんが何者かなんていう疑問は実につまらないものだということを、子供の私に気付かせてくれたんだ。両親が私に何の説明もしなかったのにも、そうした意味があったんだろう。淋さんは私の家族で、そして、それだけが大切なことなんだと分かったんだ。それからは淋さんを守ろうと、子供なりに必死だった」

礼司は脚を組みなおした。

「小学校のクラスには――といっても小さな学校だったから一学年につき一クラスしかなかったんだが、私に向かって淋さんの悪口を言う奴らもいた。そういう連中を、私はこてんぱんにやっつけた。今にして思えば、子供というのは素直なものだから、ただ親から吹き込まれたことをそのまま言っていただけだったのだろうけど……そう考えると、少々悪いことをしたとも思うよ」

「何じゃ。義父上は案外に強かったのじゃな」

「直線的な馬鹿だったのさ。確かにもともと腕っ節は強かったが、それだけじゃなく、淋さんを守れるような男になりたいという一心で、やたらに体を鍛えたんだ。武術の心得があった父に、夜中こっそり稽古をつけてもらったりしてね。もしかしたら――その頃から

もう私は、淋さんに異性としての憧れを抱いていたのかも知れない」

礼司はぽりぽりとあごを掻く。

「買い物のときも、私は必ず淋さんに付いて行って、こっちを見てこそこそと話しているおばさん達に睨みをきかせていた。淋さんの服の袖をしっかり握って……彼女は困ったように微笑っていたよ。――滑稽だろう？」

「いや、しろは可愛いらしいと思うぞ。きっと淋殿も嬉しかったことであろう」

「あなたにそう言ってもらえると安心するが」礼司は笑う。「まあ、そうこうするうち、私は中学生になった。中学にも、やはり私の家に不老の女性が住んでいることを知っていて、妖怪だなんだと――ああ失礼、その頃はあなたのような存在が本当にいるなんて知らなかったもので……」

「良い、良い。しろは気にせぬ」

「いや、本当に失礼した。ともかく淋さんの悪口を言う者は中学校にもいて、それも私は片っ端からやっつけた。先輩だろうが群れていようが……淋さんのことを変に噂する奴なら、誰も彼もお構いなしに、何度でもね。仕返しに高校生の兄貴連中を連れてこられて、たこ殴りにされても、私は決して引かなかったし、最後には必ず黙らせた。家まで来てこっそり嫌がらせをする者も現れはじめたが、必ず見つけて滅茶苦茶に殴り、脅しつけた。がむしゃらに、徹底的にやった。そうこうするうち……何というかその、恥ずかしながら……」

「やんきぃか？」

「……どうしてそんな言葉を？」

「てれびで見た。やたらと殴ったり脅したりする子供はやんきぃじゃ」

「ああ、そう……」

礼司はなぜか出た額の汗を、手の甲で拭う。

「まあ、不良とはちょっと違うんだけれど……いや、結局は同じよ

うな感じになっていたか……。何にせよ、私はその頃から一目置かれるというか、怖れられるようになったんだ。そこら一帯の中学を見渡しても私にケンカで勝てる者はいなかったし、逆らう者もいなくなった。私は親が出てきたら親にも噛み付いたので、やがて大人すら、厄介に思って何も言わなくなった」

「まるで獣じゃのう……。そなたの親は、そなたを怒らなかったのか。てれびでは、子供がやんきぃになって揉め事を起こすと、親は泣いて怒るものだと教えておったが」

「それがうちの両親の変わったところさ。親父は、例えば学校に呼び出されたときなんかは、先生の前で俺のことを蹴飛ばしながら怒鳴るんだが、帰り道ではけろっとしていて、さて酒でも買って帰るかというような調子だったし、母はといえば最初から何も言わなかった」

「それは物分りのよい親じゃ」

シロはころころと笑った。

つられて礼司も微笑む。

「まあ両親はそんな調子で、――淋さんは……」

ふと、遠い目になる。

「淋さんは、そう……私が怪我をして帰るたび、縁側で黙って手当てをしてくれて……それから私の手を握って、泣いていた」

開いた両手を見る。

「……何も言わずにね」

「ふむ」

シロは大輝の枕を抱きなおす。

軽く両手をもみ合わせて離し、礼司は話を続ける。

「そして私が十五になり、町の高校へ進む頃には、周囲一帯で、淋さんについて詮索することが禁忌となっていた。それでもやっぱり時々妙な噂が立つことはあったが、私が睨むまでもなく、すぐ勝手におさまるようになった。私に痛い目に合わされたことのある連中が、やめておけと忠告するからね」

「ようまあ、義父上もそこまでやったものじゃ……しろは感心するわ」
「子供だったのさ。本当に、子供だったんだよ。そんなことをしても――周囲の噂話を全て断っても、彼女が人から訝しがられている事実は変わらないということに、気付くことも出来なかったんだ。彼女は表立った中傷を受けなくなっただけで、相変わらず、私たち家族以外の者に受け入れられはしなかった。あんなことに意味なんて無かったのさ」
「それでも淋殿は嬉しかったはずじゃ」
シロは抱いた枕にあごを乗せ、ぱたぱたと生白い足を遊ばせる。
「そなたの気持ちが伝わらぬはずはない。不器用であれ、自分のためにそこまで懸命になってくれる子を、愛しく思わぬことは無かろう。十五といえばもう立派な男じゃし、女として嬉しく思うてもおかしくはない」
「ん……まあ……」
ぽり、と鼻の頭をかく。
「そう……だった、らしくて」
「む？」
「いや、その」
礼司は決まり悪い笑いを作る。
「だから実は、その頃にはもう……何というか、私たちはね」
「ほう」
察したシロは感心したように目を丸く――とまではいかないが、シロなりに大きく見開いた。
「出来上がっておったか」
「あ、いや……やっぱり私たちは、気持ちの上で何というか……彼女は私が赤ん坊の頃から親のように面倒を見てくれた人だったし、だからお互い、そういう感じとはまた少し違ったんだが……中学を卒業するあたりから、その……どう言ったものか」
「夜ごと床を共にしておったのであろう？」

「いや、親も一緒に住んでいたし、そういったことはほんの時々で」
「同じことじゃ」
「ん――まあ……うん。そう……だね」
逃げ切れずに頷く。
「とにかく……そういうわけで私たちは、形こそ少々特殊だったが、確かに愛し合っていた。だから、高校を卒業し、こっちの方にある大学に進むことが決まったとき、私の方から言ったんだ。もし良ければ、自分と一緒に来てくれませんか、と。――淋さんは頷いてくれた。それから私は実家を離れ、大学に通いながら、彼女と二人で暮らすようになった」
「ふむ」
「そうなってからも、私は彼女が何者なのか、何一つ追求はしなかった。やはり彼女は歳をとらず、いつまでも同じ姿のままだったが、もうそんなことは心の底からどうでもよくなっていた。そして――大輝が産まれたのは、私が大学を卒業し、今働いている一つ前の会社に就職してから、しばらくした頃だ」
す、とデスクを撫でる。
「淋さんは私のもう一人の親で、時が経つにつれ姉となり、一人の女性となり――そして妻となり、大輝の母となった。本当に不思議な人だった。彼女はこんなに私の人生に深く関わったのに、私は淋さんのことを、淋さんであるということしか知らなかったんだ。やがて別れの時がやってくるまで、ずっと……」
「淋殿は、生きておらぬのか？」
「……分からない。この家に越してきて、大輝がようやく物心つきはじめた頃、あの人は突然に消えてしまった。居間の机の上に、置手紙を一枚だけ残して」
目を伏せる。
「まるで夢のような人だった。あんなに一緒にいたのに、あんなに大事だったのに……もしかすると、初めから、この世にいなかったんじゃないかと……そんな風にすら思ってしまう」

静かに息をつく。
「彼女の話はこれでお終いさ。大輝には、ただ行方不明になったとだけ言ってある。そして私は数年後に石楠花の母親と再婚し、その妻も三年前に亡くしたというわけだ」
「ふう――む」
シロはいつの間にか枕を置き、腕組みをした状態で、宙に座って部屋の中を漂っている。
「老いぬ女……か。まるでしろと同じく化生のようじゃが」
宙で寝そべり、考え込む。
「しかし、息子の大輝は一抹の妖気も持っておらぬ。大輝は半妖ではないぞ」
「というと……淋さんは、あなたのような妖怪でもなかった――つまり、人間だったと？」
礼司が見上げる。
シロは唸る。
「おかしな話じゃが、理屈ではそういうことになる。我らあやかしと人が交われば、生まれた子は普通半妖になるものじゃ。そうならなかった淋殿は……」
シロはベッドの上に音もなく背を埋め、ふと天井を睨んで呟く。
「……。もしや……いや、まさかな……」
「え？」
「いや、何でもないわい」
シロはひょいと体を起こし、ベッドから立ち上がる。
「すまぬな、しろにもよう分からん」
「そうかい――」
「力になれず申し訳ない。しろの言葉を、淋殿を探す手がかりとしたかったのであろう？」
「ああ……いや」
礼司は首を振る。
「そういうわけでもないんだ。ただ私は――淋さんの話を、誰かに

聞いてもらいたいというか……話したかったんだよ。現実味のない内容だから今まで誰にも話せなかったが、あなたにならば、すんなりと話せると思っただけさ。こうして人に話すことで、あの記憶は現実だったのだと、少しは自分に言い聞かせることが出来る。第一……何となく、私には分かっているんだ。彼女にはもう二度と会えない。……何となくだが、確かにそう感じるんだ」

椅子から腰を上げる。

「こちらこそ昔話に付き合わせて悪かったね」

「良い。――さて、そろそろ下へ行くか。今日の夕餉はしろが腕を振るうとしよう。飯炊きは石楠花の誇れる数少ない領分であるゆえ、あまり侵してしまうわけにはいかぬがの」

そう言ってシロはころころと笑った。

四

短くもない時間が過ぎて、ようやくシロと父が居間に戻ってきた。ソファに寝そべってテレビを見ていた大輝に、飛んできたシロがいきなり覆いかぶさる。

「大輝よ、待たせたのう。淋しかったじゃろう？」

「うわ、ちょ、ちょっと」

心地よすぎる体温と重み、近すぎる顔が大輝をたちまち赤面させる。

「シロさん、も、もう具合はいいんですか」

「もとより病などではないが――大輝はしろの身を案じてくれたか？」

「え、ええ、そりゃまあ」

「ほんにもう、優しき子よ」

シロは大輝に頬ずりしてから、ふわりと離れる。

「どれ、夕餉の支度に取り掛かるとしようか。赤子の肉と山菜でもあれば、しろの得意な料理を振舞えるのじゃが、そういうわけにもいかぬし……ここは無難に水炊きでもこしらえるとするかの」

言いながらキッチンの方へ飛んでゆく。
　一抹の不安を覚えつつその後姿を見送り、大輝は、向かいに腰を下ろした父に問う。
「――ねえ、親父」
「何だ？」
「シロさんと、何話してたの？」
「ん……」父はテレビから目を離す。「何だ、気になるのか」
「いや、別に――そういうわけじゃ」
言いよどむ大輝に父は微笑んだ。
「安心しなさい。言っただろう？　息子の奥さんにちょっかいを出すような真似はしないよ」
「またそんな……」
「しかし、面白いものだな」
父は、シロのいるキッチンの方へ目を向ける。
　シロの長身は壁の向こうなので見えないが、何やら作業をする音と、どこかの民謡だろうか、聞いたこともないがどこか懐しくもある鼻歌が、ここまで微かに聞こえている。
　父はテレビに目を戻し、しかしそれを見るでもなく、ぼんやりと独り言のように呟く。
「私はまだ帰ってきたばかりだが、彼女がいることで、家の中が賑やかになっているのが分かる。石楠花も――あれの母親が亡くなってからというもの妙に大人びてしまって、私は内心少し心配していたんだが……シロさんと喧嘩をしているときは、あの子も歳相応に、ちゃんと女の子の顔をする」
テーブルから煙草を取り、一本を抜いて火をつける。
「シロさんは、実に面白い人だ」
「うん――」
大輝はソファーの上で寝返りを打つ。
聞こえてくるシロの鼻歌が耳に心地良い。
「俺も……うん。なんか……何ていうんだろう。――シロさんって

……」
そう。
この感じ、何と言えば良いのか。
歌が止み、キッチンからひょいとシロが顔を出した。
「大輝や、ちょっと良いかえ」
「どうしました？」
「電子れんじの使い方を忘れてしもうた。豚の肉を溶かしたいのじゃが」
「ああ、解凍ですか。――よいしょ」
大輝は腹筋に力を入れて起き上がる。
テーブルの脇を通り過ぎ、居間から奥のキッチンへ入ると、もう野菜がそれぞれ綺麗に切られ、まな板の上に積み上げられていた。
なかなかに手早い。
大輝はレンジの前に立ち、ええと、と指を泳がせる。
「俺もそんなにこれ使わないんで、自信ないんですけど……ええと、確か、まず――」
「最初はこれじゃろう？」
大輝とシロの指が同時に伸び、その先が、ボタンの前でつんと触れ合う。
二つの手は、同時に引っ込んだ。
「す――すみません」
「ああ、いや、よい」
シロはふいと顔をそむけ、右手を左手でそっと包み、くすりと笑う。
「……こうして不意に触れ合うと、不思議と気恥ずかしいものじゃな」
「そ、そうですね」
大輝はかゆくもない頭をかいた。
それから無事にレンジを解凍モードで作動させ、ぐるぐると中で回る豚肉を、二人は意味もなく眺めていた。
シロがレンジに目を落としたまま、ぽつりと言う。

「のう、大輝」
「はい？」
「いつまで続いてくれるかのう」
「……え？」
「しろは何だか怖い。まるで、谷に張られた細き糸の上を、爪先で歩いておるように心許ない。おってはならぬ場所へおる気がしてならぬ。しろには、ここは、心地が良すぎる」
「シロさん……」
「しろは惨めな愚か者じゃ」
滑稽な自分を嘲るように、微かに笑う。
「何百年か前までは人など食い物と馬鹿にしておったくせに、今は――あのようなことがあってからというもの……人というものが、内心、怖くて怖くてたまらぬ。そのせいで、大輝を優しい子と分かっていながら、心のどこかで信じられぬ。いつ大輝がしろに飽きてしまい、疎んじるようになってもおかしくないのではと、いじけるように疑っておる」
胸にあてた手が、握られる。
「しろは、心の弱い大馬鹿者じゃ……。すまぬ……。許してたもれや」
「シロさん――？」
大輝がシロの顔を覗き込んだ、その時。
居間のほうで、何かが割れる、大きな音がした。
続けて父の声が聞こえてくる。
「石楠花、何をするんだ！」
戸惑いの色濃い怒声であった。
大輝はシロと共にキッチンを飛び出す。
そして目にした光景は、唐突で、そして異様なものであった。
「しゃ……しゃくネエ……？」
――居間には風が吹き荒れていた。
それは紫の風であった。砂でもなく、霧でもない。空気が――その

空間が、紫に染まり、激しく流れ動いている。
庭との出入り口であるガラス戸が、割れていた。
内側へ飛び散った透明の破片が、居間のカーペットに散乱している。
その上に、石楠花が土足で立っていた。
石楠花は立ち上がった父を見据え、にぃやりと笑う。
「お前のような者に用は無い。邪魔だ。退いておれ」
別人のような、低い声色。石楠花は大輝たちのほうを見る。
「小僧……お前にも用は無い。俺はそこの女狐を返してもらいに来たのだ。それは俺の、気に入りの玩具なのでな」
「しゃくネエ――何言って……？」
石楠花は、大輝の傍らに立つシロに、すっと手を差し伸べる。
「さあ来い、任氏よ。お前の腹に埋め込んだ術はまだ生きておるぞ。また惨めに血反吐を吐き散らしたくなくば――大人しく俺について来い」
「な……」
シロは、一歩、後ずさる。
「貴様はまさか……そのような」
青ざめていた。息と体を震わせる。
まるで怯える子供のように。
「おぬし……石落……？」
「よし、よし。よく分かったな。伊達に幾年もの間、その身で俺の相手をしていたわけではないか」
石楠花は何度も頷く。
「恩知らずな餓鬼どもに封じられ、結構な時を無駄にしたが……雷で注連縄の縛が解けたところに、また運良く俺の餌どもが現れおってな。こうして動くことも出来るようになったので、俺はまた始めることにした。だがその前に――」
ぺろり、下唇を舐める。
「逃がすには惜しい遊び物を、取り戻しに来たというわけだ」

「い――」
シロは首を振る。
「いやじゃ……もういやじゃ。しろはもう……」
怯えた声を絞り出す。
「しろは……あのような仕打ちには、もう耐えられぬ……。この者とも……大輝とも、離れとうない……」
「ほう？」
石楠花は口元をつり上げる。
「俺がしばらく石に縛られていた間に、女狐が立場を忘れたらしい。また一から教え込まねばならんか？　なあ――任氏よ」
その両目が紫に光る。
瞬間、シロが崩れ落ちた。
「う……ぶぐ」
白い手で口を押さえる。その指の隙間から血泡がふき出し、落ちる雫が、ぼたぼたと床に赤黒い斑点を作ってゆく。
大輝は傍らに膝をつき、シロの肩を抱いた。
「シロさん！　どうしたんですか！」
「それの腹の中には、俺に逆らえぬよう、色々と施してあってな。少々手間もかかったが、任氏の体にはそれだけの値打ちがある」
石楠花は腕組みをして笑う。
「見たところ小僧は任氏に懐かれておるようだが、この女の味は、もう知っておるか？　試しておらんのなら、お前は千載一遇の機会を逃したぞ。化生の体は良い。人間の女とは比べ物にならぬ。しかも任氏は、俺が幾年もの時をかけて教え込んだ――」
「……や」
シロは顔を上げ、石楠花を弱々しく睨む。
「やめよ……やめてくれ、この子には……そのような……」
「知恵づいたか。化生が一丁前に恥など覚えおって」
また石楠花の目が光を放つ。
シロは大きく背を反らせ、啼いた。

「うが、ああ、うあああっ！」
口と鼻から、霧のように血がふき出した。
そのまま気を失い――どさりと、前のめりに倒れる。
石楠花が糸で傀儡を操るように両手を舞わせ、そしてシロの脱力した体は、目に見えぬ力で宙に浮き、石楠花の眼前へと吸い込まれてゆく。
「ゆくゆく、これは夜伽の他にも使い道がある。こうして手に戻ってよかったわい」
石楠花はシロの長身を腕に抱きかかえ、高笑いをして、とおんと後ろへ飛んだ。
「さあ帰るぞ任氏、常世に建てたる我が屋敷に」
ガラスを失った戸をくぐり、庭へ。
「お前にはお前の、似合いの役目というものがある――」
そして、月に引き寄せられるように、夜空へ。
シロを抱いた石楠花は飛んでいった。
影はみるみる小さなくなり、それを見送る大輝は、膝をついたまま、何もできず、何一つ、呟くことすらできなかった。

第六章【大輝――たいき――】

一

傷だらけになった石之助が家に戻ったのは、石楠花がシロを連れ去ったのと、ほとんど入れ違いであった。

破れたガラス戸は応急的に雨戸で塞がれ、紫の風で飛び散った諸々の物はそのままに、大輝と父、そして石之助がテーブルを囲む居間。

かちり、こちりと時計の音が耳に障る。

石之助は、洗面所にあったタオルで額の血を拭い、重く唸った。

「……間に合わなかった――ってえわけだ」

「お義父さん」

「考えの回らなかった、わしの責任だ」

血に汚れたタオルを膝の上で握りしめ、父と目を合わせることもなく、下を向いたまま、石之助は語る。

「あいつは……石落の野郎は、雷で注連縄が千切れ、縛が解けてからも、ずっとあそこで待っていやがったんだ。自分の魂を収めるだけの器と、術師としての力を持った、あつらえ向きの依代……自分の血を引く石字縛師の肉体がやって来るのをな」

「お義父さんではなく、石楠花が選ばれた理由は――？」

「潜在力だ。あの子は先祖返りといって、わしなんぞより、よほど術師に向いた体質をしている。単に器としてならば格好の肉体というわけだ」

「つまり……石落という男は、石楠花の体を乗っ取り、それを使っ

て、この時代で……かつて成し遂げられなかった何らかの目的を果たそうとしているわけですか」
「石楠花の体を乗っ取ったのは、一時的なもんだと考えるのが妥当だがな」
石之助は腕組みする。
「今は石楠花の肉体からゆっくりと力を吸い取り、自分のものにしているんだろうぜ」
「それで石楠花は、どうなります？」
「まあ少なくとも、それで死んだりってことは無ぇ。……しかし――」
ちらり、床を見る。
そこにはシロの吐いた血が、まだ乾くこともなく、生々しく残っている。
「……お前らの話を聞くかぎりで……石落があの姉ちゃんを滅ぼさず、自分の元に置いていた理由は、何となく分かったな」
石之助は眉をひそめる。
「数多の人間を食い殺した、その報いだとしてもよ……気持ちのいいもんじゃねえ。考えると反吐が出るぜ」
「――どうしますか、お義父さん？」
「また行くさ」
石之助は、ぐんと立ち上がる。
「眠り石にな。このまま放っておくわけにもいかん」
「……俺も」
大輝は顔を上げる。
「俺も行きます。眠り石に」
「――坊主が？」
「はい」
大輝は、ゆっくりとソファーから腰を上げた。
「俺も行かせてください」
「お前が行ってどうする？　何も……」

石之助はそこで一度黙り、首を横に振った。
「……いや……そりゃあ、わしも同じことか。行ってどうすりゃいいのか、わしだって分かってねえんだ」
やけくそのように笑う。
「いいだろ、好きにしやがれ」
「大輝」
見上げた父が口を開く。
大輝と父の視線が合う。
――沈黙の後、父は言った。
「気をつけて行きなさい」
大輝は何も言わず、頷いた。

二

そこは薄暗い板の間であった。
壁の際に並べられた蝋燭が照らす、閉じられた空間。理を異にする世界の中に、ぽっつりと作られた物理空間である。
その中心に、裸にむかれた美しき女怪が、何か寄りかかれるものでも探すように、たった一人、力なく座り込んでいた。
シロは背を丸めたまま、暴れもしなかった。
声ひとつ上げなかった。
悲しくも、彼女はとうに知っている。
この壁の向こうに、何も無いこと。そこには、認識することも出来ぬ常世の闇が、ただ広がるばかりだということ――ここは常世の牢獄、その別室に過ぎないということを。
またここへ帰ってきてしまったのだ。
「……。帰ってきた、か」
小さく呟く。
その後ろに、すうと石楠花が現れた。
「そうだ、任氏」

シロの細い肩に手をのせる。
「懐かしかろう。お前を縛してから、俺が息子どもに寝首をかかれて封じられるまでの十年余り……毎夜毎夜、共に過ごした寝所だ……」
石楠花の口が、大きく開かれる。
そこから、どぼりと紫の水が流れ出した。
おびただしく吐き出される水は石楠花の喉を、胸を、腹を、脚を伝って床へと流れ、そして石楠花の足下から生えるように、ひとつの人影を形作ってゆく。
「……俺も懐かしいぞ、任氏よ。石に封じられている間も、お前の肌は忘れられなんだ」
低い声で語るのは、水から変じた男の姿。
短く刈られた髪に、鋭い目。熊のような肩をした中年の大男――石落であった。
身に纏った黒い衣は、古き石字縛師の衣である。
石楠花の体が、支えを失ったように床に倒れる。
石落はそれを見下ろし、ふんと笑う。
「俺に根こそぎ力を吸われ、気を失ったか。まあいい、お陰でこうしてまた、自らを形作ることが出来た」
言いながら、右手を顔の横で開く。手はしゅるしゅると糸のようにばらけ、そしてまた元の形へと戻った。生まれ持った血肉に頼らず、精神をそのまま形とした体だからこそ出来る芸当である。手の形を変えるばかりではない。石落の全身は、石落の思うままに変じるのだ。虎を想うならば虎、鷹を想うならば鷹へ。
術によりこの体になった石落は、もはや人ではなかった。
あやかしではない。怨霊などという不確かなものでもない。体を得た意念。意念が形となった体。人を越えた人――それが石落である。
無論――
「これでまた、お前で遊ぶことが出来る。他の妖怪どもを再び集めるのは、その後だ」

にぃやりと笑い、座り込んだシロの裸体に、背後から体を寄せる。
「なあ、俺もそろそろ我慢がならん」
するりと、赤いリボンがほどかれる。
白銀の長い髪が重みのままにこぼれ、リボンは音も無く床に落ちた。
「昔のように……」
白くなめらかな首筋に舌先を這わせる。
「……俺を喜ばせてみろ」
シロは何も言わなかった。
全てを知っているがゆえに全てを諦めた、能面のように動かぬ顔。
ただ、宙を見つめるその目から、ひとすじの涙だけが零れ落ちた。

三

割れた巨石の前に、大輝と石之助は立っていた。
湿った闇。頭上に広がった枝葉の隙間から、月明かりだけが差し込んでいる。
石之助は七枚の札を足下に並べ、両手で印を結ぶ。
「とにかくわしに出来ることはこれだけだ。ここにある常世への入り口を……目に見えるものとする」
ぴしり、ぴしり。
弾けるような音と共に、札が左から順に一枚ずつ、鋭い紫の光を帯びてゆく。
七つの光が立ち上り、巨石の前――ちょうど亀裂の入った前で、ぐるぐると絡み、回り始める。
石之助が何やら早口に唱えている。
みるみる回転が速くなる。
廻る光は紫の光輪となり、そして弾けた。
大輝はその一瞬、目をそらす。
光が止み、ゆっくり視線を戻すと、そこには嘘のようなものがあった。

「……っ！　これ……が……？」
眼前にあったのは、大輝の部屋のドアとそう変わらぬ面積の、長方形の漆黒であった。
写真の一部をナイフで切り取ったような。その穴から向こうの景色が覗き見えているような。
――しかしその向こうには、何も無い。
今、ここに広がっている闇とは比べ物にならぬほど深い闇……いや、闇などという生易しいものではない。
無である。
現れたのは、無へと続く窓であった。
力を使い果たした石之助は、がっくりと膝をつく。
「っ……。そうだ……」怖れの笑み。「これが常世への扉だ……分かるか？　向こう側に、こっち側と同じ理屈が、何一つ存在しねえのが。わしらにとっては、何も無いのと同じなんだよ……」
よろよろと立ち上がる。
「だが向こう側のどこかに、あるはずだ……石落の作り出した三次元の空間が……しかし……」
石之助は、常世の扉に手を伸ばす。
その手は、裂音と共に弾き戻された。
「――ぐっ！」
「石之助さんっ？」
「大丈夫だ……」
石之助は手を押さえて舌打つ。
「……それより、今ので分かったろう。石落め、扉を内側から塞ぎやがった。繋がりが断たれてやがる」扉を睨む。「物質で構成されたわしらの体は、上位世界である常世には入り込めねえ。石落の作った空間には、一応の物理法則が存在しているはずだが――かといって、そこまでの道筋を作る術なんぞ、わしは使えねえ……。だから……どうするか……畜生、わしの頭め、考えやがれってんだ」
石之助は歯軋りをした。

大輝は立ち尽くしていた。
闇を――異世界を前に。
「しゃくネエ……シロさん……」
口の中で呟いた、その時。
――微かな声が聞こえた。
大輝は見回す。
「……えっ？」
「どうした、坊主」
「今……」
声。いくつかの声。押し殺した泣き声、消えかけた叫び、そしていざなう言葉。
耳を澄ます。
確かに、聞こえる。扉の向こうから。
大輝は、一歩ずつ、吸い寄せられるように歩み寄る。
「……聞こえる……泣き声が聞こえる。シロさんが、泣いてる」
「坊主――？」
「しゃくネエがすごく怒ってる。それに……この声は……」
「坊主、危ねえ、扉に近づくな！」
「これは……」
大輝は扉の前で目を閉じる。
――大輝。あなたは大輝ね？
懐かしい声。
そうか。
心の中で、何かが繋がった。
「――母さん？」
大輝の目が見開かれる。
左眼に宿った、黄色く激しい光。ざわざわと逆立つ髪。
石之助が驚き後ずさると同時に、大輝は、それが当たり前であるかのように、細い両腕を突き出した。
肘から先が、超えられるはずのない壁――常世への扉をくぐる。

波紋。

何かが引き裂かれるような音と共に、扉から金色の雷がはしった。

空間が歪み、ぐらぐらと揺れる。

地が震えた。空が震えた。景色が震えた。

ここにある全てが震えていた。

石之助はバランスを崩してその場に尻餅をつく。

「な……」

そこにある、有り得ぬはずの光景を見上げる。

海蛇のようにのたうつ雷の中、大輝の体が光を帯び、扉をくぐり抜けてゆく。

世界と世界を隔てる壁を、大輝の肉体が越えてゆく。

「んな馬鹿な……術も使わず――てめえの体を、上位世界の法則に沿って、書き換えてやがるのか……？」

石之助は身動き一つできず、見上げるだけだった。

「小僧……お前、一体……？」

答えなど見つかるわけもない。

そして大輝は消えた。

光は止み、空間の揺らぎはおさまり、あとに残ったのは老人と静寂と夜の音、それから常世の扉だけだった。

四

突然の束縛に驚いて、思わずシロから手を離し、石落は驚きの声を上げた。

「娘――お前、もう目を覚ましたのか」

石落の太い右腕には、石楠花がしっかりとしがみ付いていた。

「お生憎さま……あたしってば、そんなにヤワじゃないんだ。……それとね」

言いながらも石楠花の両足は、まだしっかりと立つには頼りなく、しがみつくことで何とか倒れずにいる状態である。それでも――ぎ

ろりと、間近にある石落の顔を睨みつける。
「いくらムカつくバカ狐でも……あんたみたいな奴に泣かされてるの見ちゃったら、黙って見過ごすわけにはいかないんだよ！」
「……ならばどうする」
石落は右腕を振るう。
石楠花の体は簡単に浮き上がり、飛んで壁に叩きつけられ、落ちた。
「うっ――」
「お前の精気はもうろくに残っておらん。動き、喋れるだけでも大したものだが」
床に倒れたまま睨む石楠花を、鋭い目で石落は見据える。
「それでも邪魔をするのなら、殺す」
「……、最低だ……」
石楠花は床に爪を立てる。
「お前みたいな奴の血が、あたしに流れてるなんて……最低だよ……。お前なんか、地獄に落ちればいいんだ！」
「よく言えたものだ。その度胸に免じて、俺の手で苦しまぬよう殺してやる」
石落の両腕が変じる。
黒い鱗に覆われた、爬虫類のような腕。鋭い爪がかちかちと鳴る。
シロが立ち上がる。
「やめよ……やめよ石落、しろはもう、お前に弄ばれるを拒まぬ！その娘は傷つけず現世へ送り返してやってくれ！」
「何？」
石落はシロに顔を向け、紫に光る両目で睨みをくれる。
裸の胸を押さえ、シロはまた崩れ落ちる。
「う……ぐっ」
「お前は本当に口の利き方を忘れたらしい」
うつ伏せになったシロの背に足を乗せ、石落は言う。
「俺にその身を使って欲しいのならば、それ相応のねだり言葉とい

うものがあろうが。なあ任氏」
「う――」
シロは鼻と唇の端から赤い血を、そして赤い瞳からは透き通った涙を流し、かすれた声で、ゆっくりと、かつて痛みとともに教え込まれた言葉を紡いだ。
「……しゃ……石落、殿……」
この部屋で、幾度も幾度も言わされた文句を。もう決して口にしたくはなかった、思い出したくもなかった言葉を。
「……この」白い背を踏みつけられたまま。「……この……惨めで浅ましき、任氏めを……」
「し、シロ――」
「……どうか……」
「やめろよシロ！」
石楠花はゆかに這いつくばり、泣き叫ぶ。
「お前、大輝のこと好きなんだろ！　そんな奴大嫌いなんだろ！　言いなりになんか――そんな奴の言いなりに、なっちゃダメだっ！」
「黙れ、娘」
石落が右腕を、びゅるりと伸ばす。
その手は石楠花の小さな頭を鷲掴みにした。
「あ、あっ――」
石楠花の体が持ち上がる。
そのまま壁に頭を押し付けられ、石楠花はうめいた。
「うああっ！」
「そら任氏、早く昔のようにねだってみせろ。この娘が頭の中を撒き散らす姿は、見たくないのだろうが？」石落は笑う。「お前が人間の娘をかばうとは、なかなかに面白いが――俺の手元はいつ狂うかわからんぞ」
「……う」
シロは更に強く背を踏みつけられ、ごほりと咳き込む。
「こ……この、惨めな……」

床に鮮血が散る。
「惨めで淫らな、任氏めの体を……」
「シロぉ――おっ！」
石楠花の突き出した手が空をかく。

五

夕焼けが景色をオレンジに染めていた。
そこはもう無いはずの、小さな公園だった。確か今では、この辺りはマンションになってしまったはずだ。
誰もいない。何の音もしない。
大輝はシーソーの横にぽつりと立ち、誰かを待っていた。
とても淋しい。
まだ大輝は小さな子供だった。今は四歳か……五歳くらいだろうか。そう、ちょうど五歳の頃だった。
ならばこれは、記憶？
違う。だってあの時は――。
大輝は幼い目を見開いた。
「おかあさん」
公園の入り口からこちらへ歩いてくる、髪の長い、若い女性の姿を見つけて走り出す。
真っ直ぐに、夢中で走り、立ち止まった女性の脚に正面から抱きついて、大輝は柔らかなスカートに顔を埋めた。
離してはならない。
大輝は思う。
もう離してはならない。
小さな手が、スカートをぎゅっと掴む。
大輝の頭に、優しく手がのせられる。
「大輝」
母の声。そう、この声だ。

「ごめんなさい……大輝」
「ぼ、ぼく」
大輝は泣いていた。
「ぼく待ってたんだ。い、いつもここで遊んでたら、おかあさん迎えに来てくれたから」
涙で声が崩れる。
「だから、ここにいれば、おかあさん、ぜったい来てくれるって、ぼく」
「ごめんなさい大輝」
母の声も震えた。
「ここであなたは、ずっと待っていたのね。あなたの心は、ずっとここで――」
「おかあさん……」
「いい子にしてた？」
「……うん」
「お父さんは元気？」
「げ――元気だよ」鼻水をすする。「おとうさん、まだ、おかあさんが編んだセーター、大事にしてるよ。ぼく、知ってるんだ」
「そう……」母は目を閉じる。「礼司くん……優しい子。……変わらないのね」
母の声は、押し殺した喜びと、切ない痛みに満ちていた。
大輝は問う。
「ねえ――おかあさん、これ夢なの？」
「いいえ。夢じゃないわ」
「じゃあ何？」
「ここはどこでもないの。過去でも現在でも未来でもあり……あなたの心と存在と……そして私の存在が、全ての時間とともに溶けあう場所よ」
「――ふうん……」
「ねえ大輝、今、あなたは幸せ？」

「……うん。しあわせ」
「みんなと仲良くしてる？」
「うん。……あのね、おばけのシロさんが今、家にいるんだよ」
「おばけ？」
「そうだよ。きれいな人なんだ。面白くて……ぼくのこと、好きだって言ってくれるんだ」
「そう――」
「こわい人だけど、こわくないんだ。それにね、しゃくネエもいるんだよ。しゃくネエはいつもぼくのこと大事にしてくれるんだ。すごく優しいんだ。怒るとすごいけど……でも、やっぱり優しいんだよ」
「そう……」
母は大輝の頭を、そっと撫でる。
「……じゃあ大輝は、その人たちのことを助けに来たのね」
「――え――？」
大輝は顔を上げる。
「ぼくが――たすけに――来た？」
「あなたの強い想いを感じたわ。大事な人たちを救うためにここへ来た――」
母は抱きついていた大輝を優しく離し、しゃがんで目を合わせる。
「その人たちの声も聞こえた。今も聞こえてる。あなたにも聞こえているはずよ」
「声……」
大輝は母の目を見つめながら、耳を澄ます。
「……聞こえる。……泣いてる」
シロさん。しゃくネエ。
「ぼくを、呼んでる……？」
「その人たちの心が、あなたを呼んでいるのよ」
「こころがぼくを呼んでる……」
目を閉じる。

感じる。
深い闇の底で、二人が助けを求めている。
身を切られる痛み。
何も出来ない苦しみ。
全てを諦めさせられ、そして突きつけられた深い絶望。
その中で、二人がなお思う者の姿が。
二人の中にある温かな何かが――自分ならば。
熱い力が胸に宿る。
「――。そっか……じゃあ」
大輝は目を閉じ、言った。
「……俺、行かなきゃ」
まぶたを上げる。
もう大輝は、五歳の子供ではなかった。
小柄な母の目は、もう大輝の目とほとんど同じ高さにあった。
大輝は微笑んだ。
「……母さん、ありがとう。また会えて嬉しかった」
「私もよ」
母――淋は、涙を拭いた。
「私はいつもここにいるわ。そしてあなたと、礼司くんの中に」
「母さん……」
「行ってらっしゃい、大輝。あなたの――今あなたを愛してくれる大事な人たちを、その手で守ってあげて」
「……ああ」
大輝は頷き、そして天を仰いだ。
「今行くよ、しゃくネエ……シロさん！」
左目が光った。

六

こつり、こつりと時計の鳴るリビング。

ソファに腰を下ろし、うつむいていた礼司は、がばりと顔を上げた。

「――大輝――？」

懐かしい幾百の記憶が、突然に体を通り抜ける。

「これは……この暖かさ……淋さん？」

立ち上がる。

どくり、どくりと胸が高鳴る。

「大輝……会ったのか、彼女に――？」

七

常世への扉が、金色に輝いた。

再び、静かに空間が震え始める。

石之助は、じり、と後ずさる。

「何が起きてやがる……」

手の届かぬ場所で、力が動き始めた。

石之助は拳を握り締める。

「坊主――お前なのか？」

八

並んだ蝋燭の灯りのみで照らされた、薄暗い板の間。

その壁際に倒れた石楠花。

腕を怪物のように変形させた、黒衣の大男――石落。

そして。

「何だよこれは……」

着ていたものを全て剥ぎ取られ、石落に踏みつけられたシロは、顔を上げ、血にまみれた唇を開く。

「た――」

信じられぬものを見るような目で。

「たい――き？」
「……シロさん……」
大輝は壁際に目を移す。
石楠花は床にはいつくばったまま、大きな目を見開く。
「大輝――？　そんな――どうして――？」
頭から顔に流れている、紅い筋。
「しゃくネエ……」
大輝は、ぎり、と歯を軋ませる。
そして石落を見た。
石落もまた驚嘆の眼差しで、音も無く現れた大輝を見ていた。
「小僧、貴様いつ――どこから入った？」
「……お前、何してるんだよ」
一歩、前に出る。
「どうして二人が血を流して泣いてるんだ。どうして……シロさんを、足蹴にしてるんだ」
「まさか常世の戸を閉めた術に、何かの手違いでも」
「その足をどけろ！」
大輝は跳躍し、飛び込んだ。
振るわれた拳は石落の不意をつき、正面からその胸を打つ。
石落はシロの背から足を離し、後退した。
「ぬ――っ」
「お前だったんだな！」
大輝は叫ぶ。
「お前が……っ！」
長い髪を散らせて倒れるシロをはさみ、二人は対峙する。
大輝は両手の拳を握り、ぶるぶると震える。
「お前が……そうだったんだな……」
「何が言いたい、小僧」
「……、シロさんは……」
石落を見上げ、今にも弾けそうな感情を理性で抑えながら、ぎりり

と睨む。

「シロさんは、俺と初めて会ったとき、俺の手を引っかいたんだ。抱きかかえても、すごく怯えて、暴れて――家に連れ帰ってからも、何日かは……撫でようとすると、必ず一瞬体を縮めたんだ。人の手が怖かったんだ」

「だからどうした」

「お前がシロさんの心を、そんな風にしたんだ！」

睨みながら大輝は膝をつき、シロの肩を抱き上げる。

シロは大輝の胸の中で、その顔を見上げた。

「た、いき……」

涙に滲んだ声。血に汚れた口元。

大輝は一瞬シロの顔を見つめ、そして再び石落を睨む。

「お前みたいな奴に、シロさんを渡すわけにはいかない。この人は――」

大輝は、はっきりと言った。

「シロさんはもう、俺の家族だ」

「何を……馬鹿なことを。下賤な化生が家族などと、戯言にも程がある」

二人を見下ろし、石落は鼻で笑う。

「それにな小僧。貴様は分かっておらんのだ、これの本当の値打ちと、相応の使い道を。――知らぬのならば教えてくれよう」

瞳の奥で、おぞましい何かが揺れる。

「こやつの体はよい。そもそもが男を惑わすための、極上の体だ。味わえども味わえども飽くことがない。しかも、どのような無茶な遊び方をしても、壊れることがないのだ。抱くのを楽しみながら戯れに腹を切り裂こうと、目を抉ろうと、次の夜には元のとおりに治っておる。分かるか？　これは真の意味で自由にできる体なのだぞ」

熱い声でシロに言う。

「思い出すのう任氏。気丈なお前が床の上をのたうち、もう殺してくれと泣き叫んだ夜の数々を。お前の涙が、無様な悲鳴が、惨めな

言葉で哀願するさまが、俺をなおのこと猛らせた」
くっく、と笑う。
「お前はその浅ましい身で、幾度も身篭っては俺に手間をかけさせたが――いくら流させようと、お前の味が落ちることはなかった……。そうだったな、任氏？」
石落は懐かしそうに語る。
大輝の顔から完全に表情が消える。
石楠花は絶句していた。
そしてシロは――
「う……」
シロは大輝の胸の中で、びくりと体を返して下を向き――嘔吐した。
吐き出されたものが床に落ち、音を立てる。
全てを吐き出し、シロは激しく咳き込む。
「……げ……ほ……」
「シロさん――」
大輝はその体を抱きしめる。
冷えきった細い体から、小刻みな震えが伝わってくる。
耐え切れぬように呼吸が乱れ、背中が痙攣している。
大輝は――唇を噛む。
石落はなおも声を浴びせた。
「さあ、お前の口からも教えてやれ、任氏。貴様がどれだけ卑しく、淫らな化け物かを。俺が教えたことをこの小僧にもしてやるといい。そうすればこの小僧も貴様の」
「ベラベラうるせえんだよ、このクソ野郎」
大輝はシロを優しく寝かせ、ゆらりと立ち上がる。
体を丸めて咳き込むシロから、目を逸らさぬまま。
「分かってんのかよ……自分のしてきたことをよ……」
髪がざわめく。
「この人を……閉じ込めて、お前のくだらない欲のために……」
びりびりと空気が震え始める。

「思い出しただけで、辛くて苦しくて吐いちまうような、酷いことを、ずっと……ずっと、こんな暗いところで……お前は！」
「まだ分からんか小僧、貴様は何も」
「そういうお前はシロさんの何を知ってんだよ！」
大輝の左目が、金色の閃光を放った。
同時に髪が全て逆立つ。
大輝を中心に金色の風が巻き起こる。
石落は仰け反る。
「な……っ」
「――た――いき？」
石楠花はよろよろと上半身を起こす。
「大輝、あんた……」
空間が金色に染まり、動き始める。
どこからか歌が聞こえる。
声無き歌。音階無き歌。常世の歌が。
大輝の言葉、その一つ一つが、全てを強く震わせる。
「お前は知らないだろ……シロさんが、照れると少し目を泳がせること……」
拳がきしむ。
「美味い物食って、美味いと思ったとき、わざわざ箸置いて手を叩くこと……嬉しいとき、細い目が、もっと細くなること……シロさんの、そういう顔や癖なんて……お前は一つも知らないだろ」
頭の中が、熱湯を注がれたように熱くなる。
「苦しんでる顔や泣き顔しか知らないような奴に――そんな顔しかさせられない奴に、シロさんのことを語る資格なんて、無いだろうがっ！」
咆哮のような怒声。
それが、金色の突風とともに、石落に叩きつけられる。
石落の体は後ろへ吹っ飛んだ。
「ぐ……っ、な――」

一度転げ、立ち上がる。
「き、貴様、化生か！」
「石落――っ！」
光に包まれた大輝の額、その中央が、めきめきと変形してゆく。
尖った骨がせり出し――角を成す。
肉に包まれた、一本の角を。
石楠花は呆然とその姿を見上げる。
「大輝、あんた、まさか……妖……？」
石落は大輝から距離をとり、両手を前に突き出す。
「化け物ならば話は早いわ！　術により一息に滅ぼしてくれる！」
石落の前に紫の炎が生まれ、それが次々に文字を形作ってゆく。
「かき消えよ、小僧！」
灼熱が放たれた。
紫の激流が大輝を襲う。
大輝はそれを正面から受けた。
石楠花の悲鳴。
豪炎を片手でかき分け、大輝は――ゆらりと前に出る。
「お前なんかにやられるもんか」
服一重、髪一本燃えはしない。
「俺は二人を連れて帰るんだ」
「馬鹿な――」
石落は、紫炎をものともせず前進する大輝に慄く。
床に手をつき、よろよろと体を起こしたシロも、その光景を見上げていた。
「……大輝……」
涙すら涸れた、赤い目で。
「おぬしは……」
紫炎が尽きる。
石落はじりじりと壁まで後ずさる。
「なぜ――なぜ縛術が効かぬ――貴様は化生では無いのか――？

一体、貴様――」
「……初めて分かった」
大輝は、石落の眼前で歩みを止める。
「憎いよ……お前が憎い。俺の家族を……大事な人の心を傷つけるお前が、憎くて……八つ裂きにしても足りないくらい憎くて……もう、どうすればおさまるのか分からない」
静かな声で。
「これが、本当に怒るってことなんだな」
「その魂……まさか……因果を統べる常世の霊性か？　馬鹿な、なぜ現世に――貴様のような小僧に！」
石落の肩が盛り上がる。
びりびりと衣が裂け、黒い鱗に覆われた体が現れてゆく。
「滅ぼされて――殺されてたまるものか！」
しかし大輝はそれを待たなかった。
「俺はもう許せないんだよ――ッ！」
体を覆っていた光がその手に収束し、形を作る。
閃光の大槍。熱い風が吹きすさぶ。
大輝はそれを両手で掴み、一切の躊躇いを持たず、わき上がる力のままに振り下ろした。
時空を揺るがす衝撃が、怪物に変じようとしていた石落の体ごと、眼前の空間を両断する。
「な……」
石落の目が見開かれる。
黒い血しぶき――刹那の無音――そして――
決壊。
物理空間の瓦解が始まった。
混沌が流れ込み、荒れ狂う。
上下左右の概念が消失し、二つになった石落と、石楠花とシロの体が、ぶわり浮かんできりきりと舞う。
悲鳴と轟音。

壁が崩れてゆく。石落の体が砂と散ってゆく。
その中で大輝は吼えた。
大輝には見えていた。
あたたかな景色、帰るべき場所――守るべき、小さなもの。
大輝はそして、光そのものに姿を変えた。

十

常世の扉が、突如、轟音とともに弾け飛んだ。
石之助は吹っ飛び、地に転がる。
「ぬ――。……うおっ？」
体を起こし見上げたそこには、光り輝く獣がいた。
鹿のようなかたちをした、しかし鹿何頭分もの体躯を持ち、長いたてがみと一本の角を生やした、筋骨隆々たる金色の獣。
背には石楠花と裸のシロが、並んでぐったりと乗せられていた。
石之助は、それこそ飛び出さんばかりに目を見開き、年甲斐も無く大声を上げた。
「な、な、何だァ一体！」
腰が砕けて立つことも出来ない。
妖怪とならば、その昔、幾度となくまみえた。しかし、この獣の放つ神々しい光――同じ場所にいてはいけないような、恐ろしい存在感は。
「こりゃ、まさか神獣……麒麟、か……？」
ごくりと唾を飲む。
まばゆい光が段々と落ち着き、やがて、獣の体はみるみる縮みはじめる。
どさり、どさりと石楠花たちの体が地に落ちた。
そして大輝が――獣から戻った大輝が、そこには座り込んでいた。
両手を後ろにつき、間の抜けたため息を吐き出す。
「……はあ。……疲れた」

「な――お前、坊主」
石之助は立ち上がり、あんぐりと口を開ける。
「こりゃあ……一体」
「あ――」
大輝は疲れた顔を石之助に向ける。
「石之助さん、どうも、戻りました」
「どうもじゃねえよ……」
「救けましたよ」
大輝は、傍らに転がる、気を失ったシロと石楠花を見て微笑む。
「二人とも無事です」
「取り返した――お前が……？　――しゃ、石落はどうした」
「うーん……」
大輝は、ごろりと地面に体を倒した。両手両足を投げ出し、枝々の隙間から見える星空を見上げて呟く。
「俺も――無責任だよなあ……シロさんに、人殺しはダメだとか、さんざん言っておきながら……」
「ああん？」
「石之助さん、上着……シロさんにかけてあげて下さい。裸じゃアレだから……」
「お、おい、坊主」
「すみません、俺、もうへとへとで……喋れないです……」
大輝は目を閉じた。
倒れた三人の姿を見下ろし、石之助は唖然として立ち尽くすのみであった。

第一部エピローグ【陽光――ひのひかり――】

一夜があけて朝も過ぎ、太陽が空の頂に昇った昼間。しかし庭へと続く戸は相変わらず、割れたガラスの代わりに雨戸を閉めてあるので、居間の中は夜のような雰囲気である。

コードレスの受話器を相手に、石之助はソファーにどっかりとあぐらをかき、つるつるの頭をかきながら、もう何十分も説明を繰り返していた。

「だからなぁ、イレギュラーなんだよ。分かったか？　何……？　ああ、もういい！　お前らでずっと考えてやがれ！」

いい加減飽き飽きしたのか、どうやら一方的に通話を終了したようである。

切った電話を傍らに投げ出し、石之助は舌打ちする。

「ったく……見神の連中ってのは頭が固くていけねえ。発現した神獣の力を確認して大騒ぎしてるだろうと思って、こっちから親切に電話してやりゃあ、そんなことは有りえない、有ってはならないの一点張りで、全然話になりゃしねえ。あっちまったもんは、飲み込む以外に仕方ねえだろうによ。まあ、どっちにしろ電話してよかったけどな。もうちょっで大挙して押し寄せてくるとこだったぜ」

向かいの大輝は苦く笑う。

「すみません、迷惑かけちゃって」

ちなみに今日は、あんなことがあった次の日だし――などという曖昧な理由で、石楠花ともども、体よく学校をサボっている。

石之助は首を横に振る。

「わしは構わねえよ。しかし、あの様子だと連中、近いうち、お前

のところに誰か差し向けてくるぜ。今電話してた相手は下っ端だからいいが、上の方は……多分、放っておかねえはずだ。まあ細かいことは言えねえが、面倒くせぇことになるのは覚悟しといた方がいい。特に……あの連中が出しゃばって来たら、輪をかけて面倒になるだろうな」

「はい？　あの連中――ですか？」

「いや、それはまあ、こっちの話だ。それにしても、神獣の霊性か」

石之助は大輝を眺めてため息をつく。

「淋って女――礼司の一人目の女房は、然るべき時に常世から遣わされ、因果を動かすための魂だってのに、本来あるべきじゃない形でこっちの世界に紛れ込んだんだな。それもあろうことか、人の形でよ。恐らく石落が常世に干渉をした影響で来ちまったんだろうが」

ちらり、テーブルについてコーヒーを飲んでいる礼司を見る。

「どえらいもの相手に子供こさえたもんだよ、てめぇは。ことの重大さを分かってるか？」

「細かいことは、私にはどうでもいいですよ」

父はカップを置き、煙草に火をつける。

「淋さんは向こうで元気にしている……それが分かって、私は嬉しいです。彼女は本当に素敵な女性でした」

「へっ。のろけは余計だ。女房を褒めるんなら俺の娘だけにしやがれ」

石之助は肩をすくめる。

石楠花がキッチンから出てきた。

「ねえ、そろそろお昼ごはん出切るけど――バカシロは、まだどこか行ったっきりなのかい？」

「そういえば朝から姿が見えないね」

父は横目で大輝を見る。

石之助は、ふむと唸る。

「どっかで考え事でもしてるんだろうが……そろそろ誰か、探しに行った方がいいんじゃねえのか？」

そして石之助も大輝を見た。
大輝は戸惑う。
「え――」
気まずい間。
大輝は石楠花の方に視線を向ける。
石楠花は、やれやれと首を振った。
「仕方ないな……大輝、あんた探してきな」
「え、俺？」
「そうだよ。まあ、お前の役目だろうからね。――ただし！」
石楠花は菜箸を、びっと向ける。
「必要以上に甘くするなよ！　見つけたら余計なことせずに、さっさと連れ帰ってくること！」
「厳しいですね」
「全くだぜ」
父と石之助は呟いたが、石楠花に睨まれて下を向いた。
箸を下ろし、石楠花は、はあと溜息をつく。
「……ったく……仕方ないとはいえ、これでも譲歩しすぎてるくらいだよ。今回だけだからな」
ぶつぶつと言いながら、キッチンに戻っていった。
そして。
大輝は父親たちの無言の圧力に促されるように、靴を履き、家を出た。
しかし探すといったって心当たりは無いし、相手は空を飛べるシロである。近くにいればまだ探しようもあるが、隣町や、はたまた他県なんかにいた日には、完全にお手上げだ。第一、何を話せばいいのか――と、それは見つけてからの問題か。
「さて……どうしたもんかな」
玄関先で立ち止まり、大輝は何となく庭を見る。
縁側に、降り注ぐ陽光を受け、長い銀髪をわずかな風になびかせながら、ジーンズ姿のシロが座っていた。

「あれ」
雨戸のせいで見えなかったのか。もしかしたら、ずっとここにいたのかも知れない。
大輝は声をかける。
「シロさん」
「あ――」
シロは立ち上がろうとするような仕草を見せたが、結局、気まずそうに座りなおした。
「大輝か……」
目が合わぬよう下を向く。
大輝もどういう顔をしたらいいか分からず、視線を泳がせながら言う。
「あの――そろそろ、昼飯、出来るって……」
「――そうか」
シロはしかし動こうとしない。
大輝はゆっくりと歩み寄る。
「あの、隣、座っていいですか」
「ん、うむ……」
シロは頷く。
大輝はシロの左隣に腰掛ける。
どこかで鳥が鳴いていた。
高い生垣の向こうを、主婦たちが何やら世間話をしながら歩きすぎてゆく。
シロが口を開いた。
「大輝よ」
うなだれたまま。
「すまぬ……こうして助けられながら……しろはどの面を下げて大輝と対せばよいのか分からぬ……今は、どのような顔をすればよいのか……」
さわりと足下の草がなびく。

長い脚を折りたたんで、かかとを縁側に乗せ、シロは膝を抱える。
「……。石落はな……細かくは分からぬが、この世を裏側より操ろうとしておったらしい……そのために化け物を片端から集めておった」
膝の間に顔を隠す。
「その中には、女怪もいくらかおっての……女怪の見目や体というものは大抵、人を惑わすため、男にとって具合がいいように出来ているのじゃ。ひとたび化生と交われば、生身の女子など相手に出来ぬほどにな。石落はそうした女怪を、牢獄とはまた別の間にそれぞれ囲い、情欲の捌け口としておった。しろは……その中でも、特別気に入られておった」
体を縮める。
「あとは、石落めの話しておった通りじゃ……。出来ることなら……」涙に声が濁る。「思い出したくはなかった……あのような……」
「シロさん……」
大輝はスニーカーのつま先を見つめる。
「その――俺、なんて言っていいか分からないですけど……」
本当に、何を言えば良いのか分からない。かけるべき言葉が見つからない。
結局大輝は黙った。
抱えた膝に顔を埋めるシロと、うつむくだけの大輝。
生垣の向こうをまた、買い物袋を下げた中年女性たちが、談笑しながら過ぎてゆく。
その話し声が段々と遠ざかり、やがて聞こえなくなった頃、大輝は忘れていたことを不意に思い出した。
「そうだ――」
ポケットに手を突っ込み、一本のリボンを引っ張り出す。
赤いリボン。崩れゆく空間から脱出する際、遠くの闇へ飛んで行きそうになっていたのを、すんでのところで掴まえたのだ。
「これ……」

「――？」シロは少しだけ顔を上げる。「……それは」
「持ってきたんです。シロさん、気に入って付けてくれてたみたいだから」
そっと受け取り、シロは――わずかだが、微笑んだ。
「気に入るに決まっておる。これはしろが大輝と共にいる証じゃと、大輝が言ったでな」
「……びっくりするくらい安物なんですけどね」
「問題ではない」
シロはたおやかな手つきで自らの銀髪を一つにまとめ、リボンでしばる。たちどころに、頭のてっぺん近くに、見慣れた巨大ポニーテールが完成した。
大輝は小さな声で、しかし聞こえるように呟く。
「それが無くても、シロさんは俺と一緒ですよ。ずっと――」
自分の言葉に顔が熱くなる。変な意味ではないのだが。いや、知らず知らずそういう意味も含まれているのだろうか。
とにかく。
「ずっと一緒ですから」
「……。一緒……」
シロは静かにその言葉を繰り返す。
大切に、噛み締めるように。
いつの間にか、並んで座る二人の間には、握り拳一つほどの間隙もなくなっていた。
ほんの少し時が止まり、その後にゆっくりと、シロの温かな体が大輝にもたれかかる。
「大輝……」
話す息がかかるほど近く、うるんだ赤い瞳が大輝を見つめる。
「……大好きじゃ……」
そしてシロは瞳を閉じた。
まるで、そうすることが定められているかのように。
だからそれは、奇妙なほど自然に。

ほとんど当たり前のように――
陽光の中、大輝は、シロの唇に唇を重ねた。
それは決して激しいものではなく、ただ文字通りに唇を触れ合わせるだけの口付けだった。
ちゅんちゅんと鳥が鳴いていた。
四つ数えるほどの間があった。
やがてシロが目を開け、ゆっくりと唇は離れる。
終わった後、シロは呆けた。
「……はあ」
目をしばたかせ、わずかに戸惑った声で。
「今の……今のは――これが――そうなのか」
夢見心地の面持ちで、震える唇にそろそろと指をやる。
「何と……不可思議な心持ちじゃ……」
一方の大輝は、早くも自らの行いに驚き、慌て始めていた。唇に触れた、柔らかく湿った感触が、遅ればせながら大輝の脳へと届き、激しく混乱させる。
「い、今俺、何を……」
この呟き、相手にしてみれば至極無神経な失言である。
しかしそれは、幸か不幸か、シロには聞こえていなかった。
「ああ――、大輝よ！」
我に返ったらしいシロが、感極まった声と共に、改めて横から抱きついてくる。
「暖かい、暖かいぞ。まるで胸のうちに陽が差したようじゃ！」
「わ、わ」
「手のひらが、指が全て痺れておる。嬉しく、恥ずかしく――これがきすか。しろは今、天にも昇る心持ちじゃ！」
「く、苦し……」
「やはりしろには大輝しかおらぬ！」
「うおあっ！」
大輝は縁側に押し倒された。

上から跨ぐように乗りかかり、シロは狂ったように、大輝の胸に自らの顔をこすり付ける。

「これはもう、好きなどという文句では言い表せぬ！　しろはようやく分かった、この気持ちこそが愛情――愛するということか！」

「な、な」

「愛しておるぞ大輝、しろは大輝のことを愛しておる！　もう――ああ、もう、切のうてたまらぬ！　今ここでしろを抱き、この身を癒し清めておくれ！」

「うえぇっ、ちょっと、って――？」

その時、もがく大輝の視界に、あってはならぬ者の姿が入った。背筋に寒いものが走り、大輝は裏返った声で叫ぶ。

「――ああ！　しゃ、しゃくネエ！」

「何じゃと？」

シロは大輝のシャツを脱がしかけたところでぴたりと止まり、大輝の見ている方を向く。

「なんじゃ小娘、そこへおったのか」

そう。玄関の扉の前には、石楠花が立っていた。

ホラー映画に出てくる幽霊よろしく、全く表情の無い顔で、何を持つでもなくぶらりと両腕を下げ、黙ってこちらを見ている。

実に不気味な姿であった。

大輝はシロに組み敷かれたまま、蚊の鳴くような声で問う。

「……、しゃくネエ……その……いつからそこに」

「――ああ、聞きたいかい？」

石楠花はにこりと笑い、優しい声で答える。

「ヒントだけあげようか。そうだね――思わず立ちつくすようなシーンを見た瞬間から、って言ったら分かるかな」

「う……」

大輝は絶句した。

シロは舌打つ。

「夫婦のきすを覗き見るとは大根より太い小娘じゃ。まあよい。そ

のままそこで、しろたちが愛し合う姿を、一人淋しく見ておるがいいわ」

嫌味たっぷりに笑う。

「何ならもっと近う寄るか？」

ぶちんと何かが切れる音が、少なくとも大輝の耳には届いた。

石楠花が拳を固めて飛び掛かるのと、シロが大輝の上を離れ、縁側から跳躍するのは同時であった。

二人は大輝をよそに庭の中央でぶつかり合い、がっつりと両手を四つに組み合わせる。

シロが悪鬼のごとく牙をむく。これが本物の牙だからひどい。

「いいか小娘よく聞け……今のきすは大輝からしてくれたものじゃぞ……っ！」

「な――」

ぎりぎりと押し合いをしながら、石楠花は縁側の大輝に羅刹のごとき顔を向ける。

「本当なのかよ大輝！」

「ああいや、何というかその、あれは出来心というか」

「で、出来心じゃと！」

今度の失言ははっきりと聞こえてしまった。シロは怒りと悲哀の入り混じった目で大輝を見る。

「大輝は出来心でしろにきすをしたか！　先刻の喜びは、全てしろの一人相撲か！」

「そ、そういうわけでは」

「大輝はしろを好きではないのじゃな！」

「そんな、違っ――好きですよ、シロさんのことは！」

「何言ってるんだ、惑わされるな大輝！」

乙女の怪力妖魔をしのぐ。涙目の石楠花が、ぐぐっとシロの手を押し返す。

組み合いながら石楠花は口惜しげに唸る。

「畜生……ちょっと目を離した隙に、こんな女狐の色香にはまって、

キスまで……」再び大輝を睨んで怒鳴る。「大輝！　あたしにもキスしろ！　今すぐ！」
「うええっ？」
「うええじゃない！　なんでこいつに出来てあたしに出来ないんだよ！　あたしのことは好きじゃないからかっ！」
「す、好きだけど、そんなこと言ったって」
「ああもう、ちくしょおぉっ！」
石楠花は半狂乱の叫びと共にシロを突き飛ばし、その上に乗りかかる。
「こうなりゃ間接キスだ！　バカ狐、大人しくしろ！」
「な……ち、血迷ったか小娘！」
「やめてくれしゃくネエ、そりゃメチャクチャだ――あ痛っ！」
止めに入る大輝も巻き込まれ、もはや三つ巴の様相を呈す大喧嘩を、いつの間にか生垣の向こうに出来た人だかりと、雨戸を開けて覗く石之助たちが観戦していた。
石之助は静かに簡単の溜息を漏らす。
「……わしの孫、強ぇな」
「私の息子は弱いですねえ」父はやれやれと煙草をふかす。「ああ――サルビアの鉢が……まあ、また買えばいいか」
「しかし実際、坊主はどっちに惚れてんだ？」
「真に恋多きは男なり、ですかね」
「どっちも捨てがたいってか。傍から見ると勝手な生き物だな。おっ、姉ちゃんのシャツが……ああ惜しい」
「まだ子供だというのもあるのでしょうが――」
父は大窓の傍に立ったまま、また薄い煙を吐き出した。
「――まあ、確かに我が子ながら、みっともないですね。……あ」
「あ」
二人は同時に口を開ける。
無責任なほど澄んだ青空のもと、手元を狂わせたシロの平手が大輝の頬を打つ、気持ちのいい音が響き渡った。

〈第一部・了〉

第七章【切鬼宿――きりおにのやど――】前編

ぴちょん――と、天井からの水滴がタイル貼りの床に落ちる、風呂場ならではの音が響いたが、広い浴場にいてこのように小さな音を感じられるのも、今が静まり返った夜中だからである。

午前二時をまわっていた。

この浴場は旅館の離れとして建っており、庭に面した壁には大きなガラス窓がある。

女湯であるから、当然のこと、覗く者がおらぬように視界を妨げる木々が外の庭には生い茂っていて、竹で出来た高い衝立もあるのだが、それらも暗さとガラスの曇りのためによくは見えなかった。

とかく静かであった。

村野良恵は、安い旅館にしては大きな浴槽の際に背をあずけ、乳色に濁った湯に胸まで浸かり、深く安堵の溜息をついた。

「生き返るわね……ちょっと日焼けにしみるけど」ここぞとばかり脚を伸ばす。「大きなお風呂って何年ぶりかな。学生寮じゃこうはいかないわ」

一言ずつが浴場に重たく響く。

遅れて体を流し終えた崎山のり子が、ゆっくりと湯の中に足を差し、縁に腰を下ろして、両膝に柔らかな湯をかけつつ苦笑う。

「ホントね。――でもあんた、平気なの？　いきなりどっぷり浸かっちゃって……お酒回って倒れても、私じゃあんたは運べないわよ」

「あたしはそんなに重くないわよ、この無礼者っ」

ばしゃ、と良恵は片手で乳色の湯を撥ね飛ばすが、離れたのり子には届かず、飛沫は湯面にばらばらと落ちてまた一つとなる。

二人の女学生は、それからくすくすと笑いあった。

いま、この浴場にいるのは二人だけであった。

彼女らがこの海沿いの観光地へ来たのは、二日前。勉学に追われ、大学と寮を行き来するばかりの日常と、来年に控えた就職問題のことを僅かな日数でも忘れようと、夏休みを利用して二泊三日の旅行に来たのだが——もうひとつ邪な目的を付け加えれば、海での出会いを静かに、いやそれなりに熱く期待してもいた。なにせ二人が在籍するのは女子大で、しかも住むのは女子寮という、慢性的な資源枯渇ぶりである。こんな機会に出会いを求めるのは悲しき必然といえる。

良恵は、全体的に少々ぷっくりとしてはいるが、ほどよく幼顔で可愛らしい目鼻立ちをしている。夏らしいショートカットもよく似合っており、男から見て、決して魅力的でないわけではない。しかも水着はかなり決めてきた。

のり子の方も、地味といえば地味な顔立ちをしているものの、いかにも女らしい落ち着いた雰囲気を先天的に持っていて、その上スタイルも悪くない。同じく水着はかなり決めてきた。

そんな彼女らだが、数年ぶりに見た波のきらめきに心奪われたのが運の尽きであった。海を前にするなり、飛び上がるように浜辺を駆け、何もかも忘れて塩辛い水の中へ身を投じ、あとははしゃいで時間が過ぎて——気付けば疲れ果てた状態で旅館に戻ってきている。それをあろうことか、しっかり二日間続けてしまった。明日の朝ここをチェックアウトすれば、夢の時間は終わりである。

後悔しているような、これはこれで満足しているような……。複雑な心境を酒にぶつけるように、二人はさっきまで、部屋で缶ビールを何本もかっ食らっていた。

勢いでひとっ風呂浴びようというのは良恵の提案であった。飲酒直後の入浴など、理科系学生の取る行動としては愚かそのものである

が、のり子も「ええ？」と一応呆れてみせたものの、決して反対はしなかった。

二人とも、馬鹿馬鹿しい欲望に任せるのが今は楽しかった。

良恵は、はああ、と高い天井を見上げる。白く揺れ動く湯気の上、今にも落ちてきそうな雫が、いくつも垂れ下がっては震えている。

「……。ま……いっか」

「何がまあいいって？」

ゆっくりと肩まで湯に浸かりながら、のり子は笑う。

「何の出会いも無かったこと？」

良恵は天井を見上げたまま言う。

「そ。海ってだけでけっこう楽しかったしさ。ナンパなんて、そこまで本気で期待してたわけじゃないし」それが全くの本心であるかはさておき。「ほら、あたしたち、これから卒業して――」

「無事に卒業できればね」

「そうだわね……で、それから就職して――それも上手くいけばの話だけど――なんかもう、こんな風に気楽に笑ってられる時間なんて、残ってない気がしない？」

「うん……」

のり子は曖昧に頷きながら、乳白色の湯面から両手を出し、何とはなしに湯をいじる。

「そうかも知れないわね」

「でしょ？　だからさ、あたし――、！」

どぷん。

言葉の途中で、良恵が消えた。

正確には、濁り湯の中へ一息に沈んだのである。まるで落ちるように。いや――引きずり込まれるように。

あとには波紋が残っていた。

のり子は首をかしげる。

「……良恵？」

無音。

そしてまた、水滴の落ちる音。
「ちょっと、まさかあんた……」
お酒が回っていきなり倒れたんじゃないでしょうね。
のり子が立ち上がろうとしたその刹那、良恵が沈んだあたりの湯面が弾けるように割れ、そこから何かが跳ね飛んできた。
それはのり子の、ちょうど左の鎖骨に、ぴしゃりと張り付いた。
「え――」
耳。
「な……に？」
温かな湯の中にいて、のり子の体は急速に冷えてゆく。
それは人間の耳だった。
正確には、入学以来の友人、誰あろう村野良恵の右耳であった。なにせ、このピアスはのり子とお揃いの……胸に赤い軌跡を描きながら、ずるりと落ちる。
「あ――？」
湯船の中にへたり込んだのり子の全身がすくみ上がる。
ばしゃあ、と眼前に濁り湯の柱が立ち、一つの物体が舞い上がった。
断ち切られた友人の顔が半分。
「ゃ……っ」
悲鳴を上げる間も無く。
のり子もまた、乳色の湯の中へ引きずり込まれた。

第七章　切鬼宿――きりおにのやど――

前編

一

後部座席の窓に肩をあずけ、大輝は流れゆく景色を眺めている。景色といっても高速道路で見えるものなどたかが知れているが、こ

うして黙って窓の外でも見ているのが最も無難な姿勢だということを――もっと正確に言うならば、不用意に口をきいたりすれば、無駄な諍いの火種を生んでしまうことになりかねないということを、大輝は出発して二十分が経ったあたりから悟っていた。

ちなみに現在、午後一時半。

一行が、一泊ぶんの荷物を詰め込んだこのミニワゴンに乗って殿山家を出発してから、既に三時間近くが経過している。それというのも、さっきまで渋滞に巻き込まれていたせいである。どうも事故によるものだったらしいが、えらく時間を食ってしまった。このぶんだと到着も大分遅れることになるだろう。

大輝のちょうど真ん前、運転席の父――殿山礼司は、ハンドルを握ったまま、やれやれと軽く肩を回す。

「観光や里帰りの時期ではないから、スムーズに行けると思ったんだがね」

言いながらもその口調は、いつも通り、至極飄々としたものである。

偶然親子で重なった二連休。それを利用した今回の一泊旅行は、この父が言い出したことだった。しかもつい先日、いきなりの思いつきで。

厳密には、家族で夕飯を食べながらテレビの旅番組を見ている際、

「旅行ってしばらく行ってないね」と大輝が呟いたのがきっかけではあったのだが、次の瞬間に「じゃあ来週に行こうか」と即決してしまう父の意外な決断力というか行動力は、良くも悪くも感心に値する。少なくとも優柔不断な大輝には遺伝していない要素である。

大輝の隣で、義姉の石楠花がいちごポッキーの袋を開ける。

「でも、もうそんなに遠くはないよね」

座席越しにカーナビを見て言いながら、石楠花は一本抜いたポッキーを、小さな口にくわえる。

「高速おりたらお昼ご飯にしようよ。あたしもうお腹すいてさ……」

「菓子ばかり食う口でよく言うわい」

助手席で憎々しげに言う女がいる。もちろんのことシロである。

石楠花は眉間にしわを作る。
「何だよう」
「豊かな世に生まれたからと、欲のままに食うてばかりおるから目方が増えるのじゃ。ちいとは控えよ、この子豚」
「な……誰が太ってるって！」
「ふん。いつだったか、風呂場の前にある計りの上へ立ち、目盛りを睨んでおったろうが」シロの声は意地悪く笑う。「見たところ背丈が伸びているようにも思えぬが……ここひと月でどれほど増えた？　言うてみせよ」
石楠花はポッキーを前歯でかつんと折り、「あのなあ」と、きつい物腰で言い返す。まただんだんと声が大きくなってきた。
「あんただって人のこと言えたもんかい。一日中ゴロゴロしてるくせに、暇さえありゃ何か食べてるじゃないか。知ってるんだぞ、裏のおばあちゃんに毎日お茶菓子もらってるの！」
「ばかめ、しろは化生じゃ。人間を丸ごとむさぼり食っても目方は増えんわ」
シロは振り返ってけたけたと笑う。本人の言う通り、あごの細い顔かたちは、大輝たちと出会ってからこちら、三食おやつに昼寝つきという生活習慣にもかかわらず、少しも変わることが無い。
ちなみにシロの、いつにも勝るこの挑発は、察せられるとおり現在の座り位置が気に入らないからである。
父が運転席にいるのは当然のこと固定だが、他三人の配置は、ここへ到るまでに数度換わっている。
出発当初は三人とも、後部座席に、大輝を中央にすえて並んでいた。
だが、石楠花とシロがあまりにも露骨に——それこそ腕ずくで大輝を引っ張り合うもので、見かねた父が席替えを提唱。「このままだと事故になるから」という一言には凄まじい説得力があった。
そんなわけで、一度は大輝が助手席へ避難し、あとの二人が後部座席という形にしたものの、今度は犬猿の間に誰もいなくなった故

に直接的な掴み合いが始まってしまい、左右に揺れるワゴンは路肩に緊急停車。また席替えの会議が行われた。ちなみにそこまでの一連の流れは、まだ高速道路にも乗っていない段階で起きたことである。

結局、石楠花とシロが交互に大輝の隣へ座るという形で落ち着いたのだが、高速に乗ってからこちら、車を降りてよいタイミングが限定されるため、どうにも時間配分のバランスが悪くなり、損をしている側のシロはすねているというわけだ。

シロはもとのように前を向き、はあ、と小さく溜息をつく。

「早く着かぬかのう。情けないほどにやきもきして、もう耐えられぬ。……辛いわい」

本当に淋しそうに呟く。

常識こそ持たぬものの、何千年も生きているだけあって基本的には大人であるシロだが、大輝のこととなると感情がもろに表に出る。よく言えば素直に、悪く言えば、聞き分けのない子供のように。

もっとも、それも仕方の無いことである。ついこの間まで残忍な人食いの化け物でしかなかった——いや、今も根底はそのままなのかも知れないが、とにかく内面に嗜虐性と食欲くらいしか持ち得なかったシロの中に生まれた、数少ない感情らしい感情のひとつが、大輝への好意なのだ。うまくコントロールが出来ないのも必然といえる。

無論、石楠花への露骨な敵対心もそれに起因するものである。だから言うなれば素直すぎる気持ちのあらわれ……なのかもしれない。

父が口を開く。

「しかし大輝、久しぶりだな、あの宿へ行くのは」

「え？」

「覚えていないか。今日予約したのは、お前の母さんと三人で、一度だけ行ったことがある宿だぞ。あれは——お前がどれくらいの時だったかな。夏だったが」

「母さんと……？」

憶えていない。
父は続ける。
「うん。海から歩いて三分もしないところにある宿だよ。海水浴をしようと思えば、着替えも持たずに行けてしまう。そう……あの時はお前、海で蟹に足をはさまれて、大泣きしたな。もう海には入らないと言って、浜辺でずっと母さんにくっ付いていた。甘ったれだったよ」
「お、親父……」
「ほう、大輝が今より幼き頃の話か」シロが興味深げに食いついた。
「大輝はそのように、よく母に懐いた子じゃったのか」
「うん。典型的なお母さん子で、私より淋さんにべったりだったね。それに怖がりでね、夜トイレに行くときも一人で行けず――」
「親父！」
大輝は顔を赤くして余計な思い出話を遮る。
隣で石楠花がくすくすと笑った。
助手席のシロは愛しげに言う。
「そうか。大輝はそうした子であったか。そういえば食み虫に襲われた日、寝惚けてしろを母と呼んでおった」
「し、シロさん」
「あの時も可愛らしかったのう」
「っ……もう……」
大輝はまた黙ることにした。面目丸つぶれである。
四人を乗せた車は、しばらくして高速道路を降り、海沿いの道を走り始めた。
左手には、曇り空のもと冷たそうに波打つ、広く灰色の海が広がり、右手にはいかにも海の町といった風情の、干物屋や土産物屋が見えるようになった。道は遥か先まですっからかんで信号もなく、思いのままに車は走る。
石楠花が海をぼんやりと眺めながら呟く。
「誰も泳いでないね……当たり前だけど。どうせなら夏に来たかっ

たな」

「海ばかりがこの辺りの楽しみではないさ」父が言う。「ここいらでは、いい温泉が湧いているんだよ。近頃では夏に海水浴客で賑わうばかりになったが、ちょっと前までは、一年を通して、あちこちからそれを目当てに来る人もいたんだ」

「へえ、そうなんだ？」

石楠花は、中身を食べ終えて空になったポッキーの袋を、指先で弄ぶ。

シロが思い出したように口を開く。

「そうか――この辺りは……」

「シロさんも来たことがおありかな」

「うむ。おぬしらにとってみれば随分昔の話になるのじゃろうが。……確かにこの土地の湯は良い湯だという話じゃ。こと、女の肌にはな。人間どもの間では美人の湯などと呼ばれておったようじゃの」

シートの上で長い脚を組みなおす。「石楠花にはあつらえ向きの温泉ということよ。喜ぶがいいわ」

「腹立つ女……」

石楠花はシロの後ろ頭を睨みながら、ポッキーの袋をぶつりと千切る。

その音を聞きながら、隣の大輝は静かに溜息をついた。

もうしばらく走るとファミリーレストランがあったので、遅い昼食は無難にそこで済ませ、シロにしてみればお待ちかねだった席替えをすると共に、一行を乗せた車は再び走り出した。

そして、海岸線に沿って四半刻ほど。

窓の外にちらほらと民宿や大型ホテルなども見え始め、なかなか行楽地らしい風景になってきて――やがて到着したその宿は、確かに海水浴場らしい砂浜からほど近く、それでいてどこか落ち着いた、まるで隙間のような場所に、ひっそりと隠れるように建っていた。

今はどのみち海の季節ではないので、この土地自体が静まってはいるが、夏になっても、きっとこの小さな一帯だけは、まるで喧騒

の狭間にある谷の如くに落ち着きを忘れぬことであろう。周囲には変哲のない民家が目立つ。

とはいえ、この宿そのものの風格はなかなかで、小さな二階建てではあるがしっかりとした作りであるのは一目で分かり、しかも良い具合に年季の入った瓦葺の屋根と、これまた味わいある漆喰の壁とが、テレビの旅番組で見るような、いわゆる隠れ宿的な雰囲気を醸し出している。砂利が厚く敷かれ、名は分からぬが趣のある木々で囲われた駐車場の奥には、小さな池があるのも見える。

一行がぞろぞろと車を降り、後ろの扉を開けて荷物を引っ張り出し始めると、いらっしゃいませと出迎える言葉の代わりに、何やらけたたましい怒鳴り声が聞こえてきた。

声は暖簾の下からであった。

もっとも、怒鳴り声というにはいささかながら迫力に欠ける、幼い子供の――それも女の子のわめく声である。

「しつこいよ！　いいから帰って！」

甲高い声の主は、やはり年の頃は十かそこらの少女であった。髪を男の子のように短く切り、だぶだぶのズボンをはいたその小さな女の子は、旅館の入り口で仁王立ちになり、二人の大人相手に喧々とわめいている。

「大人のくせしてバカみたい！　何がそんなに面白いの？」

「いや、お嬢ちゃん、僕たちだって別に、あんな噂を本気で信じてるわけじゃないんだよ。ただ――ちょっとほら、そういう雑誌の仕事だからさ。出来れば女将さんに話を聞きたいんだけど」

男二人の片割れ、白いパーカーを着た三十前後の男が、かがんで少女に目線を合わせる。

少女は真っ直ぐにその顔を睨んだ。

「お母さんだって断るに決まってるじゃない。それに私、お嬢ちゃんじゃない。カエデっていう、ちゃんとした名前があるんだから」

「参ったな……」

「ねえ、カエデちゃん？」

もう一人、二十歳前後の若い女の方が、やはり腰を折って視線を合わせ、少しきつい調子で言う。

「私たちも、お仕事で来ているのよ。だから、あなたのような子供に断られたからって、何の話も聞かずに帰るわけには――」

「バカにしないでって言ってるの！」また少女の怒声が断ち切った。

「いいから帰ってよ！　あんたたちなんて大嫌い！　私もお母さんも、宿のみんなも、誰も悪いことなんてしてないのに……もう、へんなこと書くのはやめてよ！　帰って！」

地団太を踏む。

「早く帰ってったら！」

取り付くしまも無い様子である。

大人二人が顔を見合わせたところへ、中から和服の女性が現れた。こちらは、見た目にして二十八、九といったところか。薄化粧に黒髪も艶やかな美人である。ただ、どこか疲れたような、幸を奪われたような、弱々しい気配をたたえている。

「何を騒いでいるの、楓？」

派手ではないが品の良い、藍の着物。おそらくは女将であろう。ならばさっきまでの会話からして、カエデという少女の母にあたる女性である。

男のほう――雑誌の仕事というから記者か何かであろうか、ともかく彼は、女将に気まずげな笑みを向け、曖昧に会釈する。

「あ、どうも……」

「――雑誌の、取材の方ですわね」女将は軽く目を伏せる。「電話でお断りしたはずですけれど」

「はあ……しかしその」

「お時間はとらせません」若い女が進み出る。「もちろん旅館の名前も伏せますので、何か」

「そんなこと言って、ここの写真まで載せるくせに！　モザイクかけたって、分かる人には分かっちゃうんだよ！　あんたたちみたいなインチキ記者のせいで……」

「楓」
名を呼び視線で娘をいさめ、若い女将は、記者に深く頭を下げる。
「申し訳ございませんがお応えは出来ません。お帰りください」
口調こそ慇懃でありながら、有無を言わせぬ断り文句であった。
二人組が渋々と退散し、少女がその後ろ姿を睨みつけたところで、ようやく一行は女将に気付いてもらえたらしい。
女将はこちらへ一礼し、苦そうに笑った。
「恥ずかしいところをお見せしてしまいましたね」
挨拶する母の袖を、少女――カエデは、小さな手でぎゅっと掴みながら、こちらを見る。
大輝とカエデの目が合う。
「……いらっしゃい、ませ」
カエデは小さく言った。
大輝はなんとか微笑んだ。

二

海際にあるバス停のベンチに腰をかけているのは、前を通りがかる誰にも不吉な何かを連想させるような、まっ黒い長袖のワンピースを着た、涼しげな顔だちの少女であった。
赤い靴の足下には小さな革張りのトランク。
シンプルなデザインの携帯電話に、まだ乳臭さの残る声で話している。
しかし――その口調はといえば。
「とんだ偶然だが、これでわざわざ遠くへ出向く手間も省けた。まあ幸運というものだ」
潮風に漆黒のツインテールが揺れる。
「予定より早い……か。早ければ早いに越したことは無いだろう。いずれこちらへ来て貰わねばならない存在だ。まず我々のことを認識させておく必要がある」

ミスマッチにも程がある、異様な言葉づかいであった。
少女の年齢など、顔立ちや体つきから知れる。あどけない顔に、細身で小柄な肉体はいかにも未成熟――普通の判断をするならば、十四歳かそこらとみて間違いあるまい。だが少女の口から紡ぎ出される言葉、その形は、この少女が一般的でない特別な環境に生きる存在であることを、ほとんどあからさまに物語っている。
少女は電話を切った。
そして曇った海空を見上げる。
「……さて。何にせよ楽しみだ」
これは独り言であった。
風の吹くほうへ顔を向ける。
少女の目には、目的地行きのバスが、ゆっくりと走ってくるのが見えていた。

三

そんなに広くはないが、四人が泊まるには十分な広さの和室である。
座した四人に茶を注ぎながら、女将はぽつり、ぽつりと語る。
「この宿で人が消えるようになったのは、一昨年からのことです」
急須を置き、下座に膝をあわせなおす。
「どういうわけか、ほんの時たま……お泊りになる方々が、夜のうちにいなくなってしまうのです」
「それって宿代を払わずに逃げただけじゃないんですか?」
大輝は湯飲みに口を付ける。
女将は軽く頷く。
「最初は私どもも、そう思っておりました――。でも、おかしなことに、どなたも荷物がそのままなのです。お金も着替えもそのままで、お客様の姿だけが、朝になると不思議に消えているのです。それに……そのうちに、いなくなった方々が、何と言いますか……本

当に、行方不明になっているということが分かって」
「行方不明――」
石楠花は茶菓子の包みを開けながら小さく繰り返す。
女将は続ける。
「ええ。それで警察の方も、たびたび訊ねてくるようになりました。結局何も分からないという話ですが」
「さっきの二人も、それを取材に来たということですか？」
父の問いかけに、女将は首を振った。
「いえ……あの方々は、その――」恥ずかしそうに言う。「立て続けに人がいなくなるので、気味の悪さを感じる方もいらっしゃるのでしょうね。少し前から不気味な噂も立つようになりまして……夜に庭でお化けを見た人がいるとか、そのような……」
「お化け？」
大輝は思わず、隣のシロをちらりと見る。
シロは面白そうに笑う。
「ほう、化生とな」
「もちろん本当にそんなものがいるわけも無いのですが、お話の種には都合がいいのでしょう。妖怪旅館などと、面白おかしく書き立てるところも御座いまして……先ほどの方々も、そうした雑誌を作っていらっしゃる方のようです」
シロがよけいなことを言わぬ前に、大輝が急いで発言する。
「失礼な人たちですね。さっきの子が怒るわけだ」
「あの子は娘さんですか？」
石楠花が茶菓子をかじりながら訊く。
女将はうなずいた。
「はい。楓といって、今年で十歳になります。あの子も学校で色々と言われているようで――」目を伏せる。「色々と辛い思いをさせています。せめて、あの子の父親だけでも戻ってくれればいいのですけれど」
「おぬしの夫はどうしておるのじゃ？」

シロが何の躊躇いもなく問う。
女将は生気の無い微笑でこたえた。
「私の夫も……この宿で消えた一人なのでございますよ」
部屋の中が静まった。
一呼吸のち、申し訳無さそうに女将は立ち上がる。
「お耳汚しでございましたね。大変失礼いたしました」
ごゆるりとお寛ぎ下さいませ、と丁寧に頭を下げ、女将は廊下へと出て行った。
残された四人は顔を見合わせる。
石楠花が、取り合えずシロを睨む。
「あんたなあ……」
「なんじゃ小娘、文句でもあるのか」
「まあまあ」
大輝が茶をすすりつつ治める。
父が煙草に火をつける。
「それにしても——行方不明……か。シロさん」
「む」
「どうだね、ここに何かいると思うかい？」
「ふん、そうじゃのう」
シロは、ぽり、と細いあごをかく。
「この宿に妖気は無い。石楠花、おぬしも何も感じまい」
「え？　あ、うん」
石楠花は頷く。
大輝は茶碗を置く。
「何もいないってことですか？」
「そうとは思うが、なかなか言い切れるものではない。位の高い化生ならば、妖気を全く隠してしまうことが出来るからの。しろも今そうしておる。ほれ——」
言いながらシロがふうと息を吐く。わずかに髪がざわめいた。
石楠花が怯えるように背を丸めた。

「う、ちょ、ちょっと、あんた……っ！」
「ほほほ」
シロは楽しげに笑ってから、こほんと咳を払う。
重圧から解放されたように、石楠花は深呼吸した。
「ぷはあ――」シロを睨む。「このバカ狐、いきなり何するんだい！　人が気を抜いてるときに！」
「しろは普通にしただけじゃがな」
たおやかな両手で茶碗を取り、ゆるりと口へ運ぶ。
呆気に取られた大輝と父に、シロは微笑んで語る。
「しろも普段は妖気を隠しておる。しろのような強い化け物が普段から妖気をばら撒いておれば、そこの小娘など重みで寝込んでしまうわ」また茶をすする。「――妖怪や、この小娘のような石字縛師どもは、隠れた妖気もある程度は感じ取れるが……高級の化生がこうして上手に隠してしまえば、まあ、まず分からん」
「何ともいえない、というわけだね」
父は煙を吐き出す。
大輝は茶碗を置く。
「なんか、ちょっと怖いな」
「案ずるでない。何か潜んでおっても、大輝と義父上のことは、このしろが守ってやるからの」
「……おい、あたしは？」
「石楠花は心配いらんじゃろう。その顔で脅せばどんな化け物でも逃げ出すわい」
「このクソ狐！」
「やるか馬鹿娘！」
ばちぃ、と火花が散る――これが本当に散っているから怖い。
煙草を消した父が、さて、と立ち上がる。
「早速だが私は風呂に入ってくるよ。渋滞で疲れたからね。みんなもどうだい」
「おお、良いのう。しろも入りたい」

シロはころりと興味を移し、宙に浮き上がって大輝の袖を引く。
「ほれ大輝、行こうぞ。背中を流させておくれ」
「い、いや……男湯と女湯って別だと思いますけど」
「何じゃつまらん。じゃあやめた」
シロは座りなおす。
戸棚から浴衣を取り出しながら、父は微笑む。
「そうがっかりしたものじゃないよ。ここは小さな宿で部屋数も多くは無いが、そのぶん風呂場が大きいんだ。表からはよく見えなかったが、池のある裏庭を越えたところに離れがあってね。そこが浴場になっている。もちろんリゾートホテルの大浴場なんかにはちょっと負けるが、空いているだろうし、きっと満足できると思うよ」
「ほう――大きな風呂か」
シロは興味を取り戻したらしく、また、ふわりと床から浮いた。
「なんとも懐かしい。山へ住んでおった時分には、夜ごと麓の温泉に浸かりながら酒をやっておったものじゃ。あそこは人が来ぬので、鹿やら猿も一緒に入っていたのう。静かで良い場所であった」
「山奥の秘湯で夜の酒か。実に風流だね」
「酒のない時には人間の生き血じゃったがな。いずれ子供の洒落頭を切って作った杯に、こう、とくとくと注いで――」
「それは少々コメントしづらい光景だが」
父はさすがに苦笑いする。
シロは、よし、と軽く拍手を打った。
「やはりしろも行ってみるとするか。大輝はどうする？」
「あ、俺はあとでいいです」大輝は茶を注ぎなおしているところであった。「ちょっと部屋でゆっくりしてますよ」
「今のうちにお土産買っておきたいから、あたしも後でいいや」
「石楠花には訊いておらん」
「……何だよその言い方。さっきからやけに突っかかるなあ」
「五月蝿い。土産でも男でもさっさと勝手に買うて来い。しっ、しっ」

「こいつ――車の中でのこと、まだ根にもってるんだな！」石楠花が拳で机を叩く。「大人のくせしてしつこいぞ！」

舌打ちしてシロがやり返す。

「やかましい！　大体しろは、あんな狭い乗り物の中におぬしと居ること自体気に食わんかったのじゃ！」

「あたしだって好きであんたと旅行に来たわけじゃない！　ホントなら――」石楠花はちょっと口ごもる。「ほ、ホントならなあ……っ」

あっ、とシロが石楠花を指で指し、真っ白な牙をむく。

「もしや貴様、しろがいなければ、この旅で大輝と深い仲になれたであろうに……などと考えておるな！　此度は義父上もおるというに、何たるはしたなきことよ！」

「あ――あんただって人のこと言えるもんか。毎晩毎晩、あの手この手で大輝のこと誘惑してるくせに！　今回だって荷物の中に変な雑誌入れてるだろ！　何だよティーンズセックスマニュアルって！　あんたのどこがティーンズだ！」

「じろじろと人のすることを盗み見おって！」

「人でもないだろ、このバケモン！」

二人の言い合いはあっという間にヒートアップしてゆく。

大輝は止めようとする気力もなく、ただ肩を落とす。

父はといえば、早々と支度を済ませ、一人勝手に部屋を出てゆくところであった。

三

五分三十秒――。誰が計っていたわけでもないが、今回シロと石楠花が言い合っていた時間である。瑣末な理由でそれだけ口喧嘩が出来るのだから、二人の仲の悪さも既に才能の域に達している。

ともかく今、シロは一人で広い湯船につかり、のんびりと長い手足を弛緩させていた。

「ふう……」
妙になまめかしい溜息が浴場に響く。
離れというから露天風呂かと思いきや、ここは完全屋内の、言うなれば普通の浴場である。
だが確かに、わざわざ離れを作るだけあって、こんな規模の旅館にしてはずいぶんと大きく天井も高い。シロは一目で気に入っていた。
張りのある真っ白な胸元に、乳色の湯をぱしゃりとかける。
「からみ付き、染み込むようなような良い湯じゃな……」静かに目を閉じる。「もう温まってきおったわ」
額には、じっとりと汗が滲み始めていた。
――それにしても。
シロは思いながら目を開ける。
浴槽の隅に背をもたれ、伸ばした片脚を、すっと湯面からあらわす。
「……我ながら上等の体じゃが」
絹のような肌。贅肉の無い、それでいて柔らかな体つき。くびれた腰に、ふくよかな胸。男の本能を刺激する、ほのかに甘酸っぱい体臭まで、どれを取っても悪いところはない。
なにせ元々が人を惑わすための肉体である。かつてシロが化かし殺した男たちは、誰もが迷いなくこの体にむしゃぶり付き、猿のように虜となって最期の一晩を過ごしたものだ。
なのに肝心本命の想い人ときたら――。
脚を再び湯に沈め、への字眉毛で溜息をつく。
「大輝よ、何を躊躇うことがある……しろはいつでも待っておるというに」
湯気のこもった空間に、切ない呟きが響く。
待っているどころではない。石楠花の言う通り、ここ一月ほど、シロは毎晩のように、大輝にアプローチを仕掛けている。強引に押してみたり、それとなく誘ってみたり。
ほとんどは石楠花の妨害を受けて失敗しているのだが、たまに惜し

いようなところまで行っても、大輝自身に「ちょっと待った」をかけられ、結局は拒絶されてしまう。

ふと顔を横へ向け、窓ガラスに映してみる。

笑っているような細い目がいささか特徴的ではあるが、確かに美人といえる顔がそこには映っている。

しかし、それはどう見ても大人の顔である。人間ならば二十四、五。大輝の歳と並べればダブルスコアかそれ以上だ。もっとも――実年齢は話にすらならないが。

シロは不安に顔をうつむかせる。

「歳がまずいのかのう」

大輝は、そんな小さなことを気にする子ではない。シロ自身が石楠花に向かって言い切った言葉だが、本当にそうだという確証も無い。

どうも人間たちの常識では、男女が付き合う場合、同い年か、男が女よりも年上であるのが一般的らしい。女の方が上の場合もあるが、それもあまり歳が離れていてはいけないようだ。

冷静によく考えれば、大輝が問題としているのは決してそこではないということが分かるはずなのだが、恋する妖怪の迷った思考は、なにかと不安な方向へ一人歩きしてゆく。

――恋敵の石楠花。あの娘は大輝と、たった二つ違いだという。決して口には出さないが、シロの目から見ても、自分より石楠花の方が、どうも絵的に大輝と似合っているような気がする。

石楠花はシロと違い、大輝と何年も一緒に暮らしているらしい。大輝の食事や勉学の世話をしてきたのも石楠花だと聞いた。

石楠花はきっと、シロの知らない、大輝の色々な姿を知っているのだろう。そして大輝も、シロの知らない多くの思い出を、石楠花と共有してきたのだろう。

顔の下半分を湯に沈め、シロは悶々と考え込む。

顔も体も自分が勝っている。あんな小便臭い小娘などに、自分が負けるわけはない。

そう思い込んできたが、人間の色恋がそう単純ではないということも、最近になって段々と分かってきた。女自身が持つスペックの他にも、相性やお互いの距離感など、様々な要素が関わってくるのだ。そういうことを考えると、実は石楠花は色々な点で、シロよりも有利なのではないか。

だから、もしかして。

いや、まさか。……しかし。

シロは考えるうち、少しずつ不安になってきた。

もしや横恋慕をしているのは自分のほうではないのか。そんな怖い想像が、単純構造の頭の中に、ぷかりぷかりと浮かんでは消える。大輝のことを考えると、いつもこうだ。色々と思い悩んだ末、最後には怖いことばかりが思い浮かぶ。そしてそれは、少しずつシロの中にわだかまりとして蓄積してゆくのだ。

――ええい。

シロは湯の中から立ち上がった。

「何にせよ負けるわけにはいかんのじゃ！」

誰もいないのをいいことにそのまま宙を飛び、タイルの上へ着地する。

磨いてやる。手も足も髪も顔も背も腹も尻も胸も腋もへそも、そしてその下も。この体を完璧に磨き上げ――今夜こそ大輝に抱かれてみせる。いや、何がなんでも抱かせてみせる。

「見ておれよ大輝……っ」

燃え盛る感情に呼応して、ごわ、と狐火が舞った。

このカラ元気が、あるきっかけを皮切りにして半日のうちに瓦解すること。そして反動から、かえって焦りと不安のどん底に落ちてしまうことなど、今の彼女には全く考えもつかないことだった。

四

シロが素っ裸で勝手な決意をしているその頃、石楠花と大輝は、

人気の無い浜辺にいた。
静かな波音と、くすんだ空。
二人は裸足になるでもなく、波打ち際に並んで立っていた。
正面からの風に石楠花は目を細めた。
「……二人で海なんて見るの、初めてだねえ」
穏やかに打ち寄せる波。潮の香りが胸を焼く。
「姉弟っていっても、そんなに小さい頃から一緒にいるわけじゃないもんね」
隣の大輝は、ちょっと遅れて頷く。
「う、うん――」
「何か思い出した？　お母さんのこととか」
「いや……あんまり。なんか見たことあるなって気はするけど……」
大輝はもごもごと言葉を返す。
石楠花は首をかしげる。
「どうしたんだい？」
「あ――いや、突然海を見に来ようなんて言うから……」大輝は鼻をかく。「お土産、買わなくていいのかな、と思って」
「分かってるくせに」
「え……？」
「よいしょ」
石楠花はその場にしゃがみ込む。
――少し沈黙があった。
石楠花が言葉を続けるには、少なからずの勇気が必要だったからだ。
水平線を見つめ、石楠花は軽く唇を噛んだ。
ざざ、と波が引いてゆく。
そしてまた押し返されるように戻ってくる。結局、石楠花は続けた。
「その……あたしもさ――はっきりさせとかないといけないんだよね。シロの奴があれだけダイレクトなんだもん。対抗するわけじゃないけど、何ていうか、焦りっていうかさ……。もう分かっちゃっ

てることなんだけど……ちゃんと、言っておかないといけないんだよね」

うつむき、波音に恥ずかしさを紛らせるように石楠花は言う。

「でもなかなかチャンス無くて。だから……あいつには悪いけど、この隙にって感じで、ちょっと抜け駆けした。今さらだけど、あたし大輝が好きだよ」

顔は不思議と赤くならなかった。微笑みながら自然に言えた。

「好きなんだ。あたしのこと見てほしいって思うし、もちろん、あたしも大輝のことが気になる。最近じゃ、バカみたいに大輝のことばっかり考えてるんだ」

はあ、と息を吐き出す。

「……ねえ、どうすればいいと思う？」

「え――？　あ、え？」大輝は戸惑って口ごもる。「どうっ、て……」

「困ったよね。だってあたし、お義姉ちゃんだしね」

しゃがんだまま遠くの雲を見つめる。

「あたしだって大輝のこと、やっぱり義弟だと思うよ。それはあんまり変わってない。でも――このお義姉ちゃんは、義弟のことが好きになっちゃったんだ」

「しゃくネエ……」

「シロのことも、別に心底嫌いってわけじゃないんだ。あいつはどう思ってるか知らないけど――ううん、あいつと二人のときとか、大輝の話題以外でなら、けっこう普通に喋ったりもするし……多分あいつも似たような感じなのかな。でも、大輝のことだと理性飛んじゃうんだ。頭熱くなって、必死になっちゃって……ホント、馬鹿みたい」

くすりと笑う。

「変だよね、こんなの。大輝が困ってるのも分かるんだよ。お義姉ちゃんだと思ってた相手に、いきなり好かれたって、ねえ……。妖怪が人間に惚れてるのも変だけど、これも十分変だよね。だいたい

大輝はまだ中一だし……困らせちゃってるのは、本当に分かるんだ」
大きな貝殻を一つ握り、ゆっくりと立ち上がる。
「でもね、もう仕方ないんだ。好きになっちゃって、ごめん。まあ……今はまだ、何かを決めろなんて無茶なこと、言わないから――さっ」
思いきり海に貝殻を放る。
貝殻はくるくると回り、そう遠くもない波間へ、ぽちゃりと落ちた。
石楠花は大輝に顔を向け、出切るだけ無邪気な笑みで言った。
「いつか大輝がちゃんと決められるようになって、そのとき選んだのが、もしあたしだったら――そしたら、あたしと恋人同士になろうね」
「……あ……」
大輝は頬を赤らめ、それから、こっくりと頷いた。
「……うん」
「へへ」
石楠花は、今度は本当に無邪気に笑った。
しゃり、しゃり、と、背後から誰かの近づいてくる足音がする。
石楠花と大輝は振り返った。
「ん――？」
石楠花の目に映ったのは、片手に小さなトランクを持ち、まっすぐに歩いてくる、細く小柄な少女だった。
黒いワンピースに赤い靴。長いツインテールの髪が、歩みにあわせて揺れる。
――しゃり。
少女は二人の前で立ち止まり、溜息のように言った。
「宿へ着く前に見つけてしまったな」
石楠花は突然の登場に圧倒され、なかなか適当な言葉を検索できないでいた。
ひどく華奢で、異様なほど涼しい顔の少女である。
何を考えているのか知れない冷たい目で、少女は大輝の顔を見据え

る。
「数日前、石之助くんに問い合わせたところ、今日たまたまこちらへ来るらしいと聞いたものでね。都合がいいので会っておくことにした。初めまして――と言っておこうか。よろしく」
少女に握手を求められ、大輝は戸惑いつつそれに応じる。
「あ――よ、よろしく」
その手が離れたところで、ようやく石楠花が口を開く。
「あの……君は」
「君、誰？」
石楠花と大輝の声はダブる。
少女は目にかかった前髪を払いながら答えた。
「入神夜々だ」
「いりがみ……よよ？」
石楠花に負けず劣らず珍妙な名を反復する大輝に、少女は被せるように言った。
「そう。いずれ麒の少年――君と夫婦になる者だよ」
「ええ？」
「げえっ？」
大輝と石楠花は同時に仰け反る。
ざわざわと、波が嘲るように笑った。

（中編へ続く）

第七章【切鬼宿――きりおにのやど――】中編

一

再び宿の四人部屋。

座布団の上の大輝は、誰に命じられたわけでもないが、背を丸めて、きちんと正座をしていた。

その右隣には、黙々と茶菓子をかじる石楠花。

左隣には、日ごろの無駄に雅な仕草はどこへやら、博徒の如く胡坐の片膝を立て、その上に肘を乗せて、ぎりりと正面を睨むシロがいた。普通にしていれば物凄く色っぽいのであろう浴衣姿も、勿体無いことに、やはり女博徒が着流しを身につけているようにしか見えない。胸元からサラシのひとつでも見えそうである。

そして――机をまたいだ正面。

落ち着きはらった様子で茶をすすっているのは、珍客、入神夜々であった。

父は何を思っているものか、離れた窓際の座椅子に背をもたれ、どこ吹く風で紫煙をくゆらせている。

静まり返った部屋の中。

やがて低い声でシロが唸る。

「……やい、夜々とやら」

「何だね」

夜々はシロの超常的な眼光に怯えるでもなく、そっと湯飲みを戻す。

シロは――たぶん飛び掛りたい気持ちを抑えながら――静かに問う。

「おぬしは大輝と夫婦になると……そう言うたな」

「いずれな」

「ぬう……」
当然のように頷かれ、シロはまだ湿った髪をざわめかせる。
続けて問いかけたのは石楠花であった。
「ねえ……君、見神の子だって言ったよね。それってお爺ちゃんが言ってた、神を感じられる家柄ってやつだろ？」
「そう。我ら入神家は、その見神の長集。最も純粋な血統を保った家柄だ」
「何だか分からないけど、どうしてその、見神の人が……うちの大輝と結婚しなきゃいけないなんて、そんな話になってるんだい」
「それを話すと長くなるが――」
夜々は、石楠花とシロを見比べる。
「話さねば君らも納得するまい。まあいい、簡単に説明しようか」
夜々はこほんと咳払いする。
「まず我ら見神の者が、なぜ神気や神意……常世の霊性を感じ、その思いと力を認識することが出来るかだが――簡単な話で、それは我々も神獣の血を継いでいるからだ」
「はあ？」
石楠花が口を開ける。
夜々は当たり前のように言う。
「驚くようなことではあるまい。そこで他人事のように煙草を吸っている殿山礼司くんも、どういうわけかこちらの世に現れた麟と出会い、愛し合い、この少年――麒の霊性を持つ子をなした。あってはならぬことだが、今まで起こらなかったことでもない。もちろん稀有なイレギュラーではあるがね」
「君たちの家柄にも、昔、同じようなことがあったってわけかい。その……イレギュラーが」
「まさにそのイレギュラーが我々の始まりといえる。遥か昔のことだ。伝承によれば――かつて、ある山の頂に、化け物が住んでいた。身の丈は並の男の二倍。丸太のような腕と大きな足、毛むくじゃらで赤ら顔の、醜い怪物だったという。怪物はその体毛の黒さから黒

腕といわれていて、乱暴者である上に大変力が強く、麓の村人たちから恐れられていた」

夜々は語りながら、傍らの開いたトランクからハイライトを取り出し、一本抜いて口にくわえ、火をつける。

流れるような仕草だったが、大輝は少なからずぎょっとした。

「ちょ、ちょっと君――」

「ああ、私は未成年ではないんだ。気にしないでくれ」

「え……」

「話の続きだ」

ふう、と煙を吐き出し、夜々は続ける。

「黒腕は年に一度、一人ずつ、若い娘を差し出すことを村人たちに要求していた。逆らう者は殺されるので、村人は泣く泣く従った。そして差し出された娘たちは誰も帰っては来なかった。儀式は何年も続いた」

「生贄……ってやつ？」

「うん――」石楠花に夜々は頷く。「まあ、そうした形だったようだ」

「そんな話の何どこが、おぬしが大輝にちょっかいを出すことに関係があるのじゃ」

シロは忌々しげにそっぽを向き、ちっちっちっ、と何度も舌打ちする。

「ただの物臭な化生の話ではないか」

無視して夜々は語る。

「我々の先祖は、黒腕に差し出された娘の、最後の一人だ。名をつるといった。彼女は何を思ったか――連れ去られた山の中で、黒腕の嫁となった」

「えっ？　妖怪と結婚しちゃったんだ」

「妖怪ではなかったのだ。黒腕の正体は神獣……つまり麒麟や白澤と同じ、常世の霊性だったようだ。それが証拠に、その血を継ぐ我々は、常世の力と通じている」

夜々はまた煙を吐く。
「最終的に、つると黒腕がどうなったのかは分からない。ただ、記録によれば、つるが嫁入りしたのを最後に、黒腕は村に生贄を差し出すことを要求しなくなったらしい」
「……？　へえ……」
何だか穴だらけの言い伝えだ。大輝は腕組みする。
夜々はさらに続ける。
「つると黒腕の間に生まれた子は四人。男が一人に、女が三人の四つ子だった。誰もが神通力を持っていて、そして彼らは山の中で近親結婚をした。三人の娘が、それぞれ、男児との間に数人ずつの子を生したのだ。見神の家柄の始まりがそれだな」
「近親婚――」石楠花は何ともいえぬ面持ちになる。「で、その頃、つるさんと化け物……じゃなかった、神獣はどうしてたの？」
「分かっていないと言っただろう。もっとも、つるは普通の人間だったから、三代目が大きくなる頃には、もう死んでいただろうがな。黒腕については見当もつかない」
「そんな連中が、どうして山を降りてきたのじゃ。いつまでも山奥で勝手にやっておればよかったものを」
「彼らの生まれた山は活火山だった。それが突然に活動を再開し、彼らは麓の村に姿を現した。そこで村人たちは彼らの神通力を目の当たりにしたんだ。そして彼らのことを聞きつけた時の権力者たちは彼らを呼び寄せ、様々な形で政治の中に取り込んだ。今でも見神と、この国の中枢は深く関わっている。もっとも――」
「ちょっと待った、見神ってそんなに偉いのかい？」
「偉い……か。まあ、君たちの基準で大雑把に言えばそうなのかも知れないな。決して何不自由ないというものでもないが。しかし、それもここ数代では危うくなっている」
「……。血が薄れている――というわけですか」
ようやく父が口を開いた。
余所見をしていたが、一応聞いていたらしい。

夜々は頷いた。

「なるほど、確かに礼司くんは聡明だね。……その通り。我々はその力を失わぬため、政府の管理で古くから近親結婚を繰り返してきたが、それにも限界があり、今はせいぜい常世の力を何となく感じられる程度の者ばかりで、ちゃんとした神通力を継ぐ者は段々と減ってきているし、時たま発現したとしても、その力は実に弱いものだ。私のような先祖返り――一族初期と同じ神気憑きの体質をしている者などは、我ら入神家の中といえど、ごく稀なのだよ」

「それで貴様が大輝の嫁として選ばれたというわけか？　弱ってきた血統に、神の血とやらを混ぜ込むために」

「そうだ。強い力を持つ私と大輝くんが交われば、衰退に歯止めをかけるどころか、更に強い、新たな世代の神血が生まれることは間違いない」

「馬鹿馬鹿しい」シロは吐き捨てるように言う。「しろも最近学んだことじゃが、男と女とは、好き合ってこそ結ばれるものであろうが」

「あたしも――そればっかりは、このバカと同意見だな」石楠花もあとに続く。「それじゃ、君の意思なんてどこにもないじゃないか。ただ婿を取るに相応しい体質ってだけで、結婚なんて嫌じゃないのかい」

しかし夜々は煙草を静かに揉み消した。

「疑問など抱いたことはない。そもそも私は、そのために生まれ、育てられてきたのだよ。母の腹の中にいた時点で、強い血の力を持っていることが分かっていたので、もし万一――此度のようなチャンスがあった時のため、特殊な力を持つ血族たちの力によって、産まれる前に肉体を組み替えられ、性別も修正された。もっともそれを行った者たちも、少し前に死んだがね。私は大輝くんのような存在が現れるのを待ち、やがてそれが現れたとき、見神の中に迎えるための存在だったんだ」

「え……何、組みかえって……修正って、どういうこと？」

混乱する大輝に、夜々は涼しく言う。
「言い遅れたが私は今年で六十三歳になる。それと、見た目はほとんど女の姿をしているが、正確には両性具有者だ」
「え……？」
「チャンスを待つ期間は長いほうがいいので、肉体の成長抑制は当然の処置だった。もっとも、副作用として視力や嗅覚などに影響が出てしまったが、それは精神と能力の鍛錬で何とか補っている。この成長抑制は、技術が失われる前……というか、そういうことの出来る者たちが生きている間は、見神の中でポピュラーに行われていたことだ。性別に関しては言うまでもないね。いつか現れた神性がどちらの形をとっていても問題なく交配できるよう、性別が確定する前に、このように操作したのさ」
「そんなこと……」
大輝は言葉を失った。
石楠花も同様の様子だった。
父も何も言わず――
シロだけが、静かに舌打ちした。
「ご丁寧なことじゃ」
夜々は大輝に微笑む。初めての微笑だった。
「安心したまえ。私の肉体年齢は十四歳前後だが、既に生理が始まっているので妊娠は可能だ。君さえその気になれば、いつでも準備は出来ている」
「――なっ！」
「ちょ、ちょっと待ったあっ！」
シロと我に返った石楠花が、同時に腰を浮かす。
先に机へ乗り出し、噛み付いたのはシロだった。
「貴様、黙っておればいい気になりおって！　ちょっと小奇麗な娘の顔をしておるからと、股ぐらに汚いものをぶら下げておるような奴に大輝の嫁がつとまるものか！」
「汚いとは失礼だな……綺麗なものだぞ、どちらもな」

「な、き、貴様、真顔で何を」
「なにせ来る日のためにずっと純潔を保ってある。見たところ、君はそういう感じではないようだがね」
「なっ――このっ！」
シロは、があん、と机を殴る。
「しろも大輝の前では生娘のつもりじゃ！　肝心のところとて綺麗なものじゃ！」浴衣の裾に手をかける。「目にもの見せてくれようか！」
「うわあ、し、シロさん、ちょ、落ち着いて」
大輝が慌ててシロの袖を引っ張る横で、石楠花も負けじと身を乗り出す。
「あたしだって、君――あんたの理屈がどうあれ、人のものを横からいきなりかっ攫うなんて、全然納得いかないよ！」
「む。ちょっと待て石楠花」
「何だよ狐」
「なぜ大輝を我が物のように語る？」
「大輝はあたしのだろ」
「ど――」シロは立ち上がった「どさくさに紛れて何を言うておるか！」
石楠花も立ち上がって睨み返す。
「うるっさいバカ！　あたしにとっちゃ、こいつもあんたも似たようなもんだ！」
「こっちの台詞じゃ邪魔者め！」
「なにをこの淫乱妖怪っ！」
石楠花が掴みかかり、シロの手が石楠花の顔を押し返し――いつも通りの喧嘩が開始されてしまった。二人は床を踏み鳴らしながら、壁際で押し合いをはじめる。
大輝は正座したまま肩を落とす。
「ああ……何だよこの状況……」
「さて大輝くん」

夜々は二人の注意がそれている隙を狙い、いつの間にか大輝の左隣に来ていた。
大輝はぎょっとして仰け反る。
「は、はい？」
「私も今日はここに泊まることになっている。二階の奥の一人部屋だ。今晩この宿へ泊まる者は他にいないようだから、間違える心配もないだろう。もし来たくなったら来るといい」
「いや……その」
「いずれ毎晩することだ。お互い、慣れるためにも早い方がいいだろう？」
すり寄った夜々は大輝の耳に唇を寄せ、ひそりと囁く。
「君のための私だぞ」
「う……」
ぞくぞくと背が波打ち、理性が死角から侵食される。
何だ、この人の妙に怪しい雰囲気は。
大輝は困惑していた。
当惑の渦に飲み込まれていた。
助けを求めるように父を見る。父は――
父は知らん顔で三本目の煙草に火をつけていた。
面倒なことになっているなあ、私の息子。
横顔が飄々とそう語っているのが分かる。
大輝は涙眼になる。
「お……親父……あんたって」
なんというクソオヤジ。
くすりと微笑い離れてゆく夜々。
喧嘩を続けるシロと石楠花。
大輝は重圧に耐え切れず、机に突っ伏した。ひどく足が痺れていた。

二

夕刻となり、宿の裏庭は薄暗い橙に満ちていた。
静かな木に囲まれて潮風も届かぬこの場所で、小さな池の淵、ごつごつと冷たい岩の上に小さな腰を掛け、夜々は一人、泳ぐ鯉をながめていた。
静かであった。
ふわり、不思議な香りが背より吹く。
甘き中国香。
夜々は振り返らずに口を開いた。
「何だね」
「さっきは石楠花の阿呆と言い争っていて、ろくに文句も言えなかったのでな」
浴衣に宿下駄のシロが後ろから進み出て、夜々の腰掛けた岩の横に立つ。
「今一度釘を刺しておく。大輝に余計なちょっかいを出さんでくれ」
「……出さないでくれとは、随分と下手に出た言い方をするじゃないか」夜々は皮肉っぽく言う。「驚いたよ。悪行の限りを尽くした大妖怪も、彼のこととなると随分必死になるものだ」
シロは舌打ちした。
「しろのことを知っておったか」
「石之助君からの連絡に君のこともあった。もっとも、君の存在自体は以前より記録として知っていたがね。ただ人を襲って食らうばかりではなく、生まれたばかりの赤ん坊の頭を少しずつ砕いてみせ、親が泣き叫ぶさまを見て笑うような、残酷なことを好む妖怪だったとか……」眉をひそめてみせる。「他にも、若い女房を殺して顔と乳房を引き剥がし、その冷えた亡骸を夫に無理矢理抱かせただの、暗い穴倉の中に家族を長く閉じ込めて共食いをさせただの、攫った子供たちに相撲を取らせ、負けた子から順に首を落としてみせただの……趣味の悪い所業は数え切れないほど聞いた。山一つを簡単に焼き尽くす凄まじい力のこともだ」

「だったらどうした」
「実に危険だ。強力で残酷な君という存在は、これ以上ないほど――ほとんど究極的に危険なものだ」
夜々は岩の上に立ち上がる。
「麒の霊性は我々にとって、もしかしたら最後かもしれない希望の砦なのだ。君のように、今は大人しくしているとはいえ、いつ害を及ぼさぬとも知れない存在を傍に置いておくなど、許しておけることではない」
「ほう」シロが笑う。「しろとやり合う気か。……それは冗談ごとでは済まぬぞ？」
「知っている」
夜々は平然と頷いた。
二人の視線が貫き合う。
冷たい風が吹いた。
シロが消えた。
否、動いたのだ。
跳びあがったシロの鋭い爪が、閃電のように岩の上を薙ぐ。空を切った。
夜々は池の向こうに立っていた。
着地したシロは目を見開く。
「何――」
「言っただろう」涼やかに。「私は先祖返りだと。石字縛師や一般の見神のような、ただの人間に毛が生えた程度の者たちと一緒にしてもらっては困る。――私は純粋に強いのだよ」
言いながら黒い服の袖をまくる。細い腕が現れた。
シロは口元を吊り上げる。
「このしろの前で大口を……」
突き出されたシロの片手に、灼熱が生まれる。周囲の土がちりちりと焦げる。
「砕け散り、あの世で言うておれ！」

赤を通り越して白く光る、炎の球が放たれた。
　夜々は動じなかった。
「確かに君のような桁違いのものと比べてしまえば、さすがにスペックは劣るがね――」
その右腕が一瞬で変じる。
大猿のように筋肉が盛り上がり、ざわ、と黒い毛に覆われた。
「残念ながら理というものがある」
夜々が腕を振るうと、炎の球は嘘のように、音もなく掻き消えた。
「差し詰め、鏡が光を透さぬように。分かるだろう？　私もまた常世の霊性なのだよ」
めきめきと、腕が元に戻る。
「君は確かに私より強いが、そうそう私を殺すことは出来ない。君の武器である炎も結局のところ、この世の力だからな。それがいかに莫大な妖力の具現で、どれだけ熱量があったとしても、常世の法則に干渉できないのは同じことさ」
「ふん……」
「気付いていたような顔だね？」
「何のことじゃ」
シロは眉間にしわを寄せる。
　夜々は遅れながら、さっきまで岩にのせていた尻をぱんぱんと払った。喋る口調に、もう闘争の意思は無い。
「先ほどの一撃目だが、当たっていたとしても私の顔面をかすめる程度だった。私を殺すつもりは無かったとみえる」
「……」
シロは答えない。
　夜々は微笑んだ。
「飼い主との約束か。確かに妙な化け物だよ、君は。あの石之助君が、面白い姉ちゃんだなどと言っていたのも理解できた」
「阿呆が。しろは本気でお前を殺すつもりじゃったわ」
「説得力の無い言葉だがそういうことにしておこう」夜々はまた冷

たい面持ちに戻る。「君は相変わらず残忍な妖怪――そうしておいた方が、私にとって都合が良い」
「ふん……？」
「私が君にやられることはないと思うが、君を倒すこともまた簡単ではないようだ。君は本気になれば、もっと速く、もっと強く戦えるようだからね。さすが伝説になるだけあって、基本的な力が桁違いに高い。今は手出しするのをやめておこう。しかし……君がそこまで純粋に、あの少年に惚れ込んでいることは問題だ。いざ障害となったとき、君を滅ぼしてしまう理由は取っておきたい」夜々はツインテールの先端をぱりぱりと光らせる。「その時は、手段も選ばないし全力で君を殺す」
「なんじゃ……何を言うておるかよう分からん」
「バカだな君は」
「何っ！」
「ともかく君は私の恋敵で、それが問題だということだよ。敵対の理由は消えないというわけさ」
「下らんことを言うわ」
シロは嘲り返す。
「何が恋じゃ。大輝と今日会うたばかりのちび娘が。人に決められて恋しておるなどと、馬鹿馬鹿しいにも程がある」
「確かに我々の婚姻は定められたものだが、私が彼のことを全く知らないというのは間違いだ」
「何じゃと？」
「ここだけの話だが、私は彼に会ったことがある。その日から、私なりに彼と再会するのを楽しみにしていた」
夜々は静かに言った。
「もっとも大輝くん自身は覚えていないだろうがね」
「ぬ……？」
「彼は私がもらう。時間はどれだけかかっても構わない。彼の気持ちも私の方へと向かせてみせる。それがあの女との約束だからな」

「わけのわからぬことを……」
「いちいち理解してもらう必要などない」
「何？」
「いざ、障害となれば――そう言っただろう？　どう思い込んでいるか知らないが、君とて大輝くんに片思いをしている一妖怪に過ぎない……少なくとも私の目にはそう映っている。現時点の君は、私が彼を手に入れる上での障害にすらなり得ない」はっきりと言い指す。「彼はまだ、誰のものでもない。君も何となくは分かっているのではないか？」
「う……」
シロは言葉を失った。
夜々はきびすを返す。
「さて。そろそろ宿の者が部屋に夕食を運んでくる頃だ。お互い戻るとしようか」
言うが早いか、宿の裏口へすたすたと歩き出した。
シロは暫しうつむき、自分の爪先を見つめていたが、我に返り、その背に言う。
「大輝に余計な手出しはさせぬからな！」
強いようで、どこか、すがるような声色だった。
「大輝は……しろの……」
言葉の最後は消え入った。
夜々は答えず庭を後にした。
鯉が暴れ、ぱしゃりと池が鳴った。

三

日が暮れて、窓から見える庭はひどく暗い。
浴衣の大輝はフロントの販売機で買った烏龍茶のペットボトルに口を付け、ぬるい中身を重湯のようにすする。目の前には食べ終えた皿と火の消えた小鍋が並んでいる。

出された夕食はなかなか美味かったので、すぐにほとんど平らげてしまった。あとはどうにも苦手な高野豆腐が残るのみである。座布団の脇へ片手をついて、膨れた胃を落ち着かせつつ、シロと石楠花のやり取りを横目で静観する。

刺身を肴に日本酒をやりながら、シロが石楠花の肩にひじを乗せた。珍しく大輝の隣をキープせず、机を挟んだ斜向かい、つまりは石楠花の横へ並んで座っている。

「やい石楠花よ、おぬしも付き合わんか」

真っ白な顔の頬だけがほんのりとピンク色に染まり、心なしか呂律も曖昧である。

それもそのはず、今晩のシロときたら、料理よりもまず、酒、そして酒。傍らには空になった徳利がボウリングのピンのように並んでいる。普段から酒はよく飲むが、今日は少しばかり度が過ぎているようだ。

大輝の横で父が言う。

「シロさん、五月蝿いことを言うようで何だが、石楠花はまだ未成年だよ」

「大人の義父上がたった一本で盃を伏せてしまうからじゃ。まだ顔色一つ変えておらぬというに……しろ一人では面白うないではないか」

「私は常に正気を保っておく主義でね」

「ふん、堅いのう」

シロは口を尖らせる。

石楠花はシロのひじを肩から除けつつ、麦茶の入ったグラスを空にする。大輝と同じく先ほど湯から上がったばかりなので、浴衣の首に厚手のタオルをかけている。

「あのなあ」とんとグラスを置く。「妖怪のくせに酔っ払うなよ。さっきから、ちょっと飲みすぎじゃないのか？」

「やかましい。これが飲まずにやっておれるか。おぬしだけでも厄介じゃのに、女子か男か分からんような、妙ちきりんな娘までしゃ

しゃり出てきおって……」
シロは言いながら大輝を見る。
「しかも大輝は、あれ相手に鼻の下を伸ばしておる始末じゃ。しろは全く気が気でない」
机越しに、それとなく責めるような視線である。
大輝は首を振り否定する。
「そんな……俺は別に」
「いいや確かに嬉しそうじゃった」シロは怒ったように言い切る。
「さっきしろは見ておったのじゃ。あの夜々とやらに耳元で何事か囁かれ、でれでれと面を崩すおぬしの有様をな」
「え……」
「しろは全く面白うない」
すわった目で、ぎろりと睨みをぶつけてくる。
「大輝は日ごろ、自分がまだ幼いのを言い訳にしてしろを拒んでおるが、そんなものは口ばかりの建て前じゃ。ああして小奇麗な娘に言い寄られれば、たちまちふらふらと揺れ動く。立派に男の心があるではないか。結局のところ、しろは惚れた弱みで良いように扱われ、遊ばれておるのとそう変わらぬのではないのか？　どうなのじゃ」
「あ、その、いや……」
大輝は目を下へ逸らして縮こまった。
なんだか今晩のシロは、いつもと一味違う。
シロはふんと顔を横に向ける。
「まあいいわい。石楠花、箸の方はすすんでおるか」
「え？　ああ――っておい、こらこらこら。なに勝手に注いでるんだよ」
「なんじゃ、飲まぬのか」
「飲まないっての」
石楠花は、日本酒を並々と注がれたコップをシロのほうへ押しやる。
シロはにやりと、馬鹿にしたように笑った。

「所詮は子供じゃな」
「なんだよ……」
「酒のひとつも飲めぬようでは、まだまだお子様ということじゃ。茶の湯では亭主の晩酌相手も出来ぬ」
「はあ？」
「それでは女房など務まらんじゃろうが。やはりおぬしなどしろの相手ではないな。いい機会じゃ、このまま負けを認めるがよい」
「な、なに勝手なこと」
「そうじゃろう、なあ大輝」またシロの目が大輝に戻る。「酒を呑むのも女の甲斐性というものよなあ？」
なぜか射すくめるような鋭い視線。
大輝は反射的に頷いてしまった。
「え、はあ……」
「そうれ見よ」シロは赤い顔で意地悪く笑う。「まあ、無理と言うなら強いはせぬ。小娘には、かるぴすや牛の乳がお似合いじゃ。ほほほ」
ひょいと手に取ったグラスに唇を寄せる。
そのグラスを石楠花が引ったくった。
「貸せ」
「お？」
シロが少し驚いたような顔を見せるが早いか、石楠花は、走った後に水でも飲むような勢いで、グラスの中の酒を飲み下した。
大輝があんぐりと口を開け、父が煙草に火をつける。
一瞬の静けさの後、単純な挑発に乗った十五の少女は、喉の奥から意味不明な叫びをあげた。
「う――くあはぁぁあ！」
「ほほほ」シロは愉快そうに肩を揺らす。「なんじゃ、中々いけるではないか」
石楠花は底を叩きつけるようにグラスを置き、空いた皿の前に突っ伏して身悶える。

「んくううううっ！」
「どうじゃ、美味いか？」
「あ――あづ――」顔を上げてぱくぱくと口を動かす。「熱くて辛い！　水！　水ちょうだい！」
「ほれ」
シロがにこにこ顔でグラスを渡す。
大輝と父が止める間も無く、石楠花はその中身をあおった。
そしてまた仰け反り、天井に吼える。
「んがあああっ！」
「単純な娘よのう……」
シロは空になった酒徳利を置きつつ、しみじみと呟く。
石楠花はがばと立ち上がり、シロに組み付いた。
「お――お前なぁ！」
「やるか？　都合が良い、相手をしてやるわ」
「何の都合がいいってんだよ！」
石楠花はシロを突き倒し、マウントに圧し掛かって髪を引っ張る。
シロも負けじと下から往復ビンタ。本当にこの二人は火のつくのが早い。
大輝と父はずるずると机を引いて脇へ除け、離れた壁際に寄りかかった。
石楠花の襟元を掴んで雑言を吐くシロの姿を眺め、大輝は慄く。
「なんか……シロさん、悪酔いしてるなあ。こんなの初めて見た」
「ふむ――」
父は腕組みする。
「――どうだろうな」
「何が」
「いや、邪推かな。それにしても大輝、彼女の言うことには一理あるぞ」
「え……？」
「人を好きになる気持ちというのは、お前が思っている以上に重く、

不安定なものだ。さっきシロさんが言ったことをよく考えてみるといい」

父はそれ以上何も言わなかった。

石楠花の負けが決まるのは早かった。暴れたことで、初めての酒があっという間に全身に回ったのである。自滅に近い状態だ。

二人の戦いは中盤から立ち技の応酬になっていたが、石楠花はやがて、シロの腰にすがるように崩れた。

「うん……ん……」

「とどめじゃ」

こつ、とシロは石楠花の頭を叩く。

それを最後に、石楠花はうつ伏せに倒れた。

乱れきった浴衣姿の義姉は、道で死んだ蛙のように畳に張り付き、もはや言い残す言葉も出てこない様子であった。

シロは、こちらも乱れた浴衣の胸元をぱたぱたと煽り、ほうと息をつく。

「これで十七勝じゃ。乳の膨らんでおらぬ小娘などには負けんわ」

「毎度手加減をしてもらって有難いけれど、うちの義娘はアルコールに強くないようだ」父が穏やかに言う。「酒を飲ませるのは今回だけにしてもらえるかね。もっとも――最初の一杯を呑んだのは石楠花自身だが」

「分かっておる」

シロは倒れた石楠花を見下ろす。

「悪いということは……な。しろも分かっておるわい。ちょっと浜で潮風にでもあたり、頭を冷やしてくるわ」

言いながら浴衣をなおし、壁際の大輝に顔を向ける。

ひどく静かな表情だった。

大輝はぎくりとした。

シロの唇が動く。

あとできてくれ。

声に出さず、シロは確かにそう言った。

父は石楠花に歩み寄るところだったので、気付いていない様子だった。
大輝は立ち上がりかけたが、それより早く、シロは扉のほうへ歩いていってしまった。
「それではの。義父上、石楠花が起きたら悪かったと伝えておいてくれ」
宿下駄を履き、シロは出て行ってしまった。
大輝はぽかんと見送った。

（後編へ続く）

第七章【切鬼宿――きりおにのやど――】後編

一

堤防にちょこんと腰掛けるシロの後ろ姿は、何だか妙に小さく、不思議と可愛らしく見えた。

大きな白銀のポニーテールが、夜の冷たい潮風にそよいでいる。

黒い景色に潮騒が満ちていた。

大輝はゆっくりと歩み寄り、後ろから声をかける。

「……あの」

シロは崩れたような笑みで振り返った。

「ん――来てくれたか」

手には飲みかけの缶ビールがあった。傍らにも、空にしたらしい缶が二つほど並んでいる。あれから今まで、ずっと呑んでいたということか。

大輝は少し緊張して頷く。

「はい――」

「さ、さ。隣へ腰かけよ」

シロに促され、大輝は戸惑いながら、言われたとおりに堤防を跨ぎ、右に並んで腰を掛ける。足の裏と砂地はずいぶん離れており、少しばかりの不安を感じた。

眼前には誰もいない浜が広がっていた。

それを跨いだ向こう、黒い海がざわざわと蠢いている。

シロは少し遠慮がちに問うてくる。

「のう……手に触れても良いかえ」

「え？　あ、はい」

頷くと、シロの手が、大輝の手の甲に重ねられた。

ひんやりと冷えていた。
大輝は思わず言った。
「手、冷たい――ですね」
「そうか？」
「ここでずっと待ってたんですか？」
「ん……まあ、な」
「すみません、俺、いつ出てきたらいいのか分からなくて」
「構わぬ。好きで待っておったのじゃ。しろこそ、こんな夜に呼び出して悪かったと思うておる」
「はあ……」
大輝はいちいち言葉に困る。
さっきまでのシロと比べると変な違和感があり、どういう態度をとったらいいのか分からない。
シロは少し離れた波打ち際を見つめ、夜風に前髪をそよがせている。
その横顔に大輝は訊いた。
「あの……怒ってたんじゃないんですか」
「ん？　ああ」シロはほくそ笑む。「少しばかり酒は回っておるが、怒ってなどおらぬ。大輝をしろが怒るなどと――さっきのあれは、まあ、半分芝居でな」
いつもよりうるんだ目に、ぼんやりとした、安定感のない喋り方。
確かにかなり酔ってはいるようだが、先ほど感じたような棘が無い。
大輝は問い直す。
「芝居？」
「左様、石楠花を酔わせ、寝かせるためじゃ。今こうして、大輝と二人になりたかったゆえのことよ」
「え……」
「石楠花には――悪いことをしたが……こうでもせねば機会がないでな」
ひっく、と胸を上下させながら、シロは小さく付け加えた。

大輝は暫し無言で思考をめぐらせる。
二人になるために。
昼間の石楠花を思い出す。なぜか胸が痛んだ。
シロは海を見たまま続ける。
「……大輝がこうして来てくれて、ほっとした」
ぷらぷらと下駄の足を揺らして、どこか力なく笑う。
「大輝に恋をしてからというもの、しろはいつも不安じゃ。何ごとか為す度、いつ大輝の機嫌を損ねてしまうものかと、内心では四六時中びくびくしておる」
「そんな……」
「本当のことじゃ。今待っておった間とて、手前勝手に呼び出したことを大輝が怒っておるのではないかと――来てくれぬのではないかと、ずっと考えておった。朝まで待って来なかったら、どうした顔で宿に戻るか、どのような言葉で謝るか、そのようなことまでを必死で思案しておった」うつむく。「しろはな、大輝に嫌われるのが怖いのじゃ」
「シロさん……」
シロの手がわずかに震えるのを感じながら、大輝もまたうつむいた。
波音と闇、そして潮の香りが満ちていた。
景色の中に二人だけだった。通りがかる者もいそうになかった。
シロが口を開く。
「……しろが怖れておるのはそれだけではない。大輝が、誰か他の女を好いてしまうことが、しろにはたまらなく恐ろしい。思い描くだけで胸が詰まり、どうしてよいか分からなくなる」
ぷらり、ぷらり。シロの足が交互に揺れる。
「石楠花のことも怖い。――しろは実のところ、あの小娘を心底嫌いなわけではない。何かと腹の立つ奴じゃが、あれはあれで可愛いところもある娘じゃ。だが……それが分かるゆえ、余計に不安なのじゃ。大輝が石楠花を好いてしまうのではないかと……石楠花を選んでしまうのではないかと、ここのところ……特に今日はそればか

りを……」
シロの足が動くのをやめる。
「それぱかりを考え、一人で悶々としておった。夜々とやらのことも同じじゃ。今日現れたばかりの小娘とはいえ、大輝を狙うておるというだけで、立派にしろの気持ちを脅かしておる。……本当はな、さっき呑みながら話した心の内もまことのことよ。しろにとっては夜々の現れたことも、大輝がわずかに心乱されるような素振りを見せておることも、恐ろしい大ごとなのじゃ」
シロはそこまで言って、口を閉じる。
大輝はその顔を覗き込む。
「シロさん……？」
「――大輝よ、以前しろにきすをしてくれたな」
「あ……」
大輝は瞬時にあの時のことを思い出し、顔を熱くする。
「……はい」
「しろは本当に身の溶ける思いじゃった。あの時唇に感じた温かみを思い出し、何とかしろは我が心を励ましてきた。たとえ大輝にしてみれば、一時の出来心だったにせよ――あれがしろの心の支えじゃった」
シロの手が、大輝の手を握る。
「だが……もうそれだけでは安心できぬ。もっと、もっと確かな証がほしい」
段々と、声が濁った震えを帯びてゆく。
「揺らいでおる。焦っておるのじゃ。石楠花に大輝を渡しとうない。夜々などにも、大輝の眼差しを奪われとうない。しろだけを見てほしい。しろだけが――大輝の女じゃと、はっきり示してほしい」
シロは大輝の手から手を離したかと思うと、すがるように体を寄せてきた。
頬に当たる銀髪。
酒気を帯びたシロの匂い。

大輝は体を硬直させ――シロの顔は、いつかと同じように、互いの息が届くほど間近にあった。

「わがままを言うてすまぬ。こうして酒の力を借りるのも、卑怯なことと知っておる。だが、もう、耐えられぬのじゃ。大輝が思うておるほど、しろは強うない」

シロは大輝の薄い胸板に、額をあずける。

細く、切なく、弱々しい声でシロは言った。

「だからどうか……今宵は拒まずにこの身を抱いておくれ」大輝の浴衣を握りしめる。「もう……拒まれとうない……しろは壊れてしまいそうじゃ……」

崩れそうな声。

ざぱ、と一際大きな波音がはぜた。

次の刹那、顔を上げたシロの唇が、不意打ちのように大輝の唇を塞いでいた。

大輝の首に長い腕がまわり、二人の体が正面から密着する。

シロに押し潰されるように、大輝の体は堤防の上へ背中から倒れた。圧し掛かるシロの体はやわらかく、火傷しそうなほどに熱かった。並んだビールの缶がばらばらと落ちる。

大輝はうめく。

「ん……っ」

呼吸――が。

唇を割って、シロのぬめった長い舌が入ってくる。

きっと、ろくに知識があるわけではなく、ただ溢れ出す感情のままに――シロの舌は大輝の口の中をかき回した。

息が苦しかった。

酒臭く、甘い唾液の味がした。

そして唇が離れる。

混じりあった二人の唾が透んだ糸を引き、消える。

「……大輝は」

大輝の腰に跨ったまま、シロはゆっくりと体を起こす。

「大輝は……知らんじゃろうな。しろがおぬしを想いながら、幾度この身を誤魔化したか……寝間着の襟を噛んで声を殺し、毎夜毎夜……」泣いているような声で。「そして一人、居間で寝付くたび……己が空しき空事に恥じ入るのじゃ。情けのうて涙を流したこともある……もう嫌じゃ。絵空事ではなく、本当に……大輝の腕の内で……」

帯をほどき、はらりと浴衣の前をはだけるシロの姿を、大輝は下から見上げていた。

下着は無かった。

かつて一度だけ石落の屋敷で見た、真っ白な裸体がそこにはあった。だが、その裸の意味は、あの時とはあまりにも違う。今ここで淡い月明かりに照らされているのは、大輝のために差し出された肉体だった。

シロは再び倒れこんできた。以前仔狐だった頃したように、大輝の頬を舌先で舐め上げる。

それから大輝の顔を強く抱きしめる。

あらわになったシロの熱い腋の下に、大輝の鼻先が埋まった。やわらかな二の腕の感触が顔を圧迫し、息を吸うと、生々しい汗の匂いが胸の中に充満する。

「う……」

大輝はうめく。

息苦しさに、闇雲に手を動かす。

ぴったりと右の手のひらに張り付くもの――胸。指が埋まる。

シロの腕が一際強く締め付ける。

「ん――」

聞いたこともないようなシロの声。

大輝は怯えるように手を引いた。

どくどくと血潮の音がする。これは大輝のものなのか、シロのものなのか。混ざり溶け合い、判然としない。潮騒が二人を包んでいる。

潮の音。
言葉。記憶の中から石楠花の言葉が聞こえてくる。
好きなんだ。
最近じゃ、バカみたいに大輝のことばっかり。
変だよね、こんなの。
でも。
シロのことも、別に心底嫌いってわけじゃない。
心底嫌いってわけじゃ。
実のところ、あの小娘を心底嫌いなわけでは――ついさっきシロが言った言葉が重なる。
喧嘩をする二人の姿。
シロが現れる前の静かな家。
テーブルに肘をつき、呆れたように溜息をつく石楠花。
「なんであんたはドッグフードなんかが好きなんだろうね」
「ほほ。石楠花には分からんじゃろうな、この深き味わいが」
ソファに腰掛け、幸せそうに缶の中身をスプーンですくうシロ。肩をすくめる石楠花の顔。景色が溶ける。
今、この瞬間に伝わってくるシロの呼吸。嗚咽するような、引きつったリズム。プライドも何も無い、懸命な想い。酒の力を借りた必死の勇気。
体の重み。
「大輝……」
熱い声。
大輝は目を閉じ、シロの背に両腕を回し、一度、出来る限りの力を込めて、強く抱き締め返した。
ゆっくりと二呼吸半。
沈黙。
波の音が遠ざかる。――それから。
「……。……ごめんなさい」
目を開けて、大輝は静かにそう言い、腕を解いた。

言い訳など出来ない。
それは結局のところ、拒絶だった。
シロの体が――離れてゆく。
赤い瞳が大輝を見下ろした。
「……？　……た……」
理解し、そして始まる本当の嗚咽。
「……たい、き」
ぽろり。
「う……」
大輝の胸に両手をついたシロの目から、ぼろりと大粒の涙がこぼれる。
涙はなめらかな頬を伝い、大輝の首に落ちた。
シロは鼻の頭にしわを寄せて赤ん坊のように泣いた。だらしなく歪んだ唇から、押し殺した声が漏れ出す。
「ふ、う、う……ぐっ」
よろよろと体を起こす。
大輝の胸から手を離し、シロは両手で涙を拭う。
「うえぇ……え」
綺麗な顔をくしゃくしゃにして、駄々をこねるように泣く。
本当に、子供のように。
――泣かせた。
大輝は胸の痛みで心臓が止まりそうだった。
言葉が出てこなかった。
なぜ拒絶してしまったのだろう。
いつもそうだ。こんなにも……惨めなほど必死で、自分だけを愛してくれる人を――純粋な、裏表のない本当の気持ちを、なぜ自分は拒んでしまうのだろう。
好きです。
俺もあなたが好きです。
どうして肝心なとき、この人にそう言ってあげられないのだろう。

それだって嘘ではないのに。
俺だって――シロさんが好きなのに。
シロは大輝の腰を跨いだまま、背を丸めて頭を垂れ、嗚咽する。
「う……、も、もう……」咳き込む。「もう……ど、どうすれば、いい、か……」
鼻をすする。
「ど、どうすればいいか、わ、わから……」
声が痙攣している。
ゆっくりと、大輝の上から重みが無くなってゆく。
浮揚したシロは、空中で細い膝を抱え、うずくまった。
下がった浴衣が潮風にそよいだ。
大輝は体を起こし、声を絞り出す。自分まで泣きそうだったが、その権利がないということくらいは分かっていた。
「違う……んですよ」
違うのだ。
シロは体を丸めたまま答えない。顔は見えず、泣き声だけが風を震わせる。
大輝は言い訳のように続けた。
「違うんです……」
それしか言えなかった。自分のボキャブラリーの無さが憎かった。
シロはやがて、黙って飛び去った。
霞んだ月だけが残った。

二

まどろみの中。
燦燦と白い陽の照りつける、ゆらめく夏の浜辺であった。
パラソルの下、シートの上にしゃがんだ白いワンピースの女は言う。
「そうですか――御家の事は兼ねてより存じておりましたが、そう

したお役目の方もいらっしゃるのですね」
少なくとも見た目は二十歳前後の、優しげな眼差しをした、髪の長い女だった。
「どうしますか？　私を連れて行きますか」
「……いや」
隣に立つ夜々は首を振った。
夜々はこの時も同じような、黒いワンピースを着ていた。ただ違う点を言えば、大きな麦藁帽子をかぶっていたことと、真夏なのでごく薄手のノースリーブだったということ。それから、さっきまで女の息子と遊んでやっていたために、足は靴も靴下もない裸足であった。滅多に汚さぬ踝と足の裏に、砂が灰色にこびり付いていた。
「見神の未来を考えれば、同行してもらわねばならぬところなのだろうが……」
波打ち際の子供を見る。
湿った砂を無心に積み上げ、できるだけ大きな山を作ろうとしているのは、赤い海水パンツ一枚の、幼い男の子だった。
今日、たまたま出合った少女――正確には少女の姿をした者と砂遊びをしたことなど、やがては忘れてしまうのだろう、物心が付いているのかいないのか、ともかくまだ赤ん坊のような気配の抜けぬ、小さな子供であった。
夜々はその姿を見つめ、また口を開く。
「……君の夫もこちらへ来ているのか」
「ええ。今日は宿でゆっくりしていますけれど」
「そうか」
夜々はまた黙った。
若者たちと家族連れで賑わう浜辺。
波音は不思議と静かだった。
夜々は男の子を見つめ続けていた。
「……あの子は海へ入るのが怖いのだな」
「蟹が怖いのですわ。昨日、足を挟まれてしまって」

「それは気の毒に」
「でも――我が子ながら、面白い子なのですよ」女は微笑む。「挟まれたとき、驚いて、海の中で足踏みをしたのですけれど……もしかしたらその時に蟹を踏んでしまったのではないかと、あとになって随分心配していました」
「憎き蟹の心配か」
夜々も微笑う。視線の先の男の子は、ぺたぺたと砂山を叩いている。
「いいさ……家の者どもには、君のことは伏せておこう」
「ありがとうございます」
「何、来いと言ったところで、君とて大人しく従うつもりはあるまい」
「ええ」女は即答した。「もったいないことに……こんな私にも、今は愛してくれる子と、そして息子がいますから。残念ですが、あなたの妻にはなれません」
夜々はまた、ふ、と笑った。
「本物の麟に抵抗されて無事でいられるほど、私も頑丈ではないからな。しかし、気になるのはあの子だが……」
「――何も感じませんでしょう」
「ああ。あの子は確かに君の子なのだろう？」
「まだ自分のことに気付いていないのです。何の力もない、今はただの子供ですわ」
「ふむ」夜々は唸る。「しかしいずれ、目覚めるときが来るかも知れん。その時は……」
「力の制御を知らないあの子が、自分の神気を発現させれば――あなた方にも知れるでしょうね」
「その時はどうする」
「あの子に任せますわ」
女は遠い目で我が子を見つめた。
「時が近づいています。あの石字縛師が常世に干渉したことで生まれた、泡沫の揺らぎが終わり、全てが元通りになる時が。きっと…

…近いうちに、私はいなくなるでしょう。その後は、あの子自身の思うままに決めてもらうしかありません」

「そうか――」

「……約束していただけますか？」

「何だ」

「いつか、もしあの子の存在が見神の方々の知るところとなり、あなたが今度はお役目として、再びあの子の前へ現れることになったら……。そうなっても、出切るだけ無理強いはしないであげてください。あの子がちゃんと、あなたを愛すよう……そしてあなた自身もあの子を愛し、望んで共にあるように」

静かに、重く、女は言った。

「お互いの想いを大切にしてください。それならば――二人が愛し合っての上ならば、例え定められたことであっても、そこにはちゃんと、本当の幸せが生まれますから」

「……。ああ」

夜々はゆっくりと頷いた。

女はそれを確かめて、独り言のように付け加えた。

「……あの子は良い子ですわ」目を細める。「きっと、これからも」

「私にもそんな気がするよ」

夜々は深く息をつく。

「――さて。もう行くとするか」

「あの子の相手をありがとう御座いました」

「いや……私も楽しかった」

首を振り、夜々は苦く笑った。

「ここで会えたのも、何かの巡り合わせなのかも知れないな」

「ええ――」

女は儚げな笑顔で頷いた。

燦燦と白い陽の注ぐ、ゆらめく夏の浜辺であった。

照りつける日差しが景色を溶かし――

夜々はやがて、記憶のまどろみから醒めた。

ゆっくりと目を開ける。
明かりが点いたままの部屋。
夜々は窓際の大きな椅子に深く腰を下ろし、木の脚にガラス板の乗ったテーブルを前にして、うたた寝をしていた。
恐らくは、ほとんど刹那の夢であったのだろう。自身の体がそう教える。
夜々は呟いた。
「……もう何年かな」
窓を見る。
黒かった。
瀬戸物の灰皿の上で、燃えつきた煙草の長い灰が、ぽろりと落ちた。

三

シロは静かな後悔の中にいた。
小一時間泣くだけ泣いて、酔いもほとんど醒めていた。
「はあ……。酔い過ぎておったわ」
乳色の湯に体をまかせ、シロはぽつりと呟く。
やはり誰もいない浴場だった。
湯を顔にかける。涙に腫れた目にしみた。
そう、思い返せば支離滅裂である。
石楠花を酔わせて潰し、それから大輝を大人の色香で攻め落とす。
漠然とそんな流れを思い描いていたのに、酒が回りすぎたせいで、気付けば——本当にいつの間にか、積もりつもった感情が爆発してしまっていた、あれではただの悪酔いだ。
シロは溜息をつく。
「しろは一体、何をしたいのかのう」
もはや自分でも分からなくなっていた。
勝手に盛り上がり、勝手に不安になり、勝手に切羽詰ったからと

いって、大輝の気持ちもよく考えず、酒の勢いに任せて押し倒し…
…挙句に、拒まれたからと、駄々をこねて泣く。これでは狂ってい
るのと変わらない気がする。
「時を戻せるなら、無かったことにしたいわ」
大輝と顔を合わせ辛い。
部屋に戻るのが憂鬱だった。
　がらりと扉が開き、脱衣所から子供が入ってきた。
夕刻に見た、この旅館の子供だった。カエデとかいったか。シロは
声をかける。
「何じゃ、子供にしては遅い風呂じゃな」
「あ……」
カエデはいかにも人見知りする子供らしく、少し目をそらしながら、
もごもごと答える。
「早いと……お客さんがいるから」
「おお、そうか。では遅いのはしろの方じゃったな。すまなんだの
う」
シロは笑う。
　カエデは気まずそうに風呂場の隅へ寄り、桧の椅子のひとつに腰
を掛け、桶に湯を溜め始める。
　シロはその幼い姿を、横目で眺めていた。
幼い裸の姿だ。十歳かそこら――母親もそう言っていた。封じら
れる前は、よくこのくらいの子を食べていたものだ。シロはぼんや
りと思い出す。
このくらいの子供は肉に臭みが無く柔らかいので、生のまま食べる
のが一番である。それも生きたままがいい。
　カエデはシロの考えていることなど知るよしもなく、つたない手
際で体を流しはじめた。
　シロは浴槽の隅に背を寄せる。
「……ふむ」
今、この子を食いたくないと言えば嘘になる。この子供に限らず、

シロにとっての人間は、今でも立派な食欲の対象である。
だが、生きた人間の考えていることがなかなか興味深いものだということ、それを知ることによって自分が変わってゆく面白さも、最近になって分かってきた。
だから――どうということもないが。
シャワーを止め、立ち上がろうとするカエデを、シロは言い止める。
「ん？　これ」
「……え」
「それではまだ、ろくに体を流せておらぬじゃろうが」
湯船から立ち上がり、シロはタイルの上に上がった。
「温泉宿の娘が、風呂の入り方も知らぬでは格好が付かんぞ。どれ、しろが背を流してやろう」
「い……いいよ。私そんなに子供じゃないもん」
「遠慮するでない」
シロはすたすたと歩み寄り、逃げようとするカエデの肩をつかんで、強引に坐りなおさせた。
「大人しうせい。まずはこう、よく体を濡らし、垢を浮かせてじゃな――」
「い、いいってば――ちょっと、おばさん……」
みしっ。
カエデが仰け反る。
「痛だだぁっ！」
「おお、力が入りすぎたわい」
シロは肩を&＃２５６８１；んだ手を離す。
「しろはまだ若いお姉さんじゃから、指の力が強くてのう」
「す、すみませんでした、お姉さん……」
カエデは力なく謝った。
シロは微笑み、自分の手拭いを泡立てて、カエデの背を流し始める。
「なに、しろも今、少しばかり部屋に戻りづらいところでな。どう

して時を潰すか考えておったのじゃ。――ほれ見よ、まだ首の周りに砂がついておる。今日は浜で遊んでおったのか？」
「ん……」カエデはうつむく。「遊んでたっていうか……」
「何じゃ」
「私、いつも一人だから」
「ふむ？」
シロは首をかしげる。
――あの子も学校で色々と言われているようで――。
そういえば、女将がそのようなことを言っていた気がする。なるほど、教育テレビで盛んに論じられていた「いじめもんだい」というやつか。
シロは納得した。
「そうか、一人では上手く遊べぬな」
「……うん」
「海を見ておったのか？」
「いつも見てる……。それくらいしか無いもん」
「ふむ」石鹸を泡立てる。「しろもな、今共に暮しておる者どもと出会う前は、長いこと一人じゃった。長く生き、色々なところを移り住んだが、語る相手はおらなんだ。海もよう眺めておった。砂の上に朝から晩まで座り込んでな」
「おば……お姉さんも、いじめられてたの？」
「いじめられてはおらん。あらゆる人間に恐れられ、嫌われてはおったが。ほれ、腕を上げよ――よしよし、そうじゃ、じっとしておれよ」
「……くすぐったい」
「我慢せい――ほれ、もう終わった。流すぞ」
シロはシャワーを手に取って湯を出し、カエデの日焼けした肌を、肩からゆっくりと流してゆく。
カエデがぽつりと訊いてきた。
「お姉さんも淋しかった？」

「そのようなことは考えたこともなかった。しろは人間どもを馬鹿にしておったからの」シロは苦笑いする。「しかしまあ、今にして思えばそうだったのかも知れぬ。群れて楽しそうにしておる人間どもが、何だか無性に憎く思えたこともあったでな」

「ふうん……」

「ほれ、立て。もう終わりじゃ」

シロはカエデを立たせる。

それから二人は、並んで湯船につかった。

奇妙な時間であった。

――カエデはしばらく黙っていたが、やがて、水滴が眼前に落ちるとともに口を開いた。

「……ねえ」

「何じゃ」

「お姉さん、今は一人じゃないの？」

「うむ」シロは頷く。「今は、しろを家族と言うてくれる者どもがおるからの」

「……。家族なら……私にも、いるけど」

「母親か」

「うん」

カエデはわずかに微笑んだ。

「お母さんはね、私の味方なんだ」

「母は優しいか」

「うん……」

しかしまた、暗い面持ちに変わる。

シロはその顔を覗き込む。

「どうした」

「……でも私、学校では一人だから。お母さんも、言わないけど、多分心配してる」

「ふむ」

「どうすればいいのかな……友達、作らなきゃいけないのに。どう

すれば友達が出来るんだろう」カエデはうつむく。「なんか、外に出ると、みんなが敵みたい」

「ん――む」

シロは腕組みする。

「……難しいのう」

考えながら思い出す。

あの雷雨の夜。

差し伸べられた手を引っかいた時の、鋭く尖った、何も信じられぬ気持ち。

あの時、大輝に拾われたことが今の自分を決めたのか。それとも――。

「……、誰しもが」

シロは考えも纏まらぬまま、ぼんやりと言った。

「誰しもがおぬしを嫌っておるわけではないのかも知れぬ……。おぬしが誰も信じておらぬゆえ、今は見えておらぬものも……あるやも知れん」

ぱしゃりと湯を肩にかける。

「しろも未熟ゆえ、どうにも言い切れんが」

「……お姉さんって美人だけど、あんまり頭良さそうじゃないもんね」

「な――っ」

「難しいこと訊いてごめんね」

「き……貴様」

人が親身になって考えているのに、何たる糞餓鬼。

大輝に内緒で食ってやろうか――

そんなシロの殺気を感じてか、カエデは立ち上がった。

「私もう出るね。ありがと、お姉さん」

「ん、む」

シロは濁り湯の中で、伸ばした爪を引っ込めた。

「……子供の風呂は短いのう」

無意味に呟く。
　カエデはシャワーで体を軽く流し、髪を搾って出て行った。
入れ替わりに脱衣所から入ってきたのは、薄手の大きなバスタオルを細身に巻きつけた、入神夜々であった。手には持参のバスセットを、小さな桶に入れて持っている。
湯船の中のシロと目が合うと、夜々は笑う。
「おや、君か」
「しろで悪いか」
シロはふいと顔をそむける。会いたくない相手に会ってしまった。
　夜々はツインテールだった髪を大きく一つにまとめていた。
その首を軽くかしげる。
「君は風呂に入るときでもリボンをつけているんだな」
「ふん」
ふてくされた顔をするシロの頭には、赤いリボンと、いつも通りの巨大ポニーテールがあった。
「何を付けていようとしろの勝手じゃろうが」
「それは失礼。さて、私も体を流すとするか」
夜々は躊躇いなくタオルをはだける。
　横目で見ていたシロは、あらわになった夜々の裸――正確には目に飛び込んできた一部分に、思わずぎょっとした。
「く……」
そうだった、忘れていた。今度こそ本当に、思い切り顔をそむける。
「前を隠さぬか、見苦しい」
「そう意識するなよ」
夜々は悪戯に笑み、さっきカエデが座ったあたりの椅子に腰を掛けて、タオルを畳んで鏡の前に置き、どぼどぼと桶に湯を溜め始める。
　シロは舌打つ。
「誰が何を意識するものか、そのような……まだ毛の一本も生えておらん、生白い皮かむりに」
「よく見ているじゃないか」

「やかましいわ！」
「何を付けていようと勝手、だろう？」
「ち……」
下らない形で一本取られた。シロはまた舌打ちする。
くすくすと夜々は笑った。
「どうやら欲求不満のようだね。この生白いもので良ければお相手しようか」
「ふ、ふざけるな！」
「冗談だよ。それにしても――どうやら大輝くんに振られたようだね」
「な……」シロは思わず振り向く。「なぜ知っておる？」
「図星か」
ざば、と夜々は肩から湯をかぶる。
「君も可愛いな」
「か――かわいい……？」
シロは両手で胸を隠す。
夜々は冷たく訂正する。
「そういう意味ではない。不器用で、まるで子供のようだということさ。君は全く駆け引きというものを知らないようだ。好きだという気持ちを単純にぶつける、それ以外の方法を持たないでいる」
「……。駆け引きなど」シロはふくれる。「駆け引きなど……嫌じゃ。しろはそのようなことが好きではない」
「そうかい。まあ好感は持てるな」
夜々は、スポンジでごしごしと腕を泡立てる。
何だか馬鹿にされているようで、シロはまたふてくされた。
そのとき不意に、ぬるりと、胸のあたりを撫ぜる感触があった。
シロは跳ねるように濁り湯から立ち上がる。
「おわあっ？」
「どうした、変な声を出して」怪訝な顔の夜々。「……しかし君はすごい体をしているな。魅力云々を通り越して、もはや卑猥という

か何というか」
「それどころではない！　この風呂の中、何者か――」
シロのポニーテールがざわめく。突如として姿を現した激しい妖気に、肌がびりびりと震える。
「潜んでおるぞ！　気を付けよ！」
裸身を翻し跳躍する。
同時に濁り湯の中から飛んだもの。
「？　――な」
空を切り回り飛んだそれは、反応しきれなかった夜々の細い左肩に、どっかりと食い込んだ。
よく研がれた、薪割をする大鉈であった。
「な、た……？」
鮮血が散る。
シロはタイルの上に降り立った。
「この妖気、もしや――」
ざばりと湯の柱が立ち上る。化生は、大きな肌色の上半身をあらわした。
そして、しとやかな声で言った。
「まさかとは思ったけれど」
飛沫に紛れて伸びる、太く長い腕。五本の指が、仰け反るシロの前髪を&ａｍｐ;＃２５６８１;む。
「あなたは任氏ね？」
「く……っ！」
腕は瞬く間にシロを引き寄せ、真っ白な喉笛を――
「お久しぶり」
出刃包丁が、ざぶりと切り裂いた。

四

四人部屋の、電気もついていないユニットバス。

吐くだけ吐いた石楠花は、便器の冷たさを頬に感じながら、夢うつつの中にいた。

「う……」

目を開ける。

布団に戻らなければ。そう思うのだが、体が動かない。

ぐらぐらと痛い頭――何かを感じる。

「よ……、かい？」

溶解。酔うかい。何か用かい。違う違う。

「妖怪――が」考えがまとまらない。

石楠花はまた目を閉じる。

「あー……」口に残る酸っぱい味。「……行かなきゃ」

どこへ？

分からない。

何にせよ体が動かなかった。

五

浴場に夜々の叫びが木霊した。

「任氏！」

首を切り裂かれ、振り回されたシロの裸体は、人形のように浴槽の中へ落ちた。

それを行った者は楽しげに笑った。

「さあ、次はあなた。この狐にはあとでゆっくりと止めを刺すわ」

腰から下を湯の中に沈めた巨大な化生は、天井近くにある顔を夜々へ向ける。

それは女将の顔だった。

女将は今、頭の大きさと吊り合わぬ、ずんぐりと大きな――しかも不気味に長い肌色の上半身と、四本の長い腕を持っていた。

手のそれぞれに、鎌、出刃、ハモ切り包丁を。唯一あいた手には、さっきまで鉈が握られていたのであろう。

そしてその鉈は今、夜々の肩骨に深々と食い込んでいた。
「――これが連続行方不明の真実か」痛みを押し殺す。「化生が女将を食い、成り代わり、顔を奪って化けていた……なるほど。シンプルな答えだな。もっとも疑問が残らないわけではないがね」
「落ち着いているのね。これから死ぬというのに」
「任氏とは顔見知りのようだが」
「大昔に一度会っただけよ。余所者だった任氏と、縄張り争いでやり合ってね」
「どちらが勝った？」
「戦う前に私が引いた……。仲間たちに止せと説得されたの。土地大将だった私が、評判高い大陸の狐変化と戦いあって、万が一にでも殺されてはいけないからと。だからこの女がまたいなくなるまで、黙って好きにさせていた」シロの沈んだあたりを見やる。「こいつは、土地にいる間は湯につかるばかりで案外と大人しく、我々を脅かしはしなかったけれど……それでも私は気に入らなかった。どうせ力の差など歴然としていたのに、むざむざ何年ものさばらせておくのが耐えられなかった」
「なるほどな」
夜々は笑う。割れた肩から、赤黒い血液が止めどなく滴る。
「昔この辺りに巣食っていた妖怪どもの大将といえば、響川の四つ刀――切り鬼か」
遠く窓近くの湯を割って、ばしゃりと、鱗に覆われた巨大な尾びれの先があらわれた。
それを波打たせ、女将は頷く。
「確かに昔の人間はそう呼んでいたわ」
「強かったそうだな。川を渡ろうとした大勢の侍たちと馬どもを、瞬く間に切り刻んだとも聞いている」
「あなた、よく知っているわね」
「君らについて詳しい家系と親交があってね。君のような妖怪が、眠り石に封じられた以外にまだ生きていたとは、正直いって驚いた

が」
「あら、あの縛が破れたの？」
「つい最近のことだ」
「そう。だから任氏が――。まあ、私には関係のないことね」
女将は遠い目をする。
「私のような化生は、あちこちに少しは残っているわ。ほんの僅かだけ残った暗がりで、ひっそりと息を押し殺して。……突き詰めれば、今も昔もそう変わらないのかもしれない」
「生き方も……食い物も、か」
「そういうことね」
「しかし私を食えるかな」
夜々は右手で肩の鉈を&ａｍｐ;＃２５６８１;み、引き抜く。
噴き出す鮮血が湯気を濁す。
血に濡れた鉈を構え、夜々は女将を睨んだ。
「この餌は暴れるぞ」
鉈を持った右腕が、もりもりと変じる。黒い毛の生え茂る長大な豪腕――黒腕。
夜々はそして飛び掛る。
跳躍し、横薙ぎに刹那の一閃。
金属音――出刃包丁に阻まれた。
笑う女将。逆袈裟に襲う鎌。
夜々は空中で身をひねるが、先端が腹の皮を裂く。
血が散った。
着地してすぐさま後ろへ飛び、中腰に構えて見上げ、夜々は唸る。
「速い――」
精密機械のような反応と斬撃だ。足下の濡れたタイルに血が溶ける。
女将は興味深げに微笑む。
「あなたこそ凄いわ。半妖にしては妖気が無いようだけれど……面白い生き物。ばらばらにして調べてみましょうか」
ばしゃあ、と乳色の湯が勢いよく爆ぜ、激しく散った大量の水滴で、

浴場と夜々の視界がいっぱいになる。
　夜々は瞬間、目をそむける。
「む……」
瞬く。
その間に、女将の巨大な姿は、湯船の中から消えていた。
「何、――くっ！」
乱れた後ろ髪を&ａｍｐ;＃２５６８１;まれた。
「後ろ……か……っ！」
山のような体躯でありながら、何という俊敏さであろう。
夜々の体は怪力で引き上げられ、絡め取られる。
　タイル張りの床の上、ぎらぎらと巨大な魚の尾――女将の下半身が生々しく蠢き、先端のヒレがいたずらに壁を叩く。びしゃり、と粘液が散った。
「どこを切ってほしい？」
出刃包丁の温まった背が、夜々の華奢な体を蹂躙するように撫ぜ回す。
「首かしら、お尻かしら」
ぴたりと、脚の付け根で止まった。
「そういえば……あなたは面白いものを持っているわね。駄目よ、こんなものを生やしている子が女湯に入ってきては……」
「く――」
夜々は身をよじる。
　女将は、夜々の首筋をべろりと舐めた。
「これ――切り落としたら痛いかしら。ねえ、どうかしら？」
「う……、ああっ」
ぐりぐりと包丁の背で乱暴にいたぶられ、血まみれの夜々は腰を引いてうめく。鉈が落ちた。
　女将は嘲る。
「可愛い声。あら――ちゃんと感じるのね？」
「くっ……い、いつまで――」

顔を赤くして夜々は怒鳴る。
「いつまでそこで見ているつもりだ、性悪狐！」
「何ですって？」
女将が夜々から手を離し、振り返ろうとしたその刹那。
影が泳ぐ。鋭い爪が閃光のようにひらめき、女将の左耳を裂き落とした。
耳が飛び、女将の口から発せられる、驚きの混じった悲鳴。
すかさず跳び退く夜々。
尾びれが暴れ、壁に叩きつけられる。ヒビがはしって破片が散る。
女将は耳のあった顔の横を押さえ、睨みつけた。
「あ……あなた、どうして――いつの間にっ！」
「おぬし、この程度でしろが動けんようになると、本気で思うておったのか？」
首の裂け目を片手でふさぎ、シロはにやにやと笑いながら言う。
「もっとも……」
べっ、と血の塊を吐く。
「まあ、痛いことは痛いがの」
当たり前のように、湯船の横に立っている。
女将は歯を軋ませる。
「任氏……っ」
無視してシロは夜々に言う。
「夜々や、おぬし中々に苦戦しておったな。股ぐらをいじられて情けない声まで上げよって、しろにはとても良い見世物じゃったぞ」
「うるさい」
元に戻った右手でそこを隠し、前屈みの夜々はかすかに赤面する。
「肩を割られたせいで、左腕が言うことをきかなかったのさ。まあ……」口を尖らせ付け加える。「言いわけだがね」
「まあ良いわ、そこで見ておれ」
シロは女将の方へ向き直り、その顔を見上げる。
「しかし相変わらずの図体じゃのう、切り鬼よ。奪った女の顔と声

が似合うておらんぞ」
「……あなたの口の悪さも相変わらずね」
「訊いてよいか」
「どうぞ」
「女将の夫を殺したのもおぬしか」
「ええ。女将を切り殺し、脳味噌を食べているところを見られたの。だから殺したわ」
「その時、おぬしはどう思うた？」
「どう……？」女将は首をかしげる。「……別に、何とも？」
「そうじゃろうな」
シロは頷く。
「我ら化生とはそうしたものじゃ。理のままに動き、行うのみが化生よ」
「何が訊きたいの、あなた」
「そうした化生のおぬしが、なぜかえでを食わなんだか――」赤い瞳が光る。「なぜあの子のみを残したか、何とはなく、それを訊いておきたくてな」
「……。楓……」
女将の表情が揺れる。
常にある隠れた困惑を思い出したように。
そして口をつぐんだ。
沈黙の後、シロは仕方無さそうに笑う。
「答えられぬか。……良い。早いところ終わらせようぞ」
「――ふん」
女将の低い声と暗い眼光。
「あなたなどにに私が……」
「そういえば、さっきおぬしの口が語ったことの内」シロの言葉が遮る。「一つ、しろにも納得のいく言葉があった。何だか分かるか？」
「……？」

「しろとおぬしの力の差は――」
シロが消える。
睨んでいた相手を失い、女将が僅かに目を泳がせた、それだけの一瞬。
女将の首が魔法のように消失した。
――。無音――そして。
刃物が床に落ち、がらん、がらんと、空しい音が浴場に響く。
頭部を失った怪物。
その胸が、一呼吸おいてから、びしりと裂ける。
裂け目はびりびりと音を立てて広がり、我慢しきれぬように中の物が溢れ出して、赤黒い液体が、シャワーの如く、おびただしく飛び散った。
巨大な四本腕の人魚が、ゆっくりと、前のめりに倒れる。首のあった場所からも血が噴き出す。
引き抜かれた女将の首は、壁際へ着地したシロの手に、無造作に&ａｍｐ;＃２５６８１;まれていた。
たった一瞬の、徹底的な破壊作業。
滑稽なほど呆気なく勝負がついていた。
&ａｍｐ;＃２５６８１;んだ首にシロは続けた。
「力の差は、この通り、歴然としておった。昔からな。――何か言い残すことがあるならば聞いてやらんでもないぞ」
「……う」
首だけになった女将の唇が動く。
「……、か……」
残された、たった一呼吸。掠れた声で最後の言葉を紡ぐ。
「楓……には……」涙。「言わないで……」
「何？」
シロが訊きなおす間も無く、女将の首は生気を失い、死肉と変わった。
「……。ふん」

無言でその首を放り落とすシロの姿を、夜々は驚嘆し見つめていた。

完全に何も見えなかった。飛び掛って女将の首をもぎ取り、その胸を深々と斬り裂いた狐変化の一瞬の動きを、夜々の目も全く捕らえることが出来なかった。

切り鬼とて地域伝承に残るほどの化生であったのに、それを花でも手折るように。これが任氏――最高位にいる妖怪の実力。いや、その片鱗か。

「……寒気がするね」

小さく呟く。

と、鉈に割られた肩が、ぼんやり赤く光りだした。再生が始まったようだ。血の流れと痛みも止まってゆく。

夜々はそれを確認してシロに声をかける。

「任氏」

「ん」シロは首を見下ろしたまま振り返りもしない。「何じゃ」

「私は脱衣所で一服しながら傷を癒す。君はその間に、その肉と血を片付けておいてくれないか」

「ふむ……？」

シロは首から目を移す。

床の上に横たわった、切り鬼の巨体。――溜息をつく。

「参ったのう。これは中々に食いでがあるわい」

切られた喉笛の傷を撫でる。その傷も、もうふさがりかけていた。

夜々は黙ってシャワーを取り、体の血を流しにかかった。

五

夕刻の商店街は、行き交う子連れの主婦たちで賑わっていた。

石楠花と母もその中にいた。

魚屋が威勢の良い声で客を呼ぶ横で、一息ついている八百屋の若者と、夏物の浴衣を着た金物屋の主人が、煙草を吸いながら談笑し

ている。
母に手を引かれ、石楠花はその前を通り過ぎる。
手には——確か、ねだって買ってもらったばかりの、文房具の入ったビニール袋。
母は立ち止まり、振り返って微笑む。
「今日、冷やし中華でいい？」
「うん」
と石楠花は頷く。
母も頷き、また歩き出す。
賑やかな駅前の商店街。
握られた手と手。汗ばんだ温かさ。
それが、不意に離れた。
「あ」
すれ違う自転車に驚き、飛び退いた石楠花が手を離したのだ。
すぐに母を目で追う。
母は——気付いていないのだろうか、振り向きもせず、どんどん歩いていってしまう。
石楠花は呼ぼうとする。
おかあさん。
声が出ない。
どうして振り向いてくれないのか。
走り出す。
正面から人にぶつかって、尻餅をつく。ひどく痛い。
母が遠ざかる。
立ち上がり、呼ぶ。声が出ない。呼ばなければ、母がいなくなってしまう。
もう見つけられなくなってしまう。
人ごみの中に、幸せな後ろ姿が消えてゆく。
石楠花は泣いた。
なのに泣き声すら出ない。

母の背中が遠ざかる。

六

脱衣所の扉が少し開き、夜々が中を覗き込んでくる。
「あっという間に、綺麗に片付いたものだな」
横開きのガラス扉をからからと開きつつ言う夜々の肩も、もう何事もなかったかのように、つるりと白かった。体には元通りバスタオルを巻きつけている。
シロは、すっきりと片付いた浴場の中央で腹をさする。
「……不味いものを食わされたわ」
「死体を食い、生臭さを炎で消しても、壁のヒビはさすがに無理かね」
「しろは大工ではない」
足下に残った四本の刃物を見下ろし、シロは無表情で言う。
胸の下が重かった。
夜々は苦笑した。
「まあ、仕方ないか。――どうした、浮かないようだが」
「うむ……」
シロは呟く。
「何か……殺さぬ道は無かったか、とな。内心、こやつを食いながら思うておった」
「意外なことを考えるね」
「……」
「やらねば君が八つ裂きだったさ」
「うむ――」
シロは頷く。
言葉は続かなかった。
バスタオルを取った夜々は、綺麗に畳まれた浴衣を広げ、くるりと身に付ける。

「誰か来ないうちに、私はもう行くよ。君も急いだ方がいい」
「……おう」
シロは、タイルにわずか残った血をシャワーで流しながら、帯を締めて去ってゆく夜々の姿を見送った。
一人になったシロの中には、漠然とした喪失感のようなものがあったが、その正体が何なのかは分からなかった。
やがてシロも浴場をあとにした。
寄り道こそせぬものの、立ち止まり立ち止まり、ずいぶんゆっくりと歩いたので、部屋に着いたのは五分ほど後になった。
誰もいない静かな廊下。ドアノブに手をかけ、回す。鍵はかかっていない。
「あ――」
大輝のことを思い出す。
もう戻っているのだろうか。
いや。
考えても仕方あるまい。シロはドアを押し開けた。
中は暗かった。
「……おう」
足下に何者かの姿を見つけ、シロは立ち止まる。
後ろ手に扉を閉め、ほとんど真っ暗な部屋の入り口で、しゃがみ込む。
うつ伏せに、ユニットバスから上半身だけ這い出した状態で寝ているのは、どうやら石楠花だった。
トイレで吐いた後、布団まで辿り付けなかったのか。シロは溜息をつく。
「仕方の無い娘じゃのう」
まあ――シロのせいなのだが。
放っておくことも躊躇われるので、シロは石楠花を抱え上げて、肩でユニットバスの扉を閉め、暗闇の中、そろりそろりと奥へと進んだ。

礼司の寝息が聞こえる。
大輝の気配は無い。
シロは狐の眼をこらしてわずかな光を集め、空いた布団を確認すると、そこへ石楠花を丁寧に寝かせた。
うんん、と石楠花が唸る。
シロは傍らに両膝をついて、石楠花の浴衣を軽くなおし、這い出すときに足下へ追いやられたらしい、丸まった掛け布団を被せてやる。
「……やれやれ」
そして息をつく。
だらしなく口を開けた石楠花の顔は、まさに子供のそれだった。
無防備な寝顔。小さな鼻がひくひくと動く。
シロは苦笑う。
「これがしろの心を脅かす恋敵なのじゃからな……」
全く、笑ってしまう。
なるべく音を立てぬよう、静かに立ち上がろうとしたとき。
石楠花が小さく言った。
「……。いかないで」
「む？」
シロは止まる。
「何じゃ、おぬし起きて」
「おかあさん――」
石楠花は、もぞりと身をよじる。
「お母さん」
「……ふん。寝言か」
シロは笑う。
石楠花は布団の中で体をくの字に曲げ、ぐすりと鼻を鳴らした。
「……いかないでよお」
涙声。
「お、かあ、さん……」

「――ふん」
シロはずれた布団を直し、石楠花の頭に手をのせる。
「安心せい、寂しうない」そっと撫でる。「しろがここへおるでな」
「……」
強張っていた石楠花の肩から力が抜ける。
湿ったような闇の中、ふう――と乳臭い寝息が溶けた。
シロはもう一度、確かめるように小さな頭をなでる。
「……良い子じゃ」
今度は本当に立ち上がる。
その時、入り口のドアが開き、橙の光が差し込んだ。
大輝であった。
「あ――」
「……あっ」
大輝とシロは、同時に短く声を上げる。
暫し、見つめあった。
大輝はドアを閉め、うつむき加減で口を開く。
「……も」小さな声。「戻ってたんですね」
「ああ――」
シロも目をそらす。
大輝はぽりぽりと頭をかいた。
「その……さっきは」
「しろを――探しておったのか？」
「え……」
大輝は顔を上げ、それから、頷く。
「……はい」
「あれから今までか？　このような遅くに――」
「だって」
宿下駄も脱がず、入り口に立ち止まったまま。
「だって……その、いなくなっちゃうみたいな気がして」
「――？」

「さっき部屋に戻っても、いなかったし……」
だらりと下がった腕の先、小さな両の拳を握り締める。
「何ていうか――怖くて。どうしようって、俺――」
「大輝」
「すみません……俺、シロさんの気持ちを」
「大輝、もう良い」
シロは、とん、と畳を蹴る。
絹織りの衣の如く身を舞わせ、大輝の後ろへ降り立つ。
そして、大輝が振り向くその前に、両肩へ手を乗せた。
「もう良い。しろこそすまなんだ」
「シロさん……」
「ただ愛して焦るばかりで、肝心の大輝の心を考えなんだ。これで女房などと、おこがましい話じゃったわ」
「……」
大輝は黙って答えなかった。
やがてシロは、大輝の肩から、そっと手を離す。
「心配をかけたな」
溜息のように。
途端、大輝が振り向いた。
不意をつくようにシロの右手をとる。
「……シロさん」
見上げる真剣な眼。
シロはどきりと背を伸ばす。
「大――輝？」
大輝は続ける。
「……。あの……俺、あちこち探しながら、ずっと考えてました。自分がどう思ってるのか、どうしたいのか。俺は――ガキだし、何の責任も取れないですけど」
強く握られる手。
「それでも今、誰かを選ばなくちゃならないなら……俺が選ぶのは、

きっと」
「言うな大輝」
シロは左手の指先を、そっと大輝の唇にあてる。
「まだ良い。ゆっくりと、大人になりながら考えよ。しろはそれまで待っておる。もっとも――」
指先を離し、にやりと笑う。
「黙って待っておるつもりは無いがな」
「シロさん……」
「あらん限りの手を尽くし、いつか大輝の方が虜になるまで愛させてみせる。大輝がいかに迷い、揺れ動こうとも、最後に添い遂げるはこのしろじゃ」
手を握り返す。
「そうと心得よ」
「……」大輝は頷く。「はい」
窓の外、雲が動く。
差し込んだ月明かりが部屋の中を照らした。
そしてまた雲が月を隠すまで、二人は手を握り合い、見つめ合っていた。

第七章【切鬼宿――きりおにのやど――】エピローグ

あの旅から二週間ほど過ぎた朝。
目覚めた大輝が居間のドアを開けると、石楠花がコードレスの受話器を片手に、ソファに寝転がったシロの肩を揺さぶっているところであった。
「おい、こら狐、起きろってば」
「う……む」
「夜々からあんたに電話だよ！　ほら起きろ！」
「ん……」
「目を覚ませっての！」
耳を引っ張る。
シロは吊り上げられるように体を起こした。
「痛たた――、」
耳をつまむ手を払い、うらめしそうな寝惚けまなこで石楠花を睨む。
「痛いではないか。何をするんじゃ子豚」
「電話だって言ってるだろ！　さっさと起きろよ、こっちだって朝ごはん作るんで忙しいんだから！」
「五月蝿いのう……」
シロは押し付けられた受話器を耳にあて、不機嫌そうな声で言う。
「……しろじゃ。朝っぱらから何の用じゃ――、ん？　おお」
細い目が明瞭な意識を帯びる。
「そうか、あの子の引き取り手が見つかったか。うむ……何、貴様のところの分家？　親戚は――そうか、おらなんだか。まあ良いわ」
何やら夜々から報告を受けているらしいシロの姿を横目で見つつ、

大輝はテーブルについてテレビのリモコンを手に取り、電源を入れる。

朝のワイドショーは、どこか遠くの町で起きた事件のことを取り上げていた。

あれから、もしかして女将が消えたことについて報道があるかと思い、朝の番組を注意して見てみたり、新聞などにも目を通していたのだが、どうやら大した騒ぎにはならなかったらしく、どこでも取り上げられてはいないようだった。やはり白鳥の時と同じく、現代の世のなかで人が一人消えたくらい、大事にはならないのかもしれない。

シロはソファの上で、パジャマの長い脚を組む。

「うむ……それではな。――ん？　何じゃ、今なんと言った？　おい……」

受話器を耳から離し、見つめる。

「……切りおった」

「どうしたんですか？」

大輝が訊くと、シロは顔を振り向かせて首をかしげる。

「夜々のやつ、最後に妙なことを言いおった。これからよろしくだそうじゃ」

「はい――？」

大輝も同じく首をかしげる。

味噌汁の乗った盆を手に、石楠花がキッチンから出てきた。

「それ以前に夜々が何の用だったんだい？　用事も無いのに電話するほど、あんたたちが仲良くなったとも思えないけど」

「それはこっちの話じゃ」

「怪しいね――やっぱりあんた、女将さんが消えた理由を知ってるんじゃないのかい」

「言いとうない」

「それぱっかり。あんたって、隠し事があるときはそれしか言わないで会話打ち切るんだよね。大輝の前で嘘つきたくないからってさ」

「やかましい娘よのう」
シロは石楠花を睨んで舌打ちする。
テレビ画面がコマーシャルに変わった。
大輝はふと視線を向けた網戸の外、庭の芝生の上に、妙なものを見つけた。
「あれ」
「どうした大輝よ」
「いや……なんか、服みたいなのが落ちてるんですよ、ほら」
指さす。
「むう――？」
受話器を置いたシロが立ち上がってふわりと飛び、網戸を開けて庭に出る。
大輝と石楠花が不用意な飛行を注意するより早く、シロはそれを拾い上げ、居間の中に戻ってきた。
「これのことじゃな」
「やっぱり服みたいですね」
シロから渡されたそれは、薄手の黒いワンピースだった。
何だか高そうな素材の――はて。
「どっかで見たような……」
そして何だか厄介な予感が。
父が居間に入ってくる。
「お早う。どうしたんだ、みんなで顔を寄せ合って」
「あ、お義父さん」
石楠花が答える。
「この服、庭に落ちてたんだけど」
「ああ……多分向かいのアパートだな」父は寝癖の頭をかく。「かけていたのが風で飛んできたんだろう。昔はよくあったよ」
「向かいの建物には男しか住んでおらぬはずじゃろう。これは女物じゃぞ」
昼間暇を持て余しているシロは、近所に少し詳しい。

石楠花はううんと首をひねる。
「いや……そういえば、昨日学校から帰るとき、なんか荷物を運び込んでたな……二階の一番奥の部屋。誰か引っ越してきたのかもしれない」
「きっとその人だな」
頷いた父は、大輝にさらりと命じる。
「よし、ちょっと届けてきなさい」
「え。――ええ、俺？」
「二分もかからんだろう。朝食が冷める前には戻ってこれるさ」
「だって俺パジャマだし……」
「着替えている間に持ち主が出かけてしまうかも知れないぞ。困っているかもしれないし、急いだ方がいい」
「う……」
大輝はワンピースに目を落とす。
この黒いワンピース。
さっきの電話。「これからよろしく」。
どうして誰も気付かないんだ。いや、考えもしないのか、そんなこと。
でも――大輝は思う。
俺には分かる。だって、そんな気がするから。多分それが当然の流れだから。
容赦なく厄介なことが起きるようになってるんだ。何一つとっても普通じゃない、それが俺の日常なんだ。
母さんは麒麟で、俺もその血を引いてて、義理の姉は術師の末裔で、新しい家族は妖怪で。この上向かいのアパートに誰が引っ越してきたところで、今さら――。
大輝はがっくりと肩を落とす。
「……いや、やっぱりそろそろ勘弁してほしいよな」
どうなる俺。
テーブルの上、四人分の味噌汁がほかほかと湯気を立てていた。

（続く）

第八章【小梅――こうめ――】前編

今にして思えばどのような庭であったろうか。

池のほとりにあった大きな松の木だけを、妙にはっきりと憶えている。よく登ろうとしては小梅に叱られたものだ。

あの屋敷に住んでいたのは数年――夜々にとってはほんの一時のことで、しかもあの場所は、当時本当の子供だった夜々にはあまりに広すぎて、大まかな間取りすら、今となっては頭の中で判然としない。

しかし、庭園で見たひとつの情景だけを、夜々は今なお明瞭に思い出せる。そう……松の木が印象深いのもそのためであろう。ちょうどその木の下であった。

一度だけ、小梅がそこで泣いたのだ。

育ての親である小梅の歳を、夜々は正確に知らない。人と老いの歩みを異にする者どうし、互いの生きた年月にさしたる興味が無いのである。成長速度が不安定な夜々は、生まれて十年以上は赤子と呼べる状態であったし、小梅は小梅で、化生であるから当然のこと、夜々が物心ついた頃から姿が変わっていない。

ただ、以前に一度だけ聞いたところによれば、親子のような関係の二人であるが、実のところ、生まれた時期は大して変わらないのだそうだ。下手をすれば夜々の方が少し年上らしい。

要するに小梅は成長段階における知能と肉体の発達が、夜々とはまさに対極的に、恐ろしく早かったのだろう。発生してすぐに大人になり、それからずっと変わらない。化生にはよくあることだ。

今も昔も小梅の姿は、せいぜい十九かそこらの若い娘である。もっとも入神家が作り上げた戸籍では、夜々の保護者役である都合上、少々の無理を通して永遠の二十二歳ということになっているそうだが。

しかし、そう……こうした夢うつつでは、普段忘れてしまっていることもよく思い出せるものだ。

あの屋敷で暮していた頃、小梅は今のように朗らかでもなかったし、何事にもあまり取り乱すことが無く、言いようによっては物静かで、しかしよく見ればそれは、奇妙なほど淡々としていたというか、人間くささのない育児だった。

もちろん小梅は、夜々のことをとても可愛がってくれた。それこそ一日中嫌な顔一つせずに面倒を見てくれたし、夜々が遊びたいといえば、何時間でも気の済むまで付き合ってくれた。

夜々が食べ物の選り好みや悪戯をすれば諌め、行儀よくすれば褒め、風邪をひけば看病し、寝付かせるときには本を読み、つまりあらゆる点で保護者としては申し分なかったのだが、一人の女として見たとき、小梅はどこかが妙にずれていたというか、何か欠落していたように思う。現在のようによく笑いよく怒る母となったのは、いつ頃からということはいえないが――、いや、ちょうどあの時期から、段々と変わっていったのか。

ともかく夜々は、あの頃のいつか、小梅の涙を見たのである。

育ての母が初めて見せた涙であった。きっと生涯忘れまい。

夕刻、松の木の下で夜々と鞠を放り合っていた最中、突然に小梅が鞠を受け止めたまま、じっと俯いてしまったもので、小さかった夜々は、確か、母が具合でも悪くしたものかと思い、恐る恐る小梅の足元まで歩み寄ったのである。

足下から小梅の顔をのぞき上げると、途端、夜々の額に雨粒があたった。

涙であった。

下唇を噛んだ面も見えた。

夜々はそれだけですっかり動転し、自分までも泣きそうになった。
しかしそれより先に、両膝をついた小梅に、正面から体を抱きしめられた。
泥の上に鞠が落ち、ぐすりと、夜々の耳もとで音がした。
小梅が鼻をすする音であった。
母は本当に泣いていた。
そのとき、小梅の肩越し、遠くの縁側に——誰かの立っている姿が見えた。
母屋の縁側。
若い男であった。
いつからそこにいたのかは分からない。顔は遠くてよく見えなかったように思う。もしかしたら夜々の目も潤んでいたのかも知れないし、見えはしたが憶えていないのかも知れない。
恐らく小梅は気付いていなかっただろう。
男はほんの僅かの間こちらを眺めていたが、やがて母屋の中へ消えていった。
小梅は肩を震わせながら、しばらく夜々を抱きしめていた。
夜々は何も言えなかった。
「おはよう夜々ちゃん」
明るい声と玉子焼きの匂いで、夜々はまどろみから覚める。

第八章【小梅】――こうめ――

前編

一

目を開けると、小梅の大きな両のまなこが、不気味なほど近くで夜々の顔を覗き込んでいた。重力に引っ張られたピンクの短い髪が、しゃらしゃらとシャンデリアのように揺れ、その先端が夜々の頬をくすぐる。

顔をしかめる夜々の唇に、ちゅっ、という音と共に、温かな感触が押し付けられて離れた。

「んふ」

朝一番の仕事を無事完遂したような、満足げな顔。

「お、は、よ。ごはんもう出来るよ」

うきうきと言いながら小梅は立ち上がり、向こうの部屋へ行ってしまった。

夜々は目をこする。

「……ん」

窓からの陽射し。重い布団に邪魔されながら、華奢な体を起こす。

「……」軽く伸びをする。「……はあ」溜息。

毎朝毎朝、目覚めがいいような悪いような。

瞬きをふたつして、夜々はようやく立ち上がる。

二人の新たな住処に部屋は二つしかない。寝室と、台所と一体化

した茶の間である。
洗濯機は外の廊下。風呂は無くトイレも共同。エアコンも無し。この辺りでは今時珍しい神田川的なアパートであり、無尽蔵に金を動かせる見神の長集――しかもその寵児が住まうにしては、少々謙虚過ぎる環境といえるかも知れないが、無趣味で物欲も皆無である夜々にとっては、屋根と布団さえあればこれといって不自由も感じないし、何よりも殿山大輝の住居が真向かいにあるという都合のいい点が気に入って、大して迷うこともなく引越を決めてしまった。小梅も小梅で、全く止めもしなかった。
　食卓には玉子焼きと味噌汁、それから温めなおした残り物がいくつか並んでいた。歯磨きを終えた夜々が椅子に腰掛けると、味噌汁の隣に、ほかほかと湯気の立った白米が加えられる。
　さて、と小梅も向かいの席につく。
「じゃあ食べよっか夜々ちゃん」
「うん」
夜々はようやく覚めてきた目を瞬かせつつ頷く。
　いただきます、と二人は習慣的に両手を合わせ、食事が始まった。味噌汁をすすり、まだ熱かったのか、舌先を出して顔をしかめる小梅。――女怪であるだけに夜々の目から見ても魅力的な顔だが、少しばかり不思議なつくりをしている。大きな目と、どこか肉食動物じみた目鼻立ちが、例えるならば猫だろうか、そのあたりの獣を連想させる。
派手なピンク色の髪は地毛である。昔は黒く染めていることも多かったが、この時代ではそんなに目立つわけでも無いのでそのままにしている。両耳の小さなピアスはただの趣味らしく、ある日、いつの間にかつけていた。ピアサーを買ってきて自分で穴を開けたそうだが、長く生きている割にハイカラなことである。
　いつものごとく黙々と朝食を摂取する夜々に、小梅が問いかける。
「ねえ夜々ちゃん」上目遣いに。「ママのこと好き？」
「うん」

夜々は煮物の人参を口に入れる。
小梅はすねた。
「何その返事。ぜんっぜん気持ちが入ってないじゃん。ちっちゃい頃はかあさま、かあさまって一日中後ろを追いかけてきたのに……。最近夜々ちゃん冷たいね。ここ何十年か、ママにすごく冷たいね」
口を尖らせ、ぶつぶつと。
「夜々ちゃん分かってないよ。自分がママにとっての生きがいだってこと、全然分かってない。生きがいに冷たくされるなんて、死ねって言われてるのと同じだよ……」
「母様」
夜々は茶碗を置く。
「私はちゃんと母様が大好きだよ。いつもそう言ってるじゃないか」
首を傾げて笑んでみせる。
半分開いた窓の外で鳥が鳴いた。
箸の先を唇に添え、上目遣いの照れた顔で小梅は言う。
「……ママも、夜々ちゃんが好き」
「両想いだね」
面倒だが扱いやすい人だ——いつものようにそう思いつつ夜々は食事を再開する。
その瞬間、狭い部屋の中に銅鑼を叩いたような凄まじい音が響き渡り、小梅が椅子の上から横へ吹っ飛んで転げ落ちた。
窓から高速で飛び込んできた物体が側頭部を直撃したのである。
夜々は落ち着いて立ち上がり、倒れた小梅の傍らに歩み寄る。
小梅は大の字で半目を開けたまま動かなかった。
その隣に落ちた飛来物——フライパンを拾い上げ、夜々は窓の方へ歩いてゆく。

二

些細な理由で毎朝ぶつかり合っているシロと石楠花だが、喧嘩の

規模が庭まで及ぶのは、そう滅多にあることではない。せいぜい三日に一度くらいだろうか。

残念なことに今日はそうした日にあたり、昭和の漫画よろしくフライパンを振り回す石楠花がシロを追い掛け回しているうちに二人とも庭へ飛び出して、近所の迷惑も顧みず怒鳴りあい、石楠花が馬鹿力で投擲した凶器がシロの顔のギリギリ脇を反れて、向かいのアパートへ飛んでいったのが数秒前。

気持ちのいい冬の日差しの中、この上無く人の気分を害する目つきでシロは笑う。もちろん石楠花との間には一定の距離を保ったまま。

「やあい、どこを狙っておるのじゃ下手糞め」

「お前の命を狙ったんだよ！」

石楠花は肩で息して怒鳴って返す。

二人の消耗に差があるのは、走っているように見せかけて、シロの方は一センチほど宙に浮いているからである。ちなみに今日の喧嘩のきっかけはといえば、昨晩の勉強疲れで二度寝している石楠花の尻にシロが落書きをしようとしたという、実に下らないものだ。

煙草をくわえて戸の脇に立つ父が、静かに忠告する。

「石楠花、もう十五歳なんだから、庭でパンツを出すのはよくないぞ」

「え？　あ」

石楠花は言われて気付き、ずり落ちかけていたパジャマのズボンを引き上げる。

シロがすかさず背後に回りこんで茶化す。

「寝小便の染みまで見えておった」

「嘘つけ！」

振り返りざまの裏拳がシロの頬に当たり、シロは「ぎゃん」とよろける。

大輝はその光景を父の隣で脱力しながら眺めていたが、ふと、向かいのアパートの一室、その窓から顔を出した者と目が合った。

「あ、夜々さん」
「おはよう」
隔てている道が狭くて距離が近いので、さほど大きな声を出さずとも会話はできる。
夜々は睨み合う二人の真ん中に、上手にフライパンを投げ落としてくる。ちょうど持ち手の部分が芝生に突き刺さった。
「毎回毎回、どうして君らの流れ弾は私たちの部屋へ撃ち込まれるんだ。また母様が気絶してしまった。人間なら気絶ではすまないところだ」
「本当に毎度申し訳ありませんね」
頭を下げる父に、夜々は首を振る。
「礼司君の責任ではあるまい。――おい君たち、投げるならせめてもう少し軽い物にしたまえ」
「投げたのは石楠花じゃ。そうした乱暴なことをするのはいつも石楠花じゃ」
「あんただってこの間、中身の入った弁当箱投げただろ！」
「持つのを忘れて家を飛び出そうとするからであろうが！　おぬしもてすとが忙しかろうと思うて折角しろがこしらえた弁当を！」
「だからあれは謝ったじゃんか！」
数秒で話がそれてゆく。
夜々が溜息もつかずに窓を閉めたと同時に、大輝の背後で不穏な音がする。
大輝は振り返って悲鳴を上げた。
「あっ、鍋が吹いてる！」
「何じゃと」
シロが庭から中へ飛んでくる。
「おお……大変じゃ」
テーブルの上のコンロを切り、吹きこぼれた煮汁を布巾で拭き取るシロ。
足の裏の泥を払い落としつつ、石楠花も戻ってきた。

「父さんとシロが平日の朝から鍋やろうなんて言い出すからだよ」
「たまには良いであろうが」
「そろそろ食べられそうだね」
蓋を持ち上げて父が言う。
大輝はやれやれとガラス戸を閉めた。

三

窓を閉めると、小梅が目を覚まして体を起こしているところであった。さすが妖怪であるだけに回復が早いが、まだ少し目が回っているらしく、床に尻をついたまま立ち上がらない。
「あいたた」
「大丈夫？　母様」
「うん」
テーブルに掴まって何とか立ち上がり、恐ろしそうに窓を見る。
「またシロさんたちのところかあ」
「母様もたまには強く言った方がいい。この調子だと来年には火炎瓶が飛んでくる」
「やめとく……下手に文句を言って話がこじれたら命取りだもん」
「まるで組織暴力だな」
「朝は雨戸を閉めておいたほうがいいね」
小梅は言いながら椅子に座りなおし、何事も無かったかのように箸を持つ。
「ま、いいんだ。今日はママにとって良い日なんだから」
「いつにも増してご機嫌じゃないか」
「記念日だもん」小梅は壁際のハンガーにかかったものをちらりと見る。「実を言うとね、ずっと気にしてたの。だって夜々ちゃん、普通っぽいことをあまりせずに育っちゃったから……。やり残し症候群になっちゃうんじゃないかって心配してたんだよ」
「それはどうも心配をかけたね」

夜々は苦笑しながら席につく。
テーブルの隅のほうに置かれていた小梅の携帯電話が、びりびりと震えた。
小梅はそれを手に取り、両手で開いて顔色を更に明るくする。
「わあ」
「メール？」
「うん」小梅は携帯を閉じて頷く。「嬉しいメール」
「誰からだい」
「な、い、しょ」
「そう」
「……。も少し詮索してよ」
「誰からだい」
「うふふん」小梅は頬を赤らめる。「えっとね、やっぱり内緒」
「そう」
夜々は動じず味噌汁をすする。

四

どういうきっかけだったかは忘れたが朝から鍋など食べたせいで、学校には遅刻しそうになるわ腹は張るわで、大輝と石楠花にとっては少々つらい朝となった。今頃、まだ家ではシロが食べ残しやガスコンロを片付けているところだろう。
何とかホームルームには間に合ったものの、食べてすぐ走ったもので、横腹が苦しくて仕方ない。大輝は教室に到着するなり真っ直ぐに最後列の自席へ向かい、カバンを掛けて机に伏せた。そのままゆっくりと深呼吸する。
そっとしておいてほしいのに、容赦なく声をかけてくるのは右隣の大野良恵である。
「ねえ殿山くん」
「……ん」

「何、体調悪いの？」
「そういうわけじゃないけどさ」
「見てよそっちの席」
「んん……？」
良恵に目で指された左隣を見ると、机と椅子が一つずつ、つまり誰かのための席が一式、大輝の知らぬ間に出来上がっていた。
「なんだこれ」
確かそこには昨日まで何も無かったはずである。
良恵は興味深げに言う。
「殿山くんってすごいよね。普通すぐ気付くよ、自分の席の隣に新しい机と椅子があったら。っていうか、みんなさっきからこれの話で持ち切りだし……転校生かな」
「転校生……？」
こんな時期にか。
いや――待てよ。
チャイムが鳴ると同時に、担任の黒田が入ってきた。
「よし、お前らとっとと座れぃ」
そろそろ年配と呼ばれておかしくない年齢ではあるが、プロレスラーのような体躯とプロレスラーのような顔、そしてプロレスラーのような低い声とついでに怪力の持ち主である黒田に、面と向かって逆らう生徒はいない。長い学校の歴史の中にはこの男に反抗した根性者も何人かいたらしいが、彼らの残した教訓は共通して、黒田にだけは逆らうな、であったという。指導教科は当然体育である。
軍隊と見紛うほどのキレのよさで着席した生徒たちに、教卓に片手をついた担任が悠々と告げる。
「あー……お前ら」ぼりぼりと頭をかく。「あれだ。転校生が来たから……まあ、仲良くしろ。仲間はずれとかな、そういう……」
大あくび。
「……んむ。まあ、そういう意地悪いことしたらな、全員ぶっ殺すからな。先生は殺すっつったらホントに殺すからな。――おい、入

れ」
「はい」
涼やかな声がして、一人の少女が入室してきた。
シンプルだが整った顔だち。小柄で華奢な体つき。つややかな黒髪のツインテール。真新しいセーラー服。
「入神夜々です。よろしくお願いします」
静かな笑みをたたえ、ぺこりと一礼してみせる。
おおお、と教室中から感嘆の溜息が漏れた。
大輝は青ざめて唾を飲み込んだ。

五

ジャージ姿のシロは、テーブルに湯飲みの底を叩きつけた。
「何じゃと！」
「ひえっ」
小梅はびくりと身を縮める。
シロはアパート全体を震わせるような妖気を、わななく声と共に発し始める。眼もぎらぎらと恐ろしい。
「……夜々のやつめが学校に……？」
「は――はあ」小梅は脂汗を額に滲ませる。「ほ、ほんとは心配だったから初登校にはついて行こうかと思ったんですけど、本人がいいっていうから……まあ先生方への挨拶は済んでるし、大丈夫かなと」
「そのようなことは問うておらぬわ！」
「ごめんなさいっ！」
「ほんに、ひと時目を離せば何をしておるか知れぬ！」
シロの発する妖気がまた強くなり、湯飲みの中の茶が煮立ち始めた。アパート自体が本当に震え始めるのも時間の問題だろう。
小梅は怖れのあまり涙ぐむ。
「い……いや、でも」

言うんじゃなかった。そもそも、すぐそこのスーパーで偶然会ったからと、シロをお茶に呼ぶのではなかった――そんな後悔は先に立たなかった。

「夜々ちゃんも、変な理由で編入を思いついたんじゃないんですよ。ただ、ええと……大輝坊ちゃんと少しでもよく知り合うためにって」

「言い訳になっておらぬわ、すっ惚けた奴め！」牙がむき出しになる。「おぬしは何故に止めなんだ！」

「どうしてって、そりゃ、その……やっぱり学校くらい通わせてあげたいのが親心ですし」

「ああ――何たる……何たることじゃ……」

シロが頭を抱えると同時に、妖気が嘘のように萎んでゆく。

「しろの立場はどんどんと危うくなるではないか。どいつもこいつも、しろに何ぞ恨みでもあるのか……」

そのままシロはテーブルに顔を伏せてしまった。

気まずい沈黙の中、小梅は飛び散った茶を布巾で拭う。

拭いながら思う。――ごめんなさいシロさん。

でも私は、決してあなたの恋路の邪魔をするために、見神に手を回させて編入を進めたわけじゃないんです。理由はどうあれ、夜々ちゃんが「中学校に通いたい」と言い出したのが、すっごく嬉しかったんですよ。だって夜々ちゃんにはお友達もいないし……もう六十三歳だとはいっても、私にとっては、まだまだ小さい夜々ちゃんなんですから。制服だって着せてあげたいじゃないですか。実際可愛かったですよ、今朝のセーラー服姿。天使かと思いましたもん……。

小梅はまた夜々の制服姿を思い出し、密かに胸の奥を温める。

シロはゆっくりと顔を上げ、深々と息を吐き出した。

「ふう」染みだらけの古い天井を見上げて。「今頃大輝はあの夜々に誘惑されておるに違いない。あやつはしろや石楠花と違って賢そうじゃから、一体どのような手口を使うかも分からぬ。思い描くに気が気でない」

「はあ……」
「大輝を一番愛しておるのはしろじゃのに、何ゆえ誰も彼もが……」
瞬く。「そうじゃ、そこがおかしいではないか」
「はい？」
「夜々のやつは大輝を好いておるわけではないのであろうが」
「？　……まあ、はい」
小梅は頷く。
その鼻先に、シロの人差し指が突きつけられた。
「おぬしはそのあたりをどう考えておる？　夜々は、血が繋がっておらぬとはいえ、たった一人の大事な愛子であろう。それが家のためだか何だか知らぬが、よう分からぬ道理で大輝と無理に結び付けられるというのは、おぬしにとっては面白い話ではあるまいが」
「はあ……」小梅はピンク色の頭をかく。「でも今んとこ夜々ちゃんには本命の好きな人とかがいるわけじゃないですし……大輝坊ちゃんと知り合ううちに、ホントに好きになっちゃう可能性も、まあ有るっちゃ有るじゃないですか。お見合いで始まる愛もあるでしょ？　そんで結果的にお互い好き合ってれば、別に、ほら、幸せなんじゃないかなあと」
「何じゃ、やはりおぬしも大輝と夜々の仲を取り持ちたいというわけか」
「あ、いや、そういうわけじゃなくて。えっと、なんて言ったらいいんでしょ」
小梅は考え考え口を動かす。いちいち背中をつたう汗が冷たくて仕方ない。
「結局私自身の望みは、夜々ちゃんの幸せだけなんですよ。だからぶっちゃけた話、夜々ちゃんさえ納得がいくなら、ろくでもない人間じゃない限り、相手は誰でもいいっていうか……本人が後悔さえしなければそれでいいかなって」
「ああ――もう良い。子を持つ者の気は知れぬ」
シロは力なく肩を落とす。

「兎も角これで、またしろの心配事が増えた……。ほんに学校というのは嫌なところじゃ。大輝を毎日しろと引き離し、見えぬようにしてしまう。どうしたことをする場所なのかも、話を聞くばかりでは判然とせぬ。いっそしろも中学校へ通えれば良いのじゃが」

「そんなにちちのでかい中学生いませんよ。タッパも半端じゃないし」

「乳が大きいのは駄目か……」

「あ、でも」小梅は手のひらを打つ。「ちょっと授業風景を覗くくらいなら、無理なことじゃないかもですよ？　この間学校へ挨拶へ伺ったとき、そろそろ授業参観もあるって聞きましたし」

「？　じぎょう――さんかん？」

シロはきょとんとした目で首をかしげた。

六

夜。

殿山家の風呂場から、湯気と共にパジャマ姿で出てきたのは夜々である。長めの髪をタオルでまとめ、さっぱりした面持ちで居間へと入ってくる。

「いや、毎晩すまないね。しかも家主たちより先にいただいてしまって……ちゃんと風呂代は入神家のほうから振り込ませてもらうよ」

「気にすることはありませんよ」

父はソファに背を預け、脚を組んで夕刊をめくる。

「これも近所付き合いというものでしょう」

「ありがとです」

隣でぺこりと頭を下げるのは、先に風呂をあがった小梅である。

その身体的特徴から「銭湯へ行く」という行動に危険がついてくる夜々は、父の厚意で、越してきてから毎晩、殿山家へ風呂を借りに来ている。小梅はそのついでというわけだ。

風呂だけではなく、夕食が鍋物や焼肉であるときも、なんとなく二

人に声をかける習慣が出来てしまっている。まだ二人が越してきてそう経っていないというのに、もう新たな日常が構築されてしまっているから恐ろしい。

テーブルについて棒アイスを齧っていた石楠花が、横目で風呂上りの夜々を睨む。

「……こんにゃろう」

「何だね」

「聞いてなかったぞ、編入してくるなんて。しかも大輝と同じクラスだっていうじゃないか」

「言った覚えが無いからな」

夜々は涼しい顔で髪を拭く。

父と小梅が座っている向かいのソファで、大輝はうつむき、小さく溜息をついた。

隣から声をかけてくるのはシロである。

「大輝や」

「はい――、うわ」

横を向くと、シロの顔はすぐそこにあった。油断をするとシロは顔を近づけてくる。

大輝は思わず仰け反りそうになる。

「な、何ですか？」

「今日、夜々に妙なことをされはしなかったか。しろは気がかりで水も喉を通らなんだ」

「いや……別に何も」

「まことか？」

大輝の肩にたおやかな手が乗せられて、綺麗な白面がまた近づいてくる。

大輝は、今度は本当に仰け反った。

「な、何を」

「じっとしておれ」

シロは大輝の首筋に鼻を押し付け、すんすんと匂いを探る。

そして、ゆっくりと顔を離す。
「……ほれ、大輝の体に、わずかじゃが夜々の匂いが染み付いておる。あやつがずっと傍におった証しじゃ」
「それは――ただ席が隣だからですよ」大輝の頬が引きつる。「別にやましいことは無いです」
「席が隣だって？　クラスが同じっていうだけじゃなくて？」
向こうのテーブルで石楠花が声を裏返す。
「おい、それも初耳だぞっ」
「言っていなかったからな。ちなみに、断っておくが、席順に関しては全くの偶然だ」
やはり涼しい面持ちの夜々。
大輝の肩から手を離し、シロはソファの上で口を尖らせる。
「また話が見えぬ……」小さな声で。「くらすとは何じゃ。せきが隣とは何のことじゃ。……しろには何が何やら皆目分からぬ。このままでは、しろの知らぬところで、大輝が夜々や石楠花に取られてしまうように思える」
独り言のような、しかし訴えるような、ごく小さな呟きであった。
大輝は焦って言葉を捜したが、適当なものを見つけるより先に、正面の小梅があっと声をあげて立ち上がった。
「いっけない！　もう八時になっちゃう！」
「どうしたんですか」
「何だい」
驚いて訊ねる石楠花に、小梅は曖昧な笑みを返す。
「え？　ああ、ううん、何でもないの。――夜々ちゃん」
「ママ、これからちょっと出かけるから……先、帰っててくれるかな」
「ん。ああ……？」
不思議そうに頷く夜々の頭を撫で、小梅は父に一礼する。
「じゃあ礼司さん、お風呂有り難うございました。えーと……」見回してから。「とりあえず、失礼します！」

「うん――？」
父が返事をするが早いか、小梅は着ていた物の入ったバッグと携帯電話だけを持ち、ジャージの上から黒いベンチコートを羽織って、駆けるように居間を出て行ってしまった。
これにはシロも呆気に取られた様子で、ぽかんと口を開ける。
「何じゃ、あやつは？　あのように慌ておって」
「さあ……」
大輝も首をかしげる。
夜々はパジャマの上から、椅子の一つに掛けていたパーカーを羽織り、頭のタオルを巻きなおして、静かに荷物をまとめ始める。
「母様もよく分からない人だ……。まあ、私も体が冷えぬうちにお暇させていただこうかな。失礼するよ」
少々大げさなドラムバッグのジッパーを閉め、ひょいと持ち上げて一礼する。
そして――夜々もアパートへ帰ってゆき、居間は少し静かになった。夜々たちが帰った後は、度々こういう不思議な沈黙がある。
しかし今日は沈黙も長く続かなかった。
シロが思い出したように口を開いたのである。
「そうじゃ、大輝」
「？　はい」
「しろは授業参観へ行ってみたい」
「授業――、ああ」
大輝はもたれていた背をソファから離して座りなおす。
「そういえば今日プリントもらったな。でもシロさん、どうして知ってたんですか」
「小梅から近々そうした催しがあると教わったのじゃ」シロもよいしょと座りなおした。「大輝たちの学び舎へ入っても良い日と聞いた。許されるならば、しろも行ってみたいと思うておる」
「そうか――授業参観か」父は新聞から顔を上げずに言う。「私は今回もたぶん行けないだろうからなぁ。シロさんに行ってもらうの

も良いかも知れないね」
「ちょ、お義父さん？」
石楠花がアイスの棒を口から落とした。
「何をまた軽いこと言ってるんだよ。こんな妖怪、学校に入れたら何するか分からないって」
「それを言うなら小梅のやつも妖怪じゃろうが」
「小梅さんは現代社会のことをよく知ってるけど、あんたは何百年もブランクがあるだろ。だいたい授業参観ってのはなぁ」
「大輝、おぬしはどう思う？　しろが学校へ行っては迷惑か？」
「え？　――えと」
シロも突然ずるい訊き方をするものだ。大輝は返答に困って考え込む。
「そう言われても……。別にいいような気もするし、何だか不安な気もするし」
「決して余分なことはせぬ。ただ学校というものが如何なる場所か知り、大輝の昼の姿を見たいだけじゃ」言いながら大輝の袖をつまんで引く。「のう大輝、一度くらいは良いであろう？　日ごろ家で気を揉んでばかりいる、しろの気持ちも察しておくれ」
「う……。まあ……ええ、はい」
思わず頷いてしまう。
石楠花はあきらめ顔で席を立つ。
「どうなっても知らないからね……。まあ、あたしには関係ないからどうでもいいけどさ」
すねるような口調と共に、歯型のついたアイスの棒をゴミ箱へ放り、面白くなさそうに部屋を出て行った。
父はその後ろ姿を横目で見送り、
「――ふむ？」
と唸って、また新聞に目を落とす。
いつもより強く閉められたドアの音が、部屋の中に妙な余韻を残していた。

何か気を悪くしたのだろうか。大輝も石楠花の様子が少し気になったが、シロに袖をつままれたままなので立ち上がる機会を逃した。

テレビ画面が不意に、ざ、ざっと乱れる。

シロの耳が動いた。

「む――」

「どうしました?」

「いや……」

シロは眉をひそめ、細い目で周囲を睨みまわす。

「気のせいか……。化生の気配があったように感じたが」

「妖怪がこの近くにいるんですか?」

「分からぬ……」

巨大な銀のポニーテールが、風を探るようにざわめく。

父が新聞から顔を上げる。

「また、そこいらで小梅さんが犬にでも吼えられたのではないかな」

「小梅よりは随分と強い気配じゃったが……どちらにせよ、もう消えてしまった」

シロの髪が落ち着く。

大輝も部屋を見回してみる。

当然だが、何を感じることも出来なかった。

七

部屋に戻った石楠花は、テレビもラジオもつけず、壁際にあるスタンドミラーの前で、ただじっと立ち尽くしていた。

軽く息をついて呟く。

「何これ……いやな顔」

ひねくれた子供の顔がそこには映っている。

気に入らない。ムカつく。何なんだよ。――そんな、不満タラタラの顔。

「……なにが気に入らないの?」

鏡の縁を指でなぞり、訊いてみる。
——さっきまでそんなに怒ってなかったのに。
そりゃあ、夜々が編入してきたのには驚いたし、危機も感じてるけど……でも、たぶんこのイラつきは違う。
授業参観のこと？
シロが授業参観に来るのが、そんなにイヤなの？
別にいいじゃないか。
大輝のことはあたしも好きだから分かる。シロは不安なんだ。あたしと夜々だけが、自分の知らないところで大輝と一緒にいるのが。
あたしだって、シロの立場だったらそんなの嫌だ。
でも——だからって。……だからって……、何？
あたし、本当に。
「……何が気に入らないんだろ」
溜息をつき、後ろへ倒れこむ。
柔らかなベッドがそれを受け止めた。
「何が……欲しいんだろ」
じっと白い天井を見つめる。
そのとき、不意に猫の鳴き声がした。
石楠花は跳ねるように立ち上がる。
「ね、猫？」
全身に怖気が走る。
窓を見る。
夜。外の景色はもう黒い。
また隣の雨どいだろうか。あそこにはいつも猫が通っているのだ。
石楠花は真っ黒な窓を見つめたまま、近づくことも出来ずに硬直する。
にゃあ——あ——ああ——。
もう一度、長い鳴き声が部屋の中に響いた。
……部屋の、中？
石楠花は痙攣するように後ろを振り向く。

「――っ！」

目が合った。すぐ背後に「立っていた」。

毒々しく大口を開けた、真っ赤な猫の顔。まるで笑っているように見える。

顔面に似合わぬ長い黒髪を生やしたその頭部は、石楠花の頭と同じ大きさだった。首から下の形も、背丈も、人間と変わらなかった。

石楠花は凍りついた。

「な……」

息が止まる。

獣の顔を持った――人――女？

それはもう一度笑うように口を開け、黒髪の間を割って突き出した大きな耳をひくつかせ、石楠花のほうへ手を伸ばしながら、嬉しそうに短く鳴いた。

猫の声と、誰かの声。

二つの声が交じり合う。

八

小梅は携帯電話の電源を切って閉じ、暖簾の中に飛び込んだ。

そこは、駅の入り口裏手にある、細い通りの居酒屋だった。

カウンター席だけの小さな店。

「らっしゃい」と会釈する蛸入道のような店主と、若い男の店員に曖昧な笑顔を返し、小梅はきょろきょろと店内を見回す。

一番奥の客が、こちらを向いて手を振った。

「おい、こっちだ小梅」

色あせたジャンパーを着た、肌の黒い、禿頭の老人であった。

小梅は思いきり顔を崩した。

「石之助！」

「相変わらず派手な髪の毛してやがんなあ。ほれ、まあ座れや」

「うん！」

小梅は呼ばれた犬のように駆け寄って、いそいそと隣に座る。
店主が、カウンターの内側から丸太のような腕を伸ばし、お絞りと通しの煮つけを出しながら、物珍しげに二人を見比べる。
「旦那の――お孫さんですかい？」
「孫はいるが、まだこんなに大きかねえよ」
石之助は猪口を持った手の小指を立てる。
「こいつぁわしのレコだ。どうだ、可愛いだろうが」
「はあ、そうでしたか」
「冗談だよ。ったく、水商売の男ってのは何言っても顔色変えねえなあ」
「へえ、まあ、色んな人達がいますからね。娘さんですか」
「娘ってわけでもねえんだ。難しい連れ合いよ。おう小梅、おごってやるから適当に頼め。前にも来たんだがここは美味えぞ」
もう壁の品書きを眺めていた小梅は、すぐに選んで指をさす。
「あたしビール……と、ホッケの塩焼き！」
「ホッケは今さっき頼んだとこだ」
「じゃあ鰤大根がいい」
「あいよ、生ひとつの鰤大根ね」
店主は頷き、サーバーの方へ歩いてゆく。
小梅はお絞りで手を拭き拭き、石之助の顔をじっと見る。
石之助は片眉を上げた。
「何だよ」
「……石之助、会うたび年寄りになってくね」
「だったらどうした」
「どうもしない。深く考えると、あたし泣いちゃうから」
「そうかい」
石之助は猪口の中身をあおり、徳利から次を足す。
ビールはすぐに出てきた。
小梅はジョッキを軽く持ち上げる。
「ねえ、乾杯しよ。あたしと、滅多に連絡もくれない石之助の、何

年かぶりの再会に」
「嫌みったらしいこと言うんじゃねえや」
かつり、と二人の杯が鳴る。
一口目で半分を飲み干し、小梅はぷはあと息を吐く。
「んまい！」
「何でえ、けっこう呑めるようになったのかよ」
「もうウィスキー以外なら何でも飲めるよ、あたし」
カウンターにジョッキを置く。
「でもさあ、石之助、今日どしたの？　なんでしゃくちゃん達に内緒なの？」
「あいつらに言うと、家まで顔出さなきゃいけねえから面倒だろ。今日はお前の顔見に来ただけだ」
「ホントに？」
「何で疑うんだよ」
「……石之助、何考えてるか分かんないから」
「そりゃお前がアホだからだ」
「そうかなあ」
小梅は口を曲げる。
鰤大根が出てきた。
小梅はそれに割り箸を入れつつ、ぶつくさと言う。
「それにしても石之助、マジで久しぶりだよ。あたし色々話したいことあったのに、忘れちゃったもん。夜々ちゃんのこととか、色々」
「何だお前、怒ってんのか？」
「怒ってない。……けど、ちびっと寂しかった」
「悪いな」
「いいよ、今日来てくれたから」
魚の身を口に運ぶ。まだ酒が進んでいないから味が濃く感じる。
「あたしね、石之助に会うと元気出るんだ。もっと近くに住んでればいいのにって思うよ。引っ越してちょっと近くなったけど、あんまり変わらないし」

「何だ、俺に惚れてんのかよ」
「……」
小梅は口に入った骨を掌の上に吐く。目を合わせずに。
「そういう冗談、やめてよ」
「怒るなよ」
「怒ってないよ」
ビールをあおる。
演歌が静かに流れている。
石之助は頭をかき、枝豆をつまみ上げた。
「あー……あれだ」中身をかじる。「ん……向かいの家はどうだ？　連中とはうまくやってるか」
「うん」小梅は頷いた。「みんないい人だし、時々ごはんにも呼んでくれるよ。シロさんはちょっと怖いけど」
「ああ……あの姉ちゃんはな……お前も知ってると思うが、一歩間違えりゃ血の雨降らす化け物だからよ。人間も妖怪も山と殺してる。変にちょっかい出すんじゃねえぞ」
「うん。でも――話に聞いてたほど悪い人には見えないね」
「乳もでかいしな」
「うん。ちちもでかいしね。……あ、石之助」
「あ？」
「動かないで――」
小梅はお絞りを手に取り、石之助の頬を拭く。
「――とれた。ひじき付いてた」
「おお」
石之助は拭かれたところをさすり、それから笑う。
「世話焼きが手馴れてやがる。夜々のこと育て上げて、すっかり母ちゃんになっちまったなあ」
「そうかなあ」
「だってお前、親父の家で暮してた頃はよ、仏頂面っつうか何つうか、ずっと同じようなツラしてよ、こんなだったぞ、こんな」

石之助はふて腐れた蛙のような顔をして見せる。
「ええー？」
「大袈裟じゃねえよ。隣で俺が転んでも、このツラのまま知らん顔して歩いてったからな。それがお前」ちびりと飲む。「それがお前――こんな気のつく女っつうか、気の優しい女に育ったんだからよ。まあ、わしもやっとこさ、安心できる心地だぜ」
「石之助……」
小梅は、また酒を注ぎ足す石之助の横顔を見つめ、言葉を失った。
石之助の目はどこか遠くを見ていた。
演歌が終わり、次の曲のイントロが始まった。
カウンターの中で、ちょうどホッケの塩焼きを運んできた若い店員が、不思議そうな顔をする。
「何だろうこの曲。変わった演歌だなあ」
「こりゃ演歌じゃねえよ」
若いもんは仕方無えな、と石之助が笑う。
「こういうのは歌謡曲ってんだ。今流れてるのは、昔ほんのちょっとだけ流行った歌だ……今じゃ歌い手も死んじまったし、テレビなんかでも流れねえがな」
やがて歌が始まった。
優しい女の声で歌われるその曲は、小梅も聞いたことのある歌だった。確か、磐石の屋敷にいた使用人の女性が、時々口ずさんでいたあの歌だ。
聞き入ればその頃のことを思い出してしまいそうな、懐かしい歌声だった。

九

石楠花の部屋の前に立ち、礼司はドアを軽くノックする。
「おい、石楠花」
名を呼んで数秒待つが、返事は返ってこない。

礼司はもう一度ノックした。
「石楠花、もう大輝も私も風呂から出たぞ。入るなら今のうちに入ってしまいなさい」
言ってしばらく待つ。
やはり返事はない。
――もう寝たのだろうか。
先ほど何かに不満があったようだから、さり気なくそのことも聞こうと思ったのだが。
しかし、眠ったにしては、ドアの隙間から明かりが見える。珍しく電気を点けっぱなしにして寝たのかもしれない。
礼司は少し迷ったが、「入るよ」と一言告げて、一呼吸おき、ゆっくりとドアを押し開けた。
娘の部屋の中は空だった。
「おや……」
礼司は首をかしげる。
こんな時間に、親に無許可でコンビニにでも行ったのか……そんな子ではないのだが。第一、階段を下りて廊下を通るような気配はなかった。
いつの間に消えたのだろう。
窓が開け放たれ、外から風が吹き込んでいた。
礼司は肩にかけたタオルを直しつつ入室し、奥へ進んでその窓を閉める。
そして室内をぐるりと一度見回し、何となく天井を見上げて、ぎょっとした。
「……、こ――れは」
目を見開く。
これは何だ。
中央に丸型蛍光灯の据え付けられた白い天井。
その蛍光灯の脇に、平行に並んだ三本の傷跡が、カーブを描くように刻まれていた。……いや、これは爪跡か。まるで熊か虎が引っ

かいたような――。
見上げたまま立ち尽くす礼司。
外で強い風の音がして、叩きつけられた窓がガタガタと揺れた。

（後編へ続く）

第八章【小梅――こうめ――】後編

妖怪、化生、あやかし、化け物、異形、物の怪……多くの曖昧な呼び名を持つそれらは、古くから人間たちの傍にいた。

時にそれは人と共に暮らしたが、多くの場合は人を捕食した。

そうした異形と戦う術を持つ者は少なかった。

昔話や民間伝承のように、ただの読経で退散するような化け物はいない。経はあくまで教えであり、そうでなくば哲学書である。言葉そのものに力が宿るということは、まず、無いと言っていい。

しかし石字縛師の使う文句には力があり、また化け物を滅ぼすことが出来た。

それは彼らの持つ力が、異形たちと同質のものだったからである。

この国には他に、見神と呼ばれる家柄がある。彼らは視覚として捉えられぬ神気や神意、すなわち常世よりの気配を感じ、また常世のものたちと同質の神通力を操ることができる。

その能力のルーツはまさしく家系のルーツにまでさかのぼり、つるという名の人間の娘と、黒腕と呼ばれた謎の神獣――一説には山の守り神であったともいわれるが――とが結ばれ、子を生したことが始まりであるといわれる。すなわち神獣の血が混じっていることこそ、見神が見神である理由なのだ。

今や語られ聞いている者は少ないが、実のところ石字縛師の起源も似たところにある。

彼らのルーツもまた、妖怪と人間との異種族間婚姻であった。つまり、彼ら石字縛師には、多かれ少なかれ妖怪の血が流れていると

いうことだ。だから妖気も感じられるし人外の技も使うことが出来る。

しかし彼らには妖気が存在せず、見た目も元々から人間と変わらない。正確に言うならば、何も表には発現していない。

それは一人目の石字縛師――すなわち起源となったハーフが誕生した際、親によって、人間風にいえば遺伝子レベルでのプロテクトがかけられたからだと考えられている。恐らくは自分の子や孫たちが、問題なく人として生活してゆけるようにとの配慮であったのだろう。

しかし石字縛師たちは、ある特定の術式を使用したとき、おもに文字のつながりを媒介として、自らの肉体が持つ力を限定的に解放、発現することが出来る。すなわち石字文句による縛術である。

これも伝承によれば、最初の子の親が作り上げたシステムらしい。そのあたりについてあまり正確な言い伝えは残っていないが、どうやらその妖怪は、強い力はあったものの、土地に住む他の妖怪たちと折り合いが良くなかったらしく、子供も狙われる心配があったようだ。要するに護身用に残した手段だったのだろう。

ともかく、石字縛師の術と、妖怪の力とは同質のものなのだ。

だから石字文句は、決して妖怪のみに有効な攻撃手段ではない。長い裏側の歴史の中では、様々な理由でその力が妖怪以外の存在――つまり人間に向けられた例も無いではない。

石之助も石字縛師の力を人間に向けて振るった一人である。

彼が術を使って傷つけた相手は四人だった。理由は私怨。相手は何の能力も無いただの人間だった。

あれは一方的な暴行であった。

もう、何十年も前の話になる。

後編

一

今となっては昔、終戦から五年ほどの月日が流れた頃。

石之助は父に呼ばれ、横浜の片隅に建てられた屋敷を訪ねた。そこは見神の建てた屋敷であった。正確に言えば入神家が父のために造らせた家である。

父の磐石は見神の家と特に繋がりが深いというか、見神の一部として動いているようなものだったので、父にそうした土地屋敷や、また部下らしい人員などが与えられていたことも、石之助にとっては別段不思議に思うような事柄ではなかった。もっとも、石之助は磐石のしていることを細かく知っていたわけではないのだが。

普段放っておいている自分のことをどうしたわけで呼んだのかと、石之助は少々奇妙に思ったが、事情を聞いてみれば、何のことはない、仕事の上での話であった。

仕事というのも、当時の石之助は若き有能な石字縛師として、ある世界の中ではそれなりに名を馳せており、またそれだけの実力もあった。要するに、若い割に化け物を殺すのが巧かったのである。

磐石はその石之助に依頼をしたのだ。

内容は、東京に出没するという妖怪の調査であった。

なぜそんなつまらぬ依頼をとも思ったが、話はさしてつまらなくもなく、聞けば事の起こりは戦時中にさかのぼった。

戦争の末期、日本軍は統治区域だった島の南方にある森の奥で、一体の強力な異形と遭遇したのだという。

それは雌の蟲怪だった。半蟲半人の妖怪である。顔は人によく似ているが、蛾のような羽根と何本もの腕、それから胴体にずらりと並んだ伸縮性のある触手を持ち、桃色の髪を振り乱して羽ばたいては、毒の鱗粉を撒き散らし、多くの軍人を殺したという。

当時、軍のある部門では、異形のことを研究し、ゆくゆくは軍事的に利用しようという計画があった。戦争が呆気なく終わるとも知らず、感心するほど遠大な計画である。勿論立ち消えた戦艦や戦闘機の設計図などと共に葬られた計画であるが、当時の偉い方はいたって真剣で、名の通った石字縛師や、見神の者たちまでが研究人員として呼ばれた。磐石もその一人であった。

強力で、且つ毒を使う妖怪は、軍にとって格好の研究材料であった。彼らは少なからずの兵を犠牲にしてそれを捉え、磐石らによって結界を作らせ、厳重に動きを封じ、本土まで搬送した。

妖怪はその姿の通り、山ノ蛾と名付けられた。山奥にいたせいか言葉を解さぬので知性の程は知れなかったが、暴れる際の叫びはけたたましかったという。しかし掴まってからの山ノ蛾は大人しくなり、特に抵抗する様子もなく、本土の研究室内におさまっていたそうだ。

だが、落ち着いてから少しの日数が経ち、いよいよ研究に取り掛かろうかという時、異変は起きた。

一晩にして山ノ蛾の腹部が大きく膨れたのである。

雄との交わりによって既に子を孕んでいたか、それとも一体で次を産むものなのかは知れぬが、山ノ蛾はそのまますぐに産卵した。蟲怪であるにも関わらず、意外なことに、卵はたったの一つであった。

山ノ蛾は思い出したように暴れ始めた。

西瓜ほどの大きさをした気味の悪い物体を産み落としてからの、山ノ蛾の暴れようは壮絶だった。

完全と思われた結界を瞬く間に破り裂き、施設を守っていた兵隊や

石字縛師達を、たちどころに惨殺した。父はその場にいなかったそうだが、話を聞く限り、いてどうなるものでもなかったと思われる。

機関銃の射撃を全身に受けてなお、山ノ蛾は卵を胸に抱き、毒々しい模様の羽根を広げて、研究所を飛び去った。

再び発見されたのは六日後である。

元の住処によく似た森で死んでいる山ノ蛾が、民間人たちによって見つけられた。

逃走の際の戦闘で受けた傷が原因であったと思われる。産卵で消耗していたため回復が間に合わなかったのだろう。

卵は、既に内から殻の破られた状態で、中身はどこかへ消えていたという。

結局中身の行方は知れぬまま戦争は終わり、施設は人知れず閉鎖された。

しかし、それから五年の時が流れた今頃になって、東京の真ん中辺りで妙な噂が聞かれるようになったらしい。

桃色髪の娘が、毒の粉で人を殺す。――山ノ蛾と到底無関係とは思えぬ風聞だ。

命令されてしたこととはいえ、磐石は、恐ろしい化け物を森の中から引きずり出してしまったことを気に病んでいた。きっと放っておけば特に害も無い存在であったろうに、それをわざわざ捉えて本土まで運び、挙句は子が街に放たれたのだから、気に病むのも当然のことといえる。

石之助は調査の話を受け、可能であれば捕縛することを約束した。

先払いの金は父ではなく、当時の施設長だった火高という男から出た。後に石之助も一度だけ会うことになったが、妙に油断のならぬ目つきをした男であった。金を出したのも、磐石と同じく自らの所業を悔やんでのことという名目だったが、話し振りもあまりに綺麗で、実のところどうだか知れぬというのが石之助の直感であった。

もっとも、今となってはあの男の本心など分からない。

ともかく石之助は、それからしばらく、まだ泥臭さの残る東京の

町をうろついた。

桃色髪の娘の話は中々流行りの怪談とみえて、あちらこちらで色々な話を聞くことが出来た。しかし妖怪話の多分に漏れず、大抵の場合は余計な尾鰭や知ったかぶりがついていて、しかもそれが格別じゃらじゃらとした装飾ばかりだったせいで、動けるだけの情報が集まるには、ちょっとした地味な苦心が必要になった。

やっと集めた情報を手がかりに考えれば、これが灯台下暗しとはよく言ったもので、意外なことに、化け物は今、父から依頼を受けた地である横浜の方面へ向かっているか、さもなくばもうとっくにそこへいるらしいということが分かった。東京で聞いた話に尾鰭が多くついていたのも当たり前の話である。娘の妖怪が東京にいた頃からすれば、もう時間が大分過ぎていたのだ。

横浜へ戻ってまた話を聞き集めてみると、どうも関内の方へいるらしいということが分かった。ちょうど、昔に岩亀楼という大遊郭のあった辺りである。今はもう跡形もないが、様々な情念の渦巻いた地だ。妖怪も、特に女怪とあらば、知らず知らず惹かれたのかも知れない。

その辺りの酒場を色々とうろつき、話を集めながら幾日か過ごすと、程なく石之助は目当ての女怪と巡り合った。石之助の方が捜していたのだから全くの偶然というには程遠いが、しかしそれは、実に幸運なきっかけによる接触であった。

夜、安酒にほろ酔って酒場を出て、借りている宿へ帰る途中、人が倒れるのに行き会ったのである。

よろよろと歩いて目の前で倒れたその男は、抱き上げた石之助の胸で血を吐いて果てる際、ある細い路地を指差して、奥に襤褸を着た桃色髪の娘がいたことと、声を掛けた途端に毒の粉を吹きつけられたことを教えてくれた。

石之助は男の死体を置き去りに、路地の中へ飛び込んだ。

確かに娘はそこにいた。

話に聞くとおりの長い桃色髪だったが、目の当たりにしてみると、

思いの外あどけなく、可愛らしい顔だちをしていた。体も小さく、あまり強そうには見えなかった。もっとも、妖怪の強さ弱さなどというものは、到底見た目で分かるものでは無いのだが。

娘は最初、俯いたまま石之助とすれ違おうとしたが、石之助が立ち止まるとそれに反応して歩みを止め、こちらの顔色をうかがった。

石之助は青かった。

年経た今ならば自らの気色を全く断つことも出来ようが、その時の石之助は、咄嗟に平静を装ったようで、警戒している娘にすれば丸出しの感情を顔から発していたのであろう。それはある種の恐れであったのかもしれないし、殺気だったかもしれない。

娘は猿のように飛び退いて、その口から、息吹と共に赤茶けた粉を吹き出した。

石之助は胸に仕込んでいた札を抜き、風を生んでそれを返した。敵のやり口を知っていたからこそ出来た仕度である。何も知らなければ死んでいた。

娘は自らの毒霧を身に受けて声を上げたが、体から吐き出した毒で弱るわけもなく、少しひるんだだけで、また石之助を睨み返した。

綺麗な眼であった。

娘は襤褸を脱ぎ去り、腋の下からもう二対の腕を生やすと、石之助に踊りかかってきた。

石之助は愚かなことに、まさに自分を殺そうとしている、しかも腕が六本もある妖怪の裸体に、あろうことか一瞬目を奪われ、大切な守りを怠った。地に組み敷かれたのだ。

娘は容赦なく、猛烈な力で石之助の首を絞めてきた。危うく首の骨を折られてしまうところだったが、闇雲に思い切り繰り出した蹴りが娘の鳩尾に当たり、六本腕の戒めが解かれたことで何とか抜け出せた。

石之助が地を転がって立ち直すと、娘は亀のようにうずくまったままこちらの顔を見上げた。どうやら痛くて起き上がれないらしく、細く唸りながらカチカチと歯を鳴らし、薄汚れた頬に涙を流してい

た。

蹴られて怖くなったのか、裸の体も小刻みに震えていた。

考えてみればまだ生まれて間もない存在である。母親から譲り受けた毒の粉は厄介だが、妖怪としての基本的な力はあまり無いのだろう。石之助を組み敷いた力も、もちろん人間並みは超えていたが、一端の化け物といえるほどのものではなかった。

そして――これも石之助の青さだったのかもしれない。

うずくまった姿を見下ろしてみると、途端に妖怪のことが哀れに思えてきた。

このまま縛して父のところへ連れてゆけば、父のことだ、きっと危険であると、処分してしまうに違いない。この妖怪は幾人もの人間を殺したのだから、それはそれで当たり前なのだが、目の前で震えている娘は、形こそ人と違うところはあれど、人の娘のように弱々しく、そうするに忍びない存在であるように感じられてきたのである。

娘は歯軋りしながら「痛い」と言った。言葉を解すことはそれで分かった。

「すまない」と石之助は言った。

石之助の目には、娘の桃色の髪が、やけに美しく見えていた。

二

小梅は石之助と出会った時のことをあまり憶えていない。

いや、それはあまり正しい言い方ではないかも知れない。つまり――あった事柄は憶えているのだが、そのとき自分が何を思っていたか、どう感じていたかを思い出せないのだ。

恐らく何に対しても大したことを感じなかったのだろう。肉体と知能の成長は人間に比べれば恐ろしく早かったが、人間社会の只中だったにも関わらず、たった一人で育ってしまったせいで、人の形に化けるやり方やゴミのあさり方は覚えることが出来たが、人間の

考える理屈というものが、今ひとつ分かっていなかった。そのせいで、さしたる理由もなく多くの人間を殺したことも、あの頃、石之助にぺらぺらと喋ってしまった。今にして思えば秘密にしておけばよかったと悔いている。

出会いは夜、関内の細い路地であった。

小梅は襲った石之助の返り討ちにあい、地面にひれ伏した。腹を強く蹴られて物凄く痛かったことを憶えている。人間のあんな反撃にあったのは初めてのことで、痛いだけではなく怖ろしくて、動くことも出来なかった。

石之助に手を差し伸べられた時も、ただ怖くて、言われるままにその手を握り返した。

小梅の肋骨は折れていた。

自分は人と違うから、折れた骨などすぐに治る。それは何度か怪我をしたせいで知っていたし、当時まだたどたどしかった言葉で石之助にもそう説明したのだが、彼は分かった分かったと言いながら、持っていた塗り薬を塗ってくれた。その時、石之助は小梅の乳房から必死に目を反らしていたように思う。小梅にはまだ、それが何故なのか分からなかった。

石之助は薬を塗り終わると、自分の上着を小梅にくれた。ありがとうと言えれば良かったのに、小梅はまだそんな言葉を知らなかった。今でもまだ言えていない。もう、いつ言えばいいのかも分からない。

小梅を道の端へ座らせ、自分もその横へ並ぶと、石之助は「なぜさっきの男を殺したのか」と訊いてきた。

「分からない」と答えると、石之助は少し困ったような顔をして、「何かきっかけがあったろう。話しかけられたのじゃないのか」と再び訊いた。

小梅は考え、「話しかけられた。でも殺したのはあれが人間だから」と答えた。

石之助は、「お前は人間なら皆殺すつもりか」と言った。

小梅はまた考えた。
そういうわけではない。
ただ、小梅にとって人間は、よく分からない、恐ろしい存在なのだった。
人間は、食い物を取れば追ってきて小梅を滅茶苦茶に叩く。ニコニコしているから優しい者かと思ってついて行けば、小梅を裸にして怖いことをしようとする。どういう人間であれ、少しでも関われば、結局は怖い目に遭わされる。だから小梅は関わりそうな人間を、関わる前に殺してしまうようになったのだ。
しかし小梅はそれをうまく説明できなかった。
ただ「違う」とだけ言った。
石之助は、「そうか」と静かに頷いた。
それから石之助は、小梅に難しいことを語った。
人間の作った社会は人間の世界であるということ。
例え本当は違う生き物でも、人間の姿に育って、それに慣れてしまった以上、人間としての決まりを守って生きていかねばならないということ。
そのためには人を殺したり、傷つけてはいけないということ。
大変なことだが、ちゃんとした言葉を学び、世の中のことを学び、ゆくゆくは仕事をして、人間として生きてゆくのが、小梅が幸せになるための道であるということ。
それらを石之助は、首を傾げながら聞く小梅に、ゆっくりと語ってくれた。
聞いているうち、小梅は段々と、石之助のことを怖ろしく感じなくなっていった。ニコニコと笑わず、むしろ恐ろしげな鋭い目つきをした若者が、小梅にとっては初めての、敵でない人間であるように思えた。
しかし幸せという言葉の意味がどうしても分からず、何度も石之助に訊くと、彼は腕組みをして考え込み、困った顔で「俺にもまだ分からないが、きっと、なってみれば分かるものだ」と教えてくれ

た。そして立ち上がった彼が「次の晩にまたここで会えるか」と言ったので、小梅はよく分からぬまま頷いた。

あくる日、小梅は朝から約束の夜になるまで、ずっとそこに座り込んだまま待っていた。

腹は減ったし尻は冷えたが、襤褸の上から着た上着の匂いを時々嗅いでみながら、その上着をくれた男がやってくるのを思うと、何故だか苦には感じなかった。

夜になり、約束どおりに石之助はやって来た。手には風呂敷包みを持っていた。

「待ったか」と聞くので「あれからずっと待っていた」と答えると、彼は驚いた顔をして、「腹が減ったろう」と言った。

そして風呂敷包みを開け、中からいくつかの握り飯を出した。小梅にくれるというのである。

小梅はまた少し警戒もしたが、本当に腹が空いていたので、すぐに受け取って食らいついた。握り飯は大きさがどれも不ぞろいだった。食っている間、石之助はまた前の晩と同じような話をしていた。

食い終わった小梅に、石之助は「まだ痛むか」と訊いてきた。何のことかと訊くと、「昨日俺が蹴ったところの話だ」と、決まり悪そうに指をさす。

本当はもう治っていて、痛くもなんともなかったが、小梅は咄嗟に「まだ痛い」と嘘をついた。どうして自分が嘘をついたのか、その時は分からなかったが、今は恥ずかしいほどよく分かる。

やはり石之助は軟膏を持っていて、それを取り出すと、小梅に「自分で塗れるか」と訊いてきた。

小梅は「塗れない」と答えた。

そんな嘘をついて、小梅は石之助にまた薬を塗ってもらった。その時も石之助は目のやり場に困っているようだった。

薬を塗り終わると、石之助は帳面と鉛筆を取り出し、それを使って色々なことを教えてくれた。

言葉の使い方、簡単な世の中の決まり事、片仮名、数の数え方、金

というものの意味、それから自分の名前。
小梅という名前を付けてもらったのも、確かその夜だったと思う。
「髪の色が梅という花に似ている」と石之助は言っていた。
そんなことが幾晩も続いた。
狭い路地の、真夜中の、しかも教師と生徒がたった一人ずつの学校だったが、小梅にとっては全く新しい世界であった。
物事を覚えることは楽しかったし、褒められることは嬉しかった。
——そう、そこで小梅は「嬉しい」と「楽しい」を知った。
そして、「小梅」と名前で呼ばれる度に去来する不思議な感情も、小梅はそこで初めて知ったのだ。
小梅は石之助に会える時間を楽しみにするようになった。
しかし事件は、小梅と石之助が初めて会ってから半月後の夜、唐突に発生したのである。

三

石之助がいつものように握り飯や帳面を持って路地へ行くと、小梅もいつもの如く、そこへうずくまって座っていた。
ただ、いつもと違っていたのは、呼んでも小梅が顔を上げぬ点であった。
石之助は眠っているのかと思い、ゆっくり近づいてその顔を覗こうとした。
小梅の肩が震えていた。
鼻水をすする小さな音が聞こえた。
ぐすり、ぐすりと、小梅は泣いていた。
石之助はぎょっとして片膝をつき、小梅の肩を掴んだ。
「何があった」——。
そう訊くと、小梅はようやく顔を上げた。
頬骨のあたりが腫れていた。小梅は妖怪である。まだ腫れているからには、そうとう新しい傷に違いなく、しかも石之助の経験から察

するに、それは男の強い力で殴られた傷であった。
石之助はもう一度訊いた。
「誰に」――「何をされたのか」。
小梅は体を縮め、小さな声で短く語った。
最初は抵抗しようと思ったのだという。
しかし石之助が教えた世の中の決まり事を思い出し、それを守って、小梅は相手のうち誰一人として傷つけなかった。
逃げようとしたが、一日中そこへ座っていたせいで足が痺れ、うまく走れなかった。
相手は四人もいたのですぐに掴まってしまった。
やめてくれと言ったら、大きな声を出すなと二度殴られた。
地面に倒され、服を脱がされ、今度は平手を食らわされて、静かにしていればすぐに済むと言われた。――だが、四人すべてが満足するまでの時間は、小梅にとってはとても長く、死ぬほど怖ろしくて、泣くことも出来なかったという。
石之助は黙ったままその話を聞いていた。
小梅は話した後、苦しそうに「痛い」と言った。
涙をぽろぽろと流し、痛いからあの薬を塗ってくれと言った。
血と、生々しい男どもの臭いがした。
石之助は小梅の頭に手を置き、静かに頷いた。
「分かった、ちゃんと塗ってやる。だけど少し待っていてくれ」――。
そして石之助は駆けだした。
肉体をあらゆる手段で鍛え抜いた石之助にとっては、周囲の道を瞬く間に駆け回ることなど造作も無い。しかもその辺りは夜になると人通りも少ない。
四人組はすぐに見つかった。
彼らは酒に酔っているらしく、いとも楽しげに笑い合いながら、ふらふらと道の真ん中を歩いていた。
彼らの前に立ちふさがり、石之助は荒い息をこらえて問うた。

――「桃色髪の娘を知っているな」。

男たちは顔を見合わせ、「何だ手前は」と石之助を取り囲んだ。

「さっきの乞食娘の連れ合いか」と一人が言い、突き出した腹を更に突き出して、「やられて文句があるくらいならオボコにしておくな。女などというものは早い者勝ちだ」と唾を吐いた。

そして唇を結んでいる石之助に、更にもう一人が歩み寄り、「分かったらそこをどけ」と怒鳴るとともに、酔っ払った手で、ぐいと石之助の肩を押した。

それだけで、若い石之助がわずかに保っていた理性を突き崩すには十分であった。

石之助は考えるよりも早く、自分を押した手の指を折り――男が悲鳴を上げるより早く、石字文句の刻まれた竹札を抜いていた。

閃光が何度か弾け、怒りにまかせた仕置きは数秒で終わった。

酔った生身の人間から、それぞれ一本ずつの腕を奪う。

余計に腹が立つほど簡単な作業だった。

石之助は返り血も浴びずに小梅の元へ戻り、まだ泣いている小梅の肩に手をやって、出来る限り優しく言った。

「もう怖くない」。「俺の父のところへ行こう」――。

父親を説得する覚悟は出来ていた。

四

石之助に手を引かれ、磐石の屋敷へ連れて行かれた日のことは、緊張しすぎてほとんど憶えていない。

憶えていることといえば、門が大きかったこと、磐石が小梅の顔を見るや、あんぐりと口を開けていたこと……その顔が、石之助が熱心に話をするうち、困惑した顔になり、やがて静かな顔になり、最後には呆れ顔に変わったことくらいである。

ともかくその日から、小梅は内密に磐石の家で育てられるようになった。

それによって、石之助や磐石が、誰にどうした嘘をつかねばならなかったか――そのあたりは小梅の知るところではないが、きっと迷惑をかけたのであろうと思う。

屋敷に移ってから小梅の生活が如何に変わったかというと、食べ物が握り飯からおかずのある食事に変わり、雨の当たらない寝床ができた。それだけではなく、石之助が一日中傍にいてくれるようになった。これは小梅にとって何より安心できることであった。

磐石も、石之助の父であるから、やはり優しい男だった。優しいどころか小梅が欲しいという物は何でも揃えてくれたし、しつけに几帳面な石之助と違い、何があっても小梅のことを叱らなかった。――その甘さが、小梅の母親の死に加担してしまった後悔から生まれていたものだったということは、死に際の本人から聞いたが、小梅は母の顔も知らないし、実際磐石たちが親のようなものだと感じていたので、全く恨んではいなかった。

屋敷の使用人や、磐石の下の者たちも、小梅に優しくしてくれた。きっと職業柄、妖怪という存在に比較的慣れていたからなのだろう。手鞠をしたり綾取りをしたり、小梅をただの子供と同じように扱ってくれた。もっとも、小梅の外見はもう、今と同じように二十歳近くの娘に育っていたのだが。

石之助はといえば、何かにつけて小梅に物事を教えてくれた。小梅は、心の発達は相変わらず鈍かったものの、物の怪であるせいか、単純な物の覚えは良かった。例えば読み書きや算盤である。いろは歌など、路地で石之助に読み方を教えられながら一、二度書き写せば覚えてしまったし、数勘定のほうは、数字を覚えて幾日もせぬうちに割算まで出来るようになった。そういう頭を持っていたものだから、勉強はずいぶん駆け足で進んだ。

小梅が基本的な学習をすぐに終えてしまうと、石之助は、沢山の本を買ってくれたり、思いつく限りの場所へ連れて行ってくれるようになった。石之助に連れ回され、汽車の乗り方や買い物の仕方など、小梅は沢山のことを教えてもらった。

石之助といるのはとても楽しかった。世の中のことを学び、色々な人間を知ってなお、石之助は小梅の一番好きな人間だった。小梅が素直にそう伝えると、石之助は、「そうか」と言って頭を撫でてくれた。

優しく全てを教えてくれる石之助は、小梅にとって神のような存在だった。石之助の言葉は絶対に正しいはずの言葉で、小梅にとって、それこそがまさに法律だったのだ。

だから屋敷に住んで一年ほどが経ち、石之助から突然に別れを言い渡されたときも、本当は泣きたいほど辛かったのに、「石之助が言うのだからそれが絶対に正しいのだ」と信じ、小梅は我慢して涙をこらえ、首を縦に振ったのである。

五

石之助が小梅に惹かれるようになったのは、いつ頃からだっただろうか。

ひょっとすると、出合った時にはもう恋していたのかもしれない。妖怪とみれば嬉々として殺していた石之助が――そう、石之助にとって悪い妖怪を滅するのは、西洋の貴族が遊びでする狩りのようなものでしかなかったのに――ひと目見ただけで、殺すどころか手当てまでしてしまったのが、そのいい証明ではないか。

なぜ惚れてしまったのだろう。

石之助は内心で四六時中自問した。

顔かたちに惚れたのだろうか？　女怪が皆生まれつき持っている色香にあてられたのか？　……それは恐らく、どちらも違う。絵に描いたような美青年というわけではないが、石之助はなぜか多くの女に好かれるたちであった。だから綺麗な女も見慣れていたし、女怪特有の色香にも、仕事が仕事なだけに慣れていた。

では、小梅の何をそんなに好きになってしまったのだ。

やはりあの純粋な眼差しだろうか。どのようなことも素直に受け

止め、まったく疑うことを知らぬ透き通った心に惹かれたのか。
いや――馬鹿な、あれは何も知らないがゆえの純粋だ。善も悪も知らぬ、赤子のような純粋なのだ。
もしその純粋に惹かれたのだとしたら、これは何と醜い恋心であろう。何も知らぬ小梅に物事を教え、少しずつ自分の色だけで汚してゆくことに喜びをおぼえているのだとしたら、自分はとんだエゴイストではないか……。
屋敷で共に暮すうち、小梅への恋心を自覚した石之助は、段々とそうしたことを考えるようになっていた。
きっかけは本当に些細なことで、石之助の言葉ひとつひとつを、まるで親の言葉でも聞くように頷きながら受け止めている小梅の大きな瞳が、何だか自分の中の醜い部分を映し出してしまうような気がして、不意に怖く感じたのが始まりだった。
醜い部分というのはつまり、小梅という一人の女を、本人が何も分からないのをいいことに、石之助の思うように繋ぎ止めておこうとする心のことである。
以前から少なからず自覚はあったのかもしれない。自分が小梅を、様々な知識を与えるという手段で独占し、その世界の広がりを制約していることを、石之助は自分で気付いていたのかもしれない。
しかも――それを自覚しているということは、もう一つの恐ろしい事柄すら、石之助は分かってしまっているということだ。
すなわち、小梅が自分に対して抱いている好意は、子供から親に向けられるのと同じ種類のものであり、普通の若い娘が当たり前に男を愛する感情とは、決して否なるものであるということを。
その絶望的な事実に気付いてしまってからというもの、石之助にとって、小梅の無垢な好意は何より辛いものとなった。
小梅は自分のことを好いているようで、決して愛してはいないのだ。
それどころか石之助のことなど、小梅は何も知らないのだ。子供を可愛がるように相対していながら、内心ではその肉体を自由にして

しまいたいと思っていることも、あの夜小梅を犯した者たちの腕を、正義の裁きのような顔をして無残に千切り落としたことも――ああ、あれは嫉妬してやったのだ。自分の手で汚したかったものを横取りされ、それが気に食わなくて痛めつけたのだ……。

今にして考えれば、少なくともあの復讐は、間違いなく、ただ小梅が可哀想でたまらなくなって行ったことなのだが、当時石之助は思春期の少年特有の情緒不安定に陥っており、やたらとそのようなことを考えて、自分を貶めては苦しんでいた。

そんなところへ、都合がいいのか悪いのか、入神家から母親役を探す便りが届いた。兼ねてより聞き及んでいた先祖返りの子「夜々」の、育ての親を探しているというのだ。

まだ腹にいる間に父親を亡くし、生れ落ちると共に母親も失った夜々は、見神の術で成長抑制を施されており、普通の人間より大人になるのが遅く、寿命も恐ろしく長いという。

生まれてから十二、三年は赤ん坊のままなので、まだ十年ほどしか経っていない今のところは生身の女たちが代わる代わる世話をしているものの、物心ついて心が育ち始めてからは、一人の親がずっと育ててゆくのが良いに決まっている――というのが、贅沢な入神家の考えであるらしい。だから、何らかの理由で長い寿命を持っている者が、専属の母親役として世話をするのが一番良いのだが、その頃の見神には時間に融通のきく適任者はおらず、困って磐石のところまで手を求めてきたのだ。

つまり簡潔に言うならば――「育ての親になってくれる女怪などはいないだろうか」と聞いてきたわけだ。

なるほど、女怪ならば適任であろう。寿命も長ければ戦闘者としても強い。それ一体がいれば大仰な警護も必要なくなる。

しかし、いかに異形と関わりの深い石字縛師といえど、そうそう妖怪の知り合いがあるわけもなかった。妖怪はほとんどの場合、始末する相手であって、使役するものですらないのだ。

丁重に断ろうとした磐石であったが、石之助がそれに待ったをか

けた。

「うちに小梅がいるではないか」――石之助は父にそう言ったのだ。

磐石は驚いた様子だった。

確かに小梅を紹介することは、磐石も考えないではなかったろう。元は人殺しとはいえ素直で物覚えの良い娘である。しかも、何があっても人を傷つけることをせぬ。少々未熟なところはあれど、見ようによっては適任であった。

しかし恐らく磐石は、小梅を可愛がっている石之助が反対するに決まっていると思い、小梅の名には触れもしなかったのだ。それを石之助当人が持ち出したのだから驚くのも無理はない。

だがその頃の石之助は、もう、自分が小梅を束縛しているという自己嫌悪に耐え切れなかった。また、自分を愛していない思い人が、自分に屈託なく懐いてくるのがたまらなく辛かった。

だから離れたいと、ただそれだけのことだった。

後に凄まじい後悔にとらわれるとも知らず、揺れる心の傾いだままに、石之助は小梅に別れるのを切り出そうと決めてしまったのだ。

石之助は小梅を自分の部屋へ呼び、夜々という赤ん坊の育ての親にならぬかという旨を、静かに語って聞かせた。

見神の成長抑制によって引き伸ばされた夜々の寿命は長く不安定で、恐らく七、八十年は親の代わりをせねばならぬということ。その間に石之助や磐石は歳をとり、死んでしまう――つまり、行けば、もう共に暮すことは出来ないであろうということ……。石之助が抑揚なく語っている間、小梅はいつも通り、何を考えているのか知れぬ透き通った目を時々瞬かせながら、合いの手も打たずに聞いていた。

ただ、話が終わると、小さな声で「どうして石之助は、小梅がそこへ行くのが良いと思うのか」と訊いてきた。

石之助は大変迷った挙句、本心を素直に打ち明ける最後の機会だったものを、「お前にとって、それが一番いいからだ」と、心にもない答えを返してしまった。

小梅は――分かった、と簡単に頷いた。

これには石之助も拍子抜けした。少しくらいの駄々はこねるもの……いや、こねてくれるものだと思い込んでいたが、小梅は少しも迷うことなく首を縦に振ったのである。

そして小梅は一週間後、夜々の世話をするため、見神の使いに連れられて、石之助の元から去っていった。

それからしばらく石之助は喪失感と後悔の念に苦しんだが、ある一定の時期を過ぎると、少しずつ冷静になってきて、「あの時ああ言ったのはつまらぬ自尊心のためだったが、事実、見神の家に行ったことは小梅にとって良かったのかも知れない」と、よい方へ考えることが出来るようになった。

思えば、小梅は自分を可愛がった石之助たちとの別離を「分かった」の一言で済ませてしまうほど精神的に未完成だったのだ。そんな未熟な娘を育ての母親として紹介したのは、少し入神家に悪かった気もするが、育児という貴重な経験をゆっくりと積むことができるのは、小梅が人として成長する上で大きな糧となるだろう。小梅の一生は果てしない。長い目で見てちょうど良いくらいなのだ。そう、結局のところ、これでよかったのだ……。

石之助は半ば自分に言い聞かせるように納得し、それ以後、なるべく小梅のことは思い出さぬように努めた。

泡沫の夢は終わり、あとは依頼を受けて化け物のことを調べ、必要なら殺してゆくだけの、つまらぬ日常に逆戻りであった。

六

石之助との別離は大変辛いものだったが、小梅は「駄々をこねてはいけない」と自分を律し、一切の文句を言うことなく、石之助の言う通りに磐石の屋敷を去った。

その日から小梅は入神の人間になった。

最初、本家の屋敷で挨拶をしたときは緊張して怖かったが、何だ

か偉そうな老女にいくつかのことを訊かれただけで、特にいじめられるようなことはなかった。

その場で、もう赤ん坊と対面した。

初めて見る赤ん坊はとても小さかった。見るからに弱々しく、丁寧に扱わないと死んでしまいそうで、気をつけなければいけないと思った。

黙って赤ん坊を見つめている小梅の姿を、偉そうな老女は、微かに細めた目で眺めていた。

老女が入神家の長であるということを小梅が知るのは、それからしばらくしてからのことである。

子育てのことを知らぬ小梅に、いきなり赤ん坊を世話する役目が与えられるはずもなく、小梅はそれから半年の間、料理や裁縫、子供が病気にかかったときの世話の仕方などを、色々な人間から教えられた。小梅は何でも教われば教わるだけ覚えたので、皆が感心して可愛がってくれた。

また、様々なことを学ぶうちに、赤ん坊への興味は自然と高まっていった。

ようやく直接の世話が許可されて赤ん坊が手元にくると、小梅はすぐ、赤ん坊に夢中になった。

とにかく片時も離れることはなく、泣けばすぐにあやし、小便が出ればすぐにおしめを取り替え、おとなしく眠っている間も傍に寝転がって、ずっとその寝姿を眺めていた。紅葉のような手がただ開いたり閉じたりするだけで、小梅には面白くて仕方がなかったのだ。

しかもそうした面白さは全く薄れることがなく、それどころか、日に日に強くなってゆくようだった。

屋敷の女中さんたちが口々に「小梅さんは夜々ちゃんが可愛くて仕方がないのね」と言うので、それが「可愛い」という気持ちだと知ることができた。時々磐石などが小梅に言ってくれた言葉である。

彼らが小梅に対してそういう気持ちでいてくれたことを、小梅はとても嬉しく感じた。

しかし驚いたのは、途中で乳母役の者が必要なくなり、その役目まで小梅に回ってきたことであった。

つまる話、ある日突然に、小梅の乳房から母乳が出るようになったのである。

これは後で聞いた話なのだが、化生の肉体がそのように変質するのは、別段驚くべき現象でもないらしい。小梅の姿は元より、妖力と意思によって化けた形なのだ。可愛い夜々に乳を与える乳母役たちを、小梅は知らず知らず羨ましく思っていたのだろう。それに順じて肉体が化けたのだと思われる。

そのようなことがあったから、小梅は本当に一日中夜々に付きっ切りになった。

おしめを替え、乳を吸わせ、寝付かせ、あやす。ただそれだけの毎日を、小梅は飽きもせずに何年も繰り返した。

繰り返しの日々の中、ふと一度、石之助が教えてくれた「幸せ」のことを思い出した。

「もしかしたら今の状態がそうなのかもしれない」と思い、小梅は石之助に心から感謝した。やはり石之助は間違っていなかったのである。あの時はどうして突き放すのかと内心悲しみもしたが、見神の家へ来たお陰で、こうして可愛い夜々との日々が手に入ったではないか。石之助はちゃんと小梅のことを考えて、正しいことをしてくれたのだ。――小梅はあらためて石之助という人間のことが好きになり、また会いたくなった。

しかし石之助は、小梅の心がいかに募れど、一度として会いに来てくれることは無いのだった。

小梅はいつも心のどこかで石之助のことを待っていたが、顔を見せてくれないのにも、きっと深い理由があるのだと信じ、自ら押しかけてゆくようなことはしなかった。

やがて夜々は少しずつ大きくなり、喋るようになり、歩けるようになり、外で遊べるようにまでなった。

小梅には夜々が育ってゆくのが楽しくて仕方がなかった。小梅が歩

く後ろを、夜々がよちよちと付いてくるのが愛らしくてたまらなかった。

だが、小梅は分かっていなかった。人の何倍もの時間をかけて育つ子が、歩けるようにまでなったということ。それはつまり、それ相応の時が流れたということなのである。老いを持たない小梅だから、尚のこと分かり辛かったのかもしれない。

――気付くと、十七年と二月の年月が経過していた。

その頃には、小梅と夜々は、埼玉にある分家屋敷のひとつに移り住んでいた。夜々が大きくなってきたので、人の揃った本家より、一番庭の広い屋敷がいいという話になったのである。

その屋敷の庭には、池と松の木があった。

七

たかだか一年間の淡い恋を忘れられなかったのは、石之助が純情だったからなのか、それとも後悔があったからなのか――。全国を飛び回る仕事だったので、土地土地での女遊びはそこそこにしたし、関わった女の数も多かったが、誰が相手でも、どこかで物足りなさを感じて付き合うとまではいかず、石之助は三十も半ばになるまで、決まった相手を作ろうとはしなかった。

しかし、石字縛師にもあまり仕事の来ない世となって、溜まった金を元手に小さな事業を始めた頃、磐石の知り合いから見合いの話が来た。

当たり前だが、相手はただの人間であった。

名を頼子といい、ふくよかな体つきをした、大人しそうな女だった。

乗り気でなかった見合いだが、成り行きで何度か会う内に少しずつ打ち解けて、やはり少しずつだが、お互いの腹を割って話せるようにもなった。

それで聞いたのだが、頼子のほうも、最初はあまり見合いに乗り気でなかったらしい。そろそろ年がまずくなってくるというので、

父親から無理矢理に引っ張り出されたのだそうだ。
何だか気が合うような気がした。
親たちも知る中で頼子と逢瀬を重ねるうち、石之助の心は段々と落ち着いてきた。人によってはそれを老けたというのかも知れない。「この女と一緒になる」――そう心に描いても、悪いという気はしなかった。
ただ、やはり小さなわだかまりはあった。
小梅には会わぬようにして十七年を過ごしてみたが、これも最後の決断のためと思い、再会してどうするという考えもなく、石之助は個人的に入神家へ連絡を取った。小梅は夜々と共に、いつの間にか埼玉の分家屋敷へ移り住んだということであった。
石之助は土産も持たずに埼玉へ向かった。

八

ある朝、分家の主から、小梅は一つの報せを受けた。
小梅が世話になっていた家の息子が、父親のすすめで見合いを受け、どうやらそれなりに上手くいっているらしく、近々結婚するような運びらしい――。
石之助が、結婚をするというのである。
小梅は不可思議な衝撃を受けた。
結婚とはめでたいことである。祝い事にするくらいだから、良い事柄に決まっている。げんに教えてくれた者も、めでたそうに微笑んでいるではないか。石之助も幸せに違いない。
しかし小梅は不思議と、全く喜ぶことができなかった。
石之助が幸せになるのを喜べぬとは、自分はいったい何というひどい女なのかとも思ったが、それでも祝いの文句が出てこなかった。それどころか、小梅は感じたことのない、深い悲しさすら感じていた。
頭の中が真っ白になった。それだけの衝撃であった。

その日は夜々と遊んでやるのにも気が入らなかった。
後にも先にも、そんな気持ちで夜々の相手をしたのは、あのときだけである。
夜々が庭で鞠投げをしたいというので、小さな手を引いて庭へ出た。
取りやすいように鞠を放ってやり、夜々が投げ返してきた鞠を、小梅が受け止める。
ただそれだけの遊びを続けながら、小梅はぼんやりと考えた。
石之助はこれから他の人のものになってしまうのだ。
元々小梅のものではなかったのだから、それは仕方がない。
あんな良い人が小梅だけのものになってくれるなどと、思ったこともない。
しかし小梅は、本心ではずっと、そうであったらいいのにと思っていた。だって、石之助のことが好きだったのだ。
我侭でも、思ってしまうのは仕方ない。好きなのだから仕方がないではないか。
そうだ、出合った頃から、誰よりも石之助のことが好きだった――、
……夜々よりも？
小梅は鞠を受け止めたまま、投げ返さずにうつむいた。
――違う。
はっとした。
心の中で石之助と夜々を比べたとき、小梅にはようやく、ある一つのことが分かったのだ。それは恐ろしく簡単で、人間ならば子供でも知っていることだった。
夜々のことを好きなこの気持ちと、石之助のことを好きなこの気持ちとは、まるで違う。
それに気付いて小梅は愕然とし、それから呆然とした。
――馬鹿だ。
小梅の目から涙が溢れた。
自分は馬鹿だ。

こんな大事なことが今まで分からなかったのか。
どうしてもっと早く気付いて、石之助に伝えられなかったのだ。
なぜこんな時に、こんなふうに気付いてしまったのだ。
今さら分かっても——もう、遅いではないか。
胸が詰まり、喉が痙攣した。
声も出さずに小梅は泣いた。
涙が止まらなかった。
いつの間にか夜々が足下にいて、小梅の顔を見上げていた。
小梅が泣いているから驚いたのか、夜々までが、今にも泣き出しそうな顔をしている。
崩れるように膝をつき、小梅は夜々を抱きしめた。泥の上に鞠が落ちた。
小梅は、小さな夜々を力いっぱい抱きしめながら、熱い涙を止めどなく流した。
間抜けな自分が憎い。他の人のものになってしまう石之助が恋しい。あのとき石之助に、せめて思いを伝えられなかったことが悔やまれ、もう戻ってこない月日と、その意味も分からずに過ごしてしまった十七年が悲しい。
だが、腕の中にいる夜々が愛しい。
夜々の体が温かい。
頭の中が混乱して、あまりにも悲しすぎて、もう自分がなぜ泣いているのかも分からなかった。
小梅の長い恋はそうして、気付いたその時に失われた。

九

やはり——これで良かったのだ。
石之助は母屋の廊下から庭の一角を見つめ、心中でそう呟いた。
松の木の下、力いっぱいに子を抱きしめる女——ここからは遠いし、後ろ姿だから顔は見えないが、桃色の髪を生やした女など小梅

の他にはいない。
小梅は立派に母になっていた。
会って何か話をするつもりだったが、母子の幸福そうな姿を目の当たりにしては、とても歩み寄って声をかけようという気は起こらなかった。
この十七年の間で、小梅は新たな場所と、尊い愛の対象を見つけていたのだ。あの時自分が口走った心と裏腹な言葉が、正鵠を射ていたのだから皮肉なものである。
……とうに過去であったわけだ。
石之助はわずかな未練をもって小梅の後ろ姿を見つめていたが、子供と目が合った気がして、逃げるように戸の影へと退散した。
静かな廊下。
内側から戸にもたれ、三十四になった石之助は思った。
自分はずっと——小梅のことが好きだった。
……それでいい。
やがて自分が老いて死んだ後も、あの娘のことだ、きっと覚えていてくれるだろう。
自分を拾い色々と世話を焼いた、一人の変わった人間として。
それで十分ではないか。
石之助はもう庭を覗かずに、黙って屋敷を立ち去った。
家の者には来たことを口止めし、小梅をよろしくとだけ言った。

後に石之助は頼子との間に女児をもうけた。
石乃と名付けられたその子は、美しく育った後に一人の男と結婚し、石楠花という娘を産んだが、あるきっかけで夫と離れることとなる。
そのさらに後、石乃が二人目の夫と出会い再婚したことで、石之助の孫にあたる者は二人に増えた。石乃の再婚相手の連れ子は、大輝という男の子だった。
その子供が入神家の探し求めた存在だということが分かり、彼ら家族が夜々や小梅と関わりを持つようになるとは、石之助も全く想像

せぬ運命だった。

全く、縁とは奇怪なものである。

それだけ長い時が過ぎたということなのだろうか。

　頼子も、そして石乃までもが石之助に先立ち、再び一人になった今となって、石之助はしばしば、「もしあの時小梅に思いを打ち明けていたら」などと、青臭いことを考えるようになった。

しかしその度、老いて皺の寄った自分の手に気付き、石之助はただ苦笑う。

　石楠花は大輝のことが好きなのだそうだ。

まだ十五とはいえ、あれだけしっかりと分別のつく子が、義理の弟への道ならぬ恋を隠そうともしないのだから、感心に値する開き直りである。

殿山家に居候している人食い妖怪の任氏も、同じく大輝のことが好きだという。

そちらもまた大人気ないというか見っとも無い話で、生きた年はもはや話にならないとしても、任氏は見目も立派な大人であるから、二人が並んでいる姿は、姉弟どころか母子にすら見える。しかも、それを任氏もちゃんと自覚していて、なおあの子の尻を追いかけているのだ。

何とも痛快なことではないか。

　石之助は今、不可思議な運命に導かれて出来上がった――しかしいつか時が来れば、やはり終わってしまうのであろう彼らの日常を、まるで自分の人生の続きのように、遠目から静かに眺めていた。

　これが小梅と出会って今日に至るまでの、石之助の物語である。

第八章【小梅――こうめ――】エピローグ

一

他愛ないことを喋りながら酒を呑むうち、いつの間にか時間が過ぎていた。

他の客が一人帰り、二人帰り、四杯目のビールを空けた小梅の呂律も怪しくなってきたところで、石之助は腕時計を見て舌打ちした。

「何でえ、もうこんな時間じゃねえか。電車が無くなっちまった」

「いいじゃんか」

小梅はへらへらと笑う。意味もなく笑うようになれば酔っ払いである。

「泊まっていきなよ。夜々ちゃんにエッチなことしないって約束したら、うちに泊めたげるよ」

「誰があんな狭ぇ部屋で宿借りするかよ。漫画喫茶か何かで十分だ」

立ち上がる。「ほれ、もう行くぞ」

「えー？」

「駄々こねるんじゃねえ。もうここも看板だろうよ。ほら、立った立った」

「はあい……」

小梅は渋々尻を持ち上げる。

石之助はそれを横目に溜息をつき、蛸入道のような店主に声をかける。

「大将、長居しちまったが、勘定いいかい」

「へい」

店主が伝票を片手に歩いてくる。
　石之助はジャンパーのポケットから財布を出しながら訊く。
「なあ大将、あんた、料理始めて長えだろ」
「へい」
店主は頷く。
　石之助はにやりと笑う。
「じゃあ色々なものを食いもしたろうな。何の肉が好きだ？」
「肉ですか。さあ……」店主は顎をさする。「日本人だから、肉つうより、やっぱり魚ですかね。どうしてです」
「なに、お前さんが余計な肉を食っていないかどうか、ちっとばかり気になってな」
「ありゃ」
店主は手を頭にやった。
「やっぱり旦那もあっしと同類ですか」
「その逆だ」
「あちゃあ、縛師の方ですか」
　小梅がふらふらと揺れながら横でうなずく。
「石之助はハゲだけど石字縛師なんだよねえ……世のなか面白いねえ」
「頭の毛は関係ねえだろうが。こりゃ剃ってるだけだ」
石之助は小梅の頭をはたく。
　気まずそうに店主は言った。
「気配は消してたつもりでしたがね」
「何、お前さんが小梅を見てる目つきで分かったのさ。――ったく、迂闊なんだよ手前は」
小梅をもう一度はたく。
　頭をおさえて小梅は二人の顔を見比べる。
「え？　え？　どゆこと？」
「お前が酔っ払うにつれて妖気を派手に漏らし始めるから、大将にお前が化け物だって知れたんだよ。なあ大将、それでチラチラと見

てたんだろ？」
「へえ。この辺りじゃ見慣れない同類だと思いまして。しかし、旦那もそうかと思ったら、縛師の方でしたか。驚いたなあ」
「驚いたのはいいが、本当に余計なもん食ってねえだろうな」
「本当に食ってませんよ。あっしは自分のことを人間と間違えて育ったクチで……人間の肉なんざ、今さら気持ちが悪くて食えやしません」
「ふん、なるほど、確かに血の臭いはしてこねえな。――で、勘定はいくらだい」
「へえ。こちらです」
店主はかしこまって伝票を置く。
向こうで若い店員が、不思議そうにこちらを見ていた。
そして二人は居酒屋を後にし、寝静まった夜の駅前をとぼとぼと歩いた。目指す方向は住宅街、つまりは小梅たちのアパートや、殿山家のある方面である。
歩道をはみ出し、路肩を歩く小梅に石之助は言う。
「こら、危ねえからこっちへ来ねえか」
「車走ってないもん」
「そんなもんいつ通るか分からねえだろうが。いいからこっちへ――うお」
小梅が突然ガードレールを飛び越えてきたので、石之助は立ち止まって軽く仰け反った。
両足で着地し、小梅は笑う。
「ジャンプ成功」
「馬鹿、酔ってるくせに飛び跳ねるな」
「ふへへ」
「仕方のねえ奴だ……」
石之助は肩を落として、再び歩き始める。
小梅は、待って、と後を追いかけてくる。
「ちょっと石之助、あんまし早く歩かないでよ」

「お前がタラタラしてっからだ。ゆっくり歩いてたら夜が明けちまうだろうが」
「きゃっ」
悲鳴と転ぶ音。
石之助は立ち止まって振り返る。
「おい、大丈夫か……、――っ！」
「あ痛たた」
「避けろ小梅ッ！」
「え」
地面に両手をついた小梅。
その無防備な背に、振り下ろされた爪が叩き込まれた。
短い悲鳴。
「ぎっ」
見開かれる眼。
そのまま、背中を容赦無く切り裂かれる。服が破れて鮮血が散った。
小梅が転がる。
石之助は地を蹴って跳んでいた。
空中で廻し蹴りの二閃。いずれも当たらない。
飛び退いた相手は三歩向こうへ着地し、低く腰を曲げて長い両手を揺らしながら、石之助のほうへその顔を向けた。
うるわしく長い黒髪の間に垣間見えるのは、赤い、猫の顔だった。体かたちは人間とそう変わらない。しかし全身に生えた赤い毛と長い尾、そして両手の鋭い爪は、確かに妖魔のものである。
妙になまめかしい輪郭や乳房の膨らみで女怪と知れるが、この女怪は今、明らかに正体を現していた。全ての力をむき出しにして戦うつもりでなければ、このような姿には決してならない。
しかし。
「妖気が――無ェ……だと？」
化け物が正体を現したときに発散するはずの、生々しい気配を全く

感じない。石之助は違和感を覚えたが、すぐに気を取り直した。
ジャンパーの胸から竹の札を抜いて放つ。
札は放たれざまに粉々に弾け、その姿を紫の雷へと変えた。
猫の顔をした女怪は両腕を大きく振るい上げる。
波のような紫の風が生まれた。
雷と風は相殺し合い、衝撃波を生み、石之助が仰け反って目を塞いだ瞬間、女怪は忽然と消えた。
石之助は視線をはしらせる。
いない――いや、上か。
気付いたときには、もう、かわす他になかった。
すんでのところで爪を避け、石之助は流れのままに肘を繰り出す。
肘は猫の横顔に直撃し、女怪の身は大きく傾いだ。

二

禿頭の老人と桃色髪の娘が帰っていったので、残る客は一人になっていた。
長いコートを脱ぎもせず、一人黙々と酒を飲んでいた、見た目にして三十前後の男である。
着ているコートだけならばサラリーマンのようにも見えるが、その下がどのような服装かは知れないし、しかも短く刈られた髪は金色で、荷物らしきものも無い。長く商売をしている店主の目にも、どのような仕事の人間なのか判断できない男であった。
この辺りでは珍しいが、ひょっとしてホストか何かだろうか。そのようなことを思いつつ、店主は男に声をかける。
「お客さん、すみませんが、そろそろ看板です」
「――そうか」
男は顔を上げる。
端整な顔立ちだが、眼がひどく濁っている。
店主の背に何かがはしった。

男は立ち上がろうとせず、暖簾を片付けに出てゆく若い店員を横目で見送る。
そして呟いた。
「……いい店だな」静かで低い声。「常連も多いようだ」
「へえ。おかげさまで」
「お前は妖怪なのか」
「へ？　ああ」店主は笑う。「さっきの話を聞いておられたんで……。いや何、冗談でございますよ。あの旦那はああした戯言の好きなお方で」
店主の言い訳が終わらぬうち、男はポケットから一枚の紙を抜き出した。
不可思議な文字の羅列された厚手の和紙。
それをカウンターの上に置く。
店主は紙を見て目を丸くする。
「その札は……お客さんも縛師の方ですか」
「縛師か――縛師といえば縛師だな。だが見神といえば見神だし、見ようによってはお前と同類でもある。全く下らない話だ」
「は……？」
「だが俺は結局のところ何者でもない。戯れに雷を落としたところで、何も変わることはなかった。お前のような者が羨ましいよ」
言いながら札の上に手を乗せる。
鈍い爆発音が響き、カウンターが発火した。
紫の炎が燃え上がり、カウンター全体が、見る見るそれに包まれる。
店主は悲鳴を上げる。
「な――あんた、何を！」
「こういう場所は必要が無いんだ。下らない場所など有るべきじゃない。分かるか？」
男はゆっくりと立ち上がる。
音と声を聞きつけて、若い店員が飛び込んできた。

「うわっ」
燃え上がるカウンターを見て目を丸くする。
コートの男は片腕の袖をまくり、肘から先を瞬時に変じさせた。
盛り上がる筋肉、ざわざわと生える黒い毛――黒腕。
若い店員の顔面に、巨大な拳の一撃が振るわれる。
殴られた店員は顔の下半分を失った。
吹き飛んだ顎が壁に叩きつけられて落ちる。
遅れて店員の体も崩れ落ちた。
店主は声にならぬ声を上げた。
「野――郎――っ！」
肌が赤黒く変色して両肩が盛り上がり、口が耳まで裂ける。
燃えさかるカウンターを飛び越え、店主は男に襲いかかった。
コートの男は、変じていないほうの手で、店主の繰り出した突きを受け止める。
涼しい顔で。
「力が強いな。鬼の類か」
「な――うあっ！」
そのまま店主の体は壁に叩きつけられる。
男は飛び上がり、倒れた店主の傍に降り立って、その頬をかかとで踏みつけた。
踏みつけながら男は笑っていた。
「まあまあの拾い物だ。――邪魔が入らぬうちに食うとしよう」
両眼が光り、禍々しい妖気が狭い空間を支配する。
店主の悲鳴は数秒と続かなかった。

三

石之助は距離をとって舌打ちした。
「……畜生め」
口の端から血が滴る。

この人通りの無い歩道で戦い始めてから、一分と少し。殺し合いとしては十分に長引いている。

半猫の女怪は、数度に渡る石之助の攻撃を身に受けてなお、全くこたえている様子もなく、獣が獲物をどう仕留めるか思案しているような様子で、こちらの動きをうかがっている。

既に石之助の息は上がっていた。

――強い。

相変わらず妖気は感じないが、身の痛みがそう確信させる。

「何者だ、こいつあ……」

呼吸を整え、構えを直す。

その瞬間、女怪に飛びかかった者があった。

小梅であった。

「あああっ！」

背中に深い傷を負い、ガードレールの傍でうずくまっていた小梅が、不意に飛び上がって仕掛けたのである。

石之助は叫んだ。

「馬鹿野郎、よせッ！」

遅かった。

小梅は半猫の女怪の上から、覆いかぶさるように組み付いていた。無謀な攻めであった。

次の刹那には小梅の背中が破れ、そこから爪の長い血だらけの手が、生々しい音と共に飛び出した。

女怪の腕が小梅の腹を貫いたのだ。

石之助は駆け寄ろうとしたが、小梅の声がそれを止めた。

「来ないで……っ！」

「な――」

「早く……もっと離れて……っ」

小梅は両腕で猫の頭を挟みこむ。

石之助は小梅の考えを理解し、足のばねを限界まで使って大きく飛び退いた。

ほとんど同時に小梅が口を開く。
赤黒い粉塵が猛烈な勢いで吐き出された。
さながら爆発の如くに発生した毒の煙が、小梅と女怪を中心に舞い上がる。
その瞬間、凄まじい突風が去来した。
粉塵は嘘のように消え失せた。
風に煽られてよろける石之助。
何があったのか理解できずに、女怪に密着したまま硬直する小梅。
寸でのところで毒を吸うことなく、その小梅を突き飛ばす女怪。
小梅が再び地に転げる。
男が――真っ直ぐに歩いてきた。
「何を手こずっている、ホンマオグイの覚醒体ともあろうものが」
黒いコートを纏った金髪の男だった。倒れた小梅の傍らで立ち止まり、その姿を見下ろす。
「ふん、件の山ノ蛾が産んだ娘か……見事な毒霧だったな。しかし所詮は百年も生きていない小娘だ」
赤い女怪に視線を移す。
「お前の潜在力をもってすれば触れられることも無かったはずだ。目覚めたばかりでは上手いようにいかないか？」
「ホンマオグイ……紅猫鬼だと？」
石之助が目を見開く。
「まさか――こいつは……」
「殺さなくて良かった、か？」
「貴様は――？」
「会うのは初めてだが、お前は俺の父親を知っているはずだ。俺の顔に面影があるだろう」
「何……」
石之助は男の顔を見つめる。
確かに、どこかで見たような目鼻立ちである。
記憶を探る。

そして石之助は再び目を見開いた。
「その顔――火高か！」
「そう。俺は火高の息子だ」男は満足そうに頷く。「そして同時に、あれを殺した者でもある。もっとも奴の情報は俺の中で生きているが」
「何を……言ってやがる……？」
「俺は石落という男の誤算の果てだ。奴は任氏の力をひどく恐れ、最後まで子を産ませることはなかったというのに、結局一つのミスを犯していた。そのミスがあの男を殺し、そして魂すら眠り石に閉じ込めた。もっとも最終的に消滅させたのは、麒の少年らしいが――」男は笑う。「ともかく俺という無意味な生命は、石落のミスが産んだ結果だ。ミスは欲望と交わり、下らない奇跡を起こしてみせたのさ。……さて、紅猫鬼」
赤い女怪を見る。
「もう行け。お前にはお前の、望むことがあるはずだ。こいつらとは――俺が遊ぶ」
両眼が紫に光る。
紅猫鬼と呼ばれた女怪は頷きもせず、何かを思い出したように空を見上げ、跳び上がった。
そして隣に建つビルの壁に張り付き、ヤモリのようにするすると上ってゆき、やがて屋上へと消えた。
次の刹那、屋上から衝撃音が聞こえた気がしたが、何の音なのかは知れない。
残ったのは石之助とコートの男、そして背中と腹部に深手を負った小梅だった。
男は地に伏せた小梅の髪を掴み、力任せに持ち上げる。
「さあ」
今思いついたような口調で言う。
「まずはこの娘を殺そうか」
「止めろッ！」

石之助が飛び掛る。
男は小梅の体を振り回し、石之助に叩きつける。
石之助は吹っ飛び、小梅が血まみれの口で悲鳴を上げる。
「うあぁっ！」
「黙れ」
男の爪先が小梅を蹴り上げる。
同時に手を離された小梅は、街灯より高く浮揚し、そして真っ直ぐに落下した。
どしゃりと鈍い音が響く。
立ち上がった石之助が再び襲い掛かる。
しかし見えない壁に阻まれた。
「な――結界符――？」
「そこで見ていろ、力無き石字縛師よ」
男は石之助に笑い、それから小梅の腕を掴んで引き上げた。
「いい顔だ」
怯える小梅の頬を、手の甲で撫ぜる。
その手が――首へと。
小梅は呻いた。
「……石、之助」震える声。「た、すけ……」
涙。
それが最後だった。
ごきりと骨の折れる音がした。
小梅の体が男の足下に崩れ落ちる。
結界が破れた。
石之助は叫び声を上げて地を蹴る。
「貴様ァアッ！」
「邪魔をするな」
男の片腕が鞭のように振るわれる。
その先端が消え、肉を叩く音が響き渡る。
石之助は恐ろしい勢いで回転し、先ほど紅猫鬼が登っていった壁

に背中から叩きつけられた。
「が……」
肺臓が潰されるような衝撃を受け、石之助は壁に寄りかかったまま硬直する。
動けなかった。
男はそれを確認して小梅に目を落とし、その細い腕を引き抜いた。
まるでマネキンのパーツを外すような、淡白な動作だった。
小梅はもう声すら上げない。反応も無い。
美しかった瞳が既に曇り始めている。
石之助は絶叫した。
「小梅――ッ！」
「今さら叫んでどうなるものでもないぞ」
男は引き抜いた腕を眺め、くんくんと嗅ぐ。赤い滴りが落ちてゆく。
「実に……良い匂いだ」
ぱかりと口を開ける。
しかし、いざ齧りつこうという瞬間、ひとつの影が降り立った。
影は地に張り付くように着地し、男に向けて鋭い爪を放つ。
男は小梅の腕を捨てて飛び退いた。
「む――」
血が散った。男の肩がえぐれていた。
影の放つ二撃目は炎だった。
白く光る灼熱は三日月のような形を取り、アスファルトの地面ごと、大雑把に斬する。
男はぎりぎりでそれをかわした。
アスファルトの欠片が舞い散る、一瞬にして熱気を帯びた空間。
油臭い煙の中で男は笑う。
「任氏かっ！」
「貴様は何者じゃ！」
黒いジャージを着た裸足の女。
シロであった。

赤い眼が爛々と輝いている。
　椰子の葉のようなポニーテールがざわりと揺らぎ、シロの全身が燃えあがる。
「妙な妖気を感じて飛んで来てみれば――何のつもりでこの者たちを襲った！」
「任氏か……確かに規格外のエネルギーを持っているようだな。あたり構わず全力を解き放てば、軍事兵器にも引けを取るまい」
「答えよ！」
踏み込んだシロが消える。
　男も消えた。
　切り裂く音がして、次の瞬間、二人の立つ位置が入れ替わっていた。
　炎が失せる。
　呆気なく崩れたのはシロのほうであった。
「――、馬鹿な」
背中が破れ、鮮血が噴き出す。
　男は笑った。その片腕は夜々と同じ、黒い腕へと変じていた。
「しかし遅い。そして、いつまで経っても詰めが甘い。先ほどの不意打ちで俺を討てなかったのは致命的だった」
「馬鹿な」鼻から血が流れる。「このしろよりも……強いじゃと……？」
シロは信じられぬものを見るように、男の顔を見上げる。
「それにその腕は……」
　どこからか数人の声がした。
　男は声の来る方向を見る。
「誰か来たか――まあ、あれだけの音がすればな」
肩をすくめる。
「今日はもう行くとしよう」
石之助に顔を向ける。
「そういえば名乗っていなかったか……俺の名は宮琵だ。宮に琵琶

の琵でみやびと読む。下らない名前だろう？」
苦笑いしながらコートを翻す。
「また近いうちに会おうか」
紫の風が回り、男の姿は掻き消えた。
それはわずか数分の悪夢だった。
路上に残されたのは、立ち尽くすシロ。
うち捨てられた小梅の体。
膝から崩れ落ちる石之助。
冷えた夜空。
黄色い月が町を照らしていた。

（つづく）

第九章【紅猫鬼――ホンマオグイ――】

一

時はさかのぼる。

父が石楠花の消え失せたことに気付き、部屋の天井に謎の爪跡を発見してすぐのこと。

大輝からの電話を受けて三分と経たぬうち、寝間着姿の夜々は、道をまたいだ殿山家に駆けつけてくれた。

シロは入れ替わりに「外を捜す」と出て行き、夜々を含む残された三名は、石楠花の部屋に立ち尽くし、一様に天井を見上げていた。

細い指で前髪をかき上げ、夜々は爪跡を静かに睨む。

「……ふん」

「どう、ですか？」

大輝は視線を天井から夜々の横顔に落とし、恐る恐る訊いた。

夜々は静かに目を閉じて首を振る。

「任氏は妖気の残り香を感じないと言っていたが、神気も全く感じられない。……だがこの所業、およそ人間業でもあるまい」

「じゃあ――」

「やはり何らかの異形に連れ去られた可能性が高いのだろう。妖気も神気も隠すことが可能だからな。君たちに心当たりはあるかね」

「……。心当たり……？」

大輝は考えながら親指の爪を噛む。

自覚できるほど動揺していた。思考が上手くまとまらない。

父も無言でうつむいていた。

夜々はしばらく大輝の様子を横目で見ていたが、やがて小さく溜

息をついた。
「無意味な質問だったか……。元より理由の因子など幾らでも有る。石字縛師は妖怪の怨敵だ。問題は――」
窓を見る。それは大きく開き、部屋の中と夜を繋げていた。
「あの子が今、どこへ連れ去られたかだ。妖気という手がかりが無いのならば、捜すのは任氏ばかりに任せてはいられないな」

二

同じ頃、シロは町の上空を飛んでいた。
冷たい夜の風を切り、月の光を身に受けながら、研ぎ澄ました視線を建物の間にはしらせる。
そうしながら考えていた。
なぜ自分はこんなに焦っているのか。
たかが娘一匹……しかも恋敵の小娘ひとり消えたくらいで。
人を食い物にしないと決めた今でも、大輝以外の人間の生き死になど、シロにとってはどうでも良かったはずだ。あの映画館の中で、下がり腕が人間を次々に吊り上げていった時も、シロは何一つ感じることはなかった。
なのに、なぜ。
大輝があの娘のことを心配していたからだろうか。
見つければ、大輝に喜ばれ、石楠花自身にも貸しを作れるからか。
理屈には合うが……どちらも違う。
考えるうち、常世の牢獄での光景が、シロの脳裏に蘇った。
石落の腕にしがみ付き、凄まじい形相で怒鳴る石楠花。
――いくらムカつくバカ狐でも――。
――あんたみたいな奴に泣かされてるの見ちゃったら、黙って見過ごすわけにはいかないんだよ――。
どくりと、シロの胸が大きく脈打った。
シロは駅前の空の上でゆっくりと止まり、両の拳を握り締める。

「……馬鹿娘め」
ぼそりと。
「……一体、どこへ失せおった……」
星が幾つか瞬いた。
風が吹く。
それに紛れた暗い妖気。
シロは宙でがばりと身を返し、西へと意識を向ける。
「これは……？」
無数の意識が混ざり合ったような気配。それに含まれる濃厚な血の臭い。
派手に撒き散らされている類の妖気ではないが、感覚を極限まで高めたシロは、それを見逃さなかった。
夜空を蹴り、その中心へと、落下するように飛び込んだ。
――そこは駅近くの居酒屋であった。
シロは傍にある太い電柱の先端に降り立ち、燃え盛る店と野次馬たちの群れを見下ろす。
既に、そこには妖気の残り香しか無く、あるのは人間たちの戸惑い染みた喧騒のみであった。
シロは舌打ちし、再び空へと舞い上がる。
この街で何かが暴れた。血の臭いがした。石楠花の失踪と無関係ではあるまい。
「ふざけおって。一体、何が起きておる……っ！」
シロは歯軋りして街を睨み下ろす。
その時ふと、小梅らしき妖気が風に乗って届いた。
あの娘のことである。どうせ酒に酔ったか犬に吼えられたかして、迂闊に妖気を漏らしているのだろうが、シロの視線は自然とそちらへ向いた。
すると、その方角にあったビルの屋上に、小さな赤い影が見えた。
異形――？
シロは目を見開いた。

「そこか！」
夜を裂き、隼のように急降下する。
彗星の如くシロは屋上に降り立った。いや、直撃したと言うべきか。撃ち込まれた右足の裏がコンクリートに放射線状の亀裂を産み、鈍い音が響き渡った。
シロはゆらりと立ちなおす。
月明かりの元、対峙する異形と異形。
シロは相手の姿を間近に見て――息を呑んだ。
「な……？」
それは驚きであった。
明らかに正体を現している相手に妖気が無いことにではない。
シロは目の前の相手を知っていた。
「貴様は――」
猫のような顔とうるわしい黒髪、そして全身にやわらかな赤毛を生やした、不気味になまめかしい細身の女怪。
予想だにしなかった幾百年ぶりの再会に、シロは思わず隙を生じさせた。
「ホンマォグェ……」何をしているのだ。「ニィズォシェンマ……？」
「――」
紅猫鬼は無言で飛び掛ってきた。
我に返ってシロは拳を繰り出す。
真っ直ぐに放たれた二つの拳がぶつかった。
ぎりぎりと拳で押し合いながら、シロと紅猫鬼は睨みあう。
「……何じゃ、正気では無いのか」
シロの頬を汗が伝う。
途端、紅猫鬼は視線と拳を外した。
「グ」
短く唸って膝をつく。
シロはなぜかその虚を突けず、立ち尽くした。

「紅猫鬼……？」

景色から音が消えた。

しかし沈黙は一瞬であった。下方から石之助の叫びが聞こえたのである。同時に小梅の妖気が激しく瞬いた。

シロは思わず目を下に向ける。

同時に紅猫鬼は月夜に向け、遥かな跳躍を遂げていた。

建造物の屋上を飛び石のようにして消えてゆく紅猫鬼。

舞い上がってくる石之助の叫び。

――迷いは刹那。

シロは自らの落下で半壊した屋上を蹴り、翻した長身をビルの上から落下させた。

重力に任せて落ちてゆくにつれ、近づいてくる歩道の光景。

倒れた小梅。

ビルの壁にもたれた石之助。

黒いコートの何者か――恐らくは敵。

もどかしい！

シロは加速し、真っ直ぐにアスファルトへ突入した。

そのまま張り付くように着地。コートの男が気付くより早く、伸ばした爪を繰り出す。

男は飛び退いたが手ごたえは有った。舞い散る鮮血――シロは続けざま、右腕に灼熱の白い炎を生み、それを振り下ろした。

熱き暴風と共に地がえぐれ、めくれ上がる。

かわした男は、こちらを見て笑う。

「任氏かっ！」

暗い瞳。

シロは真っ直ぐに睨み返し、怒声を放った。

「貴様は何者じゃ！」

三

シロと宮琵が対峙した頃、大輝は一人、夜の川原を走っていた。
夜々やシロと違って超人ではないので既に息は切れていたが、まさか、疲れたからといって立ち止まるわけにはいかない。一刻も早く石楠花を見つけなければならなかった。
食み虫、下がり腕、そして身近なところではシロ。暗闇から忍び寄り、人間を驚くほど簡単に殺してしまう「妖怪」という存在を、大輝はもう十分に理解している。それと対する上で一手の遅れが何を意味するか、それも理解している。石楠花を奪われ、こちらが相手の正体や手口を知らないだけで、既にもう何手も遅れているのだ。大輝は油断すれば震えだしそうなほど焦り切っていた。
スニーカーの靴底が薄いせいで、時々転がっている尖った石が食い込み、足が痛い。
「くそっ……」
息づかいの中で悪態をつく。
なんて無力なんだ。
空も飛べない。速く走ることも出来ない。麒麟の力だか何だか知らないが、使いこなす方法も分からない。何より、戦うだけの力量も無いのだ。もし石楠花を見つけられたとしても、傍に攫った張本人がいたら、大輝は手を出すこともできないのではないか。
石落にシロと石楠花が連れ去られたときは、戦いの場が常世だったお陰で、母が力を貸してくれた。
だが今は――？
ここは現世だ。たかが食み虫にすら敵わなかった自分に、いったい何が出来るというのだ。
肩を寄せ合って座り込んだカップルの後ろを走り抜ける。
大輝は舌打ちした。
「……、知るかよっ」
何なんだ。どうしていきなり、しゃくネエがさらわれるんだ。あの部屋で何があったんだ。誰がやったんだ。どこにいるんだ。どこに。
風が冷たい。

暗い、橋の下へ差し掛かる。
そこで大輝は駆ける足を躊躇わせた。
広く黒い川に掛かった、コンクリートの大橋。その下の暗がり、橋台の脇に、座り込んだ肌色の影を見つけたのである。
大輝は深い暗がりの中に足を踏み入れ、ゆっくりとそれに近づいた。
低い天井――橋の上を、トラックの通り過ぎる振動が伝わってくる。
置き捨てられた自転車。砂利と雑草の地面。
そこに、全裸の少女が膝を抱えてうずくまっていた。
大輝は思わず声を上げた。
「しゃくネエ！」
「――っ」
石楠花は顔を上げた。
そして跳ねるように立ち上がり、大輝の小さな胸に飛び込んできた。
大輝は思わずよろけたが、何とか立ちなおし、そこに石楠花がいることを確認するように、強くその身を抱きしめた。
「あ……」何を言えば。「しゃくネエ、大丈夫だった？」
「――ん」
耳元で石楠花が小さく返事する。
大輝は溜息のように言った。
「良かった……」
それはほとんど独り言に近かった。
大輝は石楠花の体がひどく冷えていることに気づき、上着を貸すためにいったん体を離そうとしたが、石楠花の腕がそれを許さなかった。
胸を押し付けるように大輝を抱き寄せ、石楠花は言った。
「……探しに来てくれたんだ」
「え――？　ああ、うん」

大輝は戸惑いつつ、一度離した手を石楠花の肩に置きなおす。
橋の下の暗闇には、妙な空気が満ちていた。
これは川の湿気か、砂埃か……。大輝は視線を泳がせ、石楠花に問う。
「ねえ、しゃくネエ――誰に連れてこられたの？　どうしてその……」
訊いていいのか？　分からないが。
「服を……着てないの？」
「……。このまま聞いてくれる？」
「え？」
「あたしのこと、こうやって抱いたまま――」
「あ……」あごの下に石楠花の肩があるので頷けない。「うん……」
何だろう。
妙な違和感がある。胸がざわざわと騒いでいる。
石楠花は少し沈黙してから、ゆっくりと語り始めた。
「あたし、あれから部屋に戻って……それで、鏡の前に立ってたんだ。あの時のあたし、すごく嫌な顔してた。何だかイライラして……自分でそれが、すごく嫌だった」
深呼吸のように息をつく。
「――その時ね……どこかで猫の声がしたんだ。あたし動物嫌いだから、すごく驚いた。窓を見たけど、真っ暗で何も見えなかった。それで、もう一度鳴き声がして……今度は、はっきり分かった。声は部屋の中からだった」
大輝を抱きしめる力が強くなる。
「びっくりして振り返ったら、そこに化け物が立ってた。髪の長い――猫の顔をした化け物で……。あたし怖かった。すごく怖かったよ。だって――だってね！」
声が突然大きくなる。
大輝の体は突然振り回された。
コンクリートの柱に背中から叩きつけられる。

正面から体を押し付けながら、石楠花は言った。
大輝の耳元へ、熱い声で。
「だって、その化け物……鏡の中に立っていたんだもん……！」
「え――」
何だって。
聞く前に再び振り回され、そのまま地に突き倒された。
仰向けに倒れた大輝の体をまたぐように、石楠花が座り込む。
その瞬間、石楠花と初めて目が合った。
ぎらぎらと輝く目。
大輝は言葉を失った。
両手を大輝の首にかけ、石楠花ははあはあと荒い息を吐く。
「誰かの声が聞こえた……。あたしに流れる血の名前は紅猫鬼。あたしは先祖返り……枷を外せば全てが目覚める。――確かに目が覚めた気がした。体が目覚めたんだよ。分かる？　すごい力なんだ。熱くて、速くて、強い流れが……あたしの体の中で暴れ始めたんだ。それでもう、何も考えられなくなってさ」
笑う。牙が見える。
「黒いコートの人が、いつの間にか隣に立ってた。それで、その人の目が光って――あとはもう、夢の中みたいだった。ぐるぐる回って気持ちがいいんだ。気付いたら駅前にいて、小梅さんとお爺ちゃんがボロボロになってた。小梅さんなんか、ホントにボロボロでさ。おなかに穴が開いてるんだよ。あたしがやったのかな？　ねえ、どう思う？」
「しゃくネエ……」息が出来ない。「苦し……」
「あっ、ごめん！」
石楠花の指が首から離れた。
大輝は仰向けのまま咳き込む。なぜか石楠花の体が石のように重く、体を返すこともできない。
しかし次の瞬間、石楠花はぶわりと飛び退き、大輝の傍らに両膝をついた。そして大輝の上半身を抱き上げ、ごめんね、ごめんねと

媚びるように繰り返しながら、さっき自らの絞めた首を何度もさすった。

「ごめんよ……苦しかっただろう？　ああ、あたし馬鹿だ。こんなこと言うために来たんじゃないんだ。こんなことするために来たんじゃない。あたし大輝に会うために戻ってきたんだよ。あの男の人にも、もう行っていいって言われて――そうだ」思い出したように。

「ねえ大輝、キスしていい？　いいよね？」

「え――」

胸に抱えられた大輝は、なぜか抵抗できなかった。

単純に困惑していたのかもしれない。それとも、石楠花の放つ只ならぬ気配に、体がすくみ上がっていたのかもしれない。

とにかく気付いたときには、石楠花の唇に、唇を塞がれていた。

痛いほどザラザラした舌が口の中に進入してくる。前歯どうしが何度もぶつかり合った。

凶暴な口づけは長かった。

後ろ髪を掴まれ、大輝は呻く。

「う……ぐっ」

「――ぷは」

石楠花はやがて唇を放した。口元から顎にかけて涎が滴っていた。

「はあ……。ごめんよ――あたしよく知らないからさ。ちゃんと出来てなかったよね」

涎を拭きもせず、熱っぽく笑う。ぬらぬらと牙が光る。

「でもすごいね。口と口をくっ付けるだけなのに、どうしてこんなに変な気分になるんだろう……ほら」

大輝の手を掴み、胸のふくらみに押し付ける。

「怖いくらいドキドキしてるだろ。それだけじゃないよ。ほら、触ってみて――」

その手が、ぐいと下に押し下げられる。

指先がざらざらした繁みに触れた瞬間、大輝は思わず振りほどいた。

石楠花の形相が変わる。
「……。なんだよ」
片手で大輝の襟首を掴む。恐ろしい力で。
「イヤなのかよ！　あたしの体に触るのがっ！」
襟を掴んだまま立ち上がる。
大輝は石楠花の手に吊り上げられるようにぶら下がった。両爪先が地面をこする。
空中でぐいと引き寄せられる。
牙をむき出しにした石楠花の顔は、すぐそこにあった。
「いいじゃないか……最初のキスはシロが横取りしただろ？　じゃあ最初のセックスは、あたしとしてくれてもいいじゃないか」
石楠花の短い髪が蠢き始めた。
ざわざわと――増殖するように伸びてゆく。
「大輝は……お前はさ、あたしの、たった一つの宝物なんだ。お父さんがいなくなって……お母さんが死んで！」
大輝を柱に押し付け、髪をざわめかせながら、石楠花は下を向いて唸るように語る。
「お義父さんは優しい人だけど、あたしはあの人にとって、結局は余所の子だから……もし嫌われちゃったら終わりだろ？　終わりなんだよ。だから勉強して、家事もやって、一生懸命全部やってさ――そうやってなきゃ終わりだからさ！」
「しゃくネ……」
「でもね――」
顔を上げる。引きつった笑顔。
「大輝はね、違うんだよ。大輝はいつだってあたしの手の中にいた。お義父さんが仕事に行ってる間、ごはんを作るのもあたし。勉強を教えるのもあたし。洗濯するのもあたし。お前のことは何だって分かってた。お前はあたしの物だった。今でもそうだよ。だってあたし、お前のためにあんなに頑張ったんだから……あたしにはお前だけだったんだから」

石楠花の髪は、今や地面近くまで伸びていた。
「だからさ、あたしがお前のことを好きなら、お前だってあたしのことを好きにならなきゃ駄目じゃないか。自分で考えるなよ。余計なものを見るなよ。あたしの言う通りにしろよ！」
またトラックが橋を揺らす。
何者かに後ろから肩を叩かれ、石楠花は大輝から手を離して振り返る。
ぴしゃり。
――頬を叩く音が、埃臭い暗闇に響いた。
「え……？」
石楠花はよろけた。
柱に背をもたれたまま、大輝は叩いた者を見た。
「……親父……」
そこに立っていたのは父だった。
石楠花の頬を叩いた自らの掌を見つめ、父は静かに言った。
「初めて手を上げてしまったな」
そして石楠花を見る。
「その髪や牙のことは後で聞こう。それより先に、答えて欲しいことがある。私にとっては自分の生き死により重要なことだ」
低い声で。
「今話していたことは、お前の本心なのか」
睨む。
「お前はずっとそう思って私たちと暮していたのか」
父の声はわずかに震えていた。
石楠花は頬に手をあて、一歩下がって肩を揺らした。――笑っていた。
「盗み聞きしてたんだ」
「答えなさい」
「そうだよ。ずっとそう思ってたに決まってるじゃないか」
「大輝はお前の所有物で、私は……信用できない他人だと？」

「ああ、そうだよ！」
石楠花は忌々しそうに再び牙をむいた。
「あんたが好きだったのはお母さんじゃないか！　本当はあたしなんて最初から邪魔だったくせに！　なんだよ――母さんが死んだ後も、わざとらしくあたしに優しくしてさ！　そんなの上っ面だけに決まってる！　本当は実の子の方が大事で、あたしなんて」
「勝手なこと言ってんじゃねえぞこのクソガキ！」
雷のような怒声が響き渡った。
大輝も、石楠花までもが言葉を失った。
怒声が父のものであると大輝が理解するまで、ゆうに二秒はかかった。
父の肩は大きく上下していた。
「誰がテメェ……上っ面だ？　何分かった上でベラベラ喋くってんだ！」
そこにあった自転車を蹴り上げる。
自転車は宙を舞って大輝のすぐ横に落ちた。
父は一度大きく息を吐き、そして疲れたように笑った。
「……。全く……そんな風に思われていたとはな……」
「な、何だよ」
「まあいい。帰ってゆっくりと話し合おう」手を差し伸べる。「来るんだ」
「や……やだ――帰らないよ！」
石楠花は我に返ったように身構える。
「もう嫌だ！　あたしもう、あの家に帰りたくない！」
「ふん……？」父は首を傾げる。「どうも話にならないな……無理矢理にでも捕まえて、頭を冷やしてもらうしかないか」
左足を前に踏み出し、低く腰を落とす。左手は前に。右手は左腕の肘に。
「行くぞ」
ぞっとするほど冷めた声。

空気が凍った。
沈黙を置き、石楠花が静かに口を開く。こらえ切れない何かの縛を解いてゆくように。
「何……？　あたしと……やる気……？」
石楠花の髪がゆらめく。瞳が怪しく光った。
「死ぬよあんた。――あたし今、変なんだ」
「見れば分かる」
「手加減できないよ。ホントに殺しちゃうと思うけど」
きりきりと尖った爪が伸びてゆく。
父は笑った。
「それならばそれでいいさ」
そして――
先に踏み込んだ。
疾風の如く。
しかし石楠花の反応は速かった。飛び出した父の顔に、電光のように爪を振り下ろす。
その腕を、父の腕がいなす。
体勢を崩した石楠花に、すぐさまもう一歩踏み込んだ父が体当たりを食らわせた。
石楠花が吹っ飛び、地に転がる。
「う、あっ――？」
「どうした、速く強いだけでは私に勝てないぞ」
「畜生！」
石楠花は両拳で地を叩いて跳び上がり、空中で前転して蹴りを繰り出す。
その蹴りも捌かれた。
カウンターで打ち込まれたのは、腋の下への掌打だった。
鈍い叫びを上げて石楠花は座り込む。
「げ……っ」
嘔吐するように口を大きく開け、脇を押さえる。

「何……これ……」
地面に手をつく。
「どうしてこんなに……、効く……ん、だよ」
石楠花の目から涙が流れた。
父は構えを解いて舌打ちした。
「最低な感触だな。お前の痛みでこちらまで吐き気がする――子供を叩くとはこういうことか」
石楠花を見下ろす。
「しかし、お前は一体どうしてしまったんだ。何がお前をそこまで錯乱させている？」
「うるさい――」砂利を掴む。「うるさい……うるさい、うるさい、うるさい、うるさい、うるさい！」
夜空に吊られるように石楠花は立ち上がる。
両目が見開かれた。
「もう、あたしに構うなよっ！」
叫んで大きく身を反らす。
その身が変じた。
みずみずしい少女の肌が、血のように赤い毛皮に変わる。
顔が獣――猫のものへと変化してゆく。
大輝は呆然とその姿を眺めていた。
父もまた黙って見つめていた。
完全に異形と化した石楠花は、再び父のほうへ顔を向ける。
「……ひひ」
猫の鼻で笑う。
「笑っちゃうよねえ。あんなに嫌いな猫だったのに、これがあたしの本当の姿なんだって」
しゃらしゃらと爪を鳴らす。
「でもまあ、いいんだ。すごく気持ちいいし……目が覚めたから、もう我慢しなくていいんだ。つまんないことも、みんなさ。何も我慢しなくていいんだよ――」

石楠花の姿が消えた。
父の後ろに立っていた。
「だーれだ」
背後から手を回し、両目を隠す。
父が反応して動くより早く、石楠花はその背中を蹴り飛ばした。
恐ろしげな音がした。
真正面に吹っ飛んだ父の体は、転がるように二度弾んでから遠くの地面に落ちた。
そのまま——動かなくなる。
石楠花は笑っていた。
「ひゃひゃ」
腹を抱えて指をさす。
「こっちが本気出したら、一発で終わりじゃないか。ねえ見た、大輝？」
「親父っ！」
駆け寄ろうとする大輝の手首を、石楠花の生暖かな手が掴んだ。
「いいじゃん、そんなことよりさ——」
「離せよしゃくネエ！」
「怒るなよ、殺したわけじゃないから。気絶してるだけだよ」
「そういう問題じゃないだろ！」
「いいからあたしを見てよ！」
大輝は肩を掴まれ、向きなおされた。
上着の上から爪が食い込む。
赤い猫の顔は獣そのもので、もとの石楠花の面影など微塵も無いのに、不思議と眼の奥から伝わるものがあった。
「ねえ、大輝……二人でどこか行こう？」
滲むような悲哀。
「大輝だってあたしのこと嫌いじゃないだろ？　だってあんなに優しくしたもんね？　あたし今までずっと、あんたのこと大事にしてたもんね？」肩を揺さぶる。「シロより、夜々より、あたしの方が

長い時間一緒にいたじゃないか。だから――だからさ……」
ゆっくりと俯く。
「お願いだから……あたしのものになってよ……」
「しゃくネエ――」
大輝は何も言えなかった。
鈍い音がして、石楠花がずるずると崩れ落ちた。
小さな足音と静かな声。
「――予感というのも馬鹿に出来ないものだな。これも私に流れる黒腕の血か」
暗がりの入り口で立ち止まったのは夜々だった。
「無事かね」
「夜々さん……」
「石を当てただけだ。これは――石楠花なのだろう」
言いながら変じていた右腕を戻し、歩み寄る。
二人の足下で、石楠花は元の姿に戻っていった。
仰向けの裸体。
大輝はそれを見つめ、ただ拳を握り締めた。
ゆっくりと倒れた父の傍らへ歩み、片膝をついた夜々は、その首筋に指先をあてる。
「……別状は無いようだな。強い衝撃を受けたようだが？」
「あ――」大輝は我に返って頷く。「はい……」
「背中かね」
「はい……」
「ふむ」
夜々は父の背を撫ぜる。
「打撲だな。しばらくしたら目を覚ますだろう」
大輝のほうへ顔を向ける。
「とにかく二人を運ぼう」
そう言って立ち上がった。
橋の上を大型車が連続して通りすぎる。

月も映さぬ墨のような川面に、魚が一尾、驚いて跳ねた。

四

――石楠花が目を開けると、そこは自分のベッドの上だった。
明かりは点いていた。
天井に不気味な爪跡がある。自分のつけた傷だ。
瞬き、顔を横へ向ける。
「……あ」
「目が覚めたかね」
夜々が勉強机の椅子に腰掛け、こちらを眺めていた。
石楠花は目を反らし、また天井に顔を向けて呟いた。
「夢じゃ――なかったんだ」
「残念ながら」
「……。そっか……」
深く息を吐く。
静かだった。
夜々は言った。
「石之助君から聞いた話だが、石字縛師の起源は、我ら見神と同じく、人間と異形の血が混じったことであるという。君たちの遠い先祖は、大陸から来た紅猫鬼という女怪だった。面白いことに任氏の知り合いらしい。消息は知れないが」微かに笑う。「任氏曰く、変わった女だったそうだ」
「……」
「君も私のような先祖返りらしくてね。そのために、君のスペックは石之助君を遥かに上回るそうだよ」
「……」石楠花は背を向けて寝返りを打つ。「それで……？」
「スペックに関わらず、君たち一族の能力には、遺伝子レベルでのプロテクトが掛けられている。紅猫鬼の施したプロテクトだ。そのため、文字を媒介にしなければ。いくら優れた血の力を持って生ま

れようとも、妖怪としての力がそのまま覚醒してしまうことはない」
夜々は机の上の参考書を、見もせずにぱらぱらと捲る。
「しかし、何者かが君の肉体に掛けられたプロテクトを解いた。何らかの理由でね」
「……」
石楠花は布団の中で膝をたたむ。
夜々は参考書を閉じて続けた。
「私は半妖の類では無いので、完全に同じかどうかは分からないが、神気を発動する際は少なからず気分が高揚する。いや……混乱するというべきか。強力な血の力に意識が掻き乱されるような感覚だ。ともすれば理性を失ってしまいそうで、制御出来るようになるまでには時間がかかった。君もそうだったようだな。もっとも――君には何かそれ以上の暗示がかけられていたようだが」
「……小梅さんは……」
「？　何だい」
「小梅さんは、大丈夫ですか」
「ああ」
夜々は細い脚を組む。
「大丈夫といえば嘘になるな。首の損傷もひどいが、腹部の大穴が厄介だ。石之助君の呪符で出血は止めているものの、回復にはかなりの時間がかかる。今は大輝くんの部屋で寝ているよ。石之助君がついている」
「お義父さんは……」
「彼は気を失っているだけだ。背中を強く打ちつけたショックで失神したようだな」
「――、……っ」
石楠花は体を縮めた。
何てことを。
あたし、何てことをしたんだ。
「ごめんなさい……」

涙が溢れた。
「ごめ……な……さい……」
「――。君が母様を殺さなくて良かった」
夜々は慰めずに立ち上がる。
「もしそうなっていれば――私は理性を保つことができず、君を許せなかったと思う」
そして、静かに溜息をついた。
「……しかし、そうならなかったお陰で、私は今、何とか冷静に物を考えることが出来ている。敵は君のプロテクトを解いて暗示をかけ、そして母様たちを襲わせた宮琵という男だ。目的は分からないが殺さねばなるまい」
呟くように言いながら歩き、ドアを開ける。
「君はもういつでも起き上がれると思うが――この部屋を出るかどうかは、君の心しだいだ。落ち着くまで休んでいるといい」
穏やかに言い残し、夜々は部屋を出て行った。
そして沈黙だけが残った。
石楠花は布団の中で泣き続けた。
「う……」
耐え切れなかった。
小梅の腹部を貫いた感触が、まだ手に残っている。祖父を殴った手ごたえも、義父を蹴り飛ばした感触も。そして――
「ううう……っ」
身悶える。
大輝にすがりたかった。
だが、もう、それもできない。
全て話してしまったのだ。自分の捻じ曲がった醜い感情を。
――最初のキスはシロが横取りしただろ？　じゃあ最初のセックスは、あたしとしてくれてもいいじゃないか。
――お前はあたしの物だった。
――今でもそうだよ。だってあたし、お前のためにあんなに頑張っ

たんだから。
どれも本心だった。
石楠花はずっと、あのとき発した言葉通りのことを考えていたのだ。
義父に言った言葉も全て本当だった。
石楠花はずっと、義父のことを信じていなかった。
「この人は仕方なく自分を育てている」――「自分はこの家に情けで住まわせてもらっている」。心の奥底では、そう思い込んで暮してきた。家事をするのも、優等生でいるのも、「邪魔にならない役に立つ子」でいるためだった。
そう、全て本当のことだった。
石楠花は身をよじった。腕の中で枕が潰れてゆく。
「……あた、し……」
死んでしまいたい。
「もう……お終いだ……」
消えてしまいたい。
「もう、駄目だよ……」
誰の顔を見るのも怖かった。
柔らかな部屋の明かりすら辛かった。

五

居間のソファに体を横たえ、裸の上半身に包帯を巻いたシロは舌打ちした。
「つ――」
「痛みますか……？」
大輝は何をすることも出来ず、傍らに立ち尽くしていた。
シロは一息ついてからゆっくりと体を起こし、汗ばんだ顔で笑ってみせる。
「いや、そろそろ平気じゃ。――水をくれるか」
「はい」

大輝は持っていたコップを手渡す。
シロはそれに少し口を付け、溜息をつく。
「……ふう」
それから、うつむく大輝を見て首を傾げる。
「どうした大輝？」
「いえ――」
大輝は向かいのソファに腰を下ろした。
「俺、信じられないです。しゃくネエが小梅さんや石之助さんに、あんな……」
「大丈夫じゃ。石楠花は悪い子ではない」シロは静かに言う。「小梅や石之助を襲ったのは宮琵とやらに操られたせいじゃろうし、義父上を傷つけたのも、ただ我を失っておっただけに決まっておる。それにしてもあの男――」
シロは細いあごに手をやる。
ドアが開き、石之助が戻ってきた。
「あの野郎は宮琵と名乗ったな……」
頬に絆創膏を貼っている。
「気味の悪い妖気だった。しかも俺たちと同じ、石字縛師の術を使いやがる」
言いながら大輝の隣に腰掛ける。
シロが付け加える。
「それだけではない。あやつは夜々と同じく黒腕の力も持っておった。見神の眷属でもあるということじゃ」
「妖怪で――石字縛師で――見神の力も持っていて――しかも……」
大輝は宙を睨む。「小梅さんを殺して食べようとした……？」
「既に食われた者もいるようだな」
いつの間にか、夜々が入り口に立っていた。
「さっき任氏が見つけた火事の現場を見てきたが、焼け跡から妙な動物の腕や足が見つかったと騒いでいた。恐らくは宮琵の食い残しだろう」

「あの居酒屋の大将が……」
石之助は拳で膝を叩く。
「畜生め、良い親父だったのによ」
「ところで石之助君」夜々はドアにもたれる。「母様の容態は？」
「ああ――」
石之助は顔を上げる。
「まだ意識は戻らねえが、もう大丈夫だ。今は呪符で回復を早めてる。腕もくっ付きかけてるし、じきに喋れるようにもなるだろうぜ」
「それは安心した」
夜々は笑みもせずに頷いた。
大輝は夜々に問う。
「あの……しゃくネエは」
「彼女の怪我は、私が石を投げつけた後頭部だけだ。変化している間に受けた傷だから、すぐに治ってしまったよ。ただ――」腕を組む。「内面的な部分をそうとうやられている。当分は立ち直れまい」
「そう――ですか……」
「今は誰が何を言っても無駄だろう。この結果は目的に至るまでの副産物なのか、それとも目的の一部なのか……宮琵という男は一体何を望んでいるのだろうな」
「石落のミスが自分を産んだ」石之助は頬をかく。「あいつはそう言ってやがった。そして自分は火高の息子だともな」
「ひだか？」
大輝の知らぬ名である。
夜々は指先で前髪を分ける。
「火高――火高兵蔵か。大戦中、軍部から異形の研究を任されていた施設長の名だな。君が母様と出会い保護したのも、その男が捜索を依頼したのがきっかけだとか」
「ああ、そうだ」石之助は頷く。「気味の悪い男だったぜ。小梅をわしに捜させたのだって、内心じゃあどういう目的があったのか分からねえ。小梅が見神の一員になった後も、何だか妙な手を使って

接触しようとした形跡があったしな」
「母様がその男に狙われていたと？」
「かもな」
石之助は鼻の頭をかいた。
シロが座りなおす。
「しかし何故にその男と石落に関係がある。どうにも話が見えぬ」
「うむ……それなんだけどよ」石之助は言いづらそうに語る。「はっきりとした話はわしにも見えねえんだが、あいつはこう言ってたんだ。その――石落はお前さんの力を恐れて最後まで子を産ませることはなかったが、結局ひとつのミスを犯していた。それがやがて石落を殺し、眠り石に魂を封じ込める理由になった、と――」
「む……」
シロの表情がこわばる。
石之助は腕を組みなおす。
「勿論、お前さんにとっちゃ、欠片も思い出したくねえ話だろうがよ……何かその頃のことで心当たりは無ぇかい」
「石之助さん」
大輝は立ち上がりかけた。
幾年にも渡る石落の強姦を受け、そして幾度もの中絶を強制された――それがシロにとって、嘔吐するほどの心的外傷となっていることを、大輝は知っている。
あの牢獄にいた頃の出来事を、シロに思い出させるようなことはしたくなかった。
しかしシロは静かに言った。
「良いのじゃ大輝」
横髪を除け、胸元の包帯を直す。
「それはまあ、思い起こして全く平気といえば嘘になるが……あの時ほどは怖ろしうない」
照れた目で大輝を見る。
「今のしろには、大輝という守り神がおると分かったからな」

「シロさん――」
「そうじゃな、あの時分の事か」
シロはこほんと咳払いして真顔に戻る。
「確かにしろは幾度となく石落の子を孕まされたが、全てあやつの手で堕ろされて、赤子を産むことは一度もなかった。無論あやつの子など産みたくもなかったが――石落がそうしていたのは、確かにしろの力を継いだ子が生まれるのを恐れてのことだったようじゃ」
「なるほど」夜々は頷く。「しかし、それはつまり」
「石落は、他の女怪には度々子供を生ませておったらしい」
シロはソファに背をもたれる。
「自らの手足となる半妖をな。もちろん、逆らっても手打ちに出来るような、中途半端な子供しか作ろうとはしなかったようじゃが。何せどの子にも、化け物を捕らえるための縛術を教え込んでおったのじゃ。しろにしたように、腹の中へ枷となる術を仕込んだところで、術の心得があれば解かれる恐れもある。かといって、強い女怪に子を産ませて縛術を教えねば、ただ強いだけの半妖になり、思うようには役に立たぬ」
「待ってくれ。するってえと、こういうことか。石落は女怪に生ませた子供らを使い、妖怪を集めさせていたと――」
「そういうことじゃ」
シロはコップの水を飲む。
夜々はドアへ寄りかかったまま、頬に手をやった。
「そうした行いの中で石落は失策を犯し、眠り石に封印された……そしてそれが、火高と関係しているというわけか」
「分からねえな。結局さっぱりだ」
石之助は舌打ちするが、「そうでもないさ」と夜々は言った。
「つまり石落は、自分にとって生まれてはいけない存在を誕生させてしまったということだろう」
「ああ――成る程」
石之助はソファの上で胡坐をかく。

「そういえば石落は自分の息子たちに封印されたんだったな。そこでいう息子たちってのは、人間との間に生まれた子じゃなく、女怪に生ませた半妖だったわけか」
「もしその造反が、石落の生してしまったイレギュラーな存在が扇動したものだと仮定すれば、宮琵が残した言葉との辻褄は合う」
夜々は腕組みして足下を睨む。
「しかし石落が、子を産ませる女怪のスペックを単純に見誤ったとも思えない。何らかの意外な見落としがあったのだろう」
「見落とし――ですか？」
「ああ。妖力や身体能力以外の何か……つまりは特殊能力だ」
夜々はシロを見る。
「例えばだが、君は空を自由に飛び、強力な炎を操るね？」
「そうじゃな」
「他にどんな力を持った妖怪がいる？」
「馬鹿馬鹿しい問い方をするのう。それは様々に決まっておる。影に溶けるものもおれば、雨を降らすものもおる」
「その通りだ」
夜々は頷き、大輝と石之助のほうへ顔を向けた。
「異形の強さは、妖力や腕力、再生力などという単純なスペックのほかに、個体の有する様々な能力によって決定する。石落は、女怪の一人が潜在させていた危険な能力を見落として、部下にする半妖の母親として選んでしまい、その女怪の力を受け継いで生まれた子供に足下をすくわれた――そう考えることは出来ないかね」
「特有の能力……？」
石之助は考え込んだが、すぐに顔を上げた。
「待てよ……それがひょっとして、宮琵が妖怪を食らうことと関係してる――と、したら」
「ふむ」夜々はドアから背を離す。「その考えが正しければ、大まかな流れは見えてくるな」
「どういうことじゃ？」

両手でグラスを持って首を傾げるシロに、夜々は言う。
「君、さっきから気になっていたんだが、包帯に乳首が浮いているぞ」
「な――そんなことは関係ないじゃろうが！」
シロは肘を寄せて胸を隠し、真っ赤な顔で牙をむく。
夜々は結局シロの問いに答えず、上着のジッパーを閉めなおした。
「取り敢えず、私は見神のほうへ当たってみよう。大戦中の異形研究部門には見神も深く関わっていた。何らかの記録が残っているはずだし――当時から生きている人もいる」
「一人で行くんですか？」
「ああ」夜々は頷いて微笑む。「大丈夫だ。自分の身くらい自分で守るさ。それより君たちこそ気を付けたまえ」
言いながら、大輝たちの顔を順番に見る。
「宮琵の最終的な目的は分からないが、少なくとも我々の命は狙われているようだ。――任氏」
「何じゃ」
「私がいない間、お前に任せるぞ。次に宮琵と接触したら、目が合う前に消滅させろ」
「分かっておる」
「それと石之助君」
「……おう」
「母様を頼む。あの人は――」少し言うのを躊躇った後に。「どうやら、君にずっと好意を抱いている」
「……」
石之助は黙った。
大輝とシロは同時に石之助を見る。
老人の返事は短かった。
「分かったよ」
「――。では失礼する」
夜々は一礼して廊下へと出て行った。

足音が玄関へと遠ざかり、やがて、ドアの開閉する重い音がした。
その間、三人はうつむいて黙っていた。
掛け時計が重い時を刻む。
口を開いたのは石之助だった。
「……畜生め」
小さな声だった。この部屋が静かでなかったら聞こえなかったかも知れない。
「下らねえジジイだ、わしは……」拳で口元を押さえる。「傍にいた女一人守れねえ……」
「無理も無いことじゃった。宮琵と名乗ったあの男、一介の石字縛師が相手に出来るような力量ではない」
シロが穏やかに言う。
石之助は下を向いたまま苦笑った。
「何だ、わしを慰めてくれてんのか」
「そうかも知れぬ」
「――ありがとよ」溜息のように。「助けてくれた礼も今言っておくぜ」
「いらぬ。しろが勝手にしたことじゃ」
「……すまねえな」
石之助は立ち上がり、それ以上何も言わずに居間を後にし、階段を上って行った。
残された大輝とシロ。
大輝は、グラスに唇をあてたまま何か思案している様子のシロに、おずおずと声をかける。
「あの……シロさん」
「ん、何じゃ？」
我に返ったように目を合わせるシロ。
大輝は――こんな時だというのに――シロの美しい瞳に動揺してわずかに視線を反らしつつ、小さく問う。
「宮琵って奴は……本当に、何が目的なんでしょう」

意味もなく膝の前で手を泳がせる。
「だって、俺たちの命を狙ってるにしても、そんなに強いなら、いきなり俺たちのことをまとめて殺そうとするのが普通ですよね」
言いながら、自分の言葉があまりに非日常的なことに、不気味なおかしさを覚える。
「それを、わざわざしゃくネエの力を目覚めさせたりして……」
「あやつの成さんとしておること――か」
シロはグラスを口から離す。
「それを今しろも考えておったところじゃ。確かにあやつの行いは滅裂で、求めておるものが皆目見えてこぬ」
グラスを揺らし、波打つ小さな水面を見つめる。
そして不意にそれを止め、ぽつりと、シロは呟いた。
「もしかすれば……あやつには、元より求めるものなど無いのやも知れん」
「え――？」
首を傾げる大輝に、シロは考え考えの様子で語る。
「あやつの眼差しからは何かが欠けておった。それがどうしたものなのか、しろには上手く言い表すことが出来んが、大輝や他の人間たちが眼に宿しておる当たり前のものが、全く抜け落ちておったような気がする。あれは――」
シロは顔を横を向け、外が暗いせいで鏡のようになっているガラス戸に視線を移す。
「あれはひょっとすると、大輝と出会う前のしろと、似たような瞳かも知れぬ」

六

階段を上り、ゆっくりと大輝の部屋のドアを開けると、ベッドに寝ていた小梅が目を開けた。
石之助は驚いて歩み寄る。

「お前、気が付いたのか？」
「……」
小梅は視線だけを石之助に向けた。
布団に隠れたその肉体は、目もあてられぬほどひどい状態である。外れた片腕を呪符で継ぎ、穴の開いた腹部と折れた首にも、石字文句を書き込んだ包帯が、まるで簀巻きのように巻きつけられている。
小梅は傍らに膝をついた石之助に、かすれた声で問う。
「……ここ、どこ？」
「大輝の部屋だ。――回復はどうだ？　まだ随分痛むか？」
「うん……」小梅は天井を見る。「首はそろそろ平気みたい……でも、お腹がまだ痛い」
「穴が開いてるんだ。血は止めてるが、治るには時間がかかる。ゆっくり寝てねえと――」
「……石之助、無事だったんだね」
「ああ。任氏が助けてくれた。大した怪我はしてねえよ」
「……。よかった……」
小梅は目を閉じる。
石之助は思わず布団の上から肩を掴む。
「おい――おいこら、小梅！」
「……平気だよお」
小梅は薄目をあけて力なく微笑む。
「あたし化け物だもん。このくらいで死んだりしないってば……」
小さな鼻から息を吐き、それから、ほんのわずかに体を揺すった。
「ありゃ……でも、あたしグルグル巻きなんだね。……石之助が手当てしてくれたの？」
「お、おう」
「薬も塗ってくれた……？　いつも持ち歩いてるやつ」
「おう、一応な」
「……。そのとき、あたしのおっぱい触ったりした？」
「はあ？」石之助は声を裏返す。「何言ってんだお前、こんな時に」

「あそこも見たでしょ」
「お前なあ――」
石之助は呆れて口を開ける。
小梅は深く溜息をついた。
「……意識があればよかったかも」
「何か言ったか」
「別にい」
小梅は再び目を閉じる。
そして、ぽつりと言う。
「ねえ……石之助？」
「何だ」
「すっごいワガママ言っていいかな」
布団のわきから、無事だった左腕を出す。
「……手、握っててくれる？」
それは相変わらずの小さな手だった。
石之助はベッドの端に腰をかけ、黙ってその手を取って、皺だらけの両手で挟みこむように握った。
小梅は目を閉じたまま微笑った。
「ありがと……」
そしてすぐ、寝息をたて始めた。
石之助は静かに泣いた。

（つづく）

第十章【夜々――よよ――】

薄暗く、恐ろしく広い畳敷きの空間。
夜々自身は覚えているはずもないが、ここは夜々と小梅が初めて出会った間であった。
入神の本家屋敷、その地下にある家長の間――遠見の間である。
音は無い。
正座をした夜々の向かう正面には、薄い簾が下がり、その奥だけが、蝋燭の光で煌々と黄色に揺らめいている。
漏れる光が夜々の顔を照らす。そこには夜々と、簾の奥に横たわる人物のほかには、誰の姿も無かった。
夜々は恭しく頭を下げた。
「――お久しぶりです、遠見様」
「……来ると思っていたわ」
老いた女の落ち着いた声が返ってくる。
夜々はゆっくりと顔を上げる。
「夢見に御座いますか」
「ええ……久しく無かったことだけれど」
そう言って、老女は簾の奥で咳き込んだ。
立ち上がりかけた夜々を、老女は制する。
「いいのよ、大丈夫。それより――あなたは私に何かを訊ねに来たのね」
「……ある男のことについて」

夜々は頷く。
「火高兵蔵という男のことを、遠見様はご存知ですか」
「火高――」老女は穏やかに答える。「もちろん知っているわ。お国に雇われ、あやかしのことを調べた人ね」
「左様に御座います」
夜々はまた静かに頷く。
溜息が聞こえ、老女の言葉は細く続いた。
「あの人は、消えてしまったのよ」
「……消えた……？」
「そう。戦が終わった後、施設で共に暮していた、我ら一族の女をひとり連れてね」
「入神家の女を連れて――逃げ亡せたということですか」
「駆け落ち、というのかしら？」
老女はあどけない少女のような口調で言う。
「ほら、私たちの婚姻は定められているものでしょう……？　もし縁の無い人が私たちの誰かと結婚をしようと思ったら、二人で逃げてしまうほかに無いわ」
「……見つかりはしなかったのですね」
「ええ。でも――」
老女は一度黙り、それから再び溜息をついた。
「それから暫くして、火高さんの連れて行った子の魂が、消えてしまったわ」
「女は死んだ――」
「ええ」
老女は簾の奥で、横たわったまま、こちらに顔を向けたようだった。
「けれど、それと一緒に、何か恐ろしいものが生まれたのも分かった。とても空ろなものよ。でも……どんどんと大きくなってゆく」
老女の声が揺れた。
「ああ……夜々……」
発する言葉が歪み、震える。

「見えるわ。見えてしまった――ああ、何ということなの」
蝋燭の炎が激しく揺らめく。老女はうめく様な声で言った。
「それは……それはもうすぐ……あなたを」かすれる。「殺してしまう……」
「遠見様――？」
夜々は立ち上がる。
静かな寝息が始まった。
――眠ったのか。
夜々は簾に伸ばしかけた手を降ろす。
遠見の眠りは長い。このまま半月は目を覚ますまい。
夜々は広い空間に立ち尽くし、自らの両手を見る。
「私が……」
冷たい怖れが足下から這い上がってくる。
「死ぬ……？」

第十章【夜々――よよ――】

一

十一月とは思えぬ暖かさの、あまりにも穏やかな昼下がり。
大輝は左手に食事を乗せた盆を乗せ、石楠花の部屋の前に立っていた。
「……しゃくネエ、入っていい？」
扉越しに声をかける。
返事は無かった。もう三日目になる。
大輝は黙ってノブを回し、部屋の中へ足を踏み入れた。
義姉は昨日と変わらず、ベッドの中にいた。壁を向いているので顔は見えない。
大輝はその姿を横目に、勉強机の前まで歩み寄る。
机の上には、昨日運んだ食事が、全く手のつけられていない状態で残っていた。
「……また食べなかったんだ」
大輝は呟きつつ新しい食事を並べ、代わりに、乾ききった白米や冷めた煮つけを片付ける。
それからもう一度石楠花を見た。
布団の中の石楠花は動かない。
大輝は――考えた挙句、昨日と同じことを言った。
「俺、しゃくネエが元気になるの待ってるから」
返事が返ってこないことは分かっていた。
そして大輝は部屋を後にした。
廊下へ出て階段を下りる途中、下で待っていたシロと目が合う。
シロはもはや強がることもなく、心配をあらわにした顔でこちらを見上げていた。
「石楠花はどうした様子じゃ？」
「昨日と同じです」

大輝は盆を手に階段を下り、シロに昨日の食事を見せる。
「ほら」
「――ふむ」
シロは一瞥して眉をひそめ、二階を仰ぎ見る。
「これで三晩の食うや食わずか。水もろくに飲んでおらぬではないか」
「はい……」
「小梅は腹が万全に治っておらぬゆえ、何も食えぬのは仕方がないが……石楠花はもう、体のほうならば、すっかりと治っておる。やはり心持ちの問題か」
「……色々ありましたから」
「参ったのう」シロはしょんぼりと下を向く。「折角、精のつくものを食いやすいよう料理しておるのじゃが」
肩を落とし、居間のほうへと戻ってゆく。
残された大輝は、シロにかわって二階を見上げた。
「しゃくネエ……」
下唇を噛む。
水の流れる音がして、父が廊下の奥にあるトイレから出てきた。
大輝は振り返る。
「親父――」
「まだ食べないのか、石楠花は」
ファスナーを直しながら父は問う。まだ背を曲げると痛いのであろう、下を向く姿勢が不自然である。
大輝が頷くと、父は小さく「そうか」と言い、シロと同じく居間のほうへと歩いてゆく。
「取り敢えず私たちもシロさんの料理をいただくとしよう。腹の減った状態で物事を考えても、大抵の場合はろくな結論が出てこないものだ」
いつもと変わらぬ平坦な口調でそう言い切り、そのまま居間へと消えて行った。

大輝は溜息をつく。

そう――あれから三日が過ぎていた。

父は仕事を、大輝と石楠花は学校を休み、ろくに外へ出ることも無く、ただ家の中に閉じこもっている。

小梅は相変わらず床についている。まだ腹部の傷が完全には癒えないのだそうだ。シロのような大妖ならばすぐに治ってしまうらしいが、生まれて百年も経たない小梅では、そういうわけにもいかないらしい。誰もいないアパートへ移してしまうわけにもいかないので、今のところはまだ大輝のベッドに寝かせており、そのために大輝はシロと同じく、居間のソファで眠っている。

石之助は、神出鬼没と思われる宮琵の襲撃を警戒してか、この三日間、ろくに横になっていないようだ。時々ソファに座って目を閉じていることもあるが、定期的に小梅のことも看ているので、それすら長い時間ではない。

父は何を考えているのか知れないが、少なくとも外面的には、まるで何事も無い休日を過ごしているかのように、いつもの如く眠たそうな面持ちで家の中をうろついている。異形と化した石楠花の一撃を食らって三日しか経たぬのに、よく飄々としていられるものである。

そしてシロは――

シロはつとめて普段どおりに振舞っているようだが、その顔は明らかに憔悴していた。

恐らく彼女は石之助の何倍も……それこそ一秒も休むことなく、ぎりぎりのところまで神経を研ぎ澄ましているのだろう。大輝を心配させまいと、夜は毛布にくるまって横になっているのだろうが、それが眠ったふりであることは一目瞭然である。

確かに夜々が不在である今、宮琵という男を相手にして戦いを演じられる可能性があるのは、シロだけだと言える。

それでも、文字通り一睡もせず、精神を削り、懸命に周りの世話を焼くシロを見ていると、大輝は胸が痛くなると同時に、何の力に

もなれない自分への情けなさで身が縮む思いがした。
今もシロの作った料理の匂いが廊下に漂っている。
「――畜生」
小さく自分に悪態をつき、大輝は居間へと入って行った。
シロと父、それから口数の少なくなった石之助と昼の食卓を囲みながらも、大輝は悶々と考えていた。
自分に出来ることは何一つ無いのか。
シロのように強くもなく、石之助のように色々な知識があるわけでもなく、夜々のように賢くもなければ、父のような落ち着きがあるわけでもない。
唯一、母から受け継いだ麒麟の力も、あの石落との戦いで発現したきり、全く使いこなせる気配も無い。今にして思えば母が力を引き出してくれたのだろう。
それに、夜々の言うところによれば、あそこが常世の中だったのも幸いといえば幸いだったようだ。麒麟は三次元の歴史や因果に多大な干渉をすることが可能な神獣だが、そのぶん、力の発現には様々な制約が付きまとうという。要するに、この現世でおいそれと能力を開放することは出来ないということだろう。
しかも――これも夜々が言っていたことなのだが、もし何かの間違いで能力が開放されてしまい、暴走が起きた場合、この三次元全体が危険にさらされてしまうらしい。たかが自分ひとりのせいで宇宙がどうにかなるなどと、大輝自身にとっては全く信じられぬことであるが、語る夜々の顔はいたって真剣だったので、どうやら笑い飛ばせる話では無さそうだ。
大輝は閃光の槍で石落を両断した際、同時に、常世の中に構築された三次元空間すら瓦解させ、消滅させてしまった。あそこが現世と隔絶された空間だったから良かったようなものの、この地球上で同じことをしでかした場合、恐らく瓦解は三次元全体に及んでいたという。
どうも因果というものは、その一部に矛盾やほころびを発生させて

しまうだけで、連鎖的に全てが消えうせてしまうような、完全で繊細なものであるらしい。麒麟はその因果に「部外者の立場から」アクセスし、改ざんする権限を持った存在なのだそうだ。

夜々の話をまとめれば、麒麟の力は発動が難しい上に恐ろしく危険で、現実的には使用不可能なものだということだ。

使えない力など役にも立たない。

大輝は結局、守られるばかりで役に立たない存在なのだ。

心を折られて部屋に閉じこもった石楠花を思い、憔悴したシロの顔を横目で見つつ、大輝は心中でうなだれた。

静かな食事が終わり、シロが皿や茶碗を片付け終えた頃、インターホンが鳴った。

警戒しつつ一同が玄関へ行くと、来訪者は、入神の本家から帰ってきた夜々であった。

夜々は靴を脱ごうともせずに言った。

「ただいま」それから四人の顔を見比べる。「全員でお出迎えか。慎重で大変良いことだが、そうして並ばれると少し威圧感があるな。石之助君」

「ん――おう」

「母様の容態は？」

「時々起きることもあるが、まだほとんど一日中眠ったままだ。今も寝てるぜ」

「そうか。話もしたかったのだが……」

「それにしてもお前、どんなことを調べてきたんだ？」

「うん。本家で遠見様に会った。例によってお目覚めを待つ時間は長かったが、その甲斐あって興味深いことが分かったよ。火高兵蔵は、施設閉鎖後、我ら一族の女をひとり連れて逃げたそうだ」

「何……？」

「どうもその後に、恐ろしい力を持った子供が生まれたらしい。同時に女は死んだようだが――これで少なくとも、宮琵がどうやって生まれた存在なのかは分かったな。あれは誤算が生んだキメラだ。

そして」玄関に華奢な腰を掛ける。「火高は石落の血をひく……いや、石落の息子だったと考えた方が自然だろう」

「やっぱりそうなるか……」

「どういうことじゃ？」

腕組みするシロに夜々は続ける。

「そう考えれば宮琵の能力との辻褄が全て合うのさ。石落の縛術と女怪の妖力、そして入神家の遺伝子がもたらす神気――それら全てを一つの肉体に内在させているのが、あの宮琵という存在だと考えればね。そして、火高が石落に謀反を企てた張本人だと仮定し、宮琵が妖怪を捕食することと併せて考えたとき、一つの流れが見えてくる」

「石落が選んだ女怪の一人……火高の母親になった女は、捕食した妖怪の力を自分のものにする能力を持っていた」父がぽつりと言う。

「そういうことですか」

恐らくは、と夜々は頷く。

「それだけでは何の武器にもならない代わりに、他の妖怪を食えば食うほど、際限なく力が増大してゆく。その能力を継承した火高は、石落の与り知らぬところで次々と妖怪たちを食らい、石落以上の力を蓄えた上で、他の半妖たちの腹に仕込まれた枷を解き、謀反を企てた。そしてそれは成功……火高は石落の肉体をも捕食した。その後に思念生命体として復活した石落も眠り石に封印。石落の能力の源も、元はといえば紅猫鬼の妖力だ。天才術師の力を丸ごと受け継いだのなら、もはや難しいことでもなかったろう」

「謀反の理由は？」

壁に寄りかかるシロ。

夜々は、うん――と頷く。

「それはきっとシンプルな理由だろう」

「てんぷる……固めるてんぷるか？」

「それは使い終えた家庭用の油を固める薬品だよ。君はすっかり主婦みたいになっているな。――そうではなく、簡潔な理由というこ

とだ。わざわざ異形の研究家を装って軍部に取り入り、研究所の施設長になって妖怪を集め……その上、戦争が終わった後も、山ノ蛾の娘である母様の身柄を求めていた。それはつまり、彼がまだまだ力を欲していたということになる」

「石落の後釜狙い、か」石之助は舌打ちする。「妖怪を集めて世の中を操ろうなんざ、時代遅れも甚だしいぜ」

「そうでもないさ。異形というものに対し、人間社会はあまりに無防備だ。知識も無ければ心構えも無い。君らが退治したという下がり腕や食み虫に、この町の人々はどれだけ殺された？　そしてそれを誰と誰が認識している？　大体、例えばだが、そこにいる任氏がこの国の重要人物を皆殺しにして政治機関を麻痺させ、自衛隊の基地や横須賀のベースを全て破壊するのに、いったいどれだけの時間が必要だと思う？　本気を出せば半日でも十分過ぎるだろう。……まあ、任氏ほどの妖怪はそういないが、人に化けられる妖怪をあちらこちらに潜り込ませ、一斉に決起させれば、この国くらいなら一日で乗っ取れるさ。クーデターが目的だったとは限らないがね」

「本来しろたちは人間の作った世などに興味を持たぬゆえ、そのようなことはなさぬがな」

「そうだろうがね」

「待って下さい。じゃあ――今夜々さんが言った考えが正しければ」

黙って聞いていた大輝が口を開く。

「宮琵って奴は、つまり、火高っていう男が入神家の人に生ませた、自分の部下って事ですよね？　石落がそうしてたみたいに……でも……あれ？」

「宮琵は既に父親を殺したと言っている」父が代わりに言葉を続ける。「しかしそれが、火高が石落を殺したのと同じ理由でしたことは考えづらい。私は宮琵と会ったわけではないが、彼の行動は、まるで我々をいたぶっているかのようだ。単純にシロさんや小梅さんの力が必要ならば、何より先に彼女たちを拉致するか、捕食しようとするのが当然でしょう。余計なことをする必要は無いはずです」

「そう――」夜々は指先で横髪を撫でる。「しかも眠り石はもう消えてしまった。石落や火高の能力をそのまま継承していたとしても、妖怪を閉じ込めておく牢獄はもはや無い。新たな両界のひずみが生まれたという兆しも無かったし……では、宮琵が妖怪を集めた後の使い方は、ただ捕食するのみということになる」

「宮琵という男は、火高と違い、親の立場を乗っ取ろうとしているわけではなく……全く独自の意思で動いている……？」

父の呟きに夜々は頷く。

「そう考えた方がいいだろうな」

そして、ゆっくりと立ち上がる。

「さて――これ以上の詮索は石之助君に任せるとして、ちょっと大輝くんを借りてもいいかな」

「何じゃ突然に」

「麒麟の血を引く者に、来て欲しいところがあるのさ」

大輝を見て、にやりと笑う。

「何……すぐに済むことだ」

二

階下で、また玄関のドアが開閉する音がした。

石楠花はベッドの上で体を起こし、窓の外を見る。

大輝が夜々に連れられて歩いてゆく後姿が見えた。

――どこへ行くんだろう。

思いながら、また体を横たえる。

静かな部屋の中には、シロの作った食事の匂いが漂っている。

食事の用意……シロが来る前は自分の仕事だったことだ。

いつの間にかそれは二人が交互にする仕事になり、そして今は、シロの役目になっている。

ちくりと胸が痛むのを感じ、石楠花は唇を噛んだ。

――何を考えてるんだよ、あたし。

この胸に刺さっている棘が、役目を取られたことへの不満であるとすれば、あまりにも理不尽な嫉妬ではないか。
自分が勝手に寝込んでいるくせに。
シロはあたしのことを心配してくれてるのに。
頭でいくらそのように考えても、もやもやとした黒い霧のようなものが、胸の中から出て行こうとしない。
なんて醜いんだ。
石楠花は布団の中で膝を抱えた。
「……。最低……」
一人呟く。
そう。石楠花は、こんな状況で自分のことしか考えていないのだ。
「ごめんよ……大輝」
あたし、もう駄目だ。
駄目だって分かった。最初から駄目な奴だったんだ。
もうお前のことも諦めるよ。
あたしにそんな資格無いから。
困らせて悪かった。
気持ち悪かったよね。
もう傍にいられないよね。
でも――
だからってあたし、これからどこへ行けばいいのかも分からないよ。
どうすればいいのか――。
布団が重い。
石楠花はその中に顔を埋め、ただひたすらに眠りを待った。

三

バス停のほうへ向かって歩き出した夜々に、大輝は後ろを歩きながら問う。
「あの、行くってどこへですか？」

「うん――」
夜々は振り返らない。
「そうだね、どこへ行こうか」
「へ？」
「思案のしどころだな。私は男でも女でもあるが、相手の君が男である以上、女という立場にいなければならない。まあ幸いにして見た目も中身もほとんど女であるわけだが、ここは素直に我侭でも言うべきなのか……しかし私はそういう性格でもないしな」
「あの、何言ってるんですか？」
「君はどこへ行きたい？」
「あの……」
「友達――いや、恋人か。そういえば君は、正式に誰かと付き合っていたことがあるのかね」
「いえ、無いですけど」
「ではもし君に恋人がいたとして――それが同い年くらいの人間だったとして、君ならばその子をどこへ連れて行く？　私はどうにも疎くてね」
「はあ……？」
大輝は付いて行けずにただ口を開け、それから、仕方なく答えた。
「まあ、俺もそういうの疎いですから、今いちイメージ湧かないですけど……友達なんかはゲームセンター行ったりカラオケ行ったり、あと買い物したりしてるみたいです。でも、それが今何の」
「ゲームセンターにカラオケか。まあ、君となら楽しいかも知れないな」
夜々は肩にかけたバッグを持ち直す。
「じゃあやっぱり駅前を回ってみるか」
「ちょっと待ってくださいよ。もしかして今から……二人で遊びに行こうっていうんですか？」
「そうだよ」
「んな無茶な！」

大輝は立ち止まる。
「こんな時にどういうつもりですか！　こうしている間にも」
「どこにいても同じことさ」夜々も立ち止まって振り返る。「宮琵に手傷を負わせることができた任氏なら、形振り構わなければ勝ち目があるかもしれないが、それだって、私たちを守りながらでは完全に不可能になる。いや――希望的な観測を抜きにして考えてみると、相手の居場所すら分からず先手も打てない以上、そもそも任氏の勝つ可能性自体が完全なゼロか」
「そんな……」
あまりにも突然で、あまりにも悲観的な発言である。もはや今までの言動と矛盾しているともいえる。
絶句する大輝に、夜々は淡白に続けた。
「一つところに固まっていればその場で全滅し、ばらけていれば順に狙われる。結局それだけの話だ」
夜々はまた歩き出す。
「それより――今日だけは何も考えず私に付き合ってくれないか」
「そんなこと言ったって……」
追いかける大輝に、夜々は背中を向けたまま言った。
「頼むよ」
「……」
大輝はなぜかそれ以上の文句を言えなかった。
夜々の小さな背は、どこか捨て鉢な空気を纏っていた。
丈の長いコートが歩みに合わせて揺れる。
それを見つめながら、大輝は夜々の後を黙って歩いた。
やがてバスに乗り込んだ二人は、最後部の座席へ腰を下ろした。
発車すると共に大輝は呟く。
「……補導とかされませんかね」
「今日は土曜日だからね。午前中で授業が終わったと言えば大丈夫だろう」
ガラス窓を見る。

「それにしても、少し緊張するな――。大輝くん、私の見た目はどうだ。変に目立ったりはしていないかい」
「いや、別に変じゃないですけど」
「ならばいいんだが」
「あの」
「ん」こちらを向く。「何だい」
「俺一円も無いですけど」
「私が持っているから心配しなくて良いよ」
「……でも」
「ああ――」
夜々はなるほどと頷く。
「見た目にして同じ年頃の女にいちいち金を出されるのは、君にしてみれば、見てくれの良い話ではなかろうね。あらかじめ幾らか渡しておこう。二十万くらいでいいかな」
「……いや、いいです。なんでもないです」
大輝は財布を出しかけた夜々を止め、それから下を向く。靴紐を結びなおそうにも、きっちりと結ばれていてほどける気配も無い。
いきなり何だこの状況は。
大輝は黙って考える。
命が危ないっていうのに、二人で遊びに行くなんて……。これじゃまるでデートじゃないか。
この人のズレた感覚は分かってたけど、常識的な判断力だけはある人だと思ってたのに。
ちらりと夜々を見る。
夜々は黙って前方の座席を見ている。
……何考えてるんだろう。
大輝が項垂れると、その腕に、夜々の腕が絡みついてきた。
驚いて顔を上げる。
「え――？」
「こうかな……いや、こうか」

そのまま寄りかかってくる。
大輝は硬直した。
「あの――」
「ん」
「何してるんですか？」
「アベック……いや、カップルというのか。それらしい姿勢になろうと思ってね。これで合っているだろう？」
「……たぶん」
「よし。では駅に着くまでこのままの姿勢でいようか」
「はあ」
返事のような溜息のような曖昧な声を返し、大輝は目を泳がせた。
数少ない他の乗客たちのうち、特に誰も、こちらを見ているような様子は無い。当然だろう。最近では中学生のカップルが腕を組んでいる光景など、さして珍しいものでもないのだから。
しかし――
夜々は大輝の肩に横顔を寄せながら口を開いた。
「……なるほど。心地がいいな」
「え」
「幼い時分の私は甘えん坊で、暇があれば母様にくっ付いていた。だからこうして人の体温を感じると安心するよ」目を閉じる。「任氏もよく無意味に君の肩へ寄りかかっているが、彼女の気持ちも分からないでは無いな。長い時を孤独に生きてきた化生にとって、君のやわらかな温かみは、さぞかし気の休まるものだろう。彼女がよく男を床へ引き込んでから殺したというのも、知らず知らず、そうした欲求を満たそうとしていたのかもしれない。まあ……そのように空虚な性交渉では、いずれ本質的に満たされはしなかったろうがね」
「はあ……」
「君は彼女のことが好きかね」
「え？　――と」

大輝は再び目を泳がせ、一呼吸おいてから、観念して首を縦に振った。

「……はい」

「それは恋愛感情かい？　それともただの家族愛に過ぎないのかな」

「……。分かりません」

今度は横に振る。

「でも……もしかしたら両方なのかもしれないです」どうして今こんな話をしているのだろう。「……あの人が俺にとってどういう人なのか、まだ俺自身、よく分かってないんですよ。姉ちゃんがもう一人できたみたいな感じもするし、母さんみたいな感じもしたりして。もちろん一人の女の人としても、俺は確かに魅力を感じてます……けど、それは」

頭をかく。

「俺がその気持ちのまま動いちゃったら、何か大事なものが無くなっちゃう気もするんです」

「彼女はいい女だ」夜々は言う。「器量も体も申し分ないし――まあ頭と性格には若干の問題があるが、何をおいても君に尽くすという点では、伴侶として最高の気質を持っていると言える。君の言いつけを素直に聞いて、その凶暴性や血を好む性質も今は形を潜めているようだし、それどころか家事洗濯まで感心にこなしている。そんな女が、健気に君の振り向くのを待っているというのに、まだ手を出すのを躊躇っているのかい」

「……。はい」

「あの狐変化とて、移り気な女という生き物の一人だ。君が躊躇っている間に、他のいい男に目が行ってしまうとも限らないぞ。なにせあのような上級の妖怪が人間に懐いていること自体、ほとんど奇跡のような状態なのだから」

「……待ってもらってるんです」

「待つ？」

「……、俺……あの人を泣かせたことがあるんです」

大輝は夜の浜辺でシロの流した涙を思い出しつつ、小さく語る。
「馬鹿だから――俺が馬鹿だから、ある日、とうとうあの人を泣かせちゃったんです。そのあと、シロさんどこかへ行っちゃって……俺、すごい必死で探して」
宿の周り。遠くの浜。誰もいない駅。
「それで、さんざん走り回った後に会えたんですけど……その時に」
「何か約束を？」
「約束っていうか」また頭をかく。「シロさん、言ってくれたんです。ゆっくり大人になりながら考えろって。その言葉に俺」
「甘えているのか」
「……」返す言葉も無い。「はい」
「なるほどね――」
夜々は目を開け、腕を組みなおす。
「意外だな。任氏は一方的に稚拙な愛情をぶつけるばかりだと決め付けていたが、君の心情を察して優先するだけの思慮も持ち合わせていたか。思ったよりも彼女の愛情は本格的なものらしい――しかし、それならば尚のこと、君の振る舞いは残酷で勝手だ」
ちらりと横目で見てくる。
「私は初めてあの妖怪を可哀想だと思ったぞ」
「……はい」
「まあ、君には君の思いというものがあるのだろうがね。君たちの関係は複雑怪奇だよ」
夜々は軽く溜息をつき、そしてまた目を閉じた。
「それで――君の義姉は？」
「しゃくネエ、ですか」
「彼女も君に熱を上げているようだが……君が彼女をどう思っているのか、今ひとつ私には分からない。ひょっとして――任氏が現れなければ、とっくにくっ付いていてもおかしくない関係だったのではないか」
「……そんな、こと」

「無いのかな」
「いえ――」
「任氏は何だかんだと言っても大人だ。しかし石楠花は……あの子は違う」薄目を開ける。「石字縛師の術を知っていようが紅猫鬼の先祖返りだろうが、あの子の本質はただの中学三年生に過ぎない。思春期の精神はとても脆いものだ。それが何を意味するかは分かるね」
「……」
大輝は唇を結ぶ。
夜々は――目を伏せた。
「すまない。今あの子の話をするのは、君にとって酷だったか」
「……あの時、いつからいたんですか？」
「立ち聞きをしていたわけではないが、妖気の奔流に心のたがを外された彼女が、勢いに任せて何を口走ったかは、大方の想像がつく。あの子は――君に対して抱いていた、幼い独占欲を言葉にしてしまった。違うかな」
「……。よく分かりますね」
「正直に言うと、最後の言葉だけは聞こえてしまったからな。――それで君はどう感じた？」
「どうって……」
「あの子の心を醜いと感じたかい」涼やかな声。「あの子を見る目は変わってしまったかい」
「変わりません」
それだけは即答できた。
「結局、俺のことを好きだって言ってくれただけですから」
「その好意が自分勝手な支配欲と同じものだとしても？」
「そんな小さなことくらいじゃ」苦笑する。「その程度じゃ、俺はしゃくネエのことを嫌いになれないんですよ」
「……そうか」
夜々は微笑んだ。

「君は――なるほど――そういうことか」
くっく、と喉を鳴らす。
「だからあの子も、任氏も……」
「夜々さん……？」
「参ったな――」
腕がゆっくりとほどけてゆく。
夜々は、今度は窓側に寄りかかり、ガラスの外に視線を流した。
「私は何をしているんだろうな……敢えて未練を作る必要もないというのに」
ぽつりと呟く。
「それでも――」
続く言葉は聞こえなかった。
アナウンスと共に、バスが終点の駅前停留所に到着したのである。
停車と共に夜々は立ち上がった。
「さあ、行こうか。これから日の沈むまで、何もかも忘れて付き合ってもらうよ」
「……はあ」
大輝も生返事で腰を上げた。
そしてバスを降りた二人は、まず西口のゲームセンターに向かった。
中途半端な時間であるだけに店内は比較的空いており、そのおかげで、夜々のいくつかの目立った行動――例えば他人がプレイしている格闘ゲームの画面を真横からのぞき込んだり、難度の高いガンシューティングを次々にワンコインクリアしてゆく光景などを目撃した者の数も、最少限で済んだ。夜々は興味を示していたが、パンチングゲームにだけは最後まで決して近づかせなかった。
大輝が唯一得意とするクレーンゲームの景品を胸に抱え、夜々が「次へ行こうか」と言ったのは、一時間半が過ぎた頃だった。
「今度はカラオケだな。しかし何だろうか、この縫いぐるみは……アニメーションのキャラクターかい」

「えっ……それ知らないんですか」
大輝があげたその縫いぐるみは、世界で最も有名なネズミの友人、世界一よく喋るアヒルだった。
夜々は「見たことがあるような気はするけれど」と首を傾げたが、やがて微かに笑った。
「まあいい。ありがとう」
「いや――そんな」
夜々からもらった百円玉で取った景品なのに、律儀に礼を言われるのも気まずい。大輝は半笑いで首を横に振った。
次に向かったカラオケボックスも空いていた。
店員に通された薄暗い個室で、ソファに腰掛けた夜々が開口一番に言ったのは、「しかし歌えといわれても困るな」という、至極消極的な文句だった。
向かいに腰を下ろした大輝は肩を落とした。
「じゃあどうしてカラオケに来たんですか？」
「そうするのが普通だと君が言ったからだ」
夜々はアヒルとバッグをテーブルに置いて、コートを脱ぎながら涼しい声で答える。
「カラオケボックスには、流行り始めのころ、母様に連れられて何度か来たことがあるが……君を相手に歌うのは恥ずかしいよ」
「恥ずかしいですか」
「私はあまり上手くなくてね。まずは君が歌ってくれないか」
大輝が返事をする前に、夜々はリモコンを手に取り、歌本を開く。
「誰のどの曲がいい？」
「えっ……」
こっちだって恥ずかしいのに。
ろくに考える時間も与えられず、大輝が苦し紛れに選んだ曲は、よりにもよって洋楽だった。レディオヘッドの「クリープ」である。単純に好きな曲のタイトルを口走ってしまったのだが、大輝はそもそもカラオケによく来る人間ではなく、英語の曲など歌ったことが

あるはずもない。
マイクを握り、歌い出した声は完全に裏返った。
夜々は大輝が必死に歌う姿と画面とを交互に見比べていたが、やがて立ち上がり、大輝の左隣へ移動してきた。
大輝が手汗に濡れたマイクを置いたころには、バスの中でしていたのと同じように、夜々の腕が大輝の左腕に絡み付いていた。
歌い終えた大輝は、自覚できるほど沈んだ声で言った。
「感想は言わなくていいです」
「うん」
夜々はこっくりと頷く。
大輝が、「じゃあ……歌いたい曲言ってください」と片手で歌本を開くと、夜々は首を振った。
「私はやっぱりいい」
「えっ」
そんな。
夜々は目線を合わせずに言った。
「次も君が歌ってくれ。私は聞いている方が向いている」
「いや……せっかく来たんだから歌ってくださいよ。俺ばっかりマイク握ってたらバカみたいじゃないですか」
「しかし――」
夜々は歌本に目を落とし、それから小さな声で言った。
「……じゃあ、ピーター・ポール&マリーのパフを」
「ぱふ？」
「あ、いい。私が探す」
「いや――大丈夫です。ええと……ピーターポール……」
大輝はぱらぱらと本をめくり、夜々の言った曲の番号を見つけると、それをリモコンに打ち込んだ。
「……これ、どんな曲です？」
「昔のフォークソングだよ」
「ふうん……」

ボタンを押して送信する。
曲はすぐに始まった。
静かなイントロの後、歌い出した夜々の声がマイクを通じ、スピーカーを震わせ始める。
大輝は――思わず夜々の横顔を見た。
「う……」
――上手い。
口元を引きつらせる。
どこが苦手なんだ。下手なフォークシンガーよりよっぽど達者じゃないか。
喉まで出かかった言葉を飲み込んだのは、マイクを握る夜々の顔が、段々と紅潮してゆくのに気付いたからである。
大輝は横顔から目を反らし、背を深くソファにあずけて、画面と歌声に集中した。
落ち着いた曲と、澄んだ歌声。
心地よい音の波に目を閉じかけたその時、不意に歌が止まった。
再び隣を見ると、夜々はマイクを口から離して下を向いていた。
「あれ」
大輝は顔を覗き込む。
「夜々さん？」
「……駄目だ」大輝の腕を強く抱く。「無理だ」
「どっか苦しいんですか？」
「……いや」首を振る。「そうではなく、どうしても……身内以外の前で歌うというのは……やはり」
「そんなに上手いのに」
「上手くなんてないよ」
うつむいたままマイクを差し出す。
大輝は首を傾げる。
「え？　何ですか」
「……続きを」

「いや無理ですよ。俺この歌知らないし」
「頼む」
「たのまれても――」
「じゃあ、音楽を止め……」
マイクを置いてリモコンを取ろうとする夜々。
しかし、不自然な姿勢から不自然な方向に腕を伸ばしたもので、夜々は大輝の膝の上へ倒れこみ、そのまま足下へ崩れ落ちそうになる。
大輝は焦てて抱きとめた。
「ちょっ――」
「あ」
夜々が短く声を上げる。
大輝の手が、薄い胸を鷲掴みにしていた。
暫し時が止まった。
夜々は――大輝の肩に手を置いて、ゆっくりと体を起こした。
「……。すまない」
「いえ」
こちらこそ。
音楽は止まらずに流れ続けていた。
夜々はぽつりと言った。
「出ようか」
「え……あ、はい」
大輝が頷くが早いか、夜々は立ち上がり、最初に自分が座っていた場所へ戻ると、コートを着てバッグを持ち、アヒルの縫いぐるみを小脇にかかえて、何も言わずに部屋を出て行ってしまった。
大輝はリモコンとマイクを片付け、急いでそれに続いた。
体を触ってしまったことで夜々の機嫌を損ねたのかとも思ったが、そういうわけでもなかったらしく、会計を終えた後の夜々は、すっかり元のとおりであった。
「さて。次は買い物にでも行こうか」

言いながら大輝の手を引き、無表情ながら意気揚々とカラオケボックスを出る。

途端、二人は立ち止まった。

というよりは大輝が立ち止まった。

もう、いつの間にか学校も終わる時刻だったのか――隣の席の大野良恵が、店の前を通り過ぎようとしていたところへ、ちょうど鉢合わせてしまったのである。

無論のこと、良恵もこちらに気付いて歩みを止めた。その視線は露骨にも、さも親しげに繋がれた二人の手に注がれた。

「あ……れ？」

そして大輝の顔と夜々の顔を見比べる。

「ええと」

半笑いの良恵は混乱しているようだった。人差し指を泳がせる。

「取り敢えず――二人とも病気じゃなかったの？」

「あ……その……」

大輝の頭が考えたところで、上手い嘘など出てくるわけもない。

夜々が静かに言った。

「大野さん。すまないが、何も聞かないでくれないか」

「え？」

「そして誰にも何も言わないでほしい」

「入神さん……」

良恵は黙って夜々の瞳を見つめていたが、やがて重たく頷いた。

「……うん、そっか。何だか分かんないけど二人はいつの間にかそんな感じなんだね」

「ちょっと待った」

「いいの！　殿山くんは何も言わないでいいの！　入神さん」夜々の肩に手を置く。「あたし二人を応援するよ。顔はつり合ってないけど、何となくお似合いだよ、二人とも」

「そうかい」

「じゃあね」手を離して歩き出す。「また学校でね」

「おう……」
「あたし絶対秘密にするからね！」
手を振りながら力強くそう言い、大野良恵は去っていった。
残された二人。
夜々は感嘆の息をついた。
「勢いのある子だね……」
「女子ってああいうもん――ってのは言いすぎですけど、まあ、中学生ですから。俺もだけど」
大輝は苦笑う。
そして二人はようやく歩き出した。さすがに夜々も手を繋ぐのはあきらめたらしく、お供のアヒルは両腕で抱えられる待遇になった。
それから駅ビルの中にある本屋、ＣＤショップ、アクセサリーショップを立て続けに回り、少々歩きつかれたところで、二人はやはり駅ビル内のカフェテリアに寄って、ホットドッグと飲み物を買った。
しかし軽食を取るにしても、主婦や子供が右を左を行き来する店内では何となく落ち着かず、どちらが言い出すともなく、屋上で食べることになった。
やはり夕方過ぎで、しかも季節が季節であるだけに空気はそれなりに冷えていたが、ここ最近にしては暖かいほうである。
二人は屋上隅のベンチに並んで腰掛け、同時に息をついた。
昔はよくヒーローショーなどを催していたこの屋上だが、最近ではそうしたこともあまり無く、今日も子供の姿一つ見えず、ただ中央の時計台だけが、黙々と時を刻んでいた。
大輝はホットドッグの一口目をサイダーで流し込み、横目で夜々を見る。
夜々はまだ食べ物には手をつけず、先ほど買った文庫本を袋から取り出して、開いているところだった。
食べながら訊いてみる。
「……何の本ですか、それ」

「枕中記だよ」
片手で、ぱらら、とめくる。
「昔、中国で書かれた小説さ。ある男の枕元に仙人があらわれ、男の望む全てを叶えるんだ。何不自由ない生活――富と女と栄誉に満ち足りた人生を一方的に与えてくれる」
本を閉じる。
「男はその人生の中で全てを手に入れ、そして完全な満足を迎えて天寿を全うする。しかし、そこで男は目を覚ます」
「目を覚ます？」
「全ては一夜の夢だったのさ。男は寝床にいて、枕元にはやはり仙人が立っている」
「はあ……」
「夢の中とはいえ、一度全てを手に入れる経験をした男は、それからの人生を無欲に、勤勉に過ごしたという話だよ」
「へえ……」
「興味が無さそうな顔だね」
「そういうわけじゃないですけど」
パンから飛び出したソーセージをかじる。
「内容を知ってるなら、どうして買ったのかなと思って」
「読んだことがないからだよ」
夜々は本をしまってホットドッグの包みを開ける。
「どこかで内容は知ったが、ちゃんと読んだことはないからだ」
「なるほど」
「それにしても、もう夕刻も過ぎてしまったな」
暮れた空を見上げ、目を細める。
「今日は……無理矢理つき合わせて悪かったね」
「そんな今さら――」
大輝は笑い、サイダーのストローに口を付けてから問う。
「でも、どうしていきなり遊びに来ようなんて言い出したんです？　もうそろそろ教えてくれてもいいですよね」

「うん……」
夜々は両手でホットドッグを持ったまま、口を付けようとしない。
「そうだね……」
下を向く。
大輝は首を傾げる。
鴉が鳴いた。
風が吹き――夜々はぽつりと呟いた。
「私は君のために生きてきた」
「え……？」
「君のためというよりは入神家の未来のためか。知っての通り、私の体は成長抑制を施され、元々あった女性器の他に、粗末ながら男性器も持っている。目的のための肉体だ」
また暗くなった空を見上げる。
「それに疑問を持ったことはないし、今だって疑問など持っていない。望まれて生まれた命なのだから、その望みに沿って生きることが当然だと思っている」
「そんな……」
「大輝くん。私と周りの者の名誉のためにも言っておくが、私の人生はさして不幸ではなかったんだよ」
月の隣を流れ行く雲。
「母様も本家の者たちも、私のことをとても大事にしてくれたし……それに私は、いつか来る出会いという、ささやかな楽しみも持っていた。君との出会いのことだ」
大輝を見る。
「私は意図的に世間知らずに育てられたが、そうして育った以上、それなりの喜びを見つけられるもので……他人の目からは滑稽に見えるかも知れないけれど、いつか現れるかもしれない伴侶のことを心待ちにしていたんだ。どのような相手だろうか。優しい人だろうか。男だろうか。女だろうか。私を愛してくれるだろうか。……そんなことを静かに、ずっと長い間考え、思い描いて生きてきた。そ

れは私の楽しみだった。本当に――人から見れば、ずいぶん惨めで滑稽なのだろうけど」

冷めてゆくホットドッグを手に、苦く笑う。

「そして君が私の前に現れた。まだ幼い頃の君がね」

「えっ――？」

「実は君や淋さんとは、以前に会ったことがあって……あれは真夏の浜辺だった。私は本家から外出の許可を得て、行楽地の海を一人で見に行ったんだ。理由は忘れたが、どうしても海が見たくなってね。もしかしたら君との出会いを予感していたのかもしれない」

靴のかかとで軽く地面を叩く。

「君は赤い海水パンツをはいていて、淋さんはパラソルの下で君の姿を見守っていた。礼司くんは宿で寝ていたらしく、その場にはいなかった。私は神気を隠していたが、淋さんにしてみれば丸分かりだったようだ。すぐに声をかけられた」

懐かしそうに語る夜々の声は、いつもとは別人のようだった。

大輝は黙って話に聞き入った。

夜々は続けた。

「私が淋さんと話していると、気になったらしく、君がこちらへ駆け寄ってきた。そして私の顔を見上げて、挨拶をした。可愛かったよ」

思い出したらしく、くすりと笑う。

「それから私に、遊んであげるからこっちへ来いと言うんだ」

「げ……俺って……」

大輝は顔を赤くした。

「すみません……そんなこと」

肩を縮めて謝る大輝の横顔を見て、夜々はくすくすと笑った。

それは大人の笑顔だった。

ますます大輝は体を縮めた。

続ける夜々の面持ちは穏やかだった。

「それから二人で砂山を作って遊んだね。全く覚えていないかい」

「はあ……すみません」
「そうか。まあ、ずいぶん小さかったからね」
少し残念そうに夜々は頷く。
「一緒に歌も歌ったのだけれど」
「歌……？」大輝は首を傾げる。「パフですか？」
「違うよ」
夜々は笑い、そして小さく、柔らかな声で口ずさんだ。
「海は広いな、大きいな――」
「ああ。月は……上る……し……？」
大輝はつい続けて歌いながら、はっとした。
「あ――」
君の名前は？
たいき。おかあさんはそそぎ。おとうさんはれいじ。
そうか、ご両親の名前までよく言えたね。
おねえちゃんは？
私かい？　私は――
「夜々……」
私は夜々だよ。
よよ？　へんななまえ。
そうだね。変な名前だね。
大輝は思わず夜々の顔を見つめた。
「あの時のお姉ちゃん――？」
「思い出したのかい？」
目を丸くする夜々。
大輝はしばらく硬直し――そして笑った。
「……、は」
笑ってしまった。
「ははっ……」
なぜ笑っているのだろう。
「ははは……。なんだよ……そっか……はは」

なぜ目頭が熱くなるのだろう。
夜々は感心した顔で言う。
「思い出してくれるとは思わなかった。よく覚えていたね、あんな小さい頃に、たった一度会ったきりなのに」
「いや……だって」
大輝はおかしさに手を痺れさせ、サイダーの紙コップを落としそうになる。
だって、あなたが原因だったなんて。
小学校の高学年に上がるころ、友達や女の子に「初恋はいつだった？」と聞かれて答えるたびに、早熟すぎると笑われた——その原因が、まさかあなただったなんて。
穏やかな人だったということ以外、何も思い出せず。ただ一緒に遊んだという思い出だけが……それすら、もう忘れてしまうほど時が経ってしまった今となって。
大輝は目じりを拳でぬぐい、それから大きく溜息をついた。
「はあ……。また会えてたなんて……全然気付かなかったなあ」
「私の見た目はほとんど変わっていないのにね」
「ほんとですよね……」
自分に呆れてしまう。
夜々はどこか満足そうな顔でホットドッグに目を落とし、そしてやっと一口目を食べた。
大輝は両足を投げ出し、さっき夜々がしていたように空を見上げる。
暗い空の中を雲が流れてゆく。
無言の時はとても長く、夜々が次に口を開いたのは、時計台の刻む時が六時をまわった時だった。
「——そうだ。そして——君に出会った時、帰り際に、淋さんは私に言ったんだ」
「……母さんが？」
「これから先、麒麟の血を継ぐ君の存在が見神の知るところとなり、

今度は役目を果たすために、私が君の前に現れるようなことがあっても……決して無理強いはするなと」

サイダーを傍らに置く。

「それが例え定められた婚姻であれ、互いの思いが本物ならば、そこにはちゃんと本当の幸せが生まれる。だから結ばれるならば、君が私を愛してくれるように――そして私自身も君のことを愛し、望んで共にあるように努めろと……それが彼女と私の間に交わされた約束だった」

顔を上げ、大輝の目を見る。

「私の望みも同じだ。私は君と本当の恋がしたかった。そして君の伴侶となりたかった」

「夜々さん……」

「そうすれば、ようやく私の空虚な人生に意味が生まれる」

「……え？」

「君といつか愛し合うことが出来れば、私はようやく意味のある存在になる。そうでなければ――」

「ちょ」

大輝は食べ終えたホットドッグの包み紙を握りしめる。

「ちょっと待ってくださいよ、何てこと言ってるんですか」

「……ん？」

きょとんとした夜々の顔。

大輝は思わず引きつった笑みを浮かべた。

「落ち着いた後で何を言い出すかと思ったら……なんで結局そういう淋しい話になっちゃうんですか？」

「怒らせたかね」

「じゃなくて」

大輝は頭を振る。

「そりゃ……お互いの気持ちが大切ってのは、その通りですよ。夜々さんが俺と会うのを楽しみにしてくれてたのも嬉しいですよ。でも……俺と結婚しなかったら、夜々さんは無意味な人なんですか？」

「私と結ばれるのは、やはり君にとって不満だということか」
「違……やはりって……ああもう」袋を持った手で頭をかきむしる。
「そうじゃなくて、それはおかしいってことですよ。だって……俺たち、うちでよく一緒にメシ食ってますよね？　鍋とかしゃぶしゃぶとか」
「いただいているが――」
「どうして親父や俺がいちいち呼んでると思います？　夜々さんよく分かってないでしょ？　それって何となくなんですよ。何となく、夜々さんたちがいたほうが良いからなんですよ。分かります？」
「いや……」
「夜々さんはアレじゃないですか」声が大きくなる。「結局、役目を果たせなければ自分に価値が無いって思い込んだままじゃないですか。母さんの言葉とかで役目の内容が変わっても、結局それじゃ淋しいことに変わりないじゃないですか。そんなんじゃ、何がどうなっても、結局夜々さんっていう人に価値なんて――夜々さんじゃなくてもいいってことになっちゃいますよ。価値ってそういうもんじゃないでしょう？　代わりなんて――」
そんな当たり前のことを。
「夜々さんが役目なんて持ってなくても、最初から、夜々さんの代わりなんて……いないのに」
どうしてこの人は分からないのだろう。
夜々は当惑の面持ちで大輝の顔を見つめている。
我に返り、大輝は目をそらして俯いた。
「あ……すみません」
落ちた包み紙が、かさかさと地を転がる。
「何熱くなってんですかね、俺。ガキのくせして、夜々さん相手に説教みたいなこと言って……。っていうか、あの……本当に、夜々さんと結婚するのが嫌だとか、そういう話じゃないんですよ。だからその……ホントすみません」
「いや――」

夜々は首を横に振る。
「ありがとう」
それから、静かに問うた。
「私の人生には最初から価値があったと……君は言ってくれるわけか」
「……。と――思います。単なるガキの意見としては。少なくとも俺にとっては、もう夜々さんは大事な人の一人ですから。小梅さんとか石之助さんにとっても、そうに決まってます」
「そうか……」
夜々はもう一度言った。
「ありがとう」
そして下を向く。
その顔を覗き見ると、夜々は微かに笑っていた。
「……。良かった」
「え？」
「ずっと待っていた相手が君でよかった。もうひと月――いや、あと一週間でも時間があれば、私にも恋の意味が分かったかもしれない。もしかして、そんなことを思っている時点で、既に理解しかけているのかもしれないけれどね」
大輝の手を握る。
「今日は楽しかった。君は迷惑だっただろうが、私はとても楽しかったよ。君との恋愛は経験できなかったが、デートの真似事が出来ただけで、私は満足することにしよう。最後の最後に、思いがけない優しい言葉と、不思議な気持ちも貰うことができたしね。今日一日は私の宝物になった」
「夜々さん……？　何言って」
「時が来たようだ」
手を離し、夜々は立ち上がる。
「母様には会えなかったな」
「え――？」

大輝は夜々の視線の先を見る。
誰もいなかったはずの時計台の前に、いつの間にか――本当にいつの間にか、黒いコートの男が立っていた。
金髪の男。
「まさか……」
心臓がどくりと鳴る。
「宮……琵？　あいつが？」
大輝も腰を浮かせる。
コートの男はゆっくりと片手を上げた。
夜々は低い声で言った。
「……逃げるんだ」
「えっ――」
「逃げるんだ、できるだけ遠くへ！」
吼えるように叫び、大輝を恐ろしい力で押し退ける。
驚く間も無く大輝はふっ飛ばされ、遠いフェンスの近くまで転がった。
「つっ――」
頭をおさえて立ち上がった瞬間。
閃光と雷鳴が轟いた。
爆風が体に叩きつけられ、眼前が真っ白に染まる。
大輝は目を塞いで身を縮め――
そして目を開けたとき、
「あ……？」
無かった。
さっきまで座っていたベンチが消えていた。
折れ曲がって倒れたパイプの骨組みと、火のついた木片がいくつかあるだけだった。
ころころと、アヒルの縫いぐるみが転がってくる。
それも燃えていた。
夜々がいない。

「夜々さん……？」
大輝は間抜けにもその名を呼んだ。
たった今――この世から消えてしまった者の名を。
「夜々さん」
「今死んだぞ」宮琵が歩いてくる。「俺が消滅させた。再生は不可能だ」
「え……」
「残念だったな」
座り込んだ大輝の前で立ち止まる。
大輝は呆然とその顔を見上げた。
「死んだ……？」
「見ろ」
宮琵は飛び散ったベンチの残骸を指す。
大輝はそれを見た。
破片に混じって落ちている、小さな指。
宮琵は言った。
「それがただ一つの残り物だ。持って帰るか？」
「夜々さん……」
「ふ」
可笑しそうに肩を揺らす。
「おいおい、なんて顔をしている？　まるで玩具を捨てられた犬のようだぞ」
大輝の頭に手をのせる。
「もう死んでしまったんだ。あきらめなさい」
「死んだ――」
「最初から俺はあいつだけを狙ったというのに、わざわざお前のことを突き飛ばすとは、ご苦労な死に様だよ。……それにしても哀れな人生だったな」
そっと手を離して残骸を眺める。
「道具のように作られ、箱庭のような場所で育ち、まま事のような

恋人ごっこを最後の思い出にして、この世から消えてしまった。両性具有でありながら、男とも女とも交わることが無いまま……ああ、そうか」宮琵は舌打ちする。「一度犯してみてから殺せばよかったか。惜しいことをしたな……あんな体は珍しかったのだが」

それから大輝の顔を覗き込む。

「何だ、依然として茫然自失か」

ふんと笑い、足下を蹴る。

宮琵は空中に浮かび上がった。

「つまらないな。いささか淡白にやりすぎたようだから、次はもっと趣向を凝らすとしよう」あごに手をやる。「さて、どうしてくれようか……？」

呟きながら宮琵は消えてゆく。

呆気なく、何の余韻も残すことなく、襲撃者は姿を消した。

穏やかな夜風が、誰もいなくなった屋上を薙いだ。

大輝はゆっくりと立ち上がった。

「――、夜々さん」

辺りを見回し、何らかの手段で雷撃から逃れたはずの夜々を探す。危ないところだったと言いながら、どこかから姿をあらわしてくれるはずの夜々を探す。

「どこですか」

どこだろう。見当たらない。

一体どこに。

宮琵はもう去っていったのに、どうしてまだ出てきてくれないのだ。

爪先にあたる物があった。

見下ろしてみると、それはさっき転がってきた縫いぐるみだった。

ぱちぱちと静かに燃えている。

「あ……」

大輝の耳に、聞いたばかりの声が蘇る。

――今日は楽しかった。

君は迷惑だっただろうが、私はとても楽しかったよ――。

大輝は一人で首を振りながら、両膝をつく。
「……迷惑なんかじゃ」
死んでしまった。
「どうして……」地面に問う。「どうして……夜々さ……こんな……」
その行為の無意味さを自覚させてくれたのは、十秒程度の単純な時間経過だった。
冷たいコンクリートを指で掻き毟り、大輝は絶叫した。
叫びは声にならず、涙すら流れなかった。
夜の空気が急激に冷えてゆく。
時計台の示す時刻は、十一月×日、午後六時九分。
それが地獄の始まった時だった。

第十一章【無題――Ｓｕｂｊｅｃｔ　Ｕｎｋｎｏｗｎ――】Ｓｃｅｎｅ　１

一

大輝が夜々に連れ出されてから、もう大分長い時間が過ぎている。
既に夕刻を回り、ガラス戸から見える庭の景色も、段々と暗くなり始めていた。
礼司が自室へ、石之助が小梅の部屋へ上がっていった今、シロは一人で居間のソファに腰を下ろし、ただ黙したまま大輝と夜々のことを案じていた。
夜々が何を考えているかなど、シロには皆目分からなかったが、少なくとも、あの二人が宮琵に襲われれば危険だということくらいは分かる。
しかし、この家の者たちを放っておいて後を追うことなど出来るはずもないし、第一、シロがついていたところで、現実問題、宮琵に敵うとも思えない。だから結局は案じても仕方がないことなのだろうが、そんな理屈がシロの心配を落ち着かせるはずも無かった。
こつり、こつりと鳴る時計。
シロはガラス戸の外を見つめ、ぽつりと呟く。
「一体全体、何をしておるのじゃ……」
冷めた湯飲みをテーブルに置き、文字盤を見る。
時間はゆっくりと進み続けていた。
そして視線を正面を戻すと、
「――。な――？」
「待ちくたびれた様子だな」

宮琵が忽然と正面に座っていた。
シロは立ち上がって炎を繰り出そうとしたが、それはかなわなかった。
縄で締め付けられたように体が動かず、妖力が全身の毛穴から抜けてゆく。これは――
「ぐ……」
口から血が漏れる。
石落に仕掛けられた術であった。たちどころに、気を失いそうな痛みに体が支配されてゆく。
宮琵は脚を組み笑った。
「なるほど――本当によく効くんだな、その術は。これならば確かに、お前という大妖を玩具にし続けることも容易かったろう」
舐めるようにシロの顔を鑑賞する。
「さっきこの家に結界を張らせてもらった。ある妖怪から取り込んだ力なんだが、なかなか面白い結界でな。中にいる妖怪の力を奪うだけではなく、この家が壊れようが、どんな音を立てようが、俺が死ぬか結界を解除するまで、外の人間が気づくことはない。だから何でもやりたい放題ということだ」
ゆったりと部屋を見回してから、再びシロと目を合わせる。
「だがその前に、少しお前と話がしたい」
「……畜生めが」
「そう睨むな」
宮琵が、ぱちん、と指を鳴らす。
シロの頬が裂けた。
真っ白な肌の上を、深紅の血が流れてゆく。
宮琵は足を組みなおした。
「この間、お前たちに教えたことに嘘はない。俺について詮索するのは結構な暇つぶしになったろう？　あの入神夜々は頭が良いようだったし、俺が石落の孫であることはすぐに分かっただろうとして――妖怪を食ってその力と能力を吸収することや、入神家の神血を

持っていることも分かったか？」
「……だったらどうした」
「そちらが頭を使ってくれた分だけ、長い説明をする手間が省けるというだけのことだ。それにしても、お前はどう思う」
「何が、じゃ……」
シロが咳き込み、細かな血しぶきが散った。
宮琵はそれを眺めてから涼しげに言う。
「俺という男についてだ」
ソファに背をもたれ、困ったように眉をひそめてみせた。
「下らない話だとは思わないか？　石落は安っぽい目的のために次々と半妖を作り出し、その一人だった火高は、わざわざ石落を殺し、用の無くなった兄弟たちを食らってまで、同じ目的を受け継いだ。そしてご丁寧に入神家の女を騙して俺を産ませ――女は産後に死んでしまったが、俺の物心がつくと、すぐに石字縛師の術を教え込み、部下として育て上げた。石落が火高自身にしたのと同じように」手のひらを見る。「もちろん、自分が石落を殺してその力を食ったことなど、火高は俺に教えなかったよ。俺がそれを知ったのは、火高を食った時だ。力と共に記憶も手に入るものでな」
語りながら軽く手を握る。
「あれを殺すのは存外に簡単だった。当然火高は俺に与える力――食わせる妖怪の数や質を制限していたが、俺が見神の先祖返りだということには気付いていなかったからな。恐らくは紅猫鬼の血に入神の血が混じり、変異でも起こしたんだろう」
「貴様は……何故に父親を食らった？　その力を手に入れたのは、何を……」
「食ったのはついでだ」顔を上げる「俺にとって重要だったのは、火高を殺してしまうことだった」
「……どうした意味じゃ」
「この世に生きていながら、火高という男の一部に過ぎない自分に、不意に嫌気が差したのさ。火高の目的のために生み出され、火高の

ために異形どもを探しては届ける。いつまでも、どんなことでも、火高のために行い続ける。それで独立した生き物といえるか？　俺はただ、俺の意思で、俺の目的のために行動してみたくなっただけだ。――こうして語ってみれば短い話になってしまうな。一応、小さなきっかけもあるにはあったんだが」

「貴様の……貴様自信の目的とは、何じゃ」

「俺の目的？」

「答えよ」

シロは青ざめた顔をしかめ、宮琵を睨む。

「何故に小梅らを襲い、石楠花の血を揺り起こした……？　火高とやらの手を離れ、そして貴様が成そうとしておることの正体は、いったい何じゃ」

「そうだな――」

宮琵は、ふむ、と腕を組む。

「それを説明するのが一番難しい。しかし、お前にならば分かるかも知れない」

濁った視線でシロの目を見据える。

「お前は今、幸福か？」

「……」

シロは睨んだままで答えない。

宮琵は苦笑いして続ける。

「さぞ幸せだろう。眠り石が破壊され、あの少年と出会い、恋を覚え、家族にも愛され、友人も出来た。お前は今、封印される前には想像もしなかった幸福の中にいるはずだ」

「貴様は……封が解けてからずっと、しろのことを見ておったのか？」

「そもそも眠り石に雷を落としたのは俺だからな」

「何――？」

「俺には分かるんだよ、任氏。伝承の中に残されている、封印される前にお前が行っていた所業の理由がな。お前は自覚もしなかった

だろうし、もう自覚する必要も無くなったのだろうが」瞬く。「親の前で赤子を食ってみせた。男に女房の死体を抱かせた。子供たちを脅して相撲をとらせ、負けた順に殺した……。全て、お前の中にあった、ある感情がさせたことだ。ただ食いたいのなら、そんな悪戯をする必要は無かったはずだろう」

「何が言いたい……？」

「今のこの世界は、お前が羨望し、また切望していた世界だということだ。この小さな家の中が、お前が長く潜在させていた望みの具現だということだよ」

ゆっくりと部屋を見回し、部屋の隅に積まれたドッグフードの缶に目をとめる。

「お前は望まれるようになった。結局のところ、それだけが、俺の戯れの結果だった」

そしてシロを静かに睨んだ。

「こんなものを与えてやるはずじゃなかった」

「しろを――また一人にするためか……そのために……？」

「馬鹿馬鹿しい」宮琵は吐き捨てる。「それでは単なる戯れのリセットに過ぎない。俺の目的は、俺という存在もろとも、全てをゼロに帰すことだ。そのために麒麟の子を現世で揺り起こす」

「大輝を……？」

「おや」

宮琵の視線がシロの肩を通りぬける。

シロは首を半ばまで振り向かせ、後ろを見た。

ドアが開き、礼司が入ってくるところだった。

「あ――」

シロは目を見開く。

礼司は入るなり初対面の男に気づき、身構えた。

「何だ君は……？　いや、君が、まさか」

「逃げ――」

シロが言い終わらぬうちに。

宮琵が風のようにシロの頭上を飛び越えた。
次の瞬間、シロの眼に映ったのは、長く伸びた宮琵の爪が礼司の首をえぐる、実に淡白な光景だった。
礼司は踊るようにくるりと一回転し、そのまま床に崩れ落ちた。
そして痙攣する。
うつ伏せた礼司の首を中心に、赤黒い水溜りがどくどくと広がってゆく。
シロは、「あ……」と間抜けな声を上げるしかなかった。
宮琵は指を振るって血液を散らし、シロの顔を見てにやりと笑う。
「守れなかったな」
わずかな返り血が額を流れる。
礼司の痙攣は段々と小さくなり、そして、完全に動かなくなった。
死体を見下ろして宮琵は呟いた。
「これが麟と契った男か。まあ、ただの人間ならばこの程度だろう」
そして廊下へと出て行こうとする。
シロは全身の痛みに気を失いそうになりながら、ソファから立ち上がり、それを呼び止める。
「待……て……っ」
「ほう、よく立ったな？」
「殺してやる……貴様……」
「だがしばらくは寝ていてもらおうか」
指を鳴らす。
脳髄に電流がはしり、シロの意識は闇に落ちた。

二

コンコン、とノックの音がしても、石楠花はベッドの中で丸まったまま動かなかった。
ドアは勝手に開いた。
「邪魔するぞ」

どこかで聞いた声がした。
石楠花は、がばりと起き上がる。
「あ……？」
コートを羽織った金髪の男と目が合った。
この顔は。そうだ――この男だ。
「あんた……」
「覚えていたか、紅猫鬼の先祖返り」
男は笑んだ。
「そろそろ遊びは終わりだ。今日はお前のことを殺しに来た」
「な――」
「大人しくしていればすぐに済むぞ」
一歩近づく。
石楠花は悲鳴を上げようと唇を開いたが、その刹那には口を塞がれていた。宮琵の動作は、石楠花の動体視力では、瞬間移動したようにしか見えなかった。
「う……」
「大人しくしていろと言っただろう」
「……っ！」
石楠花は目を見開き、宮琵の腕を掴む。
しかし、抵抗空しくベッドに押し倒された。
馬乗りになった宮琵は、石楠花の口から手を離す。
それでも――石楠花は悲鳴を上げられなかった。
声が出ない。
宮琵はにやりと笑った。
「言葉を奪わせてもらった」
「……っ、っ」
石楠花は宮琵の下で体をくねらせ、ただ口をぱくぱくとさせる。
面白そうに宮琵はその顔を眺めて、それから石楠花の胸をパジャマの上から鷲掴みにし、乱暴に揉み始める。
「なるほど……今日びの娘はよく育っている。食ってしまう前に、

遠い親戚の味見でもしてみるかな」
指先が胸に食い込む。
「こういう陰険な趣向を見せるのもいいだろう」
「――っ！」
石楠花は腕をばたつかせた。
その爪が宮琵の手の甲を引っかく。
「ち」
ほとんど反射的に宮琵の腕が振るわれ、石楠花の頬に固い拳が叩きつけられる。
石楠花の頭と視界が揺れた。
宮琵は薄い傷口を舐めて、それから石楠花の目を見据えた。
深く暗い瞳だった。
「……。もういい」
そして、宮琵の手が変じるのを石楠花は見た。
黒い毛に覆われた異形の手。
その指先が揃えられ、石楠花の胸部に没入する。それはまるでスローモーションだった。
ぼきぼきとあばら骨の折れる音、筋肉の切れる音、そして心臓の潰れる音が――
石楠花の聞いた、最期の音になった。

三

ドアが突然に開き、孫娘の無残な死骸が放り込まれただけで、老人が我を失うには十分だった。
小梅が足を伸ばして座っているベッドに寄りかかり、床に胡坐をかいたまま、石之助は、呆然と眼前の骸を見下ろしていた。
「……石楠花？」
「ああそうだ」
宮琵はもはや石楠花の骸には一瞥もくれず、石之助に手をかざす。

それだけで石之助は浮き上がり、宮琵が腕を横に振ると、そのまま本棚に叩きつけられた。
「くあ……っ！」
うめきながら床に落ちる。
宮琵は小梅に視線を向けた。
「起きていたようだな」
「お前――っ」
小梅はベッドから跳ね上がり、空中で両腕を振りかぶったが、宮琵の目から放たれた緑光の波に吹き飛ばされ、天井の隅に激突して落下した。
「きゃあっ！」
「手、前ッ――」
「動くんじゃない！」
宮琵は苛ついた怒声とともに、立ち上がりかけた石之助に片手で術を放つ。
それは三本の、赤い光の杭だった。
石之助の右肩に、脇腹に、左足に、杭は同時に突き刺さり、部屋の隅へと縫い止める。
「――っ！　ぐ、あ、ああ――ッ！」
石之助の悲鳴に構わず、刺さった杭は爛々と光を放っている。
宮琵は小梅に歩み寄り、髪を掴んで体を高々と持ち上げる。
「どうだ、抵抗できるか？」
「う……」
「何も出来まい。ここは俺の結界の中だし、今の光は妖怪の体の動きを奪う。お前など、ただの弱った小娘に過ぎんさ」
にやりと笑みを戻す。
石之助は食いしばった歯の奥から、くぐもった声を絞り出す。
「手前――何、を」
「冥土の土産に面白いショーを見せてやる。孫娘でやっても良かったかも知れないが」

小梅を片手で持ち上げたまま、石之助に顔を向ける。
「火高の代で調べはついていたんだ。この、山ノ蛾の娘を保護したのはお前だそうだな？　ご丁寧に実家へ連れ帰り、入神へ入家する手引きまでしたとか」口元を吊り上げる。「そうとう大切なのだろう」
「手前……その手を……」
「確かにこれはいい女だ」
空いた手を小梅の寝間着の襟にかけ、そのまま勢いよく引き下ろす。
ボタンが次々に弾け飛び、包帯を巻いた胸があらわになった。
「や――っ」
「ふは。おい、この顔を見ろ。お前に見られて恥ずかしいらしい。ますます面白いじゃないか」
笑いながら、指先で小梅の腹をくすぐるように触り、そしてその指をへそに這わせる。
小梅はその腕を掴んで身をよじる。
「や……めて……っ！」
「心配するな、十分に満足させてから殺してやるさ。そこの老いぼれがちゃんと喜べるよう、お前もせいぜい声を上げてみせろ。艶っぽく、哀れっぽくだ」
宮琵は小梅をベッドに投げ捨てる。
石之助は叫んだ。
「宮――琵――ッ！」
「大人しく見物しているがいい」
宮琵は石之助を横目で見つつ、悲鳴を上げる小梅の上に圧し掛かった。
石楠花の骸が血の匂いを放つ部屋の中、石之助の叫びと小梅の悲鳴、そして宮琵の笑い声が交じり合い、やがて――小さなベッドがぎしぎしと軋みはじめた。

四

バスにも乗れず、ひとり歩いて家に帰る途中、何を考えていたかはよく覚えていない。

もしかしたら何かを呟いていたかも知れないし、涙を流していたかもしれない。

ただ、耳に残った夜々の歌声だけを、反芻していたかもしれない。

鴉がやけに鳴いている気がした。

大輝が家に着いたのはすっかり暗くなってからだった。

皆にどう言おうか――それすら考えもせず、大輝は玄関の鍵を開け、ノブを回した。

ドアをゆっくりと引き開けると、階段の下に腰掛け、黙って下を向いたシロの姿が目に入った。

「……？　シロさん」

靴を履いたまま玄関から上がり、廊下を歩いて、その肩に手を置いて揺する。

「シロさん――」

もう一度揺する。

シロはようやく顔を上げた。目が赤く腫れている。

「大輝……」

「……どうしたんですか」

「う――」

シロの目から涙が溢れる。よく見れば口元には乾いた血がこびり付いていた。

再び下を向いて膝を抱えたシロを見下ろし、大輝は立ち尽くした。

……。

他の皆は？

父は。

石之助は。

小梅は。

石楠花は。

大輝は居間の中を覗き見る。
誰もいない。
二階だろうか。
階段に足をかけた大輝の袖を、シロの手がつかんだ。
「……駄目じゃ」
「え――？」
「行ってはならぬ」シロは顔を上げない。「行っては……見てはならぬ」
「シロさん……何言って」
大輝は笑う。
「何言って……だって、それ、どういう……」
大輝はただ笑う。
シロの手が、大輝の腕を思い切り引いた。
大輝はバランスを崩して倒れこむ。
シロの胸に抱きしめられていた。
「……。ちょっと……シロさん？」
「どこか、どこかへ、行こう」シロの声は狂ったように震えていた。
「どこかへ逃げよう。遠く……宮琵の手の届かぬところまで……二人でどこか、遠いところへ……どこか、誰も知らぬ、遠くの地へ……」
がくがくとシロの体が揺れている。
大輝は黙っていた。ただ、シロの胸の中で、静かに思考を止めた。
どうやら皆、死んでしまったらしい。
それだけが分かった。

第十一章【無題――Ｓｕｂｊｅｃｔ　Ｕｎｋｎｏｗｎ――】Ｓｃｅｎｅ　２

それから後のことも、よく覚えていない。
ただシロに導かれるまま家を後にし、赤子のように抱きかかえられ、夜の空を飛んだ。
シロはあまり速くは飛ばず、夜風をゆっくりと切り分けるように、あても無く、ただ真っ直ぐに遠くを目指した。
互いに何も言わなかった。
大輝はその間、眠りもせず目覚めもせず、ずっと黙って目を閉じていたが、どういうわけか一度だけ瞼を開けた。
ちょうど黄色の満月が見えた。
平面的に空と一体化しているものだとばかり思っていた月が、その時はたまたま雲が無かったせいか、やけに球体然とした形で目に映り、大輝は暫し目を奪われた。
なるほど――やはりあれは球いのだ。
現実から乖離した思考は、静かに月へと届いた。
このまま上へ行けばいつか触ることが出来てしまう。あれは本当に、確かな物体としてあそこにあるらしい。その向こうの星も、小さく瞬くあの星も、全ては本当に浮かんでいる。
無い物など無い。
海中を漂う魚のように、繋がらぬようで交わりあい、一体となり、
そして――。
大輝はまた目を閉じた。

Ｓｃｅｎｅ　２

一

ぬめった風が森を薙ぎ、ざわざわと夜が鳴いた。
大輝は湿ったような大木に背をあずけ、隣のシロには肩をあずけて、揺らめく焚き火の熱をひりひりと頬に受けながら、自らの両膝を抱き寄せた。
焚き火の向こうには、小さな泉があった。
風に撫ぜられて薄く波打つ水面の上で、月が崩れて、また直る。
ここはどこか森の奥、人里離れた闇の中であった。
どれほどの間、ただ座り続けていただろうか。気付けば月のいる場所が変わっている。
それに気付きながら、大輝は静かに、空虚に呟いた。
「……なんで」
唇を動かすのは久しぶりだった。
「どうしてこんなに、いきなり――」
ぱちり、と焚き火が音を立てる。どこかで鳥が飛び去った。

大輝は頭をかく。
「変な感じが……してますよ。なんか。普通、夢って――悪い夢って、疑うと自覚できるじゃないですか」
何を喋っているのか、何を喋りたいのかが、分からない。もうすぐ気が狂ってしまうのかもしれないし、もう狂っているのかもしれない。
「ずっと前、ちっちゃい頃……家が燃えちゃう夢見たんです。そのときは目が覚めたんです。ひどすぎるから……こんなの夢じゃないか？　って……そう思った瞬間に自覚できて。あ、何だ、やっぱり夢じゃん、みたいな。じゃあ早く起きなきゃ――って、それで目を開けたら……やっぱり、布団の中にいたんですけど」
頭をかきむしる。
「でも、今日は全然目が覚めないんですよ。夢じゃないことが分かるんです。どうやっても、これ、夢じゃないんですよ」
「大輝」
シロの手が、大輝の頭を抱き寄せる。
「すまぬ――本当に――」
「……。みんな……死んじゃったんですか？」
今さら分かりきったことを訊いてしまう。
シロは答えない。
答えられるはずがないのだろう。
その場にいながら、むざむざ皆を殺された――シロはきっと、自分のせいだと思っている。
だから大輝も、「――すみません」と、小さく謝った。
「シロさんのせいじゃないですから……そんなこと思ってないですから」
皮肉な話だ。
きっと、心がぼんやりと麻痺しているから、かえって冷静にこんなことを言えている。半狂乱ならばシロを理不尽に責めていたに違いない。

紙一重で自我を狂わせずに保っているものは、多分、今この瞬間、シロの体から伝わっている温かみなのだろう。
シロは生きている。
夜々が、父が、石楠花が、石之助が、小梅が死んだ。
だが、シロだけはこうして生きている。少なくとも今、ここにいる。
もうこの人しかいない。
だから——だから？
「……俺が」
いや。やはりもう、それだけなのだ。
「俺が守ります」
大輝は俯いたままシロの手を握った。
「これ以上、何があっても……シロさんだけは俺が……絶対に守ります」
それが出来なければ俺は。
しん、と空気が鳴いた。
シロは——
「ふ」
小さく笑った。
「……嘘つきじゃな」
「え」
大輝は顔を上げる。
横を向くと、シロと目が合った。
シロは確かに笑っていた。
「結局のところ、大輝は何も守れはせなんだ。それどころかまだ分かっておらぬ。全てが……おぬしのせいで起きたということすら」
「え……？」
何だ？
いったい何を言っているのだ。
シロは大輝の手をほどき、ゆらりと立ち上がって月を見上げた。
「昔話を語ろうか……。そう——始まりは、しろがまだ、石落の囲

い女であった頃のことよ」
薄笑いを浮かべたままシロは語り始める。
「石落の手下として働いておった火高も、しろのことを知っておった。顔を見たのは幾度かに過ぎず、石落から何事か教えられたわけでもないが、火高は、食った相手が生きている間に覚えたことまで、丸のまま取り込む力を持っておったからな。石落を食えば、自然、しろについても知ることになる。言うまでもなく、息子の宮琵も同じように、火高を食らってしろのことを知った。そして宮琵は――しろという化け物に興味を持った。もっとも、それは僅かな興味じゃったが」
シロは泉に目を落とす。泉には、やはり、そこに映った月がある。
「……眠り石に雷を落としたのは、他ならぬ宮琵じゃ」
「――？　宮琵――が――？」
瞬く。「それも僅かな、曖昧なる思いに動かされてしたことよ。何か……」
「それで何かが変わるとでも思うたのじゃ……愚かしくもな。牛車を引くだけのために生まれ、ずっとそのように育てられた牛が、牛飼いを殺して逃げたところで、その先には何も無い。野で育った牛と群れることもかなわず、もはや他の牛車を見つけることも出来ぬ。ただうずくまり、呆然とするだけじゃ。自らが車を引きながら何を求めていたわけでもないことに気づき、唖然とすることしか出来ぬのじゃ。その目に生き生きとした牛の群れが如何に遠く映ることか……他の何者にも想像はつくまい」
くっく、とシロは笑う。
「まっこと滑稽な話じゃ。それで堪らなくなった牛がしたことといえば、手ごろな牛小屋を壊し、他の牛どもを解き放っただけだったのじゃからな。その中に気の合う牛がいるとでも思うたのか……。もしそう見える相手がおったとしても――いや、事実そうした相手だったとしても、それが自分と同じく迷い牛になるとも限らぬというに」
ふう、と息をつく。

「……宮琵は、ずっとしろのことを見ておった。しろが大輝に拾われるところも、段々と愛を覚えてゆくさまも……そして大輝や他の者たちが、しろのことを大事に可愛がってくれる姿もな。それを隠れたところから一人眺める宮琵の心持ちは、とても一言であらわせるようなものではなかった。――羨ましくもあり、恨めしくもあり。何ゆえにしろだけが……あの家のような場所を欲しておったのは宮琵も同じであったのに、そしてその思いを語り合うことも出来たはずじゃのに、何ゆえしろだけが全てを手に入れ、宮琵はただ眺めるばかりなのか……。それに腹が立ち、幾度も幾度も壊そうと思い、しかしその度に躊躇い、また眺める。しろと自らを重ねあわせ、惨めに己の心を慰めつつ――だが、結局は馬鹿馬鹿しくなった」

シロは座り込んだ大輝を見下ろす。

「眺め続けた宮琵に分かったことといえば、やはり己の居場所など、どこにも無いということだけじゃった。ならばもう何も要らぬではないか。いずれこの世が己と相容れぬならば……いっそ何もかも無へと帰し、自分も共に消えてしまえばよい」

シロの周りを、ゆらり、ゆらり、狐火が生まれては舞い始める。

「それが出来るのはお前だけじゃ。石落の奴めが常世の内に作り上げし、あの牢獄を壊し果たした力――あれをこの現世にて発現させれば、絹の糸が解れるが如くに、全ては崩れ、無へと帰る。この下らぬ現世が常世へと還元される」

「シロ……さん……？」

「ああ――全く、お主という男は。ここまで話したというのに、まだその名で呼ぶか」

回る狐火たちの中、シロは呆れたように溜息をついてみせる。

「もう分かっておるのであろうが」

「分かってるって――」

何を。

シロはゆっくりと歩む。

焚き火の脇を通り過ぎ、泉の際へと。

「ここはかつて石落と任氏が戦ったところらしい」
声が――歪んで――変わってゆく。
「綺麗な泉だ。任氏の記憶の内容とほとんど変わっていない。もっとも、たかが数百年……俺とお前が今から壊そうとしている全ての時間に比べれば、瞬く間の幻だな」
狐火が膨らんで回る。
紫色に。
シロの体は一瞬だけその炎に包まれ、それが溶けて消えうせたとき、そこに立っていたのは、黒いコートの男だった。
宮琵は振り返り、月を背に笑い、細い何かを投げ放つ。
「さあ、始めようか」
ひらりと夜風に舞ったそれは、赤いリボンだった。
土の上へ落ちるリボン――大木に背をこすらせて、大輝は立ち上がる。
「……。何だ、これ」
足下が崩れてゆく気がする。
どうして宮琵が立っているのだ?
駄目だ。意識が思考することを拒否している。
宮琵はわずかに肩をすくめてみせた。
「夜々を消滅させたときに言っただろう? 今度は少し趣向を凝らす、と。まあ要するに、任氏だけは生きていると見せかけて、とっくに全滅だったというオチだ。絶望的なバッドエンドだよ」
「何言ってるんだ」
「見せてやろうか?」
宮琵の目から、紫の光が放たれる。
その光は真っ直ぐに、大輝の瞳へと飛び込んだ。
「あ……?」
視界が乱れる。
そして否応無く展開するノイズ混じりのビジョン。
克明な音。これは――無理矢理に注ぎ込まれるこの情報は、宮琵の

記憶の断片か。
「あ……あ」
喉を切り裂かれ、倒れる父。
胸に穴を開けられて絶命する石楠花。
ベッドの上で弄ばれながら体を引き裂かれてゆく小梅。赤黒い血に染まってゆくシーツ。石之助の叫び。
「ああ」
大輝は頭を抱える。
膝が――地面に落ちた。
ビジョンから逃れられない。目を閉じても血の色が、耳を塞いでも生々しい音が流れ込んでくる。石之助の首が切り落とされた。そして。
階段を下り、再び宮琵が居間へと入ってゆく。
「……やめろ」
倒れているシロ。
全員殺してやった。そう告げる宮琵の声。
狂ったように泣き喚くシロの頭を、しゃがんだ宮琵の手が押さえつける。
「やめろよ……」
言い残す言葉はあるか。
宮琵は楽しげに問う。
睨み付けるシロ。
沈黙が。
「やめろ……やめろ……」
シロは――
何か言おうとして――
その前に、鼻に拳を叩き込まれた。
シロは短く呻く。後頭部が床にぶつかり、頭が弾んだ。
続けざまに、笑う宮琵の拳がシロの顔面に振り下ろされる。
楽しげに、手加減無く、何度も、何度も。力なく抵抗する手を丁寧

に押しのけ、馬乗りになり、両拳を使って続けざまに殴る。
「どうだ、見えるか？　面白い映像だろう」
頭の中に流れ込んでくる殴打の音と悲鳴に混じり、遠くで宮琵の声が聞こえる。
「石落が気に入っていた理由も分かるというものだな。どれだけ殴っても死なず、なかなか気を失うこともなく、人間では到底耐えられぬほど長い間、新鮮に反応してくれる、本当に頑丈な玩具だった。もっとも、石落はああして遊びながら体の味も楽しんだのだろうが……俺は使い古したお下がりには興味が無くてな」
――延々と続く殴打で、とうとうシロの反応が鈍くなり始める。
宮琵はやがて手を止めた。
もういいか。
馬乗りのまま、真っ赤に染まった顔を見下ろし、飽きた口調で呟いた。
止めは、心臓への呆気ない一撃だった。
たいき。
シロの唇が、それだけ紡いで止まった。
ビジョンが終わり――
今、目の前で宮琵は笑っていた。
「……ふ」
反芻するように。
「食ってやったよ。任氏の体は生のまま、ちゃんと骨まで食ってやった。さすが有名な大妖怪だ。今さら何匹食っても大して変わらないと思っていた妖力が、あれ一体で飛躍的に跳ね上がったからな。もっとも、そうして得た力の使い道など、もはや一つも残ってはいないんだが……それにしても美味かった」
舌先で唇を舐めてみせ、そうそう、と思い出したように続ける。
「そういえばさっきお前は何か言っていたな。忘れてしまったからもう一度言って欲しいんだが」
耳に手を添え、宮琵は問う。

「これ以上何があっても……誰だけは――絶対に守ってみせるって？」

口元をつり上げて答えを待つ宮琵。

大輝の中で何かが終わった。

二

静かな寝床で、遠見はゆっくりと瞼を開けた。

聞こえる。何かが――これは歌か。

声無き歌。音階無き歌。常世の歌。

体を起こす。

「……誰か」

簾の向こうに声をかける。

「誰か……そこにいないの？」

答えは無い。

誰もいないのか。

いや――誰がどこにいても同じことか。

遠見はまた、静かに床へと倒れた。

見神の血を引きながら、この力に気付かぬ者はおるまい。今頃誰もが戦慄しているはずだ。

「麒麟の子……。そうなの……壊してしまうのね」

ぽつりと呟く。

麒麟――あれは現世の因果に外部の立場から干渉する存在である。

その行動は、遠見といえど、到底予知できるはずがなかった。

これで全てが終わるのか。随分と唐突で呆気ないものだが、それもまた仕方のないことかもしれない。

そう。

こうなってしまっては、もう――誰にも止められはしないのだから。

三

宮琵は笑い続けていた。

襟首を掴まれ、獣のような力で大木に押し付けられ、圧迫された鎖骨がめりめりと音を立てても、真っ直ぐに大輝の目を見据えて笑っていた。

「そうだ――そう、それでいい……、っ！」

「……殺してやる」

大輝の左目は金色に光っていた。

額には角――肉に包まれた一本の角がせり出している。

殺してやる。殺してやる。殺してやる。

ぶつぶつと、うわ言のように呟きながら、大輝はその髪をざわめかせる。

静かに風が回り始めた。

始めは二人を包み、そして大樹を包み、少しずつ、少しずつ膨らむ旋風はやがて、景色を食らうように包み込んでゆく。

葉が舞い散る。地が揺らぐ。

どこからか歌が――

「……聞こえるぞ」

宮琵は空を見上げた。

「常世の歌か……侵食が始まった。お前の絶望が……」

星々が、月が、夜が、まるで悲鳴のように歌っている。再び大輝の目を覗く。

「全てを失ったお前の、その完全な絶望が……、つっ！」

大輝の手が宮琵の襟首を持ち上げ、凄まじい勢いで、その背を木に叩きつける。

「――、くっ――はは」

笑う宮琵の口元から、とくとくと血が流れる。

「さあ、殺せ……！　石落をそうしたように、この三次元ごと……俺を切り裂いてみろ、殿山大輝！」

「あ――あ――あ、あああっ！」

大輝が手を離して叫ぶと共に、二人と巨木を中心にして金色の波が巻き起こり、熱い奔流と化して空へ立ち上ってゆく。

光は灰色の雲を裂き、黒塗りの空を震わせ、やがて収束する。

大輝の片手には、いつかと同じ、ほとばしる光の大槍が握られていた。

地が震え、常世が歌い、風が巻き、星空が悲鳴を上げる景色の中心で、ゆっくりと槍が振り上げられる。――その瞬間、

景色から音だけが消失した。

轟風の中、微笑む宮琵。

大輝の頬を伝う、赤い、赤い、血の涙。

槍は真上から振り下ろされ、目を閉じた宮琵の肉体を、大木と、その後ろに広がる夜空ごと、切り裂くように両断した。

びしり――。割られた空が鳴る。

糸は断ち切られ、そして――

世界の瓦解が始まった。

第十一章【無題――Ｓｕｂｊｅｃｔ　Ｕｎｋｎｏｗｎ――】ｌａｓｔ　Ｓｃｅｎｅ

懐かしい匂いに目を覚ました。
テーブルの上には、鰤の照り焼きと、味噌汁が並んでいた。
いつもの居間。
大輝はいつもの椅子に腰掛けている。
「何だ……？」
キッチンの方から声がする。
「起きた？　ちょっと待っていて、今ごはんを持って行くわ」
「え……、ああ」
母の声？
大輝は壁の時計を見る。針は動いていない。
ここはどこだ。
この居間は――もう、無いはずだ。
だって……全て、大輝が壊してしまったのだから。
町も、島も、星も、空も。大輝が自らの手で壊してしまったのだから。
盤古の亡骸で作られた、あの世界全て……盤古？
盤古って何だ？
ガラス戸の外は暗い。
べっとりと暗く、何も見えない。
母がトレイを手に戻ってきた。
「久しぶりだから、電子ジャーの使い方を忘れていたわ。ちょっと手間取っちゃった」

言いながら食卓に白米を加える。
湯気がほかほかと上って消える。
母は大輝の向かいに腰を下ろした。
「じゃあ、食べましょうか」
「……うん」
いただきます。
箸を取り、呟くように大輝は言った。
鰤をつまみ、口に運ぶ。
いつか――いつも食べていた味だった。
「……おいしい」
「ありがとう」
母は微笑む。
大輝は顔を上げ、あらためて母を見る。
そして小さく苦笑う。
「この間も会ったけど……やっぱり若いんだね、母さんは」
「そうね。このイメージしか存在しないのよ。ずっとこのままだったし、これより老いる可能性も存在しなかったから」
母も微笑みながら箸を動かしている。
「今はあなたの構築したイメージを拠り代にしているの」
大輝は一度唇を噛み、それから切り出した。
「……あの」
「何？」
「母さんは、……その……怒ってないの……？」
「怒るって、何を？」
母は首を傾げる。
大輝は箸を止めたまま、悪戯を告白する子供のように言った。
「俺……壊しちゃったから」
「現世のこと？」
「……うん」
大輝はうなずき、そして続ける。

「宇宙とかは……分からないんだ。大きすぎて、よく分からない。だから、自分がどれくらいのことをしたのかも、本当はよく分かってない。でも……少なくとも、人がみんな死んだ。俺――俺が、殺しちゃったんだ。学校の皆も、小学校のときの先生も、テレビに出てる人も、会ったことない外国の人も、みんな、俺が壊しちゃったんだ」

「あの宮琵という人に、大事な人たちを殺されたから？」

「……。もう、どうでもよくなったんだ。自分があの世界で暴れたら、どうなるかってことくらい、俺はどこかで分かってたのに。でも、だからって」

「ねえ大輝、人の死は終わりではないわ」

「え――」

大輝は再び顔を上げる。

母は静かに笑っていた。

「忘れても、変わっても、生命は終わらないのよ。意思は肉体の終わりと共に、盤古の亡骸を通りぬけて常世へと還元され、そして新たな生命となるの」

「……どういうこと？」

「皆、ここにいるということよ」

母はリモコンを取って、テレビの電源を入れた。

画面が光を帯び、黒い背景の前に、青白い靄のようなものが映し出された。

靄はゆらゆらと蠢いている。

大輝は茶碗を持ったまま、その美しい揺らめきに目を奪われた。

「……これは？」

「還元された魂たち――これから始まる可能性の塊……かしら。肉体を失った、あらゆる魂がここにあるわ。最後に宿った肉体の記憶と共にね」

「みんなが……ここに？」

「ええ」

母は頷く。
「誰もがこの中に還元されている」そっと目を細める。「礼司くんもね」
「親父……も」
「新しい世界が始まったら――私は麒麟の力を捨ててでも、彼の隣に寄り添うつもりよ」
「……？」
「これから常世は、また新たな現世を作り上げる。終わりを生み、最後のひとかけらとなった大輝を起源点にして、再び無限の三次元を構築するの」
「俺のいるところから、また別の世界が始まるって事……？」
「ええ。全く別の、ただ魂を同じくした世界が生まれるわ」
時折強くなるテレビ画面の光が、母の頬を青く照らす。
「そこには、あらゆる可能性がある。前の世界では入り込む余地の無かった可能性も、そこには存在し得るのよ。私は、今度はその世界の一部となり、あなたや礼司君の魂に寄り添って生きて行きたい。力も役目も、永遠も捨てて……今度は繰り返しの死を受け入れる、ただの生命として」
母は静かに目を伏せる。
「永遠なんて、もう要らない。生まれ変わったあなたや礼司くんが全く違う姿になり、前世の記憶を忘れていても……例え何もかもが私の自己満足に過ぎなくても――ほんのひと時でも、もう一度愛する人の魂に寄り添えれば、私は、それだけで……」
「母さん――？」
「ごめんなさい」
箸を握りしめ、母は涙を拭いた。
「私、自分のことばかり……」
「……母さん」
「大丈夫よ、あなたの望むものも手に入るわ」母はこすったばかりの目で微笑む。「――今まであなたの生きた世界は、均整の取れた

破壊と増殖のみを真理に形作られていたけれど、今度はあなたが決める番だから。望むならば……もう悲しいことも起こらない、争いも憎しみも無い、あなただけのための世界も作れるのよ」

「俺のための世界――」

「どうする、大輝？」

母の目が覗き込む。

「あなたは、ゼロから始まる世界に、何を思い描くの？」

「……」大輝は母の瞳を見つめる。「俺は……」

視線を下にそらして口ごもる。

どう言えばいいのか。

何を言えばいいのか。

だって――俺は。

「俺は……その」

「――なんて、ね」

「えっ？」

顔を上げると、母は悪戯っぽく笑っていた。

リモコンの電源ボタンを押し、ぷつりとテレビを切る。

「いいの、分かっているわよ、大輝。顔に書いてあるもの。困らせてしまってごめんね」

「え……」

「あの世界に、まだやり残したことがあるんでしょう？」

「あ――」

頷く。

「――、……うん」

母は呆れたような笑顔で溜息をつく。

「やっぱりね。まあ、当たり前のことよね」

「……ごめん」

「全くもう。私に気を使って断り方を選ぶなんて、ずいぶん大人になっちゃったのねえ。母さんちょっと淋しいわ」

大輝は困って笑い顔を作るしかなかった。

「ごめん。俺……みんなに言ってない言葉が、たくさんあって」
「うん」
「夜々さんに、迷惑じゃなかったって……あのデート、変だったけど、俺も楽しかったって、言わなきゃいけないんだ」
「うん」
「しゃくネエに、俺は全然気にしてないって――元気になってほしいって、言わなきゃいけないんだ」
「うん」
「シロさんにも……あの人にも、言わなきゃいけないことが……」
「大輝」
「……え」
「始めるなら、ごはん食べてからにしなさいね」
「へ？」
「腹が減っては戦は出来ぬ、ってね。小さい頃教えたでしょ？」
「あ……うん」
そうか、そういえば母に習った言葉だった。
また箸を持ち直した大輝を、母は静かに見つめる。
「残さず食べるのよ。いつもご飯が余っちゃうんだから」
「もう残さないようになったよ」
「本当に？」
「うん」
「あらそう。――でも……あーあ。母さんちょっと残念」
母は魚を口に運びつつ、うらめしそうに大輝を見る。
「せっかく現世で生きられるチャンスだと思ったのに」
「う……」
「まあ、新しい世界で礼司くんや大輝の魂に再会できても、忘れられてたらやっぱり悲しいっていうのが、本音といえば本音だけどね。でもねえ……それでもいいと思ったんだけどなあ」
「……そんなにいじめないでくれよ」
「だって大輝ったら、母さんがいなくても平気って感じなんですも

の。もう普段は完全に忘れているように見えるわよ」
「んなこと無いって」
「本当に？」
「ホント、ホント。――あ、そうだ」
大輝は味噌汁をすすって言う。
「俺たちで頑張って、何とか母さんをこっちに呼ぶよ」
「あら、大きく出たわね」
「だって夜々さんたちが言うにはさ、母さんが現世にいたのって、石落が世界の境界を乱したのが原因なんだろ？　俺たちに似たようなことが出来てもおかしくないんじゃないかな」
「さあ、それはどうかしら」
「多分出来るような気がするんだよね。シロさんもいるし、夜々さんもいるし、しゃくネエもいるし、石之助さんも、小梅さんもいるし……。みんなにも協力してもらえば、何とかなるような気がする。っていうか、絶対出来るような気がしてきた」
「頼もしいわね」
母は笑う。
「期待してるわ、本当に」
「任せてくれよ。でも、その前に――」
とん、と茶碗を置く。
「絶対にやらなきゃいけないことがあるんだよな。それが出来なきゃ元も子もないんだ」
「当然、やり遂げられるでしょう？　自分で選んだ壁ですものね」
「ああ。選んだからには……」
重く瞬く。
「命がけで戦るよ」

十一章エピローグ／十章二幕プロローグ

【再突入――ｒｅ－ｅｎｔｅｒ　ｔｈｅ　ｂａｔｔｌｅｆｉｅｌｄ！！　――】

夜々は大輝の手を握り、淋しげな口調で語る。
「今日は楽しかった。君は迷惑だっただろうが、私はとても楽しかったよ」
そこは駅ビルの屋上だった。
空は夜の闇に染まり始め、頭上には大売出しのバルーンが揺れている。
ベンチに座っているのは、大輝と、夜々と、アヒルの縫いぐるみ。
夜々は続ける。
「君との恋愛は経験できなかったが、デートの真似事が出来ただけで、私は満足することにしよう。最後の最後に、思いがけない優しい言葉と、不思議な気持ちも貰うことができたしね。今日一日は私の宝物になった」
ふう、と息をつく。
「時が来たようだ――」
溜息のように。

「母様には会えなかったな」
夜々は立ち上がり、繋いでいた手を離そうとする。
だが、大輝は、今度はその手を離さなかった。
夜々の手を握ったまま、その男を見据えていた。
男は――宮琵は、時計台の下に立ちつくしていた。
「……馬鹿な」
宮琵は片手で額を押さえる。
「何だ……これは？　この世界は何だ？　貴様――は、一体何を」
「大輝くん――？」
夜々は、向こうに立って狼狽する宮琵と、何も言わずに立ち上がる大輝を見比べる。
夕闇と冷めた風。
宮琵は、どうや理解したらしく、狂ったように笑った。
「……！　そうか……、ふ、ははッ！」
ぐしゃりと自らの前髪を掴む。
「そういうことか……。馬鹿げている……極限までバカげている！　三次元を構成する全ての物質を――この宇宙全てを巻き戻したのか、殿山大輝！」
「巻き戻した？」夜々は戸惑った声で問う。「お前は一体何を言っている？」
「未来に起きたことを知らない奴は黙っていろ！」
夜々を怒鳴りつけ、血走った眼で大輝を睨む。
「全く、無駄なことをしてくれる……。ならば俺は何度でも同じことを行うまでだ。結局お前はそれを止められないのだからな」
片手を突き出す。
「俺はただ、繰り返すだけだ！」
その手が光る。
轟音が轟き、同時に閃光と衝撃が屋上を揺るがした。
――落雷。
ベンチが弾け飛ぶ。

アヒルの縫いぐるみが燃えて宙を舞う。
夜々の――悲鳴。
「きゃあっ！」
「夜々さん下がって！」
「馬鹿な」
宮琵の狼狽。
「回避しただと？　そんなわけが」
「ああっ！」
既に大輝は走り込んでいた。
その右拳が、宮琵の頬を打つ。
宮琵はよろめいた。
「……、な……ッ」
「ここで終わらせてやる！」
振り上げられる拳。
時計台の示す時刻は、午後六時九分。
時は既に分岐していた。

第十章二幕【宮琵――みやび――】

一

繰り出された大輝の拳を宮琵が受け止めると、砂袋を叩きつけたような音が空気を揺るがした。
「……お前、何をした？」
その手がめりめりと黒腕のものへと変じてゆく。
「雷よりも速く動いたのか？　そんなわけが……」
「知るかよッ！」
大輝の左目が光り、力任せの前蹴りが宮琵を打ち飛ばす。
踏みとどまる宮琵の靴底がざりりと鳴った。
「貴――様あっ！」
食らいざまに腕を振るい、生じさせた青い風。
それは鎌鼬だった。
風は足下を、そしてフェンスを切り裂いたが、
「消えた？」
大輝の姿を見失い、宮琵は身構える。
その真上から大輝が舞い降りる。
「おォっ！」
叫びと共に後頭部へと打ち込まれる肘の一撃。
宮琵は膝をつく。
「な……に？」
意識が揺らぐ。
その隙を大輝は逃さなかった。
正面から頭を抱え込まれ、容赦無く続けざまに叩き込まれる膝、膝、

膝。宮琵の鼻が砕かれ、鎖骨が、頬骨が、歯が折れてゆく。
そして、振り回すように投げ放たれ――真っ直ぐな蹴りの追撃。腹部に直撃した。
致命的だった。
何かが破れる感覚と、あまりにも鈍すぎる激痛。
「し……まっ、た……ッ！」
宮琵の口から赤い霧が吐き出される。
――どういうことだ。
脳髄に肉体の危機を知らせる苦痛の中で、宮琵は冷静に混乱していた。
大輝のいる座標が、瞬時に変更されている。
無時間座標移動？　しかもこの殺傷力は……たった数動作で宮琵の肉体を内部まで破壊した。馬鹿な。それでは、まるで。
「……お前は――、くっ！」
無理矢理立ち返らせた意識を集中し、何とか拳を受け止める。手首の骨が恐ろしげな音を立てる。
折れた前歯を吐き捨てて問う。
「お前は……この現世で、麒麟の力を完全に制御しているのか……？」
そんなことは有り得ない。殿山大輝は完全な麒麟ではない。麟と人との間に生まれた不安定なハーフだ。――いや、まさか。
「まさか……」目を見開く。「常世で何かを食らったのか！」
「離せこの野郎！」
大輝は宮琵の手を振り払い、距離をとる。
「ああ、母さんの作ったメシを食ったよ！　それがどうした！」
「黄泉戸喫か……ッ」
宮琵は瞬時に全ての妖力を、神気を解放させた。
足場がひび割れ、コンクリートの破片が舞い上がる。
「麟め――まさかその手があったとはな！」
肩が盛り上がり、服を内側から引き裂いてゆく。

あらわれた肌は黒い毛皮に覆われている。
目が血走り、口が裂けてゆく。
「だがいずれ制御しきれまい！」
異形と化した宮琵は両腕を振り上げる。
「限定的に解除させた力で、俺の全力を防ぐことはかなわないはずだ！」
そして、その両腕を振り下ろし、胸の前で交差させる。
黒炎の激流が生まれた。
おびただしい炎は大輝ではなく、夜々を襲った。
夜々は片腕を変じさせ――間に合わない。
いや、
「させるかよ！」
大輝が立ちふさがっていた。
突き出された両掌が障壁を生み、黒炎と衝撃を正面から受け止める。屋上が音を立ててひずんだ。
めきめきと額に角を現させ、大輝が叫ぶ。
「もう誰も殺させるか！」
左目に続き――右目が金色の光を帯びる。
「俺はもう、完全に死ぬ覚悟でやってんだよ！」
「ならばこれはどうだ！」
ぱりり、と青白い火花が散る。

二

夜々は大輝の背に隠されたまま、ただ状況に目を白黒とさせていた。
「大輝……くん？」
「来る！」
大輝が振り返り、かばうように夜々の体を抱き寄せる。
次の瞬間、周囲が再び白く染まった。眩しさに目が痛む。

轟音が屋上を支配し、凄まじい衝撃が夜々の体を揺さぶった。
「あ――ああっ！」
大輝の叫び。
容赦なく連続する閃光と衝撃。立て続けの落雷。
その度に強く抱きしめられてゆく体。
伝わる痛み。
永遠のような長い時間。
――落雷が止み、暫し時が止まる。
「大輝くん……」
正面から抱きすくめられ、夜々の体は動かない。
ぜえぜえと耳元で大輝の息の音がする。
大輝の肩越しに宮琵が見える。
宮琵は人間の姿に戻っていた。
「ふ……」
額に汗を滲ませ、宮琵は血にまみれた口で笑う。
「どうした……無時間座標転移はもう品切れか？」
足下にコートを捨てる。
「この雷は常世からのエネルギーで生まれている。妖怪からコピーした力とは違い、お前の肉体にも干渉が可能だ。まあ……さすが上位神獣というべきか、よく入神の娘までダメージを通さなかったものだが……もう動けまい」
「……く、そ」
大輝の体が、ゆっくりと夜々から離れる。
額の角はそのままだが、両眼の輝きは消え失せていた。
そして大輝は、宮琵のほうへ向き直った。
「やってくれるじゃないかよ……」
「――、！」
夜々はその背中を見て息を呑んだ。
あまりにも残酷な傷跡が、そこに出来上がっていた。焼けた皮膚と肉がぶすぶすと燻ぶり、煙が夜々の鼻を刺す。

「大輝くん、背中が――」
「心配……要らないです」
振り向かずに言う。
「俺から離れないで下さい」
「強がるな。これで確信が持てた」宮琵は荒い息で笑う。「死ぬ覚悟とはよく言ったものだ。実際、お前の神気は殆ど残っていない。そもそも、ここに立っているのがやっとだったはずだ。この三次元全てを逆流させたのだから無理も無いが……先の連続した無時間座標転移で、とうとう最後の力も使い果たしたというところだろう」
「そりゃお前も同じだろ……内臓破けてるくせに虚勢張りやがって。さっきメチャクチャ手応えあったぞ」
がくがくと大輝の膝が震える。
「って言うか……こっちが弱ってるのが分かってるなら、なんで雷落とすの止めたんだよ……？　しかも元の姿に戻ってるじゃないか」
引きつる顔でわずかに笑う。「さっきの雷、イチかバチかで限界まで連発したろ？」
「どうかな。お前が死んでしまっては俺の目的が果たせないからな」
「それもハッタリだよな。もうお前の目的なんて無くなってるよ。俺がもうあんなことしないって事くらい――実は分かってるだろ、お前」
「ふん……？」
「お前はヤケになってるだけだ。今ここで俺と夜々さんのこと殺して、それからシロさんや親父を殺す。みんな殺す。それだけだ。後のことなんか考えてない」
「見透かされたものだな」
「感じるんだ」
よろけながらも、大輝の声は静かだった。
「何の意味も無い。だけど、もう……止まれないんだな」
「――」
宮琵は答えない。

大輝は、ずるりと足を引きずり、一歩、前に出る。
「もうすぐ、多分……あと何秒かで、シロさんが来る。お前の気配に気付かないはず無いし」
「ああ」横目で遠くの空を見る。「あの女の妖気が近づいている。ここを探しているらしい。――馬鹿な女だ。勝ち目などないというのに、お前が心配でたまらないんだろう」
「じゃあ、着く前に片を付けないと。お前、弱ってるけど……シロさんのことなら簡単に殺せるんだろ」
「……。ああ、石落の仕掛けた術を発動させるだけで、あの女は死ぬ」
「一応訊くけどさ、やっぱり、来たらシロさんを殺すか？」
「殺すだろうな」
「どうしてこんな事になったと思う？」
「さて……」宮琵は首を振る。「それが分かれば、今頃は――どこかで大人しく寿司でも食っていたさ」
「寿司？」
「好きなんだよ」
口元からどくどくと血が滴る。内臓に大きな損傷を受けた状態で、回復に使うべき神気まで発散し尽くしたのだ。そして宮琵は賭けに負けた。もう、どちらにせよ時間は残されていない。
「特にシメ鯖がな。酒によく合うんだ」
「……。バカ野郎」
呟きと共に大輝が立ち止まる。
もう、互いの手が届いてしまう距離にいた。
見つめる夜々は動けなかった。
溜息が交差し、
大輝が、宮琵が、同時に踏み込む。
そして二人の体が消え――
肉を叩く音と鮮血とコンクリートの破片が飛び散り――
男たちが再び現れたとき――

殺し合いは、呆気なく終わっていた。

三

風がこうこうと鳴いていた。
シロが到着した時、もう、駅ビルの屋上には誰もいなかった。
コンクリートの所々にある焦げ後、放射線状のヒビ、切り裂かれたフェンス、砕け散ったベンチ、妖気の残り香。
それから――おびただしい血痕。戦いの残骸だ。
シロは、くん、と鼻をひくつかせる。
この血は大輝の匂いだ。
しかし、宮琵の血も混じっている。
「どちらが……」
死んだのだ？
「――。大輝――」
駄目だ。
恐ろしすぎて何も考えることが出来ない。大輝はどこだ。
「どこに……」
シロは目を閉じて爪先で地を蹴り、ふわりと空に舞った。

四

どさり、と夜々は二つの体を足下に落とした。
そのまま自分も両膝をつく。
「――っ、はあ……――はあッ」
胸を押さえ、呼吸を落ち着ける。
建物から建物への連続した跳躍で、全身の筋肉が悲鳴を上げていた。
ここがどのマンションの屋上かは分からない。
ただ、あの場所から出来るだけ遠く離れなくてはならなかった。
大輝も夜々も、あのような状況で人に顔を見られるわけにはいかな

い。
段々と落ち着いてきた呼吸に合わせ、意識もまた、落ち着いてくる。
そう――大輝の手当てをしなければ。
「大輝くん」
大輝の頬を軽く叩く。
ゆっくりとまぶたが開く。
「……あ」
「気が付いたかい」
「宮琵は」
「そこに――」
大輝の傍らに倒れた宮琵を、静かに視線で指す。
大輝も、眼だけを動かした。そして瞬いて問う。
「……死んでるんですか」
「ああ、死んでいる。残しておくわけにもいかないので運んだんだ。後で処理をしなければならない。――それより君は」
「よ……い、しょ」
大輝はむっくりと体を起こした。
夜々は焦って肩を抱く。
「大輝くん、動いては……、？」背中からの出血が止まっている。
「回復が始まっている……のか」
神気が使い果たされていたはずなのに。
大輝は首を振る。
「いや、中身はまだボロボロって感じですかね。立つのは辛いです」
「凄い……」
「すごくないですよ。立派に死にかけましたから」
大輝は溜息をつく。それから、またうつ伏せの宮琵を見た。
「もう、こいつは動かないんですね。喋らないし、考えない。でも、さっきまで俺と戦ってた。こいつなりに何かを思いながら」
「ああ――」

「だけど俺が殴り殺したんだ」ぽつりと言う。「最後まで、……ことは出来なかったのに」
「何だって？」
「そうだ、夜々さん」
「え……」
夜々は不意をつかれて惑う。
すぐ間近、自分に寄りかかったまま顔を上げた大輝の瞳が、夜々の目を真っ直ぐに見ていた。
「俺、迷惑じゃなかったですよ」
「ちょっと待――何が」戸惑う。「いったい何の話だい」
「今日、夜々さんとデートしたの、迷惑なんかじゃなかったです」
「へ……？」
思わず半笑いで首を傾げる。
大輝は月の浮かんだ薄暗い空を見上げ、遠くの何かに気付いて、わずかに目を細めた。
「……あ、シロさんだ」
「任氏？」
夜々は視線の先を見る。
白い影が一直線に飛んでくるところだった。
「大輝！　大輝か！」
泣きそうな声と共に急接近し、大輝の正面に膝を揃えて着地する。
「ようやく見つけた！　何じゃ、今まで何をして――何があって――この怪我は？　顔が血だらけじゃ。宮琵めにやられ……そこに伏しておるのが宮琵か？　死んでおるのか？　何じゃこれは、一体どうして」
「シロさん」
「ど――どうした大輝、痛むのか？」
「はは……返事してくれた」動転しきったシロの頬を、柔らかく撫ぜる。「生きてるんだ……夜々さんも、シロさんも」
大輝の目から、ぽろりと雫が落ちた。

「また、話ができる」
夜々に肩を抱かれ、シロの頬に触れながら、大輝はうつむいて声を潤ませた。
「体……二人とも、あったかいですね」

五

どこだ――ここは。
何も見えず、何も聞こえない。
体が無い？　いや、全てに溶けている。
どろどと心地の良い流れの中、宮琵は既に存在しない目を閉じる。
ここは盤古の亡骸の中か。
俺は終わってしまったのか。
――そうよ。
誰だ。お前が麟か？　余計な小細工をしやがって。
――ねえ、あなたが望んでいたものは何？
何だと？
――あなたは何を手に入れたかったの？
分からない。そんなことは分からない。それが分からなくて、俺は。
――あなたは何が憎かったの？
俺の欲しいものを……ずっと欲しかったものを……当たり前のように持っている奴が。
――それが欲しかった？
ああ。それが欲しかった。でも遠かったんだ。どうやって手を伸ばせばいいのか分からなかった。眩しすぎて真っ直ぐに見ることも出来なかった。俺には似合わないと思った。
――悲しいわ。
分からない。
――後悔している？

何のことだ。
――お父さんを食べてしまったこと。
……。
――お父さんの記憶を取り込んで、自分への思いを知ってしまったこと。
あいつは……俺のことを、少しも好きじゃなかった。
――心のどこかでは、好かれていると思っていた？
そう思っていなかったから、俺は躊躇いなく奴を殺して食った。
そうすれば自由になれると思った。奴の手足として奴隷のように使われ続けるのは……もう、耐えられなかった。全て奴のせいだと思った。だけど。
――だけど？
だけど……奴を食って記憶を取り込み、俺がただの食い物に過ぎないと……奴がいずれ俺を糧にするつもりだったと分かったときは……とても。
――淋しかったのね。
ああ。勝手な話だと思うか？
――誰も皆、そんなものよ。矛盾の無い、美しい心なんて存在しないから。
殿山大輝は俺を恨んでいるかな。
――恨んでほしかった？
そうすれば、少なくとも覚えていてもらえるからな。
――シロさんのことが好きだった？
分からない。ただ、俺に似ていると思った。
――あの人と友達になりたかったの？
向こうはそうじゃなかっただろう。仕方ないさ。
――……。あなたは、これで良かったと思う？
どうだろうな。悪い奴がいなくなって、あいつらは助かったし……良いんじゃないか、これで。映画でも何でも、幸せに終わるのが一番だからな。

――それがあなたのいない世界でも？
俺はただの邪魔者だった。生まれてきたのが間違いだったんだろうな……おい、このまま俺は消えるのか？
――魂に刻まれた心の記憶だけをそのままにして、全てを忘れるの。あなたたちの感覚では、消えることと変わらないかもしれないわね。
最後に少しだけ時間をくれないか。
――何をするの？
ほんの何秒かでいいんだ。
それで終わるさ。
このままじゃ、やっぱり少し気持ちが悪くてな。

六

不意に傍らで音がした。
大輝は、シロは、夜々は――同時にその光景を見た。
やわらかな月明かりの下、うつ伏せに倒れていた宮琵が、冷えたコンクリートに片手をついて、ゆっくりと顔を上げていた。
大輝は息を呑んだ。
「……宮琵」
「馬鹿な、蘇生しただと？」
「こやつ！」
夜々とシロが立ち上がる。
凍る空気の中で宮琵は笑っていた。
血にまみれた顔を大輝に向け、嘲るように笑っていた。
「覚悟しておけ……殿山大輝」
荒く静かな声。
「俺は何度でも繰り返す……。これから、そこの入神夜々を消し飛ばし……お前の父親と義姉を殺し……山ノ蛾の娘を爺の目の前で犯し、殺し、爺の首も切り落とし……それから……」
シロを見る。

「任氏、お前を殺してやる。たっぷりとその綺麗な顔をぶん殴ってからな……」

地に這いつくばったまま、ぎろりと目を見開く。

「お前……よく恥ずかしげもなく生きているじゃないか……？　大した神経だぜ。人間を何千とブッ殺しては食らった、その臓物臭い口で……何も知らないガキに、キスをねだってみせる……。で、この次はどうする。石落にさんざん使ってもらった体で、筆下ろしでもしてやるのか。……その時はまず、どの穴でさせてやるんだ？」

赤い唾を吐き、げらげらと笑う。

「経験豊富でよかったな？　もう、突っ込まれ慣れてないところは無いだろうが？　ああ？」

「貴――様ァッ！」

シロが悲鳴のように吼える。

握り締められた両手に灼熱が集まってゆく。

大輝は言葉を失っていた。

夜々も何も言わなかった。

シロの業火が、宮琵の肉体を一瞬にして焼き尽くす、その光景を――

二人は、無言で見つめることしか出来なかった。

第二部エピローグ【涼風――すずやかなかぜ――】

一

ゆっくりと何日もかけて迷った末、大輝は、取り合えず夜々にだけ真実を語ることに決めた。もっとも、悪夢のような運命が消滅した以上、あれを真実と呼んで良いのかは分からないが、少なくとも大輝の記憶には残っているあの出来事を、大輝は夜々にだけ、ひっそりと語ったのである。

それは勿体無いほど清々しく晴れた昼休み、校舎の屋上だった。ちょうど、宮琵と殺し合った場所と同じような、景色のよい屋上だ。ただしここは本来ならば出入り禁止で、ベンチも無い。

二人は鍵の壊れた扉の前にある、薄っぺらな段差に並んで腰掛け、つまらぬ雲たちに視線をあずけていた。

澄んだ空気に、夜々の唇から吐き出された紫煙が溶ける。

「……なるほど」

つまんだハイライトの先から、長い灰がぽろりと落ちた。

「この三次元は、君を残して全て瓦解、消滅した」

「はい」

大輝は飲み終えたコーヒー牛乳のパックを弄ぶ。

夜々はまた煙を味わい、やれやれと首を振った。

「現世で君の力を暴走させ、この世を消滅させる……。それが宮琵の目的だったとはね。しかもそれは一度成功した……私たち全員の死をもって」

「そうです」

「そう、か……」表情無く雲を見つめる。「そういうことだったのか」

「そういうことって？」

「いや、私は本来なら死ぬ予定だったんだ。入神家の長は遠見様という方なんだが、その方が予知能力者でね。――私は、死ぬと予言されていた。その死が、それか」

「そうだと思います」

「君は何故早く言ってくれなかったのかな」

「え」

横を向くと、夜々が恨めしそうに見ていた。

「私はこの数日間、不安で眠れなかったんだぞ。宮琵という敵は消えたはずなのに、なぜか私は生きている。いずれ何か、別の理由で死んでしまうのではないかと、ずっと怯えていた」

「……」う。「すみません」

「少しの間、あちらを向いていてくれるかい」

「え？」

「早く」

「は、はい」

大輝は言われたとおり、視線を遠くの空に戻した。

夜々は何も言わなかった。

怒っているのだろうか。

不可思議な沈黙の中、か細く引きつった呼吸と鼻をすする音が、少しずつ聞こえ始めた。

大輝は――夜々を見た。

「……泣いてるんですか」

「……。うん」

夜々は膝の間に顔を埋め、頷くように体を揺すった。

「もう、死んでしまうと思っていたから。助けてくれてありがとう」

「いえ……」

「悪いけれど、もうしばらく泣いていてもいいかな」

「……はい」
「すまない、ね」
夜々はそのまま、再び黙った。
煙草が全て燃え尽きるまでの間、夜々は顔を上げず、無言ですすり泣いていた。
大輝はその間、思考の処遇に困って、夜々と空とを見比べてみたり、無意味に靴紐をいじったりしていたが、やがて泣き終えて顔を上げた夜々は、実にさっぱりとしたものだった。
「よし」
「よしって――」呆れる。「もう平気なんですか？」
「まあね。君は最後まで肩を抱いてくれなかったけれど」
「……抱いた方がよかったですか」
「さあ？」
夜々は指先で目尻の涙を拭き、くすりと笑った。
「次の機会にでもお願いするよ」
「はあ……」
「ところで」夜々は大輝の顔を覗き込む。「君は突然強くなったな。どうやら常世で何かを食したようだが」
「あ――それ、宮琵にも訊かれましたよね。……宮琵は、ヨモツヘグイとか何とか言って、納得してたみたいですけど」
「ふむ」
夜々は二本目の煙草に火をつける。
「では君は、もうハーフの立場ではないわけか」
「はい？」
首を傾げる大輝に、煙を吐き出した夜々は語る。
「黄泉戸喫というのはね、黄泉の国の物を食することさ」
「黄泉の国って常世のことですか？」
「そうだ。極楽、地獄、あの世、魔界、天界、冥界……どれも皆、常世を別の視点から認識し、付けられた名称に過ぎない。黄泉もまた然り――君はイザナミを知っているかい」

「いえ」
「イザナギの妹にして妻、神世七代の最後の神……まあ簡単に言えば、女神様だ。イザナミは黄泉の国で煮炊きされた物を食べ――すなわち黄泉戸喫を行ったため、現世へと帰ることが出来なくなったという。まあ恐らく、黄泉戸喫という儀式は、常世から遣わされた霊性が、役目を終えて帰還する際、再び自らを完全な常世の住人に戻すために必要な、通過儀式なんだろう。常世の力によって現世から引き戻されても、中途半端な肉体のままでは上位世界の法則に適合しきれないからね」
「はあ」
「君は元々麒麟のハーフだ。常世がその存在を、帰還した神獣と誤認してもおかしくない。……まさに盲点をついた手段だな。淋さんには感心するよ」
「すみません、サッパリ分かりませんが」
「君は黄泉戸喫を行い、完全な神獣として常世に補完された。本来なら、そんなことをすれば、淋さんと同じように常世から戻れなくなるはずなんだが、君の話を聞く限り、現世が再製される際には、その最後の一かけらを、新たな世界の起源点にする必要がある。常世にとっては、あくまで現世の存在である君が必要不可欠だった。――結果として君は、完全な神獣の力を手に入れた上で、現世の一部となれたわけだ」
「なるほど。分かりません」
「……まあいいか」
夜々は煙を吐く。
「どうやら君は変わっていないようだ。そこに安心するよ、私としては」
雲が流れる。
「……。これから授業参観だね」
「そうですね」
「母様は、石之助くんと一緒に来ると言っていた。君のところの―

―年寄り狐は？」
「ああ、シロさんは……」

二

ガラス戸から差し込む日差しで、明かりの要らぬ広い居間。
テレビをつけることもなく、ただソファに腰を掛けて料理の本をめくりながら、シロはそこで、穏やかな昼間の時間を過ごしていた。
石楠花は半ばまで開けたドアのノブを握ったまま、無言で立ちすくむほかに何をすることも出来なかった。
こつり、こつりと時計が鳴っていた。
いつものように、ジーンズのパンツに白いトレーナーを身に付け、化粧のひとつもしていないシロは、石楠花のほうには顔を向けず、ただ本の文字を細い目でなぞりながら、静かな声で沈黙を溶かした。
「……風呂に入れ。若い娘のさせる匂いにしては、少しばかりきつすぎる」
「あ――」
石楠花はぱくぱくと唇を動かす。
上手く喋れない。声を出すのも久しぶりだった。
「あの、あたし……」
「幾日も閉じこもったまま、飯もろくに食わぬ。便所へ出ても顔を合わさぬ。声を掛けども応じることをせぬ。大輝が怪我をして帰った日も、夜な夜なこっそり現れて、あの子の寝顔だけを長いこと眺め、また部屋の中へと引っ込んでいく――」ページをめくる。「今日はよう下りてきたな」
「あ……」
石楠花は出ぬ声を絞り出す。
「あの……今日は誰も……いない、と、思ったから……髪くらい、洗おうかと……思って」
「ほう、暦くらいは見ておったか」

シロは感心したように笑う。
ガラス戸の外、庭の草が風になびき、鳥が鳴く。
石楠花はうつむいて、指先でパジャマの裾をいじった。
「なんで……行かなかったの」
「授業参観か？　義父上は仕事じゃが、石之助や小梅が行っておるからな。しろはまた今度で良い」
きしり、とソファに背を埋め、ようやく石楠花を見る。
「ひどい面じゃな」
「……うん」
「何ゆえ閉じこもっておった」
「え……」顔を上げる。「聞いてないの？」
「知らぬ」
「そっか……」
また下を向く。
シロも――再び本に目を落とす。
「石楠花の授業参観は、此度で終いであったそうじゃな」
「……うん」
「全く」溜息。「それではもう、おぬしのくらすを見る機会は無いではないか」
「……あんた……あたしのクラスも見に来てくれるつもりだったの？」
「当たり前じゃろうが」
シロは本を置いて立ち上がり、台所へと入ってゆく。
「まあ良い。寝汗臭くてかなわんから、さっさと風呂に入って来い。その間に雑炊でもこしらえてやる」
「あ――」
石楠花は焦って口を開いた。
「あの、さ」
「何じゃ」
キッチンの中から声が返ってくる。

石楠花はパジャマの裾を握り締め、隔てた壁を相手に、たどたどしく言葉を続けた。
「あの……でも、高校入ったら、多分、またあるんだ……授業参観」
返事は無い。
「それに……これから、卒業式とか……色々あって」
返事は無い。
「だから……」
「分かった、分かった」
シロが万能ネギの束を片手に、キッチンから顔を出した。
「よう分からんが、何でも行ってやるから、兎に角体を流せ。大輝や義父上が帰って来たときに、そのような脂ぎった髪では満足に頭も下げられまい」
「……、うん」
石楠花が頷くと、シロの顔はまた引っ込んだ。
立ち尽くす石楠花。
やがて聞こえる、ネギを切る音。
わずかに開いたガラス戸の隙間から、涼しい風が吹き込んだ。

〈第二部・了〉

第三部プロローグ【追憶――ついおく――】

母様、痛い。
痛い。痛い。母様、痛い。母様。母様。

ああ――せっかく眠ろうとしているのに、この獲物の何とやかましいことか。任氏は苛苛と目をこすり、猪の毛皮が敷かれた巨木のうろから這い出しつつ、泣きわめく子供を睨みつけた。
その男の子は、巨木の脇に生えた細い木に、頑丈な草のつるで括りつけられたまま、根気よく大声で泣いていた。左耳が無く、そこから血が滴っている。さっき任氏が切り落として食ってしまったからだ。
人の身では容易に立ち入ることもかなわぬ、静かな、静かな森の奥。
空には黄色い月が輝いていた。
月明かりを真上から浴びながら、任氏はやれやれと歩み寄り、子供の前に立って、小さく溜息をついた。
「お主という子は全く、やかましうて敵わぬな」
出来るだけ長く新鮮な味を楽しめるよう、必要なだけ肉を切り取りながら、少しずつ、少しずつ食うつもりなのに。
お前の痛みなど、どうでもいいのに。
こんな森の奥で叫んで誰が来るというのだ。どうして無意味なこと

をするのだ。ただ自分を苛立たせるためにやっているのではないか。だいたい人間が――餌ごときが喋ったり泣いたりすることに、何の意味があるのか。

子供は任氏の苛立ちも知らずに泣き続けた。

「放せ、放せ！　こ……この物の怪めッ！　母様のもとへ……母様、母様！　か、かあさ」

「これ、やかましいと言うておる」

任氏はただ子供の頬を叩くつもりだった。

だが、眠いせいか力の加減が上手いようにいかなかった。

子供の首はごきりと音を立て、そして、頭がぶらりと垂れ下がった。

――折ってしまったか。

任氏は舌打ちする。

「面白うない」

今晩はさして腹が減っていないから味見だけで終わらせるつもりだったが、こうなってしまうと、出来るだけ早く食うに越したことはない。

任氏はたおやかな両腕を振るう。

子供の体は、括られていた細い木と共に、ばらばらになって転がった。

第十二章【変化性――へんげのさが――】

一

シロの細い指が呼び鈴を押すと、一呼吸置いてから、はあい、とハルの声がした。しわがれた小さな声――今年で九十歳になるとか言っていたか。もちろんシロからみれば大した年齢でもないが、人間で九十といったら、もう立派な年寄りである。

そんな老人がテキパキと歩いてきて戸を開けられるわけもなく、シロはいつも、この玄関前で突っ立って待つことになる。

小さな庭を見回してみても、いつものことだが、特に見るものもない。手入れされた庭木があるわけでもなし、花が咲いているわけでもなし。ただ土色の淋しげな空間があるだけだ。

やがて鍵を開ける音がして、戸が開いた。

ハルの皺くちゃな笑顔が迎えてくれた。もっとも、いつものような元気は無い。

「ああ、シロちゃん、ありがとうね。すまないわね」

「ついでのことじゃし、隣近所のよしみじゃ。いちいち気にするでない。それよりも此度は案外と安くついたぞ」

シロは左手に提げた買い物袋たちを揺らしてみせる。二つのビニール袋がこすれ合ってガサガサと鳴った。

片方は言うまでもなく殿山家の食料だが、もう片方は、ついでに頼まれたハルの買い物だ。

シロは釣銭と袋を渡しながら、いつもと同じことを言ってみる。

「はるの頼む食い物はいつも少ない。こればかりしか食わなんだら

精がつかんのではないか」
「ええ……。でも、もう年だから。食べようと思ってもね、お腹に入らないの。調子の良くないときは余計にね。これでも頑張って食べているのよ」
返ってきた答えも、やはり、いつもと同じだった。
ハルが風邪気味になってからこちら、このやり取りが毎日のように続いている。
夫に先立たれて子供も無いハルには、体を壊しても、代わりに買い物へ行ってくれる家族はいない。だから茶飲み友達のシロが、こうして必要なものを買って来ているのだ。
ハルは袋を片手に、シロを奥へと誘う。
「上がっていって。お茶を出すから」
「ああ、これ、気を使うでない。今も横になっておったのであろう。またおぬしの具合が良うなったら、ゆるりと邪魔するわ」
「そう……？　ごめんなさいね」
「良い、良い。大事にせよ」
シロは笑んでみせ、くたびれた玄関を後にした。
ハルの家は殿山家と隣接しているが、背中合わせに位置しているから、帰るには通りをぐるりと回らなければいけない。
買い物袋片手に細い道を歩きながら、シロは考える。
昨日作ってやった粥や煮物をハルはちゃんと食べたのだろうか。
早く元気になってくれなければ昼間が退屈で仕方ない。少し前に石楠花が風邪をひいたときは、無理矢理飯を食わせて布団に叩き込んでおいたら一晩で治ってしまったのに、ハルときたら、もう一週間以上も寝たきりだ。
縁側に並んで座り、他愛ないことを話しながら茶をすすっていたのが、何だかずいぶんと昔のことのように感じられる。
曲がり角で立ち止まって息をつくと、鼻の頭が冷えていることに気付いた。
そう――今はもう冬だった。

二

チーズバーガーの包みを慣れぬ手つきで開けながら、夜々はぽつりと呟く。

「こういう店は久しぶりだ」

「あ」大輝はポテトをかじる。「もしかして嫌いでした？　ハンバーガー屋とか」

夜々は小さく首を振る。

「そういうわけではないけれど、私も母様もこういうところへ来る習慣が無くてね」

「はあ」

大輝はストローに口を付け、コーラをすする。

暖房でよく暖まった二階の客席は時間帯の割に多くが埋まっていたが、わざわざ通学路から大きく外れた国道沿いまで来た甲斐あって、大輝たちと同じ制服は見当たらない。もっとも、万一級友たちが入ってきても、二人の座る席はちょうど観葉植物の陰になっているから、注視されない限りは気づかれまい。

夜々は包みから出てきた中身を、いつもの涼しい瞳で眺める。

「同じ系列の店舗には十年くらい前に来たことがあるが」小さな口がハンバーガーの端をかじる。「……。ふうん、こんな味だったかな。まあ、小銭で食べられるものにしては上等か」

「俺もあんまりジャンクフードって食べないんですけどね」

「お互い手料理に不自由しない環境で有り難いことだ――ところで」

夜々はぺろりと唇のケチャップを舐める。

「相談したいこととは何だい。入神家への婿入りの話ならば、こちらの準備はとうに出来ているよ」

「いえ、申し訳無いんですけど、その話じゃないんです」

大輝は苦笑いする。

「何ていうか、その……俺の母さんの話なんですけど」

「淋さんの？」
「はい」頷く。「最初は一緒に晩メシ食うときにでも相談しようかと思ってたんですけど、母さんの話って、親父にとっても……しゃくネエにとっても、ちょっとデリケートな話だから。だからって学校でも話せないし」
「淋さんをこちらへ再び呼ぶにはどうすればいいのか。そういう相談かい」
夜々はさすがに察しが良かった。
大輝は黙って頷く。
夜々は――ソファに背をもたれた。
「いつかそうした相談を受けるとは思っていた」食べかけのチーズバーガーを見つめながら。「だが、残念ながら……それは難しいね」
「やっぱりそうなんでしょうか」
「君と淋さんは完全な神獣であるという点で同じだ。しかし、君が今現世に存在しているのは、この三次元世界を再構築する際に起源点として必要だったからだ。君が現世と常世を行き来することは可能かも知れないが――いや」言いながら首を振る。「それも危険な行為か。完全な神獣と化してしまった今となっては、一度行ったきり、常世に帰還したと見なされてシステムの一部に還元されてしまう」
「……えっと」
複雑すぎて分からなくなってきた。
それを察したらしく、夜々は補足してくれた。
「つまり君が向こうに行くことは出来るが、淋さんを連れてくることは不可能で、それどころか君まで帰って来られなくなるだろうということさ」
「――。そう――ですか」
大輝はうなだれる。
薄々分かってはいた。それでも、冗談を言わない人間からはっきり言われるとこたえるものだ。母に「もう一度呼び戻す」などと豪

語してはみたが、やはり――楽観的すぎたのだろうか。
　夜々はうなだれる大輝をしばらく見つめていたが、
「まあ、そう落胆しないでくれ」
と、ぎこちない笑顔を作った。
「副産物的な現象だったとはいえ、石落の手で一度は出来たことだ。紅猫鬼とかいう妖怪の子孫であるという点では石之助君や石楠花も同じであるわけだし……特に石楠花は先祖返りの体質だから、石落よりも素質はある。天才では無さそうだけれど」
「石落が作り上げた術の使い方が分かれば、何とかなるんですかね」
「というよりは、それだけが問題だな」夜々は頷く。「渡りの術――この現世と、常世の中に構成した限定的な三次元空間とを自由に行き来し、同時に常世と現世の境界に亀裂を作る術……かなり複雑な術式とみて間違いあるまい。何かヒントでも残されていればいいんだが。石之助君にはもう相談したのかい」
「一応。やっぱり何も分からないみたいですけど」
「そう――か」
「……あの、すみませんでした」
大輝は頭を下げる。
「無茶な相談でしたよね、こんなの。あんまり気にしないで下さい」
「いや、私こそ力になれなくて済まない」
夜々も静かに目を伏せた。
　結局話はそれで終わってしまい、あとはトレイに残った飲み物やハンバーガーを片付けつつ、これといって実も無い話をするだけの時間となった。担任教師についてどう思うとか、最近寒くなって学校の行き帰りがつらいとか。夜々の言葉数が普段に比べて多かったのは、大輝の気が沈まぬよう気遣ってくれたからなのだろう。その優しさは素直に嬉しくもあったが、やはり余計に申し訳ないような気にもなった。
　店を出てしばらく歩き、本来の通学路へと戻る途中の歩道橋の上で、前を進んでいた夜々は不意に立ち止まった。

「そうだ」
「はい？」
つられて立ち止まった大輝に、夜々は振り返りながら笑みを送ってくる。
「最近ね、母様から料理を習っているんだ」
「誰がです？」
「喋っているのは私自身だから主語は必要ないと思ったんだが」
「ってことは……夜々さんが？」
「そんな顔をするほど意外なことかい」
「あ、いえ」
大輝は口元を隠す。
夜々はその仕草をじろじろと見て続ける。
「昔から簡単な料理ならば出来ないではなかったんだがね。本格的に習うのは初めてなもので、少々苦労しているよ」
「はあ……。でも、いきなりどうして」
「この歳になっても心境の変化はあるものさ」
また歩き出す。
「ところで君の好物は何だったかな」
「好物？　好物ですか」納豆以外は何でも美味いと思って生きているけど。「強いて言うなら中華料理ですかね。麻婆豆腐とか炒飯とか」
「なるほど――中華か」
「しゃくネエの作る炒飯がまた美味いんですよ。手際がいいから、こう、ご飯粒がパラパラしてて」
「……中華以外では？」
「へ？　ああ、ええと――そうだなあ、オーソドックスな煮物とかも、中華と同じくらい好きですね」
「煮物というと、和風の煮物かい」
「はい。あ、特にシロさんの煮物が絶品で。あの人のは出汁の取り方がこう、何というか」

「……煮物もやめにしよう」
「？」
何だ一体。
歩道橋を渡りきったところで夜々はちらりと振り返る。
「あまり見透かされても恥ずかしいから嫌だが、君は本当に勘ぐるということを知らないんだね」
「勘ぐる？」
「まあいいさ」
笑いながら右へ進路を変えた夜々のスカートが、くるりと舞った。
「少し急ぐとしようか。早く帰らないと母様たちが心配してしまう」
夜々らしい淡々とした足取りで階段を下り始める。
大輝は首を傾げつつその背を追いかける。
――はて。馬鹿にされたような、怒られたような。
理由を考えても分からないし、夜々の後ろ姿は何も語ってくれない。煮物などという漠然とした答えを返したのがまずかったのだろうか。もっと具体的に、大根の煮物とか、魚の煮付けとか……いや、そういうわけでもないような。
微妙な沈黙を保ったまま二人がちょうど階段を下りきったその時、けたたましい急ブレーキの音が景色を震わせた。
そして、それを断ち切るような、何かがぶつかる鈍い音。
突然だった。
「なんだ？」
大輝は耳をおさえ、音のしたほうへ視線を向ける。
反対側の階段を下りた先、太い柱の向こう側で、女子高校生の二人組が悲鳴を上げて座り込むところが見えた。彼女たちの正面には青いワゴン車が停車している。ブレーキ音は、あの車が停まったときに発したものか。
夜々が呟く。
「何事だろうか」
「さあ……って、あ、夜々さん」

「ちょっと見てくるよ」
止める間も無く、夜々はすたすたとあちらへ歩いてゆく。
と思ったら、今度は駆け足で戻ってきた。
「――行こう」
「え」手を掴まれた。「あの」
「見るようなものじゃない」
手を引っぱってこの場を去ろうとする夜々の声は、静かに動揺していた。
大輝は飼い主に逆らう犬のように、強引に留まる。
「ちょっと、どうしたんですか？」
「……。思ったより酷い」
仕方なく立ち止まった夜々は、心なしか青ざめた顔で首を横に振る。
「小さな男の子が……たぶん男の子だろう。車道に出て撥ねられたらしい」
「え――」
「あの状態では即死だ」
「そんな」
大輝は振り返る。
歩道橋の階段やワゴンの向こうに、座り込んだ女子高校生たちと、車から降りてきた運転手らしい男が、どうしたらいいか分からない様子で立ち尽くしている様子が垣間見える。男の子の亡骸はワゴンの陰にすっぽりと隠れているらしく、ここからは見えない。
騒ぎというほどでもない。
例えるなら、嵐の前の静けさのような。
ひとつの死があまりにも呆気なさすぎて、まだ景色が反応しきれていないような、奇妙な空気だった。
ワゴンの停まった車線を避け、何台かの車が次々に通り過ぎてゆく。彼らは子供の亡骸に気付いただろうか。あのスピードではよく見えないだろうか。
向こう岸の歩道では、こちらの様子に気づいていない主婦が、の

んびりと自転車をこいでいる。
　呆然とする大輝の手を握ったまま、夜々が口惜しそうに呟く。
「――。階段を――」
「え？」
「こんなことを考えても仕方ないのは分かっているんだが」恨めしげに歩道橋を見上げる。「何かがほんの少し違えばね……例えば、向こうにあるコンビニエンスストアに寄るために、私たちが反対側の階段を下りていたとしたら、あの子に声をかけて止めることが出来たかもしれない、などと」
きゅっ――と、握る手の力が強くなる。
「そんなことを思うと……無意味なことだけれど」
夜々はゆっくりと俯いた。
「……。少々、悔しいね」
小さな声だった。
　大輝は夜々の手を軽く握り返し、分かりました、と頷く。
「やってみましょうか、それ」
「――？　やってみる……というと？」

三

　歩道橋を渡りきったところで夜々はちらりと振り返る。
「あまり見透かされても恥ずかしいから嫌だが、君は本当に勘ぐるということを知らないんだね」
このタイミングで好物を訊いた理由も分からないとは、一体どれほど鈍感なのだろうか。夜々が単なる趣味で料理を始めたとでも思っているらしい。
　本当に――全く、この子は。
「……。まあいいさ」
呆れつつ右へ曲がろうとする。
　だが、大輝はなぜか反対側の階段を全速力で駆け下り始めていた。

あまりに唐突な行動に、夜々は面食らった。
「大輝くん？　おい、ちょっと、どうしたんだい」
とにかく後を追って、急ぎ足で階段を下りる。
階段を下りきったところでは、大輝が、見たこともない男の子に話しかけていた。
「……き、君」少し上がった息で。「何それ、ボール？」
「？　うん」
両手でゴムボールを持った小さな男の子は、そのボールを、ポン、とその場でバウンドさせ、キャッチしてみせる。
大輝は――大輝なりに怖い表情を作っているつもりなのだろう。顔をしかめて声を落とす。
「駄目だぞ、こんなところでボール遊びなんかしてちゃ」
「だってお母さん買い物してるんだもん」
子供は後ろのコンビニを指差した。ガラスの向こうでは、この子の母親らしき女性がカゴを片手に飲み物を物色している。
青いワゴンが車道を走り過ぎ、コンビニから出てきた女子高校生たちが、談笑しながら歩道橋の階段を上ってゆく。……なぜかそれを横目で確認してから、大輝は首を振る。
「いくら退屈でも、車の通ってる横で遊ぶのはダメなんだよ。例えばそのボールが、こっちの、車の走ってるところに出たとするだろ？」
「うん」
「そしたら君はどうする？」
「取る」
「そこに車が来たら？」
「……」男の子は少し考えてから答えた。「ひかれる」
「轢かれたらどうなると思う？」
「けがする」
「死ぬんだよ」
大輝はわずかに声を大きくして言った。

「人間って簡単に死ぬんだ。気をつけないと簡単に死ぬ。死ぬっていう出来事は、いつも、すぐ隣にあるんだよ」
「……」
男の子はうつむいた。
大輝は少し口調を和らげて問う。
「嫌だろ？　死ぬの。大人になれないの」
「……やだ」
「じゃあどうする？」
「道で遊ばない」
「そういうこと」
大輝は男の子の頭を軽く撫で、ようやく夜々のほうを向いた。
「よし。それじゃ行きましょっか、夜々さん」
「え、あ……ああ」
夜々は何とか頷いた。
何の説明もせぬまま大輝は歩き出し、夜々もそれに続く。
二人はしばらく会話もせずに帰路を縮めていたが、商店街の入り口を通り過ぎたところで、夜々はようやく思い当たって口を開いた。
「あ――大輝くん、もしかして、さっきのは」
「はい、ちょっとだけ戻しました。それでもけっこう疲れましたね」
大輝は歩きながら苦笑いする。「むやみに力を使っちゃダメとかは言いっこ無しですよ。あの子が死んじゃったとき、もし階段を反対に下りてればって言い出したのは夜々さんなんですから」
「……。そんなことを言った憶えは無いよ」
「あ、ずるいですよ。そりゃ確かに言ってないといえば言ってないですけど」
大輝は口を尖らせる。
その顔を横目で見てから、夜々はやれやれと首を振る。
「そこまで自由に権限を行使できるようになっていたとは驚いた。まさかとは思うが、度々実験していたわけではあるまいね」
「まさか。宮琵のときに使った以来です。だから……実を言うと、

上手くできるか不安でした」
「不安だった、か」
夜々はまた横目で大輝を見る。
「まあ、上手くいってくれて良かったよ」
大輝は気まずそうに目をそらした。
「いや、その……一応反省はしてるんですよ？　体質が変わったからって、因果の逆流――でしたっけ。それが失敗したら、どっちにしろ三次元が云々って話はこの間聞いたばっかりだったし……でも、あの」
「違うよ」夜々はわずかに笑う。「今はただ結果について言っているんだ。君が私のことをどんな人種だと思っているかは知らないが、私だって、子供が死ぬのを何とも思わないほど薄情ではない」
「え」
大輝はきょとんとした顔をする。
二人の足下を野良猫が通りすぎた。
それから――彼も、優しく笑った。
「あ……はは」
小さく頷いて。
「はい。知ってます」

四

家のドアを開けると、シロが嬉しそうな顔で居間から飛び出してきた。
「遅かったではないか大輝！　しろはもう大輝の帰るのが待ち遠しくて」
「あたしだバカ」
「なんじゃ石楠花か」
シロは瞬時に真顔に戻る。
石楠花は舌打ちしつつ靴を脱ぐ。

「ったく、あんたって本当に露骨な女だよね」
「その露骨な女の作ったぷりんが冷蔵庫の中で出来上がっておる」
「あ、食べる食べる」
「しかし石楠花も帰るのが遅かったの」
「うん」脱いだコートを玄関のハンガーに掛ける。「委員会があったから。色々面倒くさいんだ。あ――裏のおばあちゃん大丈夫だった？」
「大丈夫は大丈夫じゃが、なかなか良うならん。昼間の空いた時間がつまらぬわ」
シロは本当につまらなそうに言いながら引っ込んでゆく。
いったん階段を上がって部屋に鞄とコートを置き、居間へ入ると、もうシロがプリンを用意していた。
石楠花は早速テーブルについてスプーンを取る。
「いただきます」
「せいぜい肥えぬよう気をつけて食うがよい」
台所から余計なひと言が聞こえてくる。
一体どうやって気をつけろというのか――しかしプリンはよく冷えていて美味しかった。
「ん。おいしいじゃんか」
「小梅から習った通りに作ったまでじゃ」
シロが濡れた手を拭きながら戻ってきた。
「あれは抜けた女なれど、今の世の食い物をよう知っておる」
向こうのソファに腰掛ける。
石楠花は横目で壁の時計を見る。
「それにしても大輝はまだ帰ってないんだね」
「まさか夜々のやつめに誑かされておるのでは無かろうな」シロも細い目で時計を睨む。「ここのところ、あやつの態度は何やら妙じゃからな。どうにも油断ならん」
「夜々は前から変だよ。あんたよりちょっとマシな程度」
「そうではない。以前に比べて、あやつの大輝を見る目が、こう―

―何というべきか。鈍い小娘には分からんじゃろうが」
「誰のどこが鈍いって？」
「おぬしの頭じゃ」
「頭が鈍いのはあんたも同じだろバカ」
「同じじゃと？　ふん。同じ馬鹿でもしろにはこれがある」
シロはソファーからふわりと浮き上がり、プリンを食べている石楠花の隣に飛んできた。
停止した位置がやたらと近いが、石楠花は敢えてそちらを向かない。
「……」目を合わせぬまま。「何だよ」
「我ながら十五の小娘とは比べ物にならぬ体つきじゃ。ほれ、ほれ、よく見て己との差を思い知り、存分に羨むがよい」
「また巨乳自慢か。誰が羨ましがるもんか、そんな邪魔なもの」
「男にとっては邪魔ではないぞ」
「ちっ」
腹が立つので徹底的に無視を決め込もうとしたが、厚手のセーターに包まれてなお異常な存在感を放つ膨らみが、視界に無理矢理侵食してくる。
しかも、シロは石楠花の舌打ちを聞いて調子に乗ったか、手まで使ってそれをアピールし始めた。
「どうじゃ。おぬしと違って大きいぞ、柔らかいぞ。少し触ってみるか？　ほうれ、ほれ」
「寄せるな、揺らすな、持ち上げるな――ああもう、押し付けるなっ！」とうとうスプーンを置いて立ち上がる。「その無駄な巨乳をどけろよ、鬱陶しい！」
「ほっほ、まな板娘が怒りおった。腹を出っ張らせておる暇があれば、少しは出るべきところが出るよう精進すれば良いものを」
「うるさい！　何だい、こんなもん！」
「あ、きゃ、な――何をする！　あわわ」
石楠花が正面から両の胸を鷲掴みにすると、シロは慌ててその手を

払いのけた。
　それから牙をむき出しにして吠える。
「痛いではないか！　乳がもげたらどうするつもりじゃ！」
「もげたら右のオッパイは縁の下に、左のオッパイは屋根の上にでも放ってやるよ！」
「な、なんたることを」
「だいたいオッパイってのは赤ちゃんを育てるための物だろ？　そうじゃない時にあっても無駄なんだよ、無駄！　捨てちまえっ！」
「出鱈目なことを！　そんなに乳を無駄と思うておるなら、おぬしの貧相な乳はしろが取り払ってくれる！」
シロが猛然と襲い掛かってくる。
　石楠花は身構えたがもう遅く、瞬時に背後へ移動したシロの両手に、小ぶりな胸をがっしりと捕らえられていた。羽交い絞めに近い状態である。
「先祖返りか何か知らぬが、幾千年の時を生きた化生の速さを舐めるでない。それにしても……ほほ、どうしたことじゃこの乳は。こうして触ると、どれだけ小さいかがよく分かるわい」
「お前と比べるな！　っていうか放せ、この馬鹿力！」
「憎まれ口を叩くと本当に引き剥がすぞ。こんな情けない乳でも少しは未練があるじゃろう」
「バカ、やめ、――あ？」細長い十本の指が悪戯に蠢く。「……あ、バカ、変な揉み方……ちょ、やだっ」
「お？　何じゃこの小娘、生意気に妙な声を」
「二人とも何やってるの？」
「へっ」
石楠花は赤くなった顔を上げ、そしてそのままの姿勢で固まる。
　開けっ放しだったドアのところにいつの間にか立っていたのは、無表情の大輝だった。
　シロも凍りついたように硬直していた。
「た、大輝」石楠花の両胸を後ろから掴んだまま。「帰ったか。お

……遅かったな」
「もう少し遅かった方が良かったかもしれませんけど」
「待て。誤解じゃ大輝」
「いや俺は嬉しいですよ。二人が、その――意外と仲良くて。安心しました」
「待つのじゃ大輝、話を」
「大輝、これはシロが一方的に！」
「な……おぬしも喜んでおったではないか！」
「よけい誤解される言い方するな！」
石楠花が腕を振り払って掴みかかり、シロがその顔を平手で押し返す。
大輝は既にいなかった。

五

相変わらず夜々と小梅は、夜になると殿山家に風呂を借りに来る。
大抵は「邪魔になると悪いから」とすぐに帰ってしまうのだが、風呂上りにプリンが用意されていた今晩は、隣り合って居間のソファに落ち着き、それをチビチビとつついていた。
食べながら、小梅は感心した様子で唸る。
「すごいなあシロさん。このプリン、私の作るのより上品で美味しいもん」
それから少し肩を落とす。
「……教えたの、私なんだけどなあ」
「私は母様の作るプリンの方が味わい深くて好きだよ」
「夜々ちゃん――」小梅の顔が歓喜に緩む。「嬉しい！　かわいい！」
「抱きつくのは後にして、母様。こぼれてしまう」
「それにしても俺の誤解で良かったよ」
テーブルについて風呂の順番待ちをする大輝は、ゆらゆらと椅子を

漕ぎながら、飲み終えたコーラの缶を玩んでいた。父の風呂は長いので、しばらくこの姿勢が続いている。

「帰った途端、あんな危ない光景見せられて……。これからどういう態度で二人に接したらいいのか、本気で悩んだよ、俺」

自分の態度がはっきりしなかったからそんな関係が生まれてしまったのか――とすら考えたのだが、それは敢えて口に出さない。

向かいの石楠花は、単語帳から目を離さぬまま呟く。

「安心しな。あたしがもし本当にレズだったとしても、あんな奴とだけは絶対付き合わないから」

「聞こえておるぞ」

洗い物を終えたらしいシロが、エプロンで手を拭きながら居間へ戻ってきた。

「しろもおぬしのような娘は御免じゃ」

「ああそうですかい」

べえ、と石楠花は舌を出す。

夜々が不意にスプーンを止めた。

「そういえば、石楠花」

「なーに？」

「君は学校の行き帰りに、歩道をはみ出したり、余所見をして歩いてはいないだろうね」

「……あのね。あたしそこまで子供じゃないんだけど」石楠花は単語帳を閉じて脚を組む。「大体、いきなり何でそんなこと訊くのさ」

「君は年齢より落ち着きが無さそうに見えるからだ」

「な――こいつ」

石楠花は単語帳を握りしめる。

それが夜々めがけて飛ぶ前に、大輝は横から訂正した。

「今日、国道のところで子供が車に撥ねられたんだよ」

「へ？　うそ、何、交通事故？」

「まあ何とか無傷で助けたんだけど」

「撥ねられたのに無傷で済んだんですか？」

小梅が不思議そうに首を傾げる。
しまった――。大輝は焦る。まだ夜々以外の者には何も話していないのだった。
いずれ自分の口から皆に話すべきなのだろうが、ここは取り合えず、無理矢理訂正しておく。
「いや、その、今のはただの言い間違い」
「大輝や」シロが背後から覆いかぶさってくる。「助けたと言うたが、何か身が危うくなるようなことをしたのでは無かろうな」
「し、シロさん」
「そのようなどうでもよい子を助けるために、大輝が怪我をするようなことをしてはならぬ。あまり心配させんでおくれ」
「いや、どうでもいいって……それはちょっと」
甘い香りと、背中に当たる胸の弾力が大輝をしどろもどろにする。これに慣れることは永遠に無さそうだ。
石楠花が単語帳を投げる。
「バカ」
「あいた」シロの頭に命中した。「何じゃ小娘」
「そういうこと言わないの。そりゃ大輝が怪我したら、あたしだって嫌だけどさ」
「では何が言いたい」
「子供の命をどうでもいいなんて言うんじゃないよ。お義父さんにも言われたろ？　人を見殺しにするのは良くないって」
「しろはただ大輝の身を案じておるまでじゃ。言いつけはちゃんと覚えておるわ」
「言いつけは、ね……」
含みのある面持ちで腕組みをする。
シロは大輝を後ろから抱きしめたまま、ぶうたれた声で突っかかる。
「なんじゃ、まだ何か文句があるか」
「あんたって前と比べると色々変わったような気がするけど、そう

いうところはあまり変わんないんだね」
「そればかりは変われというのが無理な話じゃな。人を食らって化けたしろにとっては、人の命など肉のついでとしか思えぬ」
言いながらシロは大輝の頭を撫でる。
「大事に思う者は別じゃが」
「そんなんじゃいつまでたっても人間社会に溶け込めないだろ。――ねえ、小梅さんも同じ妖怪の立場から何とか言ってやってよ」
「……んーと」
プリンを食べ終えてスプーンをくわえていた小梅は、困ったような顔で呟いた。
「昔のことがあるから、人命の話は私も耳が痛いんだけどなあ」
「何の話だい母様」
「あ、何でもない何でもない」
小梅はぎこちなく笑い、石楠花のほうを向いて座りなおす。
「えっとね、なんて言ったらいいのかなあ。そのギャップって、けっこう仕方ないことなんですよ。かなり根本的なとこで違ってるから、埋まらなくて当然っていうか」
「仕方ないって――まさか小梅さんも、知らない人の命ならどうでもいいと思ってるの？」石楠花は面食らった顔をする。「ちょっとショックだな」
「そんな、私は違いますよ。シロさんと私もまた全然別で」
「どういうこと？」
「ええとですね」小梅は石楠花のように腕を組む。「妖怪っていう括り方、けっこう大雑把なんですよね。ひと口に妖怪といっても、共通点らしい共通点といったら、妖力がある――とかその程度で、生き方や理念はそれぞれ全く違いますから。例えば私はただの蟲怪なんですけど」
「なんじゃ、おぬしは蟲の類であったか」
「ムシ？　ムシってあのムシですか？　ムカデとかそういう」
「例がひどいですよ大輝坊ちゃん！　せめてチョウチョとかミツバ

チとか」
「蛾だけどね」
夜々がぽつりと訂正した。
小梅は、ううう、と悲しそうに唸ってから続ける。
「と、とにかく……私は単純に妖怪として生まれて、しかも元々人間を食べないんですよ。そういう生き物なんです。でもシロさんは、さっきご自身も言っておられましたけど、ただの狐として生まれたのが、人を食べているうちに妖力が育まれて化生になったわけで――そのへんが全然違ってて」
「母様の話し方は器用さに欠けている」
夜々もプリンを食べ終えた。
「厳密に同じではないが分かりやすい例えがあるよ。ほら、サーカスの調教師は、肉食獣が人を襲わないように色々と工夫して調教するだろう？　しかし調教される動物は、どうやら人間を食べてはいけないらしいと覚えることはできても、その理由まで理解するのは不可能だ。それは知能の程度とは関係なく、彼らが肉食動物としてこの世に存在しているから――いや、もっと言うならば違う種族だからだ」
空になったカップを置く。
「ましてや、そこの任氏は食人行為によって妖怪としての存在を成立させたのだから、人間という生物に対する考え方は更に極端だろう。人を食す行為を悪として理解するということは、この世における自らの立場を否定することと同義にあたる」穏やかに瞬く。「姿形が同じだから実感が湧かないかもしれないけれど、君たちは……本来相容れぬ肉食動物と同居しているのだよ」
夜々の口調は静かだった。
見れば隣の小梅も困った顔で頷いており、それを受けた石楠花は、腕組みをしたまま黙ってしまう。
何となく微妙な沈黙が訪れた。
シロは皆の顔をきょろきょろと見比べ、どこか焦った声で大輝に

助けを求める。
「た……大輝」二本の腕が大輝の体をきつく抱きしめる。「よう分からんが、この者たちは手前勝手な理屈でしろのことを語っておる。何やら悪しきもののように」
「別にそういうわけではないがね」
「しろはそのように感じたのじゃ」
いじけた声と共に、抱きしめる力が更に強くなった。
「さっきから聞いておれば、やれ相容れぬだの違うだのと――石楠花とて、夜々とて……この場にただの人間などおらんではないか。なぜにしろだけが妙な扱いを受けねばならぬ。しろは大輝の言いつけを守って人を食うのを我慢しておるし、誰も見殺しにせぬとも言うておる。その上いったい何の文句があるのじゃ」
「だからそういう話じゃなくてさ」
「しゃくネエ」
大輝は石楠花を視線で諫める。
石楠花はそれでも何か言いかけたが、結局――小さく溜息をついた。
「ま……いっか。あたしが突っかかったのが悪かったよ。ごめん」
「おぬしらの話はわけが分からぬ」シロの腕がほどける。「もうよい。しろは大輝の部屋で書でも読んでおる」
顔を背けて歩き出しつつ、ぼそりと言う。
「……。ウォタオヤンニィメン。……ジィシーファンダァフイ」
「へ？」
大輝が聞き直そうとする前に、シロは居間を出て行ってしまった。
小梅は首を傾げる。
「夜々ちゃん、シロさんなんて言ったの？」
「お前たちなんて嫌いだ、私は大輝くんだけを愛してる、とさ。完全に怒らせてしまったね」
「ええっ」小梅は青い顔をする。「そんなに怒らせるようなことだったかなあ」

「怒ったっていうより、たぶん淋しかったんですよ」
大輝はひしゃげたコーラの缶を置き、半開きのドアを見る。
「シロさん、あれでけっこう皆のこと好きですから。今まで親しい相手なんていなかったっていうし……自覚はないんでしょうけど、疎外感っていうんですか？　そういうの、必要以上に敏感なんだと思います」
「石楠花が謝る必要は無かったな」夜々は煙草に火をつける。「私の言い方に思慮が足りなかった。どちらかといえば、今の状態でも上出来だと弁護したつもりだったのだが」
ふう――と煙を吐き、テーブルの上に置かれた、プリンのカップに目を落とす。
「伝わるわけもなかったか」
「あとで俺がフォローしときます」
「お願いします」小梅の顔はまだ青い。「あと、あの……プリンごちそうさまって、伝えてもらえると嬉しいかもです」
「あ、はい」
「ねえ。やっぱり――違うのかな。あたしたちとシロって」
石楠花は足を組みなおし、背もたれを軋ませる。目はガラス戸の外を見ていた。
「褒めてやりたかないけどさ……けっこう優しかったりするんだよ、あいつ。プリンの作り方だって、多分……あいつは絶対違うって言うだろうけど、あたしのために小梅さんから習ってくれたんだろうし」
「しゃくネエのために？」
「昔お母さんによく作ってもらったって、なんかの時にポロッと言ったことがあるんだ。多分それ覚えてたんだよ」
「ふん？」夜々は指先で濡れた前髪を分ける。「意外だね、それは」
「でも怖いくらい残酷なことも平気で言うんだよ。さっきもそうだし――この間とか、テレビで大家族の特集やっててさ。小さい子や赤ちゃんなんかも映ってたんだ。それ見ながらニコニコ笑ってるか

ら、案外子供好きだったりするのかなって思ってたら、こやつらは味噌で煮込んだら美味そうじゃ――って」

溜息をつく。

「……。会った頃は違和感なかったんだ。化け物だから、悪い奴だから……残酷なのも当たり前だって、普通に思ってた。でも最近は、シロの良いところみたいなものが、ちょっとずつ分かってきて――だからあいつのそういう感覚が、だんだん納得できなくなってきちゃって」

「本能は良し悪しで語れるようなものでもないさ」

夜々は煙草を消し、さてと、とソファから腰を持ち上げる。

「――今日は色々と邪魔をしてしまったな。もう戻るとしよう」

「あ、私も」

小梅も立ち上がる。

六

シロは大輝のベッドの上へ寝転び、静かにふて腐れていた。

「……ふん」

ごろり、寝返りをうつ。

誰も彼も文句ばかり垂れて――。

ただ思ったことを言ったまでではないか。それすらもならないのか。

こう思え、ああ思えと好き勝手に命じられて、一々その通りにするような、器用な真似を出来るわけがあるものか。

静まり返った小さな部屋の中で、かっち、こっち、と時計の針が鳴っている。

枕元には、さっき本棚の隅から抜いた文庫本が一冊。夏目漱石とかいう、人の世では名の通った男が書いた物語らしいが、今は読む気がしなかった。

また寝返り――どうにも気が紛れない。

他に何か、手っ取り早く楽しくなるような書物はないか。

体を起こし、本棚に並ぶ背表紙を、つら、と視線で撫ぜる。
大輝の本棚は漫画ばかりだ。漫画は簡単に楽しめるが読み終えてしまうのが早い。この部屋にあるものは、もうほとんど読破していた。
さて、まだ読んだことのないものは、と視線を泳がせると、本棚の上に一冊、雑誌のようなものが乗っているのが目にとまった。
「む？」
何だあれは。
本棚に余裕がないわけでもないし、大輝の背では取りづらいようなところへ、わざわざ。
シロはふわりと浮かんで本棚のところまで飛び、それを手に取ってみた。

七

風呂を出た大輝は、居間の石楠花に「空いたよ」と声を掛けてから、バスタオルで乱暴に髪を拭きつつ、ふらふらと階段を上る。
少々湯船に長く浸かりすぎたせいか、気がぼんやりしている。一度台所へ寄って冷たい飲み物でも飲めばよかったかもしれない。
などと考えている間に、もう二階の廊下にいた。
「……ん」咳払いしてから。「――シロさん、入りますよ」
部屋の前に立ってノックする。
返事は無かった。
「？　寝てんのかな」
ドアを開けてみる。
シロはこちらに背中を向けた状態で、部屋の真ん中に座り込んでいた。
うつむいて黙ったままこちらを振り向きもしない。何となくドンヨリした空気が部屋にたち込めている。これは――大輝が思ったよりも深刻にへそを曲げているのだろうか。

どうしたものだろう。
「シロさん」ともかく声をかけてみるしかあるまい。「さっき帰り際に、小梅さんがプリンごちそうさまって言ってましたよ。それに夜々さんも」
「――どこが良い」
「へ」
「このような女どものどこが良い」
「……はい？」
「何じゃ、この女の白々しい面持ちは。内心嫌々呟えておるのが見え透いておる。しろがこの口で大輝の世話をいたすときは、決してかような面にはならぬ」振り返らぬまま。「この女もそうじゃ。見るに耐えかねる派手な化粧をしおって……だいたい、このような誰が見るとも知れぬ書物に裸をさらすような、あばずれた真似を」
「ちょっと、あの、シロさん？」
大輝は血の気の引く感覚をおぼえながら、そろそろと歩み寄る。
「まさか――、うわ！」
瞬時に立ち上がり振り返ったシロの手が、大輝の両肩を掴んでいた。まさに電光石火の動きである。
大輝が何を言うより先に、シロは泣くような声で吠え掛かってくる。
「おぬしという子は！　何ゆえこのような書物をこそこそと見ておった！」
その足下には、本棚の上へ隠しておいたはずの、本来ならば大輝の年では買えない類の雑誌が落ちていた。
がくがくと肩を揺さぶられ、大輝は声を上げる。
「ご、ごめんなさい！　ごめんなさいシロさん！　違うんです！」
「何が違うというのじゃ！」
「いや、あの、その本は――と、友達から無理矢理押し付けられて！　俺はいらないって言ったんですけど！」
「要らぬのならば捨ててしまえばよかろう！」

「……あ」目をそらす。「いや、だから……明日捨てるつもりで」
「まことか？」
シロの目がぎらりと光る。
その目を、大輝は真っ直ぐに見られなかった。
「……」下を向く。「……。すみません」
「――くっ！」
シロの指先が肩に食い込む。
大輝は跳ね上がった。
「あ！　いや、でもですね！　これは」
「しろが……しろが大輝のことだけを思って指を濡らしておる間、大輝は……石楠花や夜々相手ならばまだしも」シロは俯いてぶるぶると震えていた。「あのような、どこの馬の骨とも知れぬ女どもに浮気を……」
「う、浮気って――そんな」
大げさな。
そう言い終える前に、シロの両手が大輝を突き飛ばした。
「そこへなおれ大輝！」
「わ、わわ、あ」
足がもつれ、背中からベッドに倒れる。
慌てて体を起こそうとしたところで、顔に布のようなものを叩き付けられた。
「わぶっ？」
前が見えない。何だこのいい匂いは――ああ、そうか。これってシロさんの着てたシャツだな。って、まさか。
身を起こしながらそれを払いのけ、眼前の光景を目にした大輝は仰け反った。
「うお――ちょ、ちょっと！」
「言え。大輝はどのような格好が好みなのじゃ」
シロは既に、胸を包んでいた下着すら放り投げ、厚手のスウェットパンツを膝まで下ろしているところだった。

「四つん這いでも逆立ちでも、この明かりの元で好きなだけ見せてやるわ」
「や、やめ……っていうか！」仰け反ったままシロの顔を指差す。
「顔真っ赤じゃないですか！　変なことで無理しないでください！」
「無理も道理もありはせぬ！」
牙をむいてわめきながら、シロはとうとう最後の一枚に指をかけていた。
「写真の女どもには負けられぬのじゃ！」
ずるり。
止める間もなかった。
大輝の視界の中心――銀色の茂みが蛍光灯の光をきらきらと反射し、
「……あ」
大輝の鼻から、熱いものが流れ出していた。

八

――ちり紙はどこじゃ――。
壁の向こうからシロの悲鳴が聞こえてくる。
「……。もう夜遅いのに元気だな」
礼司は感心しながら煙草の煙を吐き出す。
それまでの騒ぎ声から察するに、また大輝が鼻血でも出したのだろう。この程度ならば近所迷惑にもならないだろうし、放っておくのが一番である。
あくびをしながら脚を組み、肘掛け椅子に背をあずける。
わずかに開けた窓から、ひっそりと夜の空気が忍び込んだ。
それはひどく冷たい風だった。

九

あくる日の正午過ぎ、シロはいつものように、ハルの家の呼び鈴を押していた。
片手にはおじやの入ったタッパーと、その上に、プリンのカップが二つほど。
空はよく晴れている。
昨晩は冷え込んだものの、今日はむしろ、いつもより幾分か暖かい。これならばハルの食欲も少しは戻っているかもしれない。
シロは淡くそんな期待を抱きつつ、右足の爪先で敷石を突付きながら、ハルが玄関の戸を開けるのを待っていた。
しかし、今日はなかなか出てこない。
シロは年経ているだけあって気の長いほうだが、あまりに出てくる気配が感じられないので、ためしに少し、耳を澄ましてみた。
家の中から物音はしなかった。
「……ふむ」
寝ているのだろうか。
食べ物を持参した身としては少々拍子抜けだ。
まあ、落ち着いて眠っているのならばそれはそれで良いかとも思い、シロは大人しく玄関に背を向け、立ち去ろうとした。
一歩、二歩、三歩。
――立ち止まって振り返る。
何故だろうか。不意に胸がざわめいたのだ。
「……はる？」
物言わぬ寂れた家。
シロは少し考え、裏口から中を覗いてみることにした。

十

学校へ行く習慣ができてから、世に言う「休日」というものの有難みが、夜々にも段々と分かってきた。
幼き学友たちに会えぬのは少々寂しくもあるが、こうして昼間から

小梅と買い物をできるのは素直に嬉しい。そんなことを思う瞬間、夜々は自分がまだ母親っ子だということを自覚して、ちょっと恥ずかしいような気になる。

買い物といっても、揃って物欲の無い母子がまわる店などたかが知れており、今日も大通りの書店と日用品店を軽くのぞいてから、商店街に立ち寄って今晩の食材を集めた程度であった。

帰り道、小梅はいつも通りよく喋った。

「だからね、今度は私たちの部屋にみんなを呼んだらいいと思うの。いつも呼ばれてばっかりじゃ悪いでしょ？　お風呂を借りてる分の光熱費だって受け取ってもらえないし、せめて、パーッとしたお食事でもね」

「あんな狭い部屋に六人も入ったらパンクしてしまうよ」

「あー……そっかあ」

「おや」

夜々は前方に見慣れた人影を見つけた。

やたらと高い背に長い脚、白銀色の巨大なポニーテール。電柱に寄りかかっているあの姿は人違いでもあるまい。

「任氏だ」

「あ、ほんとだ」

「あんなところで何をしているんだろうね」

「シロさあん」

小梅が声をかける。

シロは電柱に背をもたれて下を向いたまま、反応しなかった。

夜々は首を傾げる。

「聞こえていないのか？」

買い物袋を揺らしながら歩み寄る。

二人が目の前まで近寄っても、まだシロは顔を上げない。

夜々は片手を腰にあてる。

「おい、何をぼんやりしているかは知らないが、母様がああして声をかけているのだから、返事くらいしてあげてほしいものだ。もし

や昨晩のことをまだ怒っているのかね」
「――、」
「？　お、おい」
無言で正面から抱きすくめられ、夜々は動揺した。
「ちょっと待て、私は大輝くんではないぞ」
胸の谷間に顔が埋まって息苦しいが、押しのけようにも、片手では上手いようにいかない。
「こら、悪い冗談はよしたまえ。まさか本当に妙な趣味に目覚めたのではあるまいね」
「し、シロさん？　夜々ちゃんの体には男の子な部分もあるんですよ？」
小梅は小梅で何かがずれている。
ぼそりと、シロが何かを呟いた。
「――が、――」
「ん？」夜々は任氏の腕の中で聞き返す。「何だって？」
「はるが――動かぬ」
「……え？」
「はるが死んだ」
シロは夜々をきつく抱きしめ、静かに声を震わせた。
「はるが……はるが、死んでしもうた」
青空に鳥が鳴いていた。

Ｅｘｔｒａ　ｃｈａｐｔｅｒ【無形――Ｂａｌｄａｎｄｅｒｓ――】

どうしよう。うまく喋れないの。
こんな時なのに。
言いたいことが、本当はたくさんあるのに――。
まだ、素直な言葉が出てこないよ。

一

フゥリィは毛布をはね上げて体を起こした。
「――っ！」

途端、ずきん、と頭の奥が痛み、思わず顔をしかめる。
「あ痛だだ――なに今の夢……誰の声？」
聞いたことも無い声だったが、どこか懐かしいような気もする。
誰の声だろうか。いや、それ以前に、何と言っていただろうか。どうにも思い出せない。なぜ夢というのは起きた途端に忘れてしまうのだろう。
考えながら寝ぼけた目をこすると、やけに指が滑った。
「……ん」
生温い水――涙か。
「……。なんで私泣いてんの？」
それに、いきなり飛び起きたりして。
誰も見ていないとはいえ少々恥ずかしい。
寝間着の袖で目元を拭い、フゥリィはベッドから立ち上がる。
アパートの地下十三階に位置しているこの部屋は、家賃を払えなくなる心配をしなくてもいい代わりに、外気や自然光など、贅沢な類のものは一切望めない。まったく、自分のように若く可憐な女には似合わない環境だとフゥリィは思う。
もっともこのウェストベジンの町では、どんなに望んだところで、一部の富裕層やリーベンレン以外はまともな家に住むことなどかなわないのだが。
切れかけのライトに照らされた、今どき温度調節機能も無いアルミ製のベッドや、しょっちゅう狂っては飲み物を凍らせる冷蔵庫を眺めながら、フゥリィはまた顔をしかめた。
まだ頭が痛い。昨日の晩はアルコール系飲料も飲んでいないのに。
もしかして、この間交換した脳接端末のせいだろうか。
「ＤＤのやつ……まさか粗悪品埋め込んだんじゃないだろうなあ。あいつったら信用ならないんだから」
頭を抱え、ぶつぶつと呟きながらバスルームへ向かう。
鏡の前で寝間着を脱ぎ、目の前に映った自分の上半身を見て、フゥリィは一人で微笑む。

「――。うん、よしよし」
大丈夫。頭痛は美貌に影響していないようだ。
真ん丸な目に、少し褐色の混じった、つやつやの肌。短く切った金色の髪も活発に光を放っている。まあ、毎度ながら、背の低さと谷間の無さには目を瞑るとして。
「ひとっ風呂浴びますかね」
ぱん、と自らの尻を叩く。何かにつけて独りごとを言ってしまうのは、独身女の悲しい癖である。
今日はＳＭクラブ受付の仕事も休みだ。
ゆっくり湯船につかり、地下リニアで隣の駅まで行って新しい下着を買い、それから――医院に寄って、ＤＤのやつを問いただしてやろう。
予定を決めたフゥリィは、バスルームのカーテンを無駄に勢いよく開け放った。

二

ウェストベジンのスラムに位置する地下雑居ビルの最下層、しかもエレベータから最も遠い、ビル使用者共同トイレの隣。
ＤＤがここで個人医院を開いてから五年と半年になるが、指定手術機材のバージョンが更新されるたびに出費のあるこの商売では、そうそう移転のための資金など貯まるはずもない。女や酒をできる限り我慢して生活しても、あと十年は、この薄汚れた手術室で、得体の知れない客どもの脳味噌に端末を埋め込む生活が続く計算になる。今はつぶしの効くＤＤもその頃になれば四十過ぎである。
今日四人目の客を見送ったＤＤは、早いところこんな商売から足を洗うべきだろうか、などと弱気なことを考えながら、問診用デスクの丸椅子に腰を下ろして息をついた。
大して体に負担のかかる仕事ではないものの、人間の頭蓋骨を開ける作業はやはり神経を使う。客の血管を気にしすぎて、こっちの

血管が切れてしまうのではないかと真剣に心配してしまうくらいだ。こんな時に助手でもいれば茶の一杯も出してもらえるのだが、イーストベジンの地上ビルに移転して金持ちの相手をする身分にでもならない限り、それすら夢のまた夢である。

ばん、と扉が開き、女が飛び込んできた。

「ちょっとDD！　ドクトル・ドン！　確かめたいことがあるんだけど！」

フゥリィだった。顔を眺めていればそれなりに目の保養になるが、疲れているときは間違っても歓迎できない客である。

DDは煙草に火をつけた。

「何だ騒々しい。イチモツでも骨折したか？」

「私ゃ女だ！　って……え？」フゥリィは顔をきょとんとさせる。

「男のアレって骨が入ってたの？」

「入ってるわけねえだろ。何の用だ？」

「そうだった！」

フゥリィは人差し指で自分のこめかみを指す。

「これ！　先週交換してもらったやつ、本当にリーベン製？　まさか粗悪品じゃないよね！」

「うるせえから声落とせ」舌打ちする。「安心しな、お前さんに埋め込んだのは、ちゃんとメイド・イン・リーベンの型落ちもんだ。卸屋がインチキしてない限りはな。何か不具合でもあったか」

「不具合ってんじゃないけどさ」

とんとん、と頭を叩きながらフゥリィは口を尖らせる。

「今日の朝、起きた途端に頭が痛くなったんだよ。今まで頭痛なんてほとんど無かったのに。端末がまともなら、あんた何か手抜きしなかった？」

「さあなあ。手抜きはいつものことだからな」

「ちょっと！」

「いきり立つなよ」

DDは苦笑しながら煙草の灰を落とし、パックのコーヒーを開ける。

フゥリィはぶすくれた顔で睨んできた。
「からかわないでよね。私この歳で脳死なんてしたくないよ」
「そういえばお前さん幾つだっけか」
「三十六」
「うごほ――っ！」
飲み込もうとしていたコーヒーが気管に入り、ＤＤは胸を叩く。
「さ……げほ……」まじまじとフゥリィの顔を見る。「さ、さ、三十六だあ？」
「あんたって客の身分証にもちゃんと目を通してないわけ？　やっぱり信用できないなあ。本気で医者変えようかな」
「三十六ったらお前、俺より年上じゃねえか！」
ＤＤは白衣で口元を拭い、フゥリィの顔を指す。
「どのサロンで維持処理を受けたらそんなガキみたいな若さを保てるんだ？　ただのうるさい女だと思ってたが、うるさい上に気味の悪い女だな、お前は！」
「なんか知らないけど老けないんだよね、私って。そんなことより、先週の手術はホントに問題なかったの？」
「そんなことってお前……自分で疑問に思わないのがすげえな」
呆れつつ座りなおし、煙草の煙で気を落ち着ける。
「手術に問題なんか無ぇよ。単なる目の疲れか何かだろ」
全くこのフゥリィというやつは、何かにつけて変わった女だ。例の特技といい何といい、ひょっとして宇宙人ではなかろうか。
あのう、と声がして、二人は入口に顔を向ける。
そこにはいつの間にか一人の女が立っていた。フゥリィのような特異体質でないことを前提に外見で判断すれば、だいたい二十歳過ぎといったところだろう。小太りなその女は、入口に立ったまま、遠慮がちに口を開いた
「端末の交換をお願いしたいんですが、どれくらい待ちますか？」
「ん――？　ああ、いや、このパツキン女はね、別に手術を受けに来たわけじゃないんだ。今すぐ始められるから入って、入って」

「やめといたほうがいいよ。ＤＤってヤブだから」
「うるせぇんだよお前は！」
「し……失礼します」
女はおずおずと入室してくる。
　せっかく新規で来た客を逃がさないためには、フゥリィにさっさと帰ってもらうのが望ましい。ＤＤは、しっ、しっ、と追い払う仕草をしてみせる。
「ほれ帰った帰った。俺はこれから仕事だからな」
「お茶も出してくれないわけ？」
「この医院が大きくなって助手か受付嬢でも雇えたら、そいつらの誰かが出してくれるだろうさ」
「じゃあ永遠にお茶は出てこないね」
「なんか言ったかフゥリィ」
「別に」
「フゥリィ、さん？」
黙って二人のやり取りを聞いていた女が、不意に口を開く。
「もしかしてあなた、フゥリィ・ゴールドさんですか？」
「へ？　うん。そうだけど」
「超能力者の？」
「あちゃあ」フゥリィは金色の頭をかく。「噂はけっこう広がるもんだね」
「お前も有名人になってきたじゃねえか」
ＤＤは笑おうとしたが、次の瞬間、ぎょっとして表情を固めた。
　女が、フゥリィの足元に突然跪いたのである。
「お願いです」切羽詰まった声で。「お願いですフゥリィさん。どうか、あなたの力を貸してください！」
「ちょ、え？　ちょっと待ってよ」
あわわ、とフゥリィがうろたえる。
「どういうこと？　ねえＤＤ、どういうことだろ？」
「お、俺に聞くなよ。ちょっとお嬢さん、よく分からんが、取りあ

えず立ちな。フゥリィはそんなに下から見上げなきゃいけないほど大した女じゃねえんだからよ」
「そうだよ。って、何か引っかかるけど――取りあえず椅子に座ろう？　ね？」
「……」
女はフゥリィの差し伸べた手を取り、黙って立ちあがった。
とにかくデスク脇の丸椅子に座らせ、フゥリィは腕組みする。
「で、どういう話？　私の力を借りたいってのは」
「……はい」
女はうつむいて語り始める。
「実は人探しに力を貸していただきたいんです」
「人探し？」
「失踪した私の親友です。ベガといって――この子なんですが」
女は鞄から一枚のピクチャフィルムを取り出した。
フゥリィは受け取ったそれを見て、はああ、と溜息をつく。
「可愛い子だねえ」
「どれどれ？」ＤＤも横から覗き込む。「おお、こりゃいい女だな。上玉だ」
「ちょっと、下品な言い方やめようよ」
「すまんすまん」
「先月に突然姿を消してしまって、連絡も取れないんです」
渡し返されたフィルムをしまいながら、女は続ける。
「彼女のご両親が公安にも届けを出したそうなんですが」
「公安ねえ。こう言っちゃなんだが、ウェストベジンじゃ若い女の失踪なんざ珍しくもねえ。まともに調べちゃくれねえだろう」
「……ええ。だから、私、自分なりに調べていたんです。けれど――」
「ははん」ＤＤは頷く。「それで脳接端末の交換に来たわけか。新型のセブンスＣＰＵなら、街頭映像記録を高速で洗っても、見つけたいデータをピックアップできるからな」

「でも、他のところならともかく、この町の街頭カメラなんてほとんど故障してて役に立たないよ？　ネットでの情報収集じゃ人探しなんて無理だと思うけど」
「だからお前さんの超能力にすがってるんだろうよ」
「あ、そうか。けど……」フゥリィは口ごもる。「私、超能力者っていっても、そういう器用なのじゃないんだよね」
「ま、そうだよな」
ＤＤは頷いてから女のほうへ向きなおる。
「なあお客さん。あんたが超能力者と聞きかじってどんなエスパーを想像してたかは知らんが、このパツキンの特異能力は物凄く物理的で大雑把なんだぜ」
「……物理的？」
女は顔を上げて首をかしげる。
フゥリィは少し迷ったが、手っ取り早く見せてしまうことにした。
「ＤＤ、この受付室って感熱セキュリティ付いてる？」
「あるわけがねぇ」
「じゃあ平気か。一度しかやらないから、よく見ててね。ええと――」
「チェリルです」女は慌てて名乗る。「チェリル・ウォーカー」
「よく見ててねチェリルさん。いくよ……」
フゥリィはＤＤが使っているガラス製の灰皿を指差し、うん、と気合を入れる。
すると、軽い爆発音音とともに、積もっていた吸殻が燃え上がった。
チェリルは驚きの声とともに肩を縮める。
「きゃ――」
「分かった？　これが私の力」
フゥリィは手をひらひらと動かしてみせる。
ＤＤは苦笑いを浮かべる。
「近くの物を燃やしちまうんだぜ？　笑っちまうよなあ。分かり易

すぎてよ」
「す……」チェリルは炎を見つめて呆然としている。「すごい……」
「すごいって言ってもさ」
フゥリィが指を鳴らすと、灰皿の火は力を失い始める。
「こんな能力で出来ることなんて、せいぜい、夜道で襲いかかってくる男どもの服を燃やして驚かしてやるくらいだからね。人探しに役立つような力じゃないんだよ。だから――その、さ」
申し訳なさそうにフゥリィは言う。
「ごめんね、力になれなくて」
「そう……でしたか」
チェリルは肩を落とし、また下を向く。そのまま黙ってしまった。
どんよりと重い沈黙が受付室に充満する。
無言の時間は長く続いた。フゥリィが「辛い物の次に苦手」と常々語っている、気まずい沈黙というやつが。
案の定、フゥリィは音を上げて金髪をかきむしった。
「んん……ああもう、分かったよお！　手伝ってあげるから落ち込まないで！」
「えっ？」
「ただし私なんて人脈も無いしお金も無いし、超能力もこんなだし、ただ頭数が一つ増えるだけだからね。それでいいなら、まあ、空いた時間くらいは付き合ってあげるよ」
「いいんですか？」
「いいんだよ。こいつはお人よしなんだ」
ＤＤは二本めの煙草に火をつける。
「それも底抜けのな。しょっちゅう他人の世話で四苦八苦してやがる。ウェストベジンに住んでるくせしてこんな性格じゃあ、十中八九長生きしねえよ」
「それ褒めてんの？」
「どうとでも」
「た、助かります！　ありがとうございます！」

チェリルは深々と頭を下げる。
ＤＤとフゥリィは顔を見合わせ、一緒に肩をすくめた。

三

これといった取り柄も無いチェリルにとって、ベガは幼馴染の親友であると同時に、憧れの対象でもあった。
彼女は、小太りで顔立ちも地味なチェリルとは違い、綺麗な上に性格も明るく、幼い頃からいつも皆の中心にいた。何をしても人並み以上に出来る子だった。生まれ育ったのが同じアパートでなかったら、そもそも親しくなることも無かっただろう。
けれど、引っ込み思案なチェリルのことを、ベガだけが、いつも気にかけていてくれた。
友人の輪に入れてくれたのもベガだったし、悩んでいるときに話を聞いてくれたのも、チェリルに恋人ができた時、自分のことのように喜んでくれたのもベガだった。もしもベガがいなかったら、チェリルの人生はどれだけ寂しいものになっていたか、想像することもできない。
お互い大人になった今、ベガはイーストベジンの売れっ子ダンサーに成り上がり、チェリルはウェストベジンの片隅にある冷凍食品屋の店員に落ち着いていたが、それでもベガは、時々チェリルの部屋へ遊びに来ては、「元気にしてる？」とか、「彼氏とはうまくいってるの？」などと、気さくに声をかけてくれた。
ベガはこの世で一番大切な友人だった。恩人といっても過言ではないかもしれない。
だから――
「心配なんです」
そこまで話し、チェリルはうなだれる。
「もしかして……事件にでも巻き込まれているんじゃないかと」
カクテルグラスがカウンターの上で寂しげに佇んでいる。せっかく

フゥリィがおごってくれた酒だったが、あまり口をつける気が起きない。
小ぢんまりとした静かな酒場だった。
黙って話を聞いてくれていたフゥリィは、ようやく口を開いた。
「ううん」
しかし、出てきたのは、唸りとも溜息ともつかないような声だった。
「今のでベガちゃんがいい子だってのは分ったけど、もっとこう、手がかりになるような話は無いかなあ？　例えばほら、何か悩んでたとか、何かに脅えてたとか」
「……いえ」思い出そうにも心当たりがない。「そんなことは無かったと思います」
「参ったなぁ。それじゃ本当に足を使って探し回るしかないよ。こんな――アリの巣みたいにゴチャゴチャな街を。イーストベジンならまだ探しやすいけど」
フゥリィは難しい顔をしてグラスを揺らす。
「こっち側は建物の半分が地下建造物だし、しかも二割以上が違法建築で、他と繋がってなかったりするもんねえ」
「……はい」
「まあ、彼女の仕事場がイーストベジンだったなら、さっきＤＤに入れてもらった脳接端末で、あっち側の街頭記録映像をスキャンしてみるのが取りあえずの手段だよね」
「実は――さっきから、このバーのオープンルータ越しに実行しています」
「あ、そうなんだ」
「でも、覚醒時だと、やっぱり進行が遅くて。今晩の睡眠中に優先順位を高めて再実行してみるつもりです」
「それがいいね」
「あら？」
チェリルの脳接端末に一件のメッセージが届いた。
ちびり、とフゥリィはラムを飲む。

「誰かからメッセージ？」
「はい。――あら、彼からだわ」
共有暗号システムで解読処理を開始する。一秒もたたぬうちに終わった。さすがセブンスＣＰＵだ。
送られてきた内容は言語データではなく、リアルタイム通話の承認請求だった。国外ネチズンによる犯罪が急増した四年前から、正規品の端末では、これを承認する手続きを踏まなくてはリアルタイムの直接通話ができなくなった。どうせ気休めにしかならないというのに面倒なことである。
承認すると、彼の声が届いた。
――やあ、今どこだい。
――五番街の「トトメス」というバーよ。
――珍しいね、君がアルコールに手を出すなんて。
――一緒にベガを探してくれるっていう、親切な人と知り合ったの。その人と話をしているところ。
――本当かい？　実を言うと、ちょうど僕も五番街で夕飯を食べていたところなんだ。今から行くよ。
――待ってるわ。
通話を終了する。
フゥリィはグラスを口に付けたまま、こっちを見ていた。
「終わった？」
「はい。私の彼からで……今からこちらへ来るそうです」
「ふうん」
フゥリィはグラスを置き、口をへの字に曲げる。
「恋人かあ。いいなぁ、私なんてもう何年も独りぼっちだよ」
「そうなんですか？」
「意外だと思う？」
「はい。だって素敵な方だから」
「ありがと」
苦笑いしながら、フゥリィはカウンターに肘をついた。

「まあモテないってわけじゃないんだけど、誰と付き合ってもピンとこなくってさ。すぐ上手くいかなくなっちゃうの。そんなわけで最長記録二か月……ガキみたいだよね」ラムをまた一口飲む。「それで？　チェリルちゃんはその彼とどれくらい続いてるの？」

「ええと」指を折って数えてみる。「そうですね、ちょうど半年くらいでしょうか」

「もしかして初めての彼ってやつ？」

「どうして分かるんですか？」

「チェリルちゃんの雰囲気でね」

フゥリィは悪戯っぽく笑った。

「純情で初々しい恋の匂いがプンプンしてるよ。孤独なお姉さんは羨ましくて仕方ないです」

「そんな……」

顔が熱くなる。

やあ、と背後で声がした。

二人は振り返る。

噂をすれば何とやらだった。

「お待たせ、チェリル」

「ギータ」

「こちらが協力してくれるという人かい？」

ギータはフゥリィの方へ顔を向ける。

フゥリィはぽりぽりと金色の頭をかいた。

「ま、そういう成り行きになっちゃったのよね。フゥリィ・ゴールド。よろしく」

「ギータ・ミヤモトです」

「その名字ってリーベン系？　珍しいね、リーベンレンがこんなところをウロついてるなんて」

「いえ」ギータは笑う。「一番街のミヤモト孤児院の出身なので、そう名乗っているだけです。実の親は知れません」

「ありゃ御免。……それにしても」

フゥリィはまじまじとギータの顔を見る。
「ずいぶん男前なんだねえ。あたしなんかには目の毒だよ」
それから、つん、とチェリルを肘で突いてきた。
「いいの掴まえたじゃない、コノコノ」
「そんな――」
また顔が熱くなる。
ギータは、はたと首をかしげる。
「しかしフゥリィ・ゴールドっていうと、確か」
「あちゃあ」フゥリィは額に手をやる。「あなたも知ってるの？」
「やっぱりそうですか。最近噂になっている超能力者の方ですよね」
「あなたにも言っとくけどね、あたしは千里眼のエスパーじゃなくて、単なる発火能力者だよ。あんまり期待しちゃダメだからね」
ちっちっち、とフゥリィは人差し指を振る。
ギータの眉がぴくりと動く。
「発火能力？」
「フゥリィさんは念じるだけで近くにある物に火をつけることが出来るのよ。私もさっき見せてもらったわ」
代わりにチェリルが付け加える。
ギータはほんの刹那フゥリィの瞳を見つめ――
それから、へえ、と頷いた。
「それはすごいですね」
「褒めないでよ。ベガさん探しの役には立てないんだからさ」
「でも、超能力者が味方に付いているなんて、なんだか心強いですよ。今度僕にも見せてください」
にこりと笑う。
その笑顔を受けたフゥリィの顔が、唐突に曇った。
「――？」ギータの顔を覗き込む。「あんたって……」
「そうだ」
ギータはくるりとチェリルの方へ顔を向ける。
「もうアドレスの交換はしたのかい？」

「ああ、そうね。まだだったわ」
チェリルは右耳の下からファイバーケーブルを引き出す。
「フゥリィさん、もし良かったら、アドレスと共有暗号を交換させてくださいませんか」
「え？　あ、うん」
フゥリィは我に返ったように頷いて先端のプラグを受け取り、それを耳の下の差し込み口にセットしながら、目を合わせずに訊いてくる。
「あのさ、ついでにギータくんのも送ってもらっていいかな」
「そうするつもりです。彼もベガを探してくれているし、連絡は取りやすい方がいいですから」
「……ありがと」
ちらりとフゥリィはギータを見る。
ギータは相変わらず微笑んでいた。
その不思議な視線のやり取りに首をかしげつつ、チェリルはアドレス情報の送信を始めた。

四

まさかとは思ったが、あの女は、こちらの放った微弱なエネルギーに反応していた。おかげで余計な疑いを抱かせてしまったようだ。
試してみるべきではなかったか。
ただの人間を装ったままやり過ごすべきだったか。
いや――違う。これでいいのだ。
接触してしまった以上、いつ、どのような形で発覚するかは分からない。
ならば早い段階で排除してしまった方がいい。向こうから接触してくれれば好都合だ。
小さなベッドの中、チェリルのふくよかな体を抱きよせて「ギータ・ミヤモト」は微笑む。

そう。誰にも邪魔をさせるべきではない。
自分のためにも、チェリルのためにも。
チェリルは「ギータ・ミヤモト」の腕の中で、ぽつりと呟いた。
「……水槽が空っぽだわ」
「え？」
「亀さんがいないと、ただの水が入った箱ね」
壁際の水槽を見つめるチェリルの声は、寂しげだった。
「ベガがいなくなって、亀さんが死んで……あなただけはどこへも行かないでね、ギータ」
「ああ」
チェリルの髪を優しく撫でる。
「僕はどこへも行かないよ。亀はまたどこかで買ってこよう。ベガだって――」
そして嘘をつく。
「ベガだって、やがて見つかるさ」
「うん……」
「今日はもう寝た方がいい。イーストベジンの映像記録をオートスキャンするんだろう？」
「そうね」
チェリルは「ギータ・ミヤモト」の頬にキスをする。
「もう寝るわ。それじゃ、おやすみなさい――」
「ああ、お休み」
耳元でささやいてキスを返す。
脳接端末のノンレム誘導機能を使ったのだろう。チェリルはすぐに寝息を立て始めた。
その寝顔を眺めながら「ギータ・ミヤモト」は呟く。
「愛しているよ、チェリル」
そして静かにベッドから出る。
オレンジの発光ダイオードに照らされた、小さな部屋。
その中央に立ち、「ギータ・ミヤモト」は笑っていた。

彼の脳接端末には一件のメッセージが届いている。それは言語データだった。フゥリィ・ゴールドからの呼び出しである。

思ったよりも早いが。

「好都合だ――俺と同じ紛い物よ」

特別な感慨など無い。最愛の心清き者のために、綺麗さっぱりとご退場願おう。

五

どこもかしこも得体の知れない者どもで溢れているウェストベジンだが、午前三時の地下リニアステーション改札前となると、さすがに誰の姿も見当たらない。

金属とハードアクリルで作り上げられた殺風景な空間に、一人、フゥリィは立っていた。

煙草を口にくわえ、指を鳴らして火をつける。

ひと呼吸。

湿気を帯びた空間に紫煙が溶ける。

「……」ちらりと。「遅かったね」

「チェリルを寝かしつけるのに時間を食ってしまいました」

地上からの階段を下りてきたのはギータだった。真っ直ぐにこちらへ歩いてくる。

「雨が降りそうですよ。ここ最近は雨ばかりだ。もっとも」

不自然に離れたところで立ち止まる。

「地下暮らしをしている僕らのような者には――無関係ですけどね。フゥリィ・ゴールドさん」

例の端正な顔が微笑みを作っていた。

フゥリィの質問は率直だった。

「あんた何者なの？」

「気づいているんでしょう。大雑把に言えばあなたと同じ種類のモノですよ」

「同じ？」
「――まさか」
ギータはわずかに驚いた様子を見せた。
「全く自覚が無いまま生きていたのか」
「自覚……って？」
「さっき、バーで僕の放った力に気づいたんでしょう？」
「気づいたよ。初めての感じだった」
フゥリィは煙草の灰を落とす。
「何なの？　あの感覚――気味の悪い感じ」
「あなたはただそれを訊くためだけに来たんですか？」
「そうだけど」
「何てことだ」ギータは口元に手をやる。「これは予想外だった。僕は完全に藪蛇をつついたらしい」
「――？」
フゥリィはわずかに身構えた。
場の空気が変わったのが分かった。ギータの気配が揺らいでいる――なぜそんなものを感じ取れるのかは分からないが。
ギータはコートのポケットに手を入れる。気配とともに口調も変わっていた。
「不用意に人前で力を使っている時点で気付くべきだったか。……こうなっては仕方がない。悪いな、フゥリィ・ゴールド。チェリルの幸福に水を差すような可能性は、例外なく排除しなくてはいけないんだ。彼女自身が親友と思っていた相手だろうと、恋人と思っていた相手だろうと、無関係のお人よしだろうとな」
「あんた、ベガさんの失踪に関わってるの？」
「ああ。この際だから教えてやるが、その通りだ。俺が殺したんだよ。殺して切り刻み、八番街のゴミ処理場に捨てた」
冷たい瞳で付け加える。
「本物のギータ・ミヤモトも、今はもうこの世にいない」
「ちょ――ちょっと待ってよ、どういうこと？」フゥリィは頭を抱

える。「じゃあ、あんたは何者なわけ？」

「俺は常に他の何かとして生きる者だ。力を持たない代わりに自由な身でね」

ギータは穏やかに語り始める。

「少し前まではイーストベジンに住む老人だった。というより、老人になるまでその体を使っていたんだ。それが失敗でね」肩をすくめる。「ウェストベジンに比べたら治安のいいイーストベジンでも、老人は強盗どもの格好の的になる。財布を奪うついでに腹を撃たれて、下水道に放り込まれたのさ」

「何の話――？」

「完全に死んでしまう前に別の肉体を探さねばならなかったが、生憎と、下水道を泳ぎながら生活しているような物好きはいない。だから仕方なくその場にいた亀と同化した。亀の肉体で地上に這い上がるのは大変だったけれど――アダム・シュエ・カンパニービルの裏手でチェリルに拾い上げられたときは、しめたと思った。女の体と同化するのは好きではないが、人間であるぶん、亀よりはずっと行動がしやすいからな。隙を見て彼女の体と同化し、また手頃な肉体を探そうと考えた。しかし」

ふう、と息をつく。

「考えが変わってね」

「あんた、人間じゃないの……？」

フゥリィは後ずさる。

背筋が寒い。

何かを感じる。バーで会った時と同じように、ギータの全身から何かが発せられている。これは何だ。

「あんたは、一体」

「チェリルの心は澄んでいた。彼女が水槽の中の俺に語りかける全ての言葉も、例外なく澄み切っていた。彼女が部屋に一人でいる時には、色々なことを語りかけてきたよ。ベガという友人を尊敬していること、生まれて初めてできた、ギータという恋人を本当に愛し

ていること――俺の目には、ギータ・ミヤモトが、ただ寝床欲しさに転がり込んだ流れ者だということは一目で分かったが、少なくとも、疑うということを知らないチェリルは幸せそうだった。彼女が幸せならばそれでいいと、俺も思っていた。……あの日までは」

ギータ――いや、名も無き異形は舌打ちする。

「ひどい話だ。ギータはやはり、見た目の良い女に言い寄られれば簡単に心を動かされるような、価値の無い男だった。ベガという女もだ。あの女はチェリルに親切にしているように見えて、その実、自分よりも格下の相手を傍に置いておくことで、自尊心を満たしているだけだった。俺は長いこと人間の世の中に混じり、人間を見てきたから分かる。ベガは、自分よりも格下でいなければならないはずのチェリルが、一人前に恋人を――恋人という装飾品を手に入れたのが気に食わなかったんだろう。生意気だと、そう思ったのさ。だから取り上げようとした。チェリルが仕事に行っている間に」

平坦な口調で語る面持ちは、しかし、静かな怒りに満ちていた。

頭上で雨音が聞こえる。やはり雨が降り始めたのか。

続いて届いたのは――雷鳴だった。

異形は呼応するように語気を荒げた。

「ギータ・ミヤモトは、訪ねてきたベガを間抜けな笑顔で招き入れ、そして誘われるままに抱いた。チェリルのベッドでだ。許せると思うか？　あんなに素直な女の……心からの信頼を、全て、奴らは踏みにじったんだ」

「だから――」

理解できないままにフゥリィは問う。

「殺した？」

「あんな連中をチェリルの傍に居させておけば、いずれ彼女が傷つくことになる。俺は間抜けに腰を振っていたギータの肉体に乗り移って同化し、ベガの首を絞めて殺した。あとは簡単なものだったさ。この街ほど死体を処理しやすい環境は無い」ギータは笑う。「同化した時点でギータ・ミヤモトの意識は消滅して、記憶だけが俺の意

識に取り込まれた」
自らの眉間を指して問うてくる。
「なあフゥリィ・ゴールド、お前も――これで良かったとは思わないか？　もう素直なチェリルを冒涜する友人も、裏切る恋人もいない。彼女のことを愛している者が、彼女の愛する者として存在している。この平穏を乱すべきではないと、お前も思わないか？」
そう言いながらポケットの手を抜く。
「なあ、思うだろう」
銃が握られていた。
――いけない。
フゥリィは意識を集中し、発火を試みる。だが距離が遠かった。
銃声が響く。
フゥリィの上体は意志を離れて揺らいだ。
「あ……」
胸が熱い。
「あ、れ……？」
「すまないな」
「え？」笑う。「嘘でしょ、そんな――」
がっくりと膝をつき、そのまま崩れるように倒れる。
呼吸ができない。
撃たれた。こんなに呆気なく。
淡々と語る声が聞こえる。
「お前まで殺すことになったのは俺の不手際だが、その程度の力しか持たない自分自身も呪うといい。仮にも人間以外でありながら、たかが銃弾で致命傷を負い、しかも他の肉体に乗り移ることもできない、脆弱な存在であることを」
「ちょっと……タンマ」
「悪いな。お前に恨みは無かった」
「あ」
立て続けに引き金を引く指をフゥリィは見た。

その一瞬、ＤＤの声が蘇る。
――ウェストベジンに住んでるくせしてこんな性格じゃあ、十中八九長生きしねえよ。
本当だ。
でも、ちょっとこれはひどすぎない？
苦笑する間もなく、フゥリィの全身を鉛の玉が貫いていた。

六

念入りに全弾を叩きこみ、フゥリィ・ゴールドの絶命を確認してから、「ギータ・ミヤモト」は銃を捨てた。
銃声の余韻が漂う中、穴だらけになった無残な死骸を中心に、赤い水たまりが広がり始める。血の色が鮮やかでやけに美しい。
それを見つめながら呟く。
「リニアステーションの改札前に女の死体が転がっている、か」
珍しくもない話だ。少なくとも、この街では。
「なあフゥリィ・ゴールド。お前はさっき、人間なのかと俺に訊いたな」
亡骸は答えない。
「俺も――これからは人間さ」
コートを翻し、「ギータ・ミヤモト」は階段へと歩き出す。
そう。これからは人間だ。チェリルが幸せなまま老いて天に召されるまで、人として寄り添い続けるのが「ギータ・ミヤモト」の使命だ。
本当の名前など無くても構わない。
地上の雨音が、拍手のように彼を迎えていた。

第十三章【初代来訪――しょだいらいほう――】

一

シロは映画が好きらしく、よく大輝の借りるＤＶＤを一緒に見ている。

しかしシロが好む映画のジャンルというものが、大輝にはまだ、今ひとつ分からない。

例の「地獄マシーン」みたいな映画で喜んでいるかと思えば、玄人しか喜ばないような古典の名作を絶賛することもある。

ひょっとして映画なら何でも喜ぶのではないかと思ったこともあるが、やはりそういうわけでもないらしく、先月に借りた「ミシシッピ地獄通り」については、見るに堪えない最低な映画だと酷評していた。ちなみに大輝と石楠花は、その映画と「地獄マシーン」との違いがよく分からなかった。

さて、いったい何を借りればいいのか。

迷いながらレンタル店の中をうろついているうち、とうとう任侠映画の棚にたどり着いてしまった。

「……。これはさすがに無いよなあ」

剣呑なタイトルの並ぶ棚を眺めていると、なぜか薄ら笑いが浮かんでくる。

背後で聞きなれた声がした。

「学校帰りですか、大輝坊ちゃん」

「え」振り返る。「ああ、小梅さん」

「あれえ？　大輝坊ちゃんって、こういうのが好きなんですね。意外な事実が判明」

小梅はいつものとぼけた顔で、任侠映画の棚を見つめる。
　大輝は笑って首を振った。
「違いますよ。これはただ、シロさんに借りていってあげようと思って」
「シロさんが見るんですか？　やくざの映画」
「いや、そういうわけでもなくて」大輝は頭をかく。「えっと……この間、裏のお婆さんが亡くなったじゃないですか」
「ああ、ハルさんでしたっけ」
「あれから一週間になるけど、シロさんずっと元気ないんですよ。元気付けてあげたいけど、何してあげたらいいか見当もつかないし、俺って金も無いし」言いながら手に持った財布を振ってみせる。「せめてシロさんの喜ぶような映画でも借りて帰って、気を紛らわせてあげようかなって。……でもどんな映画がいいのか分かんなくて、迷ってたら、いつの間にかこんな棚の前に」
「そっかあ」小梅は頷く。「シロさん、やっぱり引きずってるんですね、あのお婆ちゃんのこと」
「けっこう仲良かったみたいですから」
頷き返しながら、ハルが死んだ日の夜を思い出す。
大輝自身はハルとさほど面識があったわけではないが、一階から聞こえてくるシロの泣き声があまりにも悲しくて、あの夜は大輝まで眠ることができなかった。
　ハルが死んだのは、風邪を急にこじらせたせいらしい。
　もちろん人間が風邪をひいただけで死ぬわけもない。実際はほとんど寿命に近い状態で、風邪はただ、最後のきっかけに過ぎなかったという話である。
　つまり、大輝が時を戻したところで運命は変わらないということだ。
　本来ならば人の死など修正できなくて当然の事柄なのに、なまじ余計な力を持ってしまったせいで、どうにも出来ないことがもどかしい。今日こうして映画を選んでいるのも、ただシロの気を紛らわ

せてやりたいという気持ちだけではなく、そうしたもどかしさに動かされているのかもしれない。

小梅が、そうだ、と手を叩く。

「そういうことならオススメがありますよ。こっちこっち」

小梅はとことこと歩き出す。

連れられて辿り着いた棚は、アジア映画の棚だった。

小梅はしゃがみ込んで「ええと、ええと」と目を走らせ、やがて一本のＤＶＤを抜き出した。

「あった！」

元気よく立ち上がり、手渡してくる。

「これです。あのね、その女優さん、すごく素敵なんですよ。ビクトリア・ウー。坊ちゃんも知ってます？」

「ああ」大輝はパッケージの写真を見て頷く。「最近ハリウッド進出した人でしたっけ。確か、ティンダロスの猟犬とかいうアクション映画で」

この間見た深夜番組で「注目の若手」と紹介されていた女優だ。経歴などにはあまり触れられていなかったが、アジア人である割に派手な顔立ちが印象深かったので覚えている。

小梅はこくこくと首を振る。

「そうそう。香港や台湾が拠点だった頃は恋愛映画が多かったし、いきなりアクションなんてどうなるんだろって思ったら、もうメチャクチャ格好よくて。綺麗だし、スタイルいいし。ほんと憧れちゃいます」

「はあ」

要するに小梅はこの女優の古株ファンなのか。

しかし大輝はどの主演映画も見ていないので何とも言えず、曖昧な返事を返すしかない。

取りあえず、手元のパッケージに再び目を落とす。

タイトルは、「百年の愛」――。

裏側を見る前に、すかさず小梅の解説が入った。

「それはビクトリア・ウーがハリウッド進出前に主演した映画なんですよ。街の片隅で出会った若い男女が恋に落ちるんですけど、すっごくいろんな邪魔が入って、なかなかうまくいかないんです。でも最後にはちゃんとハッピーエンドで、幸せな気持ちになれるお話なんです」

小さな顔でにっこりと笑う。

「それ見たら、きっとシロさん元気出ます。一緒に見てあげてください」

大輝はパッケージを見つめていた。

「……百年の愛、ですか」

改めて見たビクトリア・ウーの顔は、身近な誰かに似ている気がしたが、それが誰なのかは分からなかった。

二

居間のソファに座ってウトウトしていると、不意にインターホンが鳴った。

えいこらしょと立ち上がり、シロは壁際の受話器を取る。

「……誰じゃ」

このところ気が沈んでいるせいか、自然と不機嫌な口調になっていた。

だがインターホン越しに聞こえてきた声は、そちらの気分など知った事かと言わんばかりに軽快であった。

「きゃあ、嘘、その声って本当に任氏よね？　あんたマジで人間と一緒に住んでるわけ？　やだやだ、信じらんない！　すっごく変よそれ！」

「なっ……その声は」

シロは受話器を落としそうになる。

まさか——いや、馬鹿な。

声はけたたと笑っていた。

「あんたが人間とねえ。変われば変わるもんだわね。ぷぷっ」
「もしや貴様は……」
「シィ。ニィワンジィラウォダシェンインマ？」
笑いをこらえた声で、その声は肯定した。
シロは反射的に怒鳴っていた。
「帰れ！　おぬしの声など覚えておらん！」
「んなっ――ちょっとあんた、久しぶりに訪ねてきた知り合いに向かってあんまりじゃない？　せっかくお土産だって持ってきたのに」
「れずびあんの知り合いなどおらぬ！」
「あんた、しばらく会わないうちに変な言葉覚えたわねえ」声は呆れたようだった。「でも使い方を間違ってるわよ。私はレズビアンじゃなくてバイセクシュアル。まあ、旦那が死んでからは男とも女とも寝てないけどね」
「やかましい！　何であれ敷居は跨がせるものか！」
叩きつけるように受話器を戻す。
しかし声は続けて玄関の方から聞こえてきた。
「ちょっとこら、カギ開けなさいよ任氏！」
どんどん、と戸を叩く音も聞こえる。
「襲いに来たわけじゃないんだから、せめて顔くらい見せなさいって！　ちょっと、聞いてるの？　ねえ任氏ったら！」
「……ああ」
シロは再びソファに腰を下ろし、縮こまって耳をふさぐ。
「何ゆえあやつが今頃になって……どうしてここを突き止めおった」
背中一面に鳥肌が立っているのが分かる。
本当に、なぜ今頃になって。
「後生じゃから大人しう帰ってくれ……」
シロは眩暈をおぼえつつ頭を抱えた。

三

その不審人物は殿山家のドアにかじり付き、地団太を踏みながら、物騒極まる怒鳴り声を上げていた。

「開けろ、こら任氏！　私ゃ気の長いほうじゃないのよ！　家ごと吹っ飛ばされたくなかったら大人しく出てきなさい！」

後ろ姿だから顔こそ見えないものの、少なくとも、その格好は景色にそぐわぬ派手なものである。

いや、ただ派手なのではなく、いかにも金のかかっていそうな雰囲気を匂わせている。金目の物に疎い大輝には何の毛皮か分からないが、とにかく庶民ならば一生縁のなさそうなふかふかのコートを着込み、丁寧なパーマが施された栗色の長い髪は、ドアを叩くリズムに合わせてゴージャスに揺れている。

やがて女は、ちいっ、と大きく舌打ちし、傍らに立ててあったスーツケースに腰をかけた。

「あんの馬鹿、マジで籠城しやがって……ん？」

ようやく大輝と小梅に気付き、優雅に手を振る。

「あら、この家の子？　お帰りなさい」

上品で美しい笑み。化粧は濃いが、声の印象よりも若い女だった。

それにしても、どこか見覚えがある。

大輝が気づくより先に、隣の小梅が、「あっ！」と指差した。

「び、び、び――」裏返った声で叫ぶ。「ビクトリア・ウーだ！」

「え？　あ」

大輝もようやく気付いた。

女は微笑んで頷いた。

「お嬢ちゃん、私のこと知ってんの？　嬉しいわあ。まだ日本じゃそんなに有名じゃないと思ってた」

「ど、どうしてこんなところに……日本語だし……え、夢？　これ夢ですか？」

「落ち着きなさいな、お嬢ちゃん」

ビクトリアはくすくすと肩を揺らし、それから小梅の顔を覗き込む。

「ん――？　あんた妖怪だわね。ちょっと妖気が漏れてるわ」

「はい！　妖怪です！　す、好きなものは夜々ちゃんです！」
「よよちゃん？」
「う、うちの子です！」
小梅は興奮のあまり錯乱し、ビクトリアの発言の意味するところに全く気づいていない。
　対して大輝の頭は、これほど奇異な状況であるにも関わらず、妙に落ち着きを保つことが出来ていた。小梅に先を越されて動揺のタイミングを逸しただけかもしれない。
　ともかく、突っ込まざるを得ないところには突っ込んでみることにした。
「あの」
「なあに、少年」
「その――小梅さんの力に気付いたってことは、妖怪の血を引いてる方、ですよね？」
「私は純度百パーの妖怪よ。任氏から聞いてない？　漢の頃の中国に綺麗な妖猫がいたって」
しゃきん、と右手の爪を伸ばしてみせる。鋭い爪先が毒々しく光った。
　大輝はまじまじとビクトリアの顔を見た。
「シロさんの……お知り合いですか？」
「シロ？　ああ、今あの子はそう名乗ってるの？」
「あ――ええと、はい」
「ふうん」
ビクトリアは興味深げに頷き、それから悪戯な笑みを浮かべた。
「ま、知り合いっていうか、ある意味深い関係なのよね。だって私ったら、あの子のホクロの位置や性感帯まで知ってるんだから」
「せ……え？」
大輝は仰け反る。
「え？　それって……はい？」
頭の回転が付いて行かない。今、なんて言ったんだ、この人は。

ビクトリアは楽しそうにハイヒールの片足を揺らす。
「あの子って面白いのよ。足の指とか腋の下とか、変なところで感じるの。普通、そんなところ触られたって、くすぐったいだけでしょ？　それにね――」
「やめんか馬鹿者っ！」
突然凄まじい勢いでドアが開き、裸足のシロが飛び出してきた。
「さっきから聞いておれば好き勝手に語りおって！」
トマトのように真っ赤な顔で人差し指を突き付ける。
「だいたい何が深い仲じゃ！　会うたばかりのしろを騙して住処へ招き、酒に酔わせて押し倒したのであろうが！」
「あんた気付いてなかったの？　ただのお酒じゃなかったのよ、あれ」
「や――」
シロは敷石を蹴って掴みかかった。
「やはり良からぬ薬を盛っておったか！」
「人聞きの悪いこと言わないでよ。ただアルコールが吸収されやすいように細工してただけだってば」
ビクトリアは立ち上がってシロの手を避けつつ、大輝に微笑みかける。
「可愛かったのよ、あのときの任氏。切なそうに小指噛んじゃってさ。子犬みたいに、キューン、キューンって」
「わああ！　聞くな大輝！」
「あんなに気持ち良くしてあげたのに、起きてみたら姿が消えてるんだもん」
ビクトリアは懐かしそうに語りながら、シロの手が繰り出す続けざまの斬撃を、流れるような体さばきでかわしてゆく。
「ねえ任氏」
シロの腕をぱしりと掴み、引き寄せた。
「どうして、たった一晩で逃げちゃったの？」
「に……逃げぬ女が」

シロはポニーテールをざわめかせ――
「どこへおるか！」
怒号と共に、ビクトリアの顔面に頭突きを見舞った。
ビクトリアは「んぎゃ！」と鳴いて仰向けに倒れる。
肩で息をしながら、シロはその腹を踏みつけた。
「寝首を掻かれなかっただけ有り難く思え、紅猫鬼！」
「え？」大輝はようやく口を開く。「ほ……紅猫鬼？　って」
その名前は、確か。
小梅の声が大輝の言葉を遮る。
「あの、ビクトリアさん！」
「な……エホッ」
シロの足に腹部を踏まれたまま、苦しそうにビクトリア――いや、紅猫鬼と呼ばれた妖怪は、小梅の顔を見上げる。
「な、なあに、お嬢ちゃん」
「サイン下さい！」
「へ？」
「あなたのファンです！　小梅ちゃんへって書いて下さい！」
「サイン……うーん、このタイミングでそうきたか」
紅猫鬼は顔を引きつらせた。
「あんた面白い子ね。何なら一緒に写真も撮ろっか？」

四

思えば、シロと出会ってからというもの、石楠花は異常な出来事を続けざまに経験してきた。映画館で腕の群れと格闘してみたり、異次元の牢獄に連れて行かれたり、自分自身が化け猫になってみたり。よく今日まで気が狂うことなく生きていられるものだと、我が事ながら感心するのもしばしばである。
だが、この夕食会で、石楠花のキャパシティはとうとう限界を迎えようとしていた。

「つまりどういうこと？」
テーブルに並んだ出前の寿司を前にしても、食欲など全くわいてこない。
「あたしのご先祖様はビクトリア・ウーで、ビクトリア・ウーは妖怪で……」
頭が痛くなり始めた。
「しかも……変態……？」
「変態とは失礼だわね」
向かい側の紅猫鬼は、寿司桶からマグロの寿司をつまみ上げ、ちょいちょいと醤油に付ける。
「もうちょっと先祖を敬いなさいな。私が日本に住んでた時に子供こさえてなきゃ、あんたも存在しないのよ？」寿司を口に放り込む。
「――ん。これも美味しい。やっぱり寿司は日本で食べるに限るわね。シャリに対する姿勢が違うっていうのかしら」
そして満面の笑みで茶をすすり、面持ちをとろかせる。
「はあ、お茶がまた最高。しかし猫相手に魚を選ぶあたり、礼司さんは分かってるわあ」
「喜んでいただけて幸いですよ」
義父は紅猫鬼の隣で、同じく湯呑みを口に運ぶ。いつもの如く異常な落ち着きである。そろそろ神経を疑いたくなってくるほどだ。
シロは紅猫鬼を睨みながら呟いた。
「……こやつと夕餉を共にすることになろうとは」
大輝の椅子に自分の椅子をぴったりと付けて、先ほどから片時も離れようとしない。まるで敵と相対するかのように警戒心を強めていることは、全身から放たれる激しい妖気からよく分かる。この妖気も石楠花の頭痛の原因かもしれない。
紅猫鬼は呆れ顔で、あんたねえ、と割り箸を振った。
「そんなに警戒しなくてもいいって言ってるでしょ？　私ゃ死んだ連れ合いに操立ててる身なんだから、もう襲いやしないわよ」
「まことかどうか知れぬ」

シロは大輝の袖を掴み、恐ろしそうに身を縮める。
キッチン側の食卓に入り切れず、夜々と共に向こうのテーブルで寿司桶をつついていた小梅が声を投げてきた。
「あのお、ビクトリアさんのご主人って日本人だったんですよね。どんな方だったんですか？」
「うちの旦那？　話して面白いような男でもなかったわよ」
紅猫鬼は箸の先で生姜を拾い、口に運ぶ。少し噛んで顔をしかめた。
「ん、酸っぱいわね。ガリって久々に食べたわ」
「そんなこと言わないで教えて下さいよ」今日の小梅はミーハー丸出しである。「やっぱり素敵な方だったんでしょ？　格好良いお侍さんとか」
「あっはは」
湯呑み片手に腹をかかえ、紅猫鬼は豪快に笑った。
「それ全然ハズレ。あの男ったら、いっつも全身泥だらけにした小汚い貧乏百姓でね。しかも図体ばっかり大きくて、頭の回転スピードは猪並み。顔なんてカバかセイウチみたいだったわ。のろまで口下手で、おまけに不細工で、まるでウドの大木かゴリラ人間って感じ。村の女の子たちにも馬鹿にされっぱなしだったっけ」
湯呑みを置いて肘をつく。
「だいたい名前からして間抜けなの。茂平よ、モヘイ。いかにも鈍そうな名前でしょ？　ぴったりすぎて今思い出しても笑えちゃう」
「ひっどい言い草……そんなに文句言うくらいなら、どうして結婚したのさ」
石楠花はようやく割り箸を抜く。紅猫鬼があまり美味そうに食べるもので、つられて食欲が出てきてしまった。
紅猫鬼は、うーん、と斜め上を見る。
「そうねえ。あいつ親兄弟いなくて苦労してたし、人づきあい出来ないから村でも独りぼっちだったし――私の一生って半永久でしょ？　たかが何十年かそこら、女房として過ごしてやってもいいかなあ、なんて思っちゃったわけよ」華奢な肩をすくめる。「言ってみ

りゃボランティアみたいなもんかしら」
「そして子供まで生んで、今日まで操を立てている、かい？」
黙々と寿司を食べていた夜々がこちらに顔を向けた。
「馬鹿にするわけではないが、見上げたボランティア精神だな」
「ちょっとちょっと、バカ正直に受け止めないで頂戴な。恥ずかしいからこんな言い方してるだけに決まってるじゃないの」
「あ。やっぱり愛してたんですね？」
「まあね」小梅の言葉に苦笑いで頷いてみせる。「少なくとも私の目から見れば、そんなに捨てたもんでもない人間だったのよ。――でも、もう新しい相手を作らないって決めてるのは、やっぱり……憐れみみたいなもん、かな」
出汁巻卵をつまみ、一口齧る。
「茂平ったら、私っていう女房の他に、自慢できるものなんて一つも無かったんだから。せめて私くらい、あいつのものでいてあげないと可哀そうな気がしてね」
「これからもずっと――ですか？」
シロにしがみ付かれて気まずそうにしていた大輝も、やっと口を開いた。
紅猫鬼は笑った。
「ずっとよ。私に惚れる男はみんな、あのウドの大木に敗北してゆくの。茂平本人がそんなこと望んでたとも思わないけど、そういう不毛な愛があってもいいと思わない？」
「はあ……」
感心しつつも良くは分からないような面持ちで、大輝は曖昧な返事を返す。
紅猫鬼は残りの出汁巻を口へ放り込んでから、「それにしても」と話を変えた。
「私ゃ色々びっくりだわよ。まさかこんなところで自分の子孫に会うとは思わなかったしさ」
石楠花の顔をじろじろと見てくる。

「それも任氏と男の子を取り合ってるなんてねえ」
「な、何だよう」
「我が子孫ながら大した度胸だと思っただけよ。任氏に盾突くなんて、そこそこの大妖でもビビって出来ないことよ？　こいつったら」
言いながらシロを見る。「私と違って凶暴な上に、コテコテの人食いなんだから。よく今日まで殺されなかったもんだわ」
「安心せい。しろはもう人なぞ殺さぬ」
「え」
紅猫鬼はぴたりと固まって、シロの言葉に目を丸くする。
「今……なんつったの、あんた？」
「もう人は殺めぬと言うておる」
「はああ？　あんたがあ？」
せっかくの美形が跡形もなくなるほど大きく口を開け、紅猫鬼は身を乗り出す。
補足したのは大輝だった。
「あの、言い忘れてましたけど、最初に会った頃、シロさん約束してくれたんですよ。もう人は食べないって」
「あ――ああ、なるほどね」
紅猫鬼は座りなおした。
「要するに、好きな子の言いつけを守って我慢してるわけだ。その従順さにもびっくりだけどさ」
「何を決めつけておる」
「は？」
「しろはもう、人を食いたいなどとは毛頭思っておらぬ」
「……？　食べたく……ない？」
紅猫鬼は再び固まった。
いや、今度は紅猫鬼だけではない。
この居間にいる全員が硬直していた。
小梅の箸から、イカの寿司がぽろりと落ちる。
シロは仏頂面で付け加える。

「もっとも、そうなったのは最近のことじゃがな。思えば、この家で暮らすようになってから幾度も分かりかけたようなことはあったが――ここのところ、ようやくはっきりと分かるようになった。今までのしろは愚かじゃった」
「あんたそれ……マジで言ってるわけ？」
紅猫鬼はシロの顔を覗き込み、口元を引きつらせる。
シロはふんと鼻を鳴らした。
「なんじゃ紅猫鬼。しろが人を食わぬのはそんなにおかしいか」
「食べないことじゃなくて、食べたくないって言ってることに驚いてるのよ」
「何の驚くことがある」
「ど、どうしちゃったんですかシロさん？」
小梅が大きな目を白黒させ、向かいの夜々も首をかしげる。
「一体何があった、任氏？　遊び半分に人間を八つ裂きにしていたという妖怪の台詞とは思えないぞ。まさか頭でも打ったのでは」
「やかましい！」
シロはテーブルを叩いて立ち上がった。
「どう心変わりしようとしろの勝手じゃ！　人の肉を食らわねば死ぬわけでもあるまいし、いちいち騒ぐようなことではなかろうが！」
吠えるような声で怒鳴り、舌打ちしてドアの方へ歩き出す。
小梅が恐る恐るの様子で問う。
「あ、あの、どこへ……ひいっ！」
睨みとともに殺気混じりの妖気を叩きつけられ、小梅は縮みあがる。
「な、何でもないです。ごめんなさい、ごめんなさい」
「辛子を――」
「へ？」
「辛子を切らしておったのを思い出した。こんびにえんすで買うてくる」
「え……あ……はい」
小梅は縮こまったまま、こくり、と頷く。

そしてシロは居間をあとにし、そのまま外へ出て行ってしまった。
残された者たちは、開けっ放しのドアの見つめたまま呆然とするしかない。
小梅は魂の抜けたような顔で、夜々は眉をひそめ、そして紅猫鬼は目を瞬かせながら、ただ言葉を失っていた。
奇妙な沈黙を静かに解いたのは礼司だった。
「シロさんも変わったね。彼女からああした言葉が出てくるとは……」ずずりと茶をすする。「ん……。まあ、思わなかったわけでもないけれど、実際聞いてみると、正直言って驚くものだ」
「本気で言ってた――んだよね、あれ」
石楠花はまだ信じられないでいた。
シロが。あのシロが、あんなことを言うなんて。つい一週間前にも似たような調子で居間を飛び出したが、あの時とは、言うことがまるで逆ではないか。
皆が唖然としている中、大輝がそろそろと立ち上がる。
「あの、俺もちょっとコンビニ行ってくる。修正液無くしちゃったから、買っとかないと」
誰とも目を合わせずにそれだけ言い残し、やけに早い足取りで居間を出て行った。
これで残ったのは五人になった。
礼司はふむと頷き、そういえば――と紅猫鬼に問う。
「今更だが、あなたはどういう用件で御越しになったのかな」
「ん？　あ、ああ」紅猫鬼は我に返ったように姿勢を直す。「用事なんて無かったんだけどね。ただ、しばらく消えてた任氏の妖気を久しぶりに感じたもんで、あいつまだ生きてたんだあ、懐かしいなあ、って思ってさ。新作の撮影とかプロモーションがあったからなかなか来られなかったんだけど、二日だけ暇ができたから、ちょっと顔でも見るかと思って来てみたわけ」
栗色の髪を撫でながら、よいしょと脚を組みなおす。
「しっかしまあ――ここら歩いてる人たちに、糸目で銀髪のデカい

女はいないかって聞き込んで、その人なら殿山さんちに居候してますよ、って言われた時には仰天したわよ。まさかあの任氏が人と同居してるなんて考えられなかったもの」

「一度しか会ったことのない知り合いの顔を見るためだけに、わざわざ海を越えてやって来たんですか？」

「ん、ひょっとして礼司さん、私のこと警戒してる？」

「別にそういうわけではありませんが」

「本当に？　――あっ、こら石楠花ちゃん、どうしてネタだけ取るの！　シャリも食べなさい！」

「べ、別々に食べるのが好きなんだよ」

口やかましい先祖もいたものだ。

こちらのやり取りをよそに煙草を取り出し、夜々がぽつりと呟いた。

「……。人を食いたがらない人食い狐、か」

暗くなったガラス戸の外を見ながら、くすりと笑う。

「まあ、もともと大輝君の言いつけで殺生は控えていたわけだから、そうなったところで何かが変わるわけではないがね」

くわえた煙草に火をつける。

夜々の言葉に、紅猫鬼の眉がわずかに動いたように見えた。

五

思った以上に外の空気は冷たくなっており、急いだせいでパーカー一枚しか羽織ってこなかったことを、大輝はすぐに後悔した。

夜道に人の気配は無い。温かい時期の同じ時間帯には、煙草を買いに出る人などの姿も見受けられるのだが、こう寒くては誰も出不精になって当然だろう。

丸めて抱えたロングコートを持ち直し、足取りをはやめる。

小走りで駆けて一つめの角を曲がったところで、背の高い後姿がとぼとぼと歩いてゆくのを見つけ、大輝は声をかけた。

「シロさん」
「――む」
シロは自販機の前で立ち止まり、仏頂面を振り向かせて、不機嫌そうな声を返してくる。
「……。大輝か。どうした」
「コート忘れてますよ。その格好じゃ寒いでしょ」
大輝は歩み寄ってベージュ色のコートを手渡す。話す息が白くなった。
おずおずと両手で受け取り、シロはうつむく。
「……すまぬ」
紅い眼は手元だけをじっと見つめている。
そのまま黙ってしまったので――大輝はまず、笑ってみせた。
「いつの間にか寒くなりましたよね」パーカーのポケットに手を突っ込む。「そのコートって丈が長いから引きずっちゃいそうでしたよ。っていうか、ちょっと引きずっちゃったかも。汚れてません？」
「……」
シロはうつむいたまま何も言わない。
大輝は首をかしげてみる。
「どうしたんですか？　早く着ないと風邪ひいちゃいますよ」
「……しろは」
薄桃色の唇が動く。
「しろは、この頭なりに考えて……」
コートの生地に指先が食い込む。
「人を殺めるが悪しきこととは、考えた末に心より思ったのじゃ。さんざん人を食い散らかした身で、今更になって厚かましいことを言うておるとも、己で重々分かっておる。……じゃが」
「いやいや」大輝は笑ってみせる。「今さら厚かましいなんて、誰も思ってませんって。いきなりだったから皆驚いただけですよ」
「……」
シロは口をつぐむ。

大輝は、ええと、と目を泳がせてから、軽く肩で促してみる。
「取りあえず歩きません？」
「……ん」
頷いたシロはようやくコートを羽織った。
歩き出した二人の間には、わずかな距離があった。
ポケットに手を突っ込んだまま猫背で歩みを進める大輝と、後ろからついてくるシロ。
冷たい夜風を頬に受けながら、大輝は振り返らずに声をかける。
「言葉を交わせる相手が死んじゃうのは悲しいことだって、シロさんも思うようになったんですよね」
寒さのせいで唇がうまく動かない。
背後から返事は返ってこない。ただ、足音だけがついてくる。
大輝は続ける。
「俺も石乃さん――しゃくネエのお母さんが死んじゃったとき、しゃくネエといっしょに泣きました。もう二度と会えないって思ったら、悲しくて空しくて……でも、泣いてもどうにもならなくて、それがまた苦しくて。シロさんも、裏のお婆さんが亡くなった時、同じ気持ちだったんですよね」
「……。心の裂ける思いじゃった」今度は小さな声が返ってきた。
「もう会えぬ悲しさばかりではない。この世の景色を見ることも、笑うことも、二度と出来ぬようになってしもうたはるが不憫で、胸が裂けるように痛かった。あのような思いをしたのは初めてじゃ」
「うん――」
乾いた唇を舐めて頷く。
「この世から命が無くなることの悲しさって、身近な人の死を味わってみないと、案外分からないもんなのかも知れないですね。しかもシロさんは人を食べて生きてきた妖怪だし、今までそういうことを具体的に想像できなかったのは、夜々さんの言ってた通り、当たり前だったんだと思います」
「……。何ゆえそのようなことを言う」

「だってシロさん、昔の自分まで責めちゃってるんでしょ」
歩きながら足もとの小石を蹴飛ばしてみる。
「取り返しがつかないことをしてたのかも知れないとか、自分は悪い奴なのかとか、ここ何日か、そんなことばっかり考えてるんでしょ？」
「……、どうして……それを」
「それも何となく分かっちゃって」
首が冷えるのに耐えかねて、大輝は肩を縮める。
「でも、昔のことまで考えることないですよ。今更考えても仕方ないし、きっとただ潰れちゃうだけです」
言いながら鼻をすする。
シロの足音が聞こえなくなった。
歩みを止めて振り返ってみると、数歩遅れたところで、シロはまた下を向いて立ちつくしていた。
大輝は首をかしげてその顔を覗き込む。
「シロさん――？」
「今更仕方ない……か。大輝はそのように優しいが」
白面が自嘲的な笑みに歪んでいた。
「しろが義父上や石楠花を食ろうておっても、はたして同じ言葉をかけてくれたじゃろうか」
「え……？」
「ああ、すまぬ」片手で顔を隠す。「気にせんでくれ。ひねくれたことを言うつもりは無かった――少し気が参っておるようじゃな。いかん、いかん」
軽く頭を振り、自らの頬を二度ほど叩いて、シロは顔を上げる。
「よし、早う行くとするか」
跳ねるように追い付いてきたかと思うと、おもむろに両手を伸ばし、大輝の頬を挟み込んでくる。
大輝は数日ぶりの急なスキンシップに戸惑った。
「ちょ、っと、シロさん？」

「肌が冷えておるな」
呟きながら手を引っ込めて、何やらモゾモゾと身をよじり始める。
「暫し待て。今――えいしょ」
白い指がコートの片裾を持ち上げると、その下から巨大な毛虫のような物体があらわれて、辺りを見回すように蠢いた。
大輝は一瞬ぎょっとしたが、わずかな月明かりにきらめくその物体は、久々に見たシロの尾であった。
大人の背丈ほどはあろうかという長い尾をこちらへ伸ばしながら、シロは微笑む。
「この暗さならば傍目には襟巻に見えぬことも無かろうし、血が通っておる分、紅猫鬼のやつめがしておったようなものよりも温かかろう」
そう言って大輝の首にくるりと巻きつけてくる。
首周りが急に温かくなり、大輝は思わず身震いした。
シロの体の一部だと思うと妙な背徳感があるが、これは確かに心地いいし、それに、ちょっとした懐かしさも感じる。この感触は拾ってきたばかりのシロを撫でていた時と同じ感触だ。
不思議な気分で呆けていると、綺麗な顔がのぞき込んできた。
「毛の先がこそばゆくはないか」
「あ……いえ」我に返る。「別に平気です」
「そうか。――んっ」
シロは不意に顔をしかめる。
「もっと近う寄れぬか大輝。引かれて尾の根が痛い」
「え、あ、すみません」
慌ててシロの方へ身を寄せる。
そうした途端、素早く肩に手が回り、長いコートの中に抱き寄せられた。
「うあ――？」
「ふふ」
長い両腕と尾で大輝を抱きしめ、シロは嬉しそうに言う。

「捕まえた、捕まえた」
「し……シロさん？」
「謀ったわけではないぞ。容易く手の届くところだったゆえ、つい抱きよせてしもうただけじゃ」
「いや――そういうことじゃなくて」
言い表せぬほどの温もりに揺さぶられた心臓が、どくどくと音を立て始める。
ことり、と頭のてっぺんに何かが乗った。シロのあご先か、それとも額だろうか。
呟く声が伝わってくる。
「有難うな、大輝」
「何が……ですか？」
「色々じゃ」優しい声だった。「今のしろが在るのは大輝のお陰じゃ。感謝しておる」
「そんな」
「歩む前に暫しの間、このまま抱かせておくれ」
二本の腕が大輝の体を抱き直す。
また風の吹く音がした。
今度は冷たくない。大輝は何も言わずに目を閉じた。

六

まだテーブルの上の寿司は半分ほど残っていたが、礼司は「持ち帰ってきた仕事を片付ける」と言って、ひとり居間を出て行った。
のんびりとした足音が二階へ消えていったのを確認し、小梅がソファから立ち上がる。
「あのう」
上目使いの眼差しが紅猫鬼に向けられる。
「もしご迷惑じゃなかったら、私もそっちに座っていいですか？」
「ん」紅猫鬼は微笑む。「いいわよ。いらっしゃいな」

「やたっ」
手招きされるが早いか、嬉しそうな足取りで跳ね、礼司の座っていた椅子へ腰掛ける。
紅猫鬼と同じテーブルにつく隙をずっと窺っていたのだろう。最初から言い出さぬあたりが遠慮深い義母らしい――などと思いつつ、夜々は二本めの煙草に火をつけた。
大輝と礼司が席を外し、四人だけになった居間。
夜々は煙を吐き、さて、と座りなおす。
「紅猫鬼さん」
実は、夜々にも切り出すタイミングを窺っていた話があった。
「一つ相談があるんだが」
「あなたもこっちに座りたい？」
「いや。常世に干渉する術について何か知っていれば、教えてもらえないだろうか」
「常世――？」
紅猫鬼は隣の小梅の頭を撫でながら、きょとんとした顔をする。
「そんなこと聞いてどうすんのよ」
「ある神獣を天下らせたい」
「はあ？」
「石楠花が貴女の末裔であること、同じく末裔であった石落という男に任氏が封印され、ごく最近になって落雷により逃れたこと、それから、私が神獣の血を引く一族の先祖返りであること……。食事前に話したのはそこまでだが、他にも一つ珍奇な事実がある。大輝君の母上が、石落が特殊な術を使用した際に現世へ紛れ込んでしまった神獣、麒麟だったという事実だ」
脚を組み直し、灰皿に煙草の灰を落とす。
「彼女は淋と名乗り、長い時をこちらで過ごしたが、数年前にあちらへ戻ったという。いや、戻らざるを得なかったというべきか。彼女自身は泡沫の揺らぎが終わったためだと――」
「ちょ、ちょっと待って」頭を抱えた紅猫鬼がストップをかけてく

る。「えっと、どういうこと？　あのお坊ちゃんって上位神獣とのハーフなわけ？　単なる神獣の混じり者じゃなくて？」

「ああ」

もっとも、現在の大輝はオリジナルと同格の権限すら手に入れているわけだが、そのことについての説明は保留しておくことにした。

「まあ大輝君自身のことはともかく、彼の母上をもう一度こちらへ呼びたいわけだ。そのために石字縛師の開祖たる貴女の知恵が欲しい」

紅猫鬼は溜息のような声を吐き出す。

「なーるほどねえ」

ポリポリと鼻の頭をかく。

「石落って子は渡りの術を実行してたのね。ってことは任氏を封印してたのもそれか」複雑そうな顔をする。「がっかりしたけど、まあ合点がいったわ。あの任氏が並の封印で抑えられるわけないもんね」

「？　ちょっと待ってくれないか」

今度は夜々がストップをかける番だった。

紅猫鬼は目をぱちくりとさせる。

「何よ」

「今――渡りの術、と？」

「あら、違ってたかしら」

紅猫鬼は首をかしげる。

横から石楠花が割り込んでくる。

「どうして術の名前を知ってるんだよ。渡りの術って石落が作った術じゃなかったの？」

「何言ってんのあんたって子は」

紅猫鬼は鼻で笑った。

「あんたら子孫が使ってる術なんて、最初っから全部私が作っといてやったのよ？　単なる妖力のプロテクト解除から、応用効かせるための高等術式までね。もっとも後者は私の趣味の産物だけどさ」

「でも渡りの術なんて、お爺ちゃんもやり方は知らないって――」
「あれは禁呪として口伝だけにしといたから、どっかで途絶えちゃったのかもね」栗色の髪を撫でる。「もしかして石落って子が、オリジナルの術だってことにして、一人占めにしたのかも。渡りの術なんかを実行しちゃうくらいだから、ひどいエゴイストだったんだろうし」
「……？　言ってる意味がわかんないんだけど」
「さっき私、がっかりしたって言ったでしょ」軽く肩をすくめる。「渡りの術ってそういう術なのよ。つまり、実行すれば先祖が嘆くような類の術ってこと。私だって理論と術式を完成させただけで現実に実行はしてないわ」
「まさか――」
夜々は気付き、煙草を口に運ぶ手を硬直させる。
紅猫鬼はこちらを向いて苦笑いした。
「人間の言葉には因果応報なんてのがあるけど、自分の目的のために行うのは、制裁でもなけりゃ正義でもないわよねえ」
「……。そう、か」
ソファに深く背を預け、夜々は天井を見る。――何ということだ。
「そういう理屈だったか、渡りの術とは」
「だから申し訳ないけど助力も出来ないわね。諦めるか、そうじゃなければ」紅猫鬼は意地悪に笑う。「調度いい奴にでも頼んでみる？」
「悪い冗談だな」
夜々も仰向いたまま笑った。笑うしかなかった。
「それは本当に悪い冗談だ……。もう結構だよ、今の話は忘れてくれ。こちらも何も聞かなかったことにしよう」
言いながら小梅と石楠花の顔を見る。
二人は一体何の話かといった顔できょとんとしていたが、こういう場合に限っては、下手に察しが良いよりも鈍い方が助かる。
向こうで玄関の開く音がして、大輝の「ただいま」という声が聞

こえてきた。

七

布団の上にごろりと寝転がり、紅猫鬼は気持ちよさそうに伸びをする。

「畳に布団！　やっぱりこれよねえ。ベッドなんかより、こっちのほうが百倍落ち着くわ」

「その豪勢なネグリジェには合わない台詞だね」

夜々は流し場の前に小梅と並び、のんびりと就寝前の歯磨きをしていた。この安アパートの部屋には、洗面台など存在しないのである。

部屋が狭いために隙間なく並べられた布団の上で、紅猫鬼は楽しそうに、何度も寝がえりを繰り返している。

「日本暮らしが一番長かったんだもん。――しっかし申し訳ないわねえ」

ぐい、と細長い上半身を起き上がらせる。シルクの寝装束がさらりとはだけ、白い肩があらわになった。

「いきなりで泊めてもらっちゃってさ」

「仕方が無いだろう。貴女を礼司くんの家に泊まらせるのは、任氏にとって少々酷だ」

「あはは。あいつったらまだ警戒してるんだもんねえ」

「ごく自然なことだと思うが……」

「でも私、夢みたいです」

小梅が歯ブラシを片手に首を振りかえらせる。

「憧れのビクトリア・ウーさんが私たちの部屋にお泊まりしてくれるなんて」

「ありがと。小梅ちゃんみたいなファンが日本にもいてくれて、私も夢みたいよ」

「ねえ、どうでもいいけどさ」

石楠花は窓際の壁に寄りかかって座り、ただ眉間にしわを寄せてい

た。
「どうしてあたしまでこっちで寝なきゃいけないんだい？　さっきから理由らしい理由が見つからないんだけど」
「大人しく付いてきたくせに、今更何言ってんのよ」
「あんたが勢いに任せて強引に引っ張ってきたんだろ。おかげで明日の朝はパジャマで向こうに戻らなきゃいけないし――」
横目で窓の外を見る。殿山家の二階、大輝の部屋の明かりは、まだ点いているようだ。
「――他にも心配事があって、あたし気が気じゃないんだから」
「心配？　ああ、任氏と大輝くんのことね」
紅猫鬼はまた寝転がり、長い脚を組む。
「たった一晩くらいでどうなるもんでもないわよ。私の子孫ならそれらしく、どっしりと構えてなさいな」
「平気かなあ」
「へーきへーき。それより、どうして私があんたのこと引っ張ってきたのか、本当に分からない？」
「ただの気まぐれだろ」石楠花はため息をつく。「いい迷惑だよ全く」
「やだ、頭悪いのねえ」
「な――っ！」
「何代先でも可愛いもんなのよ、自分の子孫って。あんたから見たら、突然現れた他人にしか見えないのかも知れないけど」
紅猫鬼は微笑むように目を細めた。
「今日こうして会えた運命には、けっこう感謝してるの」
「……ちぇっ」
石楠花は口を尖らせ、近くの紅猫鬼にだけ聞こえる小さな声で呟いた。
「私が会う妖怪ってみんなこうだよ。とぼけたことばっかり言ってると思ったら、いきなり大人になっちゃうんだ」
「長生きしちゃってるからね」紅猫鬼は苦笑いする。「まだ眠るよ

うな時間じゃないし、よかったら聞かせてくれる？　あなたのお母さんや、お爺さんのことも」

向けられた瞳――カラーコンタクトを外した生の瞳は、エメラルドよりも澄んだ緑色だった。

石楠花は抱えていたひざを伸ばし、目をそらしながら頷いた。

八

あくる日の朝、夜々や石楠花が登校したのを見届けてから、紅猫鬼は殿山家へ戻って荷物をまとめ直した。

まとめ直すといっても、昨日トランクから引っ張り出した荷物は、土産のクッキーをのぞけば下着や靴下くらいのものだったので、時間らしい時間はかからなかった。

居間のソファで最後の茶を飲みながら、紅猫鬼は肩を回す。

「一晩だけだったけど、何年かぶりの日本は楽しかったわ。仕事がひと段落ついたらまた来るから、その時もよろしくね」

「うざいのう……」

「あんた悪い言葉ばっかり覚えてるわねえ」

食器を片づけているシロを睨んでから、向かいに座った礼司に、スターらしく洗練されたウィンクを送る。

「礼司さん、昨日の晩はありがとね。石楠花ちゃんと大輝君にもよろしく伝えといて」

それから隣でうつむいている熱心なファンに、やはりウィンクをひとつ。

「夜々ちゃんにもよろしくね、小梅ちゃん」

「もう帰っちゃうんですね」小梅はしょんぼりとした顔で言う。「あっという間だったなあ」

「あと何日かは居たいところだけど、けっこう忙しいからね、私」

「う――」

「？」

「う、う……ええ」
小梅は突然泣き出した。
紅猫鬼はぎょっとして茶を落としそうになった。
「ちょっ――こ、小梅ちゃん？」
慌てて湯呑みをテーブルに置き、よしよしとピンク色の頭をさする。
「どしたの、いきなり泣いたりして？　私何か悪いこと言っちゃった？」
「おぬしの顔が恐ろしかったのじゃ」
「任氏は黙ってなさいな！」
「……たし」
小梅は紅猫鬼の胸ぐらにしがみ付く。
「わたし、も、もっと」ぐすりと鼻を鳴らす。「もっと、ビクトリアさんと、お話とか」
そこから先は嗚咽に変わり、言葉にはならなかった。
紅猫鬼は呆気にとられてシロたちと顔を見合わせていたが、やがて小梅の背に、できるだけ優しく手を回してやった。
「ありがとね小梅ちゃん」小さな肩にあご先を乗せる。「小梅ちゃんの作ってくれた朝ごはん、美味しかったよ」
「……うええ」
「ごめんね。私ったら、いつの間にか石楠花ちゃんたちとばかり話してたね。本当は小梅ちゃんが一番、私とお喋りしたかったのに。ぜんぜん足りなかったよね」
泣きやまない小梅を抱きしめ、その背をさする。
「また絶対遊びに来るから。今度はあなたに会うために来るからね。そのときは、ずうっと二人だけでお話しようね。約束するわ。だからもう泣かないで？」
耳元で、子供にするように語りかける。
向こうの椅子に腰をかけつつ、呆れ顔のシロが口を開く。
「分からぬ。泣くほどのこととも思えぬが……。小梅には女色の気でもあったか」

「憧れという感情には男も女も無いのさ」代わりに答えたのは礼司だった。「しかも小梅さんは、かなり前から紅猫鬼さんのファンだったらしいからね」

「そういうものか」

シロは腑に落ちぬ顔で腕組みする。

無言の二人に見つめられながら、紅猫鬼は、よしよし、よしよし、と小梅の背をさすり続けた。

九

紅猫鬼が小梅をあやしているところなど見ていても、面白くも何ともない。シロは一人勝手に庭に出て、ほうきを片手に、散らばった落ち葉を集めていた。

やたらと土が乾いており、地べたを掃くたびに埃が舞う。

軽く顔をしかめたところで玄関のドアが開いた。

出てきたのは、トランクを片手に下げた紅猫鬼であった。

「じゃあ任氏、私ゃそろそろ帰るかんね」

「帰れ帰れ」

シロは口をへの字に曲げてみせる。

紅猫鬼は肩をすくめる。

「ホントはまだ少し時間あるんだけど、礼司さん昼から仕事だっていうし、いつまでもお邪魔してちゃ悪いからさ」

「小梅は空港とやらへはついて行かぬのか」

「よけい悲しくなるから見送りはしないって。——ああ、そうそう」

紅猫鬼はトランクを足元に置いたかと思うと、突然に地を蹴ってシロの方へ跳んできた。

シロは反射的に後退したが、紅猫鬼の方が速かった。

細い腕が伸び、さらりとなびいたシロの髪が一本、つまんで引き抜かれる。

シロは声を上げた。

「痛っ――」
「よし、と」
紅猫鬼はハイヒールの片足で着地し、銀色の毛髪が己が指につままれていることを確認して、にこりと笑う。
「悪いわね。これもらってくわ」
「何じゃ一体……」
「内緒」
笑いながら玄関前まで戻り、トランクを持ち直す。
「また今度も――楽しい形で会えることを願ってるわ」
「しろはもう会いとう無いわい」
「あはは。じゃあね」
優雅に手を振り、紅猫鬼は去っていった。
毛の抜かれたところをさすりながら、シロは一人、首をかしげた。

十

その電話がかかってきたのは三日後の夕方過ぎだった。
居間の受話器を取ったのは、ソファに寝そべって食事ができるのを待っていた大輝である。石楠花と父はまだ帰っていなかった。
「はい、殿山です」
「ニィハオマ？　私よん」
まだ記憶に新しい声――紅猫鬼からであった。
「任氏はいるかしら」
「あ、はい」
キッチンに声を飛ばす。
「シロさん、紅猫鬼さんから電話ですよ」
「紅猫鬼からじゃと？」シロがひょっこりと顔を出す。「そんなものは切ってしまえば良かろうが」
「いや……そういうわけにも……」
「面倒じゃのう」

シロはエプロンで手を拭きながら渋々とキッチンから出てきて、嫌そうに受話器を受け取った。
「何じゃ紅猫鬼、おぬしが置き忘れて行った靴下ならば、一応洗濯機にかけて――、ん？　何じゃと？」
話しながら、シロはちらりと大輝の顔を見てくる。
「うむ。まだここへおるが――いや、聞こえてはおらぬ。それがどうした」

十一

紅猫鬼はホテルのベッドに座り、携帯電話に話していた。
「まずいことになってるのよ」
「早う申せ」シロの声はいかにも面倒くさそうだった。「まだ味噌汁の具を切り終えておらぬ」
「真面目に聞いて」
紅猫鬼は静かにため息をつく。
「今から私が言うことは、冗談でも何でもないわ。きっと驚くと思う。でも――」目を閉じる。「決して取り乱さないで」
「何のことじゃ」
「次に会うときは、みんなで楽しく晩ごはんってわけにはいかないかもしれない」
もう一度息をつく。話すにも勇気のいる話だった。
「……選ぶ時が来てるの。あんたも、そして、あんたの周りの子たちもね」

十二

手洗いから戻ると、シロが受話器を置いているところだった。
後ろから声をかける。
「シロさん」

「あ――」青ざめた顔を振り向かせる。「大輝か」
「さっきから俺しかいませんよ。何の話だったんですか？」
「いや……」
あからさまに目をそらしてくる。
「つまらぬ話じゃ」
「なんか顔色悪くありません？」
大輝はシロの顔を覗き込もうとした。
しかしシロは目を合わせぬまま、無言で大輝の脇をすり抜けて、そそくさとキッチンへと引っこんで行った。
はて……。また紅猫鬼から妙なからかいでも受けたのだろうか。そんな悪戯のために国際電話をかけてくるなんて普通ならば考えられないが、土台、ろくに親しくもない相手と会うために海を越えて来てしまうような人だから、それくらいしてもおかしくはないかもしれない。
勝手に納得して再びソファに寝転がろうとしたところで、シロの短い声が聞こえた。
「いたっ――」
「どうしました？」
ソファにつきかけていた手を弾ませ、キッチンへと向かう。
まな板の前で、シロは左手を押さえていた。
赤いしずくが生白い腕をつたい、肘へと流れている。――血か。
大輝は歩み寄る。
「手、切っちゃったんですか」
「ん……うむ」シロは恥ずかしげに笑んだ。「慣れておってもしくじりはあるものじゃな」
「けっこう深いんじゃないですか？　救急箱持ってきますよ」
「手をかけてすまぬ」
蛇口から水を出し、傷口を洗い始める。
「これでは石楠花に笑われてしまうな」
そう呟くシロの笑顔は、どこか瀬戸物じみた不気味さを帯びていた。

大輝の足は暫しその違和感に硬直させられたが、ざあざあと耳にやまかましい水の音と、まな板の上に散った赤い模様に動かされて、結局は無言でその場を後にした。

キッチンを出るまで、シロが自分の姿を見つめ続けていることには気づいていた。

なのに――

どうしてか、その顔をもう一度見ることはできなかった。

Ｅｘｔｒａ　ｃｈａｐｔｅｒ【夜獣――ＢＥＡＳＴ――】

ウェストベジンの裏通りに巣食うならず者たちは、大金の稼ぎ方は知らないまでも、浅ましい日銭の稼ぎ方くらいは心得ていた。

ある物を集めればいいのだ。貴金属よりも簡単に手に入れることができて、情報より確実に換金できるもの――すなわち人体である。内臓、網膜、指、骨、若ければ肌や性器。

移植技術が発達したこの時代では、およそ脳以外のあらゆる部位に需要があった。

また、イーストベジンに住む成金には、やたらと「丸ごと」の死体を欲しがる輩がいる。

そういう連中が如何な理由で人体を集めているのかは、供給する側にとってはどうでもいいことだが、一つ確かなことは、「丸ごと」はバラ売りに比べて格段に割高になり、しかも若い女ほどよく売れるということだ。

だから。

袋小路に積み上げられたゴミ山の陰で震えながら、シィホンは考える。

だから、決して油断すべきではなかった。

仕事帰りに、珍しく酒場に立ち寄ってみたのが数時間前。

親切なジュウピンに「最近は悪い連中が増えてきたから、若い女の子が一人で帰るのは危ないよ」と言われ、一緒に酒場を出たのが二十分前。

ああ、あの時、どうして疑わなかったのだろう。

どうして――ジュウピン自身がその「悪い連中」の一人だと気付

くことができなかったのだろう。
いかに親切そうな顔をした者だろうと、今日知り合ったばかりの男など、この街では信用できない。それくらい分かり切っていたはずなのに。
後悔に嗚咽が漏れそうになったその瞬間、積み上げられたゴミ袋が、音を立てて崩れた。
隠れる壁を失い、ただ無防備にうずくまるだけになったシィホンを見下ろしていたのは、今や狩人となったジュウピンだった。
「見ぃつけた」
蹴り足を戻しながら楽しそうに言う彼の顔は、さっき酒場で見せていた柔和な好青年のそれではなく、ある種の純粋すら感じられるほどの邪悪さを帯びて、まるで化け物のように醜く歪んでいた。
「バカだねえ。どんどん人気の無い路地に逃げ込んでゆくんだもの。まあ……この辺りじゃ、人通りなんて、あっても無くても変わらないけどね」
両手を上着のポケットに突っ込み、ジュウピンはくすくすと笑う。
シィホンは咄嗟に立ち上がりながら駆けだした。
いや――正確には、駆けだそうとした。
後ろに逃げられない以上、ジュウピンの横をすり抜けるしかない。彼が油断している今は、最後のチャンスだと思った。
だが、この薄汚い路地はあまりにも狭すぎたのだ。
細いシィホンの腕はいとも簡単に掴まれて、その身は地に突き倒された。
ジュウピンの声には少しの焦りも混じらなかった。
「意外と元気だねえ」
容赦無い力で、掴んだままの腕をねじり上げてくる。
体験したことのない痛みに驚き、足を立たせるどころか、悲鳴すら上げられない。
ジュウピンは空いた方の手で、ポケットから何かを取り出しているようだった。

「お注射するけど、じっとしてなよ。ちょっとチクリとするだけさ」
彼は慣れていた。手際も、口調も、ぞっとするほど慣れきっていた。
「君は苦しまないし、無粋な傷も無くて買い手も喜ぶ。いいやり方だろ？」
「良いも悪いも無ぇんだよ、ボケ」
「？　誰だ」
ジュウピンは振り返り、そして吹っ飛んだ。
掴まれてた腕が急に自由になり、シィホンは思わず「あ？」と間抜けな声を上げる。
いったい何が起きたのだ。
冷たい地面に手をついて見上げると、そこには、ぼろを纏った巨大な男が立っていた。
若者なのか、それとも三十を過ぎているのか。歳の分からぬ異様な男であった。
獣のような力を宿していることが一目で分かる、引きしまった巨躯。ざんばらの髪に狼のような顔――その顔がシィホンを見下ろす。
「怪我は無ェか」
虎が唸るような低い声。
呆然と頷くしかなかった。
「……はい」
「そうか」
男は落ちた注射器をブーツのかかとで踏み潰し、ジュウピンの方へ視線を戻す。
ジュウピンは既に立ち上がっていた。
「びっくりしたな。いきなり殴られるなんて思わなかったよ」両手をぶらぶらとさせる。「しかもすごい力だしさ。馬鹿でかい図体して、いつの間に近づいたの？」
「今の拳を防いでたか」
男はしかし、動揺もせずに言う。
ジュウピンは笑っていた。

「君、その女の知り合い？　兄弟？　それとも彼氏か旦那さんかな？」
「他人だ」
「じゃあ他人のために死ぬわけだ。御苦労さま」
言葉と同時にジュウピンは踏みこんだ。
電光石火とはこういうことを言うのだろうか。三歩はあったはずの間合いが一瞬で無くなり、不精髭の生えた巨漢の顎へ向かって、真っ直ぐに掌底が突き上げられる。
それは直撃した。
男は微動だにしなかった。
「……。北派武術だな」
「バカな」
「生憎と鍛え方が違うんだ」
男はジュウピンの襟を取って自由を奪い、その下腹に巨大な掌を叩きこんだ。
鈍い音と短い声が路地に響く。
男が手を離すと、ジュウピンはその場に崩れて何も言わなくなった。
風が――
湿った風が、あたかも思い出したかのように、暗い路地に入り込んでくる。
あまりにも短い出来事だった。動かないジュウピンから目を離せぬまま、シィホンはやっと声を絞り出す。
「……、こ……」
体がガクガクと震えていた。
「殺し、た……んですか……？」
「下半身不随にしただけだ。気絶もしてるみてぇだが」
男は再びこちらに顔を向ける。
シィホンは慌てて頭を下げた。
「あ、ありがとうございます、助けていただいて――あの」

「礼は要らん」男は低い声で言う。「その代わり、聞きたいことがある」
「……聞きたいこと？」
「そうだ」
ぼりぼりと髭の生えた顎をかく。
「この街のどこかに、一人、変わった力を持った奴がいるらしい。そいつについて何か知ってるか」
「変わった……力」
「生来的な特異能力だ」
男の眼は鈍く光っていた。
雷鳴が轟き、ぽつり、ぽつり――と雨粒が落ち始める。
それが大雨に変わるまで、数秒とかからなかった。

第十四章【細切想――こまぎれのおもい――】

朝の八時十二分、池上カレンに届いたメールの内容は、「ごめん」の三文字だけだった。

これ以上ないほど簡潔で、まるで答えにもなっていないのに、全ての答えになっている。彼にはきっと詩か俳句の才能でもあるのだろう。

カレンが衝動的に投げた携帯電話は、時速三百キロで叩きつけてやりたい気持ちとは裏腹に、情けないほどゆるやかな弧を描いた揚句、目がけた街路樹に届くことなく落下した。

突然の行動に、バス停に並んでいる者たちがこちらを見る。

どうでもよかった。

あんたたちは、今日も楽しく大学へ行くがいい。

私はもうそんな気分じゃない。いや、もう行く意味が無いのだ。たった今それが無くなったのだ。

カレンは並ぶはずだったいつものバス停に背を向け、たった今おりてきた駅の方へと、再び歩き出す。

滲んできた涙を拳で拭う。

ふざけるな。

何が「ごめん」だ。謝るくらいなら開き直れ。

高校の頃から、四年間も私を騙してきたんだろう。そんな悪党が今更「ごめん」とはなんだ。いっそ、「気付かなかったお前が悪いんだ」くらいのことは言ってみせろ。

ああ、くそう、畜生。

せめてその女の顔を見せろ。たった五秒でいいから私に会わせろ。

その五秒の間にこう言ってやる。「あんたが本命だったってさ。おめでとう！」と。

カレンは胸の中で、何度も悪態を繰り返した。

歩きながら唇を噛む。きっと今、自分の顔は般若のように歪んでいることだろう。――だがそれでいい。悔しさに怒っているうちは、まだ立っていられる。

夜までは、せめて今日の夜までは、この怒りを持続させよう。泣くのはそれからだ。

そう自分に言い聞かせながら、カレンはきつく唇を噛みなおし、駅の階段を上り始める。

三段目で、ずるり、と靴が滑った。

転びながら、反射的に手をつく。

肩にかけていたカバンが落ちた。中から教科書が流れ出して散らばり、階段を下りてきた者たちの視線が、ぶざまな背中に突き刺さる。

こらえきれなくなってカレンは泣いた。

汚れた階段に突っ伏して、カレンは大声で泣き叫んだ。

一

いくら日曜日で予定も無いからといって、まさか昼まで寝てしま

うとは、石楠花自身も思わなかった。
外から聞こえてくるのは、どこかへ出かけてゆく家族連れの賑やかな話し声と、車の走り過ぎる音。鳥の鳴き声は聞こえない。
枕もとの目覚まし時計は――ああ、そういえば電池が切れかけていたのだった。
まあいいか。
とにかく起きなくては。このまま二度寝をしてしまったら、いくらなんでも生活ペースが崩れてしまう。
部屋の空気は窓からの日差しで程よく温まっていたので、寝床から這い出すのも、いつもの起床に比べれば大した仕事ではなかった。
あくびをしながら一階へ降りると、居間のテレビはもう主婦向けのワイドショーを流しており、とうに掃除を終えたらしいシロは、ソファに座って、何やら熱心に針仕事をしているところだった。
おはようと声をかけるまでもなく、白い顔がこちらへ向く。
「どうした、今日はばかに遅いではないか」
「ちょっと夜更かししちゃってさ」目をこすりながら椅子に腰かける。「大輝とお義父さんは？」
「つい先刻、こたつとやらを求めに行った。そこかしこを回って吟味するゆえ、帰りは遅くなるそうじゃ」
「コタツ？」
「よう知らぬが便利なものらしい。何でも、それに脚を入れて蜜柑を食えば、天に上るほど心地が良いとか」
「どこに置くつもりなんだろ」
それに、そんなものを買う予定なんて昨日までは無かったはずだ。男たちの買い物は何かにつけて衝動的で困る。
シロは視線を手元に戻し、ちくちくと針を動かしながら言う。
「そのようなことよりも、あまり根を詰めるでないぞ。合格とやらがどれほど意味のあることか知らぬが、体を壊しては元も子もなかろう」
「へ？　ああ、違う違う」石楠花は苦笑いする。「昨日はゲームし

てただけだよ。勉強は早めに切り上げちゃった」
「何じゃ、遊んでおったのか」
「実はけっこう余裕なんだ、高校受験。あたし高望みしてないからさ。先生たちはもっと上狙えって言ってくるけど」
「よう分からぬが……」
「っていうか、さっきから何縫ってんの？」
「これか」
シロは手を止めて、針を通していたものを広げてみせる。
それは大輝の体操着であった。
石楠花は、ああ――と片肘をつく。
「また破けてたんだ」
「此度は袖が解れておったに過ぎぬ。もう繕い終えるわい」
「最近しょっちゅうだね」
「大輝の体が日々育っておる証じゃ」また針を通し始める。「今はまだ石楠花よりも背丈が低いが、さして間も無く追い越してしまうであろう」
「想像できないけど、そうなんだろうね」
石楠花は寝ぐせで逆立った前髪をいじり、くすりと笑う。
「何年かしたら、シロも追い越されちゃうかもよ」
「……」シロの横顔が陰る。「……。そうじゃな」
「どしたの？」
「いや――」
不意に、また顔をあげる。
「そういえばおぬし、以前に煮物のこしらえ方を訊ねてきたな」
「何だよいきなり。確かに訊いたけどさ」
石楠花はその時のことを思い出し、少しむくれてみせる。
「意地悪ばっかり言って、全然教えてくれなかったじゃないか。大輝のことをあきらめたら教えてやるとか、裸になって庭先で踊らなきゃダメだとか」
「そろそろ教えてやってもよい」

「え？」
「どれ。ちょうど繕いを終えたところじゃ」
余った糸を噛み切り、体操着を畳んでシロは立ち上がる。
「不細工な顔を洗って着物をかえてこい」
「誰が不細工……って、ちょっと」
「しろの気の変わらぬうちに仕度せよ」
シロはすたすたとキッチンのほうへ歩いてゆく。
いったい――どういう風の吹きまわしか。石楠花は寝ぐせの頭を掻いた。

二

この行為は、ひょっとして、根本的なところで間違っているのではないか。
だいたい自分たちは肉食動物ではない。
忘れがちだが、人間は植物だけを食べていても立派に生きていけるのだ。人が他の生き物を食べるのは、あくまでも、その味によって心を満足させる目的があるからに過ぎない。
ここが不毛の土地で、手近な生き物……たとえばこの魚くらいしか栄養源が手に入らないのであれば話は別なのだろうが、ここは天下の日本国である。食べ物も、それを手に入れる手段も溢れている。げんに、傍らでモーターを唸らせている冷蔵庫の中には、キャベツや人参など、平和的に調理できる食材が何種類も入っているではないか。
なのに――どうして、この魚を切り刻んで食べる必要があるのだろう。
夜々がそうした考えを告げると、小梅は黙って首を振った。
「夜々ちゃん」
重々しくまな板を指す。
「変な理屈言ってないで、早くお料理しなさい」

「でも母様」
夜々は青ざめていることを自覚しつつ、指さされた方向を横目で見る。
　そこには、スーパーで買ってきたハタハタが、でろりと横たわっていた。
死んだ魚のようなとはよく出来た比喩である。実際、この曇った目は不気味きわまりない。
こんな生々しい屍を手で掴み、ぐっさりと包丁を突き立てるなど、とても――とても、並の神経では――。
「う……」
涙腺が緩みかける。ああ、何だろうか。ただ気持ちが悪いのとは違う。悲しくなってきた。
「無理だよ」口をおさえる。「こんなことは、私には、やっぱり」
「夜々ちゃん！」
小梅は厳しい声とともに背中を叩き、顔を近づけて問うてくる。
「石楠花お嬢ちゃんやシロさんたちに負けちゃってもいいの？　お魚に包丁も入れられないんじゃ、この先ずっと野菜料理しか作れないよ？」
「しかしね、野菜や米だけでも、十分に美味しいものは」
「いいから包丁を持ちなさい！」
「……はい」
夜々はとうとう小梅の迫力に負け、まな板の横の包丁を手に取った。
　厳しい声は続く。
「じゃあ教えた通りにやってみて」
「その前にヘアバンドを取ってきてもいいかな。いや、長めのタオルでもいいんだけれど」
「どうして？」
「目隠しをすれば少しは――」
「だめっ！　怪我するから！」
「……。分かったよ」

覚悟を決めるしかなさそうだ。このまま駄々をこね続けて小梅を怒らせ、子供の頃のように尻を叩かれてはかなわない。

包丁を握り直し、息を整える。

「では、いくよ」

「頑張って。じゃがいもやキュウリと一緒だと思えば怖くないはずだよ」

「うん……」

落ち着いて息を整える。

魚の目は見ない。

軽い目眩が――いや、耐えなくては。大丈夫。出来るはずだ。

息を止め、夜々はハタハタの解剖に取り掛かった。

三

半分ほど食べていったん箸を置いたシロは、まずは何も言わず、静かに茶を口に運んだ。

のんびりと一口。

そして湯呑みをテーブルに置き、ようやく、呟くように言った。

「まあまあじゃな」

「ほんと？」

てっきり嫌味を言われるかと思ったが。石楠花は思わず、向かいの席から身を乗り出しそうになった。

シロは頷いて続ける。

「しろが横へ付いておったゆえ、当然のことなれど」

紅い眼が芋の煮付けを指す。

「肝心の味加減、火加減はよう出来ておる。ただ――」

「ただ？」

「切り方が、いかにもおぬしらしい」

「どういうことさ」

「雑に過ぎるということじゃ」

シロは再び箸を取り、大鉢から醤油色の芋を一つ拾い上げて、小皿へ乗せる。

「ただ見目を整えろということではない。上手く切るということは、味の染みようや、口の中でのさわりの良さにも関わってくるのじゃ。おぬしの包丁は速いが、そうしたことを考えておらぬ。何をこしらえるかによって、切り方もその都度変えねばならぬ」

「ん……」

シロに言われるとつい反論したくなるが、それは確かに、言えている。

石楠花は今まで、炒飯や麻婆豆腐など、スピードや手際を重視した料理を得意とし、そればかり作ってきた。そういう料理には短時間で出来上がるものが多いので、石楠花自身のせっかちな性格によく合っていたのである。

しかし、それゆえに、丁寧な包丁使いや繊細な味付けにはあまり慣れてこなかった。

シロは穏やかに付け加える。

「この国の料理は手際よりも細やかな気の配りが肝要じゃ」

「はあい……」

「では冷めぬうちに食うてしまうか。続きはまた明日としよう」

シロは小皿の芋に箸を入れる。

だが石楠花には、食べる前に聞いておきたいことがあった。

「あのさ」

「何じゃ」

「どうして急に、料理なんて教えてくれる気になったんだい」

「ん――」

シロの箸が、ぴたりと止まる。

「何ゆえそのようなことを訊く」

「なんか変だなあと思って」

「どうしてという事もありはせぬ。ただ、ふとそのような気に――」

シロはそこまで言って、やれやれと首を振り笑った。

「――いや、おぬし一人くらいには話しておくか」
「話すって何を？」
「朗報じゃ。大輝と義父上には内緒にしておくのじゃぞ」
シロはそして、飄々とした顔のまま、石楠花に語り始めた。

四

今、あのハタハタは煮物となって、小さなテーブルの中央に鎮座していた。あれほど生臭くグロテスクだった魚も、こうなってしまえばただの料理である。
夜々はテーブルにつき、生姜と味噌の香りの中で、小さくため息をついた。
「ふう」
それから苦笑いする。
「一時はどうなる事かとも思ったけれど、なかなか美味しそうに出来上がったね」
「そうだね」
しかし返ってきた声は重い。
夜々は上目づかいに母の顔を見る。
珍しく、小梅は眉間にしわを寄せていた。
「一応、お料理は出来上がったよね。結果だけ見たら、確かに出来上がってるよね」
「いや、その、ね」言葉に困る。「もちろん母様の言いたいことは分かるよ。私の方は何と言っていいか分からないけど。……ともかく、迷惑を掛けてしまったことは」
「いいよ。仕方ないよ。初めてだったんだもんね」
「……。うん」
「でも、まさか切ってる途中で気絶しちゃうとは思わなかった」
「……うん」
夜々は自らの情けなさに赤面した。

そう――夜々は魚に包丁を入れ始めたばかりのところで、貧血を起こして倒れたらしいのだ。

記憶はそこから飛んでいて、寝室で目を覚ましたのは、小梅の手によって料理が完成した後だった。

今度は小梅が溜め息をつく番だった。

「切り始めちゃったものをそのまま放っとくのもアレだから、今回はママが仕上げちゃったけど」

夜々の目をちらりとのぞき込んでくる。

「どうする？　お魚の料理はもう諦める？」

「……。ううん」

夜々は首を振った。

「もう少し頑張るよ。まだ始めたばかりだから」

「ん。夜々ちゃん偉い」

小梅は微笑んでくれた。

「だんだん慣れていけばいいよ。時間はあるんだからね」

五

――嘘だ。

石楠花の口から出てきたのは、己が意に反して攻撃的な文句だった。

「そんなの嘘だ」

唇が麻痺していた。テーブルの上で拳を握る。

「そんな、こと」

「何を怒っておる」シロはくすくすと笑っていた。「頭を冷やして考えれば悪い話ではなかろう。ただ労せず待っておるだけで、今より上手い具合に事が運ぶのじゃからな。ただ、わずかばかりの間、しろと紅猫鬼のすることに目を瞑っておれば」

「んだよ、それ！」

テーブルを叩く。

湯呑みが倒れ、残っていた茶がこぼれた。
「そんなの……どうしてそんな、今さら！」
どう思っていいのかが分からない。ただ、声だけが勝手に大きくなってゆく。
シロは笑みを絶やさぬまま、穏やかな口調で答えた。
「殺して食らうは、この世に生きる全ての化生の理ではない。じゃが――しろの理はそうであった。なれば」
「嫌だ、聞きたくない！」
石楠花は立ち上がる。声は自分でも耳が痛いほどの金切り声になっていた。
「大体あんた約束したじゃないか！」
なぜだ。
「来てくれるって言ったよね？　卒業式とか、高校の入学式だって」
「……」シロは目をそらす。「それは」
「言ったよ、確かに言った！　あの時約束したよ！」
力いっぱいテーブルを叩く。痛みを感じない。頭が焼けそうに熱くなっている。言葉が止まらない。
「嘘だったのかよ、あれは！」
違う。どうしてだ。
「全部口から出まかせの、嘘っぱちだったのかよ！」
あたしは――こんなことを言いたいんじゃないのに。
うつむいたシロの唇が動いた。
「……すまぬな。しかし」
澄んだ紅の眼が、石楠花を射抜く。
「所詮人は人、人食いは人食いであったということじゃ」
「ふ、ざけんなよ」
石楠花の声がかすれる。
胸が苦しい。もう喋れそうになかった。
「あんた……そうやって、結局いつも血みどろなんだ」
最後にそれだけ絞り出すと、握りしめた拳の上に、悔しさの雫が落

ちて弾けた。

六

コタツは来週の中ごろに宅配サービスで届くことになった。代金はもう父が払ったので、あとは届いた際に判を捺すだけだ。家にはいつもシロがいるから、受取人不在で再配達などとゴタゴタする心配も無いだろう。

昼食をとり、新しく出来たショッピングセンターを見物してから家に帰ると、暖房で温まった我が家の匂いと共に、エプロン姿のシロが出迎えてくれた。

「よう帰ったな二人とも」刺繍の入った裾で濡れた手を拭く。「外は冷えておったろう。風邪などひいておるまいな」

「寒かったけれど、行き帰りともバスを使ったから、そんなに苦ではなかったよ」

父はこげ茶色の上着を脱いで、コートハンガーに引っかける。

「石楠花は？」

「ん――」

シロは少し言い淀む。

「石楠花は……上で寝ておる。夕飯は要らぬそうじゃ」

「どこか具合でも悪いのかな」

首を傾げる父に、シロは言う。

「そっとしておいた方が良い。それよりも」

くるり身を返して居間へと誘う。

「早う中へ入って茶でも飲め。きのう小梅のやつが昆布茶とやらを分けてくれたから、あれを出そう――ほれ、大輝」

「え」

「何をぼさっとしておる。上着を脱がぬか」

「あ、はい」

大輝は見上げていた階段から視線を戻し、頷いた。

七

町も寝静まった夜深く、小梅は眠っている夜々を部屋に残し、一人コンビニへと走った。小用のために起きた際、トイレットペーパーが切れていることに気付いたのだ。コンビニで売られているものはロールも少なく割高だし、外が冷え込んでいるのも億劫だったが、明日の朝に夜々が困ってはいけない。

体が冷えぬように小走りで駆ける夜道は、やはり通る者がなく、心細かった。

妖怪とはいえ小心者の小梅である。物陰からおかしな者でも飛び出しては来ないだろうか、などと怯えながら店へと辿り着き、まずはトイレを借りてから、ほかほかと温まったおでんや肉まんを横目で見つつ、二巻きセットのトイレットペーパーを買って、再びアパートへと駆けた。

走りながらビニール袋が鳴るのが何となく嫌だったので、公園の横に差し掛かったあたりで一旦立ち止まり、胸へ抱えるように持ち直す。

月明かりが弱い。

見上げてみると、別段空が曇っているわけでもなく、そもそも月が細かった。あれでは暗いわけだ。

はあ、と白い息を真上に向けて吐き出したその時、不意に、何かが月のわきを横切って飛ぶのが見えた。

目を細めてみる。

ゆっくりと飛ぶその影は、見間違いでなければ——

「……？　シロさん？」

どうしてこんな夜中に。シロも何か急ぎの買物だろうか。

それにしたって、あんなに堂々と空を飛んで移動するなんて。

考えながら小首を傾げている間に、シロはどんどん空を飛び、遠くの闇へと消えて行った。

足元を冷たい空気が通り過ぎ、飛び去ったシロが残したのであろう、心なしかいつもよりも生臭いような妖気が、ふわりと降り注いで頬を撫でた。

八

さして運がいいわけでもない二十と一年を生きてきた池上カレンだったが、「死にたい」と心から思ったのは、これが初めてのことである。

もう、何もかもが嫌だった。

あんな男とキャンパスライフを共にしたいがために、わざわざ一ランク下の大学を選んでしまった馬鹿な自分も嫌だったし、これからもあの男と同じ大学で、同じ空気を吸わなくてはいけないのも嫌だった。

あの男に繰り返し抱かれた体が嫌だった。

それを幸せに思っていた自分の愚かさが嫌だった。

少しでもあの男に可愛らしく見られようと、友達の真似をして、着慣れないアプレジュールのコートを着ている自分も嫌だった。茶色く染めた髪も、伸ばした爪も、あの男と初めて会ったときに褒められた、カレンなどという外国人じみた名前も嫌だった。

本当に、もう、何もかもが嫌だった。

誰もいない夜の公園は冷蔵庫の中にいるように寒く、腰を下ろしてみたベンチも、もしかして氷で出来ているのではないかと思うほど冷たかったが、それも今は有難かった。

冷えてしまえ。いっそ、この心臓が止まるまで冷えきってしまえ。小さな頃に好きだった冷凍ミカンみたいに、芯の芯まで凍りついて、そのまま砕け散ってしまえ。

「ちくしょう」

死にたい。死んでしまいたい。

「……死にたい」

とうとう言葉となって、それは出た。
「もう死にたい」
もう止まらない。
「死にたい、死にたい……死にたい」
たった一人、冷えきった手で冷えきった顔を覆って、カレンは駄々っ子のように繰り返した。
そのとき、正面に何かの落ちる音がした。
カレンは顔を上げる。
ボールでもない、鳥でもない。
そこには、長身の女が立っていた。
「これは一体どうした縁のめぐり合わせか」
銀色の長い髪を頭頂より少し後ろで束ねたその女は、何ともいえない皮肉な笑みを浮かべて、カレンを見下ろしていた。
「死を欲する者が今こうして現れるとは、はたして……運命とやらがしろに放った、止めの一矢といったところか」
ざわざわと、女の髪はざわめいていた。
「のう娘。おぬしは今、死にたいと呟いておったな」
「――え」
「ならば大人しく受け入れるがよい」
細い月を背にした女の手が、獣の鉤爪のような形をもって、高々と構えられる。
「今、おぬしの望む死をくれてやろう」
その手が振り下ろされる。
池上カレンは、声すら上げられなかった。

第十五章【大跨――おおまたぎ――】前篇

一

つい先月まで物置部屋と化していた一階の和室だったが、大輝たちの手で片づけられた今は、すっかり「コタツの間」と化していた。

中央に巨大なコタツ、奥に十四型テレビが置かれただけの中途半端な広さの空間は、出来上がってみると思いのほか重宝したもので、例えば食後にゴロゴロしてみたり、休日にゴロゴロしてみたり、隙あらばゴロゴロしてみたりと――まあ、具体的な用途を並べれば有意義には聞こえないまでも、少なくとも大輝や石楠花にとって、無くて困るような部屋ではなかった。

とかく居心地だけは良いのだ。

今まで用の見つからなかった和室が、コタツという家具一つでここまで居心地の良い空間に生まれ変わるものか……。今日も夕食を食べ終えて寝転がり、さほど面白くもないバラエティ番組をながめながら、大輝はひとり感心していた。

すらりと左手の襖が開き、洗い物を終えたらしいシロが半身を突っ込んでくる。

「大輝、しろも入ってよいか？」

「あ、はい。どうぞ」

大輝はあわてて体を起こす。ここは事実上シロの新しい寝室でもあるのに、いちいち馬鹿丁寧に入って来るから、その都度反応に困ってしまう。

シロは和室へ入ってくると、隅に積まれた座布団の一枚をつまみ上げ、大輝のすぐ隣にそれを敷いて、よいしょと座り込んだ。

コタツへ両足を突っ込み、体を震わせる。
「ふうぅ」
組み上げたコタツを目にした時は、「これは本当に必要なものか」と眉をひそめていたシロだったが、いざ使い始めた途端、あっという間に虜の一人と化した。分かりやすいものである。
シロは老人のように背を丸め、テレビをながめつつ呟く。
「つくづく心地良いものじゃな」
「お気に入りですね」
「このこたつとやらもそうじゃが」
脇へ目を落とし、シロは指先で畳の溝をなぞる。
「畳というのもどうして落ち着くものじゃ。そういえば紅猫鬼のやつ、日本人は畳が一番などと言うておったが、なるほど、ここへこうしておると不思議に気が休まるわい」
「シロさんたちって、どっちかというと中国人じゃ……。まあいいけど」
大輝はコタツの中央に手を伸ばし、ミカンをひとつ拾い上げる。
「しかし、畳が好みに合うって分かってたら、もっと早いうちにこの部屋片付けて、今みたいにシロさんの寝室にしてたんですけどね」
もちろん、時たまそういう話も持ち上がらないでは無かったのだが、シロが「ソファで十分」と言ってきかなかったので、長いこと実行には至らなかったのだ。
シロは苦笑いするばかりで何も言わない。
大輝はその横顔を見ながらミカンの皮をむく。
「いつまでも遠慮しすぎなんですよ、シロさんは。居候だなんて誰も思ってないんだから、あれがしたいとか、これが欲しいとか、もう少し言ってもいいのに」
コタツの上、既に折り重なっている黄色い皮の山に、むいた一枚をまた重ねる。
「服だって、いつまでもパーカーとかジーパンばっかりじゃないですか」

「ん――む」
狐であるだけに狐目なので分かりづらいが、シロはわずかに困ったような顔を見せた。
「しろにはあまり欲が無いでな」
「でも――」
そうだ、ちょうどいい。この流れで仕掛けることにしよう。
大輝はさり気なさを装って問いかけてみる。
「でも、さしあたって、欲しい物とか一つくらいあるでしょう」
「今のところは無いのう。ふらいぱんも義父上が買い直してくれたばかりじゃし、切らしておった醤油も買い足したばかりじゃ」
「そういうんじゃなくて、シロさんが個人的に欲しいと思う物とか……。遠慮なく言うとしたら」
「すぐに思い当たらぬということは、まあ、無いのじゃろうな」
「本当に一つもないんですか？」
「ふむ？」
シロの眉がわずかに動く。
しまった――。少々しつこく問い詰めすぎたか。もしかして感づかれたかもしれない。
大輝は慌てて次の言葉を選別しようとしたが、どうやら杞憂であったらしく、シロはテレビに視線を戻しながら、穏やかに言葉を返してきた。
「そうじゃのう、強いて言えば、おぬしらが日々何事もなく過ごすことが、しろの願いじゃな」
「……。そう……ですか」
大輝は肩を落とす。
何ともシロらしい答えだ。
この質素なところがシロの長所だということは十分承知しているが、しかし、今の大輝が求めているのは、もっと具体的な回答であった。
そう――例えば――例えば、何だろう。シロのことになると全く

予測がつかないけれど、とにかく、現時点で貯まっている一万二千円におさまるくらいの現実的な物欲を示してもらえれば、それが一番分かりやすくて有難かったのだが。

シロはこちらの気も知らず、のんびりとリモコンに手を伸ばしているところだった。

「大輝、ちゃんねるを替えてもよいか？　しろのような年寄りには、こうした番組は喧しいばかりで面白うない」

「あ……どうぞ。俺も別にバラエティ好きじゃないし」

「他には何をやっておるかの」

両手で包みこむようにリモコンを持ち、丁寧にボタンを押してチャンネルを回す。なぜかシロはリモコンを片手で扱おうとしないのだ。この仕草を見るたびに妙に可愛らしいと思うのだが、もちろん口に出したことは無い。

ぽち、ぽち、と一定のリズムでチャンネルを替えながら、シロは口を尖らせる。

「この頃合いになると、いつも同じような番組ばかりじゃな。これではてれび局が幾つもある意味が無かろうに……。にゅうす番組のひとつでもやっておれば良いのじゃが」

「夜のニュースはもうちょっと遅くになってからですね」

大輝は言いながら欠伸する。体育がマラソンだったせいか、それともコタツの魔力のせいかは知らないが、いつもよりも早く眠気が襲ってきた。

すべてのチャンネルをチェックし終えると、シロは「ふん」と鼻を鳴らしつつテレビの電源を切って、コタツの上にリモコンを放り出す。

「駄目じゃ。点けておかぬほうがましじゃな」

「ですねぇ――あ、そうだ」

ニュース番組で思い出した。大輝は眠気に俯きかけていた顔を上げる。

「シロさん、あれ知ってます？」

「あれとは何じゃ。いやらしいことか」
「いやらしいことじゃないです。今日学校の奴らから聞いたんですけど、うちの近所で変なことが起きてるらしいですよ」
「ふむ？」
シロはミカンの横に置かれていた袋に手を伸ばし、引き寄せる。
「どうしたことが起きておる」
「いや、なんか、連続で何人も行方不明になってるとかで。聞いてません？」
「ゆくえ――ふめい？」
シロは袋の中から成犬用のドライフードをつまみ出し、ぽり、と齧る。
大輝は頷いて続ける。
「俺も人づての話なんでよく分かんないんですけど、この近所で、冬に入ってから何人も姿を消してるらしいんですよ。しかも若い人ばっかり……みんな夜に出歩いてるときに消えちゃったって話です」
「ほう」
シロは二粒めのドッグフードを指先で弄んでいる。
「なるほどのう」
それから口に放り込み、噛み砕く。ぽりぽりという美味しそうな音には惹かれるものの、実のところ美味いのか不味いのか、食べてみたことのない大輝には想像もつかない。
租借したものを飲みこんで、シロはそろえた指先で口元を拭いた。
「人攫いならば物騒なことじゃな。大輝も気を付けよ」
「っていうか、なんか怪しくありません？」
「……のう」横目でこちらを見てくる。「先刻より見ておると、大輝は剥いた蜜柑をいじくり回しておるばかりで、一向に食おうとせぬのじゃな」
「へ？　あ、いや、食べますけど」
剥き終えていたミカンを二つに割り、片われを丸ごと口に放り込む。
シロはふうむと頬杖をついた。

「まあ、大輝の考えておることは分かるがな。しかし妙なことを全て化け物の仕業と決めてかかるのも早計じゃろう」
「べふに……」ミカンを飲みこむ。「……別に、決めてかかってるわけじゃないですけど」
「眠り石が壊れたとはいえ、比べるべくもなく、人は化け物などより遥かに多い。にゅうす番組を見よ。人が死んだの攫われたのと四六時中騒いでおるが、どれもこれも人のしでかしておることじゃ」
シロはまたドッグフードを齧り、うっすらと複雑な笑みを浮かべる。
「いつの時代、どの地もそうであった。人は人同士で勝手に害し合っておるものよ」
「ですかねえ。……ですね」
確かに、言われてみればもっともなことである。シロとの出会いに始まり、食み虫、下がり腕、それから石落や宮琵など、立て続けに人外のものと接してきたせいで、大輝の感覚がおかしくなっているのかもしれない。
深い考えも無しに余計なことを言うのではなかった。大輝は残りのミカンを口に突っ込み、もぐもぐと噛みながら、両手をコタツの中に突っ込む。
と、不意にシロが険しい顔をした。
「んんっ？」
細い目が一瞬だけ見開かれ、丸まっていた背筋がぐねりと波うつ。
大輝は横から顔を覗き込む。
「どうしました」
「どー―」驚いたような顔がこちらを向く。「どうした――じゃと？」
「え」
「おぬし一体……ああ、そうじゃったか、すまぬ」
シロは言いながら表情を緩ませ、それから肩に寄りかかってきた。
「大輝は口下手じゃからな。よい、よい。言葉にせずともよい。やっとその気になってくれたか」

「はあ？」
「突然のことで驚いたが、男は不意にさかるものじゃからな」
生ぬるい吐息が、ふう、と耳にかかる。
何が何だか分からない。
戸惑うこちらの反応をよそに、シロはそわそわと勝手に盛り上がっている。
「さて、どうしたものか――まずは明かりを消さんとな」
「いやいやいや」一体何の話をしているのか。「どうして消すんですか」
「……？　どうしてもこうしてもあるまいに」
シロは不思議そうに言葉を止めたが、やがて、くすりと笑った。
「ほう。なるほど、そうか」
頷いているのか何なのか、頭に頬をすり寄せてくる。
「大輝は初めてじゃから、女の体がどうなっておるか気になるのじゃな」
「はい？」
「ならば明かりは消さずとも良いが、このような鍵も掛からぬ部屋では、ゆるりと眺めておる暇は無いぞ。どれ、義父上や石楠花でも入って来ぬうちに……と」
「ちょ――えっ？」
股間に手が入ってきた。慌てて膝を閉じ、その手を挟み込む。
「いきなり何してるんですか！」
「大輝がしろにしておるのと同じことじゃろうが。ほれ、膝を開かぬか」
「俺は何もしてませんって！」
「しておらぬじゃと？」
「だって、ほら」
大輝は反則行為を否定するサッカー選手のように両手を挙げてみせる。
それを見たシロは我に返った顔となり、素早くコタツから両足を

抜いて、遠い間合いで座り直した。
「な……ならばこの手は――」
右手をコタツに突っ込み、何かを掴んで引っ張り出す。
「何者じゃ！」
ずるり。
怪力によって引きずり出されたのは、なんと、石楠花の上半身であった。
シロと大輝は同時に仰け反る。
「うおう！」
「しゃ、しゃくネエ！」
「んん？」
仰向けでシロに手首を掴まれたまま、石楠花は眠そうな目を瞬かせた。
「……あれ？　あんたたち何してんの？」
「そ――それはこちとらの台詞じゃ、大馬鹿者！」
シロは石楠花の腕を真っ直ぐになるまで引っ張り、長い両脚を使って肘関節を極める。テレビで覚えたのか偶然かは知らないが、大変見事な腕ひしぎ逆十字固めである。
一秒と経たず、和室に悲鳴がこだまする。
「いっ、たぁい！」
「こたつに潜って眠ってはならぬと、幾度も幾度も言うたろうが！　その上に紛らわしい寝呆け方をしおって！」
「何、何？　折れるってば！　あ、折れる折れる折れる！」
石楠花の左手が必死に畳を叩くが、シロは技を解こうとしない。ゴツゴツとコタツの底が鳴っているのは、恐らく、もがく足がぶつかっているのだろう。
大輝はいつものごとく壁際に退避し、呆然とその光景を見守るしかなかった。
やがて石楠花の悲鳴が弱々しくなり、その目じりに涙が滲みはじめてきた頃、シロはようやく関節技を解いた。

「全く――二度とこたつの中で眠るでないぞ」
パーカーの襟を直しながら座り直す。
石楠花は反撃する気力すら削り取られたようで、腕が自由になった後も、力なく仰向けに横たわっていた。
「ひ、ひ、肘の感覚が……」
「大袈裟にするでない。加減はしたわい」
シロは呆れ顔でそう言ったが、妖怪の力で手加減をしなければ、今頃石楠花の腕は物凄い状態になっていたことであろう。
石楠花はシロを睨みながら、ようやく体を起こす。
「あいたた」痛めつけられた肘に手をやって。「んだよお……仕方ないじゃんか。ご先祖様が猫だったせいか知らないけど、コタツに入ると勝手にああなっちゃうんだから。だいたい今日に限ってどうしてそんなに怒るんだよ」
「寝呆け方が悪いのじゃ、寝呆け方が。一体しろの股ぐらを何と間違えたのやら」
シロは舌打ちし、ちらり、と大輝の方に視線を向けてくる。
「ようやく大輝がその気になったのかと思ったが、とんだ糠喜びじゃったわい」
「あははは」
愉快でなくとも笑うしかない。
それにしても感心に値するのは石楠花の寝相である。いくらコタツが大きいとはいえ、大輝たちの脚に触れることもなく、よくも器用に全身をおさめていたものだ。一体どういうポーズで寝ていたのか想像もつかない。
石楠花はまだ何の事だか理解できていない様子で、両の拳を使って顔をこすっている。どうでもいいことだが、宮琵の一件以来仕草が猫じみてきたのは、やはり先祖返りの力に目覚めたからなのだろうか。
シロはその背を軽く叩く。
「ほれ。目が覚めたなら、とっとと風呂へ入ってこい。義父上はも

う上がったぞ」
「ん――小梅さんたちは？」
「とぼけたことを言うておる。とうに帰って行ったわい」
「あ、そう」
小梅は頷いてから、ぱたりと倒れた。
「でもあと五分待って」言いながらモゾモゾとうつ伏せになる。「起きたばっかりでお風呂入るの辛い。動けない」
「仕方のない娘じゃ」
「じゃあ俺が先に入っちゃいますよ」
大輝は立ち上がる。
シロはうむと頷いてコタツに足を入れ直した。
「寝冷えせぬよう、しっかりと浸かるのじゃぞ」
「はい」
「嫌でなければ背を流してやるが」
「あ、お構いなく」
決して嫌ではないですけど。
大輝は心中でそう付け加えつつ、誤魔化し笑いで和室を後にした。

二

大輝が部屋を出て行ったあと、石楠花はコタツの中で寝返りをうち、顔のすぐ隣にあるシロの尻をつついてみた。
「……ねえ」
「どうした、二度寝しておるのではなかったのか」
シロは石楠花の顔を見下ろそうともせず、かといってテレビもつけずに、ぽりぽりとドッグフードを食べている。
石楠花はもう一度尻をつつく。
「ねえったら」
「だからどうしたのじゃ」
ようやくこちらを見た。何度見ても真っ白な顔である。

石楠花は笑った。
「あんたのお尻ってさあ、近くで見るとでっかいね」
「何を言うかと思えば」
「触るとぷよぷよしてるし、ここだけ見るとカッコ悪いよ」
「ち」シロは舌打ちしながら顔をそむける。「やかましい。大輝はすたいるが良いと言うてくれたわ」
「……よく平気だよね」
「む」
「あたしだったら無理だな。絶対無理」
「貴様――」シロの顔がけわしくなる。「久々に真正面から喧嘩を挑んできおったか。よかろう、表へ出よ」
「違うよ」
石楠花は顔をそむける。
「あんたの態度のこと。よく平気でいられるねって話」
「……」
返事は返ってこない。
石楠花は寝がえりをうち、座っているシロに背を向ける。
「あたしなら無理だよ。大輝にも何も言わないで――さっきみたく、今まで通りの態度でいるなんて。そんなに割り切って演じられない」
「……」ぽつりと。「責めておるのか」
「違う」
そうじゃない。
責められるわけがない。人間として生まれて育ってきた自分に、何かを言う資格なんて無いのだ。でも。
「でも、さ」
「……。大輝はまだ幼い」
シロの声は悲しいほど穏やかだった。
「今は綺麗なものだけを見ておればよい年頃じゃのに、成り行きとはいえ、やれ死ぬの殺すのと、随分と嫌なものを見せてしもうた」
「だったら」

「なれど、今となってはしろの定めも変えられぬ。今のしろに出来ることといえば、せめて、大輝が全てを知るまで今までの通りに振る舞うことくらいじゃ」
シロは多分笑っていた。
「わずかでも長く、な。勝手を言えば、しろもそのほうが良い。大輝にどう思われるかも今はまだ考えとうない」
「……ホントに勝手だね」
「うむ――」
「悪いね」
「何がじゃ」
「べつに……」コタツの中で猫のように丸まる。「あたし、もう少し寝るよ。大輝がお風呂出たら起こして」
そして石楠花は目を閉じた。
今は眠ってしまおう。考えても、話しても、どうせ何も変えられないのだから。
石楠花に出来ることは、ただ黙っていることだけなのだから。
――ああ――。
何かが背を撫でている。
柔らかい。シロの手だ。
本当に、この期に及んで、どうしてこんなことが出来てしまうのだろう。
この手も、この優しさも――。
温かで罪深い感触に導かれ、石楠花は再び眠りに落ちた。

三

その日の夜中、大輝が目を覚ましたのは、ほんの偶然であった。
小便に起きたわけでもなければ、喉が乾いたわけでもない。ただ、ふと目が覚めた。自分でもはっきりとした理由は分からないけれど、大方、枕の位置がしっくりこなかったとか、そうしたところだろう。

よくあることである。
目覚まし時計を見ると、午前一時半だった。
大輝の部屋の暑さ寒さは、角部屋である石楠花の部屋ほどではないものの、外の空気に左右されやすい。要するに冬の夜は寒いのだ。今も頬や鼻の頭はすっかりと冷えており、ためしに深く息をすると、薄闇が喉の奥に入り込んで鼻の穴へと抜けた。
これは堪らない。両手で布団を少し引き上げ、顔を隠す。
――と、階下から音がした。
誰かが廊下を歩く音。玄関の開く音、そして閉じる音。いずれも、どこか人の耳を忍ぶような気配の物音であった。
重たい布団を持ち上げ、体を起こして窓のカーテンをずらすと、家の前の細い道を、厚着をした女性が歩いてゆく姿が見えた。
「……ん」
あれは。
「シロさん……？」
早足に歩く後ろ姿が、曲がり角の向こうへと消えてゆく。
こんな時間に何の用だろうか。
無人になった景色を見下ろしながら、眠い頭で思考を廻らせようとしたが、それらしい結論が出る前に、冷えた背筋がぶるりと震えた。
慌てて布団にもぐり直し、目を閉じて考える。
まあ、普通に考えて、あれだろう。多分、買い物だろう。以前にも、夜のうちに切らしたはずの牛乳が、朝には冷蔵庫の中に存在していたことがあった。
シロは本当に気を使い過ぎる。……思いながら寝返りをうつ。いい姿勢ができた。これで朝まで安眠だ。
よし、明日になったらシロに言おう。妙に照れくさくて、言いながらどんな顔をしていいのか分からなくて、それでももう何度目かになる、あの台詞を。
――あなたが。

あなたがこの家に居てくれるだけで、俺たちは嬉しいんですから。

四

八月八日生まれの十三歳。

性別は女。生まれた頃から病弱。

岩手県で育ったが、今年の初めに両親を亡くし、今は遠縁の親戚のもとに身を寄せている。

少し口下手で引っ込み思案。

――学校ではそういうことになっている。どれもこれもでたらめばかりで、嘘でないのは入神夜々という名前くらいだ。

引っ込み思案という設定は、無論、生徒たちの間で目立たぬためである。

下手に目立って交友関係が広がれば、そのぶんボロの出る可能性も高まってくる。かごの鳥とはいえそれなりに長くは生きてきたし、別段不器用な人間であるつもりも無いが、無茶な環境に身を置いているのだから、そうした杖をついておくに越したことは無い。適度な人間関係をこなしつつ、教室の隅で大人しくしているのが、夜々にとって最善の学校生活法なのだ。

しかし、生まれ持った容姿ばかりはどうしようもなかった。

小梅は夜々を「世界一可愛い子」と言って育ててくれたけれど、それは親の欲目というやつだろうし、真に受けていてはいつか大恥をかくと思い、半ば冗談を言われているような感覚で聞き流してきた。

しかし、だからといって、自分の容姿が十人並みでもないということを、夜々はこの学校に来て自覚した。どうやら夜々の顔は端正に出来ているらしい。どの程度かといえば、学年で少し目立ってしまう程度にだ。

林の中の象を真似るように、静かに、静かに学校生活を営んでいても、ろくに話したこともなく、夜々の好きな本すら知らないはず

の少年たちが、次々に好意をしめしてくる。
悪い気こそしないものの、正直言って有難迷惑であった。
だから夜々は――今回も、静かに目を伏せて答える。
「すまないね」
これで四人目になる。それでも慣れないものだ。
少年の肩が、がっくりと落ちるのが目に見えた。
彼は苦笑いしていた。
「……だよね、やっぱり」
「やっぱりということはないさ」
夜々は首を振る。
「少なくとも、君から嫌な感じを受けるということはない。私とはたまたま縁が無かっただけだよ」
この程度のことしか言ってやれないのだから、もしかして自分は本当に口下手なのかもしれない、と夜々は思う。
夜々を校舎裏に呼び出した少年は、廊下などで幾度か言葉を交わしたことのある、丸々と太った同学年の子だった。
取り立てて男前に育ちそうな顔でもない。
告白には勇気が要っただろう。事実、さっきまで顔が真っ赤で、可哀そうなくらいだった。
所在なさそうな苦笑いに、しくりと胸が痛む。
薄暗く湿った校舎裏で、迷いながら紡いだ夜々の言葉は、ほとんど呟きのようにしか響かなかった。
「これからは憎んでくれて構わないよ。私は君のことを何も知ろうとせず、勝手な理由で交際を断ったのだから」
「……」少年は不思議そうに夜々の顔を見る。「……勝手な理由？」
「うん――」
夜々は頷く。
少年は問いを続けてくる。
「それって、好きな人がいる、とか」
小さな声だった。

「そういう……こと？」
「――。うん――」
夜々は曖昧に頷く。
少年は、そっか、と笑った。
「そうだったんだ」
「ごめんよ」
「いや、こっちこそごめん。困らせて」
少年は申し訳なさげに五分刈りの頭をかく。
――どうして。
どうして謝るのだろう。彼は何も悪いことなどしていないのに。
胸が痛む。
少年は続けた。
「今日のこと気にしないでいいよ。伝えられただけで満足だから」
「……」
「なんていうか、こうやって来てくれただけでも嬉しいし。名前も覚えてくれてたみたいだし」
「……」
「ええと」
少年はまた頭をかき、最後にもう一度笑った。
「じゃ、俺、部活があるから、あの……体育館に」
「うん」
「それじゃ」
そして少年はくるりと背中を向け、まるで逃げるような早足で歩いて行った。
夜々は一人――残された。
校舎の壁に寄りかかる。
「……ふう」
見上げると灰色の空があった。
振ってしまった。
彼は今、どんな気持ちだろうか。

恋破れるのがどれほど悲しいことなのか、空しいことなのか。失恋などしたこともない夜々には分からない。

考えるだけ無駄なのだろうか。

動かぬ雲をながめているうち、革靴の中で、つま先がじわじわと冷えだした。

寄り掛かっていた背をコンクリートから離し、何だか虚ろな心持のままに校舎裏を出ると、ちょうど、昇降口から出てきた大輝と鉢合わせた。

大輝はこちらと目を合わせつつ、あ、どうも、と頭を下げてくる。彼もまた一人であった。

どういう顔をしたものか――いや、いつも通りで良いのか。

「その会釈はやめてほしいね」苦笑いしてみせる。「同級生にする態度ではないよ」

「はあ、すみません」

「敬語もなかなか直らないな。まあいいか。これから用事はあるのかい」

「あ、いや、特には」

「では帰ろうか」

いつ頃からか大輝と家が向かい合わせであることが学年に広まったので、時たま一緒に帰るようなことをしても、変に勘繰られる心配は無くなっていた。むしろ、普段わざわざ帰る時間をずらす方が不自然に思われるかもしれないのだが、そのあたりは調節の難しいところだ。

校門のほうへ歩き出すと、同時に向かい風が頬を撫でた。

「寒いな――」歩きながら顔をしかめる。「もう十二月も半ばを過ぎたか。ここのところ登下校が難儀だね」

「ですねえ」

後ろを付いてくる大輝は、情けない声を出していた。

「今年は特にキツいですよ。早く春にならないかなあ」

「今はまだ日があるからましだが、夜になってからは本当に大変だ

ね。外に出る用事があったって、とても出歩けたものじゃない」
「あ、そういえば」
大輝が大股で追い付いてきた。
「シロさんったら昨日、クソ寒い夜中に一人で出かけて行っちゃったんですよ」
「おやおや」
「前からよくあったんですけどね。牛乳の買い忘れとかで、わざわざ夜に出かけてくのは……。昨日も多分そんなことだったんだろうと思いますけど、今はさすがに寒いじゃないですか」
「まあねえ」
「妖怪も風邪とかひくらしいし、そこまで神経質になって家のことやらなくてもいいって、いつも言ってるんですけど」
「そうだねえ」
相槌を打ちながら、無理からぬことだと夜々は思っていた。
あれはあまりに不器用な化け物だ。馬鹿ともいえる。恩に報いたい、好かれたいと思えば、ただひたすらに尽くしてしまうのだ。やり過ぎればかえって重荷になるかもしれないとか、そんなことも心のどこかでは理解しているのだろうが、かといって他の手段を工夫できるほどの頭は無い。困ったものである。
――いや待てよ。
ああ、そうか。なるほど。
その運びになったということか。
「大輝くん」
「はい」
「そうした件については、任氏の勝手にさせておくといい。と言うより、何も言わない方がいい」
「え――どうしてです？」
「任氏のためだ。いずれ分かる」
とだけ言っておくことにしよう。
大輝は納得のいかぬ顔で、こちらの横顔を見つめている。

だが、これ以上は夜々の口からも言うことはできない。少なくとも――現時点では。

「難儀なことだよ」

「え？」

「いや……」

夜々は首を振る。

「こちらの話さ」

五

魚なら魚屋、野菜なら八百屋。

食材はそれぞれの店を回って買った方が割安になる。夕刻に商店街を回るようになってから、シロが最初に覚えた事柄である。

しかし、醤油や味噌に限っては、大きな店で買うのが一番安い。文字通りに人間離れした腕力がある以上、荷物の重さに関しては心配しなくとも良いが、かさばらない品から順に買って行った方が動きやすいのは当然のことであって、細々とした物が買い出しリストに入っている時は、まず、商店街の外れにあるスーパーから回るのが習慣となっていた。

今日は豚と白菜を土鍋で煮込むつもりだから、ポン酢醤油と鷹の爪が入用だ。千切りにする生姜は、白菜と共に八百屋で買えばいいだろう。

頭の中で確認しながらガラス扉を押し開け、買い物カゴをひとつ手に取って、カートの前を通り過ぎる。

それから真っ直ぐに調味料売り場に向かい、瓶の並ぶ棚に目を走らせていると、傍らから、「シロちゃん？」と声をかける女がいた。

曲げた腰を戻して横を見れば、立っていたのは――、はて、この小太りな中年女は誰だったか。顔には何となく覚えがあるが、どんな者だったかも、自分とどうした間柄であったかも思い出せない。

「……おう」

取りあえず挨拶をしながら思い出す。
ああ、そうだ。元々顔しか知らないのだ。
こんなふうに一方的に名を覚えられていることが多いのは、シロが目立つせいだろうか。あまり愛らしすぎるのも考えものである。
シロは買い物カゴを持ち直す。
「おぬしも買い出しか」
「そうよお」女は頷く。「他に出歩く用事なんて無いわよ。犬の散歩は娘がしてくれるし」
「犬を飼うておるのか」
「まあねえ。全然言うこと聞かなくて可愛くないけどねえ」
「左様か」
この女、用事があるわけでもないのだろうか。シロは棚に目を戻す。
そうそう、と女は勝手に続けた。
「例の話、知ってるでしょ。行方不明の話」
「――ああ」ポン酢醤油を手に取る。「少しは聞いておるが」
「怖いわよねえ、もう何人も攫われてるんでしょ？　気をつけないとさあ」
「人攫いとも限らぬわい」
「え？　ああ、それもそうだけどね」
「間もおかずに幾人も姿を消しておるのじゃから、用心しておくに越したことも無かろうがな。おぬしもせいぜい気を付けておくとよい」
「あら……ありがと」
女は調子を奪われたような様子で頷いた。
シロはその顔を横目に、瓶をカゴに寝かせて入れる。
「さて――それではな」
「もう行くの？」
「これと鷹の爪を買うて終いじゃ。他は余所で求めるつもりでおる」
「あ……そう」
「ではな」

「あ、ちょっと待って」
去ろうとするシロの袖をつまみ、女は強引に引き止める。厚かましいというか無作法というか、ろくに話したことも無い相手に馴れ馴れしいものである。
さすがのシロも、これには少しばかり閉口した。
「何じゃ一体」
「あのね」
袖から離した手を口元に添え、女は低く声を落とす。
「あの人いるでしょう？　池上さん。シロちゃんも会ったことあるじゃない」
「んむ？　ううむ」
この女と同じくどこかの女房の話であろうが、誰の事やら分からないので頷くに頷けない。
女は勝手に続ける。
「あの人のところの娘さんもね、居なくなっちゃったらしいのよ」
「娘？」
「そう。大学生のね、娘さん」こくこくと大袈裟に何度も頷く。「ちょっと前の日曜日だって言ってたかしら。日曜日っていったら学校はお休みだけど、大学生って何だか色々あるでしょ？　それで、その日も学校に出かけて行って――、それっきり帰ってこなかったんだって。夜まではこのへんウロウロしてたっていう話もあるんだけどね」
「……日曜日」
顔が一つ、脳裏によぎる。
女は妙に興奮しているような様子で、しかし声だけは落としたままに、こちらが訊いてもいない話を続ける。
「私は一度だけ見たことあるんだけどさ、お洒落な感じの子だったわよ。髪の毛茶色に染めてて、爪はほら、ネイルアートっていうの？　ちょっと違うかしら。でも、こう――長く伸ばして、色んなマニキュアみたいなの付けてさ」

カレンちゃんっていう子なんだけどね、と女は付け加える。
シロは――
「……それは」
目をそらしていた。
「それは……大事じゃな」
「でしょう？　他人ごとじゃないのよねえ。うちの子にも遅くには出歩かないように言ってるんだけど、やっぱり心配でさあ」
「そうじゃな」
シロは頷き、笑顔を作る。
「世話になっておる家の子らにも、よう言いきかせておくとしよう」
「そうよお。そうしたほうがいいわよ」
「然らば、しろは次の買い物があるゆえ」
「あ、やだ、ごめんなさいね、時間取らせちゃって」
それじゃまたねと愛想笑いを残し、女は自分から先にどこぞの売り場へと消えて行った。
静かになった棚の前、シロは歩き出す前に息をつく。
「……」短く。「ふ」
笑いが漏れたのか、それともただの溜息なのか、シロ自身にも分からない。
店内には能天気な音楽が流れている。
――。まあいい。
さっさと済ませて次の店を回らねば。
シロは顔を上げ、また改めてカゴを持ち直した。

六

自動販売機から少し離れたところで、石楠花は思案していた。
このまま立ち止まっているべきか、歩き過ぎるべきか、それとも声をかけてみるべきか。目当てにしている缶の汁粉があるのは、近くではこの販売機だけなのだが。

視線の先には若い女がいた。
女はこちらに気づいていない。さっきから自動販売機の足元に這いつくばり、下に手を突っ込んで、何やらごそごそとやっている。
「……ん、くっ」
声が出ている。苦戦しているらしい。
左右を見ても、石楠花のほかに通行人は見当たらない。
夕日が狭い道を照らしていた。
このまま突っ立っていても汁粉は買えないだろうし、こんなに分かりやすく困っている者を無視してしまうのも気持ちが悪いので、石楠花は結局、後ろから声をかけることにした。
「あの――」歩み寄る。「どうしたんですか？」
「ん！」
女は自販機の下から腕を抜き、這いつくばったままこちらの顔を見上げてくる。
「お前だれだ！」
「え」
予想外の反応に石楠花は後ずさる。
女はバッタのように跳ねて立ち上がり、ぱんぱんとジーンズのひざを叩いた。
「名前いえ。クロ、お前だれか知らないから。初めて見たから」
こちらを警戒するような瞳。やたらと長い前髪が顔の半分を隠しているが、やや面長で、いわゆる綺麗顔であることは窺える。大雑把に括ればシロと同じような系統の輪郭だ。背丈のほうも、もちろんシロほどではないが、すらりと高い。つややかな長い髪をした、妙な迫力のある女だった。
石楠花は瞬時に気圧された。
「え……と」
とにかく答えるしかあるまい。
「私はその……殿山石楠花、ですけど」
「それすごく長すぎる」女は口をへの字に曲げる。「覚えるは難し

いだろ」
「あ、石楠花でいいです」
「それだな」
女は頷き、自販機の足元を指す。
「あのな石楠花、ここにな、さっき五百円落っこちた。転がった。クロが悪いんだけど、これだとコーラ買えないになるだろう」
ジェスチャーをまじえて説明してくる。
これは――外国人だろうか。言っていることが理不尽に難解だ。
「コーラ……クロ？」
「タカミチはコーラ好きだからお使いに来た。クロは名前。タカミチつけた。もらった」
「たかみち？」
――ぞくり。
「……あ」
もしかして、この人は。
女は怪訝そうに顔を覗き込んでくる。
「どうしたか」
「あ、いえ」
何でもありませんと首を振って、石楠花は道の隅に目をはしらせる。
全体的な話の流れを理解するのは諦めるとして、要するに、さっきの行動から半ば察していた通り、小銭を自販機の下に落としてしまったということらしい。
すぐそこにあるブロック塀の前に、ちょうど長めの枝が落ちていた。せり出したイチョウの枝が風で落ちたのか。
「えっと――これを使えば」
それを手に自販機の前に這いつくばり、奥の方に見える銀色の物体をかき出しにかかる。
五百円玉は、ものの三十秒も苦心せぬうち、枯れた落ち葉やらと一緒くたになって、夕日のもとに飛び出してきた。
クロと名乗った女は歓声をあげた。

「すごい、取ってもらった！　石楠花はクロより頭いいと思う！」
再会した硬貨を拾い上げ、嬉しそうに飛び跳ねる。
石楠花は枝を片手に苦笑いした。変だけれど――何というか、かわいい人だ。
「良かったですね」
「うん！　これでコーラ買えてしまう！」
クロは意気揚々と自販機の前に立ち、叩きこむように硬貨を入れて、コーラのボタンもぶっ叩く。壊すつもりかと問いたくなる勢いだったが、幸いと自販機のシステムは正常に動作した。
出てきた缶を取り出し口から引っこ抜き、うん、と満足げに頷く。
「お使いできた。帰るまでがお使いだけど、半分できた。石楠花はありがとうございますな」
「いえいえ」
深々と頭を下げられたので、石楠花も負けじと頭を下げる。
耳慣れた声がした。
「何をしておるのじゃ、石楠花」
「あ、シロ」
顔を上げて横へ向けると、買い物袋を提げた細長いシルエットが近づいてくるのが見えた。
シロは二人のところまで歩いてきて立ち止まり、クロの顔をじろじろと見る。
「なんじゃ、おぬしは石楠花の知り合いか？　見かけぬ面じゃが」
「石楠花は今お知り合い。でもな」
クロはシロの鼻先に人差し指を突き付ける。
「おまえ知ってるのは最初からだろう」
「何じゃと？」
「クロとおまえ会ったことある。暗いとこで、ずっと長く、だいたいのとき別々にいた。おまえよく泣いてたな。クロもいっぱい泣いたけど、おまえの泣くの声よく聞いたぞ」
「む――」

シロの片眼がぎょろりと見開かれる。
「おぬしは――そうか、あの時の大跨ぎか」
「いまはクロ。任氏はお久しぶりですな。でもあんまり知りあいじゃないから、喋ることあんまり無くて、クロはコーラ持っていくだろう？　だからまたこんど、ばいばい」
笑いながらそう言って、クロは殿山家と逆の方向へ歩き出す。
シロは呼び止めようと思ったのか、わずかに口を開きかけたが――結局、声をかけることはしなかった。
楽しげに遠ざかるクロの後姿を見送りつつ、石楠花はシロに問う。
「おお……またぎ？」
「眠り石が壊れたからな。あやつも出てきたのじゃろう」
「あ、やっぱり妖怪なんだ」
「しろと同じ石落の囲い女よ。もっとも、あれは木の実を食うことしか知らぬ大人しい化け物じゃったが」シロの声は微笑っていた。
「あのように笑む女であったか」
「なんか、面白い人だよね」
「賢うないのじゃ。人を食うことを求めぬゆえ、人と触れずに生きておった類のものでな。もとの頭が悪いわけでもなかろうが、語ることや行いは森の猿などとさして変わらぬ。まあ、そのぶん害が無いとも言えようが」
「ふうん」
そうなのか。世の中には色んな人外がいるものだ。……自分も含めて。
やがて、クロの後姿が曲がり角の向こうに消える。
ふと横を見ると、シロの姿も消えていた。
「あれ」
「何をいつまでも呆けておる。早う帰るぞ」
声は背後から聞こえた。
石楠花は慌てて追いかける。
「ちょ、ちょっと、黙って行くなよ！　まだお汁粉買ってないのに

！」

「五月蠅い奴じゃのう……。汁粉なぞ後でこしらえてやるわい」

「あれ」追い付いて買い物袋を覗き込む。「今晩は鍋物？」

「白菜と豚を重ねて煮るつもりでおる。あとは――そうじゃな、冷蔵庫の中に残っておる寒鰤を照焼にでもするかの。胡瓜の糠漬けも出来ておる頃じゃろうし」

「やった。あたしが好きなのばっかり」

「では違う物にするか」

「ちょ――だから、どうしてそういう意地悪を！」

「ほほ」

石楠花が振り回した鞄を軽やかに避け、シロは小走りに駆ける。

「ほれほれ、置いていってしまうぞ」

「待てったら……ああ、前見ろシロ！」

「ん？　ぎゃ！」

電柱に正面から激突し、シロは跳ね返って仰向けに倒れる。

石楠花はその衝撃映像に暫し絶句したが、すかさず立ち上がって電柱に平手を食らわせるシロを見て、腹からこみ上げてきた笑いを吐き出した。

第十六章【林偉――りん・うぇい――】

一

石之助のところへ義理の息子から電話があったのは、一週間ほど前のことである。今年に限って気を使ったのか何なのか、「せっかくのクリスマスだから石之助も泊まりに来たらどうか」という誘いであった。

もちろんクリスマスなどといった祭りに興味は無いものの、妻が逝ってからしばらく、冬を一人で過ごしてきた退屈な身だ。せっかく声をかけてくれたのだし、正月を待たずに顔を出してもいいかもしれないと気を向かせたのだが、では甘えようかと頷く前に、礼司はこう続けてきた。

「小梅さんもお義父さんに会いたがっているそうですし」――。

その口ぶりはいつも通りの飄々とした調子であったから、からかおうとするような他意があったかは知れない。

しかしそんなことを言われて、「そうかそうか、じゃあ顔を出すかな」などと言えるほど素直な石之助でもなく、つい、行けたら行こうかなとか、元気があったらなとか、細かい言い方は忘れたが、ともかくそのような曖昧な答えだけして、そのまま電話を切ってしまった。

結果として遠まわしに断るようなやり取りになってしまったのは不本意ではあったが、まあ、一人の冬も毎度のことである。正月にはどうせ顔を出す習慣になっているし、それまでは例年通り、テレ

ビでも見ながらのんびり過ごしていようと考えていたのだ。
そう。少なくとも、昨日までは。
実のところ、不本意が胸中で燻っていたのだろう。クリスマスイヴの今日に至って妙に落ち着かなくなり、結局、のこのこと電車を乗り継いで、礼司たちの住む町まで来てしまった。今はとうに改札も出て、駅前通りのコンビニの前である。
バス停の脇に立つ街路樹を見上げ、石之助は煙草の煙をくゆらせる。
狭い間隔で並ぶ街路樹には、よく見ると、それぞれに電球らしきものが仕掛けられていた。今はまだ正午にもなっていないが、夜になればピカピカと光るのだろうか。そう都会でもないくせに生意気なことだ。
「もう好景気でも無ぇんだがな」
何を呟いても悪態染みてしまうのは若い頃からの悪癖だった。
どこからかクリスマスソングが流れている。
さて、どうして顔を出したものか。
腕を組んで歩くカップルを視線で見送ってから、ついと横を見ると、灰皿の向こう側に、旅行用のキャリーバッグを携えた若い女が立っていた。
派手な女である。
真っ黒なサングラスに、真っ白な毛皮のコート。それから美しくウェーブのかかった長い髪。
音を立てることもなく、いつの間に現れたのだろう。
それに――。
女は細長い煙草に唇をつけ、薄い煙を空気に溶かした。
「警戒してるわね」その唇がぽつりと言う。「何か感じたのかな」
玲瓏な声だった。
石之助に言っているのだと気付いたのは数秒後である。
こちらが答える前に、女はサングラスをずらした。
「あなた、もしかして私と同類かしら」

獣じみた視線をこちらへ向け、挨拶をするように、艶めかしい妖気で撫ぜてくる。
やはり妖怪か。
それも相当に強い。あの白狐かそれ以上――縛術などで太刀打ちできる相手では無かろう。
石之助はしかし、身構えることをしなかった。
「いや」
わしは人間だが、と答えながら、言い知れぬ感覚に戸惑う。
女の妖気には妙な懐かしさがあった。
はて、どこかで相対したことがあったような。
己が記憶を探っても心当たりには至らない。だいたい、こんな派手な女ならば、一度会えば忘れるはずもない。初対面のはずだ。
女は小さな顔を軽く傾げて、石之助の瞳を覗き込んでくる。
「確かに妖気が無いわねぇ。でも私の力は感じた、と」
ぱちくりと眼が瞬く。
「ってことは、もしかして、石字縛師の子だったりして」
「……。そうだけどよ」
「きゃあ、ほんとに？」女の顔が急激に輝きを帯びた。「なんて偶然なのかしら！」
そして唐突に飛びついてくる。
石之助は仰け反ろうとしたが捕えられ、凄まじい怪力で抱き寄せられて悲鳴を上げた。
「おま、あ、危ねぇ！　煙草が！」
「あはは、この子ったら照れてるのね。可愛いったら無いわぁ」
「照れてねぇ！　何だコラ、放せ馬鹿野郎！」
香水臭い。とにかく香水臭い。何事だ。
女は石之助に正面から抱きついたまま、煙草を持っていない方の手で禿頭を撫でまわしてきた。
「このツルツル頭――そっかそっか、あなたが石之助ちゃんね。石楠花ちゃんから話は聞いてるわよ」

「石楠花だあ？」もがけど体は離れない。「何だ手前、孫の知り合いか」
「もっと深い仲だわよ。あなたともね」
「な――に」
「あら小梅ちゃん、会いたかったわ」
「こ、小梅ッ？」
石之助は紅猫鬼に抱きつかれたまま、無理やり顔を横へと向ける。
そこには、分厚いコートで着ぶくれた小梅の、笑うでも怒るでもなく、ただじっとこちらを見つめる立ち姿があった。
大きな目から放たれる視線。
女と抱き合っている石之助。
もちろん、言い訳をするのもおかしな話だ。
おかしな話なのだが――
「あ……あのな小梅」
つい言い訳をしてしまう。
「違ぇんだぞ。これはだな」
しかも上手く出来ない。最悪である。
小梅はなぜか考え込んだ様子で下を向いた。
「ええと」複雑なしかめっ面である。「なんか――ううん、何だろなあ」
「んー？」
女はふわりと石之助を開放し、小梅の方へ歩み寄る。
「どしたのかしら、小梅ちゃん」
「いえ」
小梅は顔を上げぬまま、毛糸の手袋をした手でげんこつを作り、それを口元にやって、ぶつぶつと愚痴るように言った。
「別に悪いことじゃないと思いますよ。二人は親戚同士だし、ぜんぜん悪いことじゃないですよね」眉間の深い皺。「……でも公衆の面前ですし、男女があんなふうに抱き合うのは、ちょっと、いかがなもの、かな、と思いました。それだけです……うん、それだけで

す」
「ふうん？」
女は興味深そうに薄笑いを浮かべてから、ちらりと石之助の方を見てきた。
「そっかそっか」くすりと。「ごめんね」
「……」
何を笑ってやがる。
石之助はそう言いかけたが、そちらへ話が広がるのはまずいと思い直し、言葉を飲み込んだ。
小梅は上目づかいに付け加える。
「あのね、ほんとにそれだけなんですよ」
「うん。うん」
女は頷きながら小梅の頭を撫でる。
――それにしても。
石之助は改めて女の横顔をまじまじと見た。
親戚、だと？
こんな派手派手しい親戚に心当たりは無い。ましてや妖怪の、――待てよ。
「おい、まさかあんたァ」
「そうそう、まだ名乗ってなかったわね。あなたのご先祖様の紅猫鬼よ。さあ今すぐ尊敬なさいな」
女は煙草の煙を吐き出し、偉そうに笑った。
なるほど――と言うべきか。
さっきから本能的に見当が付いていた気もする。石之助は驚くことすらできず、ただ、かくりと肩を落とした。
「……。マジか」
「ほんとはねえ、石之助ちゃんの住所はもう知ってるから、いきなり訪ねて行って驚かすつもりだったのよ。だから石楠花ちゃんや小梅ちゃんには緘口令布いてたし、正体のまま家を襲撃するサプライズとかも色々考えてたんだけど――バッタリ出くわすとはねえ。こ

こんところ奇縁が続いて大いに結構だわ」
「随分若ぇな」
「すっとぼけたこと言うのね」
「いや――」
毛の無い頭をかく。
妖怪だから若くて当然。それはそうなのだが、自分の先祖となると、これがどうにも奇妙だ。出会いが唐突なせいもあるのだろうが実感がわかず、冗談を言われているような気にさえなる。
コンビニの前に据え付けられた灰皿へ煙草を放り込み、石之助はポケットに手を突っ込む。訊きたいことは幾つかあった。
「んで？　健在だったことにゃ驚かねえが、どうして小梅らと知り合いなんだ。まさかわしらの知らんところで、何百年も見神の裏にいたんじゃ無ぇだろうな」
「どうして私がそんなもんの手伝いしなきゃいけないのよ。任氏……今はシロだっけ？　あのコの妖気を久々に感じたから、ちょっと前に一度遊びに来たの。その時に偶然知り合ってね」
「今までどこにいたんだ？」
「色んなところよ。ここ何年かは海外で女優やってるわ。ビクトリア・ウーって名前で」
聞いたことないかしら、と、再びサングラスをずらして顔を見せてくる。
確かにどこかで見た覚えがあった。
「……ああ」
しかし出演映画のタイトルまでは思い出せない。少なくともゲーリー・クーパーより有名ではないはずだ。
紅猫鬼はその反応が不満だったようで、ちっ、と小さく舌打ちした。
「イマイチ驚かないわねぇ。畜生、もうちょっと名前売らなきゃだわね」
「いや――、しかしまあ、感心するぜ」呆れたとも言えるが。「妖

怪が女優やってるなんざ、今まで聞いたことも無ぇ。大胆なもんだ」
「何でもやりたいタイプなの」
さてと、と紅猫鬼は再び歩み寄ってきて、しかし石之助の前に立つでもなく、置きっぱなしだったバッグのキャリーバーに手をかけた。
「このまま石之助ちゃんともお話していたいけど、生憎と私、今回の休みは小梅ちゃんとデートするために来たのよ。だからまた今度ね」
「なんだデートってのは」
「あーっ、そうだ」
小銭を放り込みたくなるほど大きく口を開け、小梅が間抜けな声を出す。
「あの、ビクトリアさんには言ってなかったですけど、今晩、殿山さんのお家で食事会があるんですよ」石之助の方を見る。「石之助もそれで呼ばれたんでしょ？」
「ん――まあ、な」
一応頷く。
紅猫鬼は、食事会？　と小首をかしげた。
「なんでまた……ああ、クリスマスイヴだからか」
「はい。ですからビクトリアさんも一緒にどうですか？　みんな喜びますよ。またビクトリアさんとごはん食べたいなぁって言ったら、夜々ちゃんも大輝ぼっちゃんも礼司さんも石楠花お嬢ちゃんも、そうだねって言ってましたもん」
「要するに任氏以外ね」
人差し指で前髪を払い、紅猫鬼は笑う。
「ま、そうだわね。夜になったら顔出してみようかしら」
「わあい！」
「へえ」諸手を挙げた小梅を見て、紅猫鬼は感心した顔を見せた。
「わあい、ってホントに言う子、初めて見たわ。可愛かったからもう一度やってくれる？」
「え？」

「……わしゃ先に行ってるぜ」
なんだか馬鹿馬鹿しくなってきた。石之助はポケットから出した片手をいいかげんに振り、二人に背を向けて歩き出す。
木枯らしの吹き抜ける足元――
飛んできた二つの「またあとでね」は、感心するほどぴったりと揃っていた。

二

なだらかな坂を下りきるように、穏やかに目を覚ます。
今は何時だろうか。
暗闇の中に光るＬＥＤの文字盤は、だいたい十時を指している。午前だろうか、午後だろうか。雨戸を閉め切っているから分からない。せめて何時に眠りについたのか思い出せればいいのだが、ここ最近ではそれすら判然としなくなっている。
布団から片腕を出して目をこすると、隣に寝ていた長身が、もぞりと動いた。
「……あ」耳元で声。「タカミチ起きた」
やわらかな肌の感触と体温。
孝道はその体を抱き寄せた。
「うん。クロはずっと起きてたの？」
「ずっと起きてるじゃなかったけど、さっきから起きた。いい子にしてた」
とがった舌先が孝道の頬を舐める。
くすぐったい。
わずかに顔をしかめて問う。
「今はもう夜かな」
「それはたぶん違う。まだ昼とクロは思ってる」
「ふうん」
まあ、どうでもいいか。

ベッドの上のリモコンを探り当ててテレビをつけると、深い闇の中に、十四型の画面が浮かび上がった。たしかに昼間の、それも火曜日の番組だ。

ということは――今日は母がいるのか。

今風呂場へ行ったら顔を合わせてしまう。

「ち」

舌打ちが出た。

仕方あるまい、シャワーは夜になるまで我慢しよう。

こんこんとドアがノックされる。

孝道は返事を返さず、寄り添うクロは息をひそめる。

ドアの向こう側で母は勝手に喋った。

「孝道、起きてるの？」

「……」

答えない。

テレビの明かりに照らされるクロの顔が、「自分は隠れていたほうがいいか」と無言で問うてきたが、孝道は静かに首を振った。どうせ母はこのドアを開けないのだ。

母の声は小さかった。

「昨日……」

――何も食べてないわよね。

ドア越しには最後まで聞き取りづらい。

孝道は床に落ちているビニール袋を見る。中に入っているのは、コンビニ弁当の残骸と、空になったペットボトル。また夜になったらクロが捨てに行くだろう。

クロはただ黙っていた。

さっき、声がしてたみたいだけど――と母は言う。

「……誰かと電話してたの？」

「してないよ。気のせいだろ」

また舌打ちする。窓から入ってきた妖怪を部屋で飼っているだなんて、まさか言うわけにもいくまい。

これ以上は億劫だった。
「もうさ、いいから下でテレビでも見てなよ」
「うん……」母はしかし小さく続けた。「昨日買ってきたお弁当、ここに置いておくから」
「分かった」
「……それとね」
「何」
「こないだ言ってた、山中さんのところのお店……あれね、一人くらいならいいかもしれないって。アルバイトは今、高校生の子が一人しかいないみたいだから」
「そう」
「まだ二十三だし、専門学校なんか行きたいなら、学費は何とかするけど」
「うん」
「……何か――やりたいこととか、無いの？」
「今は別に」しつこい。「いいから早く行けって」
「でも、このままずっと」
「ああもう、うるさいな！」
ドアに枕を投げつける。
「しつこいよ！　何か用があったら、こっちから呼ぶから！」
「……」
母は黙り、
「……わかった」
と言い残して、ドアの前から去って行った。
消えてゆく足音。
クロが耳打ちする。
「どうするタカミチ」
「何が」
「お弁当。きのう夜クロの買ってきたが食べたから」
「ああ――」

孝道は日に一度しか食事を取らない。無性に特定の何かが食べたくなって、クロにこっそり買いに行かせた時には、母が用意した食事が余ってしまうのだ。今回などがそうである。
「いいよ、クロが食べて」
「クロ何も食べなくても大丈夫ですな。大切はおみずとドングリだけでした」
「それじゃあとで僕が食べるよ」
「タカミチさっき怒ったか」
「うん？」
「顔が怖いになった」
クロの柔らかな手が、孝道の頬に添えられる。
「声も大きすぎた。クロ、びっくりだから嫌かもしれない」
「うん、ごめんね」
頬の手を取って握り、キスをする。
「ちょっとイラついただけだよ」
「……」
クロは不意に黙った。
小さな頭を抱き寄せて、髪に隠れた耳に問う。
「どうしたの、クロ」
「……タカミチはお母さん嫌いですか」
「ん？　――ああ」
ふう、と天井に息を吐く。
「時々だよ。分かってることを何度も言われると、時々ね、鬱陶しいんだ」
「クロは馬鹿ですから心配する。クロも同じだろうと思う」
「違うよ」
長い黒髪を指で解き、囁く声で笑ってみせる。
「クロのことだけは好きだよ」
「好きか？」
「うん。好き」

「本当の好きか」
「本当に好きだよ」
「……そうか」安心したような声。「なら平気」
そしてクロは孝道の腕を逃れ、布団の中にもぐり込んでゆく。
ごそごそと手が入ってくるのを感じながら、孝道は静かに目を閉じた。
「音がしたら母さんに気付かれるからさ」
慣れた手つきで触れてきた指は、少し冷えていた。
「今は最後まで出来ないよ」
「……ん。心配なしでいい」
布団の中から返事が聞こえる。
「クロが出してあげるのだけだから、タカミチそのまま何もするな」
「うん――」
軽く腰を浮かす。
すぐさま、クロが手際よく脱がせてくれた。大体がこうした調子なので、最近では介護されているような錯覚に陥ることもある。
起き抜けなのでさほど乗り気でもなかったが、やがて先端に舌先が触れ、細かく動き出すと、それでようやく血が通ってきた。
薄目を開けて天井を見れば、テレビの明かりが安っぽいイルミネーションのように反射していた。
「夜になったら――っと」吸いつかれた。「また……ちょっと散歩しようか。窓から抜け出してさ」
「んう」
クロの嬉しげな鼻息が聞こえる。
「んううう」
「無理に返事しなくていいよ」
孝道は布団の中でクロの頭を撫でる。
「楽しみだな。クロのポケットの中、あったかいからさ」
夜までには時間があるが、インターネットでもしていれば、半日くらいはすぐに過ぎてしまうだろう。

再び目を閉じて意識を集中すると、クロが普段よりも丁寧に接してくるのが伝わってきた。さっき少し不機嫌な様子を見せたから、機嫌を取ろうとしているのだろうか。

そういえばクロは以前、「怖い奴にいじめられていた」と言っていた。仲間が一人もいないとも――あれが本当なら、もしかして、孝道とどこかが同じなのかもしれない。

やっとできた味方に嫌われたくないのだ。

「好きだよ、クロ」

頭を撫でながら孝道は呟く。

「好きだよ」

今はもう、クロだけがいてくれれば良い。

外は風が強いのだろうか。

閉められた雨戸がかたかたと震えていた。

三

日本のファミリーレストランに入るのは初めてらしい。火のついた煙草を片手に、紅猫鬼はしかめっ面でメニューをながめている。

「料理の名前が長いわね。ホームテーブル特製生き生きホウレン草の大盛りスパイシー炒め……ビタミンたっぷり有機野菜のイタリア風まろやかドレッシングサラダ……こういうの、ちゃんとフルで言わないとマナー違反になる？」

「メニュー指さすだけでだいじょぶですよ。これとこれ、みたいな」

「なるなる」

紅猫鬼は煙草をくわえてページをめくる。

「じゃあ、これにしようかな。どっさりキノコと新鮮卵の――ええと、玄米入りヘルシー雑炊。小梅ちゃんは何食べるの？」

「私はハンバーグランチにします」

「おっけい。じゃあ店員さん呼ぼうか」

「あ、そのボタン押すんですよ」

「ボタン？　これ？」
呼び出しボタンを手のひらに乗せ、紅猫鬼は目を丸くする。
「これ押せば来てくれるんだ。はあー、日本も変わったわねぇ。こんな社会で暮らしてたらコミュニケーション下手になっちゃうわ」
いかにも外国人らしい心配をしつつ、紅猫鬼はボタンを押す。
向こうの方で呼び出し音と返事が聞こえ、ものの数秒も経たぬうちに女性店員がやってきた。
「はい、お待たせしました」
「早いわね」
「はい？」
「何でもない何でもない。ええとね、これと――これ。あとホットコーヒーちょうだい。小梅ちゃんは飲み物いる？」
「いえ、私はセットにドリンクバーがついてますので」
「ドリル……何？」
「えっと、あとで説明します」
「あの――ご注文は以上でよろしいですか？」
「ん？　ああうん」
紅猫鬼はメニューを閉じて頷く。
店員は、では――と注文を繰り返し、間違いのないことを確認すると、メニューを回収して引っこんで行った。
紅猫鬼には一連の流れも新鮮だったようだ。
「たった三つの注文をわざわざ繰り返して確認するなんて……団体で来たら確認するだけでもひと苦労ね」
「そうですねえ」
「で、ドリンクバーって何？」
「一定料金でお茶やジュースが自由に選べて、飲み放題なんです。ほら、あっちの方にあるスタンドから持ってくるんですよ」
「ふーん」
小梅の指した先をながめ、紅猫鬼は煙草を弄ぶ。
その顔が、急にこちらへ向きなおった。

「そんで？　さっきから何考えてんのかしら？」
「え」
「あたしゃ任氏と違って人間の中で何千年も生きてきたのよ。小梅ちゃんがさっきから何か言いたそうにしてるってことくらい、ニンニク食べた後のすかしっ屁みたいにバレバレなんだから」
「あ……う、はい」なぜか顔が熱くなる。「すみません」
「こっちこそゴメン」
「はい？」
「今説明されたばかりなのに気が回らなかったわね」紅猫鬼は恥ずかしげに笑う。「このまま話し始めちゃったら、小梅ちゃんの飲み物がずっと無いままになっちゃう」
「あ――」
「何か持ってきてからでいいわよ」
「す、すみません」
小梅は頭を下げて立ち上がり、慌ててドリンクバーに駆けた。
それからコーラを注いだグラスとストローを手に席へ戻ると、紅猫鬼は、一本目の煙草を灰皿に押しつけているところだった。
「なんか、家族連れが多いわね。平日の昼間なのにさ」
「きっとクリスマスイヴだからですよ」
よいしょと正面に座り直す。
紅猫鬼は、なるほどねえ――と無表情で二つ頷いてから、改めて身を乗り出してくる。
「で？　なぁに話って」
「あ……」思わず視線を落とす。「ええと」
「もしかして石之助ちゃんとのことかしら」
「違いますよおっ！」
「大きな声出さないの」
「うう」
ストローを袋から出し、グラスに突っ込んでかき回す。
「……。そんなに分かりやすかったですか、私」

「さっき？　けっこう分かりやすかったわよ」
「今さらなのに――恥ずかしいなぁ、もう」
「後悔しないようにね」
「え――」
小梅は顔を上げる。
紅猫鬼は笑っていた。
「後悔だけはしちゃ駄目よ。私たちの一生は長いけど、想いはずっと消えないから……あら、ありがと」
店員の置いたコーヒーカップを引き寄せ、砂糖の袋を開ける。
「私もね――」
さらさらと流れ落ちる白い結晶が、熱いコーヒーに溶けてゆく。紅猫鬼は苦笑いして首を振った。
「って、何でもないわ。ごみんごみん、話を戻しましょっか」
「……はあ」
小梅はコーラをひと吸いして、ストローから唇を離す。まだ炭酸がきつい。少し時間が経って薄まってからの方が小梅の舌には合っている。
ともかく。
「その、ちょっと言いづらいことなんですけど」
「頼みごと？」
「……。はい」
「難しいお願いかしら」
「けっこう難しいです。だから、ほんとはお願いしようかどうか迷ってたんですけど」
溶け始めたグラスの氷が音を立てる。
「その……ビクトリアさんは御存知ないと思いますが、最近、この近くで行方不明になる人が多いんです。まだ遺体が見つかったとかいうことはないので、テレビではあまり大きく取り上げられてないんですけど、もう何人もいなくなってるらしくて」
「――」

ライターを持った手が、ぴたりと止まる。
「……行方、不明」俯いた瞬き。「……ね」
「それで入神家の偉い人たちが、夜々ちゃんと私に帰ってこいって」
「ふむふむ？」
二本めの煙草にすばやく火をつけ、煙を吐き出しながら紅猫鬼は顔を上げる。
「もうちょっと詳しく説明してもらっていいかしら」
「あ、はい」
あわてて頭の中を整理する。どうも順を追って話すのは苦手だ。
「あのですね、最初から夜々ちゃんと私――っていうか、夜々ちゃんですね。夜々ちゃんがここに引っ越してくることに、上の人たちは良い顔してなかったんです」
「凶暴な誰かさんがいるから？」
「いえ、無理やりにでも大輝坊ちゃんを見神の本家筋のところに連れて行って、手っとり早く夜々ちゃんと夫婦にしたかったんだと思います。夜々ちゃん自身はそんなふうに相手の意思を無視するのは嫌だって言ってたし、私も反対でした。それに私としては、夜々ちゃんが外の世界に出て、学校とかに通う良い機会だと思いまして」
「なるほど」
「だからシロさんがいたことは、どっちかというと……あくまでこっちに越してくる名目としてはですけど、良い方に働いてくれたんです。皮肉にもっていうかなんていうか、口実の一つになったので」
「無理に引き離したら任氏の襲撃にあって、御家全滅は免れないって理屈が成り立つわけだ」
「でも、問題がひとつあって」
「任氏は人を殺さなくなっていた」
「……はい」
小梅はこくりと頷いた。
「夜々ちゃんとシロさんの間に緊張感があったうちはまだ誤魔化せてたんです。けど、いつまでもそんな感じじゃなかったし」コーラ

の泡を見つめる。「シロさんが丸くなったと分かってくるにつれて、本家の人たちはまた段々強気なことを言ってくるようになりました。こっそり大輝坊ちゃんを連れてこいとか、あとは居場所を分からなくしちゃえばいいとか……。確かに今のシロさんなら、そうなっても、夜々ちゃんや見神の人を殺したりはしないと思います。でも、誰も死なないとしても、そんなのダメですよね？　シロさんは泣いちゃうし、石楠花お嬢ちゃんも泣いちゃうし、夜々ちゃんも大輝坊ちゃんも納得いかないし、誰も幸せにならないですよね？」

「まあ、そりゃあ、ね。私も反対だわ」

灰皿に煙草を置き、紅猫鬼はコーヒーカップに口をつける。猫だけに猫舌なのだろうか、随分ちびちびと飲むものだ。そういえば以前寿司を食べていた時も、念入りに茶を冷ましていたような記憶がある。

小梅は上目づかいに頷いた。

「絶対そうですよね。だからずっと断ってたんです」

「けれど、最近の行方不明云々って話が、向こうの新しい口実として加えられた」

「です」頷く。「やっぱり外に居させるのは危険だとか、そんな感じで。ちょうどこの辺りは眠り石があった跡だから、危険な妖怪絡みに違いないって……本気でそこまで思ってるかどうかは分かんないですけど、最近毎日そんな電話がかかってくるんですよ。夜々ちゃんには電話取らせないようにしてますけど、あの子も何となく気づいてると思います」

「それで私に話をつけてほしいってことか」

紅猫鬼はカップを置いて微笑んだ。

「いーわよ。その本家とやらに行って脅かしてやりましょ。まあ、離れの二、三軒でも吹っ飛ばせばビビってもう何も」

「わあわあわあ、違います！」小梅は焦って腰を浮かす。「脅迫はやめてください！」

「違うの？」

「はい――」
小梅は椅子に腰を落とす。嫌な汗が全身から吹き出していた。
「じゃなくて私……その、いっそ行方不明事件を解決できちゃったらいいなって、思ったんです」
「あ、そっか」
「分かります？」
「うん。つまりアレでしょ？　敢えて事件に首を突っ込んでみて、もし事件を起こしているのが危険な妖怪だったら、かえってシメたもの。そいつをうまく片付けることができれば、保護役としての危機管理能力を本家とやらに見せ付けることができる――かもしれない、ってわけだ。そうなりゃ今後は、少なくとも、危険がどうこうって理屈でうるさく言われる面倒が無くなると」
紅猫鬼は煙草を持ち直し、早口に代弁してくれる。
「まあ、上の人とやらが本気で心配してるかはともかく、実際この辺りは眠り石が壊れたばかりだから、人がいなくなってる裏に妖怪がいる可能性はそれなりに高いと言えるでしょうね。あくまで他の地域と比較しての話だけど」
「うーんと……シメたものとかは思ってないですけど、だいたいそんな感じです。でも――」
「小梅ちゃんじゃあ力不足」紅猫鬼は煙を吐く。「仮に都合良く妖怪の仕業だったとして、そしてその妖怪を特定できたとしても、今の小梅ちゃんだと接触した途端に殺されちゃうかもしれない。かといって任氏には理由が理由なだけに相談しづらいし、そもそも、周りのメンツじゃ情報収集力もタカが知れてるから、事件のことを調べようにも調べられやしない。石之助ちゃんだって現役過ぎてネットワークが死んじゃってるでしょうしね。もちろん本家に協力をあおぐなんて本末転倒、以ての外」
とん、と灰を落とす。
「でも、数多の高度な術式を使いこなす天才であり、任氏と並ぶ妖力を持ち、おまけに美しくて優しくて美しくて美しいビクトリアお

姉さまが力になってくれるなら、ひょっとして――なんて思っちゃったわけだ」

「……。はい」小さく頷く。「厚かましいお願いなので、言おうかどうしようか迷ってたんですけど。ビクトリアさんは時間もないし、せっかく来てもらったのにこんなことをお願いするのも」

「良いわよ別に」

紅猫鬼は笑いながら煙草を消した。

小梅は顔を上げる。

「ほんとですか？」

「可愛い小梅ちゃんの頼みだもの。第一、今回は小梅ちゃんのために来たんだからさ」

「あ――ありがとうございます！」

こうもすんなりと承諾してくれるとは思わなかったので、まともな礼の言葉が出てこなかった。小梅はただ何度も頭を下げる。

「ありがとうございます。あの、ええと、ありがとうございます！」

「ちょっとちょっと、そんなに感謝されても困っちゃうだわよ。調べてみて妖怪が関係してなかったら、結局何の得にもならないんだからね」

「いえ、それはそれでいいんです」小梅は首を振る。「夜々ちゃんたちの近くで変な事件が起きてること自体、親として気持ちが悪かったので。解決して悪いなんてことないんです」

「そっか」

煙草を消してコーヒーを一口すすり、紅猫鬼はぽつりと言う。

「それじゃまあ、便利な奴のところに行ってみようかしらね。この時間じゃ起きてないと思うから、もう少ししたら」

「便利な奴？」

「ああ、使えることは使えるけど、どうしようもない奴よ。小梅ちゃんは会わない方がいいわ」

そう言って紅猫鬼は苦笑いした。

映画を見ている時は気付かなかったけれど、こうして実物を見る

と、紅猫鬼の笑顔は石楠花によく似ている。いや、順番が逆か。石楠花が似ているのだ。先祖返りは顔立ちまで先祖のものに立ち返るのだろうか。

近くの席に座っていた三人組の客が立ち上がり、ばらばらとレジの方へと歩いてゆく。

紅猫鬼は「そうだ」とカップを置いた。

「ちょっと思ったんだけど、もし妖怪がこの辺りで悪さをしているなら、小梅ちゃんたちの誰かが気づいてもおかしくなさそうなもんよね。ある程度位の高い妖怪なら、妖気を消してる可能性もあるけど……何か、妙な気配を感じたこと無かった？　ここ最近で」

「ここ最近？」

どきりとする。

寒気と共に脳裏に蘇ったのは、あの夜に見たシロの姿だった。

夜空を飛ぶ白い影と、降り注いできた暗い妖気。

考えないようにしていたのか、ずっと心の隅に引っかかっていたのか、それは自分でも分からない。ただ小梅の目は、あの光景を確かに覚えていた。あれは？

頭の中に――靄がかかる。

いけない。

靄を振り払うように、小梅は首を横に振った。

「特に」うつむいたのは無意識でのことだった。「何も無かったです」

「ほんとに？」

「はい」

今度は縦に。

そして胸の内で小さく呟く。

……そうです。

私は本当に疑ってないんです。あれは怪しいことなんかじゃなかったんです。行方不明事件なんかとは、絶対に関係があるわけないですから。

そうですよね。ばかばかしいですよ。
だから――だから、それを確かめるためにも、私は――
「何もありませんでした。」
自身に念を押すように、もう一度頷く。
ありがとうございました、とレジの方から声が聞こえる。
小梅はもう何も言えないでいた。
紅猫鬼はしばらく小梅の顔を見つめていたが、やがてまた、柔らかに微笑んだ。
「うん、分かったわ」
三本目の煙草に火をつける。
吐き出された紫煙はやけに濃厚だった。

四

落ち着いて考えろよ、まだ午前中じゃないか。日が暮れるまでには時間があるさ。
そう自分に言い聞かせながらも、大輝はさすがに焦り始めていた。
いったい自分は何を買えばいいのか。
石楠花のペンダントトップに、父のシガレットケース。あれらは特に迷うこともなく決まったので、先週のうちに購入し、今はもう自室の引き出しに忍ばせてある。あとは本人に手渡すだけだ。
だが、シロに贈るプレゼントだけが、いっこうに決まらない。
「何を渡しても――」
デパート屋上のベンチでひと休憩しながら、大輝はため息をついた。
「喜んではくれるんだろうけどなあ」
よっこらしょと脚を組み、空を見上げる。
なにせリボン一本を大事にしてくれるような人だ。ハンカチだろうがメモ帳だろうが、ありがとうと受け取ってくれるのは間違いない。だが、
「……そういうわけにもいかないしなあ」

今度は空にため息を吐き出す。
掃除、洗濯、買い物、夕飯作り。それから弁当の支度に至るまで、ここ最近では、およそ全ての家事が、シロ一人に任せっきりになっている。
それに対してシロが得ているものといえば、せいぜい雨をしのぐ屋根と、あとは食事くらいのものである。食事だってシロ自身がこしらえているのだから話にならない。悪い言い方をすれば、無給で住み込み家政婦をしてもらっているような状態だ。
だから何か――そう、こういう時くらい、何か、感謝の気持ちを伝えられるような物を贈りたいのだが。
唸りながら背を丸めた大輝の正面に、ぶわりと大きな風が吹き付けてきた。
思わず体ごと横を向く。
と、近くのビル群が見えた。
「……あ」
大手ビール会社の巨大な看板を見て、大輝は口を開ける。
「酒かあ」

五

小梅と別れてから一時間と少し。電車に揺られて石川町の中華街へと辿り着いた紅猫鬼は、その外れにある雑居ビルの階段を、眉間に皺を寄せながら上っていた。もちろん、こんな埃臭くて暗い階段を好きで選んだわけではない。エレベーターが故障していたのだ。
相も変わらず酷いビルである。転がったゴキブリの死体や壁のヒビは百歩譲って許すとしても、手抜き工事であちこちが傾いているのはいただけない。こうして階段を上っているだけで平衡感覚を失いそうになるのだから、ここで暮らすには相当な無神経さが必要になるだろう。
空き缶やゴミ袋を蹴飛ばしながら五階にたどり着き、吸う気の失

せた煙草を足元に捨てて、つま先で踏みつける。
林偉探偵社――そう書かれた汚いプレートが、数年前に来た時と同じく、目の前のドアに貼りついていた。
すう、と息を吸い込み、そのドアに怒鳴る。
「リン！　リン・ウェイ！　どうせ暇なんでしょ？　久しぶりに命令しに来たわよ！」
おまけとばかりにドアを蹴飛ばしたが、これはやめておけばよかった。そういえば今日の靴は気に入りの一足である。
さて、それにしても返事が返ってこない。
紅猫鬼は勝手にドアを開け、事務所の中を覗き込む。
以前にも増して雑然としたデスクや、接客意識の低さが窺われる汚いソファは見えるものの、持ち主の姿は見えない。
ということは、食事中だろうか。
紅猫鬼はつかつかと階段を下り、今度は四階のドアに、正面から張り手を食らわせた。
「ウェイ！」
ドアが開くと同時に鍵が壊れ、金属の部品が景気良く飛び散る。
タイル張りの床に転がるネジ。
家具も何も無い部屋の中央では、眼鏡をかけた半裸の男が、どうやら人間であったらしい物の上に覆いかぶさって、その臓腑に食らいついているところだった。
閉め切られていた空間に、血の臭いが充満している。
男はゆっくりとこちらを見た。
「……鍵の意味がありゃしない」赤くぬめった口で溜息をつく。「その乱暴さはどうにかならないのか、紅猫鬼」
「その肉は男？　女？」
「男だったな」
ウェイは立ち上がり、汚れていない小指で眼鏡を直す。
「いつも通り不法滞在者だ。昨日攫ってきたんだが、まあ、騒ぎにもならんさ」

漢族の遺伝子を受けた薄い顔と鋭い眼は、涼しいを通り越して挑発的にすら見える。
　この生意気な面持ちがカンに障るのだ。紅猫鬼は顔をしかめ、鼻をつまんで見せた。
「血生臭いわね」
「そういえばお前は人を食わないんだったか。……取りあえずドアを閉めろ。万一誰かに見られたら面倒だ」
「あたしに指図なんて、たかが半妖が偉くなったもんだわ」
後ろ手に扉を閉め、紅猫鬼は壁に寄りかかる。
　ウェイは拾い上げたタオルで手を拭きはじめた。正面から見ると二十歳に見える顔が、横から見ると三十路に見える。なんとも不思議な造形だ。
「いつこの国へ来た」
「さっきよ」
「面倒ごとなら他を当たってくれ。お前が来るとろくなことにならん」
「そう嫌な顔しないの」
ポケットから財布を取り出し、ぽいと投げる。
　拭い終えた手で、ウェイはそれを受け取った。
　紅猫鬼は笑う。
「そこからテキトーに抜いて良いわよ」
「一方的だな」
「頼りにしてるのよ」
煙草を取り出し、火をつける。
　実際、ウェイの捜査力は優秀だ。どんな力を使っているのかは知れないが、結果を出せる以上、確かに優秀であることは間違いない。
　ウェイはタオルで唇を拭い、髪を撫で上げた。
「何の依頼だ」
「ある地域で起きてる連続行方不明事件について情報が欲しいわ」
「あれか」

漂う煙を邪魔そうにしながら、ウェイは浅く頷いた。
「眠り石のあたりだろう。あれなら、居なくなった連中に共通点がある」
「相変わらず話が早いわね」
やはり興味深い能力だ。なんとかしてシステムを聞き出せば術式で疑似再現も出来ようが、それはまた、別の機会にするとしよう――
紅猫鬼は灰を落とす。
「で、共通点って？」
「呆れるほど簡単なことだ。消えたのはどいつもこいつも、同じ公立中学の出身者だな。しかもほとんどが同年度の卒業生ときている」
「簡単すぎるわね」
「そこの校長は文明新聞の社長と親戚関係だし、文明は民営党とべったりだからな。同業者同士の慣れ合いや上下関係の分かりやすいこの国じゃ、報道にも思慮がいるらしい。同じ学校の教師が校内で消えた時も、事件に発展しなかったくらいだ」
「なんていう学校？」
「日台中学だったかな」
「へえ――？」
石楠花たちが通っている学校か。考えてみれば、あの辺りならば学区も被っていて当然のことだろう。
紅猫鬼は指先で煙草を回し、ふむと唸る。
「なーんか見えてきたわね」
「もっとも、消えたうちの一人は年も学校も違うがな。……こいつは関係無いのかね。分からんな」
「同期卒業生の電話番号リストとか、調べられる？」
「調べる必要はないさ」
ウェイは上半身裸のままポケットに手を突っ込み、こちらへ歩いてくる。
「だが生憎と、紙とペンは上にしか無いんだ。少し待っていろ」
そしてドアを開けて出て行った。

残された紅猫鬼は死体に目を落とし、ふんと鼻を鳴らす。
「よくこんな生臭いもの食べられるわね」
ウェイといい――任氏といい。
そして煙草をひと吸いしたところで、はっとした。
「あっ、財布！」
あいつめ、丸ごと持って行きやがった。
紅猫鬼はあわてて食事部屋を飛び出し、リン・ウェイを追いかけた。

Ｅｘｔｒａ　ｃｈａｐｔｅｒ【生――ＬＩＦＥ――】

降りだした雨を肩に受けながら、その大男はシィホンを見下ろしていた。
「この街のどこかに、一人、変わった力を持った奴がいるらしい」
感情のうかがい知れぬ狼のような顔。その口が開き、低い声でシィホンを問いただす。
「そいつについて何か知ってるか」
「変わった……力」
「生来的な特異能力だ」
男の眼は鈍く光っている。
シィホンは座り込んだまま唾を飲み込む。男の迫力がそうさせていた。
「どうして……」
そんなことを訊くの？
男はシィホンの疑問を察してか、それともただ急かさんとしてか、より低い声で言葉を投げてきた。
「ケリをつけなきゃならん問題がある。知っているのか、知らんのか。さっさと答えろ」
「し、知ってるわ」
シィホンは痙攣的に答えていた。
「知ってる。ちょ――超能力者、一人、知ってるわ」
あれはいつだったか。たちの悪いジャンキー女たちに絡まれているところを助けてくれた、お人よしの女。その以前から噂は聞いていたが、思っていたよりもずっと若い女だった。

シィホンの返答を受け、男の目がわずかに、ほんのわずかにだが、感情の動きを見せた。
「そいつの名は分かるか」
しかし感情の正体は知れない。
素性も知れない男に恩人の名を教えることは躊躇われたが、この男もまた恩人であることを思い出し、シィホンはゆっくりと告げた。
「フゥリィ」
男の瞳を覗き込む。
野獣のように深く、暗い瞳。
だが――
「フゥリィ・ゴールドよ」
「そうか」
男は巨躯をひるがえす。
灰色の雨。
シィホンは反射的に呼び止めていた。
「待って」
「何だ」
男は立ち止るだけで振り向かない。
シィホンは大きな背中に言った。
「ありがとう、い――生かしてくれて」
「……」男は顔だけを半ばこちらへ向けた。「気にするな」
「あの、わ、私」
あれ？　何を喋り始めたんだ、私は。
「私、クォーターなんだけど、私のおばあちゃん、が……リーベンレンで」
未だ震え続ける唇が、勝手に言葉を紡ぎだす。
「おばあちゃん、小さい頃、私に……生きてたら色んな良いことがあるって、でも、死んだら全部無くなっちゃうって、私にいつも言ってて」
だからどうした。こんな話に何の意味がある？

「その――だから――本当に」
馬鹿か私は。
「……本当に……ありがとう」
ほら、結局また同じ言葉じゃないか。
大男はシィホンの無意味な話を黙って聞いていた。
そして何も言わず、また歩き出す。向こうを向く瞬間、その顔が微かに笑っていたように見えたのは、きっとシィホンの見間違いだろう。
遠ざかってゆく背中を見つめながら、シィホンは思う。
フゥリィ・ゴールド。
お人よしの女だった。シィホンも疑り深い方ではないが、それとは比べ物にならないほど人の良い雰囲気を、彼女は持っていた。この街では長生きをしないタイプ――「またね」と微笑む顔を見た時、直感的にそう思ってしまったのを覚えている。
まだ生きていればいいのだが。
よろよろと立ち上がり、泥水に汚れた自らの姿を見下ろす。
そして顔を上げると、男の姿は雨の中に消えていた。

第十七章【手――て――】

今晩はキリストが生まれた有難い夜だという話だが、悲しいかな、そんな聖夜にも生理現象はあるものだ。

薄い小便が便器の中をどぼどぼと鳴らし、冷えきったトイレに湯気を漂わせる。耳を澄ますと、半ばまで開いた小窓の外から、どこぞの家から漏れた楽しげな笑い声が、わずかな風に乗って聞こえてくた。

その声に目を細めながら、大輝は体を揺らして小便を切り、しっかりとファスナーを上げて水を流す。笑い声はパワフルな水音にかき消された。

洗面所で手を洗い、静かな廊下を歩いて居間へ戻ると、めいめいに啄ばんだクリスマス料理の残骸を囲んで、酔っぱらいどもが言い争っているところであった。隅の方で頑張っているテレビの声など何処吹く風である。

大輝が入って来たことにも気づかぬ様子で、真っ赤な顔をしたシロがテーブルを叩く。

「まっこと捻くれた連中の集まりじゃ！」

空になったビールの缶が危うげに弾む。

「人が常日頃美味いと思うて食うておるものを……、誰もかれも、一度も口へ入れぬうちに好き放題言いおって！」

「だからさあ、ドッグフードなんて美味しいわけないじゃんか」

隣の石楠花が呆れ顔でシャンメリーのグラスを置く。

どうやら食べ物のことで言い争っているらしい。大輝がトイレに立つ前は紅猫鬼の下手なモノマネで盛り上がっていたはずだが、ど

ういう経緯でこんな話になったのだろうか。
小梅らと共に向こうのソファに座っている紅猫鬼が、口の横に手を添えて、わざとらしく挑発する。
「任氏ったらまだまだ動物レベルよねぇ。私はキャットフードなんて食べないしぃ」
「当たり前じゃ馬鹿たれ！　猫の餌など食えるか！」
わざわざ挑発する紅猫鬼も紅猫鬼だが、シロの反論も理に適っていない。しかも眉間にしわを寄せながら、和室の奥から持ってきたらしい成犬用ドライフードの袋をあさり始めた。
「これなど腹に軽うて食い易いのじゃぞ。四の五の言わずに食うてみよ。ほれ」
「な、なんでわしなんだ」
鼻先にドライフード、通称カリカリを突き付けられ、向かいの石之助は椅子ごと仰け反った。
ソファの隅に座った父が、ピザで汚れた手をナプキンで拭きつつ、突っ立ったままの大輝に無責任な言葉をかけてくる。
「大輝、ちょっと食べてみなさい」
「何を真顔で……」
呆れていると、シロがシャンパンを片手にふわふわと飛んできた。
「大輝はまだ一滴も飲んでおらぬな」
「え？　はい」
もう話が変わったのか。
シロは鳶が旋回するようにして大輝の背後に回り、そのまま覆いかぶさってきた。
頭の上に、ずしりと胸が乗る。
「口移しで飲ませてやろうか」
「それは――」
酔って無遠慮さが増しているせいか、いつも以上に接触面積が広い。正直言って悪くない心地だが、全身から発散される酒臭さはいただけなかった。

「それはまた、別の機会にお願いします」
「つれん子じゃのう」
かぷり。
悪戯に耳を噛まれ、大輝は情けない悲鳴を上げる。
一方、脚を組んでソファに座る夜々は、のんびりとした様子でグラスを揺らしていた。
「大輝くん」普段より幾許か緩んだ顔を向けてくる。「その酔っぱらいには気をつけた方がいいよ。油断をしていたら押し倒されかねない」
「無理に押し倒さずとも、今宵は大輝がしろの寝所へ来てくれるわい。のう大輝？」
「え」
「くりすますには夜這いをするのが礼儀と聞いておる。今の世には有難い日があるものよ」
「えーと」息をかけられた頬が引きつる。「なんか思い違いしてませんか」
また妙な雑誌に妙な形で影響されたのだろうか。
長い脚を見せつけるように組み直し、紅猫鬼があっけらかんとした声で訊いてくる。
「ねえねえ、ぶっちゃけた話、大輝くんは任氏のこと好きなの？」
「！」
不意を突いた剛速球である。
返答に困るこちらの表情は瞬時に解析されたらしく、紅猫鬼は「ふうん」と頷いた。
「なるなる。そんな感じか」
恐らく、はじき出された解析結果はそう的外れなものでもあるまい。
長く人間社会の中で培われた功は侮れないものだ。
紅猫鬼は煙草に火をつけた。
「ずいぶんノンビリしてるのね」またこちらを見る。「さっさと手ぇ出しちゃえばいいのに」

「はい？」
「周りのこと気にするのもいいけど、据え膳は食えるうちに食っといた方がいいわよ。しゃくちゃんや夜々ちゃんはともかく、任氏なんて妖怪なんだし、いつ居なくなっちゃうか分かんないんだから」
「そんな、居なくなるなんて」
大輝は笑う。
しかしシロは何も言わず、ただ後ろから抱きしめる力だけが、わずかに強くなった。
……？　何だ。
顔を動かそうにも動かせない。
夜々と石之助の呆れ顔、父の無表情、グラスを握りしめてぼんやりしている小梅、それから――怒ったような顔で唇を尖らせる石楠花の顔。
なぜだろうか。大輝は酒など飲んでいないのに、ほんの少し足元がぐらついた気がした。
紅猫鬼は隣の小梅に寄りかかりながら、うっすらと笑っていた。
「思い出はねえ、作っておくに越したこと無いもんよ。いざ会えなくなった時、ちっちゃいことも大っきなことも、みーんな宝物になるから。これは私の経験からくるアドバイスね」
頬を膨らまし、ぽん、と煙の塊を吐く。
小梅がその煙と紅猫鬼の顔を見比べて、酒に緩んだ口を開く。
「経験って旦那さんとのことですか？」
「まぁねん」小梅の首に腕を回し、頬に頬をすりつける。「あー、小梅ちゃんのほっぺ気持ちいいわ。癖になっちゃう」
「ど、どんな思い出があるんですか？」
「む」
紅猫鬼はすっと頬を離し、小梅の目を見つめる。
「……聞きたい？」
「聞いて良いんですか？」
「うーん」

小梅の髪をいじりながら、紅猫鬼は考え込む。
シロは大輝の背へ寄りかかったまま、「勿体ぶるほど大した話でもあるまい」と舌打ちした。

十七章【手――て――】

一

なに、任氏の言う通り、大した話でも無いのだ。人に聞かせたら驚かれるようなドラマがあったわけでもないし、泣かせるような別れがあったわけでもない。そもそも出会いからしてドラマティック

なものではなかった。

あれは正確には、今から何百と何十年前だったか。紅猫鬼がこの国へ渡ってきてから、そう経たぬ頃だったと憶えている。

たしか秋の夜であった。

途方もない目的を持って日本まで来てみたはいいが、元来の高慢な気質が災いして土地の妖怪どもと対立し、それが瞬く間にこじれたもので、しばらく人間に化けて身を隠そうか、などと思っていた矢先のこと――紅猫鬼は、人里近くの小川で夜な夜な水を飲んでいるところを、川底に潜んでいた追手の化物に襲いかかられた。

その化物は他愛もない魚の変化であったから、紅猫鬼の一撃で呆気なく河原の汚れと散ったのだが、毛皮についた返り血を払いつつ振り返ってみると、すぐそばの木の陰に、ぼうっと突っ立ってこちらを見ている、牛のような図体の男があった。

それが茂平であった。

見られたか――。目を合わせながら紅猫鬼は思案した。

さて、どうしたものか。

今の紅猫鬼は人に化けていない。五体の形や立ち姿こそ人と大差ないものの、肌の代わりに紅い毛皮、首から上には猫の顔があって、おまけに尻尾まで生えている。化け猫そのままだ。

まあ正体を見られたからといって困ることも無いとは思うが、こいつを生かしておいて得をすることも無いだろう。

念のために殺しておくか。

紅猫鬼はゆらりと一歩近づいた。

そして二歩、三歩。足の裏の肉球に踏みしめられ、河原の石がじゃりじゃりと鳴る。

はて、どうしてこの男は悲鳴一つ上げないのだろう。それに背中を見せて逃げようともしない。

怯えているようにも見えないが。

紅猫鬼は妙に思って、まだ少し離れたところで立ち止まり、「おい」と声を掛けてみた。

すると男は、のらりと背を向け、人里の方へと歩き出した。何も言わずにである。走って逃げるでもなく、ただ、のそのそと向こうへ歩いてゆく。

予想外の行動に紅猫鬼は呆気に取られたが、すぐ我に返って追いかけた。

「ちょっと、あんた」

背中に声をかけても、男は立ち止まろうとしない。

自分は無視されているのか。

肩の肉でも掴んで止めるか、さもなくば後ろから殺してしまってもよかったのだが、どういうわけか、あの時の紅猫鬼はそれをしなかった。今にして思えば、もう茂平に毒を抜かれていたのかもしれない。

大股で三歩ほどの距離を保って茂平の背中を追いかけながら、待てったらとか、耳が聞こえないのかなどと言いながら、とうとう村はずれの掘っ立て小屋にまでついて行ってしまった。

茂平は何も言わぬまま、真っ暗な小屋の中へ入って行った。

紅猫鬼は自分が何をしているのか分からなくなっていたが、もはや意地であった。茂平を追いかけて家の中へ入り、腹の中から呪い刻みの翡翠を吐き出して、足元でそれを光らせた。

ほのかな光が小屋の中を照らしても、茂平は驚かなかった。驚かないどころか筵に転がって眠ろうとしたのだから、紅猫鬼が驚いたほどだ。

さすがに少し大きな声が出た。

「おいッ」

こちらにも長く生きてきた妖怪としての気位がある。人間に、それもこんな鈍そうな男に馬鹿にされているのだとしたら、我慢ならなかった。

茂平は億劫そうに体を起こし、やっとこちらを向いた。翡翠に照らされたその顔は、遠目に見たよりも幾分か若かったが、どこからどう見ても牛であった。しかも駄目な類の牛だ。草と間違えて自分

の糞を食ってしまう類の牛である。
　仁王立ちの紅猫鬼が顔の毛皮をきしませ、髯をぴくぴくとさせながら見下ろしていると、茂平は聞き取りづらい声で、ぼそりと言った。
「なんだ」
「な――」
何だ？
ええと、何だろう。そういえば何だったか。
　戸惑った紅猫鬼の口から出てきたのは、間抜けな質問だった。
「お、お前、どうしてこんな夜遅くに、あんなところへ居たんだい」
「……」茂平はふて腐れたような顔で目をそらした。「小便だ」
「そんなもん、家の裏でひりゃいいだろう」
ああ、どうでもいい。自分はなんてどうでもいい話をしているんだ。
そう思いつつ紅猫鬼は座り込む。
　茂平は首を振った。
「おれは川の近くで小便ひるのが、すきだ」
「……」
ああ、そう。
　河原で小便をするのが好き。まさかこのときは自分の旦那になるなどとは思いもしなかったが、ともかくそれが、紅猫鬼が最初に知った夫の横顔だった。ひどい話である。
　話が続かなくなったので、紅猫鬼はきょろきょろと小屋の中を見回した。
ろくに家具らしき物も無く、土間の隅にぼろぼろの筵が敷かれているだけの、いかにも貧乏くさい、小さな小屋である。壁に立て掛けられている鍬や鋤がこの男の仕事道具か。
　寂しい住家だ。
　紅猫鬼は黒い鼻をくんとさせ、なんとなく舌打ちをしてから訊いてみた。
「あんた、一人で暮らしてんのかい」

「ひとりだ」
「親は」
「最初っからいねえ」
「ふうん」
よく分からないが一人らしい。まあ、いかにも一人といった雰囲気の男ではある。
紅猫鬼が小屋の隅に転がった鍋を眺めていると、茂平はまたごろりと寝転がり、馬鹿でかい背中をこちらへ向けて、やはりふて腐れたような口調で言った。
「用がねぇなら帰れ」
「な――何だい、失礼な奴だね」
たしかに元々用があるわけでもなし、とっととこいつを殺して帰ってもいいのだが、帰れと言われると気にさわる。
茂平は続けてこう言った。
「おれは」大きな体を縮める。「おれは女が、だめだからな」
「はああ？」
紅猫鬼は耳を疑った。
女は駄目――女――おんな、だと？
いや、そりゃあ確かに自分は女怪だが、その前に何かあるだろう。その全身の毛皮は何だとか、その爪は何だとか、どうして尻尾が生えてるんだとか、どうして人間の顔をしてないんだとか。
こいつにとって問題なのは、化け猫だということよりも、性別が女だということなのか。
紅猫鬼は呆れてあごが外れそうになった。
「あ……んた」
まさか。
「あんた、じゃあ、さっき知らんぷりしてたのも、あたしが女だからなのかい」
「……」
返事は返ってこない。どうやらその通りらしい。では何か？

「ひょっとして」毛に包まれた自らの乳房を見下ろす。「あんまりこっちを向かないのも、あたしが着物を着てないから、恥ずかしがってんのかい」
「ちげえ」
ぼそりと否定された。
「女につらを見られるの、いやだからだ」
「……ふうん」
紅猫鬼は頷いた。
何だか殺す気が失せていた。
あぐらをかいて座り込み、うす汚れた丸い背中を眺めながら、紅猫鬼は尾を揺らした。
「なんでそんなに女が駄目なのさ」
「……」
返事は返ってこない。
紅猫鬼は土に手をついて片足を伸ばし、爪を引っ込めたつま先で、つんと背を突く。
「なあ、うんとかすんとか言わないとバラバラにしちまうよ。村の女に馬鹿にされんのかい？」
「……」こんどは返事が返ってきた。「そうだ」
「餓鬼の頃からかい」
「そうだ。なんもしなくても、いろいろ言われんだ」
「そうかい」
まあ、不細工だからな。
あまり頭も良さそうではない。もごもごして言葉も聞き取りづらいし、がんばって聞き取ってみても、言っている内容はくそ面白くもない。これでは馬鹿にされても当たり前である。
どうしてこんな男が生まれてしまったものか。紅猫鬼は哀れに思いながら座り直した。
「男どもとはうまくやれてんのかい」
「うまかねえ」

「うまかねえかい」
「……けど、女ほどひどかねえ」
「ふうん」髯を撫ぜる。「そうかい」
顔を横へ向け、壁際の農具を見る。古いなりによく手入れされているところをみると、真面目に仕事をする男らしい。村の男から邪魔にされる理由は無いわけだ。
しかし、それでも「うまかねえ」ということは、友として付き合ってくれる人間はいないということだろう。ますますつまらない男とみえる。
紅猫鬼は溜息をついた。
「なあ、あんたさあ、生きてても面白くなさそうだねえ」
「……」牛がもぞりと動く。「わかんねえ」
「寂しかないのかい」
「……わかんねえ」
だんだん声が小さくなってくる。
薄い板壁の隙間から風が吹き込んできた。
紅猫鬼はふと思い立って立ち上がった。
「なあ、おい」
尾を揺らしながら近づき、寝転がった体を跨いで、無理やり顔を覗き込む。
「いいことがあるよ。外の畑にある芋くれたらさ、いやな奴ら、あたしが殺してやるよ」
「殺す」
低い鼻の上で、小さな目が不思議そうに開く。
「だれを殺すんだ」
「だから、意地悪言ってくる女どもをさ。あいつとあいつって教えてくれたら、そいつらぶっ殺して川に放り込んでやるよ」
「だ、だめだ」
茂平は焦った様子で体を起こした。
紅猫鬼は慌てて飛び退く。

「ちょっと、急に起きるんじゃないよ。転んじまうじゃないか」
「なんで殺すんだ」
茂平は紅猫鬼の顔を見上げ、回らない口で早口に言った。
「なんもしてねえのに、こ、殺したら、か、かわいそうじゃねえか」
「あんたに意地の悪いこと言うんだろ」
「お、おれはいいんだ。おれはいいんだっ」
また背を向けて寝転がる。
「やっぱり違った。馬鹿にされてるってのは、おれの気のせいだった。意地悪言う女なんかねえ。殺す相手なんかねえ」
「はあ……」
せっかく、滅多にしない親切をしてやろうというのに。
紅猫鬼は改めて呆れ直した。
この男、人をかばうときだけはよく喋るようだ。しかも下手な嘘までつく。自分をからかう連中に対してここまでとは、悲しくなるほど損な人間だ。
紅猫鬼はしゃがみ込み、はいはい分かったよう、と笑った。
「嘘だよ。そんなおっかないことしやしないよ。変なこと言って悪かったねえ」
「おれ誰も嫌っちゃねえんだ」
「分ったよ、分かったよ」
よっこいせと立ちあがる。
「なんだか邪魔したね」尖った耳にかかる髪を払う。「あたしゃ山に帰るけど、今晩のことは誰にも言うんじゃないよ」
「……、……」
牛の背中が、ぼそぼそと何か言った。
えっと聞き返す。
「なんだい」
「帰るんだったら、そこに、こもがあるから持ってけ」
「ん？」
小屋を見回すと、確かに、隅の方へ筵が丸められていた。

「どうしてだい」
「山は冷えるからだ。風邪ひいちゃならねえからだ。芋も、ほしかったら勝手に引っこ抜いて持ってけばいい」
「……あたしは毛があるから平気だよ。芋も今はいらないよ」
「そうか」茂平は言う。「ならいいか」
「うん、いいよ」
こっくりと頷く。
もう茂平は何も言わなかった。
紅猫鬼は指を鳴らして翡翠の明かりを消し、それから小屋の出口まで歩いて、ちらりと振り返ってみた。
真っ暗な中、一人ぼっちの男が寝ている。
静かな小屋だ。外から聞こえてくる虫の声のほかは、何の音も無い。
涼しい静寂の中で、紅猫鬼は、あ――と口を開いた。というよりは、勝手に開いていた。
「あのさ」
爪の先で鼻をかく。
「あたし化けもんだから長生きしてるんだ。それに、海の向こうに住んでたから、面白いこと沢山知ってんだよ」
「……」
「今度来た時に色々話してやるよ。そしたらあんた、村で一番の物知りになるよ」
「……。おれは」
茂平はもごもごと応えた。
「おれは頭が悪いから、きっと全部は憶えられねえ」
「――あはは」
そりゃあ違いない。
紅猫鬼は笑いながら小屋を出た。
枯れ野の上に月が輝いていた。

二

シロは紅猫鬼の頬を、ぴしゃりと叩いた。
「これ」
「ん」
「何を黙って呆けておる」
「……ん？　ああ」
紅猫鬼は間抜け面で頭をかいた。
「私ぼーっとしちゃってた？」
「いつにも増してひどい面じゃったぞ」シロは腕組みをしてみせる。
「おぬし酔い過ぎておるのではないか」
「昔のこと思い出してただけよ」
紅猫鬼は頬をさすり、ソファに深く背をもたれる。
隣の小梅がフライドチキンを片手に問う。
「茂平さんってどんな人だったんですか？　こないだは、なんていうか、あんまりカッコいいこと聞かなかったですけど」
「え。この間って、どんな話したっけ」
「好き放題言ってたじゃんか」口をはさんだのは石楠花である。「のろまだとか、口下手だとか、頭が悪いとか、女の子に馬鹿にされてたとか」
「ああ――そうだっけ？」
紅猫鬼は苦笑う。

三

茂平は現実、その通りの男であった。
初めて会った次の日から、紅猫鬼は子猫に化けて茂平の周りをうろつくことにした。時に民家の屋根へ、時に高い木へ上り、茂平の姿をのぞき見て暇を潰したのである。
そうして見た茂平の昼間の生活は、それはもう情けないものだっ

た。

本人の言っていた通り、村の若い女や女房たちは、遠くから茂平を見ては、くすくすと笑う。ひどい女などは「やい、茂平やい、うちの雌牛がかわいくたって突っ込むでねえぞ。おめぇ相手じゃ牛も可哀そうだからなあ」などと、面と向かって野次を飛ばす有様であった。

しかし、もう慣れているのか気が弱いのか、少なくとも紅猫鬼の見る限り、茂平は下を向くばかりで言い返すことをしなかった。

悪事もせぬのにこの仕打ちでは、女のことも苦手になろう。無理からぬことかと納得しながら、紅猫鬼は苛々とその光景を眺めていた。

して男どもはというと、目が合えばまともに挨拶するが、誰も彼もそれだけである。嫌味を言うでもなく、仲良くするでもなく、ただ少し馬鹿にしたような目で茂平を見て、歩き過ぎてゆく。これは単純に、茂平の社交力が欠如していたからだと思われる。何を言ったって「うん」くらいしか返ってこなければ、話しかける気も失せようというものだ。茂平が悪い。

茂平が悪いのだが、ずっと眺めている紅猫鬼には、それもなんだか面白くなかった。

男も女も茂平を下に見て悦に入っているように思え、「きのうの晩にそいつが庇わなければ、お前らのうちの何人かは今頃魚の餌だぞ」と、木の上で顔をしかめたものだ。

ただ、例外もいた。

いたとはいっても、きよという娘がたった一人だけである。田舎の百姓にしては見られた顔で、よく働く明るい娘だった。

村の若い女たちの中でも、その娘だけは、どういうわけか茂平に優しかった。いや、どういうわけも無く気立ての良い子だったのだが、その娘に話しかけられる時も、茂平はろくに喋らなかった。

今日もよく働いているねえ。――うん。芋が育ってきたねえ。――うん。

やはり、何を言っても「うん」だけだ。

しかし、きよに対する「うん」は、他の者への「うん」とは少し違っていた。まごまごと目をそらし、あっちを見たり、こっちを見たり。

きよと話すとき、茂平はどうやら照れていたのである。紅猫鬼はその姿を見て、茂平がきよを好いていることを直感した。

だが、そんな気立てのよい娘に良い仲の相手がおらぬはずもなく、きよは、茂平の小屋の隣に住む右六という男と好き合っていた。

まだ男と女という感じではないものの、きよが右六を好き、右六がきよを好いていることは瞭然としていて、村の者たちが「あいつらはいつくっ付くか」と話しているのも度々聞いた。また、そうした話を盗み聞くに、二人の仲が未だ決定的でないのは、どうも、きよの女心が年の割に幼いせいであるらしかった。言いかえれば、きよが要らぬ照れを捨てるだけで、二人は男と女になるという具合である。時間の問題とはこのことだ。

茂平は見事な横恋慕。誰も茂平の気持ちに気づいていないのは、幸いだったのかもしれない。

そんな調子で三日ほど村を眺め、四日目の夜深く、紅猫鬼は再び茂平の小屋へ忍び込んだ。今度も正体のままである。一度見られてしまったものを隠すのも馬鹿馬鹿しいし、万一他の者に小屋を覗かれたとしても、綺麗な人間の女に化けた紅猫鬼と話している茂平より、化け物と話している茂平を目撃した方が、かえってその者の驚きも小さかろうという考えだ。ひどい考えをしていたものである。

茂平にとっては暗いほうが話しやすいかと思い、今度は明かりの術は使わず、ただ寝床へ忍び寄って茂平を揺り起こした。

「なあ、また来たよ」

「……」目を覚ました茂平は顔を手でこすった。「おめえか」

闇の中、薄く開いた目が明後日を見ている。無理もない。夜目のきく猫と違い、茂平はただの人間である。

もそりと体を起こした茂平の傍らにあぐらをかき、紅猫鬼は土産

の魚を置いた。
「おめえじゃないよ、紅猫鬼ってんだよ。魚の余ったのをやりに来たんだ。でも、いきなりこんなものがあったら怪しまれるから、明日の夜まで取っておいてこっそり食いな。なあに、今は涼しいし腐りゃしないよ」
「……ん」
声でようやく位置が分かったらしく、茂平はこちらへ顔を向けた。
「うん」魚の臭いを感じてか、くんと鼻を動かす。「ありがてえ」
「そうだよ、有難く食いなよ」
紅猫鬼は両膝を立てて座り直す。どうせ見えてはいないのだが、男相手に股ぐらを開いて座るのは、考えてみれば恥ずかしい話だ。
茂平はここでようやく名乗った。
「俺あ、茂平だ」
「知ってるさ。村のもんがそう呼んでたからね」
「ん……どっから見てた」
茂平は首を傾げ、ぼりぼりと頭を掻いた。
紅猫鬼はそのとぼけた顔を見て笑った。
「みいんな見てたのさ。おまえが汗水たらして土ほっくり返してるのも、性根の悪い娘っこらに嫌なこと言われてるのもね。きよちゃん相手に赤くなってるのも見たよ」
「う」茂平はどきりと硬直した。「おれは、赤くなってたか」
「嘘だよ。あんたったら本当、牛みたいに顔が変わらないよ。きよちゃんと話してる時も同じ顔だったよ」
「……そうか」
茂平はそう言って、ずんぐりした体を弛緩させた。
紅猫鬼は尾の先でその頬をつつく。
「ねえ、お前、あの娘が好きなんだろ」
「……」茂平は下を向く。「わからねえ」
「分らないことないよ。あたしゃ長生きしてるって言ったろ？　あんたが惚れてるのは丸分かりさ」

「……。なら……」小さな声で。「そうかもしれねえが」
茂平はますます下を向く。
「意味がねえな」
うっすらとだが、珍しく茂平は笑った。
紅猫鬼は尾を引っ込める。
「そりゃ右六がいるからかい？」
そう訊くと茂平は下を向き、小さく首を振った。
「関係ねえな」
「……そう、かい」
せっかく初めて見た茂平の笑い顔は、少しも笑っていない。
なんだかつまらなかった。
虫の声が不意に止む。
紅猫鬼は、そうだ、と小さく手を叩き、話を無理やりに変えた。
「あたし面白いことを沢山知ってるって言ったろ。今晩は茂平が眠たくなるまで話してやるよ」
「もう眠たかったから、おれ寝てたんだけどもな」
「かあ、うるさいねえ。ぐだぐだ言わずに寝っころがって聞いてぇいいんだよ。いいかい、まずは馬鹿な化け狐の話さ」
紅猫鬼は茂平を寝かせ、ひそひそと語り始めた。
任氏という間抜けな化け物を酔わせて悪戯した話。自分が生んだ三つ子の顔を見分けられず、全員の額に一、二、三と入れ墨をして、長じた子供たちに死ぬまで愚痴を言われた女の話。酔っぱらって描いた時の絵が普段より上手く出来たもので、それから毎日酒を飲みながら絵を描くようになり、とうとう体を壊して死んでしまった絵師の話――。特に面白おかしい類の話を選び、ろくに相槌もうたない茂平を相手にして、紅猫鬼は語れるだけ語ってやった。
そうして一刻が過ぎ、ひと通り話し終えたところで、紅猫鬼は茂平の頬をつついた。
「なあ、どうだい。面白いかい」
「ん」

茂平は仰向けで返事をした。
「おもしれえ」
「そうかい、そうかい」
頷く紅猫鬼の長い尾は、知らず知らず、左右にゆらゆらと揺れていた。
茂平は言った。
「むこうは色々あるんだな」
「そうだよ。それに広いんだ」
「おめえは」
闇に目が慣れたのだろうか。こちらに視線を向けてくる。
「おめえは、なんでこっちに来たんだ」
「え、あたしかい」紅猫鬼は自らの鼻っ面を指す。「そりゃあ……あんた、そうだねえ」
舌先で牙を舐めて考える。
紅猫鬼も気まぐれでこの国まで来たわけではない。それなりの理由というものが、もちろんあった。だが人に話そうとすれば、その話は、紅猫鬼が猫から妖猫となって、やっと物心のついてきた頃にまで遡ってしまう。
というのも――
紅猫鬼は、ある大陸の術師に育てられたのだ。術師は老いた男で、名をユウシィ――于石といった。日本の読み方では、うせき、といったところか。道術や仙術よりは呪術に近いような術を研究しており、もとは都の人間だったくせにわざわざ山奥へ引っこんで、朝から晩まで実験をしてみたり、その成果を書物にしてみたりの日々を送っている男だった。傍から見れば、役に立たない術を目的もなく研究していた変人である。
しかし于石は、まだ人間に化けるすべも分からぬ未熟な紅猫鬼を拾い、研究に使うこともせず、ただ一緒の小屋へ住まわせてくれた。于石自身の研究が忙しいために教育などの方はそこそこだったが、少なくとも、食い物と寝床の世話はしてくれたのだから、やはり育

ての親に違いない。毛についた蚤を取ってくれたこともあるし、幾度かは一緒に森の中を歩いたこともある。

当然紅猫鬼は于石に懐いており、屋根の上で昼寝をしている時以外は、できもしない手伝いをしようと、いつも于石の後ろをうろうろと付いて回っていた。あのときはまだ小さくて、二つ足で歩けるようになって間もなかったから、しょっちゅう転んでは立たせてもらっていたものだ。

二人きりの生活は五年と少し、紅猫鬼が今と同じくらいの背丈になって、于石が老衰で他界するまで続いた。

彼が居なくなった後には、ぼろぼろの小屋と蔵と、それから術の研究成果だけが残り、紅猫鬼は更に十年ほどの間、同じ場所で于石の形見を玩具にして暮らした。その頃になっては人化の術も身に付けていたため、山を下りて人に紛れてもよかったのだが、于石と過ごした家を離れる気がなかなか起らなかったのである。

于石が残した書物の中には、術書のほかに、わずかながら手記のようなものも含まれていて、そこには紅猫鬼のことも書かれていた。口数の少ない于石らしく淡々とした言葉づかいでありながら、今日はあの子が初めて言葉を発したとか、今日は自分のために桃をもいできてくれたとか、そのような出来事を記したあとに、必ず「可愛らしいものだ」との言葉があって、蔵の中で一人読む紅猫鬼を涙させた。

化生の中でも賢い類の化生である紅猫鬼は、ほどなく于石の研究成果を全て頭に入れ、その術式を使いこなすようになった。無論それらの術は人間の限界にしばられたものであったが、紅猫鬼には于石と違って妖力があったので、于石の代には理論だけで体現不能だった術も完成させることができ、また、于石の理論を基礎に、新たな術式までも多く生み出した。たかが猫鬼の紅猫鬼が他を震え上がらす力を持っているのも、それらの術による自己強化があればこそである。

やがてある決心をした紅猫鬼は山を降り、人の世に新たな知恵を

求めた。

集める知識は仙道でも何でもよかった。時に人に化けて道士に取り入り、時に化け物の姿で脅かして書物を奪い、貪欲に新たな術の研究材料とした。

紅猫鬼のした決心とは、己が手で反魂術を完成させるというものである。死人を現世に蘇らせる術を編み出し、その術をもって、あの優しい于石にまた会いたかったのだ。それがかなうなら、手段を選ぶつもりは無かった。

はたして幸いというべきか、ほとんど于石と二人で暮らしていた紅猫鬼は、于石以外の命を尊ぶような教えを受けていなかった。だから女の血が必要となれば女を殺して身を搾ったし、赤子の肝が必要と聞けば、赤子をさらってきてその腹を裂いた。

だがそのような生贄を払っても、于石の反魂はかなわなかった。人間たちの間に伝えられる生き返りの法は、どれもこれも根拠のない空想に過ぎず、いくら手を加えてみたところで、画餅に筆を加えたがごとき空しい結果が残るのみだった。

それでも諦めずに大陸中をまわって試行錯誤を続け、やがて幾百年の後に行き詰まった紅猫鬼は、とうとう海の向こうに目を向けたというわけだ。

そして初めに目指したのが、この島国である。大陸より文明は遅れているものの、ここには独特の文化や呪い、そして何よりも、他の土地とは比べ物にならぬほど多くの神が息づいていると聞いていた。

紅猫鬼の考えでは、恐らくこの島国は、向こう側に最も近い土地なのだ。向こう側とはつまり、仙界、天界、地獄などと、土地や教えによって様々に名を変える、時と離れた向こう側のことである。もしこの島国がその世と近いのならば、何かしら得るものがあるかも知れぬと紅猫鬼は考えた。むろん、絶対にそうだという確証があったわけでもないのだが。

そして海を渡って来てみたところ、この国の妖怪どもに他所者と

して警戒され、あまつさえちょっかいを出され、しかもそれを力で黙らせようとしたものだから、あっという間に悪者になってしまった。冷静になって考えてみれば、ちょっと下手に出て敵意が無いことを示せばよかったのかも知れないが、「大陸ではそれなりに名の通っていた自分が、たかが田舎の化け物どもに気を使った挨拶などしていられるか」という思いが先に立って、どうしても大人しい態度に出られなかった。弱い連中でもまとめて敵に回せば厄介だということも忘れ、馬鹿なやり方をしたものである。

――さて。

茂平の問いに答えるなら、以上のようなことを、茂平の頭と知識に合わせて噛み砕き、長々と説いて聞かせねばならなくなる。正直いって面倒くさい。

だから紅猫鬼は、「まあ、ちょっとした気まぐれさ」とだけ言って、赤い毛の生えた手を、ただ茂平の肩に置いた。

「もう今晩の話はお終いだよ。あたしゃ山へ帰るからね」

「ん」

茂平は鼻息で返事をして、何事か言いたげに、もごもごと口を動かした。

紅猫鬼はその肩をさすりつつ首をかしげる。

「どうかしたかい」

「……ん」

茂平は少し黙ってから、今まで発した中でも一番小さな声で、ぽつりと言った。

「手」

「て？」紅猫鬼は手を止める。「手がどうかしたかい」

「あったけえ」

ぼんやりとした顔をして茂平は言った。

「さわってもらうの、いいもんだ」目を細める。「ありがてえな」

「……茂平」

なぜか指先が震える。

馬鹿だねえ。有難がるようなことじゃないんだよ。
そう言うかわりに、ぽん、ぽん、と肩を叩き、「また来るよ」とだけ耳打ちして、紅猫鬼は小屋を出た。
河原を歩きながら嗅いでみた手のひらは、畑の土の臭いがした。

四

大輝が止めようとしたときにはもう遅く、きれいなフォームで振り下ろされた手のひらが、紅猫鬼の脳天に炸裂していた。
「苛々する奴じゃ！」
叩いたのはもちろんシロである。両手を腰にあて、紅猫鬼の顔にぐいと鼻を近づける。
「さっきから何を呆けておる？　もしや目を開けて眠っておるのでは、きゃあっ！」
ジーンズの股を蹴り上げられ、シロはその場で飛び跳ねた。
紅猫鬼は蹴った足をぶらぶらさせながら、痛たた、と頭に手をやる。
「そんなに気安く叩くんじゃないわよ、もう」
「き、き、貴様」シロは両手で股をおさえて後ずさる。「何というところを……男なら動けぬようになっておるところじゃぞ」
「女に生まれた喜びを実感なさいな。で、どこまで話したっけ？」
「ひとつも話しておらぬわ！」
「まあまあシロさん」
こういうときに人を落ち付けるのはいつも小梅だ。世の人間が皆小梅のような者だったら、戦争どころか喧嘩も起こるまい。
紅猫鬼はそりゃ失礼と笑い、脚を組み直して考え込む。
「んー、でもねえ。茂平のことで、話して面白いことなんか無いのよねえ。これといったエピソードも」
そこで天井を見る。
「ま、無いこともないけどさ」

五

それは突然といえば突然の出来事であった。茂平と初めて会ってからひと月ほどが経ち、夜な夜な小屋へ遊びに行くのも習慣になってきた頃のことである。

よく晴れた日の真昼間、紅猫鬼はいつものように子猫の姿となり、妖気を隠して村の周りを徘徊していた。

といっても、その日はあまりに日差しが暖かかったもので、散歩のほうは早々に切り上げて、近くの山へと続く小道の傍、枯れているのかいないのか判然としないような寂れ木に上り、その細い枝の上にうずくまって、ぬくぬくと紅い背を温めていた。

身をひそめる生活は退屈といえば退屈だが、旅の途中のひと休みと考えれば、そう悪くもない。背に日差し、髯にそよ風を受けていると、徐々に瞼が重くなってきた。

しかしその瞼を、いきなりの金切り声が開かせた。

きよの声であった。

何事かと思い木の下を見れば、どういうわけか、きよが大きな山犬一匹に襲われていた。

はて、きよがこの道を歩いているのは茸狩りへ行く途中と想像がつくが、いくら山側の村外れとはいえ、ここまで獣が下りてくることも珍しい。

ためしに鼻をひくつかせると、わずかに妖気の香りがする。なるほど――恵まれた山でむやみに年を経たか、それとも妙な水でも飲んでみたか。いずれにせよ化生となりかけている。

肉を求めて人里に下りてくるとは、半端に知恵をつけたものだ。

紅猫鬼はやれやれと思いつつ、きよと山犬の姿を眺めた。

きよは腰を抜かして座りこみ、唸りながら睨む山犬を見つめて、ただ悲鳴を上げていた。

ああ、これは放っておけば食われるな。

紅猫鬼は子猫の姿のまま欠伸する。
さあて、助けてやろうか、やるまいか。このまま喧しい声で叫ばれ続けるのも迷惑なことだが――。
考える紅猫鬼の脳裏に、ふと、茂平の顔がよみがえる。きよと相対す時の照れた顔。紅猫鬼には向けぬ顔だ。
「……」
体を丸め直す。
「ふん」
まあ、これといった義理もないのに助けることもあるまい。
きよは喉が破れそうなほどの声で助けを求めていたが、山犬が大口を開けてひとつ吠えた途端、ころりと気を失った。妖気をぶつけられたわけでもなく、ただ驚いて肝が潰れただけである。人間の女などは土台その程度だ。
紅猫鬼の眺める下で、動かなくなった獲物に山犬が歩み寄り、いよいよ首筋へ食らい付きにかかった。
だがその時、村の方から走ってくる者があった。
それは鍬を担いだ茂平だった。紅猫鬼は枝の上で立ち上がる。
茂平はぜえぜえと息をしながら駆けてきて、「きよから離れろ」と叫びながら、山犬に鍬を振り下ろす。
山犬はとんと飛び上がって身を翻し、かわしざまに茂平の顔を蹴った。並の獣ならせぬ動きである。茂平の体はぐらりと傾ぎ、土の上にすっ転ぶ。
紅猫鬼は小さく呟いた。
「ああ、馬鹿だね」
風に乗ったきよの声を耳にして駆け付けたのだろうが、相手が悪い。不完全とはいえ化生は化生――たかが人の手に負えるものではないというのに。
しかし茂平は果敢であった。すぐに起き上がり、傍らに転がった鍬を拾って、大きな体で振り回す。当たらねど、当たらねど、山犬めがけ、がむしゃらに鍬を振る。

山犬も茂平の勢いには困惑した様子で、しばらく避けながら様子を窺っていたが、やがて茂平の息が切れ、振り下ろした鍬が土に食い込んだところで、その足首を狙って咬みついた。

茂平はうっと背を丸め、また土の上に尻餅をつく。

それを見た紅猫鬼は飛び降りていた。

ふたつ回りながら身を変じ、正体となって地に降り立つ。

そして山犬の意識がこちらに向く前に、大きく飛びかかって腕を振り上げ、斜めに思いきり振り下ろした。

もげた山犬の首が、茂平の足を離れて飛ぶ。

茂平がこちらを見た。

紅猫鬼はその頬を叩いて言った。

「馬鹿ッ」

なぜ自分が怒っているのかは分からなかった。

「あんた死ぬところだったよ！」

「……おめえ」

地べたに座り込んだまま、きょとんとした顔で茂平は瞬く。

「いなかったのに、どっから出てきたんだ」

「んなこたどうでもいいんだよ。今のは物の化だよ、化け物だよ。あんたの手に負えるようなもんじゃないんだよ」

「……ん。すまねえ」

「全く――怪我までしちゃってさ」

「そんなにえれえ怪我じゃねえ」

茂平は血の流れるほうの足で軽く地を叩いてから、むっくりと立ち上がる。

それから遠くに落ちた犬の首を見た。

「ありゃ化けもんか」

「だからそう言ってるじゃないか。あたしと同じで化け物だよ。並の動きじゃなかったろ」

「よくわかんねえ」今度は倒れたきよに顔を向ける。「きよに怪我はねえかな」

「知ったことかい。そんなもん放っぽっときゃ良かったんだ」
紅猫鬼は割れた唇で唾を吐き捨ててから、宙返りして再び子猫に化ける。
茂平は目をぱちくりとさせた。
「……猫になっちまった」
「あたしゃ元々猫だからね。誰かに見られたら面倒だから、この辺りじゃ――」
足音に耳をぴくりと動かし、村の方角を見る。
「ほら、言ってるそばから誰か来たろ」
「ん」
茂平も同じ方を見る。
今さらになって走ってきたのは、右六であった。
茂平と同じく鍬をかついだ右六は、首をきょろきょろとさせながらこちらへ向かって来たが、やがて茂平の姿を見つけ、「おおい」と声をかけてきた。
「茂平、どっかにきよがいなかったか。後吉のやつがただならねえ声聞いたってんで、探してるんだがよお」
「……ん」
茂平は黙って、木のもとに倒れたきよを指す。
右六はそれでようやくきよに気付き、大慌てでこちらへ駆けてきた。
「お、お前、茂平、こいつはどうしたんだ」
走ってくるなり鍬を放り捨て、ぶつかるような勢いで茂平の襟を掴んで、右六は早口に問いただしてくる。
「そこに死んでるのは山犬か？　きよはそいつに襲われたのか？　――お、おい」
茂平の襟をぱっと離して、今度はきよの傍へ膝をつく。
「きよ、きよ」
右六が体を抱えて揺さぶると、きよはようやく目を覚ました。
「右六……？」

「目ぇ覚ましたか、きよッ！」
「あ――」
きよは虚ろな目で周りを見回し、その目がはっきりすると共に、右六の体を抱き返した。
「右六！」
「きよ、怪我はねえか？　どっか咬まれちゃねえか？」
「うん。うん」
きよは右六の肩に顔をうずめ、それからこう言った。
「右六、助けてくれてありがとうね」
「え――？」
「本当にありがとうね。あんたが山犬から助けてくれたんだろ」
「いや……俺あ」
「そうだ」
横で頷いたのは茂平だった。
紅猫鬼は茂平の顔を見上げた。
茂平は笑っていた。
「おれは足が遅いから間に合わなかったんだ」
笑顔のまま、右六に重い声で言う。
「そうだな」
「あ……？」右六は気圧された面持ちで頷いた。「……ああ」
だが後に言葉は続かない。当然のことである。右六にしてみれば、いわれなき手柄をただ放り投げられて、呆気に取られるばかりであろう。
きよは右六にすがりついて、ただ泣いている。
言いえぬ沈黙があった。
紅猫鬼が小さな口で舌打ちし、茂平は――
「……ん」
ぼりぼりと頭をかく。
「それじゃあ、俺は戻るからよ」
あとは二人を見向きもせずに、村の方へと歩き出した。

ほんとに損な男だよ。
そう小さく呟いて、紅猫鬼は前足で顔を洗った。

六

またしばらく考え込むような顔をみせた後、紅猫鬼はぽつりと言った。
「こうして思い出してみると」
目を細めて煙草を口に運ぶ。
「何の間違いか、私の方から気にするようになってたのね」
「知らぬわ」
シロは飽き飽きした様子で浮き上がり、ドアの方へ飛んでゆく。
残ったピザに手を伸ばしながら石楠花が声をかけた。
「どこ行くの？」
「このまま猫の置物に付き合っておっても馬鹿馬鹿しいだけじゃ」
ちらりと壁の時計を見る。「しろは夜風にあたり酔いを醒ましてくる」
「あ、そう」
「醒ますほど酔っているようにも――見えなかったけれどねえ」
妙にそそくさと居間を出て行くシロを横目で見送り、夜々はシャンパンを注ぎなおす。
大輝はようやく空いた椅子に腰かけた。思えばトイレから戻って四、五分は立ちっぱなしである。
コマーシャルが始まり、テレビの音が急に大きくなったところで、上のそらの紅猫鬼がまた口を開く。
「けど私も昔は臆病だったわ。人を愛することに憶病な、可愛い可愛い子猫ちゃん――実際可愛かったわよ私ってば。写真が無いのが残念なくらい」
「わあ、そんなに可愛かったんですか？」
「可愛くなかったわ」

「え？　ええと」紅猫鬼の言葉に翻弄され、小梅は首をかしげる。
「どっちですか？」
「全然可愛くなかったのよ。ひねくれててさ」
頬を酒の朱に染めた紅猫鬼は、遠くを睨むように目を細めた。

七

もちろん紅猫鬼は気付いていた。目を覚ましたきよが辺りを見回した時、その目が、茂平の足の傷をちらりと見ていたこと――それなのに右六に抱きつき、わざわざ名指しで礼を言ったこと。
茂平もまた気づいていたのか、それは分からない。ただ、その晩に小屋を訪ねた紅猫鬼が「いずれ猫の妖怪が助けたなどと言えるはずもないが、どうせ嘘をつくならば、なぜ自分の手柄にしなかったのか」と問うと、茂平は例の薄っぺらな笑い顔で、「あれで全部うまくいったじゃねえか」とだけ言った。
茂平がそうした男と分かっていたから、きよもあのような知らぬ振りが通ると踏んだのであろう。どうにも面白くない話である。
真っ暗な小屋の中、不器用に巻きつけられたぼろ布をほどいてやりながら、紅猫鬼は悪態づいた。
「あんた大馬鹿だよ。鈍いくせして無茶するから、こんな怪我しちまってさ。それであいつらのくっ付くきっかけまで作ってるんだから、世話が無いよ」
「……ん」
「薬塗るからね。沁みても喚くんじゃないよ」
「ん」
「全く――」
紅猫鬼は住処から抱えてきた瓶に手を突っ込み、中の軟膏を指先にちょいと付けて、茂平の傷口に塗ってやる。
「まあ、これでも塗っときゃ二、三日で治るさ」
「おめえが作ったんか」

「薬かい？　まあね」腿の毛で指を拭う。「年くってると色々出来るようになるんだよ」
「ふうん」
「はいお終い」
亀の蓋をしめ、紅猫鬼は座りなおした。
「もう下手に布なんぞ巻かなくたっていいからね。かえって悪くなっちまうからさ」
「ん。ありがてえ」
「いいよ、礼なんて――」紅猫鬼は両膝を抱える。「そんなもん要らないよ」
これで誰もいたわってやらなかったら、あんた、本当に馬鹿みたいじゃないか。
胸の中でそう呟く。
今日の夕方、右六が自分の小屋にきよを連れ込むのを、紅猫鬼は横目で眺めていた。
同じころの茂平はといえば、一人こっそりと川原へ行き、黙って傷を洗っていた。
もちろん仕方ないといえば仕方ないことだ。きよはもともと右六に惚れていたのである。二人がくっ付くのは自然なことだし、茂平が一人ぼっちでいることも、あの連中には関係のない話だろう。
それでも――
「……なんか、さ」
紅猫鬼には面白くなかった。
「つまらないねえ」
「ん？」
「あたしねえ、人に化けられるんだよ。けっこう綺麗なもんさ」
「……？　何いってんだ」
「でも――茂平にとっちゃ、この姿でも女に変わりないんだっけか」
立ち上がる。「それだったら、このままでもいいかね。あたしもそのほうが嬉しいしさ」

「いいって、何がだ」
「こういうことさ」
紅猫鬼は茂平の正面に膝をつき、両腕を伸ばす。
「ほら、乳でも何でも触っていいよ」肩に手をのせて笑う。「毛皮が邪魔かもしれないけど、ちゃんと柔っこくて気持ちが良いから」
「おめえ、」
「怖いかい？」
正面から崩れ込むように身を預け、茂平の頬を舐めてやる。
「――ん」一度口を離し、「ほら、口開けな」
「お、おめえ、なんで」
「黙ってな」
わずかに開いた唇に口を押しつけ、舌を滑り込ませる。
茂平は驚いたような手つきで肩を押し返そうとしてきたが、紅猫鬼はそれに構わなかった。
「……、ふふ」
髭の生えた口を離す。
「どうだい。あたしの体は良い匂いがするだろ？　こいつを嗅ぐと、男は嫌でもおっ立つんだ」耳元で囁く。「あんた得したねえ。化けもんの体は人間よりいいよ。匂いだけじゃなくて、あそこのところの具合だって、きよなんかよりずうっといいんだよ」
抱きつくように体をこすらせ、柔らかな毛皮に包まれた乳房を押しつけてやりながら、紅猫鬼は手を下の方へ這わせた。
「大きくなってきたね。良かった良かった」布の上からそこを撫ぜる。「ほら、いつまでも壁に寄っかかってないで横になりなよ。あたしが色々やったげるからさ」
「お、おめえは」
茂平は怯えたような声で問うてくる。
「おめえは、どうして、こんなことすんだ」
「決まってらあね。せめて気持ち良くしてやらなきゃ可哀そうだからだよ」紅猫鬼は笑った。「あんたみたいな男、あんまり惨め過ぎ

て、見ちゃいられないじゃないか。だから」
「うーー」
茂平は紅猫鬼の肩に手をかけ、ぐいと押し返してきた。
今度は人間なりに本気の力であった。思わず体を離し、紅猫鬼は瞬く。
「何だい、どうしたんだい」
「う、……うっ」
茂平は壁に背を押しつけ、下を向いていた。
紅猫鬼は戸惑った。
「どうしたのさ。やっぱり猫のつらじゃ気味が悪いかい？　人に化けた方が良いなら、そう言っていいんだよ」
「おれは」茂平は唸るように言った。「おれは、みじめか」
「えーー」
「なんもみじめったらしいことなんか、しちゃいねえのに」
濡れた眼が睨んだ。
「どうして、おめえは……おめえまで、そんなこと、おれに思うんだ」
「あーー」どきりと胸が鳴る。「ち、違うよ茂平、あたしは」
「おれはおめえがすきだ。気が優しいからすきだ。声も、やわこい手もすきだ。けども」
茂平はまた下を向いた。
「けども、そんなこと言われんのは、いやだ」
「ーー、っ！」
紅猫鬼は立ち上がり、足元に唾を吐いた。
「ちぇっ、何だい何だいッ」
薬の瓶を蹴り飛ばす。
「せっかく親切にしてやってんのに、わけの分からないこと言いやがって。当たり前じゃないか。可哀そうだと思わなかったら、誰があんたみたいな男を相手にするもんか。馬鹿みたいに思い上がってんじゃないよッ」

「……う」
茂平は何も言わずに唇を噛む。
胸が――
「だいたい誰の気が優しいって？」
きりきりと痛い。
「思い違いもいい加減にしな。あたしはね、あんたがあんまり情けないから、つい哀れに思っただけだよ。ほんの気まぐれの、ほどこしみたいなもんさ。本当なら初めて会った時にぶち殺しても良かったんだ」
ごめんよ。
「あんたが惨めかだって？　決まってるじゃないか、そこいらの虫けらよりよっぽど惨めだよ。誰にもまともに相手されないで、何言われたって言い返せないような奴の、どこが惨めじゃないっていうのかね」
ねえ、さっきあたしを好きと言ったね。どういう意味で言ってくれたんだい。
「それをお情けで抱かせてやるってのに、あんたの言い草ときたら、まるで一丁前の男気取りだ。恥ずかしくって聞いちゃいられないよ。あたしが化け物だから、ひょっとしたらとでも思ったのかい？　馬鹿にされたもんだ。女だったら人間でも化けもんでも、あんたを見て思うことは同じさ！」
ああ、どうしてだろう。
「あんたみたいな奴、気持ち悪いったらありゃしない！」
心と言葉が交わらない。
茂平は紅猫鬼に言われるまま、寂しそうに項垂れていた。
紅猫鬼の荒い息と、吐き出してしまった言葉がゆらゆらと漂っている。
もう駄目だった。紅猫鬼は耐えきれなくなり、「二度と来ないよ！」と言い捨てて、小屋を飛び出した。
外の風は冷たかった。

やけに大きな月の下、四つ足を使って冷えた地を駆け、川を跳び越え、山へ向かってひとっ飛びに疾走る。

なぜあんなことを言った？

風を切りながら自問する。

的外れなことを言っていたのは自分の方だ。あの男は惨めなことなど何もしていないじゃないか。罵る相手を恨みもせず、悪口も言わず、誰のことも傷つけずに、黙って真面目に働いてきたんじゃないか。誰かに恥じることなんて、一つもしていないじゃないか。

どこかで狼が鳴いた。紅猫鬼は薄野の中で歩みを止め、その場にすとんと座り込む。

――。

ああ、そうだ。

揺れる葉の先で蟋蟀が跳ねた。

それが、あの木偶の坊の誇りだったのだ。どんなに馬鹿にされても、本当に惨めになってしまうような、曲がったことだけは絶対にしない。それがあの男の、たった一つ持っている誇りだったのだ。

そんな人間だから紅猫鬼も好きに――好き？

「……、あはは」

いつの間にか零れた涙が、頬の毛を濡らしていた。

そうか、自分はあの男に惚れていたのか。

おかしな話だ。惚れているくせに、どうしてあんな言い方しか出来なかったのだろう。

素直に「あたしはあんたが好きだよ」と言えばよかったのに、なぜ惨めだから哀れだからと、くだらない理屈を付けてみたのだろう。

「だって……」

背を丸めて涙を拭く。

「だって、ねえ」

考えないように、頭の中で言葉にならないようにしてきただけで、本当はその答えも分かっている。

好いたって、どうせ、すぐに死んでしまうからだ。

茂平はただの人間だ。どんなに仲良くなったところで、于石のように、あっという間に死んでしまう。そしてまた紅猫鬼は思い出を抱えて残されるのだ。

反魂の法など、もしかしたら永遠に手に入らないかもしれない。諦めなくてはならなくなった時、胸に思い出が多ければ、そのぶん苦しみが増えるだけだ。

だから一度体を重ねて、それっきり。

それで満足するのが一番いいではないか。

ほんとに？

だって、どうせ于石と同じように消えてしまうなら、最初から何も始まらない方がいい。また冷たい亡骸にすがって泣くくらいなら、いっそここですれ違った方がいい。別れるのはもう嫌だ。置いて行かれるのはもう嫌だ。

じゃあ、

誰だ。幼い声で誰かが問いかけてくる。

じゃあ、おじいちゃんと過ごしたあの時間も、無いほうがよかった？

「……」顔を拭う。「そんなわけ」

あなたは後悔してるの？

「そんなわけ無いだろう」

忘れられるなら、みんな忘れてしまいたい？

「忘れたくない」

どうして？

「……大事だから」

幼い自らの声に応えながら、紅猫鬼は傍らの草を千切り、握りしめた。

「あのとき、幸せだったからだよ――」

涙がぼろぼろと零れた。

愚かだ。

本当は好きなのに、別れるのが怖いからと、自分から遠ざかるなん

て。そんなのは馬鹿な話だ。本当に愚かなことだ。
早く茂平に謝って、本当の気持ちを伝えなければ。
でも、あんなにひどいことを言った自分の言葉を、果たして信じてくれるだろうか。信じてくれたとして、許してくれるだろうか。
分からない。
けれど、
「……やり直さなきゃ」
そうだ。せめて、悔いの残らないようにしなければ。

八

紅猫鬼の目が懐かしそうに細められるのを、小梅はじっと見つめていた。
綺麗な横顔、その唇が開く。
「よかったわ」
「え？」
「やり直そうと思えて」
腕組みして笑う。
「おかげで後悔せずにすんだもの。もしあのとき躊躇っちゃって、今ここに石楠花ちゃんや石之助ちゃんがいなかったらと思うと、ゾッとするわね」
「んー、と？」
小梅は反応に困って皆の顔を見比べたが、誰も呆れたような顔をして紅猫鬼を見ていた。
いったい何の話かと言わんばかりの冷めた視線と、夜々の「たまに口を開いたかと思えば意味不明な」という呟きを無視し、紅猫鬼は一人、くすくすと笑った。
「それにしても、女からプロポーズってのは決まりの悪い話よね」

九

次の晩、紅猫鬼は茂平のところを訪ねた。
「茂平、いる？」
もはや勝手知ったるはずの小屋の中に、おそるおそる足を踏み入れる。
いないはずもない。
茂平は仰向けにしていた体を起こし、「ん」とこちらを見た。
「いる」
「き、昨日はごめんよ」
暗い小屋の真ん中に立ったまま、紅猫鬼はまず謝った。
「あたし、あんなこと言ってさ。怒ってんだろ」
座り込むことは躊躇われるものの、どんな姿勢で立っていればいいのか分からない。尾が落ち着きなく揺れ、手の指先がもじもじと動く。何か掴むものが欲しかった。
茂平はゆっくりと首を振った。
「おれ怒っちゃねえ」
「……。ほんとに？」
「ん」牛の目が瞬く。「あとで考えたら、あんときは、おれのほうが悪かったんだ」
「どうして？」
「わからねえが、おれは頭が悪いからよ」
決まり悪そうに頭をかく。
「だから、きっと、おれが悪いんだな。怒らしちまってわるかった」
「違うよ」
紅猫鬼は苦笑した。
「あたしが嘘ばかり言ったのがいけないんだよ」
「うそ？」
「つまりさ――どう言ったらいいか、わかんないんだけど」
「ん」
茂平はのったりと座り直し、首をかしげる。

「どうした」
「好きって言ったら、驚くかな」
「なにがだ」
「だから、あたしが」
自分を指差し、
「あんたを、好き」
茂平を指す。
しかし、茂平は今ひとつ理解できていない様子であった。
「……ん？」
「化生が人間の女に化けるとね」
紅猫鬼は一歩ずつ後ろへ下がり、薄い壁に寄りかかる。
「そこいらの女より、ずっと見ったくれのいいのが出来上がるんだよ。滅多にないことだけど、そういうのを嫁にすると、他の連中から羨ましがられるんだ。……でも」
下を向いて肩をすくめる。
「年をとらないから、そのうち、周りに化けもんだと知れちまう。だからどっかの山奥に引っ込むか、何年か経つたびに住みかを変えなきゃならない。面倒なもんさ」
ゆらり、ゆらり。
尾がせわしなく揺れるのは恥ずかしさのせいか、それとも断られることへの不安からなのか。好いた気持ちを打ち明けるなどいうことは初めてなので、分からない。
ともかく――
息を深く吸って吐き、紅猫鬼は続けた。
「だけどね。もし、それでもよかったら」
茂平の顔に視線を合わせ、小さな声で言いきる。
「あんた、あたしを女房にしてみないかね」
少しくらい風の音でも聞こえていればいいのに、こんな時に限って音というものが一つも無い。そのせいで、紅猫鬼の声は、はっきりと小屋の中に広がってしまった。これではもう取り返しがつかない。

さて、どうなるか。断られた時のことなど考えていないが、考えておいた方が良かっただろうか。

緊張する紅猫鬼とは裏腹に、茂平はのんびりと首をかしげた。

「おめえ、おれんところへ嫁に来てもいいってのか」

「ん、まあ、来てもいいというか」尾を股にはさむ。「なんというか」

「なんでだ」

「さっき言ったろ。惚れてるからだよ」

「惚れてる？」

「嫌かい」

「いやってこと、ねえけどよ」心配そうな調子で茂平は言う。「やめといたほうがいいんじゃねえか。なんも得がねえし」

滅多に動かぬ眉をへの字にする。

「おれみたいなもんのとこへいたら、おめえまで意地悪言われっかもしれねえ」

「へんなこと気にしないでいいよ。そんなこた良いから、嫁にするのかしないのか、それだけはっきりしてくれないかね」

「そりゃ、おめえがいいなら、おれは嬉しいけども」

「じゃあ決まりだね」よし、よし。「これから邪魔するよ。あんた今、確かにいいと言ったからね。あたしここへ住むからね」

「ん。でもよ」

座り込んだ紅猫鬼に茂平は問うてくる。

「おれを好きっていうのが、わからねえ。そんなこたねえと思うんだが……なんか、間違ってんじゃねえのか」

「あんたねえ」

呆れて思わず肩が落ちたが、尖った耳の裏をかき、やれやれと溜息をついてみると、少しずつ笑いがこみ上げてきた。

「ったく――」笑いながら寝転がる。「まあ、いくら短いといったって、何十年かあるんだ。その間にあたしが分からせてやるさ」

「ん……？」

茂平はやはり、不思議そうに首を傾げるのみだった。
さて、面白かったのは次の朝である。
人に化けた紅猫鬼が茂平に連れ添って小屋を出ると、村の者たちは皆一様に目を白黒とさせ、何を訪ねていいのか分からぬといった顔で、案山子のように立ちつくした。中には持っている物を取り落とした男もいたほどだ。
誰も彼もこちらを見ながら、ぽかんとして声をかけてこない。異様な雰囲気であった。
ためしに近いところへ立っていた娘と目を合わせ、紅猫鬼が「何見てんだい」と言ってみれば、その娘はなぜか一歩後ずさってから、妙な引きつり笑いで問い返してきた。
「あの、あんた、いったい何もんかね」
「見りゃ分かんだろ、こいつの女だよ。変な目でじろじろ見てんじゃないよ」
「なっ」
「文句あっかい」
着物の袖をまくり上げ、軽く睨んでやる。
娘は慌てて目をそらし、いそいそと向こうへ去って行った。無理もあるまい、可憐な姿に化けてはいても、中身は立派な化け物だ。言葉づかいに腹が立ったところで、魔物の威圧を押し返して文句を言う胆力など、並の人間には到底持ち得ぬものである。
娘の代わりに、おっかなびっくり近寄って来たのは、右六であった。
「お、おい、茂平」
「ん」
茂平はぼんやり顔で返事をする。昨晩はことが終わった後も長く喋っていたので、寝不足なのだろう。
紅猫鬼の顔をちらりと見てから、茂平の脇へ来て肘でつつく。
「おめえ、いつの間にこんな別嬪の娘っこと出来てたんだ？」
「ん？」

「思ってたより隅に置けねぇじゃねえか。なあ、名はなんてぇんだよ、おい」
「ん……」
「べに、ってんだ」紅猫鬼が割って入る。「昨日の晩、河原で行き倒れてるところを、小便に出てきたこの人が見つけてくれてね。気が付くまで小屋で介抱してもらったのさ。いやあ、親切な男に巡り合ったもんだよ。この世も捨てたもんじゃないと思ったさ」
細かいところに突っ込まれぬよう、早口にまくし立てる。
「冷たい土地柄で育ったせいか、あたしゃこういう男に弱くてねえ。聞けば独り身だっていうんで嫁にしてくれと頼んだんだけど、この人が二つ返事で応えてくれたから、とんとん拍子に話が進んだよ。あたしも天涯孤独の身の上から、晴れて人の女房ってわけだ。ありがたい話だよ本当に」
「おめえ、よくそんなに嘘が思いつくなあ」
「おっと！」余計なことを言う茂平の尻を引っ叩く。「お前さん、蠅がとまってたよ。気付かないなんて鈍いじゃないか」
「ん。いてえ」
茂平はのんびりと尻をさする。全くとぼけた男である。
ぽかんとする右六の肩越しに、恐る恐るこちらを眺めるきよの姿も見えたが、今更きよ相手に思うことも言うことも無い。紅猫鬼は知らぬふりをして、「さあお前さん、水くみに行こうか」と茂平の袖を引っぱった。
その際にちらりと茂平の顔を見上げてみると、茂平もこちらの顔を覗き込もうとしていたところであった。
「ん」瞬く。「どうした」
「何でもないよ」
袖をつまんだまま歩き出す。不思議と笑んでしまったのは何のせいだろうか。
この間抜けな朝が新しい生活の始まりだった。
とはいっても、村にいたのはそれから一年足らずの間で、二人は

すぐに遠い山の奥へと引っ込んだ。理由はいくつかあったが、最も大きかったのは、紅猫鬼にちょっかいを出してくる男の多かったことである。始めのうちは紅猫鬼自身が上手い具合にかわしていたものの、そのうち血迷った一人者たちが「早く女房と別れろ」とか「お前には勿体ない女だ」などと茂平に嫌なことを言うようになり、夫婦ともども面倒臭くなったのである。だから周りに別れも告げぬ、夜逃げのような引っ越しとなった。

紅猫鬼はその百人力と知恵を用い、山中へ瞬く間に石造りの家を建て、周囲の土を耕し、近くに温泉を掘り当てて風呂とした。

麓へ下りて何かを仕入れる時は、山で採った草や木の根から薬を成し、それを売った金で買い求めた。茂平と一年暮らす間に、いつの間にか、手頃な人間を殺して奪おうなどという考えをしないようになっていたのだ。四六時中顔をつき合せていると色々なことがうつって面白いものである。

初めのうちこそ土地の化け物が襲ってくるようなこともあったが、紅猫鬼がその都度大いに脅かして帰したもので、だんだんそのようなことも無くなった。

邪魔もなく、変わりもなく、一年、二年、三年と、月日は実に穏やかに、幸せに過ぎた。

しかしその間、ただひとつ心にあった引っかかりは、反魂の法のことだった。

茂平との限られた時間を大切に過ごそうとつとめる間、于石を蘇らせるという願いは止まったままになっている。それが紅猫鬼の心に、時折、ふっと暗い影を落としたのだ。

だがその影もやがて、ある夏の日に茂平が発した言葉によって、笑ってしまうほど突然に溶けて消えた。

あれは夫婦となってから六年が経ったころか。出会った頃より、茂平は少し老けていた気がする。照りつける陽の下で畑仕事をする茂平に、麓から帰ってきた紅猫鬼が桃を放ってやった時のことだ。

「ほら、お前さん、食べなよ」

「ん」茂平は胸のあたりで受け取った。「桃か」
「塩を買って帰るついでに、下のほうの木からもいで来たのさ。よく熟れてるからきっと甘いよ」
「ん……」
茂平は桃をじっと見つめ、ぼんやりと口を開いた。
「ありゃ、いつだったかなあ」
「何だい？」
「いつだったか、おめえ」茂平は手の中の桃を見つめた。「今日みたく、俺に桃をもいできてくれたかな」
「はあ？　気のせいじゃないのかい。あたしゃ一度だって――そんな――ことは」
かちり。
突然に心の中で何かが噛み合った。
その瞬間、紅猫鬼は思わず尾を立たせ、天を仰いだ。
やけに透き通った空。風と雲が嘲笑っている。
「……ああ」
深い息と共に尾が緩む。
「なるほどねえ」苦笑せずにはいられなかった。「この馬鹿馬鹿しいのが答えかい？」
だとすれば、ずいぶん滑稽な真似をさせられたものだ。得体の知れぬ連中め、何を思ってこのようにしたかは知らないが、味なことをしてくれる。
紅猫鬼は一度だけ舌打ちし、雲を見つめながら言った。
「ねえ茂平」
「ん」
「あたしの相手はお前さんだけだよ。お前さんが死んじまった後も、ずうっとね」
小さな声でそう誓い、紅猫鬼は叶わぬ望みから解き放たれた。

十

紅猫鬼は急に大輝の方を向き、呟いた。
「忘れないでね、大輝くん」
「え……？」
「向こう側の作ったシステムは決して完全じゃない」栗色の髪が揺れる。「だから、ひとつでも多く憶えていることが次への希望になるわ。昨日のこと、今日のこと、明日のこと、全部。いつ終わるか分からないから、何でもないことでも、しっかりと胸に刻みつけておいて」
強い視線と静かな声が、大輝の目から頭に入り込んでくる。
「妖怪の存在は曖昧よ。例えるなら三次元が犯したミスのようなものかしら。見落とされたままなら、永遠にそのまま。だけど場合によっては正されるか、自らを正してしまう。本当に――あなたたちが思っているよりずっと、曖昧な生き物なの。特に化生はね」
「……？」
「こんなこと話しても分からないか」
紅猫鬼は細い肩をすくめる。
「要するに、今を精いっぱい大事にしてね、ってことよ。オーケー？」
「……。はあ」
全然オーケーではないものの、問い返してもまともな言葉をもらえるとは思えない。大輝は一応頷いた。
さとて、と紅猫鬼は立ち上がる。
「意外と早かったわね。鳴子に小鳥ちゃんが掛かったみたい」
「どうしたんですか」
「ごめん小梅ちゃん、ちょっくら用事ができちゃった。すぐ戻って来るから良い子で待っててね」
「？　はあい」
小梅が片手を上げ、笑顔で頷いた紅猫鬼は、コートハンガーの上着をひょいと取る。

「そいじゃ失礼」
そのまま居間を出て行ってしまった。あっという間である。
何が何だかわからない。
部屋にいる面々の顔を見比べてみると、一様にぽかんとした顔を晒している皆の中で、やはり石楠花だけが、つまらなそうに下を向いていた。

十一

夜の公園は寒かったが、この寒さのおかげで邪魔が来ないのだと思えば、どうということもないどころか有難い。まったく他人の視線ほど鬱陶しいものは無いのだ。
弱々しく光を放つ古い街灯の下、孝道はポケットからゴムボールを取り出し、足元で弾ませた。
「ねえクロ、寒くない？」
「だいじょうぶですから、気にするな」
公園の真ん中でクロが手を振る。暗くて顔はよく見えないが、どうやら平気そうだった。
じゃ、いくよ――と孝道はボールを放る。
毎度のことながら、全力であさっての方向へ。これが人間どうしのキャッチボールなら大暴投である。
しかし、クロは地を蹴って横へすっ跳び、難なくキャッチしてみせた。瞬く間に十メートルを移動するこの身体能力を見た時は、孝道も度肝を抜かれたものだ。妖怪とは皆こうなのだろうか。
ボールを振り振りクロは言う。
「とった。ほめろタカミチ！」
「クロはすごいなあ」
「うれしいですな。つぎはタカミチとれな。とったらクロがほめますけど、それはおかえしではなく、ちゃんとえらいからほめるやつです」

「うん。オッケー」
と片手を上げてみせたその時、しゃり、と音がした。
砂を踏む足音だ。孝道は中途半端に手を上げたまま、そちらを見る。
貴そうなコートを着た女が一人、公園の入り口に立っていた。
「見つけたわ」
妙に派手派手しく、そして妖しげな顔立ちだった。
「あなたが相沢くんね」
「え……」
「人さらいの相沢孝道くん、でしょ？」
女は小首を傾げてみせる。
馬鹿な。孝道はクロを見た。
クロは――
「だれだあ？」
向こうの方で、ぽかんと口を開けていた。
「おーい、おまえをクロは知りませんが、タカミチのお知り合いですか？　よろしくおねがいします」
「あなたクロちゃんっていうの？」
女はクロのほうを向いて微笑む。
「可愛い声ね。それに目が綺麗。気が弱くて素直な子なんだって、一目で分かっちゃった」そして悲しげに呟く。「ちょっと辛いなあ」
こんなに暗く、しかも孝道よりも距離が離れているのに、クロの顔が見えているらしい。
孝道は問うた。
「あ――なた、は？」
「この町で消えた若い子の大半は、中学時代、キミを不登校に追い込んだクラスメートたちなのよね。卒業生のひとりが話してくれたわ」
女は再び孝道に視線を向けてくる。
「今日、あなたの家の近くまで行ったの。でも親戚の住んでる近所

で真昼間から騒ぎを起こしたくなかったから、取りあえず漂っていた微弱な妖気をサンプルとして採取して――それから町中に鳴子を仕掛けておいたのよ。同じパターンの妖気に反応した時、私に知らせが来るように。夜中まで反応しなかったところをみると、あなた昼間は一日じゅう引きこもってるのね」

「……え？　……と」

まるでこちらに理解させようとしていない、投げやりな話し方だ。どうしてこんなに投げやりなのだろう。ほとんど何も伝わってこない。

ただ、それでも、一つだけ分かることは――

「あなたは、みんな」

「分ってるわ。だから来たのよ」

「だ、誰」唾を飲む。「なん、ですか」

「そうねえ」

女はポケットに両手を突っ込んだまま、うーんと上を見る。

「キミを裁きに来た正義の味方、じゃないわねえ。大義名分はあるにせよ、可愛がってる子のために来ただけだし。個人的な事情ってやつよ」

「え……」

「あ、あっ――タカミチにげろ！」急にクロが叫ぶ。「その人、タカミチとクロのこと、ころしにきたんだっ！」

「殺す？」

「カンの良い子ね」

女はコートのポケットから右手を抜く。

紅い毛の生えた手。

クロが弾けるように動いた。

飛びかかってくる女の唇が言葉を紡ぐ――「ごめんね」。

割って入るクロ。

身じろぎひとつ出来ない孝道の目の前で、二体の化け物はぶつかり合った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3961e/

肉食同居人

2011年4月21日03時03分発行